

機械の皇帝

赤髪道化

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界中の果物や野菜を集めた農園を作りたい。

そんな夢を持つ少年ロゼが、賞金稼ぎになり仲間を集めて旅する物語。

アンチ・ヘイトは民間人襲うキャラに対して……のはずですが、基本的に主人公は海賊に対する初手の態度が悪いです。

目次

“悪魔の実”	1
“海軍本部見学”	9
“シャボンディパーク”	29
“誓いの握手”	48
“戦災孤児”	66
“海賊の定義”	83
“犬、猿、雉”	98
“機甲のロゼ”	120
“ビブルカード”	138
“お別れ”	156
“天駆ける竜の蹄”	174
“目覚め”	189
“鬼教官の信念”	206
“ノックス探検隊”	228
“奴隷解放の英雄”	248
“ゴルゴン三姉妹”	266
“九蛇革命”	292
“竜宮城にご招待”	302
“魚人街の人々”	317
“王下七武海”	335
“酒は飲んでも飲まれるな”	353
“under the rose”	372
“赤髪と鷹の目”	394
“黄昏のタイヨウ”	415

“燃えさかる剣”

435

“機甲VS戦争屋”

455

“闇夜の裁き”

487

“海侠のジンベエ七武海加入記念コンサート in 魚人島”

512

“造った船に男はドンと胸をはれ”

526

“伝説の人魚姫”

543

“耐え忍ぶ戦い”

561

“世界を滅ぼす兵器”

582

“切り落とされた黒腕”

601

“船出”

613

“A t e b r e v e ! O b r i g a d o ! ”

636

“賞金稼ぎ”

651

“水の都”

672

“海列車特急↓春の女王の町”

696

“海列車特急↓カーニバルの町”

717

“海列車特急↓美食の町”

742

“改造人間と人造悪魔の実”

762

“フルルシャウト”

789

“太陽と月”

810

“アラバスタ王国”

826

“リトルガーデン”

848

“ウイスキーピーク”

870

“擬身VS神”

891

“黒檻部隊”

912

“悪魔の実”

偉大なる航路の前半と後半を隔てる赤い土の大陸の付近にある
シヤボンデイ諸島。

その無法地帯の13番グローブにある半分が酒場になっている家
に、基本黒髪だが前髪だけが金髪で翼のような形の髪型で、切れ長の
金色の眼をした3歳くらいの子供が入ってきた。

「ただいま。父さんがいるのは珍しいね、ギャンブルで大勝でもした
の？」

ソファに座ってる、酒と遊びと美女が大好きな父親に話しかける。

髪型は金髪オールバックで右目に切り傷、アゴヒゲを生やしメガネ
をかけた父親は息子から見ても整った顔をしている。そのため女性
によくモテてよそで女作って暮らしていることもあり、自分から会い
に行かなければ1週間以上会わないことも珍しくない。コーティン
グ業や代金を払おうとしない海賊を潰して生計を立ててる。

「ああ、おかえりロゼ。ギャンブルに負けた腹いせに、騒いでる海賊潰
して金巻き上げたら珍しいものが手に入ったので持ってきたんだ」

図鑑みたいな大きさの本を読みながら父が答えてくる。珍しいっ
て何の本だろ？

そう思いながらテーブルに近づくとドリアンが置いてあった。今
日のおやつはドリアンか。実物見たのは初めてだ。昨日賞金首捕ま
えて海軍からお金貰って来たから母さんが奮発してくれたのかな。
一度食べてみたかった。

「ギャンブルには負けたんだ……見聞色で未来が見えるのにどうやっ
たら負けるのさ？」

問いかけながら、キッチンの流し台に行って、手袋を外し踏み台の
上に乗リ手を洗ってから、包丁とスプーンを取り出す。

たしかドリアンは固い殻で覆われていて種の周りの部分しか食べ
られなかったはず、野菜と果物の図鑑を見た。臭いは生ゴミみたいだ
が味は美味しいらしい。

「結果がわかっているギャンブルなどつまらん。金が欲しいならその

辺の海賊から奪えばいい。勝つか負けるかわからないスリルと勝った時の興奮がギャンブルの醍醐味だ」

「ふーん、よくわからないな。それで、読んでるのは何の本？ 航海日誌？」

ギャンブルについて教えてくれるが残念ながら共感出来ない。勝ってお金が入るならそれでいいんじゃないかな。

ドリアンの殻に包丁で軽く切り込みを入れて両手で殻を持って左右に引っ張る。薄皮に覆われた黄色い実が見えてきたので殻を皿代わりにしてスプーンを持つ。店に入った時から軽く臭ってたけどひどい臭いだ。

「いや、これは悪魔の実の凶鑑だ」

悪魔の実？ 食べたら角と翼と尻尾が生えてきそう。

そう思いながらドリアンの実をすくって口に入れるが…、今まで食べたことがないくらい不味かった。思わず顔が歪む。

「んぐっ！ 悪魔の実って何？」

正直吐き出したい。上手いと聞いていた分かなりショックだ。臭いし不味いし褒める所が見つかからない。でも食べ物は粗末にするなって言われてるし、たしか栄養もあったはず。とりあえず水が欲しいな。

「教えたことなかったか？ 悪魔の実は海の悪魔の化身といわれる果実で、食べると特殊な能力が身に付く。売れば最低でも1億ベリーの値段がつく物だ」

「1億ベリーか、そりやすごいね。オレが昨日66番グロブの海軍にひきずっていった海賊が……200万ベリーか、だから……50倍だね」

コップに水を入れながら、手で自分に触れて見聞色の覇気で過去を見て賞金首の懸賞金を確認する。3割母さんに渡して7割貯金してるけど計算めんどくさいなこれ。なんで世界政府は賞金首が死んでる場合3割引きにしてるんだろ？ 5割とか1割の方が計算楽だ。

そんなことを考えながら席に戻ってくる。まだたくさん残ってるなあ。舌がおかしくならなきゃいいけど。

「また海賊倒したのか。修行してるとはいえまだ半人前以下なんだから、手当たり次第にケンカ吹っかけるなよ?」

オレは2歳の誕生日に両親に頭を下げて弟子入りした。歩けるようになった生後半年の頃から、家の中を歩いたり走ったりして修行していたが限界を感じた。これで海賊を倒すのは無理だと。そこで、普段から蚊でも払うかのように海賊を倒している2人に教えを乞った。

最初は早すぎると断られたが、シャボンディにおける強さの必要性を訴えてなんとか弟子入りさせてもらった。口が達者だと驚かれたが。覇気の事を教えてもらい、自分が見聞色の覇気が生まれつき使えることを知った。

「妊婦さんのお腹踏んずけて『妻と赤子の命が惜しけりや100万ベリよこせ!』なんて言う奴、何されても文句言えないでしょ」

「つまらんチンピラが増えたものだ。大丈夫だったのか?」
「うん、ドクター連れてきたけど問題ないって。それで悪魔の実ってどんなのがあるの?」

不味いドリアンをちびちび食べながら悪魔の実について考えて気分を紛らわせる。果物や野菜を生み出したり、一瞬で種から成長させるのとかあるのかな。

「ゴムの体になったり、空を飛べたり、地震を起こせたり、体がバラバラになっても死なない体になった奴もいたな、あれは面白かったぞ」
「何でもアリだね」

「代わりに海に嫌われて一生カナヅチになる。能力者が海に入ると体から力が抜けて、能力も使えず体が沈んでしまうそうさ。あと一度悪魔の実を食べた者がさらに別の悪魔の実を食べると、体が跡形もなく飛び散って死ぬらしい」

「たくさん食べていろんな能力使えるようにはできないのか。でも泳げなくなるくらいですむなら、欲しい悪魔の実探して食べるのもありだね。凶鑑もあるみたいだし。なにか食べたいのがあるの?」

「いや、そうじゃなくて海賊が持ってたのを一つ奪ったから何の能力か確かめようとしてな。そこに置いてある……何を食べている?」

帰って来て初めて父が顔を上げてこちらを見てきた。その顔の鼻

にはいつもはない洗濯バサミを着けていた。だから臭い平気そうだったのか。オレはもう臭いが気にならなくなってきた。

「おやつのだリアン。おいしいって聞いたけど臭いし不味い。父さんも食べない？ 正直そろそろつらい。まだ半分も残ってる」

「うん、まー、その、なんだ、お前が今食ってるのが今まで話してた悪魔の実なんだ。海賊から奪ってきた。不味いなら本物だろうな。悪魔の実の味が非常に不味いと聞く」

「え？ 3時のおやつでしょ、これ」

「いや、悪魔の実だ。渦巻きみたいなグルグル模様がついてるだろ、これも悪魔の実の特徴だ」

そうやって食べ終わった方の殻を見せてくる。たしかにグルグル模様が ついてる。

「じゃあホントにこれが悪魔の実？ 1億ベリー食べちゃった、ごめんなさい！ ちょっと海賊から獲って来る」

「別に返さんでいい。元々食べたがったらやるつもりだったし。それより体に異常はないか？ こう、体がバラバラになりそうとか」

「死ぬよそれ。異常って言われてもなあ」

そう言いながら腕を回したり、屈伸したり、ジャンプしたりしてみる。そして左拳を右手に打ち付けるとガキーン！ と金属同士がぶつかったような音が響いた。

「うるさっ。あれ、なんか体が硬いような。金属みたい」

「金属か。ナ行まではもう見たがなかったし、能力的に動物や自然^{ロギア}じゃなさそうだ。超人の目次は……ブキブキ、メカメカ、メタメタ、ロボロボあたりか」

「ゾオンとかロギアとかパラミシアって何のこと？」

「悪魔の実の種類だ。動物系は動物に変身できるようになる種。自然^{ロギア}系は体をマグマみたいな自然の物に変化できるようになる一番珍しい種。超人系は人の想像を超えた能力が身に付く種で確認された能力が一番多い。おっ、あった。こいつはメカメカの実だな。体を機械に変えて操る能力みたいだ」

「機械かー。トラクターに変身出来たりするのかな」

「まず最初に思いつく機械がトラクターなのかお前は……他にあるだろ、合体ロボとか」

「あれか、かつこいいよね。ジェルマ66の空飛ぶ靴とかロケットパンチとか出来るかな？ あ、母さん帰ってきたみたい」

何の悪魔の実かわかって雑談していると、母さんの気配が家に入ってきた。

「ただいま〜ロゼ、おやつ買って……なんなのこの臭い?」

「おかえり、母さん実は……」

「ああ、言わなくていいから……あんた悪魔の実食べちゃったの?」

「うん、今日のおやつと思って」

「おやつは今買ってきたわよ、はいドリアン。食べたがってたでしょ?」

母さんがこつちに袋を手渡して窓を開けに行く。黒髪で厚い唇が特徴の美人だ。

言い寄ってくる酔っ払い客をよくボコボコにしてる。言い寄らなくても代金払わない客からはボコボコにした上でぼったくってる。

「中身だけだね、これ」

「食べられないし殻なんていらないでしょ。店で切って貰って来たわ」

「大丈夫なの? これ、ちゃんとおいしい?」

「おいしいわよ、試食したし。ていうかレイさん、食べるの止めなさいよ」

「凶鑑見てて気づかなかった。まあロゼも結構気に入ったみたいだし大丈夫だろ」

「これ食べ終わったら海の戦士ソラと機械の本買って来る。能力で真似出来るか試してみるよ。あと悪魔の実の凶鑑も見たい。あっ、これはおいしい」

クリームチーズみたい。やっぱ悪魔の実だから不味かったのか。二度と食べない、死にたくないし。

「出かけるなら、海に近づかないようにね。溺れるわよ」

「わかった。海に近づくのはソラみたいに海の上歩けるようになって

からにするよ」

「メカメカの実食べたからって出来るかどうかはわからんぞ?」

「まあ無理ならクウイゴスの木片で靴底でも作ってもらえば歩けなくても浮き輪代わりになるでしょ。たまに海兵の人がやってる【月歩】ゲッポウとかいうのも練習してるし」

「覇気の修行だけでなくそんなのまで練習しとったのか。出来そうか?」

「見聞色で自分の過去見て確認して、まずは【剃】ソルから真似してるけど難しい。たぶんまだまだ身体能力が足りてない」

「海軍では六式から使えるようになる者が大半なのに、習得する順番がおかしいわね……六式覚えるために覇気使うって」

「生まれつき使えるんだから有効活用しないと。他にオレみたいな人いないわけじゃないでしょ?」

「たしかパトが出来たらしいわね。でもやっぱり珍しいわよ。最初に喋った言葉が『海賊来る』ってどういうことよ」

「それだけ周りの人が海賊のことばつか考えてたんでしょ、オレが生まれたの大海賊時代始まった年だし」

オレは生まれた時から見聞色の覇気を使えばなしの状態で、周りの心の声を聞いてよく泣く赤子だった。おかげで言葉は普通より早く喋れるようになったし、計算もすでに出来る。何かど忘れても過去見て思い出せるし便利だ。最初の内は色々大変だったし、今でも若干自分の見聞色に振り回されてるけど。

武装色は見聞色に比べて苦手みたいで、黒く変色しないしまだまだ弱っちいけど。

見聞色を制御出来るようになるまでは、海賊や人攫い、天竜人の汚い心の声にその被害者たちの悲鳴が聞こえて大変だった。今でも見聞色の範囲に職業安定所ヒューマンシヨップ(人間屋)がある場所では絶対に心の声を聞かないようにしてる。今のオレには何も出来ない。非力なオレを許してくれ……。

俺の家はシャボンディのほぼ真ん中で見聞色の範囲がギリギリ島

全部位だから、20番台のグローブに集中してる職業安定所は、ほぼ反対側の海軍基地辺りに行かないと範囲外にならないんだよね。いい運動にはなるけど範囲を狭くする練習と狙いを定めた人の心の声だけを聞く練習が必要だな。

「それで、まだ子供なのに強くなつてどうするつもりだ？ 海賊にでもなるのか？」

「うーん、父さんたちには悪いけどオレ海賊嫌いなんだよね。心の声が聞くに堪えなくて。ひとつなぎの大秘宝ヒールにも興味ないし。ラフテルは興味あるけど」

海賊が嫌いって言った瞬間、父さんが落ち込んだ。父さんが嫌いなわけじゃないんだけど。

「まあそれが利口ね。カタギが一番よ。じゃあ海軍になりたいの？ よく海賊と戦って怪我して戻って来るけど」

「海軍は好きだけど、天竜人の護衛とかごめんだよ。あいつら海賊と変わらないかもと性質悪い。それに海軍になつて父さんたち捕まえて来いって命令されたくないし」

オレがそう言ったら父さんのテンションが戻った。わかりやすいな。

そもそもオレ入ろうとしても、入れて貰えるのかな？ 無法地帯出身だけ。

「じゃあ何になりたいんだ？ 何も目標なしに強くなりたいてってだけで、鍛えてるわけじゃないんだろ？」

「オレ、お金貯めて世界中の美味しい野菜や果物を集めた農園作りたバウンティハンターい。今は大海賊時代、賞金稼ぎになれば狩る獲物には困らないし、嫌いな海賊捕まえてお金貰えるって一石二鳥だなつて。それに絶対に名字を名乗らなきゃいけないわけじゃないみたいだし。バレずにすむ」

何度も海軍に賞金首運んでるが、たまに名字を聞かれても、知らないと答えればそれ以上聞いてこない。たぶん孤児か何かだと勝手に納得してくれてるんだらう。シャボンディの無法地帯では、名字がな

いい人は結構いるらしいし。

「すまん、私が身を隠すために面倒かけて。ラフテルの行き方でも教えようか？」

「たいして困ってないよ。鍛えてもらってるしむしろ助かってる。それにまずは航海術の方が教えてもらいたいかな。今のままじゃ船沈めそう」

「平和な夢ね。賞金稼ハウンテイハンターぎじゃなければもっと平和だったんだけど」

「母さんだって似たようなもんでしょ。わざわざぼったくりバーって看板掲げて、最初から踏み倒そうとして来る海賊とかゴロツキからお金巻き上げてる」

「それもそうね。まあ何になるにしても元気でやってくればそれでいいわ」

「農園出来たら二人とも招待するよ。好きなだけ食べてね」

「はっはっは、楽しみにしているよ」

「うん。ごちそうさま、それじゃまた出かけてくるよ。行ってきます」
「行ってらっしゃい。気を付けてね」

空のトレーとサランラップ、悪魔の实の殻をごみ箱に捨て、スプーンと包丁を流し台に置いて手を洗ってから、手袋をはめて外に出かける。

悪魔の实の能力で少しは父さんたちとの差を縮めることが出来るかな？ 今は全然勝てない。早く強い大人になりたい。

“海軍本部見学”

悪魔の実を食べてから1年、手足をドリルやチェーンソーに変化させたり、足の裏から空気を噴出して空を飛んだり出来るようになった。今まで鞭に覇気纏って叩いたり、首絞めたりしてたけど、攻撃には覇気を纏った鉄の拳で十分だな。比較的簡単に手に入って致命傷にならないから気に入ってるけど。とりあえず腰にでも巻いとこ、まだ手を縛ったりするのに使えるし。手錠の方がいい気もするけど、まだ店の人が売ってくれないだろうな。

最初の内は手をドリルに変えても動かし方がわからなかったり、足の裏から空気噴出しても、力が足りず体が浮かなかったりした。今では普通に出来るが、靴下と靴が飛ぶ時邪魔になるので、靴屋に行きクワイゴスの木でサンダル（厚底）を作ってもらい、脱いでから飛ぶようにしてる。

悪魔の実の能力は使う内に力を増し、覚醒という上のレベルに達することがあり、海軍の上層部、大海賊の船長や幹部には覚醒した能力者が多いと母さんが言ってた。

そんな覚醒した能力者と、悪魔の実を食べずにロジャー海賊団の副船長として戦っていた父さんは本当に人間なんだろうか？ 挑むものが得るのは、冥府への片道切符のみだから“冥王”。かつこい異名だ。

オレが食べた超人系^{パラミシア}の悪魔の実は覚醒すると周りに影響を与えることができるようになる。つまり機械作り放題か。結構アタリの悪魔の実を食べたんじゃないだろうか、巨大ロボ作れそう。

まあ一番欲しいと思った能力はモサモサの実だけど。植物を成長させる能力、欲しいな。この能力があれば野菜と果物食べ放題だ。

今は寒い所や熱い所に行った時のために体をオーブンや冷蔵庫に変える練習もしている。体を触った感じ金属だけじゃなく、筋肉はゴムかバネみたいだし、練習次第で機械なら何にでもなれそう。悪魔の実の影響か、機械の構造を理解しやすくなったし。自動車に爆弾、火炎放射器、スタンガンもいけそう。スタンガンは鞭とも組み合わせら

れるか？ 首に鞭巻きつけて電氣流せる。

海兵がたまに使ってる六式という体術は、能力と合わせれば【荊】^{ソル}が出来るようになったが素の脚力ではまだ無理。【鉄塊】^{テツカイ}は能力で全身金属にすればいけるけど、体術で【鉄塊】^{テツカイ}出来るようにならないと【六王銃】^{ロクオウガン}が使えないからな。最終奥義ってかつこいい。修行方法は教わったし気長にやるか。

そして念願の心の声の聞こえる範囲の縮小、50メートルまで縮めることができた。2歳の頃からやってきたがまさか2年もかかるとは。母さんも父さんも息するようにやってるのに。普段は自分の気配の遮断、周りの気配の探知と攻撃の先読みの見聞色を使ってる。天竜人に出くわさないために、気配の探知は必須なので常に最大範囲で使用、攻撃の先読みもしないと海賊や人攫いに攻撃された時まずい。悪魔の実食べてから「空飛ぶガキなんて高く売れそうだ」とよく襲われるようになった。うざいなあ。飛ばなきやいいんだけど、これも修行だしな。

武装色は未だ黒くならない。毎日殴って使ってるのに何故だ。

「ベルメールさーん、海賊連れてきた。懸賞金ちようだい」

「今日だけで3回目だね、あんた……海兵も巡回してるのに、なんでそんなに海賊に出くわすのさ？」

「海兵見たら逃げるか隠れる、金の臭いがする奴には襲い掛かる。海賊の習性だよ。子供が札束持ってたら、そりゃ砂糖に群がる蟻のように寄って来るよ」

「わかってるならお金見せびらかすの止めなさい！わざわざ鞆から出してポンポン投げて、成金か」

「獲物を罠にはめて捕らえる。狩りの基本だよねー」

「ロゼ、あんたまたまた余計なこと覚えて……」

ベルメールさんはオレが悪魔の実を食べた1か月後くらいに東の海から来た海軍本部少尉だ。独特の刈り上げた髪型をしている、男勝りな気性の美人。いつもライフル銃を持つてる。みかんがお

いしい村で育ったらしい。一度行ってみたいな。

最初に賞金首連れて会った時はたいそう驚かれた、いつものことだ。

「偉大なる航路は『海賊の墓場』って聞いてたけど子供まで強いのか……」とベルメールさんが言った時に「コイツがおかしいだけ」と周りの海兵達に即答された。能力者差別反対。

いつもなら1か月もすれば「ああまたアイツか」みたいな反応されて子供だからと心配されなくなるんだが、ベルメールさんは何かと気にかけてくれて、たまに注意される。たしか「友達と遊んだりしないの？」と聞かれた時に「遊んだことない」って言うてからよく話しかけられるようになった。何の罪もない人を襲う海賊が許せないって海軍に入ったらしいし優しい人だ。非番の日にシヤボンディパークに連れて行ってくれたし。

「このガキ舐めやがって！ ぶっ殺してやる！」

オレとベルメールさんが楽しく会話していると、オレが背中を踏んで押さえつけている賞金首が何やら言い出した。まだそんなことを言う余裕があったのか。

オレは賞金首を蹴ってひっくり返し人差し指をドリルに変えて馬乗りになる。ドリルの指を起動し回転させながら右目の前で止める。ギーンと回転音が周りに響く。

「オレを殺すか、だったら目の1つや2つ潰されても文句言えないよな？」

「調子こいてすいませんでした！ 心を入れ替えますので目は勘弁して下さい！」

「じゃあいい子にしてろよ？ 次は潰す」

そう言うってドリルの回転を止める。指はこのままでいいか。体からどくと賞金首は黙って俯せになったので背中をまた踏む。

「あんた海賊相手にする時普段と違いすぎない？ 喋り方も違うし」

「好きな人と嫌いな人で態度が違うのは当たり前でしょ。それに弱い

と思って襲ってくるのは手間が省けて助かるけど、倒した後も調子に乗られるのは禍根を残す。ちゃんと折らないと、心を」

「怖いよ。1700万ベリーの賞金首が黙って踏まれてる……ちよつとひくわ」

「おいロゼ、懸賞金持って来たぞ……おい、なんでこの賞金首こんなガタガタ震えてんだ？」

「ゴドモコワイゴドモコワイ」

「ああ、脅したのか。指でも折ったか？」

「ううん、目を潰すって脅しただけで折ってないよ、シシリーさん」

「1年くらい前までは、折ってから言うこと聞かないとまた折るって脅してたのに、丸くなったな」

シシリーさんに懸賞金を手渡されながら答える。茶髪で海軍の帽子を被っていて、左目に切り傷がある。聞いたことはないけど、たぶん海賊に斬られたんだらう。

「丸くなったなじゃないですよ、中尉」

「初めてこいつがここに賞金首連れてきた時は、両足折って折れた足持って引きずってきたぞコイツ。悲鳴聞こえて何事かと思つたわ。それに比べたら丸い丸い」

「なにやってんのあんた……」

「逃げようとするからつい」

なんか足の下の賞金首の震えが大きくなって。いい子にしてたら折らないしえぐらないよ。足をどけて立たせるとシシリーさんが手錠をかけて連れて行つた。

「あんまやりすぎるなよ？」

「大丈夫、ちゃんと加減してるから。相手の体に攻撃する時は能力使ってないし」

チエーンソーやドリルを使うのは主に相手の剣とか銃を壊す時だけで、体には武装色で手足覆って殴るか蹴るかで倒してる。剣や銃の呼吸を聞いて息を吐く瞬間に攻撃すれば鉄製だろうが斬れるし壊れる。オレも気を付けないとやられるな。

「海軍入っちゃえばいいのに。ガープ中将に誘われてるんだろ？ シ

シリー中尉に聞いたよ？」

「会うと挨拶代わりに誘われてるね。オレより誘うべき子がいるだろうに」

1度海軍本部を案内してもらってから、3日に1回くらい特訓場使わせてもらってる。よく部外者の子供に場所貸してくれるものだ。あわよくばこのまま海軍に入ればって考えなんだろうけど、その気はないんだよね。海賊にはならんから勘弁して。初めて会った時は驚いたな。

○○○○○

あれは3か月前のこと。なんか凄まじい気配の人が3人も海軍基地にいて一体何事かと思いつつ、いつものように海賊連れて基地に行くと、下半分が白髪になってきている黒髪で口の周りに髭を生やした屈強な肉体のおじさんと、アフロヘアに丸眼鏡すごく編みこまれた顎鬚のこれまたすごい筋肉質なおじさん、白髪で後ろで髪をまとめたおばさんがいた。

顔を写真で見たことがあるからすぐにわかった。『ゲンコツのガープ』と『仏のセンゴク』に『大参謀』つる、大将1人に中将2人って何事、戦争でもするのか？噂に聞くバスターコール？もしかして父さんがいるのバレた？オハラみたいにシャボンディ諸島ごと父さん消される？

この海賊を置いて逃げた方がいいかもしれないと考えていたら、ガープ中将がこつちに気付いた。うそ?! 気配は消して……海賊の気配か!

「おお、海賊ひきずってる子供…、お前が賞金稼バウンティハンターぎをやってるロゼか？」

「はい、初めましてガープ中将。センゴク大将につる中将も初めまして。ロゼといいます」

「おや、礼儀正しい子だね。初めまして。この子がそうなのかい？ 気配がしないし心の声も聞こえないね（ほんとに海賊ひきずってる

ねえ、文字通り)」

「この年で海賊を倒してるんだ、覇氣が使えるんだろう。前例がないわけではない。報告では悪魔の実の能力者らしいが…(まさか比喩ではなく、ほんとに引きずつてるとは思わなかった……)」

「それにしても、よくおれたちのこと知っているな」

「この基地の海兵さんたちに聞いたことありますから。あと噂も。海賊王」を何度も追い詰めたとか、あつこれ暴れてた海賊ですが」

笑いながら挨拶するがなんか色々バレてる、あんたたちだつて心の声聞こえないじゃん。何考えてるかわからない。とりあえず側にいたシシリーさんに、首に巻きつけてた鞭を外して海賊を引き渡す。

もしかしてオレから父さんのことがバレた？ オレと母さん巻き込まないために父さんあんま家に来ないのに、オレのせいでバレるとかやってしまった。ちよつと悪魔の実食べてから調子に乗つて海賊狩りしすぎたか？ ごめん、父さん。

「お前海軍に入らんか？」

「え、海軍に？ というか海賊捕まえに来たんじゃないんですか？」

「いや？ 強い子供がいると聞いて気になってな。この二人誘つて見に来たんだけ」

「おいガープ！ いくらなんでもこんな子ども勧誘するな。まだ4歳くらいだろ(ロシナンテだつて保護したのが8歳で入隊したのが14歳。それでも早い方だ)」

「そうだよ、年を考えなよ。まだまだ遊びたい年頃だろう(この前ゼファーが保護した12歳のビンズくんと8歳のアインちゃんは、海軍に入りがつてるけどまだ無理。4歳は無理があるだろう)」

「ぶわっはっはっ、おれもこんくらいの年の時は虎に乗つて海賊から宝奪ったりして遊んだもんだ。おもしろいぞ？ 1人倒したらどどん仲間がわいてきて。それにもう倒した賞金首100人超えてるつて聞いたぞ？ 大丈夫だろ」

「あんたと一緒にするんじゃないよ(この子、海軍に入ったらガープみたいな性格になるんじゃないだろうねえ？ 恐ろしい……)」

なんだ、ただの暇つぶしか。ていうか流石にオレ、遊び代わりに海

賊倒してるわけじゃないから。父さんのことバレたんじゃなくてよかった。

「オレ、海軍に入る予定はないです。ごめんなさい。それでは失礼します、お仕事頑張ってください」

「まあ断るよな」 「(そりや断るだろうねえ)」

そう言つて、サンダルを脱いで空を飛んだ。帰つておやつ食べよ。

「ほう、【月歩】^{ゲッポウ}ではないな、それが悪魔の実の能力か？」

「……なんでついて来てるんですか？ 仕事は？」

「今日は非番だ、他の2人もな。せっかくだし海軍本部見学せんか？」

強くなりたいそうだし、何なら少し鍛えてやるぞ？」

ガープ中将が【月歩】^{ゲッポウ}でついて来てた。これじゃ帰れないな。家に父さんはいないようだけど母さんはいるし。とつくに海賊^{ヤンチャ}はやめたけど見つかったら捕まるかもしれない。ていうかあの2人、さつき勧誘された時は止めてくれたけど今度は止めずにこっち観察してる。父さんのことはバレてないけど他のことで疑われている？ ガープ中将はただ勧誘したいだけみたいだけど。見聞色使わなくてもわかる、この人あまり余計なこと考えないタイプだな。

『たしかに空を飛んでいる。ほんとにフワフワの実の能力者なのか？』

どう思う、おつるさん？』

『まだ空飛んだだけじゃ何とも言えないね。ズシズシの実の重力操作人間の可能性とか、色々あるよ。まあ超人^{パラミニア}なのは間違いないねえ』

たしか南^{サウスブルー}の海のパテリラでゴール・D・ロジャーが自首してから10か月以内に生まれた、〃海賊王〃の子の疑いのある赤子や妊婦は海軍に殺されたんだっけ？ オレの誕生日が6月2日で処刑は10月で自首したのはその数週間前、一応外れてるけどオレの誕生日なんて海兵の誰にも言っていないから疑われているのか？ 〃海賊王の右腕〃の子だから、そこまでの外れじゃないのが何とも言えない。

ていうか〃海賊王〃、不治の病に侵されてるのに子供なんて作るなよ、確実に面倒見れないじゃん。父さんを海賊の道に引きずり込む

し。まあ父さんが決めたことだし、海賊にならなきゃオレは生まれなかつたかもしれないけど。ぐぬぬ。

「なんでオレを海軍に誘うんですか？ オレまだ子供ですよ」

「実はおれが面倒見てる子供が海賊になるとか言い出してな。お前が海軍に入ったら影響されて海兵になると考え直してくれるかもしれないと思っただ」

「……それはお気の毒に。どうして海賊なんかになるって言うてるんですか？」

「あいつは海賊の子で、親の悪口を聞いてしまったようだな。生まれそこなきやよかつた人間だと。それでそんな人間の息子である自分も生まれてきてよかつたのかと悩んでいるみたいだ」

「親がどんな悪党だろうと子供には何の罪もないでしょ」

逆に親がどんな偉人だろうと子供には何の功績もない。天竜人は先祖の七光りのくせにやりたい放題過ぎる。

「それがなんで海賊になるって話になつたんですか？」

「世界中の人間がどれほど自分を嫌って認めなくても、自分の名前を世界に知らしめて見返すんだそうだ、大海賊になつて」

「……それでなぜ海賊に？ 少なくともオレは海賊になつた奴見ても蔑むだけなんだけど？ 海兵になつた方が見返せるんじゃない？」

「おれもそう思うが、たぶん親を超えたい気持ちもあるんだろう。それに今は大海賊時代、海賊に妙な憧れでも持つてるんだろ」

ああ、それじゃ間接的に父さんたちの被害者みたいなものか。すまない、名も知らぬ子よ。

「その子何歳？ オレと同じくらいならまだまだ海兵に目標変更出来るんじゃない？」

「今は2歳だな」

「まさかの年下!? 道を踏み外す決断がいくらなんでも早すぎる！」

2歳でどんだけ重い悩み抱えてるの!? オレの勧誘よりその子に会いに行つてあげなよ！」

はっ、しまった。見聞色が制御できなくなる。落ち着かないと。

それにしても、何を他の子供の勧誘なんてしてるんだ。はよマリ
ンフォードに帰れ。

『なんかあのロゼ君、びつくりした顔して怒鳴ってるな』

『またガープが無茶なことかバカなことを言ったんだろ、いつもの
とき。あんな子供にまで怒られるなんて何言ったんだか…』

「そうしたいのは山々なんだが、東の海イーストブルーの知り合いに預けてるから、
1日休みくらいじゃ会えんのだ。大海賊時代になつて
ひとつなぎの大秘宝ピース目当ての海賊がどんどん増えるからろくに休
みも取れんしな」

「いい加減にしろよ『海賊王』、死んだ後もよその子に迷惑掛けや
がって。自分の子も愛する人、全然関係ない親子と一緒に殺されてる
だろうし。」

「マリンフォードにいるんじゃないの？」

「海賊の子だからな、海軍には秘密にしてる」

「……それ、オレに言ってもよかったの？」

「お前海兵じゃないし、大丈夫だろ」

「今勧誘してるじゃん、海軍に入らないかって」

「……すまん、やつは今のナシで」

「この人意外と抜けてるんだろうか？」

「まあ、海軍に入る予定ないし、いっか」

「見学だけでもしてみんか？」

「先に家に帰っておやつ食べて来ていい？食べ終わったらまた来るか
ら」

「おお、その気になってくれたか。じゃあここで待ってるでしょう。
あの二人にもそう言ってくる」

そう言つて、ガープさんが【月歩ゲッポウ】で下に降りていく……あの人オ
レと話してる間ずっとぴよんぴよん空中跳ねてたけど、全然息きれて
ないな。

オレはいったん家に帰っておやつの栗羊羹を食べて、母さんにガー
プさんに誘われて海軍本部に行つていいか聞くか。ダメって言われ
たら断りに行こう。

「ただいま。ねえねえ、母さん。ガープ中将にセンゴク大将、つる中将
に海軍本部に見学しないかって誘われたんだけど、行つて来ていい？

ガープ中将が鍛えてくれるって」

「なんでそんなことになったの……？ まあ、別にいいわよ」

驚くほど簡単に許可が出た。ガープ中将たちの名前を出しても驚
いてなかったし、やっぱあの3人がいることは気づいてた。まあこん
な気配、気づかない方がおかしい。気配は海軍基地から動いてないの
で尾行もされてないだろう。されてたら母さんはすでに逃げてここ
にはいない。

「……聞いたのはオレだけど、そんなあつさり、いいの？あの3人がオ
レをエサに、母さんたちをおびき寄せる作戦でも立ててるかもしれないな
いよっ。」

「ガープの様子、どうだった？」

「どうって、別に普通。あと海軍に入らないかって誘われた」

「じゃあなおさら問題ないわね」

「……どういうこと？」

母さんが何を言いたいのかわからない。

「そもそもそんな作戦実行するならガープは置いて来てるわね。あい
つがいると作戦通りになんて絶対ならないから。ウソが下手という
かつけないし、いても邪魔ね」

「え？ …… “海軍の英雄”だよね？」

「ガープの海賊捕まえる方法はいつも真正面からぶっ飛ばす、ないわ
よ作戦なんて」

「……なんでそれでうまくいくの？」

「単純に悪魔みたいにバカ強いから」

そこまで強いのか？ 悪魔の实の能力者じゃないらしいが。まあ父

さんたちと何度も殺し合いしたって聞いたから強いんだろうけど。

「じゃあ、子供のオレを保護してから、母さんたちを正面から捕まえようとする可能性はないの？」

「それも無いわね。戦力が少なすぎる。そんな無駄なことセンゴクやつるがするわけないわ」

「ええ？ 向こうは悪魔みたいに強いガープ中将に加えて大将と中将が1人ずつに海軍基地の海兵さんたち、こっちは母さんと父さん、戦力にならないオレの3人だけだよ？ 十分なんじゃない？」

「こっちが応戦するならともかく、ほんとに攻めてきたら私たちは逃げるだけだもの。もっと数集めないと、この島から逃げ出すくらい簡単よ（そもそもあんた、あの3人は無理でも今いる他の海兵相手だったら勝てるから十分戦力なんだけど……）」

「ああ、そういうこと。あっちにはオレたちと戦う理由があるけど、こっちにはないもんね」

「そういうことよ（それにしてもこの子、4歳なのに頭良いわね。すでにガープより頭良いんじゃないかしら？ 流星は私の息子ね）」

「じゃあ行って来るよ。ボロは出さないようにするから」

「まあ危険はなくてもうちの人は反対するかもしれないけど」

「えっ、じゃあ行くの止める。断って来るよ」

「いーのいーの。鍛えてもらいたいんでしょ？」

「だけど父さんは反対するんでしょ？」

「ただの私の勘だから。それに今こっちに反対しに来てないでしょ？ あの3人は気配隠してないのに。（たぶんギャンブルに夢中になって気配探っていないわね）」

「ああ、それもそうか。父さんが反対なら、オレが3人から離れた時点で会いに来てるね、行くなって」

「そうそう、気にせず行ってらっしゃい。強くなりたいんでしょ？（あの人は自分の息子があのガープに鍛えられるなんて嫌がるでしょうけど、自業自得よね。なに子供にもらったお金でギャンブル行ってる

のよ)」

「うん、行って来るよ」

「気を付けてね〜(この子海賊大嫌いなのに、なんで元海賊の私や元海賊王の右腕のレイリーのこと、あんなに慕ってくれてるんだろ？口ジャヤーのことは普通に嫌いみたいなのに。まあそこがかわいいんだけど)」

再び海軍基地に行くと、3人は中でお茶飲みながらおかきやせんべい食べてる。ホントに暇つぶしだったのか？

「食べるか？」と誘われたので、おやつ食べたばっかだけど頂くことにした。おいしい。

「おまたせしました。保護者の許可も取ってきたので、今日はよろしくお願いします」

「……保護者、ちゃんといたんだな、孤児だと聞いていたが？(戻ってきたか。海賊の資金調達に利用されてるわけではなさそうだ。もしそうなら身を隠していただろう)」

「はい、コーティング職人をしています。それがどうかしましたか？」
「ガープは海軍に勧誘したいみただけど、あたしとセンゴクは身無し子が賞金稼バウンティハンターぎやって生活費稼いでるって聞いて、危ないから海軍で保護しようかと思ってたんだよ(海賊に利用されてるわけじゃないようだねえ。ってことは自力であれだけの海賊捕まえてるのか、未恐ろしい……)」

「身寄りのない子供が生きるために犯罪に手を染め、海賊になるのはよくあることだからな。海賊になるのを未然に防ぐために、そういう子供をたまに海軍で保護してる。その様子だと心配なかったようだが(能力者ですでに覇気を使う、この子、どの程度の実力なのか、ガープの次はおれも試してみるか。手加減はするが)」

ただの親切で来てた。疑いまくって空回りして恥ずかしい！今も酒場やってるって言ったら来るかもしれないからってコーティング職人の方だけ教えてるし。海軍は聖地マリージョアを通過できるからコーティングする必要ない。それにマリージョアにポンドラで

上がる赤い港にコーティング職人くらいいるだろう。

「それと能力者と聞いて何の実か確認したくてな。あの空を飛んでたのが能力だな？」

「はい、メカメカの実を食べました。足をジェットエンジンに変えて足の裏から風を噴射して飛んでます」

「フワフワの実ではなかったか。やはりシキはまだ生きているか」

「そう簡単にくたばる男じゃないのは、あんたが誰より知ってるはずだろ？」

「新世界のどこかに隠れて悪巧みでもしてるんだろ」

エッド・ウォーの海戦でロジャー海賊団と戦った“金獅子のシキ”か。1人で海軍本部に攻め込んでマリンスフォード半壊させたり、カームベルト風の海にある海底監獄インペルダウンから唯一脱獄した海賊。それにしても海王類が生息するカームベルト風の海の、しかも海底にどうやって監獄作ったんだろ？ 陸で作って沈めたのか？

能力者が死ぬと世界のどこかにその悪魔の実を復活するから、オレがフワフワの実の能力者だと“金獅子”は死んでることになる。それで知りたかったのか。紛らわしく飛んでてごめん。

「それより早く本部に行かんか？」

「そうだな。ロゼ君、海軍本部まで飛べるか？」

「え？ あの距離なら大丈夫ですけど……船で行くんじゃないんですか？」

「ガープが散歩がてら【月歩】で行こうって言ってる。3人とも跳んできたんだよ。帰りは船で送ったげるよ」

オレがまだできない【月歩】がただの散歩か……ふっはっはっ、笑うしかないや。

3人は【月歩】で、オレは能力で海軍本部まで移動した。

三日月型の島で真ん中に噂に聞くワノ国の城みたいな建物が建っていて、城壁に海軍のマークと大きく漢字で“海軍”と書かれている。そして何よりオレより強い気配がゴロゴロいるな。

オックスベルという大昔に活躍したオックス・ロイズ号という軍艦に取り付けられていた神聖な鐘を見せてもらった。年の終わりと始まりに、去る年に感謝して鐘を8回、新しい年を祈って鐘を8回、合計16回鳴らすのが海兵のならわしで、16点鐘と呼ぶそう。

一通り海軍本部の中見せてもらったら、特訓場で修行つけてもらった。六式の修行方法聞いたらついでにと【六王銃】ロクオウガンという奥義を見せてもらったがあれはヤバイ。でかい岩を両手で殴ったと思つたら一瞬で破裂し砂に変わった。

あれオレが食らったら体が内側から破裂するんじゃないかな？血肉で出来た汚い花火の出来上がり。全身機械化すれば大丈夫かもしれないけど、正直試しにくらう気になれない。出来るようになっても弱い人には使えないな。六式のすべてを極限まで高めたら出来るようになるらしい。

組み手もやつてもらったが、ガープさん途中で寝ながら動いたんだけど、なんだあれ？ 酔拳ならぬ睡眠拳？ そもそもなぜ寝たまま動けるのかもわからないし、意識がないからか攻撃の先読みができない。オレが気配消してるからか、向こうからは攻撃の先読みができないが、こっちの攻撃にカウンターしてくる。武装色纏って硬化した拳だから食らったらヤバイ。

生命帰還という技術で眠った体を動かして、見聞色で攻撃を読んで戦ってるそう。食べ物食べてすぐ体力回復させたり、骨が折れても牛乳飲んだらすぐ治ったり、病気になっても毒食らっても、免疫系を活性化させてウイルスや毒を殺して回復するらしい。ちなみにこの説明はセンゴクさんとおつるさんがしてくれて、その間ガープさんは寝ながら立ってた。こわい。

これはたしかに悪魔みたいに強いわ。こっちが苦勞してダメージ与えても、あつちは戦いながらご飯食べて回復したり、戦いながら寝て回復することじゃん。理不尽。しかも能力者じゃないから、海や海楼石も弱点じゃない。どうやったらこの人に勝てるんだろ？

ガープさんが目覚めた後、普通に武装色纏ったゲンコツのワンパンで負けた。いつてえ……。

これが朝飯前……寝てる間に倒されなかつただけマシか。

センゴクさんとおつるさんには悪魔の実際の能力を見せてもらった。ヒトヒトの実モデル大仏とウォシユウォシユの実。

大仏って人なのか？ 仏像じゃん。能力自体は体が巨人族サイズになって金色に輝き、掌から衝撃波が出せるという強力なものだった。大仏強いな、これが幻獣種。動物系は身体能力とタフネスが上がるってシンプルな能力だから、オレも強くなるくらいしか対策ないな。あの衝撃波、試しに攻撃してもらったけど、全身を鉄の機械に変えて武装色纏つてもダメージくらった。しかもかなり手加減してた。ちよんって当てるだけの攻撃だったのに。

おつるさんには試しに洗って干してもらった。全然体に力入らなしい思ったより強い能力だな、意外だ。悪党は心が洗われて悪の心が少し薄れるらしいし捕獲向きだな。でもこれだけなら遠距離攻撃で対策出来そう。定期的に洗ってもらえば悪人にならずに済むのかな？

日も落ちてきたので船でシャボンディまで送ってもらったけど、ガープさんが明日の仕事サボってオレを東の海イーストブルーに連れて行こうとしたため、センゴクさんにゲンコツ落とされて、おつるさんに洗濯されて干された。ガープさんの扱い雑だな。海賊から「悪魔」と恐れられた「海軍の英雄」だよな？

だがこれでとりあえずの対策が決まった。今度連れてかれそうになつたり、無理やり海軍に入れられそうになつたら、センゴクさんとおつるさんにチクろう。オレには無理でもあの2人ならガープさんを止められる。

帰って母さんに今日の事話して「よくあの人たちに捕まらなかつたね？」と聞くと

「アハハハ、なつかしいわね。あの時は流石に死ぬかと思つたわ」と笑っていた。よく笑えるなあ。やっぱすごいな。まあ海賊ヤンチャしてた時は殺し合いなんていつものことだったみたいだし、慣れてるんだろ

う。

ロゼを送った帰りのガープたち一行

『あの子、凄かったな……。六式も覇気も使わず完全に油断してたとはいえ、まさかガープを気絶させるとは……。気絶したまま戦うなんて、シキの時以来じゃないか？ お前じゃなかったらあれでもう決着だろ』

『普通にやって勝てないと見るや、武装色纏った蹴りで地面砕いて、足から噴出した風で砂埃を巻き上げ目くらまし。気配消したまま宙を飛び、背後から武装色纏って強度を上げた鞭で首を絞めて意識を刈り取る。いくらあんたの指の力でもあれを解くのもちぎるのも無理だ。ありや普段からやり慣れてるね、鮮やかな生け捕りだったよ。気絶したらすぐ解いてたけど、殺す気だったらヤバかったね。子供があれだけ動けるなんて詐欺だよ。大海賊時代以降のルーキー共じゃ相手にならないね。こわいこわい』

『ぶわっはっは、武装色は普通のようなだが、見聞色のレベルが異常だ。すでに並の中将以上、物の「核」もわかるようだったな。いくら機械の体でも、あの程度の武装色に子供の脚力じゃ、普通に蹴つても特訓場全体に亀裂が入ったりせん。気絶したふりも効かんかった、見聞色で完全に気絶したかどうか見極めとったようだ』

『なんでお前うれしそうなんだ？ いうかちったあ反省しろよ。何海兵が仕事サボって子供攫って東の海行こうとしてんだ！』

『あの子の実力見た時は、海軍に誘ったあんたの見る目も大したもんだと思っただが、ついにボケちまったかい？』

『いや、東の海に連れてって、本格的におれがあいつを強い海兵に育ててやろうかと』

『やっぱボケてんじゃねえか、なんでわざわざ東の海に行くんだ。あの子もう海軍入んの断ってるし、そもそも4歳を海軍に入れるのは無理だ。それに海賊嫌いで有名だと基地の海兵からも聞いたろ？ 片親か、実の親を海賊に殺されたのかもしれない。あの強さなら

賞金稼ぎとしてやっていける。海賊にはならんだろうよ。無理やり連れてって海軍に反発される方が厄介だ』

『あいつなら頑丈そうだし、強く鍛えてもらったお礼にって、案外海軍に入ってくれる気もするが。お前の衝撃波耐えてたし。あれ本気でもないが手加減もしてないだろ?』

『ああ、お前との戦い見てたら手加減の必要ねえなと思って、【六王銃】ロクオウガンみてえに内側に浸透させるように、0距離で衝撃波放った。流石に拳に武装色纏って外側からも攻撃するのは止めといたが。個人差はあるが人体の6・7割は水、普通ならもつと衝撃が伝わるはずだが、ダメージたいして受けてなかった。ありや体を完全に機械化して水分なくしてたな』

『流石にそれは考えてやったわけじゃないね。あの子、体の表面を守る武装色じゃ内側に伝わる衝撃波には効果ないのに纏ってたし、とにかく体を硬くして守ろうとしたんだね。あと、私に洗われても態度変わらないのは、まあ子供なら悪の心なんてなくても珍しくはないけど、また今度やって、なんて言われたのは流石に初めてだよ。変わった子だね』

『おれもおつるちゃんに洗われても変わらんが、またやってほしいとは思わんな。目が回るし。いい加減、戻してくれんか?』

『なんで嫌なら反省しないんだい?もう少し干されてな』

『むう（エースにロゼを会わせるのは無理そうだな。いい友達になれると思ったんだが、連れてったらいつら追ってきそうさ。ロジャーの子を育ててるのがバレたらうるさそうだし。仕方ない、やはりおれが時間を作って直々にエースを強い海兵に育てるしかないな。ロゼも言ってたがエースの人生はまだまだこれから、たとえロジャーの息子でも、海賊になどならず生きられるはずだ。おれの愛ある拳で目を覚まさせてやらねばな)』

『そーいやガープがいつでも来いなんて言っちゃったけど止めなくて良かったのかいセンゴク? あの子絶対来るよ? 向上心のすごい子だ』

『ああ、普通なら止めるが、ガープとあれだけ戦えるんだ。海兵の訓練

に混ぜつても問題ない。それどころか大佐あたりなら倒せそうだ。むしろ海兵たちのいい刺激になる。子供に負けてられるかってな』
『そういやゼファーがボルサリーノは能力に頼りすぎだつてぼやいてたな。ついでにクザンとサカズキもけしかけてみるか。お前らより見聞色でできる子供がいるぞつて』

『やめなよ、かわいそうに。あの3人能力強すぎて加減が効きにくいんだから。それよりビンズくんやアインちゃんみたいな年の近い子と遊ばせて娯楽を教えてあげた方がいいんじゃないかい？ あの子の海賊引きずつて基地に来るペースはおかしい。ほぼ毎日じゃないか』

『おれもガキの頃、毎日猛獣や海賊と戦つて遊んでたし、普通だろ』

『おまえと一緒にするんじゃないよ』 『あんとと一緒にすんじゃないよ』 『解せん……』

☆☆☆☆

「おーい、ロゼー、どうした？ 急に黙っちゃつて」

「あつごめん。ちよつとガープさんとちと初めて会つた時のこと思ひ出してた。賞金懸つてない海賊たちは8番グローブに埋めといたから引き取りに来て」

「はいはい。なんかスコップ使うのも慣れてきちゃつたよ。ライフルより使つてる気がする」

「平和でいいじゃん。オレが農園作つたら一緒に耕す？」

「ははっ、考えとくよ」

「じゃあオレ倒した海賊の船、造船所に売つて来るね」

「……そんなことまで始めたの？ よくどの船に乗つてきたか聞き出せたね？」

「(見聞色使つて)尋問したらすぐわかつた。このまま海賊船として朽ちるより、商船とか客船として使われた方が船も幸せでしょ」

「たくましいなあ……気を付けて帰りなよ(どんな聞き方したんだろ？ やっぱ鞭?)」

「はい、じゃあまた（賞金首引きずって）来るよー」

ここシャボンディから新世界に向かうルートは2つ。

ここで船を乗り捨て世界政府に通行許可を得て、赤い土の大陸を越えるカタギルートか、船のコーティングを行い、魚人島へ向かう無法者or物好きルート。普通の人は魚人怖がるからだいたい上のルートを通る。基本的にこっちから危害加えなきゃ何もされないの。まあ人間のことかなり嫌ってる魚人たちがいるのも事実らしいけど。

マリージョア通行許可は、造船所で身元調査通って船を買った人には出やすいが、今までの船で新世界行きたい人は後回しにされる。これが癒着か。賄賂払ってそう。袖の下とも言う。これだから世界政府は……。

シャボンディでは「交渉しよう||賄賂をよこせ」というのが一般常識だ。

もしかして儲けるためにわざと魚人の悪評流してるんじゃない？ やりかねん……。

だから早く新世界に行きたい人は船を乗り捨てるので、シャボンディでは船が売れる売れる。オレが場所を教えた船を査定して二束三文で買い取り、高値で売りつけてる。オレから500万ベリーで買い取り、1億ベリーで売りつけてる。ひどい錬金術だ。

全員がそうってわけじゃないけど、シャボンディの大人って汚い人多い。信じられるのは両親と海兵位だ。まあ海兵もたまにアレな人はいるけど。

よく観光客騙そうとするし。

シャボンディ出たらボンチャリ使えないんだから買う必要ないよ？ 何が「今買わないと損！」だよ。レンタル500ベリー、買うなら1万ベリー。ここに住むならともかく、観光客が1万ベリーでボンチャリ買うのは只々損だよ。

シャボンディに造船会社はいっぱいあるし、とりあえず全部回っていい所があったら、そこでオレが将来旅に出る船作ってもらうか。大量の農作物栽培したいし、自分の修行も出来るよう、巨人族が余裕で

乗れるくらい大きい船がいい。

土は赤い土の大陸まで飛んで行って運んで持ってきて、買った肥料と混ぜるとして、果樹とかはシャボンディにある種類全部買うか。大人買いしたい。

あとは記録指針に永久指針、これもあるだけ欲しい。シャボンディは偉大なる航路前半最後の場所だけあって、色んな永久指針が売っている。新世界に行く自信がない海賊は、戻る永久指針を買って力を蓄えようとするらしい。無策で突っ込んで白ひげ海賊団あたりにやられればいいのに。

お金たくさん必要だな。何億かかるだろう？ 海賊狩らなきゃ。

能力覚醒させて機械の兵隊作り出せるようになれば、一人でも大きい船を動かせる。船自体を能力で機械に変えて操るのもいいな。金獅子がやってみたみたいに船を飛ばせば波も渦も怖くない。サイクロンは勘弁。

船売りに行ったら、家に帰っておやつ食べよ。食は力の源、いっぱい食べて強くなろう。

“ジャボンディパーク”

日課の修行と海賊の海軍基地への連行を終えておやつを食べる家に向かう。人攫いは海兵の目の前でやると流石に捕まるが、そうでないなら捕まえてくれないのでドリルで穴掘って顔だけ出して埋めていた。明日になってもいたら掘り出そう。殺すのはまずい。海賊じゃないんだから。

ベルメールさんは東の海イーストブルーのオイコット王国って場所に派遣されていなかった。怪我してないといいけど。

店の方からなつかしい気配がする。おやつ取ったら店に行くか。

「久しぶり、はっちゃんさん。半年ぶりくらい？　母さんもただいま「おかえり〜」

「ニユ？　お口ゼか、久しぶりだな。でもいくらおれの名前が『はっちゃん』だからってのはっちゃんさんはやめてくれ、ややこしいから呼び捨てでいい」

「そう？　わかったはっちゃん。母さんこれ1050万ベリー」
「全部自分の貯金に回しているのよ？　自分で稼いでるんだから（海賊からぼったくって）酒場の商売繁盛してるし」

「親孝行は出来る内にしとけて本に書いてた。父さんに渡してもギャンブルで溶かしちゃうし。おいしいお酒でも買ってあげて」

半年ぶりに会うタコの魚人のはっちゃん。腕が六本あって吸盤がついてる。白髪でもみじみしたいな髪型をしている。昔、海で遭難した父さんを助けてくれたことがある。

ジャボンディ諸島は厳密には島ではなく79本のヤルキマン・マンガローブの集まりだ。そのためグローブとグローブの間は小さな海があり、オレの家の前にも海がある。

ジャボンディには魚人差別に人身売買という人間の愚かな歴史が残っているため、魚人島から直接家の前に泳いできている。79本もあるのによくわかるな。目印つけてるんだろうか。母さんのビブルカード持つてる可能性もある。オレも母さんと父さんのビブルカー

ド持つてるし。母さんたちもオレのビブルカード持つてる。父さんが1晩で作ってくれた。

軽く会話しながら、かぼちやのケーキとスプーンを持ってはっちゃん隣の隣に座る。

「今日はレイリーいないんだな、久しぶりに会いたかったんだが」

「父さんは……今シャボンディパークにいるみたいだね。後で一緒に行く?」

父さんは普段気配を民間人レベルまで下げてる。そうしないと速攻海軍に見つかるから。オレはまだ気配を完全に消すかだだ洩れのどっちかしかできない。おかげでわかる人がオレを見たら、見聞色を使えるのが丸わかりだ。ガープさんたちにはすぐバレたし。

「行けるなら行きたいが、おれたち魚人や人魚があそこに行くのは危険だ。人攫いに狙われる」

「上にコート着て腕と吸盤隠したらバレないんじゃない? はっちゃんは手にヒレついてないし」

「ニユ!? そんな手があったとは。だが一緒に行くのは……おれを売ろうとする人攫いに一緒に襲われるかもしれないぞ?」

「オレ、悪魔の実食べてからしよっちゅう襲われてるし、いつもと変わらないよ。今日も埋めてきたし。それに1人より2人の方が狙われにくいでしょ」

「行って来たら? はっちゃん。この子そのへんの人攫いじゃもう相手にならないし、うちの人も合流すればこの島で戦いになる奴なんていないでしょ（あの人も喜ぶだろうし）」

「ニユ……頼んでいいか? ロゼ」

「もちろん。じゃあ大きい目のコート買って来るからちよつと待って。母さんごちそうさま、今日も美味しかった」

「お粗末さま」

ケーキを食べ終えて、服屋に出かける。

この8つて書いてるフード付きの緑のやつでいいか。わかりやすいし、防水みたいだから水中でも着れるでしょ。会計をすませて店に

戻る。

「買ってきた。サイズは大きいと思うけど」

「ニユ、ありがとうロゼ！気に入ったぞこれ。特にこの8がおれ専用ってかんじでいい」

「気に入ったならよかった。あげるからシャボンデイに来る時はそれ着てきなよ」

「もらっていいのか？」

「父さんの恩人だしこれくらいいいよ。オレにとっても友達だし。それじゃ行こっか」

「ああ！じゃあシャツキー行って来るぞ」

「2人とも気を付けて行ってらっしゃい」

「行ってきます」

そう言って、2人でシャボンディパークへ向かう。

「今日は天竜人来てないみたいだし、人攫いと海賊に気を付ければ大丈夫だね」

「気配読めるのは知ってるけど、そこまでわかるのか？」

「天竜人が来てたら、その周りの人が前横切らないように動かなくなってるからね、すぐくわかりやすいよ」

「前横切ったってだけで撃たれたり、気に入ったからって連れて行かれたりするからな。誰も好んで関わりたくないだろ」

「問題起こしては海軍動かしてやりたい放題だから海兵からも煙たがられてるし、聖地マリージョアに引きこもって何もしないでほしい。

あつ、着いたよ」

歩きながら会話していると、シャボン玉がついた観覧車やらジェットコースターやらが見えてきた。

オレの能力で作れないかな？一応機械だと思うけど。

とりあえず入場料を払って中に入る。

「父さんは今メリーゴーランドのあたりにいるみたい。すぐ合流するのがいいと思うんだけど……」

「それでいいけど、どうかしたのか？」

「いや、あれどう思う?」

「ニユ? ……人攫い現行犯に見えるな」

オレが指をさした先には、数人の男たちが、人が1人くらい余裕で入りそうな袋を1つ担いでこっちに走ってきていた。袋は内側から誰かが暴れているように動いている。このまま外に出て人間屋ヒューマンショップに売るつもりだろう。人攫いの定番コースだ。

シャボンディじや父さんの顔よりよく見る光景。こんなものよりもっと父さんの顔見たい。

「ム力つくからボコって来る。はっちゃんどうする?」

「おれも行くよ。他人事とは思えないし」

「大丈夫? 腕4本隠したままで。剣もないし」

はっちゃんは本来6本の腕を活かした6刀流の剣士だが、目立たないように剣は店に置いて来ていた。普通の人は剣6本も持たないからな。

「魚人は生まれながら人間の10倍の力を持つって言われてんだぞ? このくらいハンデにもならねえよ」

「そう? じゃあ半分任せるね。オレはあの袋持った奴からやるよ」

そう言っただけで、先頭の袋を担いだ男に武装色を纏った拳で殴りかかる。

「ああ? ……なんだこのガキ。そこをど、ぶへらっ!」

顔を殴り飛ばして、男の肩から落ちた袋をキャッチして着地する。袋を下ろして他の奴に殴りかかる。なんか袋に黒いシミ付いてるけど……うん生きてるな。

1分かからず3人倒してはっちゃんの方を見ると、向こうも終わったようだ。

「おつかれさん。怪我とかない?」

「ニユ、この程度、準備運動にもなりやしねえよ。オレの【タコ焼きパンチ】で楽勝だ」

「流石10倍、すごいね。さてと、おーい。大丈夫?」

袋の口を縛っているロープを解いて中の人に呼びかける。すると10歳くらいの水色の髪の子が出てきた。

ああ……こいつら噂に聞くロリコンなんだな……人攫いの上にロリコン、救いようがないな。

「ゲッソッ、ひどい目に遭ったでゲソ……。まだ目が回るでゲッソ」
「怪我してない？」

「大丈夫でゲソ。助けてくれてありがとうでゲソ！」

「ニユ？ メイプルじゃねえか！ おまえなんでこんなところに？」

「ハチさん!? いや、シャーリーに今日はいいことがあるって言われたから、来てみたかったシャボンディパークにこっそり入ってみたでゲソ。バレない力なつて」

「はっちゃん、この人知り合い？ オレたち以外に人間の友達いたんだ」

「こいつはオレの妹分だロゼ、あとメイプルは人間じゃなくて……」

「君がロゼ？ ハチさんから何度か聞いたでゲソ！ 私はメイプル。

メイプル・リード。ミナミハナイカの人魚なんだ。よろしくでゲソ」

「バカ！ こんな周りにたくさんいる所で言うな！」

「……とりあえずカフェにでも行つて話さない？ さつきから人が集まつて来てるし」

ざわざわ周りの人が話してる。まあどう見ても誘拐されそうになつてる人助けただけだから、敵意は向けられてないけど。

少し歩いてカフェに入る。オレはオレンジジュース、メイプルさんはチョコレートパフェとミルクティー、はっちゃんはタコ焼きと緑茶を頼んだ。

「……タコ焼きって食べて大丈夫なの？ はっちゃん」

「ニユ？ ああ、普通の人魚ならともかく魚人は魚も食べるし問題ねえ。タコ焼きは好物だ。タコ焼き屋になるのが夢なくらいにな」

「そうだったんだ。知らなかったよ」

そーいやさつき自分の技に【タコ焼きパンチ】つてつけてたな。

オレは生き物の肉の味はともかく苦手だ。2歳の時焼肉に素手で触れて、過去視の見聞色で牛の解体場面を見ちゃってから苦手になった。以来自分の過去を見る度に牛を解体する映像が出てくるようになったので、見る過去を選ぶ修行をした。1か月で済んで良かった。

味は美味しいんだけどなあ……。

「私もたまに食べるでゲソよ？ イカもタコも肉食だからね。私の夢はパティシエでゲソ！」

「魚人島のお菓子はおいしいらしいね。聞いているかもしれないけど、オレの夢はこの世のすべての野菜と果物の農園を作ること。ところでメイプルさんは人間にしか見えないんだけど？」

パティシエになりたいから白い帽子被ってるのか？ 改めてメイプルさんを見るが人魚と言う割に足がある。人魚は30歳過ぎると尾ひれが二股に分かれて陸でも生活できるって聞くけど、どう見てもそんな年に見えない。オレとたいして変わらないだろう。

「今は腕、見えないようにしてるでゲソからね。あとメイプルでいいでゲソよ。助けたくれたし、ハチさんとも仲いいって聞いているでゲソ」

「じゃあそう呼ぶよ。でもメイプル、腕見えてるよ？ それに8本足じゃないし」

今もスプーン持ってパフェ食べてる。この子はいったい何を言ってるんだろう？ そもそも人魚なら隠すのは足だろう。魚人と勘違いしてるのか？ しかも隠してるって言ってもはっちゃんみたくコート着てるわけでもない。イカみたいな白い帽子にキャミソール着て、膝くらいの丈のスカートを穿いてる。手も足も出てる。あとはバッグ持ってるくらいだ。

「ニユ、ロゼはミナミハナイカってどんなイカか知ってるか？」

「いや、今日初めて聞いた。それがどうかしたの？」

「種類によって違うけど、ミナミハナイカって2本足で歩くんだよ。だから人魚でも2本足なんだ。逆にミナミハナイカの魚人は8本足になるな。イカは種類や、人魚か魚人かで手足の数が変わるんだ。ダイオウイカの魚人は8本腕だった」

「そういうことでゲソ！」

「なにそれややこしい」

まあシャチの魚人がいて何故かエラがあるくらいだ、手足の数くらい問題じゃないか。ウイリーさんいい人だけど、シャチって魚類じゃ

なくて哺乳類じゃ？ 魚人じゃなくて、哺乳人の方が正しいんじゃない？ まあタコとイカも軟体動物だけど。シヤチ同様珍しいがイカやクジラの魚人、人魚もいるらしい。

「でも腕も2本だよ？」

「ミナミハナイカの特性で、6本の腕と吸盤の色を透明に変えて隠してるでゲソ。肌の色も変えられるでゲソよ？」

「おお、肌の色が波打ちながら変わってる」

肌の色を白くした後黒くして最後に肌色に戻した。色んな生き物がいるんだな。今度動物図鑑買うか。

海の戦士ソラのジェルマが、透明になる光学迷彩スーツ使ってたな。能力で再現できるか？

「そんなイカいたんだ。人間なのに自分のことを人魚か魚人と勘違いしてるのかと思ったよ」

「まあ魚人街の人たちでもイカの人魚か魚人かを一目で見分けられる人、そういないんじゃないか？ でもロゼから見ても人間なら如何に私誘拐されたんでゲソか？ 自信あったのに」

「かわいい人間の女の子を狙ったんでしょ、1人でいると目立つし。別に人魚や魚人に限らず、高く売れそうでも海軍に捕まらないなら、あいつら誰でも誘拐するよ。海賊とか世界政府非加盟国の人間とか。巨人族とかもそうだし、てゆうかオレもよく襲われてる」

「ふふん、私はかわいいイカ、ロゼはわかってるでゲソね。でも如何に人間なのに誘拐するでゲソか？ 同胞じゃないか？」

「さあ、お金のためじゃない？ 人攫いなんてやってる外道の気持ちなんてわかりたくもないよ」

「魚人街でもマクロ達が人魚攫おうとしてるだろ？ それと似たようなもんだろ」

人間でも魚人でもそういう奴はいるんだな。そしてメイプルも魚人街に住んでるってことは孤児なのか。魚人街は孤児を預かる巨大な保護施設で、はっちゃんもそこに住んでるらしい。メイプルの両親はもう死んでしまったのかもしれない。

「ああ、私も狙われたことあったでゲソ！ 1回サーベルで八つ裂き

にしたら狙われなくなったでゲソが」

「……え？　メイプルって強いのか？　さっきは攫われてたけど」

「いきなり頭から袋被されたら誰だってパニックになるでゲソ……びっくりしてスミ吐いたでゲソ。サーベル持ってきてたらあんな袋切り裂いてるでゲソ！　8本も邪魔だから置いて来たけど、1本重さ100キロだし。私、道場でも強い方でゲソよ？　ねえ、ハチさん？」

「ああ、メイプルはヒョウゾウと同じ8刀流と毒の剣の使い手で、おれの次くらいじゃないか？　おれと同じ6刀流のヒトデナシとナンバー3剣士争いしてるな」

「ハチさんとヒョウゾウさんが強すぎるでゲソ！　あと、ヒトデナシよりは私の方が強いでゲソ」

「サーベルって片手用だから軽いんじゃないか？　なんで100キロもあるのか？」

「私にとっては軽いでゲソよ。実際ハチさんのより軽いでゲソし」「そうなの？」

「ああ、おれのは1本300キロだからな」

あの袋のシミ、血じゃなくてスミだったのか。そして力強いな。

ヒョウゾウって人は聞いたことあるな。たしか道場の剣士の中で1番強い、ヒョウモンダコの人魚だっけ？　手と足を使って8本の刀を使いこなすっていう。はっちゃんが1回も勝ったことないらしい。ヒトデナシは聞いたことない、ってかすごい名前だ。

機械の義手や義足作って飛ばしたらオレも6刀流や8刀流できるか？　早く覚醒したい。

「ヒトデナシって誰？　というかメイプル毒使えるんだ？」

「ヤツデヒトデの魚人でゲソ。私は毒のイカスミ吐いたり、サーベルに毒塗って斬ったりしてるでゲソ。アラデインさんに解毒薬作ってもらってるから1回試しに私の毒、味わってみないか？」

毒入りのイカスミ、イカスミスパゲツティにはできそうにないな。

「いや、やめとく。毒はちよっと……6刀流とか8刀流とか、手足多い人が通う道場だったの？」

「うんにや？　剣士じゃないけど、タイガーさんにジンベエさんと

ハックさんは腕2本で魚人空手、魚人柔術の達人だ。ウイリーさんは1本の金棒片手でぶんぶん振り回して戦うし、クロオビは2刀流で今は来てないけどアロンさんは1刀流だ。クロオビは今魚人空手も教わってる。ウイリーさんとアロンさんは魚人街で暴れてる海賊倒しに行ってるな」

よく聞く名前が出てきたな。魚人街にはまとめ役のタイの魚人、フィッシュヤー・タイガーを頭かしらに、人間への考え方の違いで3つの派閥があるらしい。海軍もそうだが人それぞれ考え方が違うので、人が集まると派閥が生まれる。

一番多いのはジンベエザメの魚人ジンベエの「こちらから危害を加えるつもりはないが、襲ってくるなら容赦アせんぞ？」魚人島の平和第一の専守防衛派。ネプチューン軍に入隊するものが多く、魚人街出身じゃないが、シーラカンスの魚人ネプチューン王や医者でイタチウオの魚人アラディンもこの考えらしい。

次はノコギリザメの魚人アロンの「同胞を傷つける奴は許さねえ！魚人は人間から進化した至高の種族だということをわからせてやる！」の人間嫌いの強硬排除派。大海賊時代が始まってどんどん増えてる派閥ではっちゃんちゃんの友達のエイの魚人クロオビやキスの魚人チユウはこの派閥。

1番少ないのがウイリーさんの「ワイらは襲ってくる人間の事しか知らへん。それですべての人間の事悪い言うんは早いんちゃうか？」のこつちから人間に歩み寄ろうの友好派、ただし襲ってくる奴は倒してる。金魚の魚人オトヒメ王妃の演説に心動かされ、もっと人間のことを知り共存を目指す派閥。はっちゃんやエビスダイの魚人ハックにアロンの妹でアオザメの魚人シャリーリーがいる。メイプルもかな？

ウイリーさんとアロンはよくケンカして、どちらが多く海賊倒すか競争してるらしい。ウイリーさんとはたまに海賊引きずってつたら海軍基地でばったり会って世間話する。

「海賊王」ゴール・D・ロジャーが処刑された後、海賊王になるだとかひとつなぎの大秘宝ピースを手に入れるだとか言って海賊が増え、大海賊時代が始まった。

シャボンディ諸島同様、魚人島にも新世界へ向かう海賊が雲霞のごとく押し寄せてきた。いや、魚人島はシャボンディよりひどかった。シャボンディは海軍本部のすぐ近く、大海賊時代が始まってすぐの頃は荒れに荒れたが、今は余程のバカや世間知らずでない限り、シャボンディでは騒ぎを起こさない。海賊の間での暗黙の了解らしい。元々大海賊時代以前はそうだったという話だ。

魚人島は聖地マリージョアの真下深海1万メートル、海軍もすぐには行けないし近くのシャボンディでも海賊は暴れてる。海軍が来るまでに多くの魚人島民が行きがけの駄賃感覚で攫われたり売られたりしたらしい。やっぱ海賊って海のクズだわ。

ようやくシャボンディで海賊がおとなくなり海軍が魚人島に向かったが、今度は海軍と海賊の戦場になり大勢の人が巻き込まれて亡くなったそうだ。

魚人島の国王ネプチューンの友人の大海賊「白ひげ」エドワード・ニューゲートが魚人島を縄張りにすることうまく平和が戻った。こういう海賊ばかりならまだ世界は平和なんだけど、手で数えられる程度しかいないからな。「白ひげ」は仲間や傘下の海賊、縄張りに手を出す奴に容赦がないことで有名だ。海賊は「白ひげ」を恐れて魚人島に手出しがでなくなっただって聞いたけど……

「「白ひげ」がナワバリにしたのにまだ魚人島で暴れる奴がいるの？」

「魚人島でおおっぴらに暴れる奴はほとんどいなくなったが魚人街は少し離れてるからな、バレる前に攫って逃げようとする奴はまだいるんだ」

「「白ひげ」さんにケンカ売って、自分たちの海賊団の悪名を上げようとするやつとかいるでゲソね」

「あとは海の森にある歴史ホーネグリップの本文を奪って売ろうとする奴もたまにい

るな」

「歴史の本文？ そんなのあつたんだ。奪つても読める奴なんていないだろうに。てかわざわざ奪わなくても魚拓みたいに紙に写せばいいじゃん」

「古いものだから歴史マニアに売れると思つたんじゃないか？」

歴史の本文は世界中に散らばる約30個の石碑で、古代文字が刻まれている壊せない本だ。世界政府は歴史の本文の探索と解読を禁止しており、破つたら死罪だそうだ。歴史の本文に記されているという古代兵器の復活を阻止するためと世界政府は言っているが、父さんが言うには歴史の本文に記された空白の100年の歴史の内容が世界政府にとつて不都合で揉み消したいからだそうだ。

「海賊王」は万物の声が聞けて、歴史の本文の声を聞き空白の100年のことを知つたそうだ。海賊王の関係者や子供が殺されまくつたのは、空白の100年の内容が広まることと、万物の声を聞く能力の遺伝を恐れたのか？

知りたければ教えようか？と言われたが、人身売買禁止して行くせにシャボンデイの人間屋や天竜人の横暴を認めたり、王下七武海に未開の地、つまり世界政府非加盟国からの略奪を認めてる今の世界政府のことがすでにあまり好きじゃない、というか嫌いなのに、いまさら必死に隠そうとしてる過去の悪事なんかを少し聞いたところで、オレの世界政府の印象はたいして変わらないから、歴史の本文の内容を知つてるとバレた時に政府から狙われるだけ損だ。

海賊を利用して海賊を減らそうとするのは合理的だ。七武海が普通の海賊にやられても所詮は海賊、構わない。収穫の何割かを徴収することで力をつけすぎないようにしつつ、資金源にしているのもいい。だがなんだよ、非加盟国からの略奪を許可つて、お前らの土地じゃないじゃん。そんなこと認める権限ないだろ？ 人の土地の金で海賊雇いやがって。加盟国にあらざんば国にあらざとも言いたげである。

そう言つたら苦笑いされた上、ちよつとしょんぼりしてるようだった

た。

ホントは誰かに昔話聞いて欲しかったのかな？ごめんね、興味なくて。でもこんなあっさり世界の秘密とかラフテルの行き方とか話そうとするから、世界政府や海軍に狙われてるんだと思うよ？

ロジャー海賊団の仲間の話を聞いたら元気を取り戻してくれた。
“海賊王”に“冥王”、“天王”って王様の異名の人多いな。ワノ国の大名もいたらしい。やっぱ全員覇王色使えるのかな？父さんは使えるし。覇王色の使い手なんて一味に1人いれば十分だろうに。よく王の資質と言われる覇王色を持つ人間を何人も仲間に出来るな。

仲間が侮辱されたという理由で一国の軍隊を潰したこともあるらしい。ふっはっはっ、海賊お茶目だなあ。父さんじゃなかったら海軍に引き渡すけど。まあ海賊引退してるからオレ基準ではセーフ。

2年前、西の海ウエストブルーの考古学の聖地オハラで、その歴史ホーネグリップの本文の研究をしていることが発覚し、世界政府は海軍を動かしてバスターコールが発動され、去年から発行される地図からオハラの名前は消えた。

考古学者たちは世界の壊滅を望んだオハラの悪魔達と呼ばれ、オハラの住民は考古学者ごと皆殺し、いや1人だけ生き残った当時8歳の少女がいるが、7900万ベリーの賞金首として手配された。たしか“悪魔の子”ニコ・ロビン。能力者らしい。

父さんがじーつとニコ・ロビンの手配書眺めてた。そして家の壁に貼っている。

……かわいい子だったけど、父さんはロリコンじゃないよね？信じるよ？

1人で海軍の軍艦6隻沈めたから賞金首になったって新聞に書いてたけど、そんなわけないだろ。センゴクさんが指揮とって、ヒエヒエの実の能力者のクザンさんにピカピカの実の能力者のボルサリーノさん、マグマグの実の能力者のサカズキさんがいたんだぞ？海軍本部で顔合わせて能力見せてもらったけどとんでもなかった。海を凍らせて、マグマで消し炭にして、光速で追って来て、マジモンの仏罰下せる、人間卒業してる人たちが揃ってるのに、1人で逃げ切っただけでなく軍艦6隻沈めるとか、本当に8歳でそれなら古代兵器復活

させなくても大人になれば世界滅ぼせるわ。バスターコールは軍艦10隻だからあの4人以外の軍艦全滅じゃないか。

誰がこんな信じるんだバカにしてるのか、と思っていたが66番グローブの海軍駐屯基地の人たち皆信じてた。うそでしょ？

最近の子供ヤベーなってオレを見ながらシシリーさん言つてたけど、オレにそんなマネ無理だから。たまに組手してもらってるけど見事なフルボッコだから。手も足も出ない。

貴重な自然ロギアとの戦闘経験、それもこつちを殺さないように加減してくれるなんて機会は普通ない。三大将に特訓場で会う度に組手お願いしてる。その度に周りの海兵に「オイオイオイ」「死ぬわアイツ」と言われる。たしかに勝てないけど手加減されてるし殺されんわ。組手は少し離れた海をクザンさんが凍らせるか、サカズキさんがマグマを海で冷やして大地の足場を作つてやるため、どの程度の組手かわからないのが言われる原因かもしれない。特訓場でやると危ないからな、周りが。

たまに憐れな海賊船が通りかかることがあるが……あれが地獄絵図か。因果応報。

海軍の上層部の何人かと組手してる謎の子供がいる、そしてその子はシャボンデバウンテイハンターィで賞金稼ぎをしているらしい、ということでおレは海兵の誰かの隠し子、隠し孫という噂が広まっている。

最初はよくオレを勧誘してるガープさんの孫疑惑が出ていたが、イストブル東の海イストブルにいるらしいという噂が流れ自然消滅。例の海賊の子か。最近は仕事のついでに寄つて会つてるそうだ。海兵になつてくれるといいね、ガープさん。でもサボっちゃダメでしょ？

今はクザンさんの子で育て親はボルサリーノさん、センゴクさんとおつるさんの孫。さらにはガープさんとゼファーさんの弟子でサカズキさんの甥という、好き勝手というか完全に悪ふざけが入ってる人間関係が有力な噂として語られてるらしい。ベルメールさんにこれマジ？と聞かれた。そんなわけないでしょ。そもそも海兵じゃなくて元海賊の隠し子だし。

だいたい海軍本部つてそんなアットホームな職場じゃないでしょ。

「海兵が海賊の人質に取られたじゃと？生き恥さらすくらいなら死ねい！」って海兵ごと海賊吹き飛ばす人が人望ある組織じゃん。笑ってる子供の笑みが消えて、泣き叫ぶくらいブラックじゃん。

オハラで民間人皆殺しにしたのは絶対サカズキさんだな。数億ベリ貯まった全財産賭けていい。普段の言動から過激さが滲み出てる、「徹底的な正義」だし。正しくない人間は生きる価値がないとか、悪は可能性から根絶やしにしろとか、会うたびにオレの思想を洗脳しようとして来る。うっ頭が…。海賊嫌いは共感出来るけど、民間人に被害出すやり方は認められない、殺したくないし。今は海賊嫌いな所を気に入られてるけど、オレが「冥王」の息子ってバレたら「そうか、じゃあ死ねい。」で殺されそう。マグマ対策…、体を耐熱の素材に変えられるようになればいけるか？ フライパンとか溶鉱炉みたいな。最近大将に昇進した。

クザンさんは大丈夫。オレが海賊の子でもオレ自身が何かしない限り狙われない。能力も体をヒーターとかオーブン、バーナーに変えられるようになれば対抗できるはず。オハラの1件以来「燃え上がる正義」から「だらけきった正義」に変えたらしいけど、心境の変化かな。能力で相手を凍らせても後で溶かせば戻るので1番生け捕りに適した能力。シャボンデイで何か起こったらクザンさんに来てほしい、他の2人じゃシャボンデイが地図から消える。ちなみにクザンさんがオレの親として1番有力な理由は、シャボンデイの風俗街に出入りしてる目撃情報があるからだという。そつとしいてあげて？

ボルサリーノさんはどうだろ。過激じゃないけど甘くもない、五分五分かな。そして対策が思いつかない。鏡持って1回レーザー反射させたけど、2回目は熱で溶かされた。光速ってシンプルに強い、本気で動いたら周りに被害出るから手加減してるのと思考や反射神経まで光速じゃないのが救いか。なおサカズキさんは手加減せず味方ごとヤツてる。光の速さで繰り出す蹴りは、避けても衝撃波で吹っ飛ばされる。オレもレーザー銃作れるようになれないかな。オレにはなによりも速さが足りない。全身機械化してジェットエンジンで音速なら動けるか？【^{ソル}剃】には音が鳴るって欠点があるが音より早く動

けば問題ないな。あとは脳と神経を機械化することで、電子頭脳と電子回路による思考や反射神経だけでも光速で動かすとか。「どっちつかずの正義」ってサカズキさんとクザンさんの中間ってことか？ グラサンは自分の光が眩しいからかけてるらしい。

「理由はどうあれ狙われてるなら、ポーネゲリフ歴史の本文のことは秘密にした方がいいんじゃない？ 世界政府に何か言われるかもしれないし」

「それもそうだな、メイプルも言い触らすなよ？」

「了解でゲソ！ ところで私はこっそり遊びに来たけど、ハチさんたちはなんでここに来たでゲソか？」

「ああ！ すっかり忘れてた。レイさんに会いに来たんだった」

「いきなり誘拐現場に行くわしたからね。メイプル、今度からシャボンデイ来る時はまずオレの家に来ない？ はつちゃんと一緒に歓迎するよっ！」

「ほんとに良いカ？ 前から行ってみたかったでゲソ！」

「はつちゃんはいつもどうやってうちの店来てるの？」

「ああ、店があるヤルキマン・マングローブにマークつけてそれを目印にしてる」

「じゃあ帰りに教えてあげて？ オレはいつも3時くらいにおやつ食べに帰ってるから。後で店に行こう」

「んじゃ、そろそろレイさん探しに行くか」

「今父さんは……ジエットコースターのあたりにいるね。順番待ちかな？」

話も終わったし全員食べ終えて、カフェを出る。

ジエットコースターの方に歩いていくと、

「わはははは！ ん？ おうロゼ！ それにハチも。久しぶりだな！」

そこにはジエットコースターに乗り、フードを被ってグラサンをかけた父さんが高笑いをしながら遊園地を満喫していた。変装のためだろうけど、フードにグラサンってラッパみたいだな。

こつちに気付いて、ジェットコースターに乗ったまま手を振り声をかけてくる。

「ね？ 1人だと目立つでしょ？ 1人でシャボンディパークに来ちゃだめだよ？」

「いや、あれは1人だから目立つてるんじゃないやねえだろ…」

「あはは、イカすお父さんじゃないイカ。どんな人でゲソか？」

「強くてカツコよくて頭良くて知識が豊富で冷静沈着で母さんや昔の仲間が好きで血液型はXFでおうし座で煮豆が好きで酒と美女とギャンブルが好きであとあと…」

「ゲ、ゲソ？」

「ニユ、その辺にしといてくれロゼ。メイプルが話に追いつけてない。はやくレイさんと合流しよう」

「それもそうだね。ジェットコースターの出口に行こうか」

そう言って父さんに会いに行く。最近海軍本部に行って修行するようになったからあんまり会えてない。2か月ぶりくらい？

海軍本部の方が設備整ってるし、身を守るためにやってるのに、ここで父さんに修行つけてもらってバレたら元も子もない。早く足手まとい卒業しないと。

「……今の何でゲソか？」

「ロゼ、普段は海軍に捕まらないようにレイさんのことほとんど話さないから、話せる相手には止まらなくなるんだ」

「子供っぽい所あるんでゲソな」

「まあ4歳だからな。子供だろ」

「……そういえばそうだったでゲソ。私の5つ下だったでゲソ」

「あいつ早く大人になって自立しなくちゃって賞金稼バウンティハンターぎやってしっかりしてるからな、2歳の頃から」

「早くないイカ？ 人間は成長が早いでゲソな」

「だよなあ。魚人や人魚の2歳はまだ親から離れて海賊や人攫い倒しに行ったりしないのに」

「せめて5歳になってからじゃないイカ？ 私はそうだったでゲソ」

「おれたちは親いねえからだからな？ ギョバリーヒルズのオクトパ子たちは今でも1人で魚人島の外に出歩いたりしねえよ。海賊とか人攫いとかいんのに」

「シャリーもそうでゲソな。まあいいじゃないか。ミンク族は赤子でも戦えるって、白ひげ、さんたちが言ってたし、私は9歳だから平気でゲソ。それよりロゼに置いてかれるでゲソ」

「今日攫われかけたばっかのくせに……」

オレから少し離れて2人がついて来る。あんまり離れるとまた攫われるよ？

出口付近で待っていると、父さんが下りてきた。何かをやり遂げたような晴れ晴れとした顔だ。とても政府や海軍に追われている元海賊とは思えない。流石の貫録だ。

「ニユー、久しぶりレイさん」

「ハチ、久しぶりだな。だがあまりこの島を出歩くのは感心せんな、せめてウイリーと一緒に来い。そちらのお嬢さんは？」

「オレと一緒にこうって誘ったんだ、ごめん。父さんに会いたくて。こっちはメイプル。オレの友達でハチの妹分なんだって」

「メイプル・リードでゲソ。さつきロゼとハチさんに攫われたところを助けてもらったでゲソ」

「ああ、キミがああ。作るお菓子の味はいいが、たまに毒が混入するとういう」

「ハチさん、最初に連想するのが毒って普段いったいどんな話してるゲソか？心外でゲソ」

それは二重の意味で致命的だな。パティシエ生命的にも食べた人の命的にも。

「あれ、父さんにはメイプルのこと話してたんだ。オレ今日初めて知ったよ？」

「まだ早いと思ってな。毒入りのお菓子食わせたり、勝手に島出て行ったり、悪影響与えそうで。あとありのままを話したただけぞ、メイプル」

「ゲソぬ……まあ良いカ。それより私も色々遊びたいでゲソ！ みんなでジェットコースター乗らなイカ？」

「父さん、だめ？」

「はっはっはっ……今日は特別だぞ？」

その後、父さんと4人でシャボンディパークを満喫した。

途中でメイプルが楽しみすぎてスミ吐いてた。感情が高ぶると出るらしい。吐血かと思つてびっくりしたよ……。

日も沈み午後7時になったあたりで、シャボンディパークを出た。

「時にロゼ。最近海軍本部に出入りしとるらしいが、大丈夫なのか？」

「うん。見聞色を乱した隙を見て心の声聞いたことあるけど、別に父さんたちの子つてバレたわけでも、見聞色のことバレたわけでもないみたい。オレがフワフワの実の能力者かと思つたみたい」

「なるほど、シキが死んだのか確認したかったのか。おまえも飛べるからな。遭難中、ハチに助けてもらおう前にシキに会つたな」

「えっそうなの？ 大丈夫だった？ 昔戦つてたんでしょ？」

ロジャーと手を組んで古代兵器を使って海を支配したい。金獅子と自由を愛するロジャーとは思想が対立し、何度も殺し合った仲らしい。

「ああ、少し世間話をしただけだ。姿を消して何か企んでるようだな。それよりガープに鍛えられてるってシャツキーに聞いたが、本当か？」

「うん、月に数回修行つけてもらってる」

「そうか、本当だったか…(おのれガープ！ 手配さえされていなければ、私自ら鍛えているというのに。よりにもよって私の息子があいつに……。最初にロゼに接近した時に止めに行けば、だがそれでは私がいることも息子だということもバレて逃亡生活をさせる羽目になる……もう少し早く気づいていればっ、ギャンブルに気を取られすぎた。結局また負けたし……)」

「ガープさんがどうかした？」

「いや、なんでもない。あまり気を許しすぎないようにな(それにして

もあのガープを気絶させるとは……やはり天才か。流石は私の息子だ。シキめ、まだ話し終えていないというのに途中で去りおつて」
「うん、大丈夫。絶対父さんも母さんも捕まえさせない。まさか元海賊の子があんな堂々と海軍本部に来てるとは誰も思わないでしょ」
「……まあ、そうだな（なぜか私がシャボンディにいることもバレてないしな。シャッキーにシャボンディに潜伏してはどうかと言われた時は、流石にバレるだろうと思ったが、案外バレないものだ）」
「今日は家に帰らないの？」

「ああ、明日までにコーティングする予定の船が3隻あるからな」

「……それ遊んでて大丈夫だったの？」

「はっはっはっ。なあに、あの程度今日寝る前には終わる。気を付けてな、3人とも（久しぶりに息子と過ごして元気が出た。今日はいい夢が見られそうだ）」

「うん、体に気を付けてねー」

「ニユー、またなレイさん」

「今日は楽しかったでゲソ！ またね〜」

3人で家に向かう。次は母さんにメイプルを紹介しよう。

父さん大丈夫かな？無理して徹夜とかしてなきやいいけど。

“誓いの握手”

父さんと別れ、家に戻る。家の前に逆さまになって首から上だけ埋まった人たちがいた。ああ……ぼったくられたな。つまり海賊か。「ゲ、ゲソ」。ホントにぼったくりバーって書いてる……この埋まつてる人はオブリジェか何か？」

「こんな悪趣味なの置かないよ。たぶん代金踏み倒そうとして母さんにボコボコにされて、法外な値段ぼったくられた拳句埋められたんでしょ。よくあるよくある」

「私、こんなの初めて見たでゲソ。これが人間の常識……」

「いやこの店だけの常識だ。シャツキー、ただいま」

「あら、おかえり。そっちの子がメイプルちゃん？」

店に入ると母さんがテーブルと自分の拳を布巾で拭いていた。返り血だな。

そして母さんもメイプルのこともう聞いてたのか。

「はじめまして、メイプル・リードでゲソ。お金はあんまり持ってないから、できればぼったくらしないで欲しいでゲソ……」

「はっちゃんの妹分からぼったくったりしないわよ。ロゼとも仲良くなったのね」

「うん、友達。そういえばここなら大丈夫か、腕見せて？」

「ほっ……腕を見たイカ？ いいでゲソよ」

そう言うと、メイプルの肩のあたりから透明にしていた6本の腕が見えてきた。

「おお、はっちゃんより腕多い。いつもどの手で握手してるの？」

「えっ、一番下の右手でゲソが、そんなことが気になるでゲソか？」

「一番下の右手ね、じゃあ握手しよ」

手袋を外しメイプルの手を握る。うん、はっちゃんもそうだったけど、普通の手だな。

「これからいつでも遊びに来てね。待ってるよ」

「ニュー、オレの時もやったな、それ」

「手袋取った握手ってことは、この子のこと気に入ったの？（まだ婿に

「はあげないわよ?」

「うん、いい人だよ」

「どういうことでゲソか?」

メイプルが話についてこれず、置いてけぼりになっている。まあ、普通ならただ手袋外して握手しただけだからな。

「オレ、生まれつき触ったものの過去が見れるんだ。今は触っても過去を見ないようにできるけど、つい魔がさして見ないように、普段は手袋してる」

「たしかオトヒメ様は人の心の声を聞けるって、聞いたことあるでゲソな。それと同じ?」

「まあ、同じだね。オレも心の声聞けるし。普段はうるさいし聞こえないようにしてる。まあ身を守るためには使うけど」

海兵の心の声は結構聞いている。オレと両親の身の安全的に死活問題だから。今の所、誰の隠し子なんだ? みたいなことしか考えられてない。ガープさんは口に出す声と心の声、たいして変わらないからあんま聞く意味ないけど。たまに黙って今日の飯のこととか考えてるくらい。もう聞かなくていいな。

「凄いいじゃないか! なんて普段から使わなイカ?」

「自分の過去は普段から結構見てるよ? 思い出すのに便利だから。でも人に勝手に自分の過去見られるの、普通嫌でしょ? 誰にでも知られたくないことあるし。でもオレは強引に知ることができるから、勝手に使わないようにしてるんだ」

「なるほどなく。はっ、今の握手で私が今まで毒食らわせちゃった人数がばれたでゲソか!」

いや、ばれてない。いったいどれだけ毒食らわせただ?

「今の握手は過去を見るためにしたんじゃないよ。これは、オレがメイプルに隠し事しないっていう誓いみたいなもの。オレにとつて素手で触れることは相手の隠し事を暴くことと同じ。だから代わりにオレは隠し事をしない、一方的に知るのは不公平だから。はっちゃんやウイリーさんともしたんだ。秘密を共有することでもっと仲良くなれるんだ」

本に書いてた。海軍の人たちとはまだ1人もしてない。海軍にとつて放置できない秘密がオレにはあるから。両親のこともそうだし、過去見る見聞色も知られるとまずい。

父さんと母さんも過去を見れるけど少し前しか見れない。そもそも手で触れず目で見てるそうさ。だがオレは触れると人なら生まれた時からのすべての人生が脳裏に浮かぶ。一応相手が見聞色を一定以上使えるならガードされることもある。生まれてすぐ父さんたちに触れた時は父さんが気付いてガードした。もう少しで世界の秘密知るところだった、危ねえ。父さんありがとう。今は制御できてるので普通に両親と触れ合える。頑張った甲斐あった。

特にヤバイのは過去を見る対象が物の場合だ。たぶん存在してたなら数百年単位で遡って過去を見れる。例えば歴史の本文ポーンゲリフ。試したことなんてないが、触っても文字を解読することはできないだろう。オレは動物の心の声を聞くことはできるが犬ならワン、猫ならニャーとしか聞こえない。まったくの無意味、物の声も同様に聞こえはするが意味不明の言語に聞こえる。うるさいだけだ。

だが歴史の本文を解読して前で声に出して読んでる人が1人でも過去に存在したならば、間接的に知ってしまう。近寄らないようにしよう。

「つまり私ともっと仲良くなりたいたいということでは良イカ？」

「うん、そういうこと。オレ色々面倒な事情抱えてるけど、よければこれからもよろしくお願いします」

「こちらこそよろしくでゲソ！ 今日ありがとうでゲソ！」

そう言つてメイプルはオレに8本の腕で抱きついて来て、オレの口にキスをした。

少ししよっぱい。体に電流が走つたようなしびれが走り動悸が激しくなる。体が震え、顔が少し熱いような気もする。まさか……これが恋？

「お、おい。ロゼが痙攣してるぞ。顔色も。まさかお前……」

「あつ、感情が高ぶって毒シミ吐いちやつたでゲソ」

毒食らつてた。まあ解毒薬あるらしいし、死なないでしょ。

恋じやなかったか。

「アハハハ……私の前で息子の唇奪って毒盛るなんていい度胸してるわねえ、このイカちゃん（あの顔色はマズイかもしれない……私がついていながらっ）」

母さんがメイプルの頭をガシツと掴んで片手で持ち上げて、メイプルに吸盤の付いた8本の腕で抱き着かれてるオレごと。ちよつとキレてるかもしれない。怒つたところ見たことないからわからないけど。

今もオレからは母さんの顔は見えないが、メイプルからは見えてるらしく、ガタガタ震えてるのが振動で伝わってくる。美人が怒ると怖いつていうからな。母さんだとそれはそれは怖いだろう。

「わ、悪気はなかったでゲソ！ だからぼつたくらくないで欲しいでゲソ！」

「ぼつたくらくないわよ。ちよつとお話し（物理）するだけよ？（どの拷問がいいかしら？ ロゼが生まれてから全部処分しちゃつたけど……もうこの娘どうなつてもいいわよね？）」

「やつぱまだ会うのは早かったか。安らかに眠れ、メイプル（いい薬になるだろ。もう何人目だよ、毒食らわすの）」

「ゲソ!? 私、海に還つちやうでゲソか!？」

へほくはふあるはらはやふひょうらい
「解毒薬あるなら早くちやうだい」

「ああ、解毒薬だな。あつシャツキー、こいつの毒、命に別状はないから」

死ぬような毒ではなかったか。でもオレの体が小さいとはいえ、この速度で体がしびれるイカスミを使って攻撃されるのはかなり厄介だな。毒の効果時間によれば餓死とかするかもしれないし、生かすも殺すもメイプル次第。八つ裂きとか言うだけのことはある。

舌もしびれてるみたいでうまくしゃべれない。オレの声を聞いて、はっちゃんメイプルのシヨルダーバッグから解毒薬を出して、オレをメイプルから引きはがし水と一緒に解毒薬を飲ませてくれる。

そしてオレが解毒薬を飲んだのを見届けてから、母さんはメイプルをカウンターの奥に連れてった。まあ母さん優しいし、ちよつと叱られるだけでしょ。

「ありがと、はっちゃん」

「いや、うちのバカがすまねえ」

「死ななきや安いよ。」

ほのふひほのほくもほふふくふるほ
「そのうちこの毒も克服するよ。」

「父さんやガーブさんなら、毒とか効かなそうだし」

「……すまん、なんて言っただけなのか全然わかんねえ。30分くらい横になつてろ」

そう言っただけでオレをソファに運んでくれた……なんか手慣れた感じがする。ホントはたまにじゃなくて、しょつちゅうお菓子に毒混入してるんじゃない……マスクして手袋したら大丈夫だと思っただけだ。

30分後、体から毒が消えて自由を取り戻したので、はっちゃんとカウンターの奥に入ると、頭にたんこぶができたメイプルが正座させられ、足の上に漬物石が乗せられていた。口元から吐血のようにイカスミが垂れてる。「私はイカんことしました」と書いた板が紐で吊るして首にかけられてる。

あれはたしかワノ国に伝わるという石抱いしだきという拷問。三角の木材の上に座らせて、石の重みで脛に木材の尖った部分が食い込み苦痛を味わわせるのが本来のスタイルだが、それをしていないのは慈悲なのだろうか？

「オレの毒も解けたし、もう許してあげて？」

「体はもう大丈夫なの？ 顔、すごい色になってたけど（今ある材料じゃこれが限界だったわ。死ぬような毒だったらもつとしてたけど）」

「いったいどんな色になってたんだ？」

「もう大丈夫だよ。メイプルも大丈夫、これ？」

「今ほどイカの体が恨めしいと思ったことないでゲソ……。足に骨がないから重さで潰れるかと思っただけ」

どうやら十分拷問足りえたようだ。あと足に骨ないんだ、やつぱイカの人魚だから？ はっちゃんも手足に骨、ないもんな。だからうねうね動き、人間にはできない変幻自在の6刀流剣術が可能になる。頭蓋骨はあるらしいが。

……ふむ、骨をゴムに変えることができるようになれば、オレも関節技効かなくなる？

というか合体ロボみたいに体を各部位で分離して飛ばせば、関節技など無意味に……父さんの元部下のバラバラ人間がそんなことやつてたつて聞いたし、不可能ではないな。

「やりすぎじゃない？ 死んだわけでもなし」

首の板をとつて足の上の漬物石をどけながら母さんに聞く。

母さんが答える前にメイプルが涙目で抱きついてきた。よほど怖かったんだな。でもまだ口からイカスミ垂れてるよ？ 危ないなあ。

「殺されるかと思ったでゲソ……すごい迫力だったでゲソ」

「母さんは優しいからヤンチャしてた時（海賊時代ならともかく今は）殺されないよ。あと口元のイカスミ拭こうね？」

「（ロゼの奴、メイプルの8本腕の怪力で抱きつかれてよく平気だな。一度抱きつかれたら、吸盤も相まって全然離れないから魚人街じゃ皆躲すし、シャーリーは躲さないけど気絶するのに）」

ポケットからハンカチ出して口を拭う。これでひとまず大丈夫か？

「あんたの顔、虹色に変色してたわよ？ あれは死んだかと思ったわ（もう平気みたいだね……本当によかったわ）」

「なにそれこわい」

メイプルの頭を撫でながら恐怖する、それはビビるな。今日見たメイプルの肌の変色は白、黒、肌色だったからそこまで驚かなかったが、虹色は気味が悪い。体に悪そう、毒だもんな。

「魚人島よりも深く反省したので、もう許してくれないか？」

「最初から怒ってないわよ。危ないから説教（拷問）しただけで」

「だつてき。よかったね、メイプル」

怒ってなかつたか。母さんっていつもニコニコ笑顔を絶やさない

けど、何されたら怒るんだろ？ 海賊ボコってる時も笑顔だし。

「（絶対怒ってたでゲソ、さっきのシャツキー、海王類がブチ切れた時と同じ目をしてたでゲソ）」

「どうかした、メイプルちゃん？（ニコニコ）」

「な、何でもないでゲソ！」

メイプルまだ震えてるけど、足がしびれたのかな？ 正座した上に漬物石乗せれば足がしびれもするだろう。そんなメイプルを心配してか母さんがニコニコ声をかけてくる。まあしびれ位そのうち治るでしょ。

「うう、また毒スミ出ちゃったでゲソ。これじゃパティシエになれないでゲソ……」

「よしよし。そんなに毒入りお菓子よく作っちゃうの？」

「うん、お菓子作ってる時にテンション上がって、気づいたら毒スミ吐いててお菓子に入っちゃってるでゲソ……」

自分の毒は自分に効かないだろうし、味見してもわからないだろうな。ちよつとしょっぱいくらいだろう。色も作るお菓子によつてはわからないだろうし。

もしかしたら道場で剣術を習ってるのは、護身のため以外に精神鍛錬も兼ねてるのかもしれない。感情が高ぶるとスミを吐いてしまうなら、感情を制御できるようなになればいい。がんばってるんだなあ。

「大丈夫、オレも協力するから。一緒に毒入れない方法考えよ？」

「恩に着るでゲソ……」

「（あれ？どつちが年上だったっけ？）」

「（大人ぶって慰めてるうちの子、かわいいわあ）」

「マスクとか手袋とか、してないの？」

「……その発想はなかったでゲソ！」

「おい」

ボルサリーノさんもびっくりの速さで解決した。

うすうす察していたけど、この子、あまり頭を使うのが得意なタイプじゃないな？

バカな子ほどかわいいという言葉がある。これがバカかわいいと

いうやつか。なるほど、愛おしい。ずっと頭撫でてたい。妹いたらこんな感じかな？

オレはよく母さんに頭良いと言われるのであんまりかわいくないだろう。

どう考えても生まれつき周りの心の声が聞こえる子供なんて育てにくいよなあ。赤ん坊の頃よく泣いてたし。やはり早く大人になって独り立ちせねば。

「ふふん、これで私の唯一の弱点が克服出来るでゲソ。ありがとうでゲソ！」

「うん、よかったね。よければ今度オレにも食べさせてよ。メイプルの作ったお菓子食べてみたい」

「任せるでゲソ！ とびつきりのを作るでゲソ」

「大丈夫なの？ また毒食らっちゃうかもよ？（アナフィラキシーショックとか大丈夫かしら？）」

「平気平気。もし食らっても解毒薬あるし、そのうち毒も克服するから」

「そう？ がんばって（この子、頭の出来はいいけど、発想がエキセントリックね。毒は避けるもので克服するようなものじゃないでしょ。この子は紙一重のバカか天才か、どっちかしら？）」

「毒克服するってんな無茶な。今まで何人も食らった奴いるけど、平気になった奴なんかいねえぞ？」

はっちゃんの言うことはもつともだ。普通は無理。だがガープさんは出来るし、聞いてないけど父さんも出来るに違いない。『冥王』だし、毒なんて平気でしょ。

オレも普通じゃなくなればいい。生命帰還を習得するのが理想だが、今はまだ出来ない。

だが、毒とは生物の生命活動に不都合を起こす物質の総称。なら人間を、生物をやめればいい。

「ふははっ、オレの悪魔の実の能力で、全身を機械化して生物でなくなれば、毒も効かないはず！」

「なん……だと……？」

「(そこに気づくとは……やはり天才ね)」

「試してみるでゲソか？(なんか悪そうな笑い方でゲソな)」

「お願い」

メイプルが聞いて来たので全身を機械化してからお願いする。すると口移しで毒を流し込んでくる。

……なぜ口移しなのか？ 別にコップにでも入れてくれれば飲むのに。たぶんその発想はなかったんだろうなあ。あとで言い聞かせよう、危なっかしい。

世の中にはロリコンとかシヨタコンとか危険な輩が多いと聞く。オレも母さんに注意するよう言われてるし、メイプルにも気を付けさせないと、かわいいし。

「どうでゲソか？」

「うん、今の所さつきみたいに体に影響はないよ」

「まさかほんとに克服するとは……」

「だけど2つほど欠点があったみたい」

「何でゲソか？」

「これじゃ、お菓子食べても味がわからない。味覚がなくなった」

さつきイカスミ飲んだ時はしょっぱかったけど、今度は味がしなかった。どうやら全身機械化すると味覚がなくなるらしい。

まあ機械って普通食事しないもんな。味なんてわからなくて当たり前か。

でも痛覚はある。戦闘中だけでも消せないかな？

待てよ？ 機械になったら呼吸する必要ないんじゃない？

機械化して水につけても体が普通の人間に戻らないのはお風呂で確認済み。だったら全身機械化すれば海に突き落とされても、とりあえず溺死することはないのでは？ 体の力は抜けて沈むけど、誰かに引き上げてもらえばいい。

「それでも毒が効かないのはすごいじゃないか！」

「そこで、もう1つの欠点が出てくる」

「ニユ？ 一体何なんだ？」

「これ、今は効いてこそいないけど、体に毒は入ってる状態なわけだ。

じやあ、機械化を解いたら結局毒でやられるんじゃないかな？ 機械
になつてるから、毒は体内に残り続けるし」

「ああ、なるほど。じやあこれほぼ意味ないな」

「(やっぱりバカの方かもしれないわ。ガープの影響かしら？ 余計
なことを……)」

「メイプル、解毒薬出しといてー」

「わかったでゲソ〜。…今回は頼まれてやったことだから、説教(物
理)はないでゲソよね？」

「ええ、ロゼが自分で毒が欲しいって言ったんだもの。それで怒るの
は理不尽でしょ」

「ほっ。そうでゲソよね、よかったでゲソ。あっロゼ、解毒薬でゲソ」
「ありがとう」

「でも毒を口移しで欲しいなんて、一言も言っていないわよね？(まさか
2度もするなんて……さっきのじゃ足りなかったのかしら?)」

「ゲ、ゲソ？ でも他にどうすれば……！(シャツキーの目が、目があ
！)」

「コップにでもスミ入れて渡せばいいだけじゃない(あれ以上やると
ロゼが反対するかもしれないし、どうしようかしら?)」

「その発想はなかったでゲソ」
やはりそれか。母さんたちの話を聞きながら、解毒薬を水と一緒に
飲む。せつかくだし他にも試すか。

機械化を解くとまた体にしびれが走る。やっぱ戻ったら毒は効く
か。ならば今機械化したまま飲んで解毒薬も効いてくるはずだ。

次はまた機械化してみよう……普通に動けるな。だったら麻痺毒
食らった時に戦う術が手に入ったから、あながち無意味でもないか。
海の弱点も克服できるかもしれないし。

次は機械化したまま30分経ったら、ちゃんと解毒薬が効いて体が
治るか試そう。

「母さんの言う通りだよ、メイプル？女の子が簡単にキスしちゃいけ
ません」

「ゲ、ゲソ!? まさかの裏切りでゲソ!(あつ、でもシャツキーの目が元に戻ったでゲソ。許されたでゲソか?)」

「(そうそう。ロゼが婿に行くのはまだまだ早いわ。30歳くらいまで家にいれればいいんじゃないかしら?)」

「裏切つてないよ。男女7歳にして席を同じうせずって言葉があつて、7歳すぎたら気安く家族じゃない異性とくつついちゃダメなんだよ?」

「そんな言葉があるでゲソか。でも私はただロゼと仲良くしたいだけでゲソよ?」

「仲良くするにも節度というものがあります」

「(私の教育の賜物ね)」

「でも、たしかに私は9歳だけどロゼは4歳、問題ないんじゃないか?」

「その言には一理あります。でもメイプル、たぶん他の人にもあんな感じでしょ?」

「あはは、他の男の人にしたことなんてないでゲソよ(抱きつこうとするど何故か躲されるでゲソ。躲さないのシャーリーくらい? ゲソぬ)」

「ん? そうなの?」

「(あら? 話の雲行きが怪しくなってきたわね...)」

「思ったよりはしつかりしてた? そういえば年上だったね、完全に忘れてたよ。妹ってこんな感じかな? とか思ってた。」

「それでゲソ。キスしたのも感謝の気持ちを伝えたかっただけで、するの初めでゲソ」

「そっか、ならいいや」

「じゃあこれからは好きに抱きついてもいいでゲソか?」

「いいよ。でもキスはダメ」

「(押しに弱いわ、この子...:相手が海賊だったら聞く耳持たないのに。悪い女に騙されないといいけど...:メイプルちゃんは...:騙すという発想がないわね、たぶん)」

「父さんに聞いたけど、ミンク族にはガルチューっていうお互いの頬

をすりあわせる挨拶や、ミンクシップという気に入った相手をなめたり甘噛みしたりするスキンシップがあるらしいし、似たようなものか。キスはともかく抱きつくくらいなら普通でしょ。友達だし。

「そろそろお腹すいた。母さん、今日の晩御飯なあに？」

「ポトフだけど、あんた毒大丈夫なの？」

「あつ、忘れてた……まだ無理だね」

一度機械化を解いて、再び機械化してからそう言う。

ふむ、全身機械化している間は解毒薬が効かない、と。なら機械化を解かない限り毒を食らっても体に回らず死なないか？ ……これ、もし毒が即死性のものだったらどうなるんだろ？ 機械化解いた瞬間死ぬのか？

機械化して海に沈んでも平気かどうかは今日お風呂で試すか。

痛覚はどうしょ？ 体の危険信号だから必要なのは理解するけど、戦闘中は邪魔。痛みで武装色解けちゃうし。見聞色はオレの場合、心の声を聞いているのがデフォだから全開になるだけで済むんだけど、それもできれば嫌だし。センゴクさんたちが言ってた、訳アリで海賊になった奴が相手なら、心の声を聞いて同情してしまうかもしれない。やはり能力覚醒しないと。覚醒さえすれば痛覚消せるかもしれない。まだまだ人間をやめ足りないか……。

オレの周りの人普通じゃない人ばかりだし、人間やめた方が仲良く出来そうなんだけどな。

「はっちゃんたちも食べてかない？」

「食べるでゲソ！」

「いいのか、シャツキー？」

「元々多めに作ってたから。うちの人は来なかったみたいだけど、代わりにメイプルちゃんが来てちようどいい量ね（念のため、この娘がただのドジツ子カロゼを狙う悪女か見極めなくちゃ……）」

「じゃあ、ごちそうになるな」

元々オレと母さんにはっちゃん、来れなかつたけど父さんの分と合計4人分作ってたのか。準備良いなあ。

しばらくたつて、オレの体の毒が抜けると晩御飯にした。談笑しながら4人で食べる。

どうすれば父さんも毎日一緒にいられるのか？ 世界政府を潰せば……海賊が喜ぶだけだな。ないわー。上手く共倒れにならないかな？ ……無理だろうな、直接戦うのは海軍だし。そもそも天上金払ってた加盟国がかわいそう。

海軍だけ存続で天竜人クビにして、加盟国が世界会議で海軍動かせばいいじゃん。天竜人もういらないでしょ。何故だえだえアマスアマス言いながら奴隷買ったりして無駄遣いする輩でワンクツション置くのか？ 解せぬ。

まあそうなつても父さんの懸賞金、消えないだろうなあ。

「ごちそうさま。今日もおいしかった。特にジャガイモ」

「はい、お粗末さま（大丈夫そうな子だったわ。今の所は）」

「ごちそうさまでゲソ（今日は何人海賊潰したとか、いくらぼったくつたとか、物騒な家族の団欒でゲソ……よく考えたら魚人街もこんなかんじでゲソな。アーロンさんとか。よくあるよくある）」

「うまかったぞ。じゃあそろそろ帰るか、メイプル」

「あつ、はいでゲソ」

はっちゃんたちが帰るので、外に出て見送る。

「そういえばイカの人魚ってどうやって泳ぐの、平泳ぎ？」

「首の後ろの漏斗から水を噴射して泳ぐでゲソ」

「なにそれ凄い」

家の前の海で手足を一切使わずメイプルが泳いでる、かなり速い。

オレが足から風噴射して飛ぶのと似たようなものか。オレも首の後ろから風噴射しようかな？ 足が自由になって蹴りやすくなる。サンダル脱ぐ必要なくなるし。

「2人とも、またねー」

「またな」

「また来るでゲソー（攫われた時は、ついにシャーリーの予言が外れたかと思つたでゲソが、いいことあつたでゲソな）」

別れを告げて家に入る。今度はいつ会えるかな？

「ロゼ、今日は一緒にお風呂入ろつか（最近一緒に入ってないし）」
「え？なんで？」

オレは3歳から1人でお風呂入ってる。悪魔の実を食べてすぐの頃は、お風呂で溺れないようにまだ一緒に入ってた。今は、まず湯を少しためてオレが半身浴でつかって、オレが出たら母さんが湯を足して入ってる。オレが考えた。

能力者は水に浸かると力が抜けるから、シャワーで済ます人が多いらしいけど、それじゃ水に弱いままだし。毎日湯につかって水中でも体動かす練習してる。成果はいまいちだけど。

「今日、あんた2回も毒飲んだでしょ？体が心配だから一緒に入るわ（息子の自立スピードが速すぎてさびしい。もっと甘えていいのに……）」

「そつか。じゃあ一緒に入る」

「ええ、それじゃお風呂ためてくるわね（こっちから誘えば全然断らないのよね。私やレイリーの教えでこの子が守らないことなんて「自分の身が危なくなったら迷わずぶち殺せ」って教え位だし）」

また心配かけてしまった……むう、早く誰が相手でも、何をされても死なないくらい強くならないと。オレが弱いから、心配だから、危なくなったら相手を殺すように言ってくるんだ。相手より圧倒的に強くなれば、殺さなくても自分の身を守る。

お風呂がたまって母さんと一緒に入った。いつものように水中で体を動かす練習や全身機械化して潜って平気なのかを試そうとしていたが、湯船の中では「溺れちゃ危ないから」と、ずっと母さんに抱きかかえられていた。

オレのしようとしていた実験のことなんてお見通しだったようだ。心の声は消してるはずなのになあ。敵わないや。

一夜明けて、次の日。

「あつロゼ、昨日ぶりでゲソ！」

いつものように海軍基地で賞金貰って、おやつタイムに家に帰るとメイプルが来ていた。次の日にもう来るとは思ってたなかった、その発想はなかったよ。昨日、人攫いに攫われたばつかなのに、全然気にしてないようだ。

まあそんなこと気にしてたら、シャボンディじゃ生活できないか。魚人島も似たようなものなんだろう。

流石に昨日の今日。警戒して帯刀はしているようだ。左右の腰のホルスターみたいな物に合計8本のサーベルを差している。

サーベルには刺突用の直刀と斬撃用の曲刀、そしてどちらも兼ねる半曲刀の3種類ある。海軍でも使っている人がいる。

オニグモさんとか。あの人も8刀流だな、両手と長く伸ばした髪の毛で合計8本のサーベルを操る。兜かぶっていつもタバコふかしている、シブカツコいい。能力者なのか、生命帰還で髪を操ってるだけなのか？ 聞いても笑いなながら「海軍に入ったら教えてやるよ」とはぐらかされた。ケチ、オレの能力は教えたのに。8刀流の間ではサーベルが流行ってるのか？ この2人しか8刀流なんて会ったことないけど。

メイプルは直刀と曲刀を2本ずつに半曲刀を4本腰に差してる。使い分けるためだろう。

「いらっしやい」

「昨日のお礼にキッチン借りてお菓子作ったでゲソ。食べないか？」

「あつ、食べる食べる」

どうやらクッキーを焼いてくれたようだ。

食べてみたが、なるほどおいしい。皆にも喜ばれるだろう。手が8本あるから、他人の4倍のペースでお菓子を作れる。結構パティシエに向いてるかもしれない。

抱きついてきているメイプルの頭を撫でながらそう言う。

「ふふん、また作るでゲソよ？ 美味しいお菓子作る練習になるでゲソし」

「そう？ だったらお願い。あらかじめ言ってくれたら、材料はオレが買って来るよ」

貰うばっかじゃ悪いから、オレも何か作れるようになるか。どの道旅に出たら、コックを仲間に勧誘するまでは自分で作らなきゃいけないし。とりあえず母さんに言って、好物のフルーツタルトを教えちゃおう。あれはおいしい。

☆☆☆☆

もう何度目かのメイプルの訪問。

メイプルも家のキッチンになれたようで、生き生きしている。水を得たイカのようなようだ。

「出来たでゲソよー」

「ありがとう」

今日はアツプルパイみたい。いつも通りおいしそう。

一口食べるとなつかしい感触がする。これは……

「まはほふはひはひふりはへまた毒か、久しぶりだね」

「ゲ、ゲソ!? そんなバカな……なぜ?」

初めて会った日以来の毒だ。とりあえず機械化しよう。

作っているときはマスクも手袋もしてたが今はしていない。つまり

「運んでる時に入ったか。たぶんオレに出来たって教えた時に」

「あ、あの一瞬でゲソか? これはどうすれば……とりあえず薬でゲソ」

「ありがとう」

あの一瞬で毒を吐くとは……。作り終えて、オレに声をかける時に気が緩んだか? 一つのこと集中しすぎて周りが疎かになるタイプか。オレにも覚えがある。

解毒薬と水をもらう。未だ毒を克服できずか。

「とりあえず運ぶ時もマスクと手袋着用で、あとはもう精神を鍛えるか、そう簡単にイカスミ吐かないよう練習するしかないんじゃないかな? はっちゃん自由に出せるみたいだし、教えてもらえば?」

「それしかないでゲソか……先は長いでゲソ……」

「オレもいくらでも付き合うし、じきに出来るようになるよ」
「恩に着るでゲソ」

また機械化を解いて体の状態を確認する。少々しびれるがこれならまだ食べられそうかな？

「もつたいないし、全部食べてから薬飲むよ」

「それ、私が食べさせてあげよつか？体しびれて食べにくいでしょ？

(ご飯食べさせてあげるなんて3年ぶり位かしら?)」

「私が作ったお菓子でこうなったから、私が食べさせるでゲソ」
なるほど、一理ある。母さんの手を煩わせるのは悪いし……

「そっか。じゃあメイプルお願い」

「……そう(ちっ……まあメイプルちゃんが来てから、私と料理する時間が増えたし、このくらいならまあ。いや、でも……)」

「(何やら寒気が……?)」
「じゃ、じゃあ、あーんでゲソ」

「あーん」

機械化を解き、口を開けてアップルパイを入れてもらう。

これは美味しい。機械化して感想言わないと！

「甘さ控えめのクリームにしっとりやわらかいパイ生地、シャキシャキ食感のりんごの甘さと酸味が合わさってとってもでりしやす！
ぱーふえくとだよメイプル！」

「ゲ、ゲソ!? かつてないほどのべた褒めじゃないカ！」

「あんた本当に野菜とか果物好きね(この子が初めて焼肉食べた時はヤバかったわね。「う、牛さんが!!」って泣きながら抱きついてきて。かわいすぎて意識もってかれるかと思つたわ……なんとか写真撮ったけど。もしかしてあれ、この子の霸王色かしら?)」

「おかわり下さい。あーん」

機械化解いて口を開ける。もつと食べたい。

「野菜と果物が好きだったでゲソか。だから農園作るって言ってたんでゲソねー。全部食べるがいいでゲソ」

「うまうま」

「(ヤバイかわいい……最近キリツとしてきた顔がすっごく緩んでる。

写真撮らなきや)」

母さんがパシヤパシヤ写真撮ってる。オレが褒めたからアップルパイ作る参考にするのかな？ 楽しみだ。

メイプルに食べさせてもらって完食した。

「ごちそうさま。また欲しいです」

「毒入ってた時はどうしようって思ったけど、気に入ってもらったよ
うでよかったでゲソ。今度から野菜や果物のお菓子作った方が良イ
カ？」

「ぜひに！ ……そーいや毒食らってたね、忘れてた」

「忘れちゃだめでしょ（またアルバム買い足さなきや）」

機械化して解毒薬と水を飲む。たとえ毒入りだとしてもまた食べ
たい一品だった。

『戦災孤児』

ひさしぶりにベルメールさんが東の海から帰ってきた。イーストブルー

なんでもオイコツト王国は凄まじい戦場だったようで、生き残った海兵はベルメールさん1人だけだったらしい。なくなつた海兵の方々のご冥福をお祈りします。遺族の方々はなくなつた家族の分まで生きてください。

こういつては不謹慎かもしれないが、ベルメールさんだけでも生き残つてくれて本当に良かった。

そして現在海軍本部、

「はじめまして！ノジコつて言います。今2歳です。こっちは妹のナミ。よろしくね」

「みる、にゃあ！（！ねくしろよ、みなはしたわ）」

「うん。オレはロゼ、4歳。よろしく、ノジコちゃん、ナミちゃん」

オレはベルメールさんと、そしてベルメールさんが連れてきた姉妹と対面していた。

青い髪の女の子に、ベルメールさんが抱きかかえたオレンジ髪のみだ生まれて1年未満といった赤ちゃんだ。ベルメールさんに子供がいるといった話は、今まで聞いたことがない。つまり……

「……ベルメールさん。オレに『結局誰の隠し子なの？お姉さん誰にも言わないからこっさり教えてみ？』とか言つてたのに、自分に隠し子いたの？それも2人も……」

「ちよつと待つて！ たしかにこの子たち私の娘だけど、隠し子つてわけじゃないから！」

「……つまり連れ子？ ご結婚おめでとうございます！ お相手は誰？ オレの知つてる海兵さん？ 結婚祝いご祝儀袋に入れて持つてこなきや。もう、そういうおめでたいことはもつと早く教えてよ」

「違う！ 隠し子よりは近いけどそうじゃない。てゆうかよく知つてゐるね？ 4歳がそんな言葉。そして4歳児がご祝儀用意する必要はない！」

昔オレの見聞色で聞こえてきたからね。年の割に豊富な語彙はだいたい見聞色で覚えた。

まあ、最近は悪魔の実際の能力のレパートリー増やすために機械や科学の本読んだり、現在発見されている植物図鑑に動物図鑑、料理のレシピ本に航海術の本に農業・医療関係の本、政府で毎年発行・更新されている賞金首の顔写真と懸賞金、犯罪歴が載った手配書集ビンゴブックといった具合に、手に入れたお金で旅に出るのに必要な知識の本をたくさん買って読んでるから自然と語彙は増える。

来たるべき旅立ちの日に備えている。

夜寝る前に本読んだり、その日に捕まえた賞金首の写真に○、世界経済新聞で捕まったり死んだと報道された賞金首の写真には×を付けるのが日課。スタンプラリーみたいでなかなか楽しい。

「よく本読むからね。それで、連れ子でもないならこの子たちはどうしたの?」

「あー、私が行ったオイコット王国のことは聞いてる?」

「うん、すごい戦場だったって。よくぞ生きて戻って来てくれました!」

「いや、敬礼なんてしなくていいから。この子たち、あの国の生き残りなんだ」

「:..そうだったの。大変だったね:..、きみたち」

「ううん? ベルメールさんに助けてもらったし」

「にや? きやわわ? (?..らかいいわかがしたわぱっや ?..ろだんるてれらでなまたあでんな)」

両手で姉妹の頭を撫でながらそう言う。ナミちゃんはよくわかってないようだが、赤ちゃんだからしょうがない。

戦災孤児という奴か。海軍本部でたまに保護される。ビンズとアインもそうだな。

2人ともオレが鍛えてもらってる元海軍本部大将、ゼファーさんに保護されて育てられている。

ゼファーさんは紫髪でガープさんたちに負けず劣らずの筋肉質な肉体。ガープさんたちと同期で海軍に入隊し、六式を使いこなす武装

色の覇気の達人で、覇気を纏い黒く染まった両腕から「黒腕」の異名で呼ばれている。

大将時代は決して海賊を殺さない情け深い海兵だったらしい。逆恨みしたクサレ海賊共に妻子を殺害されたのを機に、大将を辞めて海軍の新兵たちの教官になったそうだ。

やはり海賊は悪、根絶やしに……！ はっ、いかんいかん。ちよつとサカズキさんに体を乗っ取られてた。

以降、部下を死なせたくない思いから新兵を厳しく指導し、サカズキさん、ボルサリーノさん、クザンさんを新兵として卒業させるだけでなく人間としてまで卒業させたすごい人。でもサカズキさんともう少し丸くならなかったの？

あの3人だけでなく、オレの知ってる海兵はだいたいゼファアさんの教え子。目の前にいるベルメールさんやシリリーさんにオニグモさん、センゴクさんが保護したロシナンテさんもそうだ。

ゼファアさんはオレの理想を体現したような、カッコいい大人だ。父さんと母さん？

強いし優しいしカッコいいし美人だけど、オレの信念である『不殺活人』『駆逐外道』とはちよつと違うっていうか……両親として大好き、愛してる。でもそれはそれ、これはこれ。

ビンズとアインに初めて会った時は困ったものだった。というかアインが困った奴だった。

○○○○○

いつものように海軍本部まで修行しに飛んで行くと、何やらゼファアさんに肩車されている、というよりは体によじ登っている、メイプルと同じくらい年の、髪が青い女の子がいた。

何を隠そう、アインである。

何でもゼファアさんの役に立ちたいから、早く海軍に入れてくれと懇願しているらしい。

その心意気は実に天晴れで健気なのだが、現状は役に立つどころか

完全に邪魔してる。

これにはゼファーさんも苦笑い。周りの新兵は、鬼教官のほのぼのした一面に面白がって笑ってる。しかし彼らが笑ってられるのも今の内だけだ。後で思いつきりしごかれることになるだろう。

オレが来たのに気付いたゼファーさんがオレを指さし、

「じゃあ、彼に勝ったら考えておこう。おれの教え子で一番幼い彼に勝てんようでは、海軍には入れられんな」と言った。

うん、嘘は言っていないな。オレは海兵ではないが一応教え子、一番幼いが一番弱いとも言っていない。さらに「勝ったら入っていい」ではなく「勝ったら考えておこう」というのがポイントだ。

たとえば一オレに勝ったとしても、ちゃんと海軍に入っても大丈夫になるまでず〜と考えておくつもりなのだろう。姑息な手を……。

というかゼファーさん？ 勝手にオレを巻き込まないで？

「この子、わたしより小さい……勝ったわ！」って顔してるから。完全に標的にされてる。

軽く自己紹介をする。どうやらメイプルの1歳下の8歳のような。

ゼファーさんに近づいた時耳元で、

「なるべく傷つけないよう、かつ、心に傷も作らない程度に接戦を演じつつ、上手いこと勝ってくれ」と言われた。

ふっはっはっ、無茶なことを言いなさる……そんな方法があるなら、オレだって知りたいよ。

戦うために少し距離を取り、互いに構える。

どう見ても覇気は使えないし、構えは完全に素人。人魚のメイプルと違い普通の人間。力が強いわけでも毒が使えるわけでも、ましてや8本腕でもない。さらにオレ同様丸腰で、武器もない。

だがまだわからない。何か凶悪な悪魔の実の能力者の可能性は十分にあるし、そうは見えないが六式使いの可能性だって、まあなくはない。心の声は、勝つ勝つ勝つと勝つことしか考えてないが、なによりあの自信に満ち溢れた表情、何かあるに違いない。

相手はオレの倍(4歳×2＝8歳)の人生を生きてきた大ベテラン、油断はできない。

ゼファアさんの「はじめっ！」の合図でアインがこっちに駆け寄ってくる。

「えーいー」と叫びながら目を閉じ、両腕をグルグル回して、前傾体勢で突っ込んでくるが、これにはいったい何の意味があるのだろうか？

とりあえず頭に手を置くが、まだ両腕をグルグル回している。アインが目を開き、はっと何かに気づいたような顔をして飛び退き、

「わたしの攻撃を防ぐなんて、なかなかやるじゃない！」と言った。つまり……どういうことだ？

彼女が言うには、オレはいつの間にか攻撃されていたらしい。オレにはじやれて飛びついてきた猫と大して変わらないように見えたのだが……まさか幻術か？

ゼファアさんの方を見ると只々苦笑い。新兵たちは何か愛しいものを見るような慈愛の目でアインを見ている。そしてオレの方を「傷つけたら、わかってるだろうな？」と睨みつけている。

……ああ、なるほど。どうやらオレの目の前にいるこの少女は、オレがいまだかつて戦ったことがないほど、凄まじく弱いらしい。これとどうやって戦えばいいんだ……？皆目見当がつかない。まさか戦いにすらならないとは……。

この子を相手に、なるべく傷つけないよう、かつ、心に傷も作らない程度に接戦を演じつつ、上手いこと勝つ？ 無理でしょ。

デコピンで頭吹っ飛びそう。鞭で首絞めても、体はともかく心は無傷かわからない。そもそも鞭って痛みで心を折るためにも使ってるし。仔猫を口寄せして戦ってもらえばちょうどいいのかな？

オレを睨んでいる新兵たちを一撃も喰らわずボッコボコに叩きのめす方がまだ簡単だ。

ていうかアイツら殴りたい。すごい腹立つ。

……よし、方針は決まった。

ゼファアさんの頼みを聞くのは無理だ。もうさっさと訓練したい。アイツらボコりたい。

だったら逆に考えるんだ、負けちやってもいいさ……と。勝つてもオレにメリツトないし、何故オレが頭を悩ませなければいかんのか？ 傷つけずに勝つのは難しいが、傷つけずに負けるのは簡単だ。流石にわざと負けられて傷つくプライドはないでしょ。そもそも目も開けてないし、バレないバレない。

そこで、なるべく傷つけないよう、かつ、心に傷も作らないよう細心の注意を払いつつ、接戦を演じるのはさっさと諦めて、わざと負けよう。どうせオレが負けるところでゼファーさんはまだこの子を海軍に入れるつもりは毛頭ないだろう。入ったら訓練で死にそうだし。

ゼファーさんにはアインを肩車でもしたまま訓練をつけてもらおうそうしよう。

そうと決まれば、あの攻撃のつもりらしい両腕グルグルパンチ(?)をさっさと食らおう。

「えーいー」と言いながらまた突っ込んでくる。やっぱりこの子目を閉じてる……何故だ？ 躲されたらどうするつもりなのか。壁にぶつかるよ？ 転ぶよ？ 危ないなあ。とりあえずこのままだと腕に当たらずただ体当たりされるだけなので、自分から攻撃(?)に当たりに行く。

そして拳が当たった瞬間、

「グワーツー」と叫んで跳躍。そのまま首の後ろからパイプを伸ばし空気をジェット噴射し、錐揉み回転をしながら適当に壁にヒビが入る程度の速度でぶつかりに行く。

キャバアーン！と、ぶつかった衝撃音があたりに響く。これで終わりだな。

ゼファーさんの「そこまで、勝負あり！」の声が聞こえたので起き上がる。

するとアインが泡吹いて倒れていた。アイエツ!? ナンデ!? 気絶ナンデ!? アインに近づいて、

「おーい、大丈夫？」と声をかけるとアインが目を覚ます。

そしてオレを見て「い、生きててよかった」と泣きながら抱きついてきた。

この程度で人は死なないよ。何でも、自分の秘めたる力が解放されてオレをぶっ殺してしまつたと思つて気絶したらしい。秘めたる力つて覇氣のことか？ まさかあの程度で気絶されるとは……。

サカズキさんたちに会つたら、この子魂抜けちゃうんじゃない？

ゼファーさんはやれやれといった顔で笑い、新兵どもは「こいつ、泣かせやがって……」という顔をして睨んできている。お前らマジで覚えとけよ？ ゼファーさんと一緒に囲んで棒で叩くわ。

泣いたり笑つたり出来なくしてやる。

勝負は両者ノックダウンの引き分けとなつたため、アインの入隊は見送られた。

……うん、まあ、たしかに両者ノックダウンだね。まさか負けようとしたのに引き分けに持ち込まれるとは思わなかつた。勝ちもしなかつたが負けもしなかつたので、アインはこれから訓練を見学できることになつた。上手く落とし所を作つたな……。

そしてお待ちかねの訓練、ゼファーさんと一緒に新兵を叩き直すべくフルボッコにした。

オレはもちろんゼファーさんもイラッと来ていたようで、

「お前ら全員、やり直しだアツ!!」と、いつもよりスパルタ。その気持ち、わかるよ。

そして壁際の椅子に座つて見ていたアインは、ゼファーさんの強い所が見れてにっこり。

オレの実力も見て、「この子と引き分けなんて、わたし、才能があるんじゃない?」と若干調子に乗っていた。まあ、ゼファーさんの訓練についてこられたら自然と強くなれるよ、うん。

対して新兵どもはげっすり。「もう無理。マジ勘弁して下さい」と隅で吐いてる者もいる。

あと1時間、がんばろつか？ たるんでるよ。

1時間後、新兵どもはへとへとになつて1人残らず吐いていた。汚

い。

アインがオレとゼファーさんに近づいて来て、

「やっぱりゼファー先生はすごい！あなたもなかなかやるわね。わたしのライバルなだけあるわ。今度はわたしが勝つわよ？」と、いつの間にもやらライバル認定されていた。誠に遺憾である。

ゼファーさんは吐いてる新兵どもに掃除しておくように告げてから、アインの他にもう1人ビンズという12歳の子を保護していて、会っていかないかと言われたので会うことに。訓練場はしばらく使えない物にならないからな。

アインが意気揚々と「迷子にならないようにちゃんとついて来るのよ？」と前を歩いてる。

アインに聞こえないくらいの声で隣のゼファーさんが、

「アインに力の恐ろしさを教えつつ、勝つでも負けるでもなく、わざと引き分けにすることであの子のやる気を削がずに丸く治めてしまうとはな……。本当に大した奴だよ……。お前は。たるんだ新兵どもを叩き直していたし、ロゼ、お前教官に向いてるんじゃないか？」と言った。アツハイ。盛大に勘違いされた上、過大な評価を受けていた。新兵どもを叩き直したのはともかく、わざと引き分けにしたのって誰だよ？オレはそんなこと一切していない。

オレの双子の兄のシルバーズ・ゼロがやったのかな？（すつとぼけ）見聞色で確認するまでもなく、オレの過去にそんな双子の兄は存在しない。

攻撃してないのにオレが壁にぶつかるだけで気絶するとか、そんなの考慮してないよ……。

曖昧に笑いながらしばらく歩くと目的地に着いたらしい。何やら「イヤーツー」と叫びカラテ・シヤウト声を発しながら手裏剣スリケンを投げて的に当てる練習をしている男の子がいた。ワザマエ！

彼がビンズらしい。その姿はあからさまに忍者ニンジャなのだ。

軽く自己紹介をし何をしているのか聞いてみると、忍法ニンポを使う修行をしているらしい。

『NARUTOスレイヤー』という世界中で爆発的なヒットを記録した絵巻物語で読んだことがある。

忍法ニンポとは、合戦チャメシ・インシデントが日常茶飯事なワノ国で古来より歴史の陰で暗躍している、忍者ニンジャという特殊な諜報集団が使う末法マツボめいた技である。忍者はケジメ案件という鉄の掟で縛られ、もしこの掟を破れば俳句ハイクを詠み切腹セブクし、「オタツシャデー！」と断末魔を上げ、しめやかに爆発四散する。

自身の分身を生み出したり、水のない所で高レベルの水遁を使ったリ、生贄を使い死者を蘇生し術者の意のままに操る穢土転生という二代目火影Ⅱサンの卑劣な禁術を使ったり、カラテという空手とは全く別の未知の体術を使いこなしたりと悪魔の実の能力者のようなことができる。実際強い。

侍ニンジャ、忍者、そしてバイオ技術によって量産された量産型相撲取り。

この三大勢力により世界政府でさえもワノ国には一切手が出せず、稀シメに使者を送つても

「ドーモ、世界政府Ⅱサン。NARUTOデス」と名乗り御辞儀オジギをし、礼儀である挨拶アイサツをした直後、

「イヤァッ！ 死ね！ 世界政府Ⅱサン！ 死ね！」の言葉と共にすぐさま首を切り落とし、築地ツキシめいた死者となった胴体だけが卑劣な穢土転生によって送り返され、聖地マリージョアで爆発四散する。

ワザマエ！ 諸行無常ショウキョウ・ムツジョ！ 因果応報インガオホ！

……この絵巻物語よく発禁されないな。色んな意味で。

世界政府というとC Pサイファーパーが忍者に当たる。

一般的には忍者とは『忍法ニンポを使う者』と世界政府加盟国からは思われていたので、忍法ニンポを使えないC Pサイファーパーは忍者ではないとされている。だが……本当は違うのだ……。

忍者とは本来『耐え忍ぶ者』なので、厳しい修行に耐え長期間の潜入任務をこなすC Pサイファーパーだって立派な忍者である。

こんな格言がある。

「忍者の才能で一番大切なのは持つてる忍法ニンポの数なんかじゃねエ……。大切なのは、あきらめねエど根性だ」

ゼファーさんも言ってたし、古事記にもそう書かれている。よき言葉だ……。

忍法ニンポを習得し、海軍に入りゼファーさんの力になりたいそうだと人揃って何とも健気である。

前にこの話を聞いたガープさんが羨ましそうにしていたので、例の子の説得は上手くいっていないようだ。なかなか頑固だな。

その後、手をドリルに変形したり空を飛んだりして、オレの悪魔の実の能力を見せた。

ビンズには喜んでもらえたが、アインには「なんでさつきそれ使わなかったの？」と言われた。

意外と鋭いことを言う。とても目を閉じて戦っていた子とは思えない。でもドリルで攻撃したらきみ死んじゃうよ？ いいの？ まあ頼まれたって使うと死にそうな相手にはやらないけど。

「壁にぶつかるために」使ったけどアインの攻撃に当たったら（自分の能力で）吹っ飛んだ」と言っておいた。それでアインは満足したらしい。ちよろかわいい。

彼らとは会ったらナルトス（NARUTOスレイヤーの通称）ごっこしたりして遊んでいる。というかアインが会う度に「また会ったわねロゼ！今こそ決着を着ける時！」と言ってくるので「今はまだ（なるべく傷つけないよう、かつ、心に傷も作らない程度に接戦を演じつつ、上手いこと）勝つ自信がないから」と言ってお遊びに誘導してる。生き急ぐな、若き力よ……。

ゼファーさんともそうだけど、この2人とも手袋取った握手はしてない。別に嫌ってるわけでも仲良くなりたくないわけでもないが、海軍に入るつもりなら、教えたならオレとの友情と海軍の正義を天秤にかけて悩みそうだし。海軍にバレちゃまずい秘密以外は教えるようにしている。

傷つけないように配慮はするけど。真実は時に人を傷つけるから……早くオレが全力で戦っても平気なレベルまで強くなってくれ。

☆☆☆☆☆

能力を使い頭脳を電子頭脳化し、思考速度を光速化して刹那に過去を振り返るのを止める。

この技ホント便利、オレの思考時間が速いだけだが、世界が止まってるように見える。

【オレの時間】と名付けよう。

そして時は動き出す。

「つまりベルメールさんが引き取ることにしたのかな？」

「理解が早くて助かる」

「なるほど。2人とも困ったことがあったら何でも言ってみてね？」

あつ、あめちゃんなめる？」

「きやつきやきやつきや！（！うとがりあ）」

「なめる！ あつ、ナミはまだ駄目よ？ 歯が生えてないし」

「ぶくっ！ ぶくっ！（！いしほもしたわ ！ちけ）」

「さつそくなじんでるわね……子供が仲良くなるのは早いわ（ていうか近所のおばちゃん？ ロゼ、海賊とかが絡まなきゃ普通の、どころかすごくいい子だな……海賊が絡んだら鬼だけど）」

ポケットから飴玉を出してノジコちゃんにあげる。ナミちゃんが遺憾の意をブーイングで示している。ご丁寧に親指を立てて下に向けてる。まあ流石に指吸いするため立てた指がたまたまそう見えるだけだろう、かわいいな。この子、言葉が理解できてるの？ 大した赤ちゃんだ……。

試しにナミちゃんの心の声を聞いてみるが……、

「（！うそれくねかお。うそろよちゃんやちいにおのこ）」

うん、何言ってるかわからん。オレの理解力は赤ちゃん以下なのか……まあ言葉がわからなくても、言葉ではなく心で理解すればいい。

「よしよし、ナミちゃん、あめちゃんの代わりにお空飛ぶ?」

「ぶんぶん? ふっ! (?!ねとすちんまろだと?ぶとをらそお)」

ぶんぶんとはおそらく空を飛ぶことだろう。生後数か月でこの言語能力……やはり天才か……。

「そうそう、ぶんぶん。ベルメールさんちよつとナミちゃん抱っこさせて?」

「ん? 見た目より重いけど……あんたなら大丈夫か(いつつもナミよりずっと重い海賊引きずってるし)」

ベルメールさんからナミちゃんを受け取る。なんかミルクっぽい臭いがするな。

「そぐれ、たかいたかぐい」

ナミちゃん抱っこして、速度控えめで空を飛ぶ。空と言っても1メートルくらいの高さだけど。

「ファツ!? ぶんぶくん! きやはは! (?!ー)した! るんでたらそ?!のなやしくよりうののみのまくあ、んやちいにおのこ)」

少し驚いているようだが、どうやらお気に召したようだ。きやははと笑いご満悦である。

「すごーい! なんで空飛べるの? あたしもあたしも」

「のゝにー)。よのなりのりとひんやちいにおのこ、こじのねわいるわ)」

「じゃあ、ノジコちゃんはナミちゃんよろしく。オレがノジコちゃんごと2人を抱えるから」

「やった! ナミ、おいでー」

「にゃあ(。ねわいながうよしあやじ)」

一度降りてノジコちゃんにナミちゃんを預け、ノジコちゃんを抱っこして再び空を飛ぶ。

「わー、はやいはやーい!」

「ひゃー!! (?!いやはとつず、りよーばいえう)」

数分飛び回ったのでそろそろ降りる。喜んでもらえたようで何よりだ。

「ふう……ところでベルメールさん。なんでこの子たち連れてオレを

探してたの？ 友達紹介してくれたの？」

「ああ。それもあるけど、ちよつと話があつてね。」

「ぶんぶん！（！でんたらそおたま）」

「お話終わるまでいい子にしてたらね？」

「ぶー！（ーちけ）」

ベルメールさんが真剣な顔をしている。真面目な話なのだろうか。

抱っこしてるナミちゃんがたかいたかいをこそ望だがちよつと待っててね？ ステイを命じるとブーイングされるけど、この子ほんとすごいな。完全に言葉理解してるじゃん。

「この子たちを私の養女にするにあたつてさ。海軍辞めることにしたんだ」

「えっ？ この忙しい時期大海賊時代に辞めるって言つて辞めさせてもらえるの？ 海軍めつちやブラックじゃん。残業代も危険手当も出てないんですよ？」

「どこで覚えたそんな言葉……いやまあコング元帥にも似たようなことと言われたけど」

「残業代と危険手当は渡さないって？」

「そっちじゃない！ 今は忙しいからあと1年ほど残つてくれないかって。そうすれば今年の分のボーナスも退職金も出せるからって」
「……それ、今辞めたら退職金出さないし、今年のボーナスも取り消すぞつて脅しじゃん。ボーナスは、まあ辞める時期によってはしゃあないとして退職金はちゃんと払おうよ、海軍本部……命がけで帰つてきたばっかなのに……ていうか結局残業代も危険手当も払ってない……」

凄惨な戦場から身寄りない子どもも保護して生還したシングルマザーに無慈悲すぎる……。

残業代と危険手当出さないどころか、ボーナスと退職金まで踏み倒そうとしてるし……。

予想以上にブラックで引くわ。

世界政府には天竜人に奴隷買うお金払うほど余裕があるのになあ。

やはり海軍が独自の資金調達の方法を確立しないとダメなんじゃ？

今は海兵が海賊から宝を没収すると何割かが海兵に入り、残りは海軍の活動資金になってる。

たまに黙って全部懐に入れようとするネズミ顔の海兵とかもいるが。

モサモサの実さえあれば兵糧の心配もないし、余った収穫物を売って利益が出るのに。

オレが思う最強の悪魔の実だ。土地ならすぐそこに赤い土の大大陸があるわけだし。何故あれだけの土地を遊ばせておくのか。他にも活用方法なんていくらでもある。

海軍に資金さえあれば、五老星の無茶ぶりに振り回されることも大分減るだろう。

軍備増強すら出来る。宝樹アダムの苗木が一本あれば、一気に成長させ量産し、シャボンディの造船場にて宝樹アダムの最強の軍艦を量産できる。

ヤルキマン・マングローブの苗を持ち歩いて、必要な時に成長させシャボンで軍艦をコーティングし水中を進む。海賊を見つけたらクワイゴスの苗を使って一気に浮上。

奇襲にて海賊を殲滅。逃げる暇など与えない。

まあ、オレのメカメカの実も大した奴だけど。

機械とはすなわち科学力の産物。科学力とは人の夢を叶え生活を豊かにするための力。

つまりメカメカの実を食べたオレはっ、この世で最も健康で文化的な生活を営むことができるっ！

生活力で、オレに敵う能力者などいないっ！

我がメカメカの科学力生活力は世界一イイイ！ できんことはな

いイイイ——！！

「そうなんだよね……この子たちの養育費のこともあるし今すぐには辞めないけど、来年の今頃には海軍辞めて故郷に帰るから、まだ先のことだけど、あんたには言つとこうと思つてね。みかん作つて生活す

るつもり」

「そっか。さびしくなるね……旅に出たらみかん食べに行くよ」

「ベリー？ ほちい！（ー！いだうよち ? しなはのねかお）」

「ん？ おなかでもすいたの？」

「ぶー！（ー！いいがねかおりよくるみ）」

「ちよつとナミ？ 真面目な話してるんだから邪魔しちやダメでしよ。こつち来なさい」

「のー、ベリー！ めっ！（ー！めだやちつと ! よるづねかのしたわはんやちいにおなうそてつもねかおのこ、こじのとつよち）」

ノジコちゃんがナミちゃんを抱きかかえようとすると、何故か手を振り回していやいやをした。

オレの顔に手がめつちや当たってる。

「……ずいぶん懐かれてるわね。ノジコに抱っこされるの嫌がつてる」

「うう……あたし、お姉ちゃんなのに……」

「ああ、ほら、ノジコちゃんもベルメールさんも女の子だし、たぶんオレが男だから珍しいだけじゃない？ 空も飛ぶしね。ほくらナミちゃん、お姉ちゃんが遊んでくれるって」

「ベリー（。よわいいらなるれくねかお）」

ノジコちゃんが姉としての自信をなくしかけているのでフオローを入れる。

実際、空飛ぶオレが珍しいだけだろう。

それにしても、さつきからナミちゃんが何度も言ってるベリーってなんだ？ やっぱ果物でお腹すいてるんじゃないか？ なんか手を振り回して何かを訴えてるし。欲しいご飯が果物か。この子とは気が合いそうだ。大きくなったら集めた果物をたんと食べさせてあげよう。指でわつか作ってる、いちごに見えるし、いちごがいいかな？
もうちよつと成長したらいちごミルクをあげよう。

「そろそろ夕飯食べてもおかしくない時間だし、ナミちゃんにごはんあげたら？ ベルメールさんとノジコちゃんも、なんか飲み物おごるよっ。」

「み〜（。らしくうおらももでくるみ）」

「あたしオレンジジュースがいい」

「いや、私が出すから……子供におごられるとか大人としての立場がない……コーヒーでいい？」

「……カフェオレなら」

「あれ？ あんた苦いのダメだったの？（まだわずかに子供っぽい所残ってたか。微笑ましい）」

「ピーマンとかゴーヤみたいなのは食べるけど、コーヒーはそんなに。コーヒーの実なら食べたい」

「実って、そのままかじるの？（ピーマンはともかくゴーヤ大丈夫な子供なんていたのか……）」

「そうじゃなくて果実の方。甘いらしいよ？」

「ほんとよくそんなこと知ってるね……」

「図鑑で見た」

ふむ。オレはあまり好きじゃないけど、コーヒーは大衆に愛された飲み物。コーヒーノキ育てて果実は自分で食べて、豆はコーヒーハウスにでも売ればいいのでは？ 生豆は2、3年もつらしいし。果実と種子を分ける機械は自分で作るか。

その後自販機で飲み物買って、ベルメールさんの部屋までノジコちゃんとナミちゃんを抱っこして飛んで行った。部屋でナミちゃんにミルクでもあげながらみんなで飲み物飲みながら談笑した。

結局ノジコちゃんのオレンジジュース代はベルメールさんが払ったが、オレのミックスジュース代は断固として自分で払った。

ただでさえ色々ちゃんと支払われていない上に子供が2人、節約生活強いられるだろう。

来る度に差し入れ持っていこう。ベルメールさんは断るかもしれないが、女児用の服とかおむつに離乳食だったら、オレに返そうにも返せまい。オレが使うわけにはいかないから……。

オレより年下の子、というか2歳しか変わらない子と仲良くなるのは初めてだ。

他の子は勝手に外に出たりしないらしい。じゃあどうやって修行

するんだろ？

解せぬ……。

『海賊の定義』

「ようロゼ、久しぶりだな」

「うわっ!? ……ロシナンテさん、また音消して……びつくりするからやめてよ」

マリルフォードに行くと、普段会わない金髪で長身の人に、いつものように音を消して肩を叩かれてから声をかけられた。センゴクさんに保護されて育てられた、ロシナンテさんだ。この人はシャボンディ勤務ではないため、たまにしか会わない。初めて声をかけられた時驚いてから、オレを見つけると驚かすために普段から自分の音を消してるらしい。能力の鍛錬的に普段から使うのはいいことだが、なぜそこまでしてオレを驚かそうとするのか……?

「ハハッ。お前、普段驚かないのに、音消して近づいたら簡単に驚くから面白くてなア（驚いた顔は歳相応に子供っぽくて珍しいしな）」

「だってロシナンテさんのナギナギの実の能力、【カーム風】だっけ? あれ、普通の音だけじゃなくて、見聞色で気配とか心の声も聞こえなくなるから、本当にいきなり瞬間移動してきたみたいで心臓に悪いんだよ……」

「おれはまだ覇気使えないからわからねエけど、そんなに驚くもんか?（おれにとつては、海兵に交じって訓練してる子供がいることの方が驚くんだがなア……）」

「オレは生まれた時から出来たから余計に驚くよ……普段から気配探ってるし。もしロシナンテさんがオレを狙う殺し屋とかだったら最初の一撃は必ず避けられない。最悪死ぬね」

「そんなことしねエよ……（兄上じゃあるめエし……）」

「でもロシナンテさん、ドジツ子だからなあ……」

「ドジで殺すかッ! 流石にそこまでじゃねエだろ……（ちよつと転ぶからってどいつもこいつも……）」

ロシナンテさんはそう言うけど、何もない所で転んだり、タバコに火を点けようとして間違つて自分の服に点けたりするからなあこの人。本人にその気がなくとも、こっちは気が気じゃない。うっかり自

爆するかもしれない、オレごと。

「お前の能力、カツコよくていいよなア……機械^{メカ}つて。おれの能力つて【サイレント】使って誰よりも安眠できるくらいしか取り柄がねエ……（スゲエ地味だ……）」

「いや、流石にもつと出来るでしょ……？奇襲とか潜入とか」

「……あんま海軍っぽくねエな。どっちかってエとC^{サイファーボール} Pみてエだ（やっぱ正面からの戦闘じゃあ使えねエよなア……）」

「つまり忍者じゃん。カツコいいじゃん、忍者」

「C^{サイファーボール} Pは忍者じゃねエだろ……（こいつはたまにわけのわからんことを言う）」

この人も誤解しているのか……修正しないと。

「それはともかくとして、音を消すつてことは、つまり空気や物体の振動をなくすつてわけで、現在世界最強つて言われてる “白ひげ” は空を殴りつけて大気にヒビを入れて振動を起こすらしいから、案外口シナンテさんの【風^{カーム}】でグラグラの実の能力封じられるんじゃない？」「世界最強の能力を封じられるつて言われれば強そうに聞こえるが、やっぱ使える相手が限られてるなア……（兄上には……意味なさそうだなア）」

「まあ正面からの攻撃向けではないよね。裏方とかサポート向け？」

「裏方はさつき言った潜入だろうが、サポートつて何すんだ？（おれに出来ることなんて、音が消せるだけなんだが……）」

「味方全員の音消して奇襲とか、音がしない銃弾、砲弾、爆弾作つたりとか。結構厄介だと思っけど？少なくともオレには脅威」

「……よくそんな小賢しいこと思いつくなア、お前（こいつ、将来事件起こしたりしねエよな？）」

「日頃から自分の能力で出来そうなこと考えてるからじゃない？ たしかにオレの能力はすごく便利だけど、能力は使い方次第。覚醒のこともあるし、ナギナギも色々試してみれば？」

「……そうかもな。色々参考になったよ、ありがとな（兄上は海賊になった。このまま暴走するようなら、おれが止める……！）」

そう言つてロシナンテさんは去つて行った。いつも通りオレを見

かけたから、驚かしに來ただけだったんだろう。それにしてもナギナギの實の能力の覚醒か……周りの音を消すのは最初から出来るみたいだし、どんなことが出来るようになるんだ？ 触れたものの振動を止められるようになったら、かなり危険な能力になるけど……心臓の鼓動を止められる。

音もなく近づいて心臓止めるって完全に暗殺者だな……こっわ。さてと、目的地に行くか。

あつ、ロシナンテさんまた転んでる……。

☆☆☆☆☆

「にいに、にいに、おこつかいちよおらい？」

「はいはい、1000ベリーでいい？」

「わーい！（これで10まんベリーたまった！）」

「まだ生まれて1年経ってない子にお金あげないでよ……あんま甘やかさないで（でもロゼ、4歳なのに私よりはるかに貯金してるんだよなあ。こいつがとんでもないだけだよな……？）」

「だって100ベリーや500ベリーじゃ口に入れるかもしれないじゃん。まあこの子天才だからそんなことしないけど。今もいちごの小銭入れに折りたたんで入れてるし」

「待って。私、そんなのあげた覚えはないんだけど……？（赤ちゃんにそんなのいらないでしょ……）」

「オレがあげた。ノジコにはみかんのをあげた」

「ノジコ？ 私、そんなこと聞いてないんだけど？（あんたもか）」

「ロ、ロゼがあたしたちと会ってもうすぐ半年だから記念に……ナミはもう貰っちゃってたし……（あとかわいかったし……）」

ベルメールさんがジト目でノジコを見て、ノジコがさつと目をそらしながら答える。

今日はベルメールさんが休みなので3人揃ってる。普段からベルメールさんが仕事でいないので、修行ついでによく様子を見に来ている。

あとノジコとは呼び捨てで呼び合うことになった。子ども扱いされたくないそうだ。別に子ども扱いしてるからちゃん付けで呼んでたわけではないんだが……。

「ロゼ？ あんたなんでそんな返しづらいプレゼントの仕方なんて知ってるのよ？（ナミのおむつや離乳食、ナミとノジコの服といい……返せないじゃない……）」

「離乳食は今料理の練習してるからついでに。他は……今までの人生経験？」

「まだ5歳にもなつてないくせに何言ってるのよ……（服返して着せてやろうかしら？ ……サイズが合わないわね）」

プレゼントについては父さんに聞いた。あんまり高すぎると困らせるとか、記念日のちよつと前に渡すとサプライズになるとか？ やっぱ手馴れてるな。

両親のこととか見聞色のことは話してない。流石に2歳や0歳に話すのは怖い、何かの拍子に話しそう……。どうせベルメールさんの故郷にはいずれ行くつもりだし、その時に3人まとめて話そう。

「……なんでロゼのことは『にいに』呼びなのに、あたしのことは呼び捨てなんだろう？ あたしがお姉ちゃんなのに……（ロゼ、お兄ちゃんじゃないのに……）」

「のじこ、どんまい？（はんのうがおもしろい！）」

「あんたが原因でしょうがっ！（なんかナミ最近生意気……構わないとウソ泣きするし……）」

「でもそのかわり、オレ、名前ちゃんと呼ばれないよ？ 『ろじえ』って呼ばれる」

「それ、ただ舌つ足らずなだけじゃないの……？（お金の計算は間違えないけど……）」

「まあそうかもしれないけど。ていうかそんなにお姉ちゃんって呼ばれたいなら、オレみたいに『お姉ちゃんでちゅよく』って話しかければ良かったじゃん」

「嫌よ恥ずかしい……あたしにだってプライドがあるわ（なんでこいつ『にいにでちゅよく』って恥ずかしがりもせず言えるのよ……）」

「それだとオレがプライドないみたいじゃん……」

「まあ、うん。あんたは将来絶対親バカになるわ……まさか他人の子をここまで溺愛するとは……ちゃんとお別れできるのか？ 泣くんじゃないか……？ こいつ」

「ベルメールさんまで……」

ちよつと赤ちゃん言葉で話しかけたり、膝に乗せてミルクや離乳食食べさせたり、お手持って歩く練習手伝ったり、本を読み聞かせたりしてるだけじゃないか……。

おかげでまだ生まれて10か月程度だが、オレみたいに見聞色も使ってないのに、割と話せるし歩ける。まあ？ ナミちゃんは元からかなりの天才だったけど？ この子ならたとえオレが何もしなくても、このくらい出来るようになって当然だよな。

ナミちゃんの誕生日はオレが見聞色でこっそり調べた。まさか7月3日生まれだからナミって名前だったとは……見聞色で調べたと言うわけにはいかないので、ベルメールさんに、

「ナミだからとりあえず7月3日生まれってことにしたら？」と言うと、

「そんな安直な……」と言われたけど、実際そうなんだから仕方ないじゃん……。

ちなみにノジコは7月25日生まれで、ベルメールさんは12月3日生まれだ。当分会えなくなるし、全員何か誕生日プレゼントしたいな。

ノジコは時折前髪邪魔そうにいじってるし、ヘアバンドがいいかな？

ベルメールさんは、オレがお金出してノジコに選んでもらって、2人からってことにするか。娘に選んでもらった方がベルメールさんもうれしいでしょ。ナミちゃんは天才だが流石にまだプレゼントは選べない。

問題はナミちゃんだな。どう考えてもお金が一番喜ぶが、それはちよつとなあ……まさか「ベリー」がお金のことだったとは……それ

でよくオレの財布を触ってたのか。いつの間にオレのポケットから出してるんだ？ 何度も抜かれるので財布をプレゼントした。姉妹おそろいで柄だけ違う奴。

「おっとそうだ。今日はスイートポテト作って来たんだ。ナミちゃん食べる？」

「たべりゆく（おやつだあ！）」

「じゃあ、おいで〜」

オレが膝をパンパンと叩くと、ナミちゃんがとてとて歩いて来てオレの膝に座る。

鞆からタツパーに入れたスイートポテトとスプーンを3つずつ出す。

「あんたほんと野菜と果物好きね……（そして妹がめっちゃ羨けられてる……）」

「まあ肉だとナミちゃんがもう食べられるかわからないし。ちゃんとノジコとベルメールさんの分もあるから、感想くれるとうれしい」

「毎回、よく作って来るね（味は普通だけど）」

「今練習中だからね。毎日何かしら作ってる。はい、あーん」

「あーん。うん、ふちゆうにおいちい！（いちゅもどおり！）」

「そっかあ、やっぱ普通かあ……」

オレの料理は普通においしいと評判だ。はっちゃんやメイプルにフルーツタルト作った時も普通においしいと言われた。感想に普通がつかないのは父さんと母さんが食べた時くらいなので、普通なのが正確なんだろう。不味いわけではないので旅には困らないが、すっごくおいしいって言わせたいなあ。レシピ通りに作るだけじゃダメなのか？

「うん、おいしいわ、普通に（こいつの料理食べると、何でも出来るわけじゃないんだなと安心するなあ。まあ4歳児にしては上手だけど）」

「おいしいよ、普通に（普通においしいとしか言えない……）」

ベルメールさんとノジコも食べて感想をくれる。そんなに普通か……。

「ていうかロゼ、あんた左利きだったっけ？ 前は右で食べさせてたような……（そっぴいや左手で海賊引きずってたっけ。あれ？ こいつの利き手どっちだ？）」

「あつ、ホントだ（あたしと同じだ）」

オレが左手でナミちゃんに食べさせているので2人に聞かれる。ベルメールさんとナミちゃんは右利きでノジコは左利きだ。

「今はナミちゃんが右膝に座ってるから左の方が食べさせやすい。元々は右利きだよ？」

「……元々つてことはわざわざ左利きに変えたの？（普通逆でしょ。ノジコの利き手、変えた方が良いのかな？）」

「右手は友好の握手をするための手だから、あまり攻撃に使いたくない。だから左手でぶん殴るように変えた。今では左の方が力強いよ？」

「そんな理由で利き手変えちゃったのか……（まあまだギリ4歳だし、利き手変えるくらいできるのか？）」

「オレにとっては重要なことだよ？ まあ普段は右手も使うから、状況によって使いやすい方を使ってる」

「にいに、もつと〜」

「ああ、ごめんごめん。はい、あーん」

「あーん。もぐもぐ（ふちゆうにおいちい！）」

ナミちゃんが催促してきたので話を切り上げ食べさせる。すごく和む。

「ごちちようちやまー！（やさいとくだものうまー）」

「おそまつさま……あつ、そうだ。ノジコ、前に言ってた本持って来たよ」

ハンカチを出してナミちゃんの口の回り拭いてから、鞆から前にノジコが読みたいと言ってた本を出す。

「あつ、ありがと。でもホントにもらったいいの？（この本高そう……）」

「うん、オレはいつでも思い出せるし」

「……その本すごく分厚いんだけど。何の本なの？ 絵本じゃないよ

ね？（専門書に見えるんだけど……）」

「農業の本。ココヤシ村でベルメールさんのみかん育てるお手伝いしたいって言ったら、ロゼが読み終わったのくれるって」

「ノジコ、まだ2歳なのに立派なことを……（最近の子供の成長って早いなあ……）」

「他にも読み終わったの持って来たから、欲しいのあったらあげるよ？」

「いや、いくら読み終わったからって、そんなにもらうのは悪いわよ（すごく重いし、読むの時間かかりそう……）」

「思い出せるから問題ないって」

「……えっ？ これ、ホントに覚えてるの？（この本何百ページもあるんだけど……）」

「いつでも思い出せるよ？」

「あんだ、ある程度は分かってたけど、ホントにとんでもないわね……

（海賊ボコボコにしてるらしいし……）」

「（ノジコ、ついに気づいてしまったか……）」

純粋な記憶力で覚えてるわけじゃないから少し後ろめたいが、しようがない。

【オレの時間】を発動し思考の光速化をした後、見聞色で自分の過去を見て、本の内容だけを何度も何度も反復して見ることで記憶を定着させる裏技を使ってる。

「にいに、わたしこれほちい！（ぼうけんちたい！）」

「えっ？ いや、流石にナミはまだ読めないでしょ……（0歳の割には口達者だけど……）」

「航海術の本か。そういえば冒険の絵本とかうれしそうに聞いてたね。いいよ。今は読めなくても、その内読めるようになるでしょ」

「ありがとうー！」

ナミちゃんが本持ってわーいわーいと言いながら、よくわからないダンスで喜びを表現してる。くるくる回ってるけど、転ぶよ？

「べるめーるさん。わたし、おつきくなったらせかいちずちゅくるー！」

「はははっ、そりや楽しみだ。完成したら私にも見せてよ（かわいい夢

で良かった……ロゼの影響で海賊倒して回る！ とか言わなくて本当に良かった)」

「うんー」

世界地図か……まだ早いけど測量の本をあげるか。いずれ役に立つだろう。

ナミちゃんの誕生日プレゼントがお金にならなくて本当に良かった……。

それからしばらく談笑して、ベルメールさんの部屋を出た。

☆☆☆☆☆

「あつ、ガープさん」

「ん？ おお、ロゼか！ ちょうどいい、あとで鍛えてやるからちよつと話さんか？ 例の話と、他にもう一つ話がある。煎餅もあるぞ？」

「煎餅なくても話くらい聞くとよ。何かいいことあった？」

「ぶわっはっはっは。わかるか？ まあ入れ(煎餅位ないと、あれ話したら流石に怒るかもしれんからな……)」

見るからに機嫌がいい。顔が緩みきっている。

例の話と言うことは、ついに海兵になってくれることになったんだろうか？ 海賊の子を保護しているということは、ガープさんが同僚に隠しているため、よくオレが話を聞いている。そこまで知られたらやばい海賊で、ガープさんと関わりがあるって……「海賊王」処刑前に海軍本部で戦った「金獅子」だろうか？

ガープさんに誘われて部屋に入る。

ソファに座って、煎餅をボリボリ食べてお茶飲みながらガープさんが話し始める。

「実は今月の5日に孫が生まれたらしくてな！ まだ会ったことはないが、今から会うのが楽しみだ！」

「へえ、それはおめでどう！ というか子供いたんだね？ 初めて聞いたよ」

「ん？ 言ってなかったか？ まあ海兵ではないからな。今は世界を

見て回ってるそうだ」

だからオレに孫疑惑が出たのか。もう子供がいるから。

ゼファーさんの家族が海賊に逆恨みで殺されてから、海兵の名字は新聞などに載らなくなった。同じ悲劇を繰り返さないため、ゼファーさんが世界経済新聞などの報道機関に掛け合っただからだ。

ガープさんの名字は知ってる。「モンキー・D」というらしい。海賊王”といい、Dってなんだ？ ドリアンのDじゃないだろうし……。

「そうだったんだ。それで、生まれた子はなんて名前なの？」

「ルフィという男の子らしい。息子はならなかったし、海兵になってくれるとうれしいんだがなア」

「海兵と言えば、例の子はその後どうなの？」

そう聞くと、ガープさんの表情が曇る。ああ、上手くいってないな……。

「どうにもうまくいかずほとほと困っておる……心を鬼にして（たとえでなく物理的に）千尋の谷に突き落としたり、強い海兵に育てるために、夜のジャングルに（1人で）放り込んで鍛えたりしてるんだが、なぜか効果がなくてなア……」

「強く鍛えるより先に、海賊になろうとするのを軌道修正するのが先じゃない？」

「健全なる精神は健全なる身体に宿るといっただろ？ 体を鍛え精神を鍛えれば、自然と海賊になろうという気も変わるんじゃないかと思つてな」

「まあ一理なくもないけど。それで海賊になって具体的に何をやるつもりなのか、聞きに行つたんでしょ？ どうだった？」

「前は海賊になつてどうしたいのかを聞き、それは海賊にならなくても可能なのでは？ と説得しようという話になつて終わった。話を聞く限り、別に海賊になる必要性を感じないんだけど……」。

「とりあえず民間人から略奪する気はないらしい。父親のような、生まれてこなければよかつたと言われる人間にはならないと。宝探し

の冒険をしたり、海賊を倒して奪うつもりのような（しかしエースのやつ、ロジャーのことなんてどこで知ったんだ？ 見聞色は使つてないようだったし、教えていなかったのに……）」

「うん、民間人襲う気ないのはいいいことだね」

民間人から略奪する海賊、通称モーガニアはオレも嫌いで手配書集ビンゴブックの犯罪歴を見て顔を覚えて、シャボンディで見かけたら狩ってる。海賊から略奪する海賊、通称ピースメインは誰か襲ってる場面でも見ない限り放っておいている。ピースメインは海賊同士の抗争で戦闘に慣れてて強い奴が多い。もつと海賊同士争え、そして滅んでくれ。

「出来るだけ名をあげたいから、名のある海賊を倒して回りたいらしい」

「言つてたね、自分の名前を世界に知らしめて見返したいって」

たしかに名のある海賊を倒した方が名が上がるだろう。オレはその子とは事情が異なるため、自分の名を上げたいとは思わない。両親のことバレたら困るし、海賊がただの子供だと油断しきつてた方が楽に倒せる。無名のままがいい。

「それで他には？」

「……これだけじゃロジャー（海賊王を越えて、自分がロジャーの子と言われるのではなく、ロジャーが自分の親と言われるくらいに名を上げたいとも言つてたが、ロジャーの子だといつに教えるわけにはいかんからなア……気にしないとは思うが）」

「……えっ？ じゃあ海兵でいいじゃん。海賊の子だからって海軍入るの拒否するのはまあわかるとして、それでも海賊じゃなくても探検家とかじゃダメなの？」

「だから困っておるのだ……どうすればいいんだ？」

「これマジでどうすればいいんだ？ オレの頭ではわからない。」

バウンティハンター
「賞金稼ぎじゃダメなの？」

正直オレがやっつてることと、その子のやりたいことは名を上げたい以外たいして変わらない気がするんだが……。

「（ついに聞かれたか）……バウンティハンター賞金稼ぎなんて金が目当ての、信念もな

く、世界にケンカを売る度胸も、命を懸ける覚悟もない、臆病者がなるものだそうさ。やってることは海軍や海賊から略奪する海賊のピースメインと変わらないのに、正義を掲げて海軍にならず、海賊旗を掲げて海賊にもならない半端者だと（……さあ、どうなる？）」

「はあ？ ケンカ売ってるの？ オレもう帰っていい？」

「ここまで侮辱されたのは生まれて初めてだ。（来月の2日でやつと5歳）

「待て、おれが言ったんじゃない！ お前に海軍に入ってほしいとは思うが、こんなこと思つたらん！（やはり怒つたか……まあそりやそうだ）」

「たしかに、オレは正義を背負う覚悟なんてないよ？ オレには重いし、そもそもオレが海賊を狩るのは正義感からじゃなくて嫌悪感からだし。オレ自身の夢のために、海賊から宝奪つてることをよく思わな人だっているだろうよ。元は民間人のお金だからね。でもどうやって返せつて言うのさ!? シャボンディで略奪してたなら持ち主に返してるけど、他の島で殺して奪った金なんて返しようがねえだろうが！ それに何より、海賊になることはたしかに世界にケンカ売る行為だけど、それを勇気があるみたいに言つてんじゃねえ！ 平気で人を殺す海賊相手に戦つてんだから、賞金稼バウンティハンターぎだって命懸ける覚悟も信念もあるわ！ 少なくともオレにはあるつ。ていうか海賊になろうとしてる奴にそこまで言われる覚えはねえよ！」

「落ち着け落ち着け。ほら、お茶でも飲め。心も口調も乱れてるぞ（ここまで怒ってるの初めて見たな……サカズキにかみついたら時もこもしれんな……エースとロゼを会わさなくて、結果的には良かったかところがあるかもしれん）」

「ぜえ……ぜえ……ありがとう（ずずー）」

「ガープさんにお茶をもらって啜る。ふう、少し落ち着いた。ここま
で腹が立ったのは初めてだから抑えられなかった。オレもまだまだ
青いな……。 （まだ4歳児）

「ごめん、昔見聞色で聞いた、オレに対する心の声のことなんかも思い

出して、合わせてキレてた」

「生まれた時から心の声聞きつ放しなんだったか？（道理で見聞色が上手いわけだ）」

「うん、まあそれより、なんとか良い意味で海賊ごっこだね」

「海賊に良いも悪いもないだろ」

「海賊は、まあそうだね。海賊ごっこにはあると思う。その子、海賊旗を掲げてるだけでやること探検家とさして変わらないし、オレの中では良い意味で海賊ごっこ。悪い意味の海賊ごっこは、海賊旗を掲げておいて自分の命を懸ける覚悟もせずに略奪してる奴ら。どっちも大海賊時代になってから増えたタイプの海賊なんだって？」

海賊旗、特に髑髏の海賊旗は相手に対する死亡宣告であり、「自分たちに触れるものには”死”あるのみ」という警告と畏怖を意味する。そんなものを掲げておいて、いざ自分が追い込まれると見逃してくれだの助けてくれだの言う奴は結構いる。

父さんはこういう奴を海賊とすら呼ばず、信念も覚悟もない「チンピラ」と呼んでいる。

「ああ増えたな。まあなんとなく言いたいことはわかったが、お前にとってはそうでも、海軍にとっては海賊旗を掲げてたらすべて海賊、取締りの対象だ。どうにか止めたいんだがな……あの子と戦うのは、ごめんだ」

その気持ち、すぐわかる。オレの海軍に入らない理由の大半は、両親と戦いたくないからだし。海軍的には引退しようが海賊の罪は消えないので、オレが海軍に入って両親のことがバレたら、
「海軍に忠誠誓っちよるなら、相手が海賊なら引退してようが親だろ
うが殺せるはずじゃけエ」とか言われそう。

海賊旗を掲げたら海賊なのは仕方ないね。あれ、飾りじゃないし。海賊旗を掲げておいて「オレたち、良い海賊だから！ 襲わないから！」なんて言われても、騙そうとしてるようにはしか聞こえない。新しい詐欺かと思う。

「よし、それでいこう。何も今すぐ海賊になるわけじゃない。まだ3歳で時間はあるわけだし、ガープさんがその子に愛情を持って接して懐かれて、ガープさんと戦いたくないから海賊になるの止めるって、何とかして言わせよう。長期戦だ」

「それ、言われたいなア……やはり、おれの愛(拳)の順番か！そうと決まってはこうしちやアおれん。ロゼ、あいつに愛(拳)を叩きこむ予行演習のためにも特訓場に行くぞ！」

「サー、イエッサー」

愛つて叩き込むものだっけ？ 特訓場でオレがいつも叩き込まれてるのは、拳だと思っただが……まあガープさんが元気を取り戻して良かった。せつかく孫が生まれたのに浮かない顔なんてするもんじゃないよな。

その後、ガープさんと一緒に特訓場に行き、鍛えてもらった。

相変わらず強いなあ。なんでその辺に落ちてる石ころに武装色纏ってぶん投げるだけで、地面にクレーターが出来る威力が出るんだ？ この人との修行ってたいい命懸けだ。まともに当たったらヤバイ。オレの武装色じゃ、たとえば体が機械でも無事では済まない。

まあぶん殴られる方がはるかに危ないんだが。拳骨落とされたら意識が飛んで首から下が地面に埋まる。一発KOだ。なんとか見聞色で攻撃を先読みして避け続けないと。

そろそろ初めて会ってから1年、膝くらいつかせたいなあ。最初の時も寝たまま立ってたから膝つかせてないし。

クザンさん、サカズキさん、ボルサリーノさんの3人がガープさんに、

「お前らより見聞色出来る子供がいたぞ？ それも4歳。海軍中將として子供に劣るのはどうなんだろうなあ……？」って煽られて、オレが海軍本部に修行しに来たら、キレ気味の3人に襲撃されてからもそろそろ1年か……あの時はまた両親のことバレたのかと思って焦ったよ。オレが一体何をしたというんだ……。

サカズキさんは大將になって忙しくなってるし、他の2人も大將に

なって、オレの組手相手が出来なくなるのも時間の問題だろう。あの人たちは（ガープさんとおつるさんは除く）他の中将と比べて、明らかにレベルが違う。それまでになんとか膝つかせられないものか……一応それぞれ対抗策は完成したけど、通用するかどうか。能力なしでも、素の身体能力や武装色で大きく劣ってるからな。体格もギリオレが腹パン出来るくらいの差があるし。とりあえず次会ったら試してみるか。

“犬、猿、雉”

海軍本部より少し離れた、島と言うには小さな岩礁にて、ゴーグルをかけた、年端もいかぬまだ少年とすら呼べない幼児と、角刈の頭に海軍指定の軍帽を被り、バラを胸にさした赤いスーツを着た壮年の、幼児の3倍近くある大柄な男性が向かい合っていた。

少し離れた所では、赤スーツの男と同じく大柄な2人がいる。

1人は赤スーツと同じくらいの年で、胸にサングラスをさしたストライプ柄のグレースーツを着用し、テンガロンハットを被りタバコを吸っている。

もう1人は他の2人より少し若く、青いシャツの上から黒いコートを着用し、黒いサングラスをかけて、特徴的なパーマ頭に海軍のマークが入った帽子を被り、肘について横になっている。

「オレももう5歳。子供の1年は大人の1年より時間が長く感じると聞きます。ならばサカズキさんの1年よりオレの1年の方が10倍くらい成長著しいはず！ 今日こそ、今日こそは！ あなたに膝をつかせてみせます！」

「あらら……今日はまた、ずいぶんとやる気じゃないの」

「初めて会ってからそろそろ1年だからねエ。でもオ、その理屈はちよつと無理がないかアい？」

「ふん。お前のような小僧相手に海軍本部大将が膝をつくなど、正義の面目丸つぶれじゃろうが！」

サカズキさんには鼻で笑われるが、オレには秘策がある。實力不足は重々承知だが、今日こそやってやる！サカズキさん相手に鞭は効かない。オレの非力な武装色では簡単に破られ、マグマで焼き切られてしまうからだ。

というか他の2人にも効かない。クザンさんもボルサリーノさんも能力で作った剣にオレより強い武装色纏って簡単に切り裂いてしまう。ボルサリーノさんに至っては能力を使われたら当てられずらしい。

だから未熟な覇気と悪魔の實の能力でなんとかするしかない。一体いつになったらオレは六式を使えるようになるんだ？ 未だにどれほど純粋な体術では出来ない。膝から下をチェーンソーに変えて斬撃を飛ばす【嵐脚ランキヤク（仮）】なら出来るようになったが……。

毎日鍛えてはいるが、肉体が貧弱すぎる。もつと筋肉つけないと。主食が野菜と果物だからか？ 肉を食べなきゃだめなのか？ ベーコンの葉やロースバナナなら食べてるんだが……。

「今日こそ腹パンかまして沈めてやる！ 【機械変化メタルフォーゼ】、【剃ソル（仮）】」

足をジェットエンジンに変え、地面を蹴ると同時に足の裏から空気を噴出し、疑似的に【剃ソル】を使う。飛ぶだけなら首の裏から空気を噴出すればいいが、今の状態では足の裏から噴出しないと【剃ソル（仮）】が出来ない。

「【嵐脚ランキヤク（仮）】、【剃ソル（仮）】」

側面に回り、膝から下をチェーンソーに変え起動し、サカズキさんの顔面めがけて【嵐脚ランキヤク（仮）】を放つ。オレはまだ飛ぶ斬撃に武装色を纏うことなんか出来ないのである人躲もしない。サカズキさんの顔面がマグマと化し吹き飛ぶ。その隙に足を戻し【剃ソル（仮）】で接近し、武装色を纏った鉄拳をお腹にぶちこむ。

「【スクラップ・フィスト】！」

「おっ、初めて直接攻撃したなア。今までは武装色が未熟でマグマに触れても平気な手段がないからって、足場砕いて作った岩とか氷に覇気纏って、ガープさんが砲弾でやるみたいにぶん投げてたのに」

「また何か能力の手札を増やしたようだねエー。ほんとよくやるよオ。それにイ、いつもより体を変化させるスピードが速くないかアい？」

クザンさんとボルサリーノさんが話してる。

そう、ようやくマグマ対策の耐熱超合金に体を変えることができるようになったのだ。それも服ごと。最初は能力が覚醒したのかと思っただけ、自分の体以外で機械に変えられるのは服やサンダル、

ゴーグル、手袋とかの身に着けてる物だけだった。体から離れば元に戻ってしまう。まあこの3人も服ごと体を能力で変えてるしな。そういうものなんだろう。

何にしても、これでただの岩や氷にしよつばい武装色纏ってオレの非力な肩で投擲するという、苦し紛れの攻撃からは卒業だ。まあ、武装色纏ってようやくマグマが平気になる程度の耐熱だけど。

さらにさらに、神経回路を電子回路に変えて反応速度を光速化する技、【神速】^{インパルス}を最初から使ってる。これにより、体をドリルやチェンソーに変え起動するまでにかかる時間が大幅に短縮できる。今までは3秒かかったが、刹那で出来るようになった。

これで見聞色で先読みした相手の攻撃に、人外の反応速度で対応することができる。必要に応じて【オレの時間】^{ザ・ワールド}を重ねがけすれば、人間やめてない攻撃にはカウンターするなり避けるなりできる。

【オレの時間】^{ザ・ワールド}も【神速】^{インパルス}も、まだ3人には教えてない。動きが速くなるだけに見た目の変化はないし。オレがこの人たちからダウン取ったら得意げに、そしてドヤ顔で勝ち誇って解説してやる。この2つの技ともう1つを重ねがけした技はバラした所でさほど困らない。

ガープさんといい、そろそろ膝ぐらいつかせたい。

欠点はあくまで反射速度と思考速度が上がっただけなので、今の状態でオレが実際に動けるスピードは普通。【剃(仮)】^{ソル}が出来る程度だ。

今のオレのスピードより早く動かれたり、避けられないような広範囲技をされたらどうしようもない。どちらもこの3人は可能。

だから今のうちに腹パン連打して膝つかせなきゃ。

……あれ？ この感触、

「どうやらマグマに触れられるようにはなったようじゃが、じゃからというて油断しちよりやあせんか？ 最初に腹にかますと言われりやあガードして当然じゃろうが」

「当たり前だねエ〜」

「ああ。最初に顔吹っ飛ばして目つぶしした意味ねエな（せつかくあいつ見聞色上手いから攻撃先読みしづらいのに）」

たしかに……オレの「スクラップ・フィスト」は武装硬化できつちり防がれていた。でも腹が一番殴りやすい高さにあるし、金的は人としてマズイし……。

それよりこれはマズイ。すぐさま「オレの時間」^{ザ・ワールド}を発動し、次の攻撃を先読みする。

これは……ダメみたいだな。なんてことしようとしやがる！ わかっていても止められない。そもそもすでに逃げ場が塞がれてる。これではとつておきでも逃げられないし、出来ればボルサリーノさんに初見でぶつきたい。

とりあえず首から下に武装色纏おう。でないと死ぬ。全身に武装色を纏うことは出来るのに、どうして武装硬化は出来ないんだ？ 出来れば力技で突破できるのに。

「ふん。マグマで体が溶けんなら、むしろやりやすいわい（マグマで捕らえて海に落とすか）」

オレの周りの今立っている、マグマを冷やして出来た足場がボコボコ沸騰し、マグマに戻りオレに襲い掛かってくる。上はすでに体を変化させたマグマに覆われている。オレが突破できないよう、マグマに武装硬化のオマケ付きだ。

「^{メタルフォーゼ}機械変化」、【ドリル・ランサー】！」

とりあえず腕をドリルに変えて武装色纏って攻撃するが、ドリルの貫通力でもすぐには穴を開けられそうにない。

あわれ、オレの首から下は武装硬化したマグマに捕らわれ、噴火の推進力で宙を飛び、【月歩】^{ゲッポウ}で跳んできたサカズキさんに頭をガシツと掴まれる。

そのままサカズキさんは海に向かい、オレの体を首までマグマごと海につける。　ジューツと音がしてオレの体を覆うマグマが冷え固まり岩石となる。クウイゴスのサンダルの浮力があっても腕力で無理やり沈められては意味がない。

詰んだ……。

「終わったねエ。ありやあもう無理でしょオ〜」

「あらら……マグマが平気になった分サカズキの加減がなくなつて、むしろいつもより早エなア」

2人の言う通り、これではもう降伏するしかない。

ドリルで岩石を砕くことはできるだろう。しかしそんなことをしたらオレの体が海に浸かってしまい力が抜けるし、能力も使えなくなる。そもそもこの現状、サカズキさんが手を放してオレの体を前に倒すだけで、オレは海に浸かる。クウイゴスのサンダルの浮力で足だけ浮いて逆さまになるという無様な姿を晒した上、力が抜けてもう戦えない。

というか……

「降参します、オレの負けです。でもですよ？ こんな手段があるんなら、なんでマグマで捕らえてわざわざ海賊焼け死ぬまで待つてんですか！ そのまま海に放り込んで、オレみたいな簞巻きにした方が戦鬪早く終わるでしょうが！」

オレなら手足ドリルに変えて壊せるけど、たいていの海賊は何もできず、ただのサンドバッグになるだろう。

「いつも言うちよるじやろうがア。海賊という悪を許すな、悪は根絶やしにしろ、やるんなら、徹底的にだ……！」

「またそれ!? 会う度にそれ言われて、オレは頭がおかしくなりそうだよー！」

「そもそも何故ドリルやチェーンソーで直接わしを攻撃せん？ 殺す気でやらんけエ、いつまでたつてもあまつちよろい武装色のままなんじやろうがア」

「欺瞞！ 殺す気でやらなきや武装硬化出来ないなんてサカズキさんしか言わない！ またオレを海賊殺戮マシンに洗脳する気でしょ！ 賞金稼ぎは殺し屋じゃない！」

「ちっ……相変わらず小賢しく口の回る小僧じやのオ。ふっ、いやア……今は口位しか動かせなんだなア……」

「ぐぬぬう……」

「よくあの状態でサカズキにあんな口聞けるねエ……手工放されたら溺れちやうよオ？」

「せめて陸に上がってから言いなさいよ……」

まさかこんな戦法があったとは……この方法ならギリギリ生け捕りにできるだろう。その上でぶっ殺してるとか、この人ヤルキマン・マンガローブより殺る気満々だ。両親のことバレたらマジでヤバイ。もしもの時のために、全身機械化すると呼吸の必要がないことは、海軍関係者には秘密にしている。上手く使えばオレの死を偽装できるから。

それにしても、まさか熱耐性の体にも出来ても歯が立たないとは思わなかった。文字通り手も足も出せなくされるとは……。

オレの悔しがる顔を見て満足したのか、サカズキさんがオレを海から引つ張り上げる。

そしてオレをその辺にポイツと投げ捨てた。くそう、オレが勝ったら覚えてろよ……。

とりあえずドリルで岩を砕く。ドリルの正しい使い方だ。

「じゃあ次はクザンさん、よろしくお願いします」

「……やる気満々だったのを瞬殺されたばつかなのに、よくへこたれねエな……」

「まあ実力で劣ってるのはわかってますし、死ななきや平気でしょ。落ち込んでる暇あったら鍛えなきや。わざわざ組手の時間作ってもらってるのも強くなるためですし」

「いや、おれは息抜きできるしいんだけどな？それに噂のことが……」

「ああ、クザンが1番色々言われてるからねエ。でもそろそろ消えるでしょオ？」

「オレが違うって言うてんのに聞く耳持ってくれない。センゴクさんとおつるさんのはすぐに消えたし、サカズキさんは叔父の噂だからそもそも被害少ない上睨んで黙らせてる。ボルサリーノさんはもう言われなくなったのに、何故かクザンさんだけまだ言われてるね」

「クザンはまだ若いのにすごい速さで出世したから、やつかみがねエ〜」

「ああ、なるほど。元々悪ふざけで噂が立ちやすい立場だったんだ。大変だね」

「ガープさんにのせられるんじゃないやなかった……まさかこんなことになるとは……」

「お前はここ数年だらけ過ぎじゃけエ、好き放題言われるんじゃないやろうが」

「うるせエよ……お前はやり過ぎだ」

「フ〜（まただねエ〜）」

ここにいる3人は入隊した時から自然ロキアの能力者であったため、怪物新兵つて騒がれてて、すごい速さで覇気も習得して中將まで昇進したらしい。人の噂も75日って言うけど、隠し子がどうのの噂が立ってそろそろ1年、流星にしつこい。クザンさんは3人の中では最年少だから嫉妬の対象になって噂されやすいのか。「だらけきつた正義」に変わってなめられてるのかもしれない。隠し子以外にも噂されてるし。

最近クザンさんとサカズキさんの間でピリピリした雰囲気アが漂っているとか。…これは根も葉もない噂じゃなくてただの事実だな。サカズキさんはクザンさんにだらけていると言いつつ、クザンさんはサカズキさんにやり過ぎだと言いつつ返すのがよくある光景だ。出くわした海兵が居心地悪そうに去って行つてる。オレも今とても居心地悪い。よくボルサリーノさん顔色変えずタバコ吸つてるなあ。慣れてしまったか……。

ちなみにオレは隠し子くらいしか噂は立ってない。せいぜい、なんでもあのメンツの相手してまだ生きてるの？ って直接言われるくら

いだ。遠回しにオレに死ねとでも？

サカズキさんがマグマにしていた足場を整えてから、クザンさんと向かい合う。

「んじやまつ、始めるとしますか」

「よろしくお願いします。えいつ」

さつきドリルで砕いた岩をこっそりポケットに入れておいた。それを取り出し、武装色を纏ってクザンさんに投擲する。

「うおっ!? いつの間になんもん握ってたんだ？ 手癖わりイナア、オイ」

「小賢しい……」

「まあ、まともに戦っても勝ち目ないからねエ。小細工で埋まる実力差でもないけどオ」

不意打ちでも躲されるか。まあ予想の範囲内。とりあえず最初は遠距離から仕掛ける。

両方のポケットからまた岩を取り出し、両手で交互に投げる。

「こんな手持ってたのか……でも数に限りがあるし、何度もされても慣れちまったぞ？（両手で交互に投げるとかホント器用な奴だなア……ガープさんもやってるか）」

クザンさんの言う通り、ひよいひよい避けられてる。挑発なのか欠伸までしてる……いやあれは素だな。

ポケットの岩がなくなり、蹴りで足場を砕き岩を補給しようとしやがむ。そこに、

「**【^{ソル}剃**】。あつけないが、いつも通り凍ってもらうか（サカズキの時みたいに何か用意してると思ったが、何もないのか?）」

「ここだ!」

「**【^{メタルフオーゼ}機械変化**】」

「**【アイス…ツ!?** なんだ、こりやア?」

「クザンの手エ、溶けてるねエ」

「やはり何か企んどったか。あの様子じゃと、体温を高温に変えちゃうようじゃのオ」

クザンさんがいつものようにオレの体を【アイスタイム】で凍らせようとしてきたので、体に触れられる前に体をストローブに変えて表面の温度を70度くらいまで上げといた。もつと温度上げられるけど、まあ実戦じゃなくて組手だし。ヒエヒエの実の能力者だからすぐ冷やせるでしょ。オレ自身が凍らされないことに意味がある。

海賊相手には500度くらいで搦んでみようか?…止めどころ、いきなりやってショック死されたら困る。100度くらいならいけるか? 温度加減は海賊相手にちよつとずつ上げて試すか。戦意を折るのに十分使えるだろう。

「せいっ!」

「おわっ!?!」

【スクラップ・フィスト】!

地面に手をつき、その手を軸に驚いてるクザンさんの足に武装色を纏った蹴りを放って体勢を崩す。

立ち上がり体を高温にしたまま【スクラップ・フィスト】で殴りかかる…よし、今度は武装色でガードされてない。

「まともに食らったねエ」

「やはり近頃だらけすぎじゃけエ、小僧の攻撃なんぞまともに食らうんじゃ」

このまま攻め続けて、膝つかせてやる! そのまま拳でクザンさんを殴り続ける。

「あらら…ちよつと油断しすぎたか? 【嵐脚】(こりやあ後でサカズキに嫌味言われるな…:))」

【鉄塊(仮)】

クザンさんの【嵐脚】で蹴られる。【機械変化】を使った【鉄塊(仮)】と武装色でガードするが、オレの体が軽すぎて衝撃で吹っ飛ぶ。

「触れられねエなら、触れずに凍らせて閉じ込めるか。【アイスボール】」

「終わりだねエ」

「熱で氷が溶けようが、小僧では間に合わんじやろうなア」

飛んでるオレの体が球状の氷に閉じ込められる。触れなくても凍らせられたのか!?

この氷も武装色で覆われてるが、オレの周りの氷は熱で溶けてスペースが出来る。こうなることはクザンさんもわかってるはずだが……。

見聞色で狙いを調べると……ああそういうことか。強くなるための組手で、敵対した時に備えて隠していることがバレるのは避けたいなあ。クザンさんだけならまだしも、両親のことバレたら一番命狙つてきそうなサカズキさんには教える気がさらさらしない。しようがない、熱と武装色だけでなんとかあがいてみるか。

「メタルフォーゼ機械変化」。【ドリル・ランサー】!」

全身をストロブに変えていたのを手足だけに限定し温度を500度まで上げ、さらに両手をドリルに変え武装色纏って氷を攻撃し続ける。熱でちよつとずつ溶けてはいるが、クザンさんも外から凍らせ続けている。

このままじゃ……ああ、もうタイムアップか。

氷で覆われた密閉空間で呼吸し続けたことで内部の酸素が徐々になくなり、酸欠でオレの意識が途絶えた。

☆☆☆☆

「何を海軍本部中將があんな歳の小僧の攻撃をまともに食らつちよるんじやア? だらけすぎじゃけエ、膝をつく寸前まで追い詰められるんじやろうが」

「その話何度目だよオイ。結局膝つかずに勝つてんだからいいだろうが。おんなじこと何度も言うからロゼの奴にも反発されてんだろ」

「別に構わんわい。わしに反発しようが、あの小僧の海賊嫌いは変わらない。海賊という悪を滅ぼすため、十分利用可能じゃけエ」

「5歳のガキ利用して海賊滅ぼそうとするなんざ、随分自信がねエんだなア海軍本部大将つてのはよオ……いや、お前が自信ないだけか？」

「なんじゃと？ わしの力、お前の体で試してみるかア？ 氷でマグマに勝てると思っちよるのか？」

「やってみろよ。マグマごとお前の体凍りつかせて、ただの石ころにしてやるよ」

「う、うくん」

「目エ覚めたかア〜い？」

「ボルサリーノさん？ ……あの2人、何言い争いしてんの？」

オレが目を覚ますとボルサリーノさんが近くにいた。そして少し離れた所でクザンさんとサカズキさんが何やら言い合っている。

「クザンが君の攻撃まともに食らったでしよオ？ それが原因でまア〜た口喧嘩だよオ〜」

「オレが頑張ったでいいじゃん」

「そうだねエ。いい加減にしてほしいよねエ〜」

「それにしても、クザンさんって直接触れなくても凍らせられたんだね？」

「昔からよくサカズキと意見が割れて諍い起こしてたから、マグマを触れずに凍らせられるように練習したみたいだよオ〜？」

なるほど。たしかによく考えたら仲の悪い同僚にマグマグの実の能力者がいるんだし、氷に熱なんてオレでも考えつくような弱点、本人がよくわかってるか。まあ凍らせれにくくなるから無駄ではないが。

そしてクザンさんが変わる前から元々仲は悪かったのか……。

「お〜い。この子も目エ覚めたし、その辺でやめなよオ〜」

「ふん、お前に焼きを入れるのはあの2人が戦った後にするか」

「上等だ。お前のマグマみてエな頭冷やすのは後にしといてやる」

「まだ何か言ってる……」

「大将と中将がああだと、下に示しがつかんでしよオ……」

まだ何やら言い合いながら、あの2人がこっちに来る。

「よオ、体に異常はねエか？」

「うん、問題ない」

「そうか。まあお前も結構頑張ってたよ。特に、その、あれだ……忘れ
た。もういいや」

「そんなやる気ない慰めなら、ない方がマシだよっ！」

そんな話してる途中でわからなくなる程度の見どころなら、ないも
同然だ。サカズキさんと言い争いしてる間に忘れたのか？

「じゃあボルサリーノさん、よろしくお願いします」

「もういいのかアい？ まだ休んでもいいんだよオ？」

「この2人ケンカしたくてうずうずしてるみたいだし、組手終わった
らラーメンでも食べに行かない？ いい年してケンカして居心地悪
いし。オレ、ねぎ塩ラーメンで」

「ふふっ、そうするかねエ。わっしはみそラーメンにするよオ」

「オイオイ、2人だけでずるいじゃないの。こいつ凍らせておれも行
くわ。おれア冷やし中華で」

「誰を凍らせるじゃと？ 氷ごと焼き尽くしちやるわい……わしは担
担麺じゃ」

この2人も一緒に行くのか……じゃあ些細なことでいちいち言い
争わないでくれ、うっとおしい。センゴクさんが気にしてるから。こ
んな調子でこれからの海軍大丈夫なのか……？ って。頑張ってく
ださい、あなた以外にこの人たちがやガープさんの手綱握れる人なんて
数えるほどしかいないんだから。コング元帥が元帥を引退したら、ま
ず間違いなくセンゴクさんが元帥になるし。差し入れにおかきでも
持つてくから。

そんなこんなでボルサリーノさんと向かい合う。

あの2人はギリギリ声が届くか届かないかの距離を開けて、クザン
さんは肘をつけて寝そべり、サカズキさんは座ってる。

「じゃあぼちぼち始めるかア。どうせさっきの2人みたいに、わっし
にも何か用意してるんだろオ？」

「やっぱバレルか。【機械変化】^{メタルフォーゼ}、【ジェット・ウォリアー】」

「……オイ、明らかに見た目がおれたちの時と違うじゃねエか。あん

なもん隠してやがったのか……」

「あれが小僧のボルサリーノ対策なんじゃろうが、わしらには使わずに温存するとはずいぶんなめた真似をしてくれるのオ……」

離れた2人が何やら怒っているが無視する。その怒りは後で2人でケンカして発散してくれ。次からは2人にも使う気満々だが、最初にはボルサリーノさんにぶつけたかった。

今のオレは服ごと全身を機械化し、首から下を丸ごと大きなジェットエンジンに変え、背中には大きな噴射口、そしてあらゆる所から空気を噴射出来るように体を作りかえている。今までは服が機械に出来なかったので思いついても出来なかった。服ごと変えないと服が破ける。

「ん〜。たぶん普段足とか首からやってるみたいにい、背中から空気を噴射して速く動くつもりなんだろうけどオ、それでわっしの光に追いつけるとは思えないよオ〜?」

「まアそうだなア」

「そもそも光にスピード勝負を挑む時点で無謀じゃろうが」

たしかに光にスピードで張り合うのはあまり賢い選択ではないだろう。だがだからこそ、これがこの人に通用すればたいいの人には通用するだろう。それに体のスピードだけで勝負するわけじゃない。

「光に追いつけるかはこれから試します!」【スクラップ・フィスト】
!」

「ッ!」

よしっ! 手応えありだ。

ブオン! とオレが殴った後に移動する音が響いてくる。

このまま攻撃し続ける!

「オイオイ、どういうことだ? ボルサリーノの奴、攻撃されてる場所と全然違う場所を武装色でガードしてるぞ」

「ボルサリーノが光で動く前に、小僧の攻撃が既に決まっちよるのオ。その上パワー不足を音速以上のスピードで補っちよる」

「(おかしいねエ……? 見聞色で攻撃を先読みしても、間に合わない上別の所を攻撃されている。光で距離を取ろうとすれば、その瞬間に

殴られてる……一体何をしているんだア？」

「^{ゲッボウ}月歩（仮）」

ボルサリーノさんを蹴り上げ、空を飛び追い越し上に回る。

そして、

「スクラップ・フィスト」オツ！」

全力で殴りつけて、背中から地面に叩きつけた。

やった！ この3人相手に初めてダウン取った。どうせ光だから地面に叩きつけられたダメージはないが、初めて殴り倒したというのはオレにとつてわかりやすい成長の証だ。

「オイオイ……膝つかせるどころか、背中を地面につけちまったよ」

「やはりあの小僧使えるなア。海軍に入らんでも、あの海賊を生かそうとする甘い思想だけでも変えりやあ十分じゃけエ（海軍を動かせん事態に上手く利用できそうじゃ）」

「ツたく、痛いねエ。せいぜい音速越えてる程度の速さなのに、わっしが避ける前に攻撃が来るのはどオゆうカラクリなんだアい？」

「ふふつ、ふははははははははははっ！ 体を機械化して反射速度を光速に、思考速度を体のスピードに合わせて、ボルサリーノさんの動きを見聞色で先読みして、実際に動く前に攻撃してるんだよ！ この距離ならいくら光速で動けても、実際に動き出す前にオレが攻撃出来るっ。ついでにフェイント代わりにわざとオレの攻撃先読みさせて、後から攻撃場所変えたりもしてるね」

「……教えてくれるんだねエ（すぐく腹が立つ表情だねエ。あれエ？ でもそれってエ……）」

「あいつ、そんなとんでもないことしてたのか（まだ武装色が未熟だから、全身武装硬化して周囲を氷で覆って閉じ込めればいいか）」

「ボルサリーノのスピードに通用すれば、ほぼすべての人間に通用するじやろうな（小僧の甘つちよろい武装色の攻撃を、全身武装硬化で防いでマグマで囲むか）」

ボルサリーノさんが聞いてくるので、オレはかつてないドヤ顔で勝ち誇りながら高らかに種明かしをした。ガープさんには全身武装硬化で防がれた上、音速越えてるのに反応されたけど。あの人の反射神

経人間じゃねえ。まあでもこれから身体能力と武装色を鍛えれば、いずれ誰にも防げなくなるだろう。能力なしの素で荊ソウルが出来るようになるだけでスピードは上がるし。

何より今のスピードでもボルサリーノさん以外の海兵からは、命を狙われても逃げられる。

「それで、わっしは降参するつもりはないけどオ、まだ続けるのかアい？」

「ん？ そちらが続けるつもりなら、オレもやりますけど」

「そうかアい？ じゃあ君の攻撃イ、破らせてもらうねエ(すこし調子に乗り過ぎでしょオ。実力が足りねエのなら、勝てねエもんはいくら知恵を絞ろうが勝てねエよオ)」

何？ ガープさんみたいに全身武装硬化で防いでカウンター入れるつもりだろうか？あの時は反応されたのに動揺して体を掴まれたけど、わかっていれば掴まれる前に離ればいいからそう簡単に捕まるつもりはないんだが。

「スクラップ・フィスト」！ なっ!？」

「ん、遅いねエ」

オレの攻撃はボルサリーノさんの手で受け止められていた。それが意味することはつまり、オレの攻撃は完全に見切られてる。

すぐに離れてまた攻撃するが、

「スクラップ・フィスト」ッ！」

「やっぱ遅いねエ。止まって見えるよオ(こりゃア便利だねエ。使い勝手の良い技だア)」

何度やってもオレの攻撃は受け止められる。

「な、何で急にオレの攻撃が!？」

「君イ、自分の反射と思考の速度を能力で光速化してるんだろオ？」

「そ、それがどうかした？」

「わっしもピカピカの実の能力でやってみたら、おんなじことが出来るみたいだねエ」

「はあっ!？」

「……え、えぐいなア、オイ。ロゼが頑張つて編み出したんだろう技

を、一瞬で自分の物にしやがった」

「こりやア決まったのオ」

「やってみたら出来たってことは、今まで1回も試したことなかったの!?!」

「んん? そうだねエ。それがどうかしたかアい?」

「なんで今まで試したことないんだよ!? 能力者になったばかりでもなし、光になれる能力なら、すぐに試してみてもおかしくないじゃん!」

「……返す言葉もないねエ。今までビームや光速の攻撃だけで困らなかったからねエ(ゼファー先生のよく言う『能力に頼りすぎだ。』つてエのは、もつと身体能力や覇気を鍛えろって意味に加えて、わっしが能力を使ってるだけで、使いこなしてないって言いたかったのかねエ?)」

まさか今まで反射速度が他の2人と変わらないどころか少し遅いくらいだったのは、出来ないんじゃないかと試したことがなかっただけなんて……実力を越えるつもりが逆に強くしてしまった。どうすればいいんだ?

「まあ今はそれよりもオ、光の速度で思考や反応が出来て光で動けるわっしとオ、光の速度で思考や反応が出来ても音速でしか動けない君イ。いくら見聞色で君が優れていてもオ、どっちが勝つだろうねエ?」

「……………これが、絶望か…………」

「じゃあいつものようにイ、光の速さで蹴られてみるかアい」

ボルサリーノさんの攻撃に、【神速】^{インパルス}で攻撃箇所を武装色でガードするが、武装色で負けているので防ぎきれない。躲しても後から攻撃を合わせてくる。

攻撃にカウンターを合わせるがすべて躲される。完全にジリ貧だ。一方的に蹴られるだけ。

これはもうダメだな……未来でも見えるようになるか、それともガープさんみたいに素の身体能力で反応できるようになるか、あるいは他の2人みたいな広範囲攻撃でもない攻撃が当たらない。勝負

にならない。

「こ、降参です。参りました……」

「ん〜？ もういいのかアい？」

「はい……もしかしてオレが殴りまくったの、怒ってます？」

「いやア〜？ ゼエ〜んぜん怒ってないよオ〜？」

嘘だ、絶対怒ってる……この人ゆったりした喋り方の割に、実は結構短気だし。顔を中心に蹴られまくって体がボロボロだ……ゴーグル、壊れてないよな？ ゴーグルも機械化してたから大丈夫とは思うけど……。

それにしても膝をつけることには成功したものの、結局誰にも勝つには至らなかつたか。もう今のオレにはこれ以上出来ることはない。工夫でどうにかなる実力差じゃなかつたか……。もしもの時のために、せめて逃げられるくらいにはならないとなあ。

光学迷彩が欲しい。姿を消してオレの見聞色で気配を消せば、ボルサリーノさんからも逃げられるだろう。

「頑張ったじゃないのオ、まさかあんだだけボルサリーノに攻撃入れるとはなア……おれに使わなかつたのは腹立つけど」

「あのスピードでチエーンソーを使い首を切り落とせば、前半レベルの海賊なら難なく殺れるじゃろうなア。わしに使わなかつたのはなめすぎじゃがな」

クザンさんに褒められると同時に不満を言われ、サカズキさんは不満を言うと共に隙あらばオレを海賊殺戮マシーンに洗脳しようとする。

「まあ結局また負けましたけど。今回こそはいけると思っただけだなあ」

「甘く見すぎでしょオ。わつしに勝つのは100万年早いよオ〜」
「いや、ロゼが勝ち誇ってカラクリ教えてなきやヤバかつたんじゃないの？ あと100万年は時間じゃなくて距離だろ」

「ふっ、お前が最初に膝をつくことになるとはなア。まあそれも仕方ねエか。ゼファー先生に能力に頼り過ぎじゃと言われちよるのはお

前だけじゃけエ」

「……ロゼくんにあれを使わせることも出来なかった若造共がほざくねエ?」

「ああ?」

あ、あれ? 何か3人の雰囲気が一触即発なんだけど。とりあえず離れとこう。

「この中で1番年上だからって若造とは言ってくれるじゃないの? おれとこのバカが争ってる時にいつも自分は関係ねエって面アしやがって」

「結局お前はわしとこのアホ、どっちの味方なんじゃ? 『どっちつかずの正義』なんぞ掲げおって。風見鶏が……」

「どっちもわっしには合わないねエ。一言で言うとお……どっちも気に入らないねエ。いつまでガキみてエなケンカしてるつもりだアイ?」

これはもうダメだな。まあずつと不満貯め続けて一気に爆発するより、たまに小出しに発散する方がマシか。

「とにかくあれだ。お前ら2人とも、ほら………忘れた、もういいや。とりあえずここで凍つとけ」

「お前ら2人ともたるんどるけエ、焼きいれてやらにやあならんなア。海軍本部大将として」

「光を捕らえられるとでも思っているのかアイ? わっしの速さア、ひさしぶりに味わってみるかア? お前らの体でエ」

「ジェット・ウォリアー」。【月歩^{ゲツポウ}(仮)】!」

見聞色で攻撃の気配を感じ取ったので、音速で飛んで空に逃げる。こんなケンカに巻き込まれて死んでたまるか!

「アイス塊^{ブロック}」 「暴雉嘴^{フェザントベック}】!」

「流星火山^{りゅうせいかがん}】!」

「八尺瓊勾玉^{やさかにのまがたま}】!」

始まったか……。

うわあ……オレ、あの人たちに命狙われる可能性があるのか……
全つ然実力が足りないな。

海に冰山と火山が出来てレーザーの雨が降り注いでる。天変地異
でもここまでのことは起こらないだろ。

はあ、とりあえずまだ終わりそうにないし、おやつ食べに帰るか。

おやつを食べてゆっくり休憩して、母さんに晩は外で食べてくると
伝えて、3人が戦ってる場所に飛んで戻ってきたがまだやっていたの
で、海軍本部に行つて修行したり知り合いと話したりしていると7時を
回った。

流石にもう気は済んだだろうと思い、また戻つて来たんだが、

「そろそろ、凍つてもらおうかア。【アイスタイムカプセル】！」

「その程度の冷気で凍るわけにやあいかなア。【大噴火】！」
だいふんか

「いい加減しぶといねエ。【天岩戸】！」
あまのいわと

まだやってる……いつまでやる気なんだ。

そろそろ口出しとこうかな？

オレは自分の手を拡声器に変化させ、攻撃に巻き込まれないよう十
分離れた上空から、大声で声をかけた。

「おーい！ もう日が暮れちゃったよ！ 何時までも海兵がケンカし

て、仕事はいいの!？」

「げっ……やべエ。もうこんな時間かア」

「わしはもう今日の書類仕事は終わらせちよるけエ、問題などありや
せんが、そつちのアホは違うようじゃのオ？」

「いつまでもそうケンカ腰になるんじゃないよオ、まったく……ふ〜」

これで止まらないようなら、後はセンゴクさんかゼファアールさん呼ん
できてほつとこう。

「はあ…もういいや。続きは今度にしよう」

「何度やろうがわしのマグマで焼きつくしてやるけエ」

「血の気の多い奴らだねエ。まだ蹴られ足りないのかアい？」

え？ これから毎回この3人、あんな戦いするつもりなの？ 冗談でしょ？

…今はそのことは考えないようにしよう。とにかくケンカは終わったんだし。

「じゃあ海軍本部の食堂にラーメン食べに行こ？」

「そうすつか…：食ったら部屋に缶詰めだな、こりやア」

「いつもはもう帰ってる時間になったけどオ、家に帰らなくていいのかい？」

「おやつ食べに帰った時、外で食べてくるって伝えといた」

「わしらが戦い始めるといつの間になら消えおって。戦闘に混ざるくらいに気概を見せんか」

「オレ、1VS1でも勝てない上に、3連戦した後だったんだけど？ 修行で再起不能の傷負ったら元も子もないでしょ」

「最初の2戦は奥の手隠しちよったろうが」

「そーいやアそれがあつたな。ずいぶん余裕かましてくれるじゃないの？」

根にもたれてた…：おとなげ大人気ねえ。

「いや、あれは一番速いボルサリーノさんに初見でどこまで通用するか確かめるためだから。この人に効けばたいいの人はオレの速さに反応できないでしょ…：まさかあんなすぐ真似されるとは思わなかったけど」

「便利な技アもらったよオ」

「これで書類仕事も光速で出来るね。オレも毎日あれで本読んでるよ」

「…君イ、あんなすごい技そんなことに使ってるのかアい？ わっしも読書は好きだけどオ」

「時間の節約になって便利だよ？」

「……なあ、ボルサリーノ。その技の練習がてら、書類仕事手伝つてくれねエか？」

「なアんでわつしが。自分でやりなよオ……」

「やっぱダメかア……」

「当たり前じゃろうが」

「この足場は……ほつところか。こんな赤い土の大陸近くに火山や氷山があつても誰も困らないでしょ。小さい無人島程度の大きさだし」

ロギア
自然の能力者だからすごいのか、この人たちがすごいのか。たぶん両方だな。次からはここで組手やるようにするか。赤い土の大陸に沿って移動すれば方角わからなくても来れる。

ゲッボウ
月歩で海軍本部に向かったが、何故か途中から競争になった。ビリが他の人たちにおごりだそうだ。どう考えてもボルサリーノさんの独壇場だろう……。

案の定ボルサリーノさんが光速移動で一着、次に音速で飛んだオレ、噴火の推進力の差でサカズキさん、最後にクザンさんになった。クザンさんも氷で妨害とかしてたけど、まあスピード対決は分が悪い。氷の能力をスピードに利用する方法なんてオレには思いつかない。

食堂に行きクザンさんのおごりで、さっきの宣言通りの注文をする。

オレやクザンさんにボルサリーノさんのは普通のねぎ塩ラーメン、冷やし中華、みそラーメンだが、サカズキさんの担担麺は豆板醤マシマシのスープがぐつぐつ煮えたぎっていた。この人いつもこんな食べてるのか……体に悪そう。

後日、オレが考えないようにしていた予想通り、オレと3人の組手の後に、あの3人の三つ巴の戦いが恒例行事になった。これで今よりもっと強くなるんだろうなあ……。

オレがこの人たちを越える日は来るのだろうか？

いや、疑わないことが強さだったな。自分を疑ってちや、勝てる勝
負も勝てなくなる。絶対越えてやる。

「機甲のロゼ」

今日はベルメールさんの誕生日プレゼントをノジコと一緒に買いに行くのだが、

「ねえ、にいに。どうしてもわたしはいつちやメツなの?」

「うーん、基本的にシャボンディって治安悪いからねえ。それにまだそんなに歩けないでしょ?」

「にいにがいるよ? ベルメールさんがににはつよいつていつてた」

「オレがそこそこ強くても、出来ないことはいっぱいあるから。海とかダメだし」

ノジコの身支度を待つてる間、オレは一緒に来たがって腕の袖にしがみついているナミちゃんを説得してる。この子、冒険好きみたいだし、そろそろ外に興味が出てくる年頃なのかもな。

ベルメールさんにはサプライズプレゼントをするために、シャボンディに出かけることを秘密にしているので、2人には傷の1つでもつけるわけにはいかない。秘密でなくとも傷なんてつけさせるつもりはないが。

マリルフォードに売っていればいいんだけど、食料や生活用品ならともかくプレゼント用の商品はそんなに売ってない。酒やたばこに武器弾薬、その他装備品は売ってるけど。

オレたちがいない間、ナミちゃんの面倒を見てもらうために、アイとビンズに来てもらっている。

普段ベルメールさんの仕事中は、ノジコとナミちゃんが2人で部屋にいて、オレが頻繁に様子を見に来て、時間の空いている海兵も様子を見に来てくれているが、流石にナミちゃんを1人きりには出来ない。この子絶対1人で外に出る。

「む。ちゃんとおててつないではなれないから」

「マリルフォードで散歩から始めよ?」

「むっつ、やだやだあ！ にいにのいじわる！ けち！」

「そんなこと言ってもダメだからね」

「にいになんてだいつきらい！」

「がはあっ!!？」

ナミちゃんの言葉のナイフで、オレのライフが0になり吐血しながら膝をつく。

今のオレには鉄の意志も鋼の強さも感じられない……。

「ねえロゼ、何やってるの？（バカみたい）」

「ア、アイン……オレはもうダメだ。すまないがお前との決着、つけられそうにない。妹に嫌われたあ……」

「いや、そもそもあなたその子の兄じゃないでしょ？ 自称兄じゃない」

「げふっ！」

アインから死体蹴りを食らった。

たとえ血のつながりはなくても、オレにとっては妹だから……。

「に、にいに、だいじょうぶ？（くちからちがでてる……）」

「ほらロゼ！ 妹(?)が心配しているぞ。物のはずみで言ってしまっただけだろう」

「ほ、本当かビンズ？ オレはまだこの世に存在しているのか？」

「にいに、しないであえ！」

「ああ！ 妹（断言）を残して死ぬるかっ！」

「はあ……（なんなの？ この茶番……）」

オレが生きる希望を見出して復活すると、アインが冷ややかな目でオレを見ていた。

オレがガープさんと本気で戦ってるのを見られて、あの時オレがわざと負けた（引き分けた）のがバレ、さらにガープさんに海軍に勧誘されていながらそれを断ってるのもバレてから拗ねられてる。もう慣れた。ガープさんがオレを勧誘するのはオレの実力以外がメインなんだけど、人の秘密を勝手に言うわけにもいかないしな。ガープさん、うっかり話しちやっただオレ以外には教えないようにしてるし。

「どうして普段わたしと組手する時は全身機械にしないのよ!?」って文句言われたけど、そんな戦闘中いつも全身機械化したら、背も筋肉も育たないでしょ。機械なんだから。

使わなきや勝負にならない相手以外には、組手では部分的な機械化しか使うつもりはないと正直に伝えると、改めて「絶対あなたを負かす!」とのお言葉を頂いた。

まあ強い対戦相手が出るのは歓迎なのでいいか。ビンズは心配してるけど、オレとアインが本気で戦う日が来ればいいだけだし。あれだけやる気があればきつと強くなるだろう。

それより今はこの子の説得だ。

「帰ってきたら、一緒に散歩に行くから今は我慢して?」

「むう〜……」

「お土産買って来るから」

「……プリンがいい」

「うん、わかった。オレとノジコがいない間、このお兄ちゃんたちの言うこと聞いて待っててね?」

「わかったあ……」

「ありがとう。出来るだけ早く帰って来るから」

なんとか説得できた。よかった。嫌われてなくて本当によかった

……

「拙者はビンズ、よろしくな（兄というよりまるで親だな……）」

「わたしはアイン、よろしくね? ナミちゃん」

「ナミです。きょうはよろしくおねがいます!」

2人の挨拶に、ナミちゃんが元気良く挨拶してぺこりと御辞儀する。

「ふふっお利口さんね……この子、あなたよりも賢いんじゃないの、口ゼ?」

「ふははっ、だろう?」

「……ふんっ（皮肉が効かない、このシスコン(?)……わたしだけ気にして、バカみたいじゃない……)」

「そ、それよりもこの子の面倒を見るにあたって、何か気を付けることとかあるか？（ロゼは気にしてないが、この空気はなんとかならんのか？）」

「ご飯やおやつは冷蔵庫に入ってるからそれを。ご飯はレンジでナミちゃんが火傷しない程度の温かさまで温めて。少し前からスプーンやフォークを使う練習をさせているから、うまく使えなくて癩癩起こして食器を放り投げて、別のきれいなのをちゃんと持たせて、ゆっくりでいいからと優しく励まし、自分自身で食べるよう上手く誘導してくれ。あとこの子はお金に異常な執着があるから財布を抜かれなように注意すること、気づいたら取られてるから。それとそろそろイヤイヤ期に入ってて色んなことを嫌だって言うから、もしそう言われても怒らずに根気強く話を聞いてあげて。それから」

「待て、待ってくれ！ そんな一気に言われても覚えきれん。紙か何かに書いてくれ！（やつぱりこいつ兄じゃなくて親だろ!? いつも海軍で修行しながらそんなことまでしてたのか？）」

「それもそうだね。え〜つと紙は……」

紙を探して辺りを見る。見つけた。

「メタルフォォーゼ機械変化」

自分の体を印刷機に変え、血から作ったインクを手袋ごと変化させた手の平から出し、頭の中でまとめた注意事項を紙に印刷する。

「はいこれ。お願い」

「う、うむ（文字がビツシリだ……）」

「……あなたの悪魔の実の能力って、戦闘以外にもそんなことまで出来るの？」

「オレの練習次第でね。そもそもメカメカの能力の本領は戦闘面以外の便利さにあると思うんだ。あとはオレ次第で増やせる手札の多さを活かした、色んな状況への対応力。戦闘面はゼファーさんたちみたいに身体能力と覇気を集中して鍛えれば、あれだけ強くなれるんだし。お腹を冷蔵庫に変えて、飲み物入れて持ち歩いたりしてるよ？ 飲む？」

そう言ってお腹をパカッと開けてオレンジジュースの入ったペツ

トボトルを出してみる。

うん、いい感じに冷えてるな。

「え、遠慮しておくわ。お腹から出した飲み物を飲むのはちよつと……」

「そっか。能力が覚醒すれば冷蔵庫内蔵のロボを作って歩かせることも出来るだろうけど、今のオレではこれが限界なんだよね」

「本部の特訓場でもたまに見かけるが、悪魔の実の能力者というのは凄いな」

「オレからすれば、能力者でもないのにあれだけ強いゼファーさんやガープさんの方が凄いんだけどね」

「ふふん。ゼファー先生だもの。当然よ！」

アインが誇らしげに胸を張る。仲が良いようで何よりだ。

「おまたせ〜」

話しているとノジコの準備が完了したようだ。

「ヘアバンドもそうだけど、それ、オレが持つて来た服？」

「うん！ ど、どうかな？」

「よく似合ってる。気に入ってもらってるみたいでよかった」

「そっか、えへへ。ロゼもそのゴーグル、いつも首にかけてるね（なんか首輪みたい）」

「3人からのプレゼントだからね」

このゴーグルはベルメールさん達から誕生日に貰ったものだ。

恨まれて顔を覚えられないように、少しは顔を隠せとも言われた。たしかにもつともだ。

海賊は海軍に引き渡してるけど、人攫いはボコボコに叩きのめして埋めてるだけだからな。

ゴーグルを貰ってからは戦闘中にかけてる。ドリルやチェーンソーで武器を破壊する時、破片や火花が目に入ったら危ないしな。機械化すれば平気かもしれないけど、もしもを考えれば試す気はない。

「じゃあ行こうか。ビンズ、アイン。ナミちゃんをよろしく」

「妹をよろしくお願いします」

「任された。気を付けてな」

「あんまり遅くならないようにね」

「いってらっしゃい。はやくかえってきてね」

「普段ロゼやあたしにしているみたいなのワガママ言っちゃダメよ?」

「いわないもん!」

「じゃあいつも通りいい子にしててね?」

「うん!」

いい返事だ。まあこの2人なら問題ないだろう。面倒見いいし。

ノジコと部屋を出てシャボンディ方面の沿岸部に向かう。

「それにしても意外だね? ロゼがナミのお願い断るなんて」

「シャボンディは海賊やら人攫いやら天竜人やら、危ないものが多いからね。オレもよく襲われてたし。まだ走れもしないのに危ないでしょ」

「……それ、大丈夫なの?」

「ん? ああ、最近は襲われなくなったし、大丈夫だと思うよ? 流石にまだ襲われてたら連れて行かないよ。ノジコも戦えないんだし」

そりやよく襲われる奴と一緒に買い物なんて、怖がって当たり前だ。オレの周りには強かったり細かいこと気にしない人が多いから失念してた。

はっちゃんと父さんに会いにシャボンディパークに行ったけど、はっちゃんは一人居ても戦える。オレも行ったのは魚人とバレにくくするためだ。シャボンディの人間はたいがい怖がって魚人に近づこうとしないから、子供と一緒にいるのが魚人とは思わないだろう。

最近是人攫いに襲われてない。ようやく敵わないと諦めたか、足を洗ってカタギになったのか。数か月前に襲ってきた人攫い集団をまとめて返り討ちにして片っ端から埋めたのが効いたか?

空飛んでると海賊にはまだ襲われるけど、飛ばなきや平気だ。シャボンディに行く時あまり見られないようにしないとな。

「はあ……あたしじゃなくてあんたのことよ。ベルメールさんも心配

してるよ?」

「オレ? ナミちゃんは見たことないけど、ノジコはオレが訓練して
る所見たことあったよね?」

「そりや見たことはあるけど(何やってるかわからない内に大人がば
たばた倒れてた……)」

「大丈夫なように鍛えてるから。オレが戦わなくとも、今の世の中が
物騒なのは変わらないし」

「あたしもベルメールさんに頼んで、鍛えてもらった方がいいのかな
?」

「強くなつて困ることはないと思うよ。東の海は4つの海で最も平
和って言われてるけど、まったく海賊がないわけではないんだし」

「……そっか。もうすぐココヤシ村に行ったら、お別れなんだね」

ノジコが少し寂しそうに呟いた。

「まあオレが旅に出たらココヤシ村にみかん食べに行くつもりだし、
また会えるよ。死に別れるわけじゃないんだから」

「そうだよね……うん、ベルメールさんやナミとおいしいみかん作っ
て待ってるから!」

「楽しみにしてるよ」

話しながら歩いていっていると海が見えてきた。

「それじゃ飛ぶから掴まって」

「うん」

ノジコを背負ってシャボンディに飛んで行く。

速く飛び過ぎると落とすかもしれないので程々のスピードで。

それでも普通の船より速いけど。

「わあ、大きいシャボン玉がいっぱい飛んでる!」

「見えてきたな。プレゼントに良さそうなものが売ってるお土産エリ
アまで飛んでくから、もうしばらく掴まって」

ノジコが目を輝かせてる。シャボンが飛ぶ光景はオレにはいつも
のことだが、他の島から来た人には珍しいらしいからな。

気配を探りながら旅行者向けの観光・お土産エリアに向かう。

40番グローブの人がいない所で降りて、背負っていたノジコを下ろす。

「そういえば誕生日プレゼント買うの早くない？ まだ10月だよ？

あと2か月もある」

「今日はベルメールさん、シャボンデイの付近を船で巡回してるから見つかりにくいんだよ。次いつ機会があるかわからないし」

それに、ベルメールさんの誕生日までノジコ達がマリンスフォードにいるかわからないから。

「それじゃ適当に店に入つて選ぶほうか」

「うん！ ベルメールさん何が喜ぶかな？」

「店はいっぱいあるし、じっくり選ぶほう」

「ベルメールさんタバコ吸うし、ライターはどう？」

「もう持つてるんじゃない？ あたしたちに持つて来てるみたいに服がいいんじゃないかな？」

「子供服だったらず少し大きめの買えばいいけど、大人のはベルメールさんに合うサイズがわからない」

「この指輪とかきれいじゃない？」

「たしかにきれいだけど、指のサイズがわからない。あとあんまり高すぎると返して来いって言われそう」

「このヘアバンドは？」

「……ベルメールさんの髪型にヘアバンドは必要ないんじゃないかな」

「これ！ これがいいんじゃない？」

色んな店を回つてあれこれ話しながらプレゼントを選んでいると、今までで一番自信満々にノジコが言った。

「ブレスレット？ 3つセットの」

「うん！ ナミとはお揃いの小銭入れ貰ったのうれしかったし。家族3人お揃い！」

なるほど。3人分なら多少高くても気にしにくいし、ベルメールさんは血が繋がってないのを気にしてる節がある。ナミちゃんの兄

と胸を張って言ってるオレより確実に気にしてる。まあまだ子供にはサイズが合っていないけど。ずり落ちそう。

ふははっ、ちゃっかり自分もプレゼント貰ってるあたりナミちゃんの姉だな。

「じゃあ買って来るからちようだい」

「はい。あたしちよっとトイレに……」

「あ、会計済ませてから案内するからちよっと待っていて」

「1人で行けるから！ 子ども扱いしないで！」

そう言っただけでノジコは店の外に出て行った。迷子にならないように気配だけ気にしておくか。

会計を済ませて、プレゼント用の包装をしてもらったブレスレットをコートのポケットに入れ、公衆トイレに向かう。とりあえず場所はちゃんとわかってたようだ。

腹から出したジュースを飲みながら近くで待っておく。

「ロ、ロゼ……」

数分後、ノジコが女子トイレから出てきた。

首に腕を回され動きを封じられ、こめかみに拳銃を突きつけられて。て。

トイレの周りにいた男たちが20人程集まってくる。仲間だろう。「ようクソガキ。探したぜ？ この1年、お前の顔を忘れたことはなかった！」

ノジコに拳銃を突きつけてる男とは別の奴が、薄ら笑いを浮かべながら声をかけてくる。

こいつがリーダーだろう。

「若葉狩り」か」

手配書で見た顔だ。

子供やルーキー海賊を攫って売りとばしすることで去年あたりから手配書が発行されて悪名が上がった海賊。数か月前、医療大国として有名なドラム王国の王子を誘拐して身代金を要求したことで、6500万ベリーに上がった奴か。

向こうはオレを知ってるようだが、オレには覚えがない。今まで倒した海賊は例外なく海軍に引き渡してる。

「機甲のロゼ」って呼ばれてるらしいな？ シャボンディパークでおれ達の邪魔したガキが大層な名前じゃねエか」

……初耳だ。『キコウ』？ 『気候』。『貴公』。『機甲』か？

『機甲』、科学兵器や機械力で装備すること。そんな戦闘で機械を使うのがモロバレな異名を付けられてたのか。

そういえば海兵が「また『機甲』が海賊を捕まえたらしい」とか噂してるの聞いたことがあったな。あれってオレのことだったのか。

そして思い出した。こいつら去年メイプル売ろうとしてた人攫いか。

そういえばあの時は2人が魚人とか人魚とかバレたらまずいから、こいつら放って移動してそのままだったな。去年は手配書が出ていなかったが海賊だったのか。

……つまり、これはこいつらに止めを刺して心を折り損ねたオレのせいか。

ノジコの頭に突きつけられた拳銃の引き金に指がかかっている。少し指を動かせば、弾丸が頭を貫くだろう。音速以上のスピードで殴り飛ばしても、殴った反動で発砲されるかもしれない。

周りの人間には期待出来ない。人質が取られてるし、この島の住民は騒ぎが起きても決して関わらない。自分が巻き込まれるから。長い間海賊、人攫い、天竜人と接してこの島に根付いた処世術だ。海軍に連絡してくれればいい方。賢い生き方だ。相手は無法者や権力者が力がないのに下手に首突っ込んででも事態が悪化するだけだろう。

いつも通り自分でなんとかするしかない。

「そのガキを相手に人質取らなきゃ前に出られないなんて、ずいぶんオレが怖いみたいだな。オレには拳銃を向けなくていいのか？」

挑発してノジコに向けられてる拳銃をオレに向けようとする。

「お前には後で鉛玉をしこたまブチこんでやるッ！ ここで暴れると

海軍が来るかもしれないねエ。無法地帯の19番グローブまでついて来い。妙な真似をすればこっちのガキがどうなるか、わかるよなア?」
「……ずいぶん詳しいな?」

「長い間この島で人攫いしていたからなア。海賊になるキツカケをくれたことだけは感謝してるぜエ? おれ達の海賊旗を見りや命が惜しくてどいつもこいつも簡単に金を差し出す、何をしようが自由だ! お前にはたっぷり札をしてやるよ」

元人攫いで海賊か。天竜人も加わればオレの嫌いな人間3種類制覇だな。反吐が出る。

「ロゼエ……ごめんなさい。あたしが1人で出て行ったから……」

「ノジコは悪くない。これはオレのせいだ。ごめん。絶対助けるから」

ノジコが涙ぐみながら謝ってくるが、謝るのはオレの方だ。不甲斐無い。オレと一緒にいながらこのザマか……。

「ああそうだな。お前が悪い。お前がおれ達の邪魔をしたからだ。お前と一緒にいたせいでこのガキは狙われたんだからなア? (丸腰でこのガキを見つけたのはラッキーだったぜ。何に使われたのかはわからねエが、武器がなけりやただのガキだ)」

……こいつら、オレが悪魔の実の能力者つてことには気づいてないのか? 何か機械の武器を使って倒されたと思ってるのか。

「お前がおとなしくしてればこっちのガキは助けてやるよ (このガキを気が済むまでいたぶって、殺す寸前にもう1匹のガキを売りとぼすと告げて地獄に叩き落としてやる。生まれてきたことを後悔して死ねツ!)」

よく言う。約束守る気なんかなくせに。

☆☆☆☆

「気は済んだか? ならさっさとあの子を放して消えろ。今なら見逃してやる」

「ば、化物めツ! (こいつ、悪魔の実の能力者だったのかツ!? 拳銃で

撃つても効かない、剣で斬っても剣の方が折れる！」

「せ、船長オ。もうこんな化物放つて逃げましようよ！」

「ふざけるなッ！ ガキに舐められたまま引き下がれるかッ！（冗談じゃねエ。このまま人質を解放なんかしたらこの化物に殺されるッ！）」

貴様らと一緒にするなよ。殺しはしないが見逃すつもりもないが。

19番グロブに連れられてから1時間は経ったか？左手を手錠で柱に繋がれて攻撃を受け続けている。こんな海楼石製じゃない手錠なんていつでも壊せるが、ノジコを捕まえてる奴が引き金を引いてしまうかもしれない。

オレが攻撃され始めてからノジコの状態がマズイ。泣きながら自分を責め続けている。

いい加減に諦めればいいものを、こいつらいつまでもしつこい。

オレが機械化を解いて傷を負えばこいつらは満足するんだろうが、それではオレが殺されノジコが奴隷として売られる。何の解決にもならない。

「貴様らじゃいくら時間をかけてもオレを殺せない。諦めろ」

「ッ舐めやがって！ いくら体が丈夫だろうがッ」

言いながら『若葉狩り』がオレを地面にうつぶせで倒す。

その瞬間殺気を感じて身震いする。

「っ!？」

「構造上、関節は脆いだろうがッ!!」

柱に繋がれたまま上を向いた左腕の肘を全体重をかけた思い切り踏みつけられる。

ゴキンッ!!

鈍い音が響き、腕に激痛が走る。

「ガアアアアッ!？」

「ヒヤ、ヒヤハハハッ！ ようやく、悲鳴を、上げやがって！ この、

化物がッ！」

左肘が本来曲がらない方向に曲がってる。

曲がった左肘を何度も何度も踏みつけられる。

「ロゼエツ！ もうやめてよっ！（あ、あたしのせいで……！）」

違う、去年こいつらの心を折るのを怠ったオレが悪い。

「ハハハッ、動くなよお嬢ちゃん。今良い所なんだからよオ」

ガブツ！！

「いてっ、このガキッ！」

ノジコが男の腕に噛み付いて拘束から逃れる。

良かった……結局オレは何も出来ていない。ただ攻撃を受けていただけだ。

「ロゼーッ！」

ノジコが泣きながらオレに駆け寄ってくる。

「あくあく。おとなしくしてりや何もしなかったのによオ。野郎共オ、あのガキ撃ち殺せエ！（このガキの腕はへし折った。もう人質は必要ねエ。売るつもりだったが、このガキが1匹いりや十分だ。能力者は高く売れる。ヒヤハハッ、このガキの目の前で殺してやる！）なっ、そんなことさせるかっ！

全力でノジコに向かって走って、銃弾が当たらないように抱きしめて、機械化したコートで覆って壁にする。

バンバンバンツ！！

銃声が響き、オレの体に弾丸が当たるがこの程度効きはしない。

「ごめん……遅くなって」

「イ、イカレてんのか？ 自分の腕を……！」

オレの左腕の肩から下が柱に手錠で繋がれ、あらぬ方向を向いたままぶら下がっている。

土壇場で体を分離出来るようになった。もう少し早く出来るようになったら左腕も無事だったが、この程度仕方ない。

左腕を体から切り離れたせいか、痛みも消えた。神経が繋がってないからだろう。

「いくら化物でも片腕を失えばもう怖かねエ。残りの手足もへし折つてやる！」

【拳・骨・隕石】 オー！

ドゴオン!!

「ヴオゲアア!!!」

置いて来た左腕の、拳だけを切り離して武装色を纏い、高速で飛ばし「若葉狩り」の顔面に叩き込みそのまま殴り飛ばす。

「ヒイツ!? せ、船長オー！」

「ノジコを捕まえてたのは貴様だったか？」

「く、来るなア化物オツ！」

バンバンバンバンバンバンツ!

銃弾が飛んでくるが、効かない。すべて周りに跳ね返る。

全弾撃ち尽くしたんだろう。引き金を引いても弾はもう飛んでこない。

「さっきまでの薄ら笑いはどうした？ 少しは奪われる者の気持ちかわかったか？」

「み、見逃してくれエツ！ おれは命令されてやってただけで」

「たかが腕一本壊したくらいで、化物との差が埋まるとでも思ったか？ 両手両足をもがれようが、貴様らのような鉄の意志も鋼の強さも

感じられない奴らに、オレを殺せはしない。」

「こ、殺さないでくれエツ！」

「誰に手を出したのか、後悔させてやるっ！」

ギンツ!!

空気が震える。バタバタと残りの海賊共が気を失って倒れていく。これって……

「……これ、父さんがやったのか？」

「気づいていたのか……（さっき何やら不吉な技名が聞こえた気がするが、今は気にしないでおう……）」

物陰から父さんが出てくる。少しバツが悪そうだ。

「まずは腕を見せてくれんか？ 少しは心得がある」

「わかった。ノジコ、離れて……っノジコ!? 大丈夫!？」

抱きしめてたノジコを見ると気絶していた。

全部防いだはずだけど、もしかして流れ弾に…!？」

「あゝ、その子ならお前が腕を外した時に気絶してたぞ?（私も思わずこいつら皆殺しにしそうになった。てつきり腕を切り落としたのかと）」

「……そっか。傷がないならまだいい」

後でちゃんと謝らないと。

とりあえずノジコをそつと寝かせて、拳を切り離したことで手錠から外れ、地面に落ちてる腕と空中に飛ばしてる拳を自分の方へ飛ばして持つてくる。

ガシャンツッ!

左腕を元の通りに合体させる。同時に痛みも戻ってきた。

「つつう! お願い……!」

「ああ」

父さんがオレの左腕を見て、軽く触れたり、どこに痛みがあるか聞いてくる。

「……おそらく骨が折れてはいまい。能力の影響で頑丈なおかげだろう、ヒビが入ってるかもしれないが脱臼だ。だが靭帯が損傷しているのだろうか、腫れがひどい」

「治りそう?」

「心配するな、必ず治る（近くの医者でダメなようなら他の島まで行くでしょう。必ず治す）」

「折れてないなら、この、あらぬ方向を向いてるの、どうにかならない?」

「やろうと思えば出来るが……私はちゃんとした医者というわけじゃない。痛いぞ?」

「お願い。このままじゃ、ノジコが気にする」

「……わかった。座ってくれ」

父さんがオレの左腕の上腕と手首を持ってゆっくり動かす。

ゴキツという音がして、おかしい方向に向いていた腕が元に戻る。腫れてはいるが、さつきまでよりはマシに見えるだろう。

「ぐうっ！」

「大丈夫か？」

「うん、平気……まだ、痛いけど」

「しばらく動かさないように。後でちゃんと医者に診てもらいなさい」

「わかった……それで、こいつらって父さんがやったの？」

「……いや、私は手を出していない。お前がやったことだ」

「やっぱ、そうなんだ。霸王色の覇気だよな？……もつと早く出来るようになってれば、怖い目に逢わさずに、済んだのに」

子供のオレの偶然出来た霸王色で気絶するってことは、やっぱりその程度の覚悟の奴らだったか。

「……私を責めないのか？お前たちが捕まっているのに、手を出さなかったんだぞ？」

「今回のことは、オレの不始末だ。オレの詰め甘さが原因の、オレの戦い。結局ノジコの行動に助けられただけで、何も出来なかったけど。それに、本当に危なくなったら、助けるつもりだったんでしょ？オレが腕を踏まれる前、すごい殺気だったよ？」

今までオレが感じたことがないほどに。

こいつらは、オレの痛がる様子を笑うのに夢中で気づいてなかったけど。

「(そこまで気づかれていたか)……海賊に卑怯という言葉は存在しない。騙し、裏切り、人質、毒、兵器。勝つためならば手段など選ばない。今回はこの程度のチンピラどもだから、その程度の傷で済んだしその子も無事だったが、これからもお前が海賊と戦い続けるつもりなら、今日のようなことはまた起こり得るだろう。それでも戦うのか？」

「戦う。どんな罠を仕掛けられようが生き延びる。どんな武器を使つてこようが叩き潰す。人質を取られようが奪い返す。そのために、敵を圧倒する実力を身につける」

「今まで通り、殺さずにか？」

「殺さない。オレが海賊と戦うのは、正義の味方だからじゃない。気に入らないから倒してるだけだ。それで殺せば、自分の欲望の為に殺して奪う、こいつらみたいな海賊と同じになる。そんなのごめんだ……父さんはやっぱ、オレが海賊と戦うのは嫌？」

「はっはっはっ、私のことなど気にするなッ！ お前の人生だッ！ お前の好きに生きろッ！ その傷が治ったら、霸王色の制御の鍛錬を始める。今は治療に専念しなさい（この子の嫌いなタイプの海賊から我々の待ち望んだ海賊が現れるとは到底思えん。人は自由に生きるものだ。なア……？ ロジャーよ……）」

「はいっ！ ……あゝ、父さん。ノジコをオレ達の家まで運んでくれない？」

「別に構わんが……お前は どうするんだ？」

「こいつらを海軍に引き渡してくる」

ノジコのことにも心配だけど、オレの友達に手を出したこいつらを、このまま放っておくわけにはいかない。

冥王父さんに海軍までこいつらを届けてもらおうわけにはいかないから……。

「……あれだけ怒っていたのに、もういいのか？（今日は今までになく聞く耳を持つていなかっただが）」

「こいつらの海賊ごっこに付き合っただけでやるほど、オレは暇じゃないよ。人を待たせてるし。船長だけ連れてって、海兵に伝えて後で他の奴らも全員連れてってもらおうことにするよ。埋める時間が惜しいから、逃げられないように両手両足の骨を折って、その辺に転がしとこうかな」

「そうか。この子のことは任せておけ（このチンピラどもはそれで十分後悔するだろうな。珍しくそれ以上のことをするつもりだったか。甘さが少し消えたか？）」

父さん達から聞いた海賊のケジメの付ける方法、手足を切り落とすつもりだったけど、止血のことを考えると時間が惜しい。穴掘って埋めるのも時間がかかりすぎる。

さつさと済ませて家に帰ろう。プリンも買わないと。

“ビブルカード”

海賊共の骨を折って、
“若葉狩り” だけを鞭で縛りつけて海軍基地
まで引きずって行く。

勢い余って、さつき殴り飛ばして顎を砕いた
“若葉狩り” の骨も折ってしまうというタイムロスもあつたが、まあ目を覚ませば逃げようとしただろうし、別にいいか。

無法地帯を通つてまた絡まれたら面倒なので、造船所やコーティン
グ職人が集まつてる50番台のグローブを通り、海軍基地がある66
番グローブに向かう。

「おい、ロゼ。その腕、どないした……？ なんやえらい腫れとるけど」

「あつ、ウィリーさん。ちよつとドジっちゃつて。折れてはいないみたいだから、問題ないよ」

60番台のグローブの途中で友達のウィリーさんに会った。魚人街で暴れた奴でも海軍に引き渡した帰りかな。

この島の住人は魚人を怖がり差別するが、魚人を怖がっている海兵は務まらない。ウィリーさんも海兵と普通に接している。まあ内心で魚人に対してよからぬことを思っている海兵もいるかもしれないけど、いくらこの島で魚人や人魚が差別されていようが、リュウグウ王国はれっきとした世界政府加盟国。面と向かつて悪し様に言ったり、露骨に態度に表したりはしない。相手が海賊であるならともかく、世界政府直属である海軍所属の海兵がそんなことをすれば、普通に問題になる。

父さんに左肘を見てもらつて、動かさないようにと言われたから、袖をまくつたまま肩にコートをかけたただけなので、いつもと違うのを不審に思つて声をかけたんだろう。

正面から見たら変色して腫れた肘が丸見えだ。帰るまでに袖を戻しておくか。

ウィリーさんは魚人ゆえか大きな体格をしている、身長3メートル

弱ある。

髪の色は白く、肌の色は黒と白のツーカーカラー。胸にタトウウーを入れて、虎柄の服を着ている。ゴーグルをかけて、トゲの付いた金棒を肩に担ぎ、首には鎖を巻いている。

普段あの鎖で暴れた海賊を縛って、コーティングした船に乗って海軍本部か海軍基地まで引き渡しに来てる。別にウイリーさんだけなら泳いでこれるが、コーティングした船に乗せないと連れてる海賊が溺死するから。

シャボンデイで船をコーティングして魚人島に向かった海賊が暴れていると思うと、自分がやったわけじゃないとはいえ罪悪感が……いや、父さんは相手を選んでるみたいだけど。考えなしだったり喧嘩っ早い海賊はシャボンデイですでに暴れて、海兵とかオレが潰してるし。『白ひげ』の縄張りになってから確実に被害は減ってるらしいし。

でも魚人島の住民相手に略奪すれば、船を壊されて移動手段がなくなるくらい少し考えたらわかるだろうに、何で暴れるんだ？ 島の外に放り出されるだけで人間はアウトだろうに。理解出来ん。

実際ウイリーさんは人魚や魚人を攫って船で逃げようとした奴を、シャチの魚人お得意の水泳スピードで追いかけて、金槌で船底にコーティングのシャボンごと穴を開けて捕らえたりしてるらしい。

付いた異名が『魚雷のウイリー』だ。

海、それも海中で魚人や人魚にケンカを売るのは普通に考えて自殺行為だろう。陸でケンカを売って言いたいわけではないが。

「よかったらでいいんだけど、こいつ海軍に引き渡してくれない？」

「ん？ ああ、ええで。はよその腕医者に診てもらってきなア」

「ありがとう。用を済ませたらすぐ行くよ。ちなみにこいつとその仲間が去年メイプル攫おうとした奴」

「……ほオ、こいつが話に聞いてた奴かア……まあもう無事なん胴体ぐらいみたいやしええわ。今も引きずられながら痛みで呻いとるし」
「懸賞金は好きにしていいいから」

「怪我人がいらん気イ回さんでええさかい行つてきイ。後で家までこの鞭と一緒に持つてくわ」

「こいつの仲間の海賊たちは19番グローブに転がしてるから、海軍に伝えて連れてってもらつて」

「19番やな、わかつた伝えとく。ほな気イつけてな」

ウィリーさんに縛つた鞭ごと「若葉狩り」を渡して、空いた右手で左袖を戻して家に向かう。

☆☆☆☆

「ただいまっ。ノジコ起きた？」

「まだソファアで寝ている。怪我はないようだし、じきに目を覚ますだろう」

「ロゼ、あんたは大丈夫なの？ 人質取られて怪我したつて聞いたけど、輸血は必要？（ああ、良かった……！ 思ったより平気そうね）」
「うん。オレは大丈夫。怪我也血を流すようなものじゃないし、輸血の必要はないよ」

オレの血液型はS型のRH⁺。少し珍しいため、輸血が必要になつた時の為に定期的に採血してもらつてる。まあ今は海軍の医者に診てもらえるから必要ないけど、いつ海軍に追われることになるとも限らないわけだし、まだ続けてもらつていた。

いずれ旅に出るのだから自分で出来るようにならないといけない。

「ダメじゃない、ちゃんと止め刺してバツキリ心を折らないと。半端に済ませて復讐心残しちゃうと、今回みたいに自分も周りも傷つけちゃうわよっ。」

「ごめんなさい。身に染みたよ」

「どうか気配出してくれば、私たちも見聞色で異常があつたつて気づけるのに」

「……思いつかなかつた」

「まあ、無事でよかつたわ。とりあえず水袋に氷水入れといたから、冷

やしときなさい」

「ありがとう」

水袋を受け取り、ノジコの眠るソファアの左側に座って肘にあてる。

体に怪我こそしていないようだが、心の傷は時間と共に癒えることもあれば、いつまで経っても治らないことだってある。なんとかしないと。

「う、うーん……」

「ノジコ、大丈夫？」

30分ほど経過し、温くなった水袋の中身を入れ替えて戻るとノジコが目を覚ました。

「口、ロゼツ！ 腕が、腕があつ!？」

「落ち着いて。折れてないし、なくなってもいないから。ごめん、驚かせて」

左腕を見せながらそう言った。

この反応、父さんの言う通りオレが腕をなくしたのがよほどショックだったらしい。折れたり脱臼したのを見た反応じゃないな。

「ほ、本当？」

「うん、本当だよ。ちよつと怪我したけどちゃんと治るから。ごめんね、怖い目に逢わせて」

「違うよー。あたしが1人になったから……」

「ううん、もしオレがノジコと一緒に行ってたとしても、たぶん防げなかった。だからノジコは何も悪くない。それどころか、ノジコが自力で海賊に立ち向かってくれたおかげでオレは助かった。ありがとう」

一緒に行ってもオレはトイレの前で待ってただけだろうし、女子トイレをずっと睨んで監視するなんて変態みたいなことはしなかっただろう。気配を探しても、知り合いならともかく、知らない人間の男と女の区別なんてつかない。女子トイレにオレに恨みを持った奴がノジコを人質に取りに入るなんてまったく考慮していなかった。去年のオレの詰めめ甘さと、相手にオレの常識が通用しなかったからこ

そ、今回のことは起きたんだ。

ノジコに感謝こそすれ、謝られることは何もない。

「で、でも……」

「はいはい、2人ともそのくらいにしておきなさい？誰も死んだり、取り返しがつかない傷を負ったわけじゃないんだから。反省するのは大事だけど、気にしすぎちゃダメよ？ これでも飲んで少し落ち着いて。うちの子のポカに巻き込んだじゃってごめんなさいね」

「そうだな、あまり自分を追い詰めん方が良い（ロゼの姿を見るまで取り乱しておったのは自分だろう……）」

母さんがホットココアを持って来てくれた。

飲みながら話すか。

「い、いえ、ありがとうございます。えつと……」

「オレの母さんと父さんだよ。オレがあいつら海軍に引き渡してる間に、父さんにここまでノジコを連れて来てもらったんだ」

「シャッキーって呼んで？ うちの人はレイさんって呼ばれてるわ」

しれつと嘘は言わず2人の本名も隠す母さん。

まあ海賊に襲われたばっかのノジコに、引退してるとはいえ海賊だったとバラすのは配慮がなさすぎるだろう。

「気づくのが遅れてすまなかった。怖かったろう」

「はい……ねえ、ロゼ。いつもあんなことしてるの？」

「心配しなくても大丈夫だよ。オレが怪我してノジコ達に会いに来ることなんて滅多にないでしょ？ 海軍本部でやってる組手の方がよく怪我するよ」

「（そりや偉大なる航路前半の海で粹がってるような海賊や人攫いと
の戦いより、訓練とはいえガープやゼファーとの戦闘の方が怪我する
でしょうね……自然の能力者とも相手してるみたいだし）」

賞金稼ぎを始めた最初の頃は、よく怪我して帰って来て母さんに
手当てしてもらったけど、今は海軍本部での修行で怪我することの方
が多いため海軍のドクターに診てもらっている。悪魔の実を食べて
からは、覇気を使えないどころか知りもしない海賊や人攫い相手には

怪我する方が難しい。海賊相手に怪我するなんて久しぶりだな。

この肘もノジコを送って海軍本部で診てもらおう。そこらの医者よりよほど腕がいいだろう。海兵に怪我は付き物だし。

「でもロゼの夢って野菜とか果物を集めることでしょ？
賞金稼ぎバウンティハンター やってわざわざ海賊と戦わなくても……」

「オレの目的が野菜や果物を集めるだけでも、海賊がナワバリにしてる島だってある。話を通じる奴もいれば通じない奴もいるだろう。それに今の大海賊時代、海に出たら海賊を完全に避けるのは不可能だよ。だったら強さは絶対に必要だ。船とか苗木とか種とかを買うのにお金も必要だしね」

「普段の海賊への態度から、ただ海賊が嫌いなだけで賞金稼ぎバウンティハンターをやっているのではと思うこともあるが、この子はこの子なりに考えているのだな……」

「じゃ、じゃああたしも大きくなったらロゼと一緒に旅に出る！」

ノジコがそう言う。

仲間になってくれること自体はうれしい。たとえ弱くてもオレが強くなって守るなり、鍛えるなりすればいいだけだ。でも……

「ベルメールさんとおいしいみかんを作るのはいいの？ そのために頑張って勉強してるのに」

「そ、それは……」

「それに、一緒に来るって今日の事気にして言ってるでしょ？ 純粹に一緒に旅がしたいならオレも歓迎するけど、そんなしよぼくれた顔して言われても、とても旅がしたいようには見えないよ」

「だって、ロゼ、あんなこと続けてたら死んじゃうかもしれないじゃん……危ないよお」

「ふははっ、死なないよ。オレが普段どれだけ死なないように、鍛えたり色々考えたりしてると思ってるのさ？」

「(まあ、普段から『手足が千切られたらどうやって戦おう……？』とか呟いてる子は心配よね……どうして手足が千切られることが前提なのかしら？ お願いだから、そもそも手足が千切られないようにし

て……!」

まだノジコは心配そうにしてる。

別に今すぐ旅に出るわけじゃないんだから、そんなに心配しなくていいのに。

「海に出るならもつと笑いなよ」

「なんでよ?死ぬかもしれないのに……」

「だからだよ。海賊がいなくとも海は、特に偉大なる航路グランドラインでの航海は常に命の危険を伴う。オレが海が弱点の悪魔の実の能力者というのを除いても、特殊な気候や海流に、サイクロンみたいな危険が。だから船乗りは自分の命を懸ける覚悟で海に出るんだ。命をドブに捨てるんじゃない、今を懸命に生きるために笑って人生楽しむものさ。受け売りだけだね。それに、海に出なくても大事なことでしょ?」

まあ父さんに聞いたのは海賊の話だったけど、それ以外の船乗りだって覚悟は同じだろう。オレ自身はそんな覚悟決めた海賊に会ったことなんてないけど、父さんが言うんだからいるんだろうな。『白ひげ』とかそうなんだろうし。

「そうだつ! そんなに心配ならこれを渡しておくよ」

オレはコートの内ポケットに入れているビブルカードを取り出し、少し千切つて、ROSEローズと自分の名前を能力を使い印刷する。

「何? この紙」

「ビブルカード。別名、命の紙って呼ばれてる。ちよつと手の平に置いてみて?」

「うん……あれ?勝手に動いてる……なんで?」

ノジコが手の平に置いたビブルカードが、オレの方に引き寄せられるようにちよつとずつ動いている。

「どうして動くのかはオレも知らないけど、そのビブルカードはオレの爪を材料に使って作ってある。爪の持ち主であるオレの体に引き寄せられるんだ。その紙が動く方向にオレはいる。濡らしても燃やしても平気」

「不思議な物があるんだね」

「それで、ここからが本題なんだけど、その紙は作るのに使った爪の持

ち主の生命力を表してる。命の紙って呼ばれてる理由だね。その紙が無事ならオレもちゃんと生きてるから」

「本当?」

「ああ、本当だよ」

オレはそう言うが、ノジコはまだ不安そうにしてる。そんなにオレは死にそうなのか……顔に死相でも出てるのか?

それともすぐ死にそうなほど、弱そうに見えるんだろうか……? うーん……。

「今すぐ海に出るんじゃないから大丈夫だ。10年は後になるんじゃないか? 色々準備も必要だ。そうだな……オレが大人に、18歳になったら一度、どうにかして必ず会いに行く。ベルメールさん達と仲良く暮らしててくれ。その時になってもオレと旅に出るって気持ちがあつたら、一緒に行こう」

「……うん! ロゼがぜひ一緒に来てくださって頭を下げるくらい、美味しい果物作れるようになってるから! 今日断ったことを後悔するくらい!」

「ふははっ、それは楽しみだ」

ようやく笑ったか。よかった、もう大丈夫か?

後悔させられるってことは、オレがその時頭を下げた仲間を誘って断られるのか? まあ、会いたくなったらいつでも会いに行けばいいだけのことか。

「約束だよ?」

「ああ。必ず守る」

ノジコが左手を出そうとしてオレの左腕の怪我を思い出したのか、かわりに右手の小指を立てて出してきたので、オレも右手の小指を出し指切りに応じる。

だが何故か不満げな顔をされた。ジト目で見られる。一体なんだ?

「どうかしたか?」

「指切りする時くらい、その手袋取ってよ」

「ああ、うん。それもそうだな……まあいいか」

ノジコに指摘され、手袋を取り、改めて指切りする。

「……傷があるわけじゃないんだね。何でいつつもつけてるの?」

「そうだな……今日は色々あったし、また今度教える。ベルメールさん達にもまだ言っていないから秘密にしてくれないか? そのうち自分で教えるから」

「? うん、わかった」

どの道、この腕じゃしばらく実戦も激しい訓練もしない方が良くだろう。治るまでは本を読んだり、ノジコ達と話して過ごそうか。しばらく会えなくなるしな。

「じゃあそろそろマリソフフードに戻るか? ナミちゃんを待たせてるし、プリン買って行こう」

「うんっ。あつ、そういうえばベルメールさんのプレゼントは?」

「ちゃんと無事だ、ほら」

コートのポケットに入れていたプレゼントを手渡す。少し包装が乱れてるが、許容範囲だろう。

「ありがとう! じゃあ早く帰ろっか。ナミがふくれてそう」

「それはいかんっ、急ごう! 飛んで行くぞ!」

「あははっ、そうだね」

「気を付けてね。ちゃんと医者に診せるのよ? (どうしたんだろう?)

なんかこの子、さっきから口調が……)」

「ああ、行ってくる!」

「私も途中まで送って行こう(普段の喋り方から、海賊と戦ってる時のような口調になっているな。あれよりは表情や目つきが穏やかだが。この子を心配させないためか?)」

急いでプリン買って行かねば。

☆☆☆☆

何事もなくプリンを買い、沿岸まで父さんに送ってもらい、ノジコを小脇に抱えてマリソフフードまで飛ぶ。

片腕でノジコを抱えてるのでバランスが悪く、落とさないようにして飛ぶのが少し大変だったが、なんとか到着。

「ただいま。ナミ、おとなしくしてた?」

「プリンも買って来た。ビンズとアインもありがとう。全員分あるから食べてくれ」

ノジコと部屋に入って肩にかけてた袋を手に持ち、3人に声をかける。

「おそーい! ノジコとにいにだけでずる〜い」

「すまん、遅くなった」

「この子ちゃんといい子にしてたわよ」

「ああ、慣れずに戸惑うこともあったが、問題なかった」

「というか、別に財布取ろうとしないじゃない」

「なんだとっ?」

オレはいつものように取られてるんだが……今日は慣れない人と一緒だから猫でも被ってたのか?

「そもそもナミにいつも財布取られてるの、ロゼだけだよ? 海兵の

ベルメールさんがそんなの許すわけじゃないじゃない」

「何故オレだけっ?! まるで意味が分からんぞ……」

「遊ばれてるんじゃない? すぐ許しちゃうし」

「毎回ちゃんと叱っているんだが?」

「いやあれ、全然怖くないから……(さっきのロゼ、ナミが見たら怖くて泣いちゃうんじゃないかな……?) あたしもちよつと怖かったし。

ていうか口調、どうしたんだろ?」

「むう……もう少し厳しく叱った方が良いのか……?」

他の人から取っていないならいいか? 別にちゃんと返してくれるからオレも困らないし。ただのお茶目なイタズラか、仲の良い兄妹(自称)のコミュニケーションだろう。

今はそれよりも、この肘を診てもらわないとな。

「ちよつと皆でプリン食べていてくれないか? ちよつと怪我したから医者に診てもらってくる」

「そういえばコートの着方が変ね。怪我したのってその左腕?」

「ああ。ちよつと海賊変態に絡まれてな」

「……えく、さんぽはく？」

「不服か……？」と聞かれれば「不服よっ！」とビンタを伴って返しそうな感じの、口を尖らせて不服そうな表情で、ナミちゃんはジト目でオレを見て、両手で右袖にしがみつきながらそう言う。やめる……そんな目でオレを見ないでくれ……。

まるで「あんた『約束』の一つも守れないの？」という心の声まで聞こえてくるようだ。見聞色を使っているわけでもないのに。

……たしかにオレは怪我をしており、ちゃんと医者に診てもらおうようにも言われている。父さんにも母さんにもウィリーさんにも。

だがしかし、ナミちゃんとの約束はその前からしている。その約束を後から、オレの失態が原因で怪我をしたからと後回しにするのは人として、いや兄（自称）としてどうなんだろうか？ 教育上よろしくないのでは？

この程度の約束も守れずに、これから胸を張ってこの子の兄（自称）と言えるのだろうか？ 誇れる兄（自称）でいられるだろうか？

「……先に散歩に行つてからでも」

「バカッ！ あんだけ踏まれてたのに、さつさとお医者さんに診てもらつてきなさいっ！」

スパーン！という音を鳴らし、平手で頭を叩かれる。

やるな。スナップの効いた中々の平手打ちだ。

「しかしだノジコ。約束を守るのは人として、兄として当然で」

「やかましいっ、あんたは兄じゃないでしょうがっ！」

ドスンッ！

「グウツ……!？」

少し身長差があるためかボディアッパーではなく、魚人空手の正拳突きのような、ノジコの左拳によるコークスクリュー腹パンがオレに炸裂し、オレの体が倒れる前に腕で支えられる。

結構効くな……それを海賊にぶちこめば、もつと早く自力で脱出で

きたんじやないか…？

それに、何やらノジコの頭にうつすら鬼みたいな角が生えているよ
うな…？　すごい気迫だな。

そのままノジコにオレの体は肩に担がれる。

お前そんなに力、強かったのか？オレの体、お前より大きいし、当
然その分重いんだが…：赤ん坊の頃のナミちゃんを抱っこして力が
ついたのか？

「あたしはこいつをお医者さんに診せてくるから、おとなしくしてて
ね、ナミ？」

「イ、イエスマムツ！（にいにがいちげきでやられた…：！　いまのノ
ジコこわい…：）」

「わたしたちもいるから安心して（この子って強いのか？　そうは見え
ないけど）」

「おとなしく医者に診てもらってこい（何やら凄みを感じる）」

いつもと様子が違う姉ノジコの姿に、ナミちゃんもすっかり気圧されてい
る。いつになく従順だな。普段はもつとブーたれるのに、敬礼までし
ている…：ベルメールさんや海兵の影響か？

そのままオレはノジコに、これから出荷されるエレファント・ホン
マグロみたいに肩に担がれ、医務室まで強制連行された。

なんかずいぶんと情けないな…：そして無様だ。普段オレが引き
ずってる海賊共もこんな気分なのだろうか？

ノジコに部屋の外で待っていてもらい、医務室でドクターに診ても
らったが、どうしてもつと早く来なかつた！　とすごく怒られながら
も、手術を行った後、ギプスで左腕を固定してもらった。

絶対安静にしているように、左腕を動かすな、訓練なんて以ての外だ
ぞ、絶対だからな！　とかなり念を押された。

まあオレ、割と医務室常連だからな。ガーブさんやゼファーさん達
にボコボコにされる度に来てる。怪我のしすぎで信用なんてもうな
いだろう。最初の頃は心配されていたが、いつの頃からか、またお前
かつ！　という反応をされるようになった。

散歩は別にいいよな？ 歩かないと帰れもしないし。

「ね、ねえ……なんか平気そうな顔してるから大丈夫なのかと思ってたけど、その左腕の怪我、そこまでひどいの？ 大丈夫？（なんかお医者さんのすごい怒鳴り声が聞こえてきた……）」

「ふははっ、平気だ。靱帯断裂をちよつと大げさに手術してもらったが、左腕を動かさずにいればそのうち治る」

「……ほんとなの？」

「ああ、1週間もすれば治るんじゃないか？」

ドクターにはリハビリ込みで1か月くらいかかるだろうと言われたが、大体いつも言われた治療期間より大分早く治る。医者としての腕がいいな。もしくはオレが無理しないように大げさに言ってるだけだろう。

「……ねえ、さつきから思ってたけど、喋り方どうしたの？ いつもとちよつと違う気がするんだけど。さつき海賊と話してた時みたい」

「少しは強く見えると思つてな。海賊相手にする時も、油断しないように口調を変えるようにしている。まあ、単純に嫌いだから冷たい口調になってるつてもあるが。変か？」

「ちよつと慣れないかな……怒ってるんじゃないんだよね？」

「何を怒ることがある？ それより早く戻ろう。きつとナミちゃん達がオレ達が戻るのを首を長くして待つてる、オレの妹がっ！」

「ああ、うん、通常運転だね……（そのうち慣れるかな？ ていうかさつきあたしが兄じゃないって言ったの、もしかして根に持つてる？）」

雑談しながら駆け足で部屋に戻ってきた。

3人ともプリンは食べ終わったようだ。

「すまん！ 待たせた。治療も済ませたし、散歩に行こうか」

「……にいに、そのうでへーきなの？」

「ああ、大丈夫だ。オレは“機甲”と呼ばれているらしいからな。この程度は問題にならない」

「あら？ その異名、ようやく知ったのね？」

「なんだ、知っていたのか？ オレは今日呼ばれて初めて知ったんだが……」

「拙者も知っていたぞ？ そもそも、その異名は海軍本部で噂になったものらしいからな」

勝手にオレの悪魔の実の能力がバレそうな異名を付けないで欲しいんだが……能力者とバレそうなだけでも結構嫌だというのに。オレについてあんな海賊共に教える情報など何一つない。

「何故教えてくれなかったんだ？」

「放っておいても勝手に知ると思って。といふかなんで今まで知らなかったのよ？」

「聞いたことはあるが、オレのことだと思っていなかったんだ。しかし、どうせなら『農業王』とかが良かったな……」

「まだ1つの農作物も育ててないのに、賞金稼バウンティハンターぎが一体何をすればそんな異名が付くんだ……？」

「たしかに」

トマトに武装色でも纏ってぶん投げて攻撃でもするのだろうか……？ もつたいないな、ちゃんと食べろよ。

まあ一度付いた異名は仕方がない。知られようが関係ないくらい手札を増やせばいいだけのこと。能力者共通の弱点、海や海楼石もそのうちどうにかすればいい。

「ねえにいに、ホントにだいじょうぶ？ しやべりかた、いつもとちがうよ？」

「(そうなの？ 別にいつもと変わらないような。私には昼間のこの子への喋り方や態度の方がよっぽど変だったと思うけど……何だったの？ あれ)」

「ちよつと思うところがあつてな。そして、そう言いながらオレの財布を弄ぶんじゃない……」

「(これが話に聞いていた……この子、本当にいつの間に財布を取ったんだ？ くの一の類か?)」

オレの左腕のギブスをつんつん突きながら、もう片方の手で財布をポンポン投げていた。いつもいつも、いつの間にと取っているんだ？

そしてやっぱり取るじゃないか……本当にオレ以外取られていないのか？

とりあえず自分の財布を奪い返した。

「ゴラツ、ダメじゃないかっ！ 人の物を取ってはいかんといつも言っているだろう？ 取っていいのは海賊共の物だけだ」

「いや、前半はともかくその叱り方はどうなのよ……そんなことをいつもこの子に言ってるの？」

「ごめんなさ〜いつ、てへっ」

ナミちゃんが謝り、かわいらしくウインクしながら舌を出す。

「ふははっ。仕方がないやつだな……海賊共以外の他の人からは取るなよ？ じゃあ散歩に行くか」

「はいー！（しゃべりかたはちがうけど、いつもどおり？ じゃあいいか）」

「そんなんだから財布取られるんじゃない（ナミのあれは人に謝る態度じゃない……）」

「本当に他の人から取ってないならこれでいいだろ。それで3人はこれからどうする？」

「わたしは海軍に入った時の為に航海術の勉強してくるわ。あんまり怪我人がうろちよろしちやダメよ？ どうせ言っても無駄でしょうけど（あんな小さな子が海図を書く勉強してるなんて……まだ本の文字読めないみたいだから読み聞かせたのはわたしだけだ）」

「拙者は竹刀を振ってくる。ご馳走になった。ではまたな」

「ああ、2人とも今日はありがとう。じゃあな」

「ばいばいー！」

ビンズとアインの2人と別れる。ナミちゃんの様子を見る限り仲良くやっていたようだ。

「お前は どうする？ やはり色々あったし休んでいるか？」

「休まなきゃいけないのはあんだでしょ……あたしも行くわ。あんまり無理してると止めるからねっ！」

そう言いながら拳を構え、虚空に正拳突きを放っている……物理的に（息の根を）止めるつもりじゃないだろうな？

なんか今日の1件の影響がたくましくなったな。ちよつとベルメールさんに似ている。

「ねえ、はやくいこ？ まちくたびれたく。ノジコもはやく〜！」

「はいはい。ロゼはあまりその腕動かさないでね」

「わかっている」

ナミちゃんを真ん中に3人で散歩に行く。まだ体力がついていない1歳児がいるのでゆつくり歩く。

「ねえねえ、そのうでどうしてそうなったの？」

「これか？ うーん……ちよつと海賊変態に襲われて階段から転げ落ちたんだ。ナミちゃんも気を付けろよ？ かわいいから」

「うん、わたしかわいいから！」

「いや、何適當なことを言ってるのよ……？」

「1歳に言うような内容ではないだろ？ 大きくなってまた会った時にでも話せばいい」

「その時、ナミはあんたのことまだ覚えてるかしら？」

「不吉なこと言うなよ……」

まだ1歳だから普通に忘れられる可能性は高い。笑い飛ばせない。大丈夫だよな？

「それでベルメールさんのプレゼントになったの？ おしえてー！」

「お揃いのブレスレットよ。ナミの分もちやんとあるからね」

「ほんとっ!? みせてみせて〜」

「ベルメールさんにプレゼントするまでのお楽しみよ」

「え〜、けちっ！」

「そういえば、今日あった事ってベルメールさんにはどうしよう？」

「プレゼントを渡したら教えてくれ」

「えっ？ あんたは一緒に渡さないの？」

「娘2人から渡された方がベルメールさんも喜ぶだろう。オレはその後で今日の事を謝る。先に謝ったらプレゼントのことがバレる」

「謝るって、今日の事で誰が一番悪いかって言ったらあの海賊達じゃない。別にロゼが謝らなくても……」

「あいつらが悪いことを否定する気はオレにもないが、オレが原因でベルメールさんの娘を、お前を危険な目に逢わせたことに変わりはない。1つ間違えば取り返しがつかなかった」

「ちゃんと謝ろう。オレが怪我してたら怒りづらいだろうから早く治さないとな。」

「そんなに重く考えなくても……」

「そうだ！ プレゼント渡す時にナミちゃんとか言うのはどうだ？」

話を切り上げて、前から思っていたことをノジコに耳打ちする。

「え？ でも、大丈夫かな……？」

「まずは形から入るのも大事なことだ。それに、必ず喜ぶはずだ」

「そ、そうかな？ たしかにあたしもよく言ってるし……うんっ！

後でナミにも言っ、やってみる！」

「その意気だ」

「ねえねえ、なんのはなし？ なにをやるの？」

「部屋に帰ったら教えるわ」

「？ わかった」

その後も雑談をしながらマリルフォードでの散歩を続けた。

そして1時間くらい経った頃、

「つくかくれたく……にいに、おんぶして」

ナミちゃんの体力が尽きてしまったようだ。まあ1歳児だしこなもんだろう。

「いいぞ。頑張ってたたくさん歩いたしな。今は左腕が動かさないからしつかり掴まって」

「いやあたしがやるから……片腕動かせない状態でおんぶなんて危ないでしょ？」

「むう……落とすわけにはいかないし、その方がいいか……」

さつきこの3人の中で1番重いオレを平気な顔して担いで歩いて

いたし、ノジコなら大丈夫だろう。

「じゃあノジコ、おんぶして〜」

「お願いする時くらい、お姉ちゃんって言ってもいいんじゃない?」

「ノジコはノジコでしょ?」

「はあ、これだ……ちゃんと掴まってなさいよ?」

「うん! ありがとう、ノジコ!」

「ありがたいならお姉ちゃんって呼んでよ……」

もはやお約束のようないつものやり取りをしながら、妹をおんぶする姉。まあ、そのうちお姉ちゃんと呼ばれるだろう。仲が良いのは間違いない。

ノジコがナミちゃんをおんぶして、一緒に部屋に戻る。

「じゃあ今日はもう帰ることにする。ちゃんと怪我のことを報告する必要があるからな。じゃあまた明日」

「怪我してるんだから無理しないでね?」

「またね〜、にいに〜!」

2人に手を振り別れる。

予想外のこともあったが、大事にならなくて何よりだ。

後はオレがベルメールさんに謝れば今日の問題はすべて終わり。

もうすぐ別れだというのに悲惨な事件にならずに済んでよかった。

“お別れ”

今年も1年がもうすぐ終わる。そんな時期に、オレはマリンプォードに来ていた。去年から決まっていた、ベルメールさん達一家と別れの挨拶をするために。

「分かっていたけど、もう行くのか……寂しくなるな」

「私が仕事の間、よくあの子達の様子を見に来てくれてありがとうね」

「オレも楽しかったから、礼を言われることじゃない」

「それでもよ。あと前に似たようなこと言ったけど、あんまり無茶やって周りに心配かけないようにね?」

「無茶はしていないし、鍛えているから問題ない」

「本当かなあ……言つとくけど、あんたの基準はまったく信用ならないからね?」

そう言い、ジト目でオレを見てくるベルメールさん。

失礼な。現にオレは五体満足で何事もなく生きているじゃないか。

オレは思考速度を速くし、怪我をしてから今月の初めにベルメールさんに謝った時までのことを思い返す。

【ザ・ワールドの世界】発動。

○○○○○

左肘の怪我が完治するまでの間、もうすぐ会えなくなるということもあり、毎日ベルメールさん達の部屋に出入りしていた。

そしてノジコに手袋をしている理由も言った。まあ本当かすごく疑われたが……覇気のこと知らないし、この反応は仕方がないか。

それにしても戦闘が出来なくなるだけで、ここままでやるのがなくなるのか……片腕じゃ本も読みづらいし、料理もさせてもらえない。人と話す以外やるのがなかった。

予想通り1週間ほどで怪我が治って良かったな。

完治してからは今まで通りの日常に加え、父さんに教わって霸王色の制御の練習をしたりして過ごしていると、ノジコ達がベルメールさ

んに無事誕生日プレゼントを渡したと聞き、ノジコを危険な目に逢わせたことを謝罪するため、オレは正座してベルメールさんが仕事を終え、帰って来るのを待つ。

そして帰って来たベルメールさんにまずは土下座し、オレの罪状を話す。いきなり土下座したオレに戸惑いながらも話を聞いてくれた。

話してる途中でナミちゃんが土下座したオレの背に座ってお馬さんごっこをねだってきたが、今は真面目な話をしているのでどいてもらい、少し離れた場所でノジコの膝の上で抱えられ座ってる。

「……というわけで、すまなかつたっ！」

「はあ、それでギブスつけてたのか。何が階段から転げ落ちたよ……嘘までついて、何で今まで言わなかったの？」

「言えばプレゼントのこともバレてしまう。渡した時に喜んでもらいたかつた」

「はあ……とりあえず頭上げて。ちゃんと怪我也治って良かったわ。あんたが怪我したら周りも悲しむんだから」

「……なんで怒らないんだ？ 取り返しがつかないことにだつてなつてたかもしれないのに」

「あんたはもう充分に責任感じて反省してるでしょ？ それに取り返しがつかないことにはなつてないし……プレゼント、ありがとうね」

上げた頭を撫でられながら礼を言われた。その手首には、ノジコが選んだブレスレットがつけられている。2人が大きくなったら

……ベルメールさんに許された以上、これ以上オレが気にするのも関係にヒビを入れそうだな。

「どういたしました。まあ選んだのはノジコだが。ベルメールさんを喜ばせるために色々一緒に探したよ」

「そっか。改めてありがとうね、ノジコ……ナミもね」
「うんっ！」

「あたしたちが大きくなったら、3人でお揃いで付けたいな〜と思つて！」

ノジコと、私は？ という顔をしたナミちゃんに礼を言うベルメールさん。

もう足を崩すか。正座をやめ、立ち上がる。

「そうだ。責任感じてるなら、いつそのこと将来ノジコに婿入りする？ 正式にナミのお兄ちゃんにもなれるわよ？」

「なっ!!」

「ふははっ、そんな理由で婿入りするのはいくらなんでも失礼すぎるだろう。まあ冗談だろうけど」

「そうかもしれないけど冷静に断りすぎでしょこのバカッ!!」

ドスンッ!!

「ガアッ!」

突然、オレの目の前に移動してきたノジコに腹パンされた。

オレの体が力なく横たわる。ついでに長時間正座していたので足が痺れてきた。

「うっ……な、何をっ……?」

「知らないっ! お母さん」もっ、変なこと言わないでよっ!

「は、ははは……ごめんね? ノジコ(冗談のつもりだったんだけど、余計なこと言っちゃったかな……?)」

怒ったノジコが、オレの痺れた足をつんつん突いて遊んでたナミちゃんを抱きかかえ、別の部屋に行く。

ナミちゃんの兄になるのが目当てで婿入りする、って言った方が良かったとでもいうのか……?

とりあえず効果があるかはわからないが、横向きに寝転がり回復体位を取る。

「もう1つのプレゼントも、ちゃんと上手くいったみたいで良かった」
「(その体勢で言うことか……?) あんたが言っただって? お母さん」って呼んでプレゼント渡したら? って」

「ああ。だってベルメールさん、2人と血が繋がってないのを気にしていたらどう? ナミちゃんの兄だと胸を張って言うオレと違って」

ノジコに婿入りしなくても、これを譲るつもりはない。

「あんたはもつと色々と気にした方が良いと思うけど……まあ、そうだね。悪ガキだった私が自分で生んだわけでもないのに、この子達にちゃんと親として認められるのか? って思ってたよ」

「血の繋がりも大事かもしれないけど、夫婦だって血は繋がってないじゃないか。ベルメールさん達みたいに互いを思い合ってればちゃんと親子だろう。センゴクさん達やゼファーさん達だってそうだからオレもナミちゃんの兄だー!」

「……途中まで良いこと言ってたのに、結論それ?」

実際に見たわけではないが、「白ひげ」は船員や傘下の海賊達に「オヤジ」って呼ばれて慕われてるらしいし、そんなに気にすることはないだろう。海賊を見習うっていうのは少しあれだが……まあこのくらいなら。

「親が不安そうにしてると、子供だって不安になるみたいだぞ?」

「子供が知ったようなこと言うねえ……（まあ確かに、兄だって自信満々に言ってるこいつに、ナミもよく懐いてるね……お母さんって呼ばれるようになったし、もっと母親として自信持たないとね）」

「子育ての本にそう書いていた」

「そんなの読んできたのっ!?!」

「参考にするために。オレはもう読んだし、いるか?」

「……………いや、いい」

結構悩んでたな。ふむ……

「まだ少し不安はあるけど、ノジコ達の親として自信がついてきた、つて所か?」

「冷静に分析しないですよ……まあ、そんな感じ。私のことより、あんただって怪我して家族に心配かけたんじゃない?」

「そうだろうな……注意もされた」

「でしょ?これに懲りたら、まだ子供の内はもう少し大人しく」

「ちゃんと止めを刺して心を折らなきゃダメだって。今回の一番の失敗だ……」

今までゴロツキ相手に手加減しすぎだった。

サカズキさん程やるつもりはないが、二度とオレに向かってくる気が起きないように、せっかく化物に見えるみたいだから、もっと化物らしく叩き潰して心を折らないとな……。

「いやそこっ!?! 他にもあるでしょ? まだ子供なのに海賊の相手な

んかするなくとか」

「オレの家は基本的に、子供の自主性に任せる方針だからな。自分の生き方は自分で決めろって」

「ま、任せすぎじゃない？ いや、確かに自主性は育ってるみたいけど……あんたの場合、1人で突っ走るだけじゃなくて、もつと周りを頼りなよ？」

「それと似たようなことも言われたな……じゃあ早速頼りたいんだが」

「おつ、珍しいね。何だい？ 言ってみな」

「なんでノジコに殴られたのか分からない……まさかとは思うが、ナミちゃんの兄になるために婿入りするって言った方が良かったのか？」

「そんなこと言ったら、もつとぶつ飛ばされてただろうね。最低じゃないか」

「やはりそうだよな……」

そつちの方が良かったなら、お手上げだ。正直理解出来る気がしない。

「どうやったらノジコと仲直り出来るか教えて欲しい」

「あく、今はノジコも頭に血が上がっただけだから、時間を置けば大丈夫だと思うよ？ 下手に謝っても、あんたの場合逆効果になりそうだし」

「別れの日までに仲直り出来ればいいんだけどな……しばらく会えないのにケンカ別れは……笑って別れたい」

「ははっ、大丈夫だよ。嫌いになって殴ったわけじゃないから。女のプライドの問題だから」

ああ、そういう類の理由か……。

確かにオレには無理そうだ。原因がわかった所で、何と返せば良かったのかわからないだろう。

男と女は別の生き物だからな。

例えば女にロボの魅力は理解されにくいらしい。ロケットパンチもビンズには喜んでもらえたが、アインは無^{ノリアクション}反応だった。

「放っておくしかないのか……」
早めに機嫌を直してくれればいいんだが……。

☆☆☆☆

あの日はあの後、口も聞いてもらえなかったな……。

体が回復して、お馬さんごつこの馬になっている間も、少し離れた所から無言で睨まれていた。

数日で許しを得られて良かった……。

「あたしとナミの準備終わったよ」

「わたしもてつだったんだよ、おかあさん！」

「よしよし、偉いわね、2人とも」

ベルメールさんに頭を撫でられながら褒められて、ナミちゃんは嬉しそうに、ノジコはオレの視線に気づいてからは少し照れくさそうにしている。気にする必要はないんだが。

「じゃあそろそろ行こうか。船に乘りに」

「たしか休暇で東の海に行くガープさんに、ついでに乗せてもらうんだって？」

「ああ、あの^{イーストブルー}人東の海出身らしくてね。いきなり送ってやる、って言われた時はびつくりしたよ……」

あの人気さくだけで、実力も実績もある偉い人だからな。

そんな人がいきなり来たらそりゃあ驚くだろう。ベルメールさんは将校だが、東の^{イーストブルー}海出身くらいしか接点はなかったはずだ。あのらしいが。

訓練で拳骨食らって気絶したオレを、拉致^{イーストブルー}って東の海に連れて行くこととしたこともあったが、基本的にいい人だ。

たぶんオレの親のこと知ってもそんなに気にしないと思うが、初めて会った時にオレに秘密を漏らしてしまったみたいなのに、周りに広められそうだ……うっかりで殺されかねん。

適当に会話しながら歩いて港に向かう。

ガープさんの、骨を啜えた犬が船首の船が見えてきた。

船の近くにガープさんがいて、こつちに気付いたようだ。

「おお、来たかっ！」

「ありがとうございます、ガープ中將。送っていただいて」

「ぶわっはっはっはっ！ かまわん、向かう方向は同じじや。わしも年末年始位かわいい孫に会いたいからなア！ コングさんから休みをもぎ取ってやったわいっ！」

なんか一度孫に会って来てから急にじじい言葉になったなガープさん。

孫達が成長して海兵になってくれたら、わしも安心して引退出来るなっ！ とか言っていた。気が早いな……上手くそうなくても10年以上先だろう。

「おおロゼ、お前も来たか！ なんだかんだ言いながら、一緒にわしの孫を見たくなったのか？ かわいいぞ〜？」

「いや、気にはなるけど、今日はベルメールさん達の見送りに来たんだ。オレが将来東の海イーストブルーに行つた時にでも紹介してくれないか？」

前にもでれっでれの顔で誘われたことがある。孫を自慢したくて仕方がないんだろうな。意志の強そうな良い目をしていたっ将来大物になるぞ！ とべた褒めしていた。

断りはしたものの、社交辞令ではなく本当に気になる。ガープさんの孫って、どんな人間に育つんだろうか？

何をするにしても人の度肝を抜きそうだな……いや、祖父に似るとは限らないか。

よく知らないし会つたこともないが、厳格な両親だったら、規則を厳守する真面目人間になるかもしれん。

そもそもガープさんは、こんな自由奔放な性格でなぜ海軍に入ったんだろう？ 軍の規律とか気にしない性格と海軍は相性悪いだろうに。まあ慕われてるし案外向いてるのかもしれないが。同期や同僚はともかく、部下にも上司にも友達感覚で接している中將はそういうんだろう。

「おお、楽しみにしておけっ！ それじゃあ3人とも、わしの船に乗

れ。^{カームセルト} 風の海を通って行くからすぐに着く。海王類が出たらわしがぶつ飛ばしてやるから、安心して船旅を楽しんでゆつくりしているがいい」

凄く頼もしい同行人だな。ガープさんの前に運の悪い海王類が出ないことを祈っておこう。

「それじゃあここでお別れだね。元気でやりなよ?」

「ああ、そっちも元気だな」

「約束忘れないでよね?」

「必ず行こう。楽しみにしてる」

「またね、にいに〜!」

「またな。2人と仲良くやれよ?」

お互い笑って別れを告げ、ガープさんの船が出港する。

船に向かって手を振り、やがて見えなくなった。

しばらく会えないが、再会が楽しみだ。

今日はもうシャボンデイに戻るか。

☆☆☆☆☆

シャボンデイまで飛んで行き、今日はもう帰るかと思っていると、

「私は今、金を持っていないから見逃してくれササツ!」

「ヒヤッハー! 初めて見る、半ミンクか? 珍種とは幸先がいい、捕まえろオ!」

オレの友達との別れの余韻をぶち壊しにするように、あからさまに人を売り捌こうとするゴロツキの声が聞こえてきた。

しばらくは、静かだったんだが……。

母さんが言うには、シャボンデイの人攫いがこの島から逃げ出したりにしてずいぶん減ったことが、他の島のギヤング等のゴロツキ連中の耳に入り、ビジネスチャンスとばかりにシャボンデイに来ているらしい。

ここには政府や海軍に黙認された人間屋があるため仕事がいややすいだろうか？海軍本部だつて近いし、黙認されているのは人間屋であつて人攫いではないから、目の前で堂々と攫えば現行犯で捕まるし、他の罪が発覚すれば捕まるんだが……。

はあ……世の中ままならない。せつかく前より少しは魚人や人魚が出入りしやすい島になったと思つていたんだがな。

大海賊時代の海賊と同様に、ブツ倒してもまた現れる。なんとか出来るのか。

とりあえずゴーグルをかける。

以前ノジコと買い物に来て襲われてからは、戦闘しなくてもシャボンディで人前に出る時はゴーグルをかけるようにしている。もう手遅れかもしれないが。まあ、これから来る奴らや今下で騒いでる連中に素顔を覚えられることはなくなるだろう。

追いかけてられている人の方を見ると……あれは何だ？ マスクか？ 顔がパンダだ。

目が動いているし、喋ると口が開いてるから素顔か？ 額にP A N D Aと書いてある。腕は黒く、竹のマークが入つていて、肘に笹の葉がついている。上半身裸で胸にも赤いハートマーク。

すごく目立つ格好をした男だな。

人とミンク族の中間のような見た目。だから半ミンクつて呼ばれていたのか。

それとも動物系の能力者か？ そうならクマクマの実モデル“ゾオン大熊猫”ジャイアントパンダつて所か？

珍種とは、魚巨人や手足長人間みたいなハーフとかの人間屋ヒューマンショップで時価で取引されている者達の総称だ。最低で数千万ベリー、高い時は数億ベリーで取引されるらしい。

ちなみにオレみたいな悪魔の実の能力者も時価。

だからあの追われているパンダ男がどちらだろうと、人攫いにとつては優先的に捕まえて売りとばしたい対象になる。

いや、今はそんなことはどうでもいい、置いておこう。パンダ男の正体もすごく気にはなるが後回しだ。

謎のパンダ男と人攫いの間に飛び降りる。

賞金首は……いないな。たぶん海賊じゃなくて人攫いだし、潰すだけがいいか。

「あん？　空からガキが……こいつが例の……ホントにガキじゃねエか！　ここにいた連中はこんなのにやられたのか？　はっ、情けねエなアー！」

「なッ、子供ッ!?　おい君ッ！　危ないから早く離れるササッ！」

「いや、追われていたのはあんだだろう？　そっちこそ早く逃げればいい。後始末はオレがやる」

「はっ、どっちも逃がさねエよッ！　仲良く一緒に捕まえてやらアー！」

言つてオレ達に襲い掛かってくる。30人くらいいるだろうか？　結構多いしこっちも手数を増やすか。霸王色はまだ上手く使えないし。

「【機械変化】」

メタルフォーゼ
能力で体を機械に変え両腕を、拳、前腕、上腕に分離し宙に飛ばす。

その内の、拳以外の4つの部位をドリルパーツに変形させる。

「能力者か！　でも腕がなくなってるじゃねエか。降参でも」

「【機甲の斬撃】」

シルバー・スラッシュ
ザンツ！

「ギヤアー！」

何か言っていた奴に近寄り、足の膝から先をチェインソーに変化させ、飛び上がりながら胴体を下から斬り上げる。人の斬り加減はまだ覚えてたが……まあすぐに慣れるだろう。悲鳴を上げる余裕があるなら死にはしない。

確かにこれはオレから腕がなくなり多少本体がお留守になるが、覇気が使えない奴がオレに傷をつけるのは相当な身体能力や技術が必要だ。こいつらじゃ問題にならない。

海軍本部の訓練では、下手に体を切り離すと部位パーツが捕まってえらい

ことになったが……。非常に好戦的な笑みを浮かべたガープさんは捕まえたオレの部位パーツをぶん投げて攻撃して来た。我が部位パーツながら石より丈夫な分すごい威力だったな……。五体満足で済んで良かった。まだまだ改良する必要がある技だ。

「ゲン拳・コッ骨・メテオ隕石」

ドゴン！

「ドリル・シユート」

ギユイーン！

「えっ!? そんな攻撃しちやつて大丈夫なのササツ!? 海軍に捕まらないか!？」

遠くの奴らに両手のロケットパンチで殴り飛ばしたり、4つの回転させたドリルを飛ばして足を攻撃したりしていると、パンダ男が近くに来て聞いて来た。

「いや大丈夫に決まっているだろう? 相手は無法者だ。それとも大人しくこいつらに捕まって、奴隷として売られるつもりなのか?」

「いやいやっ!? 確かに借金はしたが、そこまでされるほど借りてはいないササツ!」

「はあ? 借金って何のことだ?」

「こいつら、私の借金取りが雇った刺客だろう?」

「いや、ただの人攫いだが」

借金しているのかこの人……。

「さっきこいつら、珍しいから捕まえる、とか言っていただろう?」

「たしかにそんなこと言ってたよう……。よく追われるからいつもの借金取りの刺客かと思つたササ」

「借金取りだと別に危なくないんじゃないか?」

「私がいつまで経っても借金を返せないことに我慢の限界が来たのか、最近はピストルで撃ってくるようになったササ……」

「いや、そうなる前に早く返せよ」

「テメエらのんきに会話なんてしやがって! ふざけてんじゃないやねエぞ!？」

「何を偉そうに。もう貴様しか残っていないのに、どこを警戒する必

「必要がある?」

「はあ? 何を……お前らっ!?!」

パンダ男と話してる間も、オレは見聞色で敵を捕捉してロケットパンチやドリルで攻撃し続けていた。

それに気付きもしないで人のことをのんきとか、どの口が言うか。オレの攻撃を受けた奴らの悲鳴が聞こえなかったのか。

ガシャン!

もう必要ないので部位を元に戻し合体する。

「数の優位はすでに逆転している。後は貴様を潰して」

「私にやらせてくれササ。何をしたわけでも借金取りでもないのに追いつかれるのは、腹が立つササ!」

「オレは構わないが、あんた大丈夫なのか?」

「私はレスラー。倒していいなら問題ないササ」

「さっきまで逃げ回ってた奴が調子に乗るなよッ!」

向かって来た人攫いを

「パン、ダアッ!」

「ゲボア!」

パンダ男が思い切り上空に蹴り上げ

「トウッ!」

跳躍して後を追う

「これで決めるササッ!」
ジャイアント G · パンダ P · デスロック D!」

空中で人攫いの背中から、首と足に手を回し、両肩に担いでぐるぐる回転しながら下りてくる。

ボキイツ!!

「ガハッ!!」

ああ、あの音は着地の衝撃で人攫いの背骨が折れただろう。

オレは折れてこそいなかったが、2か月前のことを思い出すな……。

「ふう……少しは気が晴れたササ」

そう言つて、背骨が折れた人攫いを投げ捨てた。

まともに動くことも出来ず、痛みで呻いている。まあ自業自得だ。

「その強さじゃ、オレが助けに入る必要、あまりなかったな」

「いや、おかげで逃げる必要がないとわかったし、助かったササ。ありがとう。私はパンダマン。君は？」

パンダ顔で、顔にPANDAと書いてあつて、名前もパンダマンか。覚えやすいな。

「ロゼだ、よろしく。パンダマンはオレのこと驚かないのか？ 腕をドリルに変えたりしていたんだが」

オレが体を変化させた時点で、普通は人攫いに追われてた奴は悲鳴を上げて逃げる。それが普通だ。

……まあ目の前のパンダマンも普通には見えないが。

「悪魔の実の能力者だろう？ 何人か見たことがあるササ。そういうロゼだつて私のことを驚いていないようササ」

「いや、オレは驚いてはいるぞ……？ その言い方、パンダマンは能力者じゃないのか？」

「ああ、私はちゃんと泳げるササ（そういえばパンサメが、変わった果物を海底の冷蔵庫に入れてたササ。あれは悪魔の実なのか？）」

クマクマの実モデル”大熊猫”^{ジャェアントパンダ}の能力者ではなかったか……。

「正直パンダマンがなんなのか、すごく気になるんだが……ミンク族とのハーフなのか？」

「その答えは私も知りたいササ……そのために海に出たササ！」

自分でもわからないのか……孤児か？

「ところでたまに言われるが、ミンク族というのは何ササ？」

「知らないのか……ミンク族のことを教えるから、オレの家に来ないか？ いつまでもここにいと、また追い掛け回されるかもしれん」

「……いいの？」

「いいから言っているんだが……急ぎの用でもあるのか？」

「いや、人の家に誘われるのは、久しぶりだと思つてササ……」

少し悲しそうな表情をするパンダマン。

ああ、色々と苦勞しそうな見た目をしているからな。

普段は機械化しなければ見た目が変わらないオレでもよく襲われる。まあ、オレの場合は自分の行動の結果も多いから、自業自得なんだが。襲われたくないなら他の住民みたいに、首突っ込まなきゃ多少マシにはなるだろうからな。これからも止める気はないが。

……借金取りに追われているのは、パンダマンも自業自得か。

「問題なさそうだな。じゃあ行こうか。ついて来てくれ」

パンダマンを連れて自宅に向かった。

☆☆☆☆☆

「な、なあ口ゼ？ 本当にごくお前の家なのか？（こんな堂々とぼったくりつて書いて客が来るのか……？）」

「？ ああ……あー、ぼったくられる心配をしているなら、家の方に入るか？」

「いや、その心配はしていないササ……すごい家だな（そもそもぼったくられるほど金持ってたら借金返しているササ）」

「よく言われる」

店の扉を開け中に入る。

「いらっしや……あら口ゼ、おかえり。そっちの人は友達？」

「ああ。ただいま、母さん。こっちは今日知り合ったパンダマン」

「初めましてササ」

「それでミンク族についてだが、パンダマンみたいに動物のような顔をして全身が毛で覆われた種族がいるんだ」

イスに座って説明する。

オレも実際にミンク族を見たことがあるわけじゃない。海軍には巨人族ならいるんだが。

「そんな種族がいるのか……私もそうなのだろうか？ 最初からこの姿ササ」

「違うんじゃないかしら。全身じゃなくて一部しか毛で覆われてないし。ハーフか先祖返りじゃない？ はい、これ。サービスだからお代はいらないわよ」

「どうもありがとうササ」

母さんが持つて来てくれたドリンクを飲みながら話を続ける。

「一度会ってみたいササ。どこに行けば会えるか知らないか？」

「モコモ公国という偉大なる航路グランドラインの後半、新世界にある国に住んでいるらしいが、巨大なゾウの背中の上で移動しているから正確な場所はわからないな」

「そうか……だが海を彷徨うのは慣れてる、大体の場所がわかればなんとかなるササ。これから行ってみるササ！」

「船をコーディネートするなら、コーディネート職人紹介しようか？」

「コーディネート？ それは何だ？」

「船をシャボンで覆って海中を進めるようにすることだが……えっ？

聖地マリージョアの通行許可を取って新世界へ行くつもりなのか？」

通行許可出るのか？ というか借金あるのに大丈夫なのか？

「いや違うササ」

「……じゃあどうやって行くつもりなんだ？」

「赤い土レッドラインの大陸を素手で登って、無許可で聖地マリージョアをこっそり通って行くササ」

「……大丈夫なのか？ というか船は？」

「はっはっはっ！ 昨日も登ってこっそり観光して降りてきたササ。普段は泳いでるから船はないササ。たまに通りがかった船に（勝手に）乗せてもらうこともあるが」

「マジか……」

昨日聖地マリージョアに行っていたのか……自由すぎるだろ……。

よく泳いで偉大なる航路グランドラインを生き残れるな。というか通りかかった船って、それは海賊船なんじゃ……。

父さんもたまに泳いで他の島に行っているらしいが……。

能力者のオレには無理だな。飛んでなら行けそうだが。

「……私の話を信じるのか？」

「そんなウソを言っただうするんだ？ オレの知らない所で死ぬだけじゃないか」

「ははは、それもそうだな。新世界に行く前に、もう少しここで話をしてもいいか？」

「ああ、パンダマンの話は驚かされてばかりだから興味がある」

それからしばらく、パンダマンの話聞いた。

竹藪の中でパンダに育てられた話。

人にかぐや姫を見たと言ったが信じてもらえず虐められ、強くなるうと決心した話。

昨日聖地マリージョアにこっそり観光に行き、パンゲア城の、周りにたくさんの剣が刺さった大きな玉座で記念撮影した話。

パンダに育てられた話はいえそう。

記念撮影は、確かに玉座に座り両手でピースしてるパンダマンの写真を見せてもらったが、オレは聖地マリージョアに行ったことなんてないからわからん。

かぐや姫って何百年前の話だ？

気になったのでオレの見聞色のことを話し、許可を取って素手で触れて過去を見ようとしたが……何も見えなかった。パンダマンの見聞色で防がれたのか？いや、自分のことがわかるかもしれないのに、そんなことをするとは……。

謎は深まつたし、どこまで本当かはわからないが、話としては面白かったからいいか。不思議な人がいるものだ。もしかしたらミンク族や半ミンクとも違う、未知の種族なのかもしれない。

その後も少し話し、パンダマンと別れた。

ちやんとモコモ公国に行けるだろうか？ ……自力でなんとかしそうだな。

そういえばベルメールさん一家はもう東の海イーストブルーに着いただろうか？
まだカムベルトの海辺りか？

あのガープさんがいるし心配はいらない。あの人もカムベルトの海を泳いで渡れそうだな。

☆☆☆☆

グランドライオン
偉大なる航路と東の海《イーストブルー》の間の風の海
カームベルト

「拳・骨・衝撃」オツ!!!」

ドゴオオオン!!!

「あのおじさん、すごいね……海王類を殴り飛ばしちやつたよ……」

「すごい！ あんなおつきいおさかな、はじめてみた！」

「なんたつて海軍の英雄だからね。大きいお魚も拳で一撃だつたね……」

ガープが海王類を殴り飛ばすのを見ながら話すベルメール一家。

「ねえお母さん。たまにでいいから、あたしを鍛えてくれない？」

「えっ？ ……私には海王類を殴り飛ばせたりなんて出来ないんだけど」

「そうじゃなくて！ あたし、強くなりたい！」

「……いいわよ。今の時代、女の子だつて強くなきゃねっ」

自分の海兵になった頃を思い出し、ベルメールは笑いながら娘のお願いに答えた。

「そういえば2人とも、ちゃんと泣かずにお別れ出来て偉いわね」

「な、泣いたりなんてしないわよっ！ それにまた会うつて約束したから」

「うんっ！ にいにとはまたあえるもん！ あさつてくらいにとんできそうー！」

「え？」

ベルメールとノジコが揃つてナミの顔を見る。

その顔は、またすぐにロゼと会えると信じて疑っていない、一片の曇りもない笑顔だった。

「ね、ねえノジコ？ 私、ナミには遠い所に行くから、ロゼと会えなくなるつて話したよね？」

「う、うん。あたしも言ったし、ロゼも言つてたよ……？」

「だよね……ねえナミ？ 前に言つたけど、ココヤシ村つていう遠い所に行くから、ロゼとは会えなくなるんだけど……？」

「いにだつたらどんなにとおくても、とんであいにきてくれるよっ

！」

「(やばい、ロゼのこと信頼しすぎてる……あいつが飛べるのが余計にすぐ会えるって誤解させちゃってる。あいつ、ココヤシ村の場所知らないのに……お別れした後にこんな爆弾が発覚するとは、どうしよう……?)」

「(どうすんのよこれ……? ロゼ、あんたお兄ちゃんなんでしょ? なんとかしなさいよお……!)」

2人の心配を他所に、満面の笑みを浮かべたままのナミ。

ベルメール一家がココヤシ村に着いた1か月後、ようやくロゼと会えなくなったと気付いたナミが一日中泣き叫び、次の日からロゼの記憶を完全に無くすことになった。以降ナミの前でロゼの話は禁止となり、再会した時、ロゼに自力でなんとかしてもらおうことがベルメールとノジコの話し合いの未決定された。

10年以上後、再会した時にナミが自分の記憶を失ったことを知ったロゼが血反吐を吐くことになるが、別れることになるかわかっているながら溺愛しすぎたロゼの自業自得である。

記憶が戻ったナミに腹パンされるのも含めて。

“天駆ける竜の蹄”

ベルメールさん達一家と別れた年から3年経った。今年でオレも8歳だ。

オレは外を歩けば海賊や人攫いに襲われ返り討ちにしたり、賞金首や海賊の船と宝を換金する、今まで通りの日常を過ごしていたが、3人は元気でやっているだろうか？

東の海は、イーストブルーというか西の海、ウエストブルー南の海、サウスブルー北の海もだが、島が磁気を帯びていないらしいから、エターナルポース永久指針が存在しないらしい。不便そうだな。

話でしか聞いたことがないが、コンパスで方角を確かめて海図を見て航海するそうだ。グランドライン偉大なる航路ではすべての島が磁気を発しているため、コンパスの指針がぐるぐる回って使い物にならないただのガラクタだから、シャボンディには売っていなくて写真でしか見たことがない。仕事柄、外の4つの海にも行くだろう海軍や商人、新聞社とかなら持つているかもしれないが。

まあ見聞色で人の気配を探りながら航海して、人がいる方に向かえば島があるだろう、そこで買えばいい。海を泳いで旅する人だっているんだ、平気だろう。

……父さんに頼んであの3人の誰かのビブルカードを作ってもらえば良かったか？ ……いやあの2人はともかくベルメールさんは海兵だったし会わせるのは……爪をくれて言って素直にくれるとも限らないし、勝手に切って持って帰るのもな……。

そういえばこの3年で倒した海賊の宝の中に、凶鑑に載っていない悪魔の実が1つあった。たぶんこの島のオークションで売ろうとしていたんだろう。

前々から、オレの過去を見る見聞色を悪魔の実に使えば何かわかるのか？と気になっていたので試してみると、過去に食べた能力者の情報がわかり、間接的に何の能力の悪魔の実なのかがわかった。

チワワの能力を得る動物系ゾンオンの悪魔の実、イヌイヌの実モデル“チワワ”といった所か？癒し系だな、驚きの和やかさ。過去に食べた能力

者も個人差はあれど、おめめがパツチリとした非常にかわいらしい姿に変身していた。

オレはもう能力者だし、正直どうしようかと思っただが、センゴクさんを通して海軍に売ることにした。

チワワとはいえ仮にも動物系ソオンなら、戦闘面においては純粋な身体能力が強化され、ほぼ間違いなく強くなるはずだが、戦闘面以外で便利かと言われると、見た目の愛くるしさくらいしか……。チワワに変身して逃走とかには使えるか？ 犬だと足が速いはず。あと嗅覚も活かして追跡？海軍の方が有効活用出来るだろう、たぶん。

他を買ってくれそうな人脈もないし、海賊とかの手に渡って欲しくない。ファンシーな姿で油断を誘い、騙し討ちしていた奴が過去にいた。くっ……何という卑劣な！

空を飛べるトリトリの実や幻獣種みたいな特殊な能力が身につく動物系ソオンなら、とりあえず持つておいて欲しがる友達にあげるようキープしておこうかとも思ったが、チワワでは……。

見聞色のことを隠すために、何の能力の悪魔の実かは伝えなかつたので、最低相場と言われる1億ベリーで買ってもらった。

いつものようにシャボンディでの戦闘と換金を終えて飛んで帰ろうとすると、造船所エリアの海辺の方から、死にかけのような弱々しい気配を捉えたので、様子を見に行ってみると、迷彩柄のバンダナをした巨漢が、血を流した長髪を1つ結びにした人魚を担いでいた。最初は人攫いかと思ったが、2人の首には黒い首輪がついている。奴隷だな。天竜人か金持ち、人間ヒューマン屋の元から一緒に脱出して来たつて所か。よく見ると巨漢の方も血を流している。逃げる時に怪我でもしたんだろう。

とりあえず助けるにしても、人に見られるのはマズイ。周りを

「おい、アラディン、しっかりしろ！ 今すぐ医者連れて行くから！

(くそっあいつら……何が遊びだ！ こんなことの何が楽しいんだ

……！)」

「もういい……タイガーさん……」

「何言ってやがる！ この位の怪我すぐに治る！ 輸血して失った血を戻せば」

「ここがどこだか、わかってるだろう……？ たとえ病院に着いても、奴隷の人魚に、輸血なんてするわけねエ……たとえ輸血されても、すぐにまた、あの生き地獄に連れ戻される……おれを置いて、あんただけでも、魚人島に帰ってくれ……」

……今、聞き覚えのある名前を口にしていたな。

空から地面に降りて後ろからバンダナの巨漢に話しかける。

「なあ、あんた達……」

「なんだっ!? 時間がないんだ！ 下らない話なら後にしてくれ！」

こちらも見ずに怒鳴られた。

どうやら人魚の方の出血量がひどいようで、さっきまでは喋っていたが、今は気絶しているようだ。海に潜っても魚人島に着く前に死にかねないって所か……。

「冒険家のタイガーさんと医者のアラディンさんか？ ウイリーさん達からは冒険に出ていて数年帰っていないと聞いていたが」

「ウイリー達の知り合いなのか!？」

バンダナの巨漢が初めてこちらを向いた。

上や後ろから見ている時はわからなかったが肌が赤く、たらこ唇。

そしてボロボロになった服の穴から、胸に天駆ける竜の蹄、ひつまめ天竜人の奴隷に焼き付けられる紋章が見える。聖地マリージョアから来たのか。

「ああ、オレはロゼだ。ウイリーさんやはっちゃん、メイプルから話を聞いていないか？」

「その名前にその恰好……メイプルを助けてくれたっていう子供か！

頼む、連れが死にかけてるんだ！ 手を貸してくれ！」

「そのつもりで声をかけた。オレの家に輸血に必要な道具が揃っている。飛んで行くから、アラディンさんを担いだままオレに掴まってくれ」

オレのS型RH-の輸血パックがある。彼の血液型はわからない

が、オレの血液型は基本誰にでも輸血出来るから問題ないはず。

「オレはたいしたことないからいい！ それよりこいつだけ急いで」
「あんたの傷は浅くても、その首輪はどうする気だ？ 外す当てがあるから、掴まってくれ。時間が惜しい。出血もそうだが、人に見られたら面倒なことになる」

首輪付き、しかも天竜人の紋章が人に見つかれば、連絡されかねない。

6年程前に父さんがギャンブルに負けて素寒貧になって人間屋ヒューマンショップに売られた時、店の金を奪い、ついでに奴隷一步手前の人達の首輪を外して回って人間屋ヒューマンショップを1つ爆破して来たらしいから、首輪は問題なく外せるだろう。一度父さんと外を歩いていたら、奴隷になる前に助けられたと礼を言われていた。

よくその時に「冥王」とバレなかったものだ。爆破した人間屋ヒューマンショップにも助けた人達にも。かけていたサングラスのおかげか？ いやまあ「冥王」が人間屋ヒューマンショップに売られているなんて誰も思わないか。子供のオレだつて思わなかった。

あの時、オレはギャンブルには手を出さないと決めた。オレでは身を滅ぼしかねない。今まで通り、海賊から頂こう。

「相手は人間……だがウィリー達の友人……それに、まだ子供……」
わかった、頼む……！」

時間がないのに迷っていたな。人間に奴隷にされていたんだから、簡単に人間オレを頼りたくないのは当然か。仕方がない。

タイガーさんにアラディンさんを担いでもらったまま、オレの首に手を回して掴まってもらった。機械化すれば絞まらない。

空を飛んで急いで家に向かった。

☆☆☆☆

「母さん、怪我人がいるから輸血お願い！」

「その紋章……またずいぶんと厄介事に出くわしたのね……用意するから家の方のベッドに寝かせておいて」

母さんに頼んで輸血の準備をしてもらおう。次は

「父さん、この首輪外してあげて欲しいんだけど」

この数年で、前々から流れてはいた『冥王』死亡説が完全に民衆に事実だと信じられるようになったため、今までより父さんが家に戻るようになっていた。本でも死んだこととして扱われている。手配書は発行されたままだが。もう引退しているし、破棄してくれないかな……無理だろうな……。

海賊生活が長かったせいかな、ずっと家にいるということはないが。

「ああ。キミ、外に出てくれ。その首輪を外して海に投げ捨てる」

「ほ、本当にそんなことが出来るのか？」

「大丈夫だ、前にも外したことがある」

父さんが半信半疑のタイガーさんと外に出るのを背に、オレはアラデインさんをオレのベッドに運ぶ。何かに噛まれたような跡がいくつかある……銃で撃たれたり、剣で斬られた傷じゃないのか？ とりあえず輸血の前に、ガーゼと包帯で応急措置だけでも済ませておこう。

ボンツッ！

アラデインさんの応急措置をしていると、外から爆発音が聞こえた。気配が弱くなっていないし、無事に首輪を外せたようだ。

「まさか本当に外してしまうとは……（どうやったんだ？）」

困惑した様子のタイガーさんと父さんが家に入ってくる。

「あんたも怪我しているが、輸血しておくか？」

「……いや、おれには必要ねえ。包帯だけ貸してくれ」

「そうか。じゃあ巻くから座ってくれ。届かない」

「自分で巻くから包帯を」

「いいから早く座ってくれ」

タイガーさんに包帯を巻いて止血を始めた。最初は自分でやると言って座らなかつたが、無視して飛んで巻き始めるとおとなしく座った。

それにしても、何がたいした傷じゃないだ。重症じゃないか。アラデインさんと同じく噛まれたみたいな傷跡があつた。肉食獣の動物ゾンオン

系の能力者とでも戦ったのか？ よく人を一人担いで来れたものだ。本当に輸血が必要じゃないのか？ まあ確かに、アラディンさん程顔色は悪くないが。たいしたタフさだ。

準備をした母さんが戻って来て、アラディンさんに輸血を始める。後はもうたいしてオレに出来ることもないし、体の中に収納していた金を金庫に入れて来るか。

しばらくすると、アラディンさんの顔色が戻って来た。

「もう少し寝てたら目を覚ますんじゃないかしら？ 傷が塞がるまでここにいなさい」

「いや、だがおれたちが長居するとあんたたちも」

「はっはっはっ、そういうのは慣れている。それに家にはもう人間屋ヒューマンショップに指名手配されているのもいるし、そう変わらん」

「？ なんのことだ？」

「……オレ、人間屋ヒューマンショップの恨みを買って、あいつらに賞金懸けられてるんだ。最低1億ベリー」

「……その話はいつらからも聞いてねエな」

「あんた達がいなかった、ここ1、2年くらいの話だからな……」

オレがいつも通りに、海賊や人攫いをぶっ潰し続ける生活をしていると、商品になりうる海賊を先に捕らえられ、商品を供給する人攫いも再起不能にされ、商売の邪魔だと人間屋ヒューマンショップの連中がついにキレたらしく、人攫いに配っている人類売買のオークション基本最低金額リストの裏側に、ゴークルをかけたオレの写真と「機甲のロゼ」・最低取引価格1億ベリーと名指しで載るようになった。

一度人攫いからリストを奪って確認したが、体を機械に変える能力者というのも書かれていた。ゴークルをかけるようにしていなければ、素顔の写真を撮られていたな……。

オレの個人情報バラ撒きやがって……。

オレが能力者であることもバレているので、オレを奴隷として売って、元を取るつもりなんだろう。今まで以上に家に帰る所を見られな

いよう気を付けるようになった。この家が見つかったりすれば、口封じに喉と手と目を潰して人に伝えられない体にするしかなくなる。周りの気配を探って、しかも空を移動して帰っているからバレないだろうが。

まあバレていないが、他にも人間屋ヒューマンショップの恨みを買うようなことはしているの仕方がない。この島の人間屋ヒューマンショップを殲滅すれば問題はなくなる。

「……なぜそんなことをしている？」

「嫌いだから。それに人攫いや人間屋ヒューマンショップがなくなれば、オレの友達の魚人や人魚が少しはここに安全に出来るようになるだろう？ どの道オレも襲われているし。まあだから、父さんたちの言う通り、傷が塞がるまではいた方がいいんじゃないか？」

「……ありがとう、恩に着る。出来ればこの焼印のことはあいつら、ウィリー達にも秘密にして欲しい」

今は包帯で隠れているが、胸のマークがあるのだろう場所を指差しながらそう言った。

「元から言うつもりもない」

あの3人にはオレに関する隠し事はしていない。雑談で今のオレには能力でどんなことが出来るかと聞かれたら、家で実演して見せたりしているが、オレが知っている他の人の秘密まで隠さず言う気はない。それではただの口の軽い奴だ。

ガープさんが海賊の子を海軍に隠して育てていることも教えていない。聞くところによると、去年から友達と海賊になるための海賊貯金なるものを始めたらしい……うんまあその、友達が出来て良かったな。

「構わないわよ。わざわざ言うことじゃないし（私もロゼに海賊時代のことほとんど話してないし）」

「ああ、誰にでも触れられたくない過去があるものだ（私が死んだと情報流すなら、ついでに手配書も破棄してくれてもいいだろうに……）」

父さん達もウイリーさん達に秘密にすることを特に気にした様子もなく頷く。オレ達にも人に言わないようにしてること、あるからな。

あれ？ オレが1番抱えてる秘密が多いような……2人は元海賊関連だけだが、オレは過去を見る見聞色に両親のこと、能力のこともいくつか逃走用の奥の手を隠している。オレはこの家で唯一前科なしのはずなのに、何故だ？

「今はとりあえず2人とも包帯で隠してるとして、今後のために代わりの服を買って」

「ストップ。あんたはこの島で最近目立ってるから、私が買って来るわ。ここですじつとしてなさい」

「……わかった」

オレがタイガーさん達のボロボロの服の代わりを買いに行こうとすると、母さんにそう止められた。

誠に遺憾ながら事実だ。

あの手配写真が住民にも知られているのか、はたまた別の理由か、最近では街を出歩くと周りの人に避けられ、道が開くようになった。天竜人と同レベルの厄介事の種とみなされているのか……。

この扱いには激しく抗議したい所だが、悲鳴を上げられることすらあるので話も出来ない。お手上げだ。海軍基地の海兵からの同情や憐みの視線が痛いがほつところ、実害はない。むしろ船や宝の換金で足元を見られなくなり、収入は上がっている……あまりうれしくはないが。

「ううっ」

「アラデイン、気が付いたかつ！」

「タイガーさんか？ ここは一体……」

「ハチ達が話してたバーだ。ほら、メイプルを助けてくれたっていう子供がいる」

「ああ、あの……」

「まだ血が足りていないだろうし、休んでいなさい。傷が癒えたわけでもないのだから」

「おれもいるし、ここなら大丈夫だ」

「じゃあ、そうさせてもらう……ありがとう……」

そう言つて、アラディンさんは再び目を閉じた。

☆☆☆☆

「ロゼー、いるでゲソカー？」

2人の服を買った母さんが帰つて来て、タイガーさんが着替えて、一緒にアラディンさんの回復を見守つていると、メイプルが来た。

父さんは造船エリアに行き、母さんは店の方にいる。

「あれ？ タイガーさんじゃないか！ 久しぶりでゲソッ」

「おお、久しぶりだな」

飛びつこうとしたメイプルを、タイガーさんが頭を押さえるようにして撫でている。

メイプルには抱き着き癖があるけど、8本腕の力と吸盤で1度抱き着かれたら離れにくいから、抱き着かれる前に避けられることが多いって、はっちゃんが言つてたな。

あまり褒められた癖じゃないが、あれは獲物を捕らえようとするイカの本能か何かだろうか？ 人によっては締め付けで気絶しているらしいので、最近は注意しているみたいだが、久しぶりの再会でテンションが上がったのだろう。

そもそも今のタイガーさんは怪我をしているから、抱き着かれたら相当痛いだろうな……。

「久しぶりの再会でうれしいのはわかるが、アラディンさんが寝ているから静かに頼む」

「アラディンさんもいるでゲソか……怪我してるじゃないか。どうしたんでゲソ？」

輸血をしているのが見えたようだ。メイプルが聞いてくる。

返答はタイガーさんに任せよう。詳しい事情を知らないオレが適当に言つと、後で矛盾が生じるかもしれない。

「……ああ、ちよつと油断して鮫に噛まれてな」

……あの傷跡は鯨の歯形か。

世界一泳ぐのが速い種族と呼ばれる人魚や力が強い魚人が、鯨に簡単に噛まれるわけがない。聖地マリージュアから逃げて魚人島に帰る途中で鯨に襲われたのではなく、奴隷にされていた時、2人は鯨と同じ水槽にでも入れられていたんだろう。1匹程度じゃ返り討ちに出来るだろうから、おそらく複数の鯨と一緒に。子供がカブトとクワガタを同じ虫かごに入れてどっちが強いか戦わせるような感覚で。

「うう、痛そうでゲソ……早く治ると良いでゲソな……」

「ああ……そういえばお前、少しは毒入れずにお菓子作れるようになったのか？ たしかこのロゼに手伝って貰ってたんだろ？」

タイガーさんが空気を交えるためか、少し明るくメイプルに聞いた。

「ふふん、今までの私はもういないでゲソ。毒はいらないって断られる物は作ってないでゲソ」

「ほんとか？ 何か数年程前にも似たようなこと言って、結局ダメだったことがあった気がするんだが……」

「平気でゲソ！ たまに驚いてスミ吐くことはあっても、料理中に出ることはなくなったでゲソ。これから作るからタイガーさんもイカが？」

「（普段ならともかく、今の体調で毒にあたったら、おれは無事で済むんだらうか……？）」

なんか迷っているな。オレより長く毒を食らっていたが故に信じがたいのだろう。

「オレは食べるし、オレの反応見てから決めればいいんじゃないか？」
「いや、大丈夫なのか？ アラディンがいなかったから、薬もないだろ？」

「平気だ。薬がなくなる前に毒で痺れた状態で1日ほど耐えてみたら、麻痺状態に慣れて動けるようになったから」

平気にこそなっていないが、動けるならそこまで不便はない。体から自然に抜けるのを待てばいいだろう。オレの場合、いざとなれば能力で機械化して戦闘も可能だ。

「毒が入る前提で話を進めるのはやめてくれなイカ？」

「ああ、すまない。信用していかないわけじゃない。ここ一年は本当に痺れてないからな。楽しみにしている。タイガーさんに頑張った成果見せてやれ」

「ふふつ、それでゲソな。すぐ作るからちよつと待っててくれでゲソ」

不満げな顔から機嫌を直し、メイプルはキッチンに向かった。

30分後、焼き上がったスコーンをいくつかのジャムと紅茶と一緒にトレーに置いて持って戻って来た。

「さあ、召し上がれ」

「いただきます」

1つ手に取って食べる。外側はサククリ、中はふんわり柔らかく口の中で簡単に崩れる。

「うん、美味い！」

「……………ちゃんと無害のようだな」

「だから言ってるじゃないカ」

「ああ、わりい。いただくう」

オレがジャムを付けていくつか食べるのをじっくり見て、食べて大丈夫と判断したようだ。タイガーさんも口に入れる。

「ああ、美味エ。お菓子なんて食べたのは久しぶりだ」

「これが今の私の実力でゲソ」

「これならパティシエになるのも、時間の問題なんじゃねエか？」

「……………ふふつ、一度付いた悪評はそう簡単に消えるものじゃないんでゲソ…………」

「あー、なるほど……………(アラデインもいなかっただし、食べてくれたのはハチ達くらいだろうな……………あとこいつと)」

褒められたにも関わらず、遠い目をして、冷めた暗い陰のある笑みを浮かべるメイプル。初めて見る表情だな、そんな顔出来たのか。いつも明るいのに。

さつきみたいに警戒されているのだろうか。納得したタイガーさんも少し気まずそうだ。

一度付いた評価や前科はそう簡単に覆らないのだろう。父さんの手配書が取り消されたいみたいだ。

「たしかに過去は消せないだろうが、いい評判で上書き出来ないのか？」

「食べてくれる人もいるでゲソが、避けられてもいるでゲソ」

「消えないものをいいもので上書きか……」

「ん？ タイガーさん、何かいい案でもあるのか？」

「ああいや、ちよつと考え事をしていただけだ」

「そうか？」

何か真剣な顔をしているがどうかしたのか？

まあいい。

「まあダメだったら、オレと一緒に旅に出て、旅先で過去のことを知らない人相手に屋台でもやってみるか？ はつちゃんもたまにタコ焼きの屋台をやっているみたいだ」

「それも楽しそうでゲソな。その時はよろしくでゲソ」

「ああ、だからこれからもパティシエを目指して突き進め。応援している」

「これからも試食して欲しいでゲソ」

「ぜひいただく」

「……話には聞いていたが、仲良いなお前ら」

メイプルとお互いの拳を合わせていると、タイガーさんがそう呟いた。

「それがどうかした？」

「いや、メイプルのお菓子も気にせず食べているなど思って。顔を見れば逃げる奴も多いのに（というか逃げる奴の方が多い）」

「もう毒の心配はない。そして悲しいことに、人から避けられているのはお互い様だ……」

その分海兵に仲良くしてもらっているが、海兵達よ、頼むからオレに優しくしすぎるのはやめてくれ。オレはあんた達に隠し事をしてるから胸が痛い……。

「……そうか。こいつはちよつと抜けた所もあるが、これからもウイ

リー達共々よろしくな（いつかこいつらみたいにな、種族関係なく仲良く出来る世界になればいいな……おれにはもう……）」

「ん？ ああ……なんか父親みたいだな」

「そこはアニキって言えよ」

「んー？ ん、んー」

「おい、どういう意味だ？」

「ノーコメントだ」

「言ってるようなもんだろそれはっ！」

いやだって、タイガーさんの年齢は知らないが、今年で25歳のウィリーさんより年上で13歳のメイプルの兄は、少しばかり年が……。

その後は少しタイガーさんに睨まれながらも、スコーンを食べて紅茶を飲みながら談笑して過ごした。

タイガーさんとアラディンさんがここに泊まると聞いて、少しメイプルも泊まりたそうにしていたが、それではふとした拍子に2人の紋章のことが露見しかねないので、布団の数が足りないということで帰ってもらった。

布団の数が足りないのは本当だが、残念そうなメイプルを見ると罪悪感が……。

どうもこういう嘘は言わずに隠し事をするスキルが年々上達している気がする。オレが心の声を隠していても、表情とか態度で見破られないようにするため、出来るだけ自然に喋るようにしていたら身に付いたが、なんか詐欺師みたいだな……。

☆☆☆☆☆

2人は傷も塞がり、アラディンさんの首輪も外し、魚人島に帰るところになった。

「わけありのおれ達を手当てしてくれた上匿ってくれて、ありがとう。あんたたちにも危険が及ぶかもしれねエのに……」

「このくらい危険の内に入らんよ、タイガーくん」

「20年ほど前に比べたらちよつとした火遊びね」

「バレなきや平気だ。証拠がない」

元々この島には魚人や人魚は基本的に近付かない。元奴隷の魚人と人魚がここに目立たず潜伏出来ると思われなかったのか、そもそも2人が逃げた所でまた買って補充すればいいとでも考えて執着していないのか、搜索の手が伸びることはなかった。

「この島の人間にも、あんた達みたいなのがいるんだな……」

「まあ、人攫いが徘徊してる島だからな……だがそんなのやあんた達が捕まってた所の連中みたいなのしかないなら、世の中もう終わっている」

偉いから何してもいいって考えているのばかりだからな、天竜人は。すべてがそうなのかは知らないが、少なくともシャボンディに奴隷を買いに来るのはそういう連中だろう。態度がそれを物語っている。

霸王色を思い通りに使えるようになってからは、やりたい放題しているのを見かけると周りにバレないように気絶させていた。離れた場所から軽くぶつけるだけで気絶してこちらが驚いたぞ……あんなのが貴族で大丈夫なのか、世界政府？

そしてしばらくすると、下界の空気は汚れていて肌に合わない、病気になるえ、とカプセル状のマスクと防護服を着て来るようになった。肌に合わないなら来ないでくれるか？ そんな物を付けてまで来るなんて、シャボンディのことが好きじゃないか。この島の空気が悪い原因は、お前達の影響が多分にあると思うんだが……。

普通の島では奴隷売買なんておおっぴらに出来ないが、この島は面積の約3割が無法地帯。奴隷が売ってるから天竜人が来るようになったのか、天竜人が来るから奴隷を売るようになったのか。聖地マリージョアから近いことを考えれば、たぶん後者だろう。

まあそんな場所だから、海軍本部がすぐ近くにあるにも関わらず、元海賊が潜伏してもバレないのかもしれないが。

今年に入ってから海軍に見られでもしたのか、口コミでも流れたのか、海賊相手に霸王色を使って気絶させていたのがバレたので、オレの仕業とバレては困るため天竜人には軽率に霸王色を使えないが、まあバレない方法なんて他にもある。絡まれている人を抱えて音速で逃げるとか。スピードに耐えられず気絶させてしまうが、顔を見られずに済むのでかえって都合がいい。

— そういえば霸王色が使えるとバレてから、たまに海兵に気絶しない程度に霸王色を浴びせ続けてくれてって訓練時とかに頼まれるようになったが、あれは何の意味があるんだ？ 後で父さんに聞いてみるか。

「じゃあ元気でな」

「ああ、また会おう」

2人は海に潜り、魚人島へ帰って行った。

“目覚め”

海軍本部のある部屋。

「んっ、ロゼ、もうちよつと優しくして、強すぎよっ」

「充分セーブしている、耐えてくれ」

「そうかもしれないけど、まだなの……?」

「もつと強くすれば早く出来ると思うんだけど」

「ダメっ、これ以上は耐えられないっ」

アインはオレに体を刺激され、ビクビクと体を震わせ、気を失いそうになりながら、未知の感覚に目覚めようとしている。

「だがこのままだと、まだかかりそうなんだが……?」

「しようがないでしょ、体が、もたないんだからっ」

「あまり大きな声を出さないでくれ」

「そんなこと言ったって、えっ……? なんなの……この感覚は……?」

「きたか。それじゃあこのまま」

「ちよつと貴方達、子供が何をしているのっ!? それもこんな場所で……! (ロゼ君に至ってはまだ10歳にもなっていないのに……!)」

何やら焦った声を上げて、扉の向こうで聞き耳を立てていたヒナさんが、慌てて部屋のドアを開けて入室してきた。この人はもつとクールな人だと思っていたんだが。

彼女は今年から海軍に入った新兵で、ピンクの髪を後ろで纏めてい

る。そして悪魔の実の能力者。超人パラミシアのオリオりの実、檻だけでなく錠も作れる範囲の広さ、ヒナさんが誰かに触れると、その部分が鉄の錠に変化し、相手を捕縛出来る。人を捕まえるのに向いている、とか何かを捕まえるための、海軍だと重宝しそうな能力だ。

最初は敬語で話していたんだが、鬼教官ゼファーさんと普通に話していたり、

海軍大将サカズキさんに文句言っているオレに敬語で話されるのは調子が狂うということで、タメ口で話していいと許可を貰っている。

他の新兵や海兵にも言われたな。あと呼び捨てで呼ばれることも多くなった。馴染んだ証拠だろうか。

未だに名前ですら呼ばず、「小僧」と呼ぶ人もいるが。いつそのこと、オレも「赤犬」もしくは「おっさん」って呼んでやろうか？

……焼かれそうだな。

「ヒナさん、どうかしたのか？」

「どうかしているのはあなたたちよつ。まだ12歳と8歳なのにつ」

オレと、オレの横で目を閉じたまま座っているアインを指さしながらそう言ってくる。

「たしかに早いかもしれないが、どうかしているってことはないだろう？ ゼファーさんの許可も得ているし、オレも今年に入ってからもう何度もやっている」

「……………!? (ヒナ絶句…………)」

何故かヒナさんが白目をむいている。霸王色で威圧した覚えはないんだが…………。

「うーん、ヒナさんが驚愕しているのを感じるような…………気のせいかしら？」

「いや、それが覇気だ。気のせいなんかじゃない。目で見たり、耳で聞くのと同じように、出来て当然と思うんだ。覇気は意志の力、お前の心が揺らげば、覇気にも影響する」

「はっ！ ……ちよつと待って、あなたたちは何をしていたの？」

「聞いていたんじゃないのか？ アインの覇気を目覚めさせていた」

白目から復帰したヒナさんに聞かれたので教える。

先日父さんに聞いたが、霸王色を気絶させない程度に加減して他者に当て続けると、その者の覇気の覚醒を促すことが出来るらしい。

なるほど、妙なことを頼まれるようになったと思ったら、そういう理由だったか。納得だ。目覚めるまでの時間には個人差がある。そ

れに強く当てた方が早く覚醒する気もするな。まあ強く放てばその分相手に覚悟がないと気絶するんだが。

今度から敵にはあまり使わず、使う時も全力で使って一気に意識を刈り取るようにしよう。そいつの覇気を目覚めさせないように。

アインはちよつと時間がかかっている。前にビンズにやった時はもつと早く終わったんだがな。ヒナさんが言うようにまだ早いからか？

この数年でアインのオレに対する態度は少し柔らかくなった。自分の倒すべき相手は海賊であつてオレではないからだそうだ。まあとりあえずの手近な目標になっているが。

どうやらゼファーさんが覇気を習得して問題なしと判断した者だけ、オレに頼んで覇気を目覚めさせているらしい。下手に力を付けると鍛錬を怠ったり慢心に繋がりがえつて危ないからだろう。あとあまり言いたくないが、海賊がスパイとして潜りこんでいる例もある。オレが勝手に目覚めさせるのはマズイ。

まだ入隊してもいないビンズとアインに許可を出したのは……やはり16年前のように、家族を海賊に殺されるのを恐れてのことだろうな……海軍本部があるマリンプォードにいるからといって、絶対に安全というわけではない。8年前にも「金獅子」が攻めて来て、町が半壊している。

「アイン、覇気を使えるようになったのは良かったが、加減してとか色々とうるさい。ただでさえ制御して弱く当てるのに神経を使っているのに、気が散つてしようがなかったんだが」
「だって体がビリビリして変な感覚なんだから。気を抜くと気絶しそうになるし」

「……そう、そうだったの……ただの勘違い……」

「勘違いって、何がだ？」

「わたくしは何も言つてなどいないわ、ヒナ沈黙」

いや、確実に呟いていたんだが……。

「ヒナさんが焦っているような……」

「わたくしは冷静だから気のせいよっ」

「いや、気のせいじゃない、それが覇気」

「そんなことよりっ!」

強引に話を変えようとする。やはり焦っているじゃないか。

「科学班の人があなたを探していたわよ? Dr. ベガパンクが呼んでいるって」

「ああ、今日はあの人が来ているみたいだからな。わかった、ありがとう」

「じゃあついて来て」

そう言つて、ひよいつとオレのコートの襟を掴んで持ち上げた。

「えっ? 1人で行けるんだが……」

というか、これではついて行くのではなく、持つて行かれる形になるんだが……。

「連れて来てくれて頼まれてるのよ」

「こんな犬猫拾うみたいなのは嫌なんだが……ロゼ不満」

「……それはわたくしの真似のつもりなのかしら? ふざけているの?」

「ヒナさんの怒りを感じる……つてちよつと待つて! まだわたし、ロゼに最後までしてもらつてないっ。もう少しでいけそうなのにつ」

どうやら見聞色は少し使えるようになったようだが、武装色がまだ出来ないようだ。

アインはオレと同様見聞色寄りか。

「すまない、また後でな。とりあえず1人でやっててくれ」

「そんなつ、あと少つて所でお預けなんて……ひどいっ。ちゃんと手取り足取り教えてくれるつて言ったのにつ」

「後で最後まで付き合」

ガシャン……!-

「んんっ!? なにがもがなにごとつ!」

いきなり喋つていたオレの口元にヒナさんの手を通り、口枷のように鉄の錠がかけられた。

「わたくしの体を通り過ぎる全ての物は……【禁縛】^{ロック}される(この子達

の言い回し、わざとじゃないかしら……？ ヒナ疑心」

「何がモがモが
何をするかっ！」

「何を言っているのか、わたくしにはわからないわね。ヒナ不明」

「じゃあこれを外せばいいだけじゃないか。」

「じゃあアインちゃん、ちよつとロゼ君借りていくわね」

「後でちゃんと返してね」

「何がモがモがモがモがモがモがモが
人をペンみたいに貸し借りするなっ！」

ヒナさんに襟を掴んで持ち上げられたまま、部屋から持って行かれた。

☆☆☆☆☆

口枷みたいにかけられた錠を武装硬化した歯で噛み砕き、近くのみ箱に捨て、犬猫みたいな扱いも止めてもらい、ヒナさんの横を歩いて行く。

ようやく武装硬化が出来るようになった。一応全身を武装硬化で覆うことも出来るが、部分的に武装硬化で覆って攻撃や防御を行った方が、覇気の消耗を抑えられて燃費がいい。今回みたいに歯だけにするとか。ゼファーさんも腕だけ武装硬化していたから、「黒腕」と呼ばれていたわけだし、歯だけ武装硬化して戦えば「お歯黒」って異名が付くかもしれない……シンプルに嫌だ。

「わたくしの錠は鉄製なのだけど……」

「オレの歯だって鉄製に出来る。後は噛む力で壊せばいい」

「そんな簡単に……まあいいわ。それで、なんであなた科学班の人に探されてるの？ ヒナ疑問（子供相手に『丁寧に頼む』って一体どんな用なのかしら？）」

もしかしてそれが知りたかったのか？ 別にいいけど。

「オレの能力を研究して、新しい兵器とかを作るつもりみたいだ」

「……あなた、それ大丈夫なの？」

「平気平気。まあ初対面でDr.ベガパンクに、解体させてくれない

か？ って言われた時は驚いたけど」

「全然大丈夫そうに聞こえないわよ……？ 人体実験とか、してないわよね？（この子だったら、『別にいいぞ。ちゃんと元に戻してくれよ？』で許可しそうなところが怖い……）」

「いや解体させてくれて頼まれたの、オレが機械化させた服とかだったから」

最初は、この人頭おかしいのか？ と思ったが。どうも言葉足らずになっていただけのようだ。オレの体から離すと元に戻るため、オレが色んな機械に変化させた服を、能力の解けない範囲内で分解して、構造を理解したら組み立て直すという器用なことをやってのけた。

Dr. ベガパンクは “世界最大の頭脳を持つ男” と呼ばれる科学者で、その頭脳は500年先を行くと言われているらしい。普段は新世界のどこかの研究所にいるようだ。

血統因子という物を発見して世界政府に逮捕されたらしい。発見しただけで逮捕されるってどれだけヤバいものなんだ……。

その後所属していた研究チームも買収されたらしいが、あの戦争屋のジェルマの国王も同じ研究チームに所属していたらしく、ジェルマ王国は政府に科学技術の一部を提供する代わりに世界政府加盟国として存続。

どういう経緯があったのかは知らないが、Dr. ベガパンクも釈放され、海軍の科学班のトップになった。

「それでも兵器の研究って、子供に関わらせるものではないと思うのだけど……」

「海軍科学班としては兵器の研究をしているが、あの人個人としては、オレの能力を研究して日常生活に使える機械を作りたいみたいだ。あの人が作った設計図通りにオレが変化して、ちゃんと作動するかとか」

正直、オレの能力の手札を増やすのに参考になる物ばかりだ。こういうのは人体実験に入るのだろうか？

「対価として報酬も貰っている」

「……いくら貰ってるの？」

「お金じゃなくて物。たとえばこれとか」

そう言っただけのポケットからケースを一つ取り出し、開けて中身を手に持つ。

相変わらず力が抜けるな……。

「触ってみる？」

「これって……海楼石の手錠？（こんな貴重品を、海軍所属でもない人間、しかも子供に報酬として渡すほどって、とんでもない研究の手伝いをしているんじゃない？）」

「そう。海賊を捕まえるために前から欲しかったんだ。試しに言ってみたら報酬で貰えることになった。手袋や服越しくらいでは、触れたらオレも力が抜けるから、普段は鍵と一緒にケースに入れている。普通の手錠だとオレでも腕力で引きちぎれるから、頑丈な海楼石製は助かる。その辺には売っていないし」

これで埋めるなんて面倒な真似をしなくて済む。

「（この子の関わっている研究には、これ以上触れない方が良いわね……軍の機密に触れそう）そういうえばあなた、どうしていつも手袋しているの？」

ああ、この質問をされるのは何回目だろうか？ 特に新兵にはよくされる。だからこそ受け答えにもなれたものだ。

「悪魔の実の中には、直接触れることで効果を発揮する能力もある。手袋程度で防げるならそれに越したことはない。海楼石の影響もほんの少しはマシになる。海軍にもつけてる人はいるぞ？」

うそではない。最近会わないがロシナンテさんのナギナギの実の【^{カーム}風】も直接触れて発動するし、サカズキさんも手袋をしている。

まあ音を消されたくらいで致命傷にはならないだろうし、サカズキさんの手袋をしている理由なんて知らないが。

「なるほどね、ヒナ納得。でもいつもする必要ないんじゃない？」

「常在戦場という言葉もある。オレがいる場所はどこだろうとオレの戦場だ。いつでも戦える備えをしているだけ」

そんなことを話しながら歩いていると、今年から知り合った2人が歩いて来た。しかし、

「スモーカーさん、その頭どうしたんだ？ イメチェン？」

その知り合いの片方、葉巻を吸っている方の頭が丸坊主になっていた。前に見た時は白髪の短髪だったはずだが……。

スモーカーさんはモクモクの実、体を煙に変化できる自然ロギアの能力者。オレが凶鑑で見た自然ロギアの実は十数個、これで4人だから結構な比率で海軍にいることになる。

よく葉巻を吸っているが、体が煙なのに葉巻を吸う必要はあるのか？ 自分の煙じゃダメなのか？

「んなわけあるかア。それに、髪型のことでお前に言われたかねエよ」

「生まれつきこの髪型なんだから、仕方がないじゃないか」

「その前髪、生まれつきだったのね……ヒナ驚愕……！」

そんなことで驚愕しないでくれ。

前髪だけが金髪で、ちよつと翼つぽい形をしているだけじゃないか。

「それで、イメチェンじゃないならどうしたんだ？ その丸坊主」

「上官に口答えした罰だよ、罰。ったく、こいつとペア組んでたってだけで、なんでおれまで連帯責任で掃除させられるんだ？」

そうぼやいているのは、黒髪で口髭と顎髭を生やしているダデイさん。ホルスターを腰だけでなく肩にまでつけて、大量の拳銃を持ち歩いている。

オレの友達のパティシエイカ人魚のように腕がたくさん生えていて一度にすべての拳銃を手にとって発砲するわけではなく、腕は普通に2本で、弾丸を装填する手間を省くためにそうしているらしい。リボルバーの装弾数は6発で、再装填に時間がかかるからな。全弾撃ち尽くしたら別のに持ち直して撃っている。

「へえ、そりゃ災難だったな、ダデイさん。それで、誰に口答えしたんだ？」

「……サカズキ大将よ」

隣にいるヒナさんが頭を押さえながらそう言った。

「ふふっ、ははははっ！ よりによつてサカズキさん？ スモーカーさん、あんたよく無事だったな」

あの人は軍の規律とか上下関係に人一倍厳しいだろう。

「笑い事じゃないわよ……！ あれはもうダメかと思つたわ……ヒナ諦観」

「笑つてるが、お前だつてあの人によく噛み付いてるらしいじゃねえか」

「オレからケンカ売つてるみたいに言わないでくれ、人間が悪い……オレはそもそも海兵じゃないからあの人に従う義務はない。それなのにあの人は会う度にオレの思想を変えようとするから、こちらも言いたいことを言わせてもらつていただけだ」

オレ自身は敵を殺さずに倒せるように鍛え続けているが、他人にまで同じように敵を殺さずに倒せとは基本的に言わない。情けをかけて自分が命を落とすことだつてあり得るから。言うのはオレの思想を変えようとしてくるサカズキさんにくらいだ。

まあそのことをサカズキさんに言つたら、「わしが海賊に殺されるのを恐れて殺しているじゃとオ？」とめっちゃキレられたが。オレが言いたいのはそのじゃない……。

組手してもらつていることには感謝しているが、サカズキさんはオレを大海賊時代を終わらせるために利用する気満々なため、オレがバウンティハンター賞金稼ぎとして海賊を捕まえている以上、ちゃんと恩は返しているはずだ。だからオレを洗脳しようとしなくてくれ……。

「あの人なら、去年あつたCP9の人が海賊の人質になつた兵士500人皆殺しにして解決した事件、似たようなやり方で解決しそうだ」

いや、あの人は海賊はともかく、人質になつた兵士をわざわざ殺しはしないか？ 人質を無視するどころか人質ごと海賊を攻撃しそうなので、どちらにしろ兵士に死人は出そうだが。

「おい待て。なんでお前がCP9のことなんて知つてやがる。おれた

ちだつて海軍に入つてしばらく経つてから初めて聞いたぞ」

「シャボンディつて聖地マリージョアや海軍本部に近いから、そういう情報が入つてきやすいんだ。情報通の人がいて、オレはその人に聞いた」

「というか、オレの母さんだ。」

あとたまにバーに来てお菓子をくれるニヨン婆も物知りだな。

世界政府加盟国にケンカを売つた海賊を倒した事件なのに、事件を解決した人物の情報が出回っていないのは、CP9の仕業だからだそうだ。

「流石に名前までは知らないが」

「おれたちだつて知らねエよ。存在しないことになつてる諜報員の名前が、そう簡単に出回つてたまるか」

もつともだな。

あまり情報源について深く聞かれると困るので話題を逸らそう。

「それにしてもよく丸坊主と掃除で済んだな……まだ新兵とはいえ、クビにされてもおおかしくないと思うんだが」

戦場で口答えしようものなら、クビどころか他に反抗する人が出ないよう、見せしめを兼ねて粛清しようとすることもありえる。首から上をマグマで焼かれかねん。

「クザン中將が止めに入つてくれたんだよ」

「ああ、納得。あの人もサカズキさんと仲悪いからな。良かったじゃないか、止められる人が側にいて」

サカズキさんには煙たがられるだろうけど、代わりにクザンさんからは気に入られただろう。オレも気に入られてるし。

あの自然^{ロギア}3人で一番オレを海軍に勧誘してくるのはクザンさんだ。

サカズキさんはオレを誘わない。自分の言うことを聞かないから海軍の外に置いて、利用だけしようとして来る。どれだけオレを都合のいい存在だと思つているんだ……使い捨てる気満々で、それを隠す気も0つてどういふことだ……。

まあクザンさんはクザンさんで、オレに雑用を押し付けたいみたい

だが。今もたまに機密情報を除いた書類仕事とかを手伝っている。どうもオレに雑務を手伝わせる味を占めたらしい。能力や見聞色ですぐに終わらせている。印刷で筆記時間短縮したり、Dr. ベガパンクが開発したコンピュータという物に変化して計算したり、こつそり過去を見てどこに探している書類があるか探したり。

「今回は運が良かったけど、いつまでもこの調子では、あなたそのうち本当にクビになるわよ？ ヒナ苦言」

「おれは気に入らねエ指図は受けねエ」

よくそれで海軍に入る気になったな。

「はあ、呆れた……」

「クビになったらオレと一緒に賞金稼バウンティハンターぎやるか？ なあに、心配するな。海軍じゃなくても海賊は倒せるし、自分の正義は貫ける」

「クビを前提にしてんじゃねエよ……!」

「いや、その調子だと時間の問題に見えたから、今の内に誘っておこうかと。昇進しても不本意な命令はされると思うぞ?」

た এসモーカーさんが元帥まで出世したとしても、その上にこの人と考えが合わなさそうな世界政府がいるわけだし。

今年に国民が一齐に珀鉛病はくえんを発症して、周辺諸国によって隣国への通路は封鎖され、戦争が勃発し滅亡したフレバンス王国も、そもその発端は政府が地質調査により珀鉛はくえんが有毒であることを把握していたのに、政府とフレバンスの王族が利益に目が眩んで、珀鉛はくえんが有害だという事実を隠蔽したからって聞いた。

……オレ、政府のしたことで良い噂を聞いたことがないな。皆殺しだとか情報の隠蔽に捏造だとか、黒い話ばかりだ。少しは良いニュースを聞かせて欲しい。

CP9は闇の正義の名の元に、政府から非協力的な市民の殺害を許可されているらしいが、政府の闇が溢れすぎていて隠せていない。ドバドバ漏れている。

「ちつ、余計なお世話だ」

スモーカーさんにそっぽを向かれてしまった。勧誘失敗か。

「あら、スモーカー君は誘うのに、わたくしは誘ってくれないの？ ヒナ残念」

そう言つてヒナさんがわざとらしく悲しそうな顔をする。

「ヒナさんがクビになるとは思えないけど……海軍辞めて一緒に来てくれるなら歓迎す」

「ふふつ、ごめんなさいね、わたくし海兵としてやっていくつもりだから」

「じゃあ誘われなくて残念、とか言わないでくれ……からかってる？」

「スモーカー君だけ誘われるなんてずるいじゃない。顔が怖いのに」

「顔が怖いのか気にしていたら賞金稼バウンティハンターぎは出来ない」

「ははっ、良かったなつ、クビになつてもロゼが拾ってくれるってよ。顔が怖いスモーカー」

「お前らア、好き放題言いやがって……！」

おっと、フォローした方が良かったか。

スモーカーさんが青筋を立てている。丸坊主だからわかりやすい。そして前より迫力増してるな。

「それに、スモーカーさんは優しいぞ？ この前、転んで泣いてた子供の手当てしてたし」

「なっお前、見てやがったのかッ!？」

「へえ、そんなことしてたのか」

「あら、いい所あるじゃない。ヒナ感心」

「泣いてる子供に戸惑いながら手当てする姿にほっこりした」

まあ最初、子供を襲う暴漢に見えたのは伏せておこう。言つた所で誰も幸せにならない。

今度は少し照れているようだ。なんか丸坊主になつて表情の変化がわかりやすいな。

「そういうえばダディさん、子供いたんだ？ この前人に聞い」

ジャキツ！

「はあ？」

スモーカーさんが照れていたので話題を変えると、ダディさんに拳銃を突きつけられた。そして何故か鬼の形相をしている。

「ああ、コイツ、地雷踏みやがった……」

「(こうならないように、この子には知らせなかったのに……)」

「お前、おれのかわいいキャロルに興味があるのか……？ 聞いてんだぞ、お前が以前に赤子手懐けて兄と呼ばれてたってこたア。言っておくが、キャロルはやらんからなッ！」

「いや違うぞ、別にそういうつもりで話を振ったわけでは」

ドン！ ガキン！

この男、撃ちやがった……。

体を変化させることで銃弾を弾く。壁に穴が開いてしまったじゃないか。

「違うだとオ？ キャロルがかわいくないってのかッ!? 撃ち殺すぞ小僧オ!!」

「そんなことは言っていない。そもそも……ナミちゃんの方がかわいいつ!!」

「ダディ君はともかく、ロゼ君がこうなるとは思わなかったわ……ヒナ意外(怒る所はそこなのね……撃たれたことはどうでもいいのかしら?)」

「とりあえず止めるぞ……効かねエからって発砲しやがって、アレでも一般市民だぞ。おれがダディをやる」

「そうね、連れてかなきゃいけないし」

「【ホワイトスネーク】」

スモーカーさんが腕を蛇のような形に変えて伸ばし、親バカを煙で拘束する。

「おわつ、スモーカー、何しやがるっ！」

「お前が何してやがる……」

逆上しているダディさんに、スモーカーさんが呆れ気味に、至極真つ当なことを言っ返す。

「ふははっ！ よくやってくれた、スモーカーさん。今からここで、オ

レの妹の成長記録の上映会を始める！ ナミちゃんのかわいさ、しかとその目に焼き付けるがいい!!」

「何バカなこと言ってるの？ 早く行くわよ」

ガシヤン……！

オレが首から上を映写機に変え、目から光を出し、壁にナミちゃんの記憶を映像として映し出していると、後ろから忍び寄っていたヒナさんに、両腕で抱きしめるように錠をかけられた。そのまま次々に体を足首から胸の辺りまで錠で拘束され、糞虫のような状態になるシスコン^{オレ}。

そしてそのままお姫様抱っこで連れて行かれる。

「ああ、待ってくれ！ まだ少ししか映していないのに！ 動く映像がぶれる！」

「……あなたそんな理由でわたくしの【禁縛^{ロック}】を躲さなかったの？」

オレの妹の成長の記録をそんなってご無体な。

「というか何故お姫様抱っこ？ 肩にでも担げばいいじゃないか」

「それだとあなたは暴れるでしょう？それに、こうしていると錠を斬れないんじゃない？」

ヒナさんの言う通り、このままでは体をチェーンソーに変えて錠を斬れない。ヒナさんの体ごと斬ってしまうから。肩に担いでくれれば体を揺らして降りた後、錠を斬れるのに。オレのやることが見抜かれている……。

「もうおとなしくするので、降ろして下さい」

「面倒だからこのまま行くわ。ヒナ護送」

「護送って、オレは海賊や賞金首じゃないんだが……」

色々バレたのかと不安になるから止めて欲しい。心当たりが多すぎる……先日もタイガーさん達の件が増えたし。

「そっちの意味の護送じゃないのだけど……」

「いやだって、オレは護衛対象じゃない。ただの賞金稼ぎ^{バウンティハンター}じゃないか」

そもそも全身に錠をかけている時点で、守りながら届ける方の護送

には思えない……完全に身柄を拘束されている。

「(この子、自分の関わっている研究の重要性に気付いてないの？ 海楼石の手錠なんて加工が難しい高価な物、普通外部の人間にポンとくれるわけないじゃない……)」

「なんか急に黙って、どうかしたのか？」

「あなたは危なっかしい子供だと思っただけよ。なんだか手のかかる弟が出来たみたい……試しにお姉ちゃんって呼んでみて？」

何だ急に？ 別にいいが。いや、でもやっぱりお姉ちゃんはちよつと……。

「ええと、じゃあ、姉さん」

ゾクリ……

「!? (な、何なの？ 今の体が、いえ、魂が震えるような感覚は……それにしてもまさか不意打ちで姉さん呼びにするなんて……ヒナ不覚でもお姉ちゃんって甘えた呼び方より、こっちの方がこの子には合つてて自然ね……)」

「ど、どうしたんだ？ 急に身震いして……やはり普通にヒナさんって呼んだ方が良」

「いいえ、これからはわたくしを姉さんと呼びなさい。ヒナ命令」

「いやでも今固まっていたじゃないか。普通に呼んだ方が」

「わたくしずっと弟が欲しかった(大嘘)から嬉しかっただけよ。ヒナ満足」

たしかに笑っているな。機嫌も良さそうに見える。

「なら姉さん、扱いが犯罪者みたいだから止めて欲しい」

ゾクゾク……

「そ、そうね……おとなしく抱かれているなら、錠を解いてもいいわよ？」

「いや、普通にさつきまでみたいに歩けばいいじゃないか」

「姉弟のスキンシップよ」

そういえばオレもよくナミちゃんをだっこして飛んでいたな……。

「そうか……なら仕方がないな」

「でしよう？ (この子、譲れない一線さえ越えなきや本当にチヨロ、従

順ね……危険に首突っ込みすぎないように調きよ、教育しなくちゃ……ロゼ君、いえロゼの姉として)」

錠を解いてもらい、そのままヒナき、姉さんに抱えられながら、Dr. ベガパンクの所へ向かった。

いつもと同じように設計図を見て体を変化させてDr. ベガパンクの研究の手伝いをする。

それにしても……やはりこの人頭おかしいな、良い意味で。よくこんな物をポンポン思い付くものだ。開発費用がとんでもないことになりそうだが。オレはそのコストを能力でクリア出来るから恵まれている。

実験も終わり、海軍本部の研究室を出ると、姉さんが待つててくれていた。

時間大丈夫なのか？ あの2人も罰で掃除してたみたいだし、空き時間なのだろうか。

何故か急にオレの呼称が呼び捨てになっていたが、オレに至っては姉さん呼びなので大した問題じゃないだろう。君付けより呼び捨ての方が気安い感じがするし、悪いことではないはず。

そして2人でアインの所に戻り、改めてオレの霸王色をアインにぶつけて武装色の覇気も目覚めさせた。まだ目覚めただけなので、強く鍛えるには時間がかかるだろうが。

それにしても、アインが姉さんをどこか怯えた様子で見っていたが、どうしたんだろう？

目覚めたての見聞色で何かを感じ取ったのか？ オレは普段、心の声を聞かないようにしているから、2人が何を思っていたのかわからんが。

後日、ダデイさんとは、オレが噂以上にナミちゃんに対してシスコンだったことが判明したため、許可なく娘のキャロルに近付かないこ

とを条件に和解した。たぶん許可が下りることはないだろう。

別にどうしても会いたいわけではないので構わないが、そこまで警戒しなくてもいいじゃないか……。

『鬼教官の信念』

「あっ！ ロゼーツ！ 探したわよっ」

海軍本部を歩いているとアインに声をかけられた。

すごい笑顔で。

……何があつたんだ？

「……ずいぶん機嫌が良いみたいだが、どうかしたのか？」

「うん。あのね……実験台になつて？」

「はあ？」

いきなりアインの手が光を放つ。そしてそのままオレの顔に触れられる。

すると、オレの体が不思議な光に包まれて、少し縮んでしまった。

「やったっ、人にも効果があるのね！」

「……おいアイン、オレに何をした？」

「ふふっいい質問ね、ロゼ君。まずはこの鏡を見なさい」

少し年上風を吹かせた口調でアインにそう言われ、向けられた手鏡を覗いてみる。ただ体が縮んだだけでなく、子供の、いや元々子供だが……今までより少し幼くなっていた。5歳くらいの時のオレか？

おかげで服が手袋も含めて少し大きい。

「これ、明らかに悪魔の实の能力だろう。どこで手に入れた？」

「父さ、先生に貰ったのよ。ビンズも貰ってたわね。ひどい味だったけど……」

「ああ、あの味は2つ食べたなら死ぬとか関係なしに、もう食べたくはないな……」

どうもビンズもだが、周りから鬼教官の養子ということで轟負されないように、普段は父さん呼びをしているが、人前では先生呼びをするようにしているようだ。

まあ今はそれよりも……

「おい、元海軍大将^{ゼファーさん}！ 流石にやり過ぎだろ！ 最低1億ベリーの悪魔の实を2つって……そりゃあ蓄えはあるだろうが、よく手に入ったな……」

「海軍が海賊から手に入れた悪魔の実を買い取ったんですって。わたしは凶鑑に載っていない悪魔の実を選んだけど、出した光に触れたものの時間を1〜12年戻せるみたいね。モドモドの実って所かしら？ 1度光を出すと数秒出せなくなるけど、2度触れれば24年まで戻せるわ。すごいでしょ！」

得意げにそう言うアイン。まあこの能力は自慢したい気持ちもわかる。

それにしても、もう少し前にゼファーさんが悪魔の実を海軍から買ってあげれば、オレが売ったチワワの悪魔の実がアインに渡っていたかもしれないのか……。

アインには犬耳とかよく似合いそうだが、違って良かったな。どう考えてもこっちの方がすごい。これってつまり、もう年じやのオ……とか最近ぼやいて老人ぶってるガープさんを全盛期に戻してまだまだ頑張ってもらったり、海賊を非力な子供に若返らせて捕らえたり出来るってことだ。

「それはまたすごくて強力な能力を引き当てたな……オレは何の能力かわからない悪魔の実なんて、食べる気が起きない……」

まあ知らずに食べてしまったわけだが……今ではメカメカの実が大好きだ。オレが食べたのがこいつで良かった。

アインも自分の能力が気に入っているようで何よりだな。悪魔の実には悪魔が宿するという話もあるし、こっちが好きになれば悪魔も力を貸してくれるかもしれない。

「もうひとつの方はビンズが欲しそうだったから。それにアタリだったみたいだし……そういえば、あなたはどややって悪魔の実を手に入れたの？」

「オレか？ オレは（父さんが）海賊から手に入れたのを食べた」

「……あなたが能力者になったのって、3歳くらいって言ってなかった？」

「そうだが？」

「生まれつき覇気を使えることといい、やっぱりこいつおかしいわね……」

「オレは3年ほど戻されたってことか……ん？ オレは今8歳だけど、9年戻されたらどうなるんだ？」

母さんの腹の中に戻るのか？

「さつき植物で試したけど、誕生してから経過した時間以上を戻すと、存在ごと消えてなくなっちゃったわね」

「なるほど、そうなるのか………何故そんな危険な能力をオレで試した？」

オレを殺す気か、この先生大好き忠犬ワン娘……初見殺しにも程がある。

「あなただっただらそんなに怒らないと思って（今も全然怒ってないし）」

消されたら怒れもしないんだが……。

「まあ消滅していいから別にいいが、事前に説明位してくれ……」

というかもっと年上の人の方が、怒られないどころか喜んで若返ったんじゃないか？ ……ああ、オレに手に入れた能力を自慢したかったんだな。

「な、何よその生温かい目は」

「何でもない。じゃあ実験は済んだし、もう元に戻してくれないか？

服のサイズが合わなくて動きづらい」

「わかったわ。……？ ん。……？ 解けろく解けろく」

アインが時折首を捻りながら、オレに掌を向けて念じている。

その様子は少しかわいいが、オレの体はまったく元に戻る気配がない。

「何それ？ ふざけているのか？」

「いやあのこれ………どうやって元に戻すの？」

「なんだと？」

お前は一体何を言っているんだ。自分の能力だろう？

お前にわからないのにオレが戻し方なんて知っているわけがない。

オレはお前の母親か。オレの方が年下だよ。3年戻されて7歳年下だ。

「今まで時を戻した物はどうしていたんだ？」

「戻したまま放置してたわね……」

「はあ……元に戻すくらい出来るようになってから人に試してくれよ……というかまずは自分で試せ」

「だっていきなり自分で試すのは怖かったし……」

「そんなものをオレで試すな」

「ごめんなさい、面目ないです……」

アインに謝られる。犬耳や尻尾があっただらしゆんと垂れているだろう。

「とりあえず海楼石に触れてみるか」

コートのポケットに入れているケースから海楼石の手錠を取り出し触れてみるが、オレの体は元に戻らない。厄介な……この分だと海に浸かっても解けないな。

能力をかけたアインが海楼石に触れたら解けるかと試してみたが、それも駄目だった。

今更能力者が海楼石に触れてもこれから能力が発動出来なくなるだけで、すでに発動していた能力の効果までは無効化出来ないようだ。

まだアインが自分で能力を解除出来ない以上、もう残った方法は能力者を殺すか気絶させるかだな。たいていはこれでなんとかなるはず。

当然気絶させる。

「どうしよう……このままじゃロゼの人生がやり直しに……」

「元に戻るあてはあるから問題ない。やり直させられてたまるか」

こっちはまだ人生やり直したいほど生きちゃいないんだ。せつかく鍛えたのにリセットされたらたまったものではない。

記憶が元のままということは単純に肉体の時間が戻ったわけではないようだが、悪魔の實の理屈はよくわからんから仕方がない。覇気や悪魔の實の能力は弱体化するのかとか、色々と気にはなるが、今は置いておこう。

体感で大きくなった服は余った袖や裾を折り、ベルトをきつく締め
て間に合わせる。

「ど、どうするの?」

「とりあえずゼファーさんの所まで行く。お前も一緒に来てくれ」

というかアインがいなければ戻れない。

こんな廊下でアインを気絶させて、そのことがゼファーさんにバレ
たら後が怖いので、オレの姿をゼファーさんに見せた後で気絶させ
て、オレに非がないことを確認してもらおう。

子供に危害を加えられたと知った親は怖い。先日のダデイさんの
ように……いやオレ何もしないから完全に冤罪だったが。まだ娘
に会ってすらいない。名前しか知らん。

さつきまでオレも訓練に混ざっていたから………やはり特訓場
にいるな。

「そうね、先生ならなんとかしてくれるわね」

別にそういう理由で会うわけではないが、ここは黙っておこう。

沈黙は金、雄弁は銀。

……なんかそう言うのと黙らずに、言葉巧みにアインを騙だまくらかして
連れて行きたくなかったがやめておこう。

気絶させられると知り、逃げられたら困る。

逃がしはしない。確実に気絶させる。

まあこれでお互い様だろう。

「お前には、チワワの方が良かったかも……」

「? チワワはかわいくてわたしも好きだけど、いきなりなんのこと
?」

「いや、なんでもない」

口は災いの元だ。いくらチワワが好きでもなりたいとまでは思わ
ないだろう。

☆☆☆☆

「ロゼ、お前その体……まさかアインの悪魔の実の能力なのか……?」

アインと一緒に特訓場に行くと、椅子に座って水を飲んで休んでいたゼファーさんが

こちらに気付いた。

「はい！ わたしが出した光に触れたものの時間を戻す能力でした！」

元気よく答えているが、もう少し反省した素振りそぶを見せてもいいんじゃないか……？

「それはまたとんでもない能力だな……それで、なんでわざわざその姿のまま来たんだ？」

「それが……戻し方がわからなくて……」

「……ロゼ、すまん……」

ちよつと呆れた様子のゼファーさんに謝られた。まさかそうくるとは思っていなかったんだろう。

「いい。これから戻すから。アイン、ゼファーさんの隣に座ってくれ」

「え？ わかったけど……」

アインに着席を促す。

オレは折っていた裾や袖を元に戻し、ベルトを緩めて元の体に戻る準備をする。

「おい、まさかお前……」

ゼファーさんは気付いたようだ。流石元海軍大将。能力の解き方に思い至ったんだろう。

じゃあもう始めるか。ちゃんと受け止めてくれるだろう。

ギンツ!!

アインが座つたと同時に全力で霸王色をぶつける。怪我させずに意識を奪うのはこれが一番だ。3年前はまだ霸王色を自分の意志で使えなかったが、この状態でも問題なく使えるようだ。無理なら【電撃エレクトロ】を使うところだったが、あれは痛いだろうからな。霸王色が使えて良かった。

アインが意識を失い横に倒れるのを、ゼファーさんが慌てて腕で受け止める。

そしてオレの体が光に包まれ、急速に体が成長し元に戻った。

「ふう、無事に元の体に戻ったな」

「お前……前もって説明位しろ……（これが今のこいつの全力か……あの時代のあいつらには遠く及ばないにしても、ガキがなんて威圧しやがる）」

「今あなたの腕で寝ているアインお嬢様は、オレを説明なしで若くしたが？ ついでにこれも後で聞いたが、年齢以上の時を戻されると、この世から消滅するらしい」

「……重ねてすまん（便利な反面、とんでもなく危険な能力だ。こんな悪魔の実があつたのか。海賊の手に渡っていたら……考えたくもない。報告はしても凶鑑には載せず、軍で秘匿するように言った方が良さそうだな）」

「これでアインとはおあいこだからいいさ。それにしても、2つも悪魔の実を買ったんだって？ 随分と気前が良いな」

2つ合わせて最低2億ベリー。お誕生日プレゼントでもこんなに出さない。天竜人ならともかく。

「……おれの代わりに大海賊時代を終わらせるって、毎日頑張ってるこの子達を見てたらついな……（昔の、正義の味方になるって海賊共と戦っていた頃のおれを思い出す……）」

「大海賊時代を終わらせるか……オレが生まれてすぐに始まったけど、どうすれば終わるんだろうな……ひとつなぎの大秘宝を見つけて、海賊共の目の前で叩き潰しでもすれば終わるのか？」

壊せるものなのかは知らないが。ひとつなぎの大秘宝を手に入れた者が次の海賊王だと言われている。オレには海賊王の証なんて必要ない。それに、仲間を大事にしていたと聞く奴が、その仲間に残さず、どの馬の骨ともしれない奴らに欲しけりゃくれてやると言う程度のものだ。

これ以上オレが知るはずのない情報を下手に知って、ボロが出れば困るしな。この前聞いたロード歴史の本文のことだけでも知られるとマズイ。抱える秘密なら間に合っている。

「……おれは、いや、おれだけでなくガープ達も、『海賊王』と呼ばれるようになったロジャーの死によって、海賊が海で暴れ回る時代は終

わると思っていた……あの男は強いだけでなく、敵であるはずの海兵のおれでさえ、嫌いになれない所があったからな。ロジャーの死は、あらゆる海賊共の心をへし折るだろうと思っていたんだ。それが、奴の死によって終わるどころか、大海賊時代の幕開けだ。何のつまりねエ冗談だと思つたもんだ……」

まあ「海賊王」がいなくなったのにさらに海が荒れるとは誰も思わなかっただろう。ロジャー海賊団の副船長をやっていた父さんでさえそうだった。そんなに海賊王つてなりたいものか？ 王つて付いてるだけで別に偉くないんだが……頭海賊の2文字がすべてを台無しにしている。どうせなら「冥王」の方が異名の響きがかっこいい。

それにしてもゼファーさんも嫌いじゃなかったのか。ガープさんも似たようなことを言つていた。

「フツッ、ひとつなぎの大秘宝目当てに海に出て、自分勝手に好き放題する、今暴れている海賊共が悪い。『海賊王』はただ死んだだけ……最期に焚き付けるような余計なことを言つてくれた、とは思うが。チツ、あのヒゲエ……」

「フツ……お前はロジャーが嫌いなようだな。昔からロジャーの話になると、機嫌が悪くなる」

父さんの前では、あまり露骨に態度に出せないからな……ロジャー大好きだから落ち込ませてしまう。オレのロゼという名はロジャーに似せて付けたんじゃないかと疑つたことがあるほどだ。まあオレの名付け親はニヨン婆らしいから違うけど。違つて良かった。海軍本部では隠さずに済むからいい……その代わり別の秘密があるが。

「知つての通り、オレは海賊が嫌いなんだから当たり前だ。それに、敵でも嫌いになれない海賊なんて、そこらの凶悪海賊より余程性質が悪いじゃないか。あのヒゲに影響されて海賊になつた奴もいるんじゃないか？」

オレはもし嫌いになれない海賊と出会つたら戦わないが、海軍にとって迷惑極まりないと思う。

「そうだな……だが、海賊が増え続けるというなら、おれはその海賊共

を倒す正義の味方を育てたいのさ……教え子達を身も心も強く育て上げ、海賊と戦っても無事生還出来るように。そうして多くの正義の味方を育てていけば、いつかこの大海賊時代も終わるはずだ」
笑いながらそう語るゼファーさんの目には、鉄の意志が宿っている。それがこの人の信念か。

「なるほど……それで海軍の教官を続けているのか」

「何を他人事みたいに言っただらう。前に言っただらう？お前もおれの教え子の1人だ。海兵でなくともな」

「……オレは海賊が滅べばいいと思っただけで、自分の夢だつて大事だぞ？夢を叶えても、嫌いな海賊とは戦うが。それに正義の味方といつても、オレには正義なんてわからない」

父さん達みたいな引退した海賊とは戦わないし、気に入ってしまった見逃すだらう。そんな海賊と会ったことなどないが。話で聞いただけなら、魚人島を縄張りにしてる白ひげ海賊団とは戦うつもりはない。そんなことしたら魚人や人魚の友達と気まずくなる……もつとも今のオレでは戦おうにも顔すら拝めないだらうな。今も傘下の海賊を増やし勢力を拡大していると聞く。

それに正義の味方は見返りを求めないが、オレは海賊共の所有物と懸賞金をきっちり頂く。日々求めまくりだ。非常に稼がせてもらっている。母さんが、今の時代は海賊より賞金稼ぎの方がよっぽど儲かるわね……海軍にも追われないし、と驚くくらいには稼いだ。

そもそも家族だから、好きだからと元とはいえ海賊を隠しているオレに正義があるはずがない。父さんや母さんと争うくらいなら正義なんていらぬ……まあ世話になってるし、正義の味方にはなれなくても、出来る限りのことはするか。オレの信念は正義ほど厳格ではないが、ある程度一致している、と思う。

「それで構わん。正義の答えなんて、長年海兵として戦い、海軍大将にまでなったおれにだって、容易には見つけられなかった」

「そうなのか？」

「ああ……海軍は、単純な正義の組織というわけじゃない。海軍では守れないものも多い。自分の理想と現実に悩み、それでも部下達は守ると、おれは海を荒らす海賊共と戦った（海軍はただ民衆を守る正義の味方ではなく、世界政府のための軍隊だ。こいつが住むシャボンディ諸島、あそこも世界政府と海軍が抱える歪みが表れた場所だ。最近の騒ぎでC P—Oの連中も動き出すらしい。海軍の正義では、助けられない人もいる……）」

「……理想とは違っても、海軍に、ゼファーさん達に助けられ、救われている人は確実に存在する。それに、そんなことを海軍の教官が言っているのか？」

海軍が正義の組織じゃないなんて……。

「海兵達にはあまり言えんな……だが、お前は海軍に入るつもりはないんだらう？」

「ああ、悪いけどな」

「いいさ、海軍がすべてじゃない。それに正義の答えはそれぞれが、自分自身で考え悩みながら見つけるものだ。海兵達が、今を生きる人々が、そして未来を作る子供達かな」

そう言つてゼファーさんが、優しい顔で自分の膝の上で気絶しているアインの頭を撫でている……ちよつと罪悪感があるが、気絶させたのは仕方がないよな？ それしかオレの体を戻す方法、思いつかなかつたし……。

☆☆☆☆

「ちよつと！ いきなり気絶させるなんてひどいじゃない！ そりゃあ能力の解除に必要だったかもしれないけど、前もって教えてよ！」

「お前が言うな」

復活したアインに文句を言われる。

アインを気絶させたことをゼファーさんには申し訳なく思ったが、お前に対して申し訳ない気持ちはないからな？

「さっきのお返しだ。これでお互い様だろ？」

「ぐぬぬ……」

「お前達、何を言い争っておるのだ？」

「適当にアインをいなしていると、片手に何かの種の袋を持ったビンズが近づいて来た。」

「ちよつとアインの能力の実験台になって、能力を解除するための不意打ちで気絶させたんだ。そのオレの行動の是非について話している」

「何の能力かわかったのか。どんなものだったんだ？」

「わたしが出した光に触れたものの時間を一度に最大で12年戻す能力よ」

「……ロゼは8歳だが、12年戻すとどうなるのだ？」

「オレの歳以上を戻すと、存在ごと消滅するそうさ。オレは3年戻された」

「なんとという危ない能力だ……」

「だよなあ……」。

「ちよつとアインが加減をミスしていたら、オレは消えてしまっていたところだ。」

「それで、ビンズはなんで種を持っているんだ？ 家庭菜園に目覚めたか？」

「オレも家でやっている。ノジコも今頃ベルメールさんとみかんを作っているんだろうな。」

「いや……見た方が早いな」

「そう言つて、種を地面にばらまくビンズ。」

「そういえばビンズも悪魔の実を食べたんだったか？ そして種

「……まさかっ！」

「モサモサッ！」

「酉、戌、巳。」

「ビンズが素早く印を結ぶ。」

「するとモサモサと種が育ち、見る見るうちに木が出来上がった。」

「かっこいい……！」

「そうっ？」

目を輝かせる男と興味なさげな女。

これはかの有名な木遁。忍の神が使ったという最強の忍術だぞ？

「モサモサの実を手に入れたのか……」

「よく名前までわかったな」

「いや、口で言っていたじゃない」

「かつてオレが最も欲しいと思っていた悪魔の実だから……ピンと来た。今はメカメカの実で満足しているが」

「モサモサ言ってたからわかったんじゃないの……？」

「言う前に察しが付いた。これでビんズは木遁を使えるようになったわけだ。羨ましい！」

「お前とて火遁と雷遁、そして風遁が使えるではないか」

「科学は忍術ではないだろう……」

ビんズが言うオレの火遁と雷遁って、体を火炎放射器やスタンガンに変えて放つ、なんちやって忍術だ。あと斬撃を飛ばす風遁もどき？
まだ覇気や六式ロクシキの方が忍者っぽい。特に剃ソル。

それにオレの能力はあくまで機械。火の能力者や電気の能力者ほど自分の意のままに操れない。電気は身近にお手本が出来たし使い勝手が良いが、火は服や体、周りの物に燃え移る分加減が難しい。ヤルキマン・マングローブの上に来たシャボンデイでは、一歩間違えれば大惨事なので、今の所人のタバコや葉巻に火をつけるライター代わりにしかなくていい。手札の数が自慢であって、手札それぞれの性能は、特化した能力者に及ばず、体力も多く消耗する。まあ体力は鍛えればいいだけだが。

「というか、きっきのあの……印？ あれは必要なの？（手が塞がって不便そう……）」

「拙者が一番植物を操れそうだと思った方法があれだった。それに……」

「「あの方がかっこいいだろう!!」」

「この場にいる男全員が力強くハモった。」

「ロマンがある!」

「あれは必要だろう!」

「そうでござろう!?!」

「(と、父さんまで……わからない……)」

その後、しばらく忍者談義をした。アインはあまり喋らなかつたが。もつと話に入ってくればいいのに。

「そういうえば、結局悪魔の実にいくらかかったんだ? このモサモサの実とモドモドの実」

モドモドの実は能力の詳細がわかつていたならともかく、能力不明の悪魔の実だったのならそんなにしなかつただろう。問題はモサモサの実だ。オレなら10億ベリイくらい出すんだが、いくらだったんだ?

「2つ合わせて2億ベリイだ」

「……………WHAT?」

「ふっはっはっ。20億ベリイとは随分高い買い物をしたんだな」

「いやそんなに出来るかつ。2億ベリイだと言ったんだ」

「聞き間違いではなかつたのか……つまり何か? 1つ1億ベリイだったと?」

「そうなるんじゃない?」

「モサモサの実が1億ベリイ?! やつす!! 何故!?! そんな値段だつたらオレ10個買うぞっ!?!」

バカなっ……ありえないっ!

「そんなに買ってどうするのよ? (そんなに買えるお金あるんだ……)」

「スぺアだ! ……どうして最低価格なんだ?」

「海軍の悪魔の実の取引相場は、基本的に戦闘力によって決定される。ゆえに純粋な身体能力が強化される動物や、武装色の覇氣使いや海楼石がなければ弱点でもつかない限り無敵で常人には不可能な動きが出来る自然が高額で取引される傾向にある。それに超人は使い手によつて強くも弱くもなることが多い」

超人が使い手によつて強さが変わるのはその通りだろうな。オレ

のメカメカの実も凶鑑には空を飛べるなんて書かれていないし、オレ以外が食べると違う能力の使われ方をされるかもしれない。凶鑑を見ても何の役に立つのかわからない能力は結構ある。ただ肉球が出るだけのニキュニキュの実とか。イヌイヌの実の能力者の獣型にも肉球は出来るし、何の意味があるんだ？

「(もつとも、戦闘にあまり向かなくても、五老星を筆頭とする天竜人が欲しがりそうな能力、不老手術が可能とされ究極の悪魔の実とも言われるオペオペの実のような能力であれば、連中が資金を出し、とんでもない高額で取引されることもあるが。アインの能力も連中が欲しがりそうだな……おれが目を光らせておかなければ。ロゼは、海賊嫌いの賞金稼ぎ、霸王色による海軍の強化やベガパンクの研究にも協力的で危険性なしと判断され、勧誘はするものの基本放置されているが)」

「たしかにそうかもしれないが、モサモサの実の応用力はかなりのものぞぞ？」

「ほう、例えば？(一番欲しかった悪魔の実と言うくらいだ。何か策でもあるのだろうか)」

ビンズが聞いて来た。自分の能力だからな、気になるのだろう。

オレの長年の試行錯誤を伝えるとするか。中には不可能だと発覚したものもあるが。

例えばヤルキマン・マングローブが出すシャボンは気候によっては消滅してしまうらしい。生まれた時から見ていたから、それは気付かなかった。そういえば上空まで飛んだシャボンがいつも割れていた。あれは気候のせいだったのか。だからシャボンが飛ぶ風景が他の島では見られず、珍しがられるんだな。

「植物を成長させ蔓を伸ばし、相手を拘束し動きを封じ、首を絞め落とせる。それだけでなく、樹木を成長させ檻のようにし島を封鎖し逃げられないようにすることだって出来るだろう。サボテンを操り棘を発射させたりと、操る植物によっては多種多様な攻撃が可能。シャボンデイのヤルキマン・マングローブのように海で成長させれば、足場を作って海賊船も蔓で縛れる」

最初からここまで出来ないだろうが、そんなもの鍛錬次第でどうとでもなる。悪魔の実が出来ることは、オレの想像を遥かに超える。悪魔の実でなくとも、ポツプグリーンという急速に育つ植物はいる。能力でそれ以上のことが出来ないはずがない。

サボテンも普通サイズの棘なら大した攻撃にならないが、グランドライン偉大なる航路のフルシャウト島には巨大なサボテンがあるという。そんなサイズまで成長させ操り棘を飛ばせば、もはや砲撃だ。

「なるほど……参考になる」

「戦闘以外でも、種や苗木があれば成長させてすぐに野菜や果物が食べられる、味がどうなるかは気になるが……食べた後も残った種を使ってまた増やせる、食料に困らない。栽培が難しい貴重な薬草とかの植物も能力で強制的に成長させることが出来る。そして、能力で兵糧や薬草を手に入れて、余ったお金を他に回せる。世界にたった数本しかないという宝樹アダムを手に入れられれば、能力で成長させ何度でも頑丈な木材で出来た軍艦を比較的少ない費用で製造出来る。海軍なら手に入れずとも、借りて成長した木を切って分けてもらう手段があるんじゃないか？」

かつて偉大なる航路グランドラインを制覇したロジャー海賊団の船、オーロ・ジャクソン号にも使われていて、何度も危ない目に遭ったが船と共に突破したらしい。宝樹アダムの木材は裏ルートでたまたま流れそれを使つたそうだ。海賊同士の戦いや海軍の攻撃を受けたらうに、大した頑強さだな。

「そのまま使えるなその考え……（海兵の死傷者も減るだろう。最初からそこまでは出来ないだろうがビンスの能力の修行にもなるし、セングク辺りに話してみるか）」

「それに余った作物を売れば、政府から以外の資金源が増え」

「それは無理じゃない？」

そこでアインから待ったが入った。話はここからなんだが……。

「何故だ？」

「いやだって、海兵って商売禁止よ？ 明文化されているわ」

「何？ オレは前に悪魔の実を海軍に売ったし、ゼファーさんも海軍

から悪魔の実を買ったんだろう？　これは商売じゃないのか？」

「悪魔の実を買ったのは武器を買うのと同じで軍備増強のためじゃない。先生が悪魔の実を買ったのだから海軍内のことで利益を得るのが目的じゃないし。無料で配るとかだったら出来るかもしれないけど」

「そうなのか……まあ確かに海兵が商売に熱心になって本業が疎かになったら困るか。」

「(それに、海軍が独自の資金源を持つなど、自分達の影響力が弱まるようなことを五老星は認めないだろう。奴らにとって海軍はあくまで政府の表の顔、自分達の意のままに動かせる政府の狗……まあそうでなくても軍が力を持ちすぎるのは危険ではあるが。それにしても、こんなことを言うってことは、こいつは政府をよくは思っていないな。それでも海軍本部に頻繁に足を運ぶのは、海軍の^{おれたち}ことまでは嫌っていないってことか……)」

「とにかく、モサモサの実の能力は便利だと言いたかった……時間空いてる時でいいから、将来オレが収集した農産物、成長させてくれないか？」

「別に構わんが」

「やった！　自分でこそ手に入れられなかったが、これはこれで結果オーライだ。」

「ねえ、わたしのモドモドの能力はなんか良いの無い？」

「いや、お前の能力は思考停止で光で触れて時間を戻すだけで充分以上に強いんだが……身体能力もきちんと鍛えなければ、相手に触れもしないという事態が起こるだろうが。」

「そうだな……光を出すんだし、ボルサリーノさんみたいにビームを撃てるようになったら強そうだな。モドモドビーム。あの人と違って物理的な攻撃力はないだろうが、誕生してから経過した時間以上を戻せば消えるなら、相当な脅威だ。武器に当てれば武装解除出来る。だが全身から光を出すのは止めておけよ？　その服が消えるから」

「なっ、そんなことしないわよっ！　(あ、危ないところだった……)」

「まあ色々試してみればいい。悪魔の実の力つて結構何でもありだから、思いつきでもやってみれば実現出来るかもしれない」

「そ、そうね(こいつも色々出来るし……喉をボイスチェンジャーに変えて声真似とか、一発芸みたいなこととして遊んでるわね……ボルサリーノ中将の声で早口言葉を喋ったりとか)」

「あとお風呂に入る時は気を付けろよ、力が抜けるから。シャワーか半身浴にしておけ」

「そっか、さつき海楼石に触れたみたいになるのね……今まで通りには出来ないわね」

オレのメカメカの能力もそうだが、その程度の代償で得られる能力なら欲しい人はいくらでもいると思うがな。

☆☆☆☆

数日後の海軍本部

「あら、ロゼ。ここにいたのね、ヒナ搜索」

「搜索ってどうかしたのか、姉さん？」

今日はDr.ベガパンクは来ていないはずだが。そもそもそんな頻繁に来るわけじゃない。

「アインちゃん的能力を聞いて用が……ちよつと待ちなさい」

いきなり姉さんに抱き上げられた。そして鼻を近付け匂いを嗅がれる。

「何？ 唐突過ぎるんだけど……えっ、もしかして臭い？」

「いえ、いつもと違う匂いが混ざっている……これは、女物の香水の香りかしら？ アラバスタのナノハナで作ってるものね(あとどこか動物みたいな匂いもするわね)」

……なんでそんな匂いの違いがわかるんだ？ ミンク族や動物の能力者じゃあるまいし、産地まで……たしかに手に入れた瓶にもそう書いてた。

「ここに来る前に捕まえた賞金首のじゃないか？ 抱き着かれたし」

「へえくそうなの……なんて女海賊？」

オレの顔のすぐ前に姉さんの笑顔が来る。とても怒っているようには見えないが、オレの見聞色は怒りを感じている。心の声なんて聞かずに感情がわかる程度が程々でちょうどいいな……だが何故尋問みたいになっっているんだ？

「5千万ベリーの『蠱惑魔』」

帰ったら手配書集のページに○付けよう。

「『蠱惑魔』オリーブ……その美貌で男を虜にして、騙し討ちを得意にしているっていう女海賊ね……それで、どうしてかわしもせず海賊に抱き着かれているのかしら、あなたは。見惚れちゃった？ 手配書の写真を見たけど、すごい美人だものね」

オレの体を片手で持ち上げながら、もう片方の手が首に触れている……えっなんだこれは？ オレ、これから不用意な発言をすれば、首を絞められたりでもするのか？ 体を変化させれば効かないけど、そんなことをすればオレは後ろめたいことをしましたと告白しているも同然。そんな事実は一切ない。ただ海賊団を潰したただけだ。

「わざわざ相手からオレの攻撃範囲に入ってきて来てくれるなんて、楽でいいじゃないか。喋ろうとしていたけど、そのまま【電撃】^{エレクトロ}で気絶させた」

オレの雷遁もどきだ。ミンク族が使う【エレクトロ】と同じような技。体をスタンガンに変え電撃により相手を感電させる。ミンク族程器用には扱えないけど。

痛そうな悲鳴を上げていたが、女だろうが相手はオレを売り飛ばさうとした海賊なので同情の余地がない。他の仲間を全員倒した後、心を改めた、引退する、なんて言われてもまるで信用出来ん。強くても子供なら少し優しくしてやれば騙せる、なんて考えていたし。自分のさつきまでしようとしていたことをよく振り返ってみろ、騙されるわけがないだろう。母さんから、女でも海賊相手には油断するな、と強く言われている。体に傷が残る倒し方をしないでだけマシだろう。

「（脈拍に乱れなし……）そう、えらいわね。女の子には優しくしない

といけないけど、海賊に気を許してはダメよ?」

怒りは薄れ力も緩んだが、まだ首には手が触れたままだ。

「わかっている。これでもオレは姉さんより早く海賊と戦っているんだから」

「それはつまり、今までにも美人の女海賊に抱き着かれたことがあったから慣れている、ということかしら? (もしそうなら教育が必要ね……)」

また力が入る。どうすればいいんだ……美人の元女海賊の母親ならいるが、電撃使えるようになる前は敵の女は鞭で絞め落としていたから、そんな過去はない。

「そうじゃなくて、海賊に気を許さないってことだ。よく美人の姉さんに抱き上げられてはいるけど、今も」

「……嘘はついてないようね。お世辞で誤魔化そうなんて、猪口才なことをしようとはしてるけど」

言われ慣れているんだろうな、軽く受け流される。

「もしかしてこれ、脈拍を測って嘘かどうか見破ろうとしていたのか?」

いつの間にそんなことが出来るようになったんだ。オレはいざとなれば見聞色で探ればいいので、そんなことは練習してもいない。

「政府の諜報機関、サイファーボールC Pで使われているものよ。海兵だって覚えておいて損はないわ、まだ覚えてただけど。今だって姉を誤魔化したり、姉に隠し事をするのが大好きな、困った弟のことをよく知るために役に立っているし。ふふつあなたと違ってあなたの体は正直ね、口ゼ? (まったく。わたくしに黙ってどんなことに首を突っ込んでるのかしら、この子は? ヒナ心配)」

オレに隠し事があることがいつの間にかバレている……これが父さんが怖いくらいよく当たるから気を付けろと言っていた女の勘、いや姉の勘か? たしかにこれは怖い、覇気でも防げない。というかゼファーさん、これが正義の味方なのか? いやまあたしかに海賊王の右腕の息子で、元海賊を匿うオレの秘密を暴くのは正義と言えるだろうが……。

「……何か言い回しがいやらしいな」

「あなたに言われたくはないわ。ヒナ心外」

何故だ。オレがいつそんなことを言った？

「まったく、また誤魔化そうとして……とにかく、いくらあなたが年上好きだからって、他の人にぴよぴよついてつちやダメよ？ シヤボンデイで暴れている女がいるんでしょう？」

いつの間にかオレは年上好きになっていた。さつき姉さんを美人って言ったからか？ ただの事実じゃないか。美人で能力者で優等生だけど最近ちよつと様子がおかしいと評判だ。

「ついて行かないよ……というかぴよぴよって、オレはひよこか……？」

オスのひよこって卵を産まないから、かわいそうな未来が待っているんだが。

「かわいいでしょ？ ひよこって、生まれてすぐは体温が低くて死んでしまうことがあるから、こうやって温めてあげないといけないのよ？」

「姉さん、オレはひよこじゃないし、生まれたてでもない。ロゼ訂正……それに寒いなら体をヒーターに変えれば平気だ」

「あら、わたくしの真似？ お姉ちゃん子ね。それじゃあ寒くなったらヒーター、お願いね。湯たんぽ代わりになりそう」

姉さんもオレで暖を取るつもりか、家の最近出来たもふもふしてるのに寒がりな居候といい……そしてこの前は口癖を真似したら怒っていたのに、今は逆に嬉しそうだ。姉さんと呼ぶようになってから、随分態度が変わった……もしかして最近ちよつとおかしいって噂、オレのせいなのか？ どうしよう、今までは良い話しか聞かなかったのに。とりあえず、姉さんの良い所を色々広めて上書きするか。

「あなたは……狩りが得意な猛禽類のハヤブサね」

「オレは肉より野菜の方が好きなんだが……鳥なのは変わらないんだな。悪い気はしないけど。ハヤブサはカッコいいし」

「あなたも鳥と一緒に空を飛べるじゃない。それにその前髪は間違いない。わたくし、鳥好きよ？ 子供の頃に檻に入れて飼ってたこと

があるわ。ヒナ飼育」

鳥籠ではなく檻に入れてつてことは、子供の頃からオリオリの実の能力者だったのか？ オレだつて早くに能力者になつたし別に不思議ではないが、どういう経緯で手に入れたんだ？

喋り方が丁寧で、趣味が乗馬つて聞いたし、資産家のご令嬢だつたりするんだろうか。さつきも西の海出身なのに偉大なる航路の香水を知っていた。西の海と言え、西の五大ファミリーと呼ばれるマフィアが裏社会を牛耳つてることが有名だし、お金とコネがあれば取引で悪魔の実を手に入れることも難しくはないか。偉大なる航路以外の海では悪魔の実は相当珍しくて伝説とまで言われているらしいが……いやでもそれを言つていたのはベルメールさんだからな。

あの人の出身の東の海の情報の遮断されっぷりはおかしい。海軍に入るまで記録指針ログポイスの存在すら知らなかつたらしい。最弱の海とか平和の海とか呼ばれて、本部の海兵からも東の海勤務は閑職扱いされて東の海生まれの人イーストブルーにしか人気がないくらいだが、政府や海軍が上手いこと情報を封鎖したり、記録指針ログポイスを一般では手に入り辛くしているのだろう。情弱の海だ。『海賊王』の出身でもあるし、警戒しているのかもしれない。

「それにしても、また前髪なのか……いや、オレも鳥は好きだが。自由に空を飛んでて」

「(そしてハヤブサは賢いから調教すれば、ひもなしで飛ばしても呼んだり笛を吹けばちゃんと戻つて来る。実は分類上タカよりもインコに近くて、そのせいとか他の猛禽類より懐きやすく、たまに見せる仕草がかわいい。攻撃的な一面もあるけど、この子の場合それは主に海賊に向けて。鷹狩で用いられやすいハンター。ピッタリじゃない)」

その後も話しながら部屋に連れられたと思つたら、オレが縮んでいたことが姉さんに伝わっていたようで、部屋にいたアインと一緒になつてオレを幼くさせ、着せ替え人形として好き放題着替えさせら

れ、写真を撮られた。あの大量の服は一体どうしたんだろう？ まあ母さんで慣れているが。年下の家族の成長の記録を残したいと思うのは至極当然の感情。オレにも覚えがある。

しかし、まさか能力で強制的に若返らせてまでされるとは思わなかった。おむつを穿かされるのだけは断固として許可しなかったが。何故そんな物まで用意している……流石にそこまでしたくないので能力を使って抗った。まだ悪魔の実を食べていなかった1歳児まで戻されても、能力は使えて良かった。

檻や錠で拘束する能力者と出した光に触れたものの時間を戻す能力者、厄介なコンビだけどやることが着せ替え人形って大海賊時代なのに平和だな。というかアインは姉さんのこと怖がってたんじやないのか？ こんなことで仲良くならんでも、他に何かあるだろう……自分で能力を解除出来るようになったみたいで、今回は気絶させる必要はなかった。

そして姉さんが最近ちよつとおかしいという噂は、オレが姉さんの良い所をその辺の海兵に触れ回ったことにより、オレが妹ナミちゃんへのシスコンに加え、姉大好きっ子だという噂に取って代わられる形で消滅。どう足掻いてもオレはシスコンなのか……当初の目的は果たせし、姉さんの機嫌もいいが、オレが思っていたのと全っ然違う……こんなはずではなかったんだがな。

“ノツクス探検隊”

年が明けてまだ寒い2月、シャボンディを家に向かって移動していると、少し離れた無法地帯に何やら人が集まっている気配がする。天竜人が来ているのかと思っただ、それならば近寄らないだろう。

気になって飛んで行ってみると、フードを被った集団がいて、その周りの物陰に人が何人も隠れながら尾行している。どちらも凄まじく怪しい……何だ、あの不審者達は？

「先ほどから物陰に隠れてこちらを見ているやガラら、おれ達に何か用か？」

「くそっ、バレてやがったかっ」

先頭を歩いていたフードの人物に看破され、物陰に隠れていた奴らがぞろぞろと出てくる。声からしてあのフードの人物は男性だろう。「隠れていてもおれ達は鼻が利く……上にいるゆガラもどうかしたのか？」

「はあ？ 何言ってるんだ？」

オレもバレている……気配は消していても匂いなんて、変えることなら出来ても消しようがない。かなり離れているんだが。

あの独特な呼び方に人間離れた嗅覚、もしかして……

「オレは怪しいフードの集団と、その周りにも怪しい奴らが隠れていたから、何事かと思っただけだ。あんた達はもしかしてミンク族か？」

喋っていたフードのミンク族らしき人物の近くに降りて聞いてみる。

「ああ、そうだ。目立つので隠しているが（子供だったのか……それにしてもこの子供の匂い、どこか懐かしいかんじが……）」

こちらを向いた顔を見ると、オレンジっぽい色の髪で黄色い体毛に黒い斑点、そして口の回りは白く、喋ると鋭い牙が見える。ネコ科の肉食獣、模様がトラではないな、ヒョウ辺りのミンクか？

「やっぱりそうなのか。だったら頼みたいことがあるんだが」

「あつ！ ヘッド、あのゴーグルのガキ“機甲”です！」

「何っ、1億ベリーの奴か!？」

オレがミンク族の彼と話をしていると、向こうでオレの異名が呼ばれる。それを知って嬉しそうな笑みを浮かべるってことは、あつちは人攫いか。ヒューマンシヨップ人間屋の数は減つて来たけど、1つでも店が残っていれば、こういう奴らもいなくなるならならぬだろうな。早く殲滅しないといけないのに、最近は調査されているからな……。

フードで隠していても正面から見れば普通の人でないのは明白。どこかで見つけて尾行して、チャンスを探っていたんだろう。酒でも飲んで酔いが回れば狙い目だ。眠りでもすれば後は縛るなり手錠をかけるなりして、ヒューマンシヨップ人間屋に売りに行くだけ。巨人族相手にはこの手が使われるらしい。こつそり酒や食料に睡眠薬を混ぜるそうだ。だからオレは顔写真が出回ってから、自分の家以外でシャボンディでは食事をしなくなった。

「何の話だ？」

「あく、オレはヒューマンシヨップこの人間屋の間で高値で買い取り募集されていてな……ああいう人攫いの奴らに大人気なんだ。道を歩けばファンに囲まれて熱烈な歓迎（襲撃）を受けるので、よくお返しにオレの熱いファンサービス（物理）を叩き込んでいる」

ミンク族の最低取引価格は70万ベリー、全然知られていないとはいえ高い身体能力と種族共有の能力の【エレクトロ】と満月の日の変身能力【月の獅子^{スーロン}】を持つ生まれながらの戦闘種族にも関わらず、人間の50万ベリーとたいして金額が変わらないが、それはあくまで最低価格。かわいい動物やかっこいい動物のミンク族だと値段は上がるし、刷り込みを行いやすい子供のミンク族も値段が上がる。ミンク族の国、モコモ公国は世界政府非加盟のため、だいたいのミンク族は奴隷売買の対象になり、パツと見で非加盟国民かわからない人間と違い安心して売れるというわけだ。

……年々こんなろくでもない知識が増えていくな。

「すまない。オレが来たことで、あいつらやる気満々みたいだ」
相手が武器を構えている。

オレ1人でミンク族100人以上の最低金額、あちらとこちらの人数は大体同じくらいだが、賭けに出るには充分な理由だろう。

「元々おれ達狙いだったようだし構わない。こういう場所だと聞いていたから気を付けてはいたんだがな……話は後でいいか?」

「ああ、先に片付ける」

腰の鞭を取り出し、ヘッドと呼ばれた男に近付き、その首に巻きつけ絞める。

「グオツ!」

「エレクトロ・ウイップ電撃鞭」

バチバチツ!

「ギヤアアアア!」

鞭を通して「エレクトロ電撃」を流す。悲鳴を上げながら意識を失う人攫い。首を絞めても鞭を持つて投げ飛ばされることが海軍本部ではよくあるため、「エレクトロ電撃」で動きを封じて、窒息でさっさと意識を奪う技だ。

オレが1人倒す間に他の戦闘も終わったようだ。武器や体に「エレクトロ」を纏って攻撃したり、ただ殴って倒していたりと特に苦戦した様子もなく軽くあしらっていた。

「ガオ! ペドロの兄貴、こガラらどうする?」

ヒョウ(仮)のミンクの男に話しかけるサングラスの男、黄色いたてがみみたいな髪型、たぶんライオンのミンクだな。さつきから主に話したり指示を仰がれているし、あのペドロと呼ばれた人がリーダーか。

「放っておけ……それにしても「エレクトロ」だど? ゆガラ、ミンク族ではないよな?」

「オレは悪魔の実の能力者、これはその能力を使ってやっている」

手の平を上に向け、バチバチと放電して見せる。

「能力者……もしやゆガラがロゼか?」

真っ白な体毛、シロクマのミンクか? 黒い髪でサングラスをかけ

た男に名前が知られていた。

「その通りだが……オレの手配写真でも見たのか？」

「やはりそうか。いや、少し前にゾウに来た、パンダマンという不思議な男に聞いたんだ」

「パンダマン、無事にゾウまで行けたのか！ ふはは、懐かしいな……元気にしていたか？」

会ったのは3年ちよつと前だな。場所もわからず泳ぎでは無理もないが、かなりかかったな。

「ああ。あガラが象主ズニーシャの足をよじ登って来た時は、少し騒ぎになったが」

「あの時のあガラか……ゼポは特によく話していたな」

「なんか親近感を覚えてな。結局自分の生まれの手掛かりは見つからず、泳いでどっかに行ってしまったよ」

「そうか、わからなかったのか……まあ元気そうでよかった」

大昔にゾウを出たミンク族の末裔とかだろうか？ ミンク族って魚人・人魚族と同じで親に似ず隔世遺伝して親兄弟で姿が全然違うのも珍しくないらしいから、親戚を探すのさえ難しそうだな。

「では改めて。オレはロゼ、ここシヤボンディで賞金稼ぎ《バウンティハンター》をやっている。さつきも言ったがあんた達に頼みがあるんだが、そっちからは何かあるか？」

「ガルチュー。おれはジャガーのミンクのペドロ、ノックス探検隊の船長キャプテンだ。そっちのシロクマのミンクが相棒のゼポで、こっちのライオンのミンクが弟分のペコムズだ。他は……」

ジャガーのミンクだったか……うん、ヒョウのミンクとの違いがわからない。たしか動物の方は、背中や側面の斑紋の中央に黒い斑点があるのがジャガー、ないのがヒョウだったか？ ……服で見えん。

ノックスってたしか夜という意味だったな。ジャガーは夜行性だし、そういう理由だろうか。

サングラスをかけた2人が自分の名前を呼ばれるとサングラスをあげていたが、すごくかわいいつぶらな瞳をしていた……他にもオオ

カミのミンクとか肉食系のミンクが多い。武闘派のミンク族揃ってことかな？

自己紹介の後で次々にガルチューと頼ずりされる。たまにチクチクするがすぐもふもふしている……この挨拶は危険だ、なんというかこう……気付くと時間を忘れてしまう。

「それでは聞きたいことがあるのだが」

「何だ？　ログポース記録指針やエターナルポース永遠指針ならいくつか持っているし、分けられるぞ？」

ミンク族に人種差別の意識が強い人が多いシャボンデいの住人が物を売ってくれるかは微妙な所だし、必要になるだろう。家の居候うちの服とかの買物も、オレがついて行かないと売ってくれないんだよな……オレも一緒に行くかと怯えながら売ってくれる。少しは怖がられていることが役に立つが、帰りにすぐ襲われるのがな。あいつも弓で「エレクトロ」を飛ばして応戦出来るが、この島は居心地が悪すぎる。

「それも気になるが、おれ達はポージェリフ歴史の本文を探していてな。何か知らないか？」

オレ自身はろくに知らないが、知っていそうな人には心当たりがある。ロジャー海賊団にはミンク族も乗っていて、モコモ公国のロードポージェリフ歴史の本文を見せてもらいラフテルに行ったらいいし、この人達が父さんと知り合いだったら会わせても問題ないだろう……年齢が見た目でわからないから不安だが。まあその前に

「……ポージェリフ歴史の本文を探すことは世界政府に禁止されていて、ポージェリフ歴史の本文について研究していたことで、攻撃され地図から消された島さえあるんだが、そのことはちゃんと理解しているのか？」

普段でもマズイのに、今のこの島でそんなことを聞いていたらすぐ手配される。

「なっ、そうなのか？　困った、ロジャーも旦那達もそんなことは一言も……だが彼らは海賊だし、ロジャー達も死んだらしいから、それもおかしくはないか……」

会ったことがあって、悪い印象も持つてなさそうだな。旦那達とい
うのはネコマムシの旦那とイヌアラシ公爵のことだろう。

「あんた達は海賊になりたいのか？」

「いや、さつきも言ったが探検家のつもりだ」

「歴史の本文を探していることがバレれば、海賊と同様に政府に追わ
れることになるが？」

「歴史の本文だけが旅の目的ではないが……なんとか見つからないよ
うに気を付けて……」

歴史の本文ポーンゲリフの探索を諦めるつもりはないようだ。海賊になる気が
ないならいいか。古代兵器の復活はたしかに脅威だが、本来過去の歴
史を調べて咎められる方がおかしい。オレは世界政府に追われてま
で知りたいほども、歴史の本文ポーンゲリフに興味ないけど。世界政府以外に、古
代兵器を狙う奴にも狙われそうさ。

「人より優れた身体能力をフルに使って、見つからないように探すこ
とだな。今回みたいに聞いて回っていたら、すぐに追われることにな
るぞ。今までも聞いていたのか？」

「いや、そもそもまだゾウを出たばかりで、魚人島で聞いたくらいだ
な」

魚人島の住人なら、わざわざ政府に報告するようなこともないか。
魚人島には歴史の本文ポーンゲリフがあると聞いた。あるのを政府に報告してい
ないのがバレたら面倒なことになるだろう。

「まだ探す気があるのなら、オレは知らないが知ってそうな人に心当
りがある。紹介するよ」

「いいのか？」

「たぶん大丈夫だ。これから向かうから、人に尾行されてないか警戒
してくれ」

流星にこの人数を飛んで連れて行くのは無理だ。

「ありがとう、任せてくれ。それでロゼ、ゆガラの頼みというのは？」

「半年くらい前から、象主ズニージャから落ちて遭難していたミンク族を1人面
倒見ているな。この島はあいつには居心地が悪いだろうから、良けれ
ば一緒に連れて行くか、新世界に戻る時にゾウまで連れて行ってやつ

てくれないか？」

象主が1日2度の水浴びのために降らせる洪水のような雨、噴火雨に巻き込まれて海に落ち、新世界のどこかの島に流れ着いたが、空腹で倒れた所を捕まり売られ、どこかの国の貴族に奴隷として買われたが、シャボンデイに新しい奴隷を買いに来た時に連れられて来た。人通りの少ない無法地帯に入った所をオレが護衛も含めて気絶させて、見聞色で過去を見て、鍵を手に入れ首輪を外した。

この島ではまともに機能していないとはいえず、人身売買は世界政府によって一応禁止されている。天竜人でもない限り、奴隷がいなくなりましたと海軍に駆け込むなんて出来ないだろう。

新世界はほとんどが四皇の誰かの領海、そういうビジネスのようなことをしているのは、おそらくビッグ・マム海賊団の領海のことかの島に流れ着いたのだろう。百獣海賊団と元ロジャー海賊団の「赤髪」率いる赤髪海賊団は比較的新顔だからよくわからないが、白ひげ海賊団の領海では奴隷やドラッグの売買は禁止で、発覚すると自分の旗をないがしろにしたとして、隊長や傘下の海賊を送って潰すらしい。

なんで「白ひげ」は海賊になっちゃったんだろうな。あの国より余程好感が……はあ、人間のオレが言えることではないか。

あいつにも見つからないようにしていたのだが、オレの匂いを辿って家まで来た時は驚いた。以降、家に居候うちしている。

最初はおどおどしていたが、しばらくするとオレ達に心を許してくれた。普段はメイドのようなこともしていて、たまにあの大きな尻尾をモップ代わりにして掃除してる。別に興味があるという医学の勉強だけしているいいんだが、恩を返したいそうさ。オレの採血も練習を兼ねてやって貰ってるし、料理の腕は速攻で抜かれた……。

私服の他に、母さんがどこかから持って来たナース服もたまに着ている。

母さん、かわいいもの好きだからな……すべての服に尻尾を出すためのファスナーも付けてくれた。メイプルとも最初は初対面の印象もありメイプルの方が怯えていたが、今では仲も良く、母さんもかわ

いがっている。

「そういうことか……仲間が世話になった（覚えのある匂いはそガラのものか）」

「ガオ！ ゆガラ良い奴だなア、ガルチューー！」

ペコムズに泣きながら抱き着かれ頬ずりされる。涙もろいのかな？

しばらく抱き着かれ落ち着いた後、父さんがいるオレ達の家に向かった。昔の話が出来る相手に会えるのは喜ぶだろう。

☆☆☆☆☆

「ご主人様、お帰りなさい！」

家に帰ると抱き着かれ、肩の辺りに噛み付かれる。攻撃されているわけじゃなく、リスのミンクだからか、こいつには噛み癖がある。オレの能力で金属に変化させた体や服によく噛み付いてくるので、近付かれると能力を使うようにしている。硬くて噛み応えが気に入ったらしい。一度ゴーグルの上から首に噛み付かれた時怒って以来、ゴーグルをかけている首は避けるようになった。もふもふした茶色い尻尾を左右に振って上機嫌だ。

「……トリスタン、ご主人様はやめてくれ。ロゼでいい。虫睡が走る」

メイド服まで着て何やってんだ……母さんが着せたんだらうな。

「そ、そんなあ、旦那様や奥様には喜んで頂けたのに……どこか至らない所がありましたか？」

尻尾がしゅんと垂れて落ち込んでいる。長い水色の髪の上から生えた耳も、心なしか少し元気がない。

至らない所も何も、噛み付いて来るのがおかしいと言えば相当おかしいが、それは慣れたので別にいい。父さんと母さんにはトリスタンも噛み付かないし。というか父さん達は旦那様と奥様か……。

「すまん、言い方が悪かった。ご主人様と呼ばれると貴族みたいだから、嫌だと言っているんだ。もっと楽に話せばいい」

身なりが良いどこかの国の貴族が奴隷を買いに頻繁に出入りしている。あれと同じような扱いはしたくない。

「この話し方が一番楽なんです」

「……ではせめて呼び捨てにしてくださいませんか？　今までもそうだったでしょう、お嬢様？」

「ああっ、すごく心の距離を感じます！　いつも通りにして下さい、ロゼー！」

「わかった」

「キュルキュル〜♪」

落ち込んでいるトリスタンの頭を撫でると喉を鳴らし、垂れた尻尾が元に戻る……見た目だけじゃなく、仕草まで小動物チックで困るな。

「トリスタン、ゆガラだったのか」

「キュル？　………ぺ、ペドロさん!？」

となりのペドロに気付き、少しフリーズして、オレから離れるトリスタン。去年、子供の手当てしていたことを暴露した時のスモーカーさんみたいだ。要するに照れているのだろう。

「何故ゆティアがここに!？」（というか、よく見れば他の方も大勢います）」

「10年程前からずっと外の世界を見てみたくてな、少し前にゾウを出た。ここに上陸してロゼと会い、保護したミンク族をゾウに連れて行って欲しいと頼まれたのだ」

「ク、クビってことですか……?？」

何故そんなショックを受けたような顔をする。せつかく故郷に帰れるのに、うれしくないのか？

「そもそもクビも何も雇っていない」

「えっ?　……じゃあ、あの毎月のお金は何ですか?？」

「ただのおこづかいだけだ」

フードや帽子を被って耳、マスクとサングラスで顔、コートで尻尾を隠せば、ギリギリ1人でも買物が出るかもしれないし。完全に不審者だが、この島に怪しい奴なんてゴーグルをかけたオレを含めて

そこら中にいる。

いくら人間とはいえ海賊共には物を売るのに、魚人族やミンク族には売ってくれない店が多いなんておかしい話だ。

「わ、私って居候の上におこづかいまで貰ってたんですか……（そしてあの額でおこづかいなんですか……）」

「気にするな、この家で一番お金を稼いでいるのはオレだから」

トリスタンを預かることになった原因はオレだし。

やはり懸賞金を貰いに行ける前料なしというのは大きい。2人はあまり目立てないし、トリスタンは人前に出れない。対してオレは向こうから1億ベリー目当てに寄って来るのを倒すだけ。寄って来なくても探して倒す。コーティングには最低3日はかかるので無法地帯を探せばどこかにいる。

コーティング代は前払いが基本だから、海賊が捕まった所でコーティング職人は困らない。船の持ち主の海賊をタコ殴りにした写真を見せ、売った船代半分あげると言えば船を渡してくれる。やはりこの島での交渉はお金ありきだな。積荷はオレの総取りだけど。

大した積荷を持っていないし船もボロボロだが、新世界で四皇に敗れて逃げ延びて来た落ち武者共も狙い目。懸賞金は高めだし、放つておいても害悪でしかない。新世界で略奪出来ないから、自分達がそれなりに恐れられていいように出来ていた、この前半の海に戻って来たような奴ばかりだから。四皇の力を思い知った奴らは「白ひげ」の縄張りである魚人島では暴れず、ここの無法地帯で海軍にバレないように、船を買い直そうと暴れることがある。そういう奴らにオレの1億ベリーはとても上手い話に見えるらしい。

「雇われてなくても、まだ何も返せてないのに帰れません！」

「せっかく首輪が外れて自由になったのに、恩返し義務感で自分を縛るつもりか？ そんなことがして欲しくて助けたんじゃない。自分の好きに生きろ」

「何も今すぐ帰るわけじゃない。ゾウのビブルカードを渡しておく

し、これから話して決めればどうだ?」

「……そうだな。トリスタンに出て行って欲しいわけじゃない。だがここはお前には住みにくいだろう?」

「そんなことないです! 私、この家大好きです!」

いや、この家のことじゃなくてシャボンデイのことなんだが……まあ今はいいか。うれしいし。

ペドロがビブルカードを出し、千切ってトリスタンに渡す。

「ゆガラにも渡しておく」

「いや、オレは別に」

「おれ達ミンク族には、友好の証として互いの衣服を交換する風習がある。残念ながらゆガラとはサイズが合わないので、これを受け取ってくれ。トリスタンが世話になった」

「……ふははっ、わかった。そういうことなら受け取ろう。ありがとう」

手渡されたビブルカードを受け取り、コートの内ポケットに入れる。代わりにオレのビブルカードを取り出し破る。

「そして、これがオレのビブルカードだ。オレもいずれ海に出るが、それまではここにいます。道標にでも使ってくれ」

「ああ、感謝する。ガルチュー」

ホント、なんでミンク族は人間嫌いってことになってるんだろう。オレは海軍関係以外で関わった人間に優しくされたことなんてほとんどないけど、ミンク族や魚人族とは余程仲良く出来ているんだがな。

「何やら騒がしいな」

「どうかしたの?」

家の2階から父さん、店の方から母さんが来た。

「なっ……まさかレイリーか!?!」

「ん? キミは……ペドロか? 大きくなったな! 昔会った時は口ゼより小さかったのに」

「(ミンク族……この子全然人間連れて来ないわね。ノジコちゃんだったかしら? あの子だけ。まあ、この子の人間の友達って全員海

軍関係者だものね。ガープとか連れて来られたら、この家なくなっちゃうわ)」

「死んだと聞いていたが……」

「わはははは、この通りピンピンしているよ。イヌアラシとネコマムシは元気か？ 何でもケンカしていると聞いたが」

「ああ。元気ではあるのだが、5年ほど前に瀕死の重傷でゾウに戻って来てから、顔を合わせれば殺し合う寸前になるまで仲違いして、お互い昼と夜で住み分けるようになってしまった。理由を聞いても教えてもらえず……」

トリスタンからも聞いたけど、顔を合わせないために昼と夜で住み分けるって極端な……。

「そうか……あの仲の良かった2人がなあ。まあ生きていれば、いずれまた元の仲に戻るだろう」

「ねえ、いつまでも玄関で話してないで中に入ったら？ ……ロゼ、あんたどうして噛み付かれているの？（じゃれつかれてるだけなんだろうけど、肉食獣の食事中にしか見えない）」

「いや、オレにもわからない」

父さんとペドロが話してる間に、何故かノックス探検隊の人達に体中を噛み付かれていた。能力を使っていないと服が穴だらけになるな、これは。

「いや、トリスタンが噛み付いているのを見てたら気になって」

「ガオ！ ロゼ、ゆガラはなかなか良い噛み応えをしているな！」

「そうか。ありがとう」

前後左右から噛み付かれながら、口々に感想を言われる。

でもそんなことを褒められても、あまりうれしくはないなあ……。

「ああーっ！ そこは私の場所ですよ！」

「お前でもない」

母さんに写真を撮られながら、全員家の中に入る。

それぞれ椅子やソファア、こたつについてトリスタンが飲み物を持って来る。

「それで、何故ゆガラがここに？ というかロゼが言っていた歴史の本文ポーンゲリフについて知っている人物というのは」

「父さんのことだな」

「ゆガラ、レイリーの息子だったのか……（『海賊王の右腕』の子がバウンティハンター賞金稼ぎか。世の中わからんものだな）」

驚かれる。まあ元ロジャー海賊団で生存が明らかなのは『赤髪』くらいだからな。

それに、オレの見た目はどちらかというと母さん似だから、父さんを連想するのは難しいだろう。

「バレたら困るから秘密にしてくれ」

唇の前で人差し指を立てながらお願いする。

「あ、ああ（そんな子供のイタズラを秘密にするみたいだな、軽いかんじでいいのか……？）」

「まあ積もる話もあるし、ゆっくりしていけばいい」

「昔の話でも歴史の本文ポーンゲリフの話でも好きなだけしてくれ。オレは出て行くから」

店の方に行っておこう。

「ゆガラは聞かないのか？」

「好奇心はリスを殺すんだよ」

「私は死にません！」

「そうだな。ゾウの外を見るのに夢中になっていたら、噴火雨に気付かず流されて漂流しただけで、死んではいないからな」

「ぐう！」

痛い所を突かれ、ぐうと音を上げるトリスタン。

「ゆガラ、そんな理由で行方不明になっていたのか……」

「そ、そんなに呆れた目で見ないで下さい、皆さん……！」

漂流した経緯を聞いて、呆れるノックス探検隊の面々。無理もない、初めて聞いた時はオレも呆れた。

呆れられているトリスタンを背に、飲み物を持って店の方に行きソファアーに座る。

「なんだかロゼは奥様方より私から少し距離を取っている気がします」

「……やっぱりゴoogle噛んじやったからですか？」

「いや、何故ついて来ている？ ゆっくり話していればいいじゃないか、半年以上ぶりだろう？」

「あんな周りの皆さんに呆れられた空間にいられませんよ……」

「あー……すまん」

隣に座ったトリスタンに謝る。居た堪れなくなって避難して来たようだ。

「いえ……それで、やっぱり大事にしてるゴoogleを噛んじやったから怒っているんですか？ もう噛まないの許して下さい……」

「いや、そんな申し訳なきそうに謝られても、もう怒ってないぞ？ 噛まれたのゴムの部分だし、たとえ切れたとしても替えればいいだけだから」

大事に使っていても切れる時は切れるだろうし、顔を隠すためにサイズ大きめだけど、オレの頭が大きくなれば、どの道いつかは長いに替える必要が出てくるだろう。

「むう……それは良かったですが、じゃあなんで距離を取っているんですか？」

「それは私も気になるわね」

今度は母さんが店に来た。まあ店主の母さんが店のカウンターに来るのは普通のことなんだけど……

「もういいのか？ ずっとガルチューしてたけど」

「ええ、もう堪能したわ」

母さんはオレ達が話している間、ひたすら黙って写真を撮ったり、皆の頭を撫でたり抱き着いたりしていた、幸せそうな顔で。

「それで、どうしてトリスタンちゃんを避けているの？ あんたが自分に好意的な人から距離を取るなんて、初めて見たけど」

「やっぱり私、嫌われてるんでしょうか……？」

「違う、嫌っていない。そんな泣きそうな顔をするな。はあ……わかった、教える」

ため息を吐き、トリスタンに向き直る。

「なんだ、お前のその見た目は！ ファンシーでかわいすぎるんだよ

！ 気を抜くと膝の上に乗せて、頭撫でたり尻尾撫でたりしそうになるわっ！」

その尻尾なんてもふもふしすぎだろう。ずるいぞ、その見た目は！
「(やっぱこの子、私の息子だわ……親子ね)」

「なんですかその素敵な待遇は！ 意地悪しないでして下さい！」

「意地悪しているんじゃない！ 気を抜くとお前をペット扱いしそうになるんだよ！ 人をそんな風に扱うなんて……！」

「(うっ、胸に突き刺さるわね。私は……そう、娘が出来たみたいなのだから)」

同時刻、海軍本部

「うっ!？」

「どうかしたのか？ お前が座学中にうめき声を上げるなんて」

「風邪か何かか？」

「いえ、なんでもないわ(ストレスかしら？ また今度弟に会ったら、愛でて発散しましょうか。ヒナ愛玩)」

場所が戻って、シャツキー、S^ズぼったくりBAR^{バー}

「そんなの気にしなくても大丈夫ですから、もつと撫でて下さい！ 私達にはペット扱いじゃなくて、ただの挨拶ですから！」

「人の心には誰でも光があれば闇もある。鉄の意志と鋼の強さを身に付けなければ、簡単に外道に堕ちる、お前を買った貴族のような。そんな奴らをオレは何人も見たり聞いたりしてきた。オレはああはなりたくない！」

「そういうこと考えてる人は堕ちたりしませんから大丈夫ですよ！」

「一理あるわね。というか、それで避けてこの子を傷つけたら、意味ないんじゃない？(だから私は悪くない。だってこの子かわいいんだもの)」

「そ、それは……」

たしかに。だが、1度でもこのもふもふの尻尾の誘惑に屈してしまえば、オレはもう元には戻れないのでは……？　　すごく甘やかしてしまいそう。

「そうです！　私は傷ついたので、さっき言っただやっして下さいー！」
何が傷ついたので、だ。　　すごく尻尾振ってるじゃないか。取れても知らないぞ？　　リスの尻尾はトカゲと違って、取れても生えてこないだろう？　　リスのミンクも同じなのは知らんが……このもふもふが、取れる？

「わかった、頭を膝に乗せてくれ」
「はいー！」

膝に乗ったトリスタンの頭を撫でる。　　頭は人間と変わらない、耳が生えていることを除けば。

「キュルキュル〜♪　……？　……あの、尻尾は撫でてくれないんですか？」

「却下だ。取れたらどうする」

「いや、そんな簡単に取れないんですけど……」

「万が一があれば取り返しがつかない」

「話が違います……」

口では不満そうだが、そう機嫌が悪いようではないみたいなので無視。

「ガオ？　何してるんだ？」

今度はペコムズが入ってきた。

「トリスタンのご機嫌取り。そっちは良いのか？　随分ひさしぶりなんじゃないか？」

「いや、おれはロジャー海賊団とは話したことがないんだ。ガオ！」

ペドロをアニキと呼んでいるし、まだ子供だったのか？　　まあいいか。

「そうか……ところでトリスタン。オレから離れなくていいのか？」
気持ちよさそうに目まで閉じてるが、さっきは離れただろう。

「もうかける恥はかいたのでいいです。どうせ私は甘ったれだし、居候のくせにおこづかいまで貰うし、外の世界を見てたら流されちゃう

ダメっ子ですよーだ」

なんか不貞腐れている……尻尾振って喜びながら。わけわからん。

「まあ気にするな。メイプルにもこれ、たまにやってるから」

「あの人つてたしか、私やロゼよりも年上ですよね……?」

「いくつになっても、人には甘えたい時があるんだよ」

色々と上手くないかない時とか。

「(あんたはもう少し甘えていいと思うんだけど)」

「気になってたんだが、なんでロゼは親が海賊なのに賞金稼バウンティハンターぎをやっているんだ? 仲悪いのか?」

ペコムズがトリスタンとは逆の隣に座って、的外れなことを聞いてくる。

「いや、父さんとの仲は良いぞ。単純にその辺で暴れている海賊が嫌いなだけだ」

「そうか。そういうえばロジャー達は気の良い奴らだったと、ペドロの兄貴達は言っていたな」

「ああ。『海賊王』は仲間思いで、仲間への侮辱や危害を嫌う奴で、中間の危機には敵を仲間の元に行かさないように立ち塞がり、自らを盾として戦うような船長だったと、何度も何度も何度も聞いている。父さんから」

「キュル!? ロ、ロゼ、痛いです」

「あつ、すまない」

手に力が入っていたようだ。力を抜いて撫で直す。

「(この子、もしかしてロジャーに嫉妬してるのかしら? あの人が酔う度に楽しそうに話すから。隠すの上手くなったわね……表情が動いてない。でもトリスタンちゃんを撫でてちよつと気が抜けてたみたいね)」

「まあ気の良い海賊もいるだろうが、そんなものはごくわずかだ。オレは会ったことがないし」

「いや、ゆガラの父親はどうなんだ?」

「もう引退しているからノーカウントだ」

というか父さん達が引退していなかったら、オレの性格は大分変

わっていただろう。

「そうか。もう一つ気になつていゝんだが、トリスタン。ゆガラ、【月の獅子】はどうしてゐるんだ？ ガオ！」

「私ですか？ まだ短時間しか制御は出来ませんが、毎月練習はしますよ。私が暴走しても、この家には止められる人しかいませんし」

「あれか。あれは、なかなか美しい毛並だ……」

髪の色と全身が白色に変わり、身長と一緒に髪と尻尾も長く伸びてきれいだった。

「触ると電気がバチバチするのが残念ね。せつかくの毛並を撫でられない」

「オレが電気を吸収して充電してゐる間に撫でる？」

「じゃあ今月はそうしましょうか」

「ガオ……【月の獅子】はおれ達の奥の手で、戦闘力がかなり高くなるはずなんだがな……」

「元がそんなに強くないトリスタンだし、目を月光から隠せば元に戻るからな」

【月の獅子】状態でも音速よりは遅いから、そんなに手間取らない。

「私の【月の獅子】はペコムズさんほどじゃありませんからね。やっぱりまだ制御出来ませんか？」

「ああ。あの状態のおれを止められるのはペドロの兄貴の声だけだ……」

「それだけ強い力を秘めているってことじゃないか？ 自分の力だ、ちゃんと使えるようになるさ」

オレにも見聞色をちゃんと使いこなせなかった頃があったなあ。

「そうだなあ、いつまでもペドロの兄貴に頼ってばかりなのは……というかトリスタン。ゆガラはもつとおれを怖がってなかつたか？（なんかすごいリラックスしているガオ）」

「ペコムズさん……世界は広がったのです。別に平気になったわけはありませんが、これくらいのことではビクビクしてゐられないのですよ……ちよつと買い物に行くだけで襲われるんです」

「だからゾウに帰ることを勧めたんじゃないか。その内オレを売るための人質にされるぞ？　一緒にセツト販売されるぞ？」

体調が万全なら人攫い程度相手にならないが、性格が怖がりだからな。きついだろう。

まあもし捕まって売られたところで、海楼石の手錠さえつけられなければ、オレは首で頭と胴体を分離出来るから、首輪を外してから鍵を奪って他の首輪も外して一緒に帰って来られるけど。

捕まらないに越したことはないし、急ぐか。あと少しだ。

「強くなります！　私だつて外の世界に興味があるんですよ。ロゼの集めた食べ物、私も食べたいです」

「ほう……わかつているじゃないか」

「……この子、結構乗せやすくてたまに不安になるのよね。大丈夫なのかしら？」

元々ミンク族は毛のある動物は食べないからか、トリスタンとは結構食の好みが合う。毛のない動物の肉は食べても大丈夫のはずだが、こいつはそれもあまり食べない。リスのミンクだからか？　毒が入らなくなったメイプルのおかしも、ほっぺたいっぱいに頬張って幸せそうに食べていた。

その後、父さんとペドロ達の話は終わって、いくつか永久指針エターナルポースを渡して出航を見送った。歴史ポーンエグリップの本文の搜索、バレないといいんだがな。

「ロゼ……まだ起きてますか？」

夜になってパジャマに着替え、寝る前の読書をしていると、部屋にトリスタンが来た。

「起きてるぞ。どうかしたのか？」

「その、今日は寒いので一緒に寝て欲しいのですが……」

「いつもは母さんと……いや、わかった。入っていいぞ」

「ありがとうございますー！」

「こういふ日もあるだろう。」

トリスタンが部屋に入って来て、そのままベッドに入ってくる。う

わあ、すつごくもふもふするな、ぬいぐるみみたい……こいつは人こいつは人こいつは人……。

「一緒に寝るのはいいが、寝ぼけて噛み付かないでくれよ？」

「はいー！」

ガブツ

頷いてすぐ噛み付いて来た。

「……おい。さっきの良い返事はなんだったんだ？　ちゃんと話を聞いていたのか？」

「寝ぼけて噛む前に、起きてる内に噛んでおこうかと」

「なんだそれ……とんちか。まあいい」

面倒になって、パジャマだけ能力で変化させたまま寝ることにした。

夜が明けて次の日、結局オレを噛んだまま寝ていたトリスタンを剥がし、よだれで肩のあたりがベツタベタになったパジャマから着替えて部屋を出る。

どこか機嫌が良い母さんに昨日撮っていた写真を見せてもらったが、そこには為す術もなく貪り食われる憐れな犠牲者にしか見えないオレが写っていた。肉食獣の群れに生肉を放り込んだみたいだ……。

“ 奴隷解放の英雄 ”

「ロゼ、ちょっといいか？」

「タイガーさん、珍しい……というかあの時以来初めてだな」

夜、用事を済ませて家に帰ると、家の前の海からタイガーさんが出てきた。1年程前に匿ってから、今日まで来たことはなかった。まあ天竜人が出入りするこの島に、好んで来ようとしなのは当然のことだろう。これからは大分マシになるはずだが。

「久しぶりだな。とりあえず中に入ったらどうだ？」

「いや、ここでいい。すぐに済む」

雰囲気ギリギリしているが、何かあったのか？ 任務前の海兵み
たいだ。

「おれは今日、これからマリージョアに乗り込む」

何？

「聞き間違いか？ 冗談では済まないことが聞こえた気がするんだが……」

「聞き間違いじゃねエき。おれはこれから、マリージョアの天竜人の居住地に行き、あそこに捕らえられた奴らを解放する。奴隷なんてのは生き地獄だ！」

「解放すると言っても、あそこの人達のアシはどうするつもりだ？
海軍の軍艦でも奪うつもりか？」

「魚人島でコーティングした船を大量に赤い港レッドポートの近くに浮かべる。新世界側はアラディンがやってくれる手筈だ」

アラディンさんも関わってたのか……あの人は足が尾ひれだから
ついて行けなかったんだろうな。

「……何故、わざわざそれをオレに事前に教えるんだ？ リスクしか
ないだろう」

天竜人にケンカを売る、捕まれば間違いなく死罪だ。そんなことを
して見逃されるはずがない。それどころか処刑される前に、天竜人の
思いつく限りの拷問を受けるだろう。

「おれはお前に助けられた」

「オレは大したことをしていない。あんたの首輪を外したのは父さんだし、アラディンさんに輸血したのは母さんだ」

オレがしたことなんて、家まで連れて来て包帯を巻いたくらいだろう。

「だが、おれ達に声をかけたのは、手を差し伸べてくれた人間はお前だ」

「それがどうしてオレに教えることになる?」

「無事にあいつらを解放出来たとしても、おれは政府や海軍に追われることになるだろう。一言もなしじゃ仁義を欠く」

「……賞金稼ぎハウンティハンターのオレに助けられたと言いながら、賞金首になるようなことをするのは、仁義を欠かないとでも?」

ギンツ!!

拳を能力で変化させながら、霸王色を放つ。

「わかっている。だからあそこの連中を解放出来た後、もしお前が望むなら、おれの首をお前にくれてやっても構わない」

オレの全力の霸王色の威圧に顔色一つ変えず、タイガーさんはそう言った。

「なんだと? ……何故そこまでして解放しようとする? 自由の身になったんだ。他人のことなんて放っておいて、好きに生きればいいだろう。せつかく助かった命、惜しくはないのか?」

「……すべてを忘れて、見なかったことにして生きようとしたこともあった。だがあそこで行われていることを知りながら、見て見ぬふりは出来ねエ……あいつらを放つてはおけねエ!! そのためならばこの命、惜しくはない!!」

そこまでの覚悟か……これは止まりそうにないな。

「はあ……あんたの首なんて、友達の首なんてオレはいらん」

霸王色の威圧をやめて、能力も解き、そう言う。

「(さっきまでの迫力が消えた……) 友達……? おれがか?」

「オレはそう思っている。天竜人に狙われるかもしれないのに、どうでもいい奴をこの家に匿ったつもりはない」

もしタイガーさん達じゃなく他の人間、リスクを背負ってまで匿い

たいと思わない奴だったなら、気絶させてから家まで運んで、父さんに首輪だけ外してもらい、目を覚まさない内に、周りに人がいない場所にも放つて来ただろう。自分や自分の周りを危険に晒してまで助けないし、この家の情報も与えない。

「お前と会ったのはあの時が初めてだぞ。ウィリー達から何か聞いていたのか？」

「たしかに彼らから話は聞いていたし、友達の大事な人達だったのも助けた理由だ。だがあんた達を気に入った理由は違う。あの時、タイガーさんは一人で魚人島に帰ることも出来たかもしれないのにそうしなかったし、アラディンさんは自分が瀕死の重傷を負いながらもあなたのことを考えていた。だから気に入った」

「そんなの当たり前のことだ」

「そうか……だったら、オレがあんたを手伝っても構わないよな？」

オレが一緒なら、首なんて懸けなくても、この人が仁義を欠くことにはならないだろう。オレも同罪になるのだから。

「なんだと？ おれはお前に協力してもらおうために会いに来たんじゃねエ！ 一緒に追われることになるぞ!」

タイガーさんが慌てている。さつき、オレの霸王色に顔色一つ変えなかつた男とは思えないな。

「友達を見捨てないのは、当たり前のことなんだろう？ それに、北の海ノースブルーにはこんな言葉があるという……『バレなきや犯罪じやないんですよ』」

ニヨン婆が言つてた。北の海ノースブルーはデンジャラスだ。

「ふははっ。それに、バレたら海軍の友達に怒られるからな」

「(怒られるだけじゃ済まねエよ……) いや、バレなくても犯罪は犯罪だろう……第一、どうやってバレないつもりだ？」

ちよつと呆れられているな。当然怒られるだけで済むわけがない。だがオレの仕業とバレなければいい。やろうとしてることも奴隷を所有する天竜人犯罪者から人を解放するだけだし、許容範囲。オレのルールは破っていない。解放した人達の逃走手段も用意してあるみたいだし、時期もいい。

「こうする。【機械変化 // 光学迷彩アーマー】」

スー……

いつものように体を変化させる。自分の体、服、装備品に背景を投影し、自分の姿を周囲に溶け込ませ隠す。

「消えた……!?!」

「……」

オレの満足のいく反応をしてくれたタイガーさんの後ろに回り、手で服を引っ張りながら声をかけた。振り向いたタイガーさんに恐る恐る手で触れられる。

メイプルに見せた時は、私だって出来るでゲソ! と謎の対抗心を露にし、姿を見えなくしてから服を脱ごうとして、はっちゃんに3つの右手の拳骨を3連発で落とされて、スミを吐いていた。あいつのは服までは隠せないからな。吐いたスミを指につけて、『ハチさん』とダイイングメッセージのようなものを床に書いていたが、そんなことをせずとも見ていたから知っているぞ。

トリスタンの首輪を外した時も、こうやって姿を消していたのにな……。

「声はするし、触れられるのに姿が見えねエ……メイプルの変色みたいなものか?」

「そんなかんじだ。オレが人間屋に売られた人達を逃がす時は、いつもこれを使っている」

そろそろいいか。

能力を解除して、また姿を現す。

「……ちよつと待て。お前、そんなことまでしていたのか!? 姿を消すことといい、一言も聞いてないぞ?」

「こんなこと、声を大にして言えるわけがないだろう? それに姿を消せることは本当に奥の手だ。戦闘では一度も使ったことがないし、海兵の友達にも教えていない。だから秘密にしてくれよ?」

ウイリーさん達はちゃんと秘密にしてくれていたようだ。ありがたい。

姿を消せることを知られるだけで、かなりのデイスアドバンテージ

だ。特に海軍には知られるわけにはいかない。これは海軍では助けられないものをこつそり助けるために主に使う。当然、もしもの時の逃走手段としても役に立つ。

「……そんなことをして、大丈夫なのか？」

「何を言っているんだ、奴隷売買は世界政府によって禁止されている。

この島では黙認されているが、奴隷にして売ろうとしていた奴らが逃げたから探してくれ、と人間屋ヒューマンショップの連中が海軍に言えると思うか？」

表向きは、お優しい薄汚い貴族様方や金持ちに、職を失った攫つて来た人達を、

ご奉仕する 使用人酷使される奴隷として提供する職業安定所になっているが、

奴隷求職者一步手前の人達がいなくなったと海軍に言った所で、景気が良くいいことじゃないか、と言われるくらいで取り合ってもらえるわけがない。

「人攫いに金を払っても、買った人が居なくなる上に外した首輪で店を爆破もされる。これを何度も繰り返してやれば、経営破綻して人間屋ヒューマンショップは潰れていく。オレも自分を高価買取している上に個人情報バラ撒いている店が潰れてうれしいし、これから奴隷にされる人も減り、奴隷にされる所だった海賊は後で捕らえて海軍に引き渡す。結果、オレの嫌いな奴らだけがダメージを受ける……ふふふつ、はははははははつ！ これがオレの『奴隷0計画 in シャボンディ諸島』だ……！」

海賊には首輪より手錠がお似合いだ。

首輪の鍵なんて人間屋ヒューマンショップの壁にでも触れて、過去視の見聞色を使えば簡単に見つけられるし、姿と気配を消しているのでオレの仕業だなんて普通はわからない。

悪魔の実の能力を可能性に入れても、透明になるスケスケの実、体の一部を好きな場所に咲かせるハナハナの実、鏡の中の世界を移動するミラミラの実、他にも色々あつて特定なんて出来ない。もつともハナハナの実の能力者は、今西ウエストブルの海にいるらしいので除外されるが。

「(なんだその計画名……)だが、ここヒューマンショップの人間屋が何年か前から潰れていってるのは魚人島で聞いたが、それは女の仕業だつて聞いたぞ？」

「そう思わせているからな。匂いは香水で変えて、声は……こんな感じで能力を使って変えている。まあ香水を使い始めたのは半年ほど前からだけど」

「声まで変えられるのか……（もう驚き疲れたな）」

喉をボイスチェンジャーに変化させ、声を変えている。

トリスタンに匂いでオレとバレたから、最近は念には念を入れるために「蠱惑魔」が持っていたナノハナの香水を使用して匂いを上書きして、帰る前に香水の付いた上着を焼いて灰にしてから帰っている。姿は見えないが、声が女なら女の仕業に思われる。声はわざと聞こえるように喋って、人に逃げるよう指示を出していたので、すぐに人間屋襲撃が女の仕業と広まってくれた。

去年姉さんにその話をされた時はバレたのかと思つてドキツとしたが、オレとシャボンディで暴れている女は同一人物なので、ぴよぴよついて行くなんて出来るわけがない。

「さつきも、シャボンディ最後の人間屋を潰して来たところだ」

まあなくなつたと言つても、別の島からまた来たり、人攫いが直接天竜人や貴族に売ろうとするかもしれないので、完全になくなつたとは言いがたかもしれない。今までも潰している間に、新しい店が出来ていたし。

そろそろ声は戻しておくか。

「おい、そんなことをしていたんなら、なんでさつきおれを止めようとした？」

「人間屋を潰すのと天竜人に手を出すのじゃ危険のランクが違う。そもそもオレはバレないようにやっている。自分に被害が出ない、オレの手に負える範囲でしかやっていない。船だけ浮かべてくれたら、後はオレがやるけど？」

オレは自分が追われる羽目になってまで人助けをするつもりなんてない。そこまで自分を犠牲に出来るか。見ず知らずの他人を助けるために、友達が多い海軍と敵対するようなことなど出来ん。

だが今のオレは姿を消せる。顔も名前もわからない奴の手配書を発行するなんて、出来るわけがない。それで捕まえるのは不可能な

上、良いようにやられた挙句、顔も名前もわかりませんでしたと世界に自ら知らせることになる。そんなことをするくらいなら、世界政府はその事実を隠蔽するだろう。いつものように。

「……魚人島に政府の人間が来て色々聞いて回っているらしい。おれ達のがバレるのは時間の問題だ」

「だから今の内に、天竜人に捕らえられた人達を奪還しようとしているのか？」

「いや、これは魚人島に帰ったその日から考えていたことだ。今日まであいつらを逃がすための大量の船を用意するのに時間がかかっていた。アロンやウイリーが倒した海賊の船を貰ったりしてな」

結果的にではあるが、時間がかかって良かった。偶然だがタイミングは良い。

天竜人が指示をしたのか、今このシャボンディではサイファール・イービス^{ヒューマンショップ}ゼロ、通称C P ー0が人間屋襲撃について調べているらしい。母さんに聞いた。オレも仮面を付けて白い服を着たそれっぽいを見かけたことがある。たぶん仮面を付けず、人の中に紛れて調査している者もいるだろう。

つまり、今はマリージョアの警備は手薄になっている筈だ。魚人島にも行っているなら尚良し。魚人島は深海1万メートル、すぐには帰って来れない。

「その2人も関わっているのか？」

「いや、あいつらは知らねエ。今日の事も……おれ達のことも」

天竜人の奴隷だったことを言っていないってことか。まあそう簡単に言えることでもないよな。

「海賊旗はちゃんと外した？」

「ああ、帆も全部別のかえた。せつかく解放した奴らが海軍に捕まっちゃうからな」

海賊旗からウイリーさんが海軍に連れてった海賊の船だとバレて、あの人を追われるようなことにならないために言ったんだけど、その可能性もあったか……証拠隠滅が板についてきてしまった……いやでもそうでなければ、オレは今頃C P ー0にバレていただろうし、仕

方ないか。

「人手は多い方が良さだろうか？ 自慢になるが、オレは役に立つ共犯者だと思うぞ。もつとも、断つても姿を消してついて行くだけだが」
気になることもあるしな。

オレは素の右手をタイガーさんに差し出した。

「……ははっ、勝手な野郎だ。最初からおれの言うことなんて、聞く気ないんじゃないか」

「オレはあんた達を助けたんだろう？ だったらオレには責任がある。奴隷を所有する天竜人共を攻撃したり、自分の身を守るために反撃する分には文句は言わない。天竜人に復讐したいならすればいい、あいつらの自業自得だ。だが関係ない民間人を傷付けたりしたら、オレが海軍よりも先に、あんた達を殴りに行く。これは、今日解放しに行く人達にも言える」

「しねエよ、そんなことは。約束する。それに、おれは復讐の為に行くんじゃない。殺せばあいつらと同じになる。人にあらぬ扱いを受け、虐げられる者達を解放し、自由にするために行くんだ!! そしてこれは人をそんな風に扱う奴らへの、おれからの宣戦布告だ!!」

中々の覇気だ。

オレの手をタイガーさんが握る。

「宣戦布告ってことは、自分の正体をマスクとかで隠す気はないんだな」

「ああ、元からそのつもりだった。おれは世間に顔向け出来ねエことをしようとしているつもりはねエ（それにおれが目立てば、それだけアラディンやこいつが目立たなくなる）」

「かはっ!!」

「お、おい、どうした!?!（急に吐血しやがった……）」

「いや、なんでもない……」

友達と言いながら、海兵に隠し事だらけのオレの心には刺さる言葉だ……。

ハンカチを出して、口元の血を拭く。

「そういえば、オレは飛べるがタイガーさんはどうやってマリージョ

アに行くつもりだったんだ？」

「赤い土の大陸を素手でよじ登るつもりだ」

あんたもか。聖地マリージョアはロッククライマーの聖地じゃないんだぞ。たしかに赤い土の大陸の断崖絶壁は、世界で一番登り甲斐があるだろうが。

「つまり、自分で行けるってことだな」

「ああ、それがどうかしたか？」

「オレは先に行っているから、船の用意をして後から来てくれないか？」

「先について、お前がおれを抱えて飛べば一緒にいけるだろう？」

「両側の赤い港と上の電伝虫を全部壊して来る。海軍が、大将が来たらマズイ」

壊すと言っても、背中を受話器を壊すだけだ。

センゴクさんとサカズキさんは今海軍本部にいるはず。昼間会った。来られてたまるか。

電伝虫を壊して通信を遮断しておけば、後で海軍が天竜人から何らかの責任を取らされることもないだろう。

政府の人間は知らん。オレは天竜人だけでなく、世界政府も、いくつかの加盟国も嫌いだ。国旗をつけて奴隷を買いに来るバカが貴族をやって権力を握っている国なんて、ロクなもんじゃない。東の海のゴア王国に南の海のセントウレア王国とか。あまり良い噂を聞かない国ばかりだ。

おつるさんが北の海に行つて、今話題のドンキホーテ海賊団を追っかけていないのは運がいい。タイガーさんと会ってしまえば、オレのことがバレかねない。あの人はオレの知る海兵で一番見聞色が出る。心の声が聞ける海兵はレアだ、というかおつるさんしか知らない。

どうも海軍は武装色を重視している気がする。まあ攻防のバランスがいいからな。教官が武装色の達人のゼファーさんだし。攻撃の先読みが下手でも、全身の武装硬化が出来れば補える。

「ああ、なるほど。だがそんなもん、どこにあるかなんてわからねエだろ?」

「電伝虫にも気配がある。それを探ればいい。オレの見聞色の覇気の範囲はシャボンデイを覆える。いけるだろう」

「どんな気配をしているかはわかってる。シャボンデイにも海軍本部にもたくさんあるから。」

「覇気……オトヒメ王妃と同じ力のことが、そんなものまでわかるんだな」

「他人事みたいに言ってるが、もうあんたも使えるようになってるぞ?」

「何?」

「さつきオレの全力の霸王色を浴びただろう? あれで目覚めた」

「まだ使いこなすには練習が必要だろうがな。」

軽くタイガーさんに覇気について説明する。せめて自分の心の声を隠せるくらいは出来るようになって貰わないと。ウイリーさん達魚人島の3人と、居候のトリスタンも最近になって目覚めさせている。

「あの威圧感か……そのためにさつきのをやったのか?」

「いや、あれは気絶させるために本気でやった。子供のオレの威圧に耐えられず気を失う程度の覚悟なら、何もかも忘れて魚人島で暮らしていた方がマシだと思ってるな」

「オレの覚悟を試したってことか……余計なお世話だ」

「ふははっ、そうだったみたいだな」

「記憶が飛ぶまで頭を殴らずに済んで良かった。」

「じゃあ任せる。だが、居住地の端にあるゴミ捨て場には絶対に行くなよ」

「? なんでだ?」

「いいから、約束しろ! (子供が見るようなもんじゃねエ……)」

「わ、わかった」

すごい剣幕だ……そう言われると気になるが、ロクでもないものし

かないんだろうな……オレは生まれた時からシャボンデいの口くでもない現実を見聞色で聞いてきたから、まだ耐性がある方だと思っただけだな。買われたり攫われたりした若い女の末路とか。妊婦は2人分になるから高く売れるらしい。子供は生まれた時から奴隷だ。

はあ……かつてはオレも、牛の解体で泣くピュアな精神の持ち主だったのにな……。

「あとこれを渡しておく」

そう言つてタイガーさんが渡してきたのは

「ビブルカードか？」

「知っていたのか。新世界の店で作つて貰つた物なんだが」

「オレも持つてる。父さんが作つてくれたのがある」

そう言つて自分のビブルカードを出す。

「……あの人、何者なんだ？ 首輪のことといい」

「元海賊のすごい人。詳しく知りたければ、またここに来た時に自分で聞くことだな。今はいないみたいだし」

オレは自分の秘密しか話すつもりはない。元海賊つてことが勝手に言える限界だな。会つたことがないなら、オレの父親が誰なのかを教えても、生きていることがバレないように振る舞うだけでいいんだが。好きな食べ物とかなら教えても構わないけど、今聞きたいのはそれじゃないだろうし。

「まあいい。これを持っててくれ」

「オレは気配でわかるぞ？ 追われる身になることがわかってるなら、むやみに人に渡さない方が良くないんじゃないか？」

「構わねエ。おれが道を踏み外したら殴りに来るんだろ？ まあそんなことにはならねエがな」

「……わかった。じゃあ貰つておく。あとオレのも渡しておく」

オレ達は互いのビブルカードを交換して別れた。

よし、一応伝えておくか。

家の玄関から中に入る。

「あつ、ロゼ。お帰りなさい。さつきタイガーさんという方が来て

ましたよ?」

今日はナース服を着ているトリスタンに出迎えられた。メイド服よりこっちの方が似合うな。

「知っている。オレ、これからちよつとその人とマリージョアに行つて、奴隷にされてる人達をこつそり奪還してくるから。朝までには帰るつて、母さん達にはそう伝えておいてくれ」

そう言つて、血の付いたハンカチを洗濯かごに入れ、焼いて捨てたコートの替えに香水を吹きかけて着てから、適当にパンをいくつか持つてまた家を出た。

さて、姿を消して、ごはんを食べながらマリージョアに飛んで行くか。

「えっ……待つて!! ロゼ、どういうことですか!! 何がどうしたらそうなるんですか!? 意味がわかりませんよ!」

トリスタンの疑問の叫びは、むなしく虚空に響くだけであった。

☆☆☆☆☆

姿と気配を消して赤い土の大陸の両側のマリージョアへの出入り口、赤い港とマリージョアに行き、電伝虫を壊して回る。

音速で移動したため、それが終わつてもまだ時間があつたので、ついでに両側のボンドラの制御室を制圧しておいた。ボンドラを動かしたまま、部屋を出て鍵をかけておく。中の人達は全員気絶させ、部屋の中にあつた手錠や鎖で拘束してロッカーに入れておいた。使つた手錠と部屋の鍵は全部赤い土の大陸から下に投げ捨てたので、ロッカーから出られても、手錠か体のどつちかを切らないと動けないだろうし、そもそも扉を壊さないと誰も部屋の中に入れない。

マリージョアの通行許可を得て来る人がいない夜だからか、ここが攻め込まれるわけがないという確信からか、ボンドラの制御室には人が少なかったが、流石に城の方にはかなりの数の気配がある。パンゲア城だ。天竜人の居住地まで門が3つあるが、警備の人に開けてもら

えばいいか。電伝虫を壊した時は、飛んで空いている窓から中に入った。

ここには大量に首輪という名の爆弾がある。天竜人の家を爆破して回れば騒ぎに気付き、門を開いて助けに来ざるを得ないだろう。あんな人を殺せる威力の爆弾を首輪にするからこうなるんだ。あの首輪の威力なら、その気になれば天竜人の体の一部と一緒に自爆して吹き飛ばすくらいは出来るだろうに、不用心だな。

そして、門を飛んで越えた先で、よじ登って来たタイガーさんと気配を感知して合流する。

奴隷を解放する方法は、まずタイガーさんが魚人空手の正拳突きで屋敷の扉を破壊。そのまま中に入って天竜人に詰め寄り、首輪の鍵はどこだと聞く。オレがその心の声を聞いて鍵を見つける。鍵で首輪を外す。といった手順だ。部屋の過去を見て調べるのはタイガーさんに却下された……まあ結果的に鍵が見つかるなら、別に構わんが。

天竜人が乗り物みたいに人の上に乗って移動するのはシャボンデイでも見かける光景だったが、檻の中に入れて殺し合いをさせていたり、猛獣と同じ檻や水槽に入れていたり、結構な趣味の世界貴族様方もいらっしやっただ。よく笑えるな。何も楽しくない。価値観が違いすぎる。

オレは見聞色や能力のこともあり忘れない方だが、それがなかったとしても今日の光景を忘れることはないだろう。

腕、足、目などの体の一部を欠損した者、体に剣やナイフが刺さっている者、目が虚ろな者、いい年をした大人がまるで子供のような喋り方をしている者と、体だけでなく精神に異常をきたしている者もいる。

「走れ!! 一度と捕まるな(それにしても、元気づけるためとはいえ、よくあんな歯が浮くようなことをポンポン言えるなこいつ……まあ死人みたいな表情してるよりは良いことだろうが、こいつの将来が少し心配になった……)」

主にタイガーさんが、たまにオレが変えた声で誘導する。

先ほど、タイガーさんを怖がっていたので、オレが首輪を外して少々手間取りながらも指示を出した内の1人が、オレの方をじつと見ていたんだが、ミンク族でもないのに姿と気配を消したオレの位置が何故わかる？ 動物系ソオンの能力者か？ 香水をつけているから、たとえ鼻が良くても普段のオレの匂いはバレないだろうが……。

そのミンク族にも会い、ゾウの場所を知る手段がないそうなので、ペドロから貰ったビブルカードを少し破り、必ず全員で帰るように、と言って渡しておいた。友好の証に貰った物を裂くのは気が引けたが、この使い方ならペドロも許してくれるだろう。

首輪を外していると、たまに天竜人に襲い掛かる人がいる。まあ、そりゃあそうだろうな。

「こいつ、殺してやる！」

「離すんだえー！ わちしの奴隷風情がッ！ 誰のおかげで生きていられると思っているんだえー！」

こいつはもしかして殺されたくてわざと言っているのか？ ……本気でこう思っているのだろうか。

「ふざけるなアッ！」

「おい、やめろ！ 殺せばこいつらと同じになる！」

「止めないでくれ！ こいつだけは、こいつだけは許せねエ！ 生かしちゃおけないんだ！」

「……ッ！」

止めさせようとしたタイガーさんの動きが止まる。似たようなことを経験して、気持ち的理解出来るからこそ、止められないのだろう。

オレがやるか。

姿を消したまま、天竜人の首にナイフを突き刺そうとした男の腕を掴む。

ゴンッ！

「ヴォゲア!!」

そして、無自覚に人の怒りを煽っている天竜人の頭を蹴って気絶さ

せ黙らせる。

「復讐がしたいならすればいい。だが殺すな」

「だ、誰だ!? 誰かいるのか!？」

見えないものに腕を掴まれ怯える男。怒りと殺意の二色だった男の感情に恐怖が混じる。好都合だな。

「こいつは死ねばただの死体だが生きていれば天竜人、利用価値がある。こいつが情けなく豚のような悲鳴を上げて無様に助けを求めれば、ここの警備の連中は無視出来ない。すれば後で死罪だ。目と喉は残せ。お前の気が済むまで痛めつけたら、目立つ所に捨てておけ!」

我ながら酷いことを言うものだ。オレの言動にタイガーさんがちよつと引いている。だが長々と説得の為に話しをする時間が今は惜しい。あと数時間で【光学迷彩アーマー】連続使用の限界が来る。まだ全部終わっていないんだ。

それに、オレはこの人間を助けるのも目的だが、1番はタイガーさんの手助けをしに来たんだ。今天竜人に死者が出れば、その罪はすべてタイガーさんのものになる。この人はそれも覚悟の上だろうが、オレが許さない。それほど殺したいなら、後日自分で赤い土の大陸をよじ登ってから1人でしてくれ。

「は、はい! (恐ろしい人だ……逆らえば何をされるかわかったもんじゃない……!)」

男が気絶した天竜人を引きずって去って行った。

天竜人への怒りと殺意が、得体のしれないオレへの恐怖で塗り潰されていた。もう殺そうとすることはないだろう。

「おい……良かったのか? あいつ、完全にお前に怯えていたぞ」

「感謝は姿を見せているあんたがされればいい。こっちは姿を見せていないんだ、どう思われようが関係ない。『殺せば奴らと同じになる』、彼らにも殺して欲しくはないだろうか?」

「ああ……」

「急ごう、まだ人は残っている」

途中で遭遇する衛兵を倒しながら、天竜人の家を回って行く。

すべての首輪を外し終え、騒ぎで空いた門を通り、シヤボンデイ側の赤い港レッドポートの方に向かう。

皆を逃がすために、タイガーさんは自分がこの騒ぎを起こしたと叫び、囷になりながら進む。オレはその背後から攻撃して来る衛兵を足を引っ掛けたりして、別の敵の方向に転ばせ、巻き込ませる。

下に降りるボンドラの所に着き、崖を背に戦い時間を稼ぐ。

反対側はもう全員降りたみたいなので、タイガーさんから離れてそっち側に行き、ボンドラの8つのロープをすべてチェインソーでぶった切る。これでアラディンさんも、もう逃げてくる人がいないとわかるだろう。

「もう全員下に降りたようだ」

戻って来てからタイガーさんに近寄り、周りの衛兵に聞こえないよう、見聞色で探っていた逃がした人達の状況を小声で教える。

「そうか、ならもうこいつは必要ねえな……【五千枚瓦正拳】！」

ドゴオン!!

人を乗せたまま降りて、空からになり戻って来たボンドラを、タイガーさんの正拳突きが粉碎する。

「自分から移動手段を壊すなんて、投降する気にでもなったか！」

「まさか。こうするんだよッ！」

そう言い、タイガーさんが赤い土の大陸レッドランドから飛び降りた。

「なッ、死ぬ気か!？」

おいおい……オレがいるからだろうけど、すごいことをするな……そりゃあ衛兵達も驚くわ。

飛び降りたタイガーさんを追ってオレも飛び、加速してタイガーさんに追いつき体を掴む。

「危ない真似をする……」

「お前が来るとわかっていた！」

……まったく……そう言われれば責められないじゃないか。

降りる途中でまだ残っているボンドラのロープもすべて切る。これでもう、マリージョアから逃げた人達を追うことは出来なくなつた。それだけでなく、どれかのボンドラとロープを復旧するまで、マリージョアは外界から隔離された。

今回の一件が広まるまで、時間がかかるはず。その間にタイガーさん達と奪還した罪なき人々には逃げてもらおう。さつき飛び降りたことで、死んだと思われるのが一番なんだが……。

そのままタイガーさんを抱えて、赤い港レッドポートに着地する。

「後は逃げるだけだな」

「そうだな……二度と捕まるなよ？」

天竜人にも、海軍にも。

「……ははっ、ああ！ またな！」

そう言つて海に潜るタイガーさんと別れた。

CP-0と出くわさなかったのは運が良い。この分だと全員何らかの任務で出払っていたか。わざわざタイガーさんに付きつきりではなく、別行動でも良かったかもな。

これでオレもバレれば犯罪者か。前にゼファーさんに、正義なんてわからないつて言つたけど、もう正義についてとやかく語る資格はオレにはないな。犯罪者が正義を語るなど笑えん冗談だ。

さてと、覇気はともかくもうすぐ体力は尽きそうだが、オレは最後の仕上げに行くか。

見つけた賞金首の海賊の心の声は全員チェックしていた。気になつていたがやはりいたか、どうしようもない奴らが。

『海賊はどこまでいこうと海賊』、スモーカーさんがよく言う言葉だ。引退した海賊は見逃すオレとしては否定したいところなんだが、まあその通りだな。もう海賊から足を洗うと、守る気のない姑息な嘘を吐く奴のなんと多いことか。追い詰められた時に人の本性は出るという。

残念ながらオレは、海賊でも天竜人の奴隷を経験すれば改心すると考えるほど甘くはないし、自分はひどい目に遭つたから何をしても許

される、なんてふざけた考えを見逃してやるほど優しくもないんだ。タイガーさんに感謝して、海賊稼業から足を洗い、平穩に暮らそうと考えていた者達もたしかにいた。彼らは今日の所は見逃そう。

不穩な考えを持つていた賞金首は、全員シャボンデイ側に船を浮かべていると言つてそちらに向かうよう誘導した。海賊なら尚更、徒手空拳で四皇が支配する危険な新世界に挑むより、まずはシノギがしやすい前半の海を選ぶよなあ？ 食料も武器もないんだ、まずシャボンデイに上陸するだろう。顔と気配は覚えている、1人たりとも逃がしはしない。

何がもうすぐ楽園だ。パラダイス人間を嫌っているにも関わらず、見て見ぬふりは出来ないおこなと行つた、タイガーさんの決死の慈悲が伝わらなかつたか。焼印はオレが焼いて消してやる。シャボンデイが貴様らの最後のシャバだ。マリージョア生き地獄でもまだ足りないなら、残りの人生はすべて監獄インベルタウンで過ごしている。

すべての後始末を終えて夜明け前に帰宅すると、まだ起きていたトリストアンに噛み付かれた。甘噛みではなく本気の噛み付きだ。どうやら心配をかけたようなので、能力を使わず生身の体で甘んじて受け入れた。すごく痛い……悪かつたから涙目で噛まないでくれよ……。その後、玄関で正座してちゃんと洗いざらい報告をした後に謝つて許してもらえた。

今日は1日休もう。海軍本部でのいつもの修行にあの3人との四つ巴のバトルロイヤルルールでの組手、最後の人間屋ヒューマンシヨツプの破壊にマリージョア襲撃、もう疲れた……。

“ゴルゴン三姉妹”

マリージョアにてタイガーさん達と奴隷を解放してから夜が明けたが、まだニュースになっていない。何もなかったことにして、もみ消すつもりなのか？ それなら正直ありがたいが……たぶんオレ達が電伝虫とボンドラを壊したから、何があったか詳しい情報がまだ伝わっていないだけだろうな。

「シャツキー、レイリー、ちよつと相談したいことがあるニヨじやが……」

「あつ、ニヨン婆。いらつしやい」

少し寝てから、昼飯を食べながら父さんと母さんにも昨日のことを報告していると、ニヨン婆がやって来た。

「お、お口ゼよ。いつもこの時間帯はおらんニヨに、今日はいるニヨじやな……（これはマズイかもしれんニヨう……）」

「ちよつと昨日は疲れることがあったから、休んでいる。それで、外の人達は？ 3人いるけど」

「ああ、実は行き倒れておった所を拾ってニヤ。元の場所に帰してやりたいニヨじやが、力を借りたくて来たニヨじや」

「へえ、いいことしたな」

……昨日解放した奴隷か、奴隷一步手前の人達じゃないだろうな？

「まあとりあえず入りなさい、グロリオーサよ」

グロリオーサと言うのはニヨン婆の名前だ。昔は海賊だったらしいが、まあ引退しているならオレは気にしない。

「一緒に昼食食べる？ まだあるわよ？」

「あつ、私お茶入れてきますね〜」

「ありがとニヨう……お前達、入って来ニヤさい」

お茶を入りにキッチンに行ったトリスタンと入れ替わりに、ニヨン婆が連れて来た3人が入ってくる……よりによってか……まあそのまま野垂れ死にされたり、連れ戻されなくて良かったと思っておこう。

黒、緑、オレンジの色の髪をした3人の女性が入って来る。昨日見た顔だ。それも全員覇気使い。

黒髪の美人が、先頭に立って他の2人を庇うように立っている。警戒してこちらを少し睨みつけているが、恐怖の色も混じっている。昨日と同じだな。まあ事情が事情だし、父さん達を、ついでにオレも睨みつけているのは気にしないでおう。あの環境にいたのだから、この反応も仕方がない。一番背丈が小さいが、立ち回りにこの人がリーダーなのか。

その後ろに黒髪の女性より少し背が高い、ナミちゃんと同じオレンジ髪の女性と……昨日姿を消したオレを見ていた緑髪の一番背が高い女性。バレないだろうが気を付けないと。

「ひっ、男！」

緑髪の人が見て悲鳴を上げた。

「ははは……年頃の娘さんに悲鳴を上げられるのは、少し傷付くな……私ももう年か……」

「大丈夫だ父さん！ あの人男性恐怖症とかなだけだろう。父さんはまだまだ若い！」

実際この前も……いや、あのことは母さんの前では言えんな。

それにしても、オレを見ても悲鳴を上げず父さんで悲鳴を上げるのは、オレが子供だからでいいんだよな？ 男と認識される年齢になっていないからってだけだよな？ そうであってくれ。なんかこっちを驚いた顔で見てるけど、たぶん気のせいだ！

「ソニアよ、この者達はお前に酷いことは(たぶん)せニュから安心せい。ハンコックも睨むのは止めニュか」

「……はい、グロリオーサ様……」

ニヨン婆に窘められて睨むのをやめる黒髪、ハンコックと呼ばれた人……何故様呼び？

「お茶が入りましたよ」

トリスタンが良い意味で空気を読まずにお茶を持って来てくれたので、全員席について自己紹介をする。三姉妹だったようだ。黒髪の

人がボア・ハンコックといい長女らしい。緑髪のすぐオレの方を見ている人が次女のボア・サンダーソニア、オレンジ髪の人がボア・マリーゴールドで三女だそうだ。やめろ、見るな。初対面だ。

「……この3人は女ヶ島にようがしま、アマゾン・リリーの住民だそうなニヨじゃ」「ああ、ニヨン婆の故郷の……」

島民が九蛇クジヤと呼ばれる戦闘に長けた、女しかない部族で、覇気を扱えるという戦闘力の高さ、カームベルト 風カームベルトの海にあるという立地が特徴の島。そして何より、主な収入源が精鋭の九蛇クジヤの戦士を集めた九蛇海賊団クジヤの略奪によるという。

九蛇海賊団クジヤの船長がアマゾン・リリーの皇帝を兼ね、ニヨン婆もかつて皇帝だったらしい。ああ……だから様呼びしているのか。

アマゾン・リリーの皇帝の条件はただ一つ。血筋ではなく強さ。故に九蛇クジヤは、強い者こそ美しいという価値観を持つ。島で最も強い戦士がなる皇帝は最も美しく、島民の憧れの対象なのだそうだ。

「うむ。ビブルカードはあるので方角はわかるニヨじゃが、行く手段がないニヨじゃ……」

タイガーさんの用意した船では、流石にカームベルト 風カームベルトの海を渡ることは無理か。

カームベルト 風カームベルトの海はその名の通り風、無風の海だ。蒸気船などの動力がある船を使うか、泳いで渡れる並外れた身体能力が必要だな。それ以外にもカームベルト 風カームベルトの海は海王類の巣、戦闘力もある。今まで女ヶ島にようがしまを外敵から守って来たものが、帰るにあたって障害になってるわけだ。他の2人はわからないが、姿を消したオレを見つけたサンダーソニアは十中八九能力者、泳いで渡るのは無理だな。

九蛇海賊団クジヤの船は遊蛇ユダという巨大な海へびに引っ張って貰うらしい。猛毒を持ったため海王類にも襲われずに済むそうだ。

「カームベルトの海までの間にサイクロンさえ発生しなければ、オレが空を飛んで運べるんだがな……いや、アマゾン・リリーは男子禁制だったか」
男が入国すれば即処刑らしい。まあ実際この三人が攫われて奴隷にされているわけだし、当然の反応だろう。

上陸せず空から3人を落とせばセーフか？ ……酷い屁理屈だな。

「……ロゼ、そなた手伝ってくれるニヨか？（最悪九蛇クジヤと知った途端、攻撃をしかけてもおかしくないと思っておったニヨじゃが……）」

「当たり前じゃないか。手伝って欲しくて来たんだらう？」

何を今更……。

「いやだが、そなたは海賊を嫌っているじやろう？」

「海賊はな。でもその人達、少なくとも今はまだ海賊じゃないだろう？ なら手伝うことに何の問題もない」

そもそもオレにまだ海賊になつていない人をどうこうする権限などない。オレの嫌いな海賊になったら倒すだけ。ならなければ、男子禁制の女ヶ島にようがしまの住人と会う機会などもうないだろう。

「……手伝ってくれようとしているのは礼を言うけど、あなたみたいな子供に助けられるほど私達は落ちぶれてないわ！ そもそも男がいるとこの子達が怖がる」

そう、子供だが男のオレを怖がりながら、それを隠して強がっているハンコックに言われる。平気な表情を作っても見聞色で感情はバレなんだが、まあ姉として妹達を守ろうとしているんだろう……ところで、その奇妙なポーズはなんだ？ 腰に手を当て、もう片方の手でこちらを指差しながら、オレを見下し過ぎて逆に見上げている。昨日はそんなのしていなかっただろう。

「……姉様あね、私はこの子なら大丈夫。昨日も助けてくれたから」

「何ですって？」

「どういうこと、ソニア姉様？」

おい、何を言い出す。確信を持っているようだが、どこでバレた？ 匂いは帰って来てからシャワーを浴びたし、まだあんたとは話してさえないぞ？

「ロゼ、この人達つてもしかして……キュル!？」

余計なことを言おうとしているであろうトリスタンの口を塞ぎ、部屋の隅に連れて行く。

「何を口走ろうとした？」

「いや、あの人達ってロゼがタイガーさんとマリージョアで解放して来た人ですか？」

やっぱり余計なことを言おうとしていた。

「何を言おうとしている。違っていたら、無関係の人間にオレの犯行をバラす最悪の一言だし、合っていても弱みを握られる」

「いや、普通に感謝されるんじゃないですか？」

「頭の中がお花畑かお前は。あの3人は九蛇クジヤ、海賊になるかもしれんのだぞ？ 海賊が恩など返すものか。弱みを握られたら最後、オレの命ライフが尽きるまで利用されるに決まっている！」

まったく、この人の良い子リスミンクは……遭難者を装い人の良い民間人を騙して略奪する海賊が、世界にどれだけいると思っている。

「そんなに疑ってるなら、なんでこの人達が故郷に帰るのを手伝おうとしてるんですか……？」

「まだ何の罪も犯していない民間人を、将来オレの敵になるかもしれないからという理由で見捨てるなんて出来るか！」

トリスタンに、オレのことを教えないようにと言い含めてから席に戻ると、

「誇り高き九蛇クジヤの戦士であるこの私が、こんな子供に助けられるなんて……しかも、あの方が、あの方が……！」

何故かハンコックが床に手と膝をつき、ぶつぶつと小声で何か呟きながら項垂れていた……何事だ？

「どうして昨日私達を助けて下さったあの方がこんな子供、それも男なのよ!？」

ハンコックが涙目でオレを睨み、指差しながら叫ぶ。

げっ、どうやらオレとトリスタンが話している間に、こっちでもオレのことを話していたようだ。

ニヨン婆とマリーゴールドがこちらを驚いた顔で見えており、父さんは半笑い、母さんは両手を挙げてお手上げのポーズ。

「れ、れ、れ、冷静になれ！ まだだ！ まだ何の証拠もない！ 少し寝たとはいえ昨日から動きつ放しでもういい加減にして欲しいが、これさえ乗り切ればもう終わりだ！」

「ふう……あんた、何を言っているんだ？ わけのわからんことを……」

「(ぜ、全力で知らん顔してます……!)」

「(何も聞いておらんかったら、本当に知らないと思う見事なポーカーフェイスだな)」

「どれほど崖っぷちに追い込まれようとも、オレは鉄の意志と、鋼の強さでしらばつくれる！」

「ソニア姉様……やっぱり違うんじゃない？」

「よし！ 1人誤魔化せた！」

「何……？ じゃあやっぱりあの方は、慈悲深く、高潔で、人助けをしても姿も見せず恩にも着せず、私にも気配を感知出来ない手練れの、奥ゆかしく素敵な女性だったのね！」

「(わ、笑つちやダメよ私……この子は何も知らないのだから……)」

「誰それ？ 誤魔化せてはいるものの、とんでもない誤解をされている。」

「自分が海軍と敵対するのが嫌で、だけど見て見ぬふりをするのも嫌だから、全力で自分の正体を隠して襲撃しているだけの、ただの小賢しい男だ。」

「そういうのはタイガーさんにしてくれ。すごいのはあの人だ。」

「それじゃあさつき、そっちのミンク族の子、トリスタンはなんて言うとうとしたの？」

「やはりオレの前に立ちはだかるか、ボア・サンダーソニア……！」

「理由はわからないが、彼女はもうオレが昨日の犯人だと確信している。手強い相手だ。」

「トリスタンは、最近シャボンディでよくある職業安定所襲撃事件、それを起こした犯人とでもあんた達が関わったのかと思ったただけだ。」

最近この場所は何かと物騒だから。なあ？」

「は、はい、そうです！（それもあなたの仕業じゃないですか！）」

トリスタンはオレと違って根が正直で腹芸が苦手だから、少々苦しいな……。最初に言葉に詰まったし、その、すぐく何かを言いたそうな顔でこつちを見るのはやめてくれ。いつものスマイルで頼む。後で尻尾のブラッシングするから。

「へえ……。あなた、そんなこともしていたの（職業安定所つてたしか……。そつちの呼び方を使ったのは、私達への配慮かしら？）」

何故バレ……。こいつ、心の声が聞けるのか!? ……なるほど、母さんがお手上げしていたわけだ。

「そんなこと？」

「とぼけても無駄よ。あなたやそつちの二人から心の声は聞こえないけど、トリスタンからは比較的聞き取りやすいから」

ああ、そうか……。オレは最初から、こいつに会った時から詰んでいたのだな。

「わ、私ですか!? ご、ごめんなさい……」

「いや、気にするな。オレの自業自得、身から出た錆だ……。ふははっ、むしろオレ自身こそ錆……。鉄の意志も、鋼の強さも感じられず、屑鉄の意志と、錆の脆さを持つ废品こそが、このオレだ……。！」

完全敗北したオレが、膝から崩れ落ち、床に両手をついた。

今のオレにはシユウさんのサビサビの能力も効かんかもしれないな……。すでにこの身は錆びジャックびついているから。錆びる余地などありはしない。

「参考までに聞かせて欲しいのだが、何故昨日、姿を消したオレのいる場所がわかった……。？」

「（そ、そんなに落ち込まなくても）……。あの場所で私達は、余興として奇妙な果物、悪魔の実とかいうものを食べさせられた。その時から、私はへびに、アナコンダに変身出来るようになったの。それ以降、温度を感知できるようになったわ」

「ああ、なるほど。ピット器官というやつか……。へびか……。かつこいな……。！」

ピット器官。夜行性のヘビが持つ赤外線感知器官、機械で言う赤外線センサーやサーモグラフィのようなもの。赤目フクロウが赤外線センサーのような赤い光線を目から出し、その光線に生物が触れば大声で鳴くという。

それにしても、全員能力者だったか。自分が虐げている奴隷に悪魔の実を食べさせる思考回路が理解出来ん。悪魔の実を与えて、それが首輪を外せる能力だったなら、次の瞬間自分の喉元を食いちぎる反逆の牙へと変貌するのが容易に想像出来るだろうに……まあその天竜人が自分で食べなかつただけマシか。もし食べられていたら、オレのことが簡単にバレル。今のように。

「か、かつこいい？ 体がヘビに変わるのよ!? まるで化物じゃない！」

何か逆鱗げきりんにでも触れたようだ。逆鱗があるのはヘビじゃなくてリュウだろうに。というか何故それをサンダーソニアではなくマリーゴールドが言うんだ？ 彼女もヘビヘビの実の能力者なのか？

「体がヘビに変わる？ 化物？ それがどうした。珍しくもない。オレだって姿を消せるし、声も変わる、腕や頭を分離して飛ばせるし、手から電気を放出したり、口から火を吹いたり、他にも色々出来るぞ？ そんな化物のオレでも受け入れてくれる人はいるんだ。まあだから、そんな不安にならずとも、あんた達も大丈夫だろう」

口で言いながら、能力を使い実演してみせる。怒りから一変、呆然とした顔でそれを見ているマリーゴールド。

すべての人に受け入れられるとはオレも思わんが、彼女達には同じ能力者の姉妹がいる。問題ないはずだ……オレにとっては大問題だが。

九蛇海賊団クジャは九蛇クジャの戦士の精銳が集められる、そして船員に選ばれることは名誉なこと。覇氣使いに加えて能力者、間違いなく彼女達は海賊になるだろう……バレたのはもう仕方がない。知られないに越したことはなかつたが、覚悟ならすでに出来ている。

「姿が消えた……それに今の声……あの方と同じ……！　じゃあ本当に……」

イメージとかけ離れたオレに、ハンコックの中の自分の恩人像がガラガラと音を立て崩れていくようだが、想像力があり過ぎだろう。早めにイメージを壊せて良かった。

「それで、オレが昨日の奴と同一人物だと何故わかったんだ？　感知出来ると言っても、はっきりオレの顔が見えたわけじゃないのだろう？　声で性別まで偽っていたのに」

もしサーモグラフィと同じように見えるなら、顔なんてわからないだろう。

「昨日見た人と背格好が同じだし、今も気配がしないから……それに股の間に……」

そうか、最初から男だということはバレていたのか。熱感知でそんなことまで把握されるのか……。

匂いといい赤外線センサーといい、全然万能じゃないな、オレの【光学迷彩アーマー】。思いの外、見破る手段が多い。今度使う時は今以上に慎重に使わないと……というかガープさん達と初めて会った時といい、また気配を消していることが原因か。いい加減、普段は気配を少し出すようにした方がいいかもな。完全に消す方が慣れているから楽なんだが。

「男だとわかっていたならあれ、どうにか出来なかつたのか？」

頭を抱えてショックを受けているハンコックを指しながらそう言う。

どうしてああなるまで放っておいたんだ。そもそも何故あんなことに……。

「逃げるのに必死だったし、気付いたらああだったわ」

「そうなのか……」

「あの、さつきは取り乱してごめんなさい……でも姉様の^{あね}反応も無理ないと思うわよっ」

マリーゴールドが話に加わって来た。

「構わん。だが無理ないって……たしかにオレは男で化物だが、あそこまでショックを受けんでもいいだろう」

「いや、そつちじゃなくて……『安心しろ。もう悪夢は終わりだ』とか『お前達にこの首輪は似合わない』とか、他にも、その……ま、まるで口説いてるみたいないなことを、優しく言ってくれたじゃない……！う、『俯いているより、上を向いて咲き誇る花の方が好きだ』とか……（たぶん姉様のあの見下し過ぎて逆に見上げてる変なポーズは、この一言が原因ね……）」

ああ、言ったな。そんなことも。オレはともかく、よく1度言っただけの言葉を一言一句違えず覚えていてるものだ。

「口説いてなどいない。心がボロボロになつていたから、励ましただけだ」

出来るだけ早く終わらせたかったのに、そんなことするか。そもそも口調こそ変えていないが、女のふりをしていたんだぞ、オレは。

「……誰の影響なのかしら、その励ましの言葉の選び方は？」

「私の時は何も言わずに、すごい速さでどっかに行っちゃったくせに……美人のお姉さんにはそんなこと言うんですね」

トリスタン、お前はたいして心にダメージを負っていなかっただろうが。

「ロゼよ、では本当にそなたがやったのか……？」

「ああ、そうだな。オレがやった」

トリスタンの膨らんだ頬を軽く突きながらそう言う。初めからニヨン婆には後で言うつもりだった。

「（私の言葉はしっかりと根付いているようだな）」

何故か父さんが親指を立て、無言のサムズアップをしてきたので、オレも返す。そんなに天竜人嫌いだったか？ いや、好きでもないだろうが。

「（信じられん……それほどのことをしていながら、まだ騒ぎが広まってないことも驚きじゃが、この子が明確に法を破る、それも嫌っておるとはいえ、天竜人にケンカを売るようなことに手を貸すとは……）」

「勘違いされては困るが、オレがやったのはタイガーさんの手助け。そして天竜人に捕らわれた罪なき人々の奪還だ……あんた達姉妹が今後九蛇海賊団に入るのはまだいい……だが！」

ギンツ！

少し加減して3人を威圧する。すでに3人とも覇気使い、ただの威嚇だ。昨日の3人の精神状態だったら気絶していただろうが……ああ、完全に心を折っていたから、悪魔の実を食わせたのか。もう逆らう気力なんて残っていないからと。

「これは……霸王色……!?!」

「姉様と同じ……!」

「(また上達しておるようじゃな……ソニアとマリーが吞まれておる。この子がおなごであれば……)」

……ハンコックも霸王色の覚醒者か……もしかすれば九蛇海賊団どころか、アマゾン・リリーの皇帝にすらなるかもな。今はまだオレのことで俯うつむいているが。

「あんた達が民間人を踏みつけるような、オレの嫌いな海賊に成り下れば、オレが叩き潰しに行き、捕らえて海軍に引き渡す！ オレのことを海軍に話したければ話すがいい。それでも見逃すつもりはない」

それがオレの責任だ。オレの罪が発覚することは、オレが嫌いな海賊を見逃す理由にはならない。

「ええ、わかったわ……(思っていたより怖いわね、この子)」

「肝に、銘じておくわ(昨日はあんなに優しくかったのに……)」

だといいな、オレにとつても。今はオレの警告を無視する気がなくても、人の心は結構簡単に変わる。

「(口封じをするつもりはないのね……たとえそこまでしなくても、この子達を見逃しちゃえばいいのに、損な性格してるわね)」

「そんなのどうだっていいわ！ 私のあの方を返して！」

シヨックを受けていたハンコックが、オレの方を見て口を開いたかと思えば、まだ現実を直視出来ないのか……。

「知らん、そんなことはオレの管轄外だ」

元々存在しない人間を返してと言われても困る。第一、あんなのではない。

「そ、そんなことですか!? 私の心を弄んでおいて!」

ひ、人間きが悪すぎるな……そんな人のことを、恋人に散々貢がせた拳句捨てた男みたい……流石にこの状況は予想外だ。

「許さない……! 私を見なさい! 【メロメロ甘風】!!」

攻撃の意志、及び殺気あり……じゃあ仕方ないな。

「あ、姉様!?!」

ブオツ!!♡♡♡

驚愕する妹2人を余所に、ハンコックが両手でハート形を作ると、そこからピンク色のハート形のビームみたいなものが出る。効果は不明、心が読めない、閉ざされている。意図して隠されている……というより、これは拒絶されているな。

とりあえず武装色でガードして弾くが、これは何の能力だ? 見た所物理的な攻撃力はないようだが……父さんにも当たってるが見た所ダメージがない。未来を見て平気と判断したのか避けていない。食らってどんなものか確かめようとしたのか?

「敵対する意志を見せた以上、覚悟は出来ているのだろうか……?」

ハンコックを睨みつけながら、近付く。

海賊になっっていないから海軍には引き渡さんが、少し痛い目を見てもらうか。

「姉様のあれが効かない!?!」

「数時間前に襲って来た男達を石に変えたあの技が……!」

なるほど、石化……そういう悪魔の実もあるのか。ビームに触れたものを石化させる能力といったところか。おそらくは超人。

そして相変わらぬ治安だな、シャボンディは。

はあ……オレの警告を聞き入れ、ハンコックの能力まで教えてくれたあの2人に免じて、軽く済ませるか。

拳骨一発くらいで

「わ、私の【メロメロ甘風】が効かない……!?! そんな……い、嫌っ!!
もう、あんな場所に戻りたくない!!」

「むう……女性には花に触れるような繊細さで接しろとあれほど……一度敵と認識すれば、自己基準最低限の気遣いしかしないのはな。賞金稼ぎバウンテイハンターをする上で、私に対する遠慮がなくなったのはうれしいが」

ハンコックが嗚咽おえつを漏らし泣き始めた。トリスタンと一緒に外に出て襲われた時によく見る騙し討ちのためのウソ泣きではなく、マジ泣きだ。

ええ……や、やり過ぎたか？ たかが殺す気で攻撃されたくらいで、まだ海賊になつていないのに、というか昨日は今にも首を吊りそうな顔をしていた人に脅し過ぎたか？ 周りの視線が痛い……。

「……すまん、言い過ぎた。それと性別を騙して悪かった。別に天竜人の元に返すつもりはない」

戦闘態勢を解き、ハンコックに謝罪する。

「ロゼが泣かせた人に謝った……!? いつもなら、敵が泣いても意識がなくなるまで、男女関係なく追撃してますのに……（あれ怖いです……）」

放っておいたら、お前がウソ泣きに騙されるからだ。

オレは、情け容赦がない冷酷非情だとか、血も涙もないとか、人でなしとか、倒した負け犬共や今はなき人間ヒューマンシンヨツプ屋の連中にキャンキャン遠吠えを喚わめかれるくらいだから、1人の時にウソ泣きなんて子供騙し、ほとんどさせられない。

「グスツ……ほ、本当……？」

泣いて顔を手で覆っていたハンコックが、オレの謝罪を聞き、顔を上げる。

「ああ、本……当……」

話しかけながらハンカチを出して近付き、ハンコックの顔を見る。

涙に濡れた顔が光に反射して輝いている。

「美しい……!!!」

「「「「えっ?」「」」」」

「（可憐だ……私ももう少し若ければ……）」

白く透き通った艶めなまかしく端正な顔がほのかに上気し、その頬が薄

桃色に染まっている。しおらしく儂げな様子が、神秘的な雰囲気醸し出し、神々しく後光こうこうすら差して見えるようだ。彼女の美しさの前では、月も花も己の美に自信が持てず、恥じらい隠れてしまうだろう。

正に美の化身！ まるで、心を奪われるよう

カチー……ン!!

「あつ、石になった」

「ロ、ロゼーツ!」

「……どういふことなの?」

「レイリー……そなたもなニヨか……」

そこで、オレの意識は途絶えた。

☆☆☆☆

「解いた! 解いたから! もう下ろして!」

「あつ! 2人の体が元に戻りました!」

「ふう……後遺症とかないんでしょね……?」

いつの間に気絶していたんだ、オレは? たしかハンコック達に警告をしたはずだが。そのハンコックが、何故か母さんに胸倉を掴まれて持ち上げられている。何があつた? ……覚えがない。

気味が悪いので自分の過去を見てみると……ああ、能力による石化を食らったのか。あの時の技名から推測するに、ハンコックにメロメロ、魅了されたものは石に変わる、といったところか。だから攻撃前に自分を見る、とわざわざ言ったのか。相当容姿に自信があるようだ。自惚れじゃないのが何とも……オレもあのザマだ。オマケみたいに前後の記憶が飛ぶのは、悪用出来そうで地味に厄介だな。武装色で防げないのは厄介なんてレベルじゃない。最初に効果がなかったのは、これから叩き潰すだけの、ただの敵としてしかオレが認識していなかったからか。

不覚を取った……これがオレ1人の実戦だったら、石と化した体を砕かれ死んでいた。

「もう、もう！ 心配かけて！ あの技、魅了した相手を石に変えるそうですねよ!? そんなに美人なお姉さんが好きなんですか!? まだ9歳なのに！ この早熟の女誑し！」

「(ん？ あ、私のことではなかったか……)」

女誑しではない……口説いてないと言っただろうが。

「ぐうの音も出ん……すまん、心配かけた。だが種も割れたし、これで大丈夫だ。もし気に入らない海賊になって敵対すれば、あの技を使う前に奴の顔をボコボコに殴り、二目ふためと見れん醜女しこめに変えてやればいい」

「【ジェット・ウォリアー】の音速移動で近付き、何をする暇も与えず【スクラップ・ファースト】で殴ってしまった方がいい。」

「(お、恐ろしいことをする算段を立てられているわ……もしもの時の為に、見た目以外で魅了する方法や攻撃手段も作っておかないと……最初はロゼに私の魅了が効かなかったし……でも、私のことを美し

いって)」

「この人でなし！ 女の子になんてことしようとするんですか！」

「ぐう!? お前……オレは他人からどう思われようと構わんが、大事な人から罵倒されるのは流石に傷付くんだぞ……?」

これは聞いているハンコックへの警告だ。敵対すれば本当にする

が。

「わかってて言ってます！」

「ふははっ、言うようになってきたじゃないか！」

良い傾向だ。短いとはいえ奴隷だったからか、オレの顔色を気にし過ぎだった。ご主人様は本気で止めて欲しいから、これからも拒否するが。鳥肌が立つ。

その後、3人の能力を聞いた。ハンコックの魅了した相手を石にするメモロの実、サンダーソニアのヘビヘビの実モデル「アナコンダ」、そしてマリーゴールドのヘビヘビの実モデル「キングゴブラ」、本当にヘビの能力者だったか。キングゴブラ、毒蛇だな。たぶん毒が使える。サンダーソニアと違って熱は感知出来ないそうだ。役割分担が出来て三人一組スリーマンセルの厄介さが増すな。

それにしてもへびに石化か……。

「ゴルゴンみたいだな」

「ゴルゴン？ 何ですか、それ？」

ゾウ出身のトリスタンが知らないのも無理はないか。

「伝説上の生き物だ」

「伝説って？」

「ああ！ 簡単に言うと、女神に嫉妬され、自慢の美しい髪を無数の蛇に変えられた女性のことだ。見たものを石化させるらしいぞ」

「女神様の器が小さすぎませんか……？」

「そんなものなんじゃないか？」

昨日見た神様達も別に器が大きいわけじゃないし。

「それ、使えるわね」

「使えるって……何にだ、母さん？」

「この子達の能力のことを誤魔化すための方便に、よ。アマゾン・リリーって外界から隔絶されていて、入って来る情報が限られているから、悪魔の実のこともゴルゴンのことも知ってる子はいないだろうし、上手く言えば恐れられずに済むんじゃない？」

「ああ、なるほど」

オレも悪魔の実のことを知らなかったし、現に不思議な力が使えるのだから、信じる他ないだろう。

「わしが現皇帝に謁見して、説明しに行くとしようかニョウ」

「……大丈夫なの？ 私が言えたことじゃないけど、皇帝なのに国のこと放って飛び出してきちやったのに……処刑される可能性だってあるかもしれないわよ……？」

「安心しニヤさい。今更この老いぼれの首を刎ねた所でどうにもならニユよ、シャツキー」

心配そうな母さんに、ニヨン婆が笑って返す。

「処刑されそうになったら、またいつでもここに来ればいいだろう。そこの3人も一緒に。海賊にならんならオレも安心だ」

もしそうになったら九蛇海賊団を潰しに行こう。どのみち先が長い情勢にあるとは思えん。戦士として、オレが戦場で華々しく散らせて

やる。(※殺す気はない)

「偉大なる航路やグランドライン 風の海の航海は私がなんとかするが、問題は船だな。動力がある船でなければ厳しいぞ」

オレと同様、石から復活した父さんがそう言う。

幾多の海を越えて来た父さんがいれば百万人力だろう。

「オレが海賊を探して手に入れてくる。蒸気船とかがいいな。オレが蒸気機関に触れれば、石炭を使わずに能力で動かせる」

今日は色々と疲れたから休みたいが、マリージョア襲撃が広まらない内に済ませなければ。

「私も！ 私も何かお手伝いしたいです！」

ぴよんぴよん跳ねてアピールするトリスタン。

「そうだな……ではあの3人の世話とカウンセリング、オレが叩き潰す海賊が死なないように手当てでもしてくれ」

短いながらもこの3人と同じ境遇を経験し、なおかつ女性、適任だろう。特にハンコックは早急なカウンセリングが必要だ、オレのせいだ。

「前半はともかく、後半が物騒過ぎます……」

「不満そうだが、治療の練習になっていいだろう？ お前が腕のいい医者になってくれれば、オレも安心して敵を殲滅出来る」

「死者は蘇生出来ませんよ？」

「たしかある程度は心臓が止まっても、心肺蘇生出来たはずだ。心臓マッサージしながら「エレクトロ」を流して頑張れ。自害さえ許すな。首に縄をかけ、魂ごと墓地から引きずり戻して来い」

「無茶振りです……」

「そのくらいの心構えで頼むということだ。後でブラッシングするか」

「やります！ 私の前では誰も死なせません！」
いい返事だな。

☆☆☆☆

それから人数分の布団を購入し、トリスタンと一緒に3人のカウンセリングや彼女達にとつて未知の道具の説明、外に出て海賊との戦闘をすること数日、目当ての外輪蒸気船と食料、上陸は出来ないのポートも調達してから出航し、カラムベルト 風カラムベルトの海を航海中。母さんは店があるのと、帰る時にビブルカードの道標となるために来ていない。オレが今まで取引で手に入れてきた海楼石の手錠や網といった捕縛道具を、気休めに船底にすべて置いてあるが、それでも海王類が定期的に襲ってくるので、父さんが切り伏せている。

「口ゼ、お茶を入れて。私のために！」

「甘ったれるな、元居候！ 海賊になり、オレの許容範囲を越えれば、すぐさまお前を捕らえに行くからな！」

片方の拳を飛ばして蒸気機関に触れ、能力で船を動かしながら、もう片方の手でお茶を入れ、ハンコックの方に飛ばしてからそう言う。

オレが船を買う時は、機帆船（※推進力の動力として熱機関を併用した帆船）にするか。熱機関はDr. ベガパンクと取引して、オレの能力が前提のエネルギーコスト度外視で普及出来ない試作品でいいから、巨大な船を風がない日でも帆を使わず楽に動かせる特注品を作って貰おう。

「ふふふつ、そんなに私に海賊になって、あなたが会いに来る口実を作って欲しいの？（口ではなんだかんだ言っても、トリスタンの言った通りね。石化に耐えるのをお願いは聞いてくれる……不思議な人。それに、私を捕らえて側に置きたいって……！（※言ってますん）」

どうしてそうなった？ 一昨日に『海賊にならないなら、もう会うことはないだろう』と言ったのが、『だからオレが会いに行くためにも、海賊になつてくれ』に、脳内変換されたともいうのか？（※大正解）

こいつの前で気を抜くのはマズイ。まだオレと父さんが食らった【メロメロ甘風】メロウの効果は残っている。あの技、一度食らえば魅了される度に石になる危険なものだった。それを知って、戯れで石化しようとしてくる。心の底から喜んで。根に持たれているな……気絶させれば解けるだろうが、泣かせた負い目があるのに、海賊になる前から

これ以上は攻撃出来ん。父さんは気にしていないが、オレは二度と石化などする気はない。せめてオレの霸王色で気絶させられれば……今更何を言っても仕方がないが、避ければ良かった……！

「Chuu~♡」

Wink!☆

「くっ!? かわいらしくウインクしながら投げキッスをするな!」

危ない……爪の先が少し石化した。

そして舵を取っていた父さんが、オレの叫び声に振り向いてしまい全身をやられて、ハンコックが慌てて石化を解く。無理もない。思考を加速して他のことを考え抵抗出来るオレと違って父さんは一瞬、意識を保つ余裕がない。さっきの破壊力は脅威だった……。

「(やっぱり私の魅力が通じていないわけじゃない……たとえ恩人であつても、なんとかして、私のモノにしたいわね。そう、これはソニアやマリーの安全のためにも仕方ない! それに、姿も見せずに一度は私を虜にした……と言えなくもないロゼを、今度は私の虜にしひざまずかせ、私にそのすべてを捧げさせる……ああ……その輝かしい未来を想像するだけで心が躍るわ……! 私の虜にならないものなどこの世に存在しない! 何故なら……私が美しいから!!!」

今はオレも鉄の意志でなんとか耐えられているが、全身を石にされ生殺与奪を握られるくらいなら、自分の指の骨を折るなり爪を剥ぐなりして、痛みで紛らわせるか。手袋を外しておこう。相手が海賊なら攻撃出来るからこうも苦労しないのだが……いや、海賊になどなられる方が困るな。厄介な人物に厄介な能力が……余計なことをしてくれる、世界の創造主の末裔殿は。

「(なんであの2人、最初は一触即発だったのに、たった数日で仲良くなってるんでしょう?)」

「優しい時と怖い時で、落差の激しい子……(ずっと優しくして欲しい)」

「今は優しいけど、もし私達がロゼの譲れない一線を越えれば、また初日のあの時みたいになるわよ。海賊になるだけなら、まだその線上ね」

「本当なの、ソニア姉様？　ロゼ、私達には姉様あねに対してより優しいのに。一緒に旅しないかって誘われたじゃない（フィッツシャー・タイガーにロゼ、レイリー以外の男は今はまだ怖いからって断っちゃったけど……）」

「それは、姉様あねに対しては能力で石にされないようにしてるからと、私達がロゼの警告を聞き入れたからよ。あの子は線を越えれば、それがレイリーでも敵対するわよ」

「うそでしょ!?!　あの2人すごく仲良いじゃない!」

驚愕するマリーゴールドに、サンダーソニアが続ける。

「聞いたのよ、昨日2人がいる時に。レイリーが、『冥王』が海賊に復帰したらどうするつもりって。そしたら、『戦いたくはないが、オレの許容範囲を越えたら決闘デュエルを申込み、再び引退するまで何度でも叩き潰す』だそうよ」

「……レイリーは何て言ったの?」

『私はいつら以外と海賊をやる気はない。だがもしそうなくても、まだまだ私を越えさせんよ、親としても、師としても。その時は実力の違いを見せてやろう』ですって……その後2人で笑い合ってたわ」

「ソニア姉様……私、男がわからない……」

「フフフフ、奇遇ね、私もよ……とにかく、レイリーでさえそうするなら、私達が見逃されると思う?」

「無理そうね……このこと、姉様あねには?」

「言ったら、『ロゼは私の虜にするから、私に任せて安心していなさい!』と言っていたわ」

「……どちらかと言うと虜になっっているのは、姉様あねの方なんじゃないの……?（今もロゼに貰った、あの時の香水付けてるし……）」

マリーゴールドが、ロゼに絡みに行っているハンコックを見ながら
眩く。

「それ、姉様あねに言っちゃダメよ?　本人は気付いてない上認めないだ

ろうし、せっかく取り戻してくれた自信がどうなるか……とにかく、姉様あねがロゼの線を越えないように、舵取りをするのは私達よ。しつかりしないかね。発行されてる手配書のコピーは貰ったし、頭に入れておきましょうか。この連中と戦ってもロゼは何も言わないし、賞金額が強さのおおよその目安になるわ」

ロゼがコピーした、現在発行されている賞金首の手配書の束を出して、2人で見始める。

「多いわね……あの家に居させてもらった方が、気楽だったかもしれない」

「マリー、あなたは天竜人がいる、あの場所の近くですつと暮らして平気なの？ 私は無理ね」

「そうだった……背中クシの焼印といい、これから色々大変そうね」

「あの場所よりいいでしょ？ それに、もしアマゾン・リリーにいられなくなっても、あまり心配してないのよ。その時は少しの間我慢して、男のことも克服して、ロゼに3人一緒に連れてってもらいましょう」

「うふふ、実は私もそう思ってた」

「(天然のアメとムチじゃニョウ……あの3人の信用を得た上、今後の不安を取り除いてしまっておった。本にロゼがおなごであれば。九蛇クジヤ海賊団は消滅するじやろうが、アマゾン・リリーも……中枢カハムベルト(※世界政府のこと)の者達が風カハムベルトの海を行き来するようになった今、大海賊時代で海賊が増え続けるが故に九蛇クジヤは後回しクジヤにされているに過ぎニョウ。どうなることやら……これからの出来事次第では、最悪アマゾン・リリーを滅ぼそうとするロゼ者が増えるニョウ。手立てを考えねば。はあ、一番手っ取り早いのは……)」

「あつー！ あの島じゃないですか？」

オレがハンコックの石化に抗っている間に、煙突の上に座って周りを見ていたトリスタンが、大声を出しながら器用に下りてきた。オレが能力で動かしているが故に煙こそ出ていないものの、落ちたら危な

いだろうか……遭難した理由忘れたのか？

トリスタンの差した方向を見ると、たしかに豆粒みたいなのが見える。よく見つけたな。そしてトリスタンに視線を戻すと、オレの目の前で頭をこっちに向けている。褒めろということか……。

「よくやってくれた。この距離なら向こうから気付かれていないだろう。でも落ちると危ないから、あまり高い所に登るなよ？」

「キュルキュル♪ 善処します！」

トリスタンの頭を撫でながら褒め、少し注意するが、これは聞く気がないな。まあリスのミンクだし、高い所に登るのが好きなんだろう。落ちたら受け止めるか。その時はおやつ抜きな。

「羨ま……しくなどない！ 今に、今に私の美しさにさらに磨きみがをかけ、年上の魅力の前に頭こぶかを垂れて、『どうかその美しい髪に触れる栄誉をお与え下さい』と言わせてみせるわ！ だ、抱き着いたりしてるのに全然動じないのも、ロゼが今後成長しさえすれば！ ……トリスタン、尻尾まで振って……うれしそうに見せつけて……!!」

「!? な、何でしょう、今の……？」

「どうした？ 急に震えて？」

「いえ、少し悪寒が」

「シャボンディに比べて寒いからか？ これでも着ている」

コートコートを脱いで、トリスタンの肩にかける。

「ありがとうございます！」

「(ふふふっ、そういうことまでしてもらうのね、あなたは。いい子だと思っただけど、どうやらここまでのようね……残念だわ……)」

「(? ハンコックさん、震えてる……そうだ!) ハンコックさ〜ん！」

トリスタンがハンコックに駆け寄って行く。

「……何かしら？」

「これ、どうぞ！」

オレのコートをハンコックの肩にかけるトリスタン。

「!? な、何を……？」

「寒そうでしたので！ 代わりに抱き着かせて下さい！」

なんかハンコックにトリスタンが抱き着いている。仲良くなった

な……あの2人。トリスタンはともかく、ハンコックが意外にも受け入れている……いや、意外でもないか。彼女もまた妹を持つ者、初日も妹2人を守ろうとしていたし、面倒見が良い所があるんだな……まるで聖母のよう

ベリイッ!

「ぐあつ! あ、あ……ああつ……!」

痛い! 痛い!! 痛い!!!

い、今のは、危なかった! 何を、考えているんだ、オレはっ!!

人生を投了するつもりか!? 爪を、噛んで、1枚剥いで、なんとか防げた……! う、呻き声を、聞かれなかつただろうな!? はあ……はあ……島の方でも、見ておこう……ついでにこの爪を消し炭にするか。

「ハンコックはプライドを捨て、正面から思いの丈を伝えさえすれば、イケそうじゃニョウ……というかロゼよ、そこまでするほど嫌なニョか……あれは痛いじゃろうニョウ。レイリーなど、この数日でもう何度も石化して、ハンコックから興味をなくされておるニョに……それにしても、何故ハンコックはあれであの病を発症しておらニョのじゃ? 良いことではあるニョじゃが……」

「(トリスタン……とつてもいい子……ん? このコートの内ポケットの、ROSE^{ロゼ}って書かれた紙ってたしか……まさかロゼは、トリスタンの行動まで読んで、最初から私にこれを渡すために……なんという神算鬼謀! (※違います) そして恥ずかしがり屋さんね……素直になればいいのに!)」

「(やつぱり人肌の方があつたかいです〜!)」

九蛇海賊団に見つかる^{クツヤ}と面倒なことになるので、父さんが舵を切り迂回し、事前にニヨン婆から聞いた通り、女ヶ島本島より少し離れたルスカイナという無人島に着く。

ここからはボートで行くそうだ。

「どうしたの、ロゼ？　顔色を悪くして。ふふふつ、そんなに私と会えなくなるのが寂しいの？」

「そんなわけあるか。お前とは何の関係もないことだ。自分達の心配だけしていいばいい」

別れの挨拶代わりと、ハンコックにしつかりとオレの手を両手で握られ、爪を剥いだ指を手袋越しに押さえられ痛む……後でトリスタンに手当てしてもらおう。

「照れなくてもいいのに。必ずまた会えるわよ！」

「(ロゼが気取らせまいとしておる以上、わしは何も言えニユな……)」
「ニヨン婆、それにソニアとマリー……ハンコックも、体には気を付けてな。もし処刑されそうになったら家の電伝虫に連絡を頼む。オレが九蛇海賊団を一網打尽にして、インペルダウンに纏めてぶちこむから安心してくれ」

さつきは顔色のことを誤魔化すためにああ言ったが、寂しくなるな。男子禁制のアマゾン・リリーでは気軽に会えん。

「ええ、またね！」

「色々ありがとう！」

「心配性ね（気遣われた……！　それに今の言葉……一国を敵に回してでも私が欲しいという、素直じゃないロゼのプロポーズなのでは!?!（※NO）　そしてさつきのビブルカードはロゼに引き寄せられる性質を持つ、別名命の紙……つまり、一度私に命を預けて、私と一緒に奪い返し、オレのモノにするという無言の恋の宣戦布告!?!（※してません）　ふ、ふふふつ、受けて立ちましよう！　でも勝つのは私、あなたは絶対に私のモノにするわ!?!」

「う、うむ。そなたもあまり傷を作るでないぞ（じゃから不安なニョじゃよ。わしのビブルカードに異常があれば、この子は本当に実行に移すじやろう……その結果、この国が国家として機能しなくなったとしても。海賊を利用するならともかく、海賊がいなければ国民を守ることすら出来ニユ国に、国家としての価値はない、いや、そもそも国家ですらありはしないと考えている子じゃからな……残った海賊でない国民の面倒は見てくれるじやろうが。たとえ己がその国民から

憎悪の対象になろうとも。はあ……絶対に話を上手く纏めねば」

父さんとトリスタンも4人に別れの挨拶をして、再び出航した。せめて海賊になっても、オレの線を越えてくれるなよ。越えれば、今度は泣いても止まらないからな。

……あれ？ オレのビブルカードが少し減っている……過去を見ると、ハンコックが持つて行っていた。まあいいが、どうせニヨン婆がオレのビブルカードを持つているから、別に必要ないと思うぞ？

そして帰りの航海中。

「つ、爪を剥がしたア!? なんてそんなことをしちゃったんですかッ!?」

「壁にぶつけて割れたから、鬱陶うっとうしくなって全部剥がした」

「バクッツカじゃないですかッ!? もっと自分の体を大事にして下さい! しかも上から手袋なんてして……きれいにした後消毒して密封しますから、じっとして下さい。痛いですけど、動かないで下さいね!」

「……指だけ分離して渡すから、やってくれないか?」

そうすれば痛みを感じない。

「それだと機械になって、私では治せないからダメです! こんなことするおバカさんにはいいお薬です!」

「……わかった。頼む」

海軍本部のドクターみたいになったな、トリスタン……。

「(爪を剥いでハンコックの誘惑に耐えたか。プライドの高い女心がわかっておらんようだな。そうやって抗うから、ハンコックもより熱烈にお前を手に入れたくなっておるのだ。まったく、石化するくらいなんだと言うのだ……男が女に見惚れて何が悪い!!! 時が来れば、親の教育として、師の修行として、人間屋跡地ヒューマンショップに最近出来た、話題の風俗店にでも放り込むか。女も知らずに海の男にはなれんぞ、ロゼよ! 魅了されるのが嫌なら、魅了し返してしまえ! わはははは、心配いらん。何せ、お前は私の息子なのだからな)」

シャボンディ諸島、シャツキー☒SぼったくりBAR

「!? な、何かしら? 急に猛烈な寒気が……もしかしてロゼの身に何か?……?」

女ヶ島へボートで移動中の九蛇クツヤの4人

「姉様あね、その紙何なの? (すぐくうつとりした顔で見つめながら、私が勝つとか、まずは心の声を聞かれないようにとか、何のこと……?)」
ハンコックが手の上に乗せている紙を指差し、尋ねるサンダーソニア。
ア。

その紙には、ハンコックのキスマークが付いていた。

「ふふふつ、どれだけ離れていようとも、私とロゼをヴァージンロードで巡り合わせる、たとえ燃え上がる火の中だろうが荒れ狂う海の中だろうが物ともしない、幸せへの片道切符よ。いずれ……ロゼが18歳(※男性の結婚最低年齢)になれば、必ず私のモノになる。何故なら、そう……私が美しいから!!! (新婚生活のための新居を築く土地として、この国を手に入れますよう。私とロゼ、ソニアとマリーの薔薇色の未来の礎いしずえとなるのだから、この国の住民も喜んで身命を惜しまず私に奉仕するでしょう)」

そう言い、恍惚として、大切な宝物のように紙を見つめるハンコック。
ク。

「そ、そう……(姉様あねアツ?! この短い間に一体何があったの!? 新生活のための新居って何!?)」

「(姉様あねかわいい……なんでこれで、自分の状態に気付かないんだろう……? 恥ずかしかって隠さずに、素直にこのままロゼに迫ればいいのに……)」

「(あの病が発症しておらニユのは、ロゼを自分のモノに出来ると確信しておるからか。そしてハンコックを虜にしたのがロゼなら、この自信をつけさせたのもまたロゼ……おかしな星の元に生まれた子じやニョウ。わしにはあの子の未来がどうなるニョか、まるで見通せニユ……あの子、大丈夫なニョじゃろうか……?)」

“九蛇革命”

帰宅途中の航海で剥いだ爪が1日で生えて来て、トリスタンに非科学的だと言われたが、目の前で現に治っているのだから仕方ないだろう。家に帰ると、母さんが何かあつたんじやないかと頻りに聞いて来たので、トリスタンにオレが爪を剥いだことを喋られてしまった。この正直者……治ったんだからいいじやないか。まあ母さんも、なんだその程度か、とほつとしていたからいいか。やはり爪を剥ぐくらい何かあつた内に入らないよな。それにしても、ビブルカードに異常が出るようなことはなかったはずだが、一体何を想定していたんだ？

オレ達3人がシャボンデイに戻つてすぐ、ニヨン婆から電話がかかって来た。

オレとトリスタンしかいなかったのだからオレが出ると、

「ハンコックがアマゾン・リリーの皇帝になった!? あの女っ……!!」
バカな……早過ぎる……あいつ、こんなに早く海賊になるどころか、九蛇海賊団の船長になるとは、オレの警告を聞く気0だな。というかここまですぐに目立つような真似をすれば、顔を覚えられていれば天竜人に気付かれるんじゃないか? ハンコックには念入りにカウンセリングしたからもう大丈夫だとは思うが……とにかく、じつとしてはいられん。ニヨン婆のビブルカードは手元にある。今すぐ奴を決闘で拘束して、真意を問いただしに

『ま、待て! 落ち着かニユか! 話し合いの結果、わしの国外逃亡、及びわし達の帰国を許す交換条件がそれだったニヨじや!』

「何だど? ……皇帝の座を譲つて、現皇帝 “妖妃” に一体何のメリットがあるんだ?’」

“妖妃” アルスト・ロメリア、懸賞金1億8000万ベリーの賞金首。手配書の写真だと左目の周りに、大きく口を開けて獲物を飲み込もうとするヘビの刺青が入っていた。皇帝と船長、まとめて放棄して何をするつもりだ?’

『現皇帝は病に罹つておつたニヨじや。歴代の皇帝が何人も罹つて亡くなり、わし自身もその病が原因で島を飛び出し、なんとか生き長ら

えた』

ニヨン婆が島を出たのはそれが原因だったのか。

「つまり、妖妃^{ようひ}は病を治しに島を出たくて、次代の皇帝としてハンコックが選ばれたただけであって、彼女自身にオレの警告を無視するつもりはないと?」

『う、うむ。そういうことになるかニヨウ(実際はハンコックも国を取る気満々で、出会い頭^{がしち}に、「私は誰にも支配されないと勝負を挑み、現皇帝を蹴り倒したのがキツカケじゃったニヨじやが……余計なこととは言わニユでおこう)』

自分の命が懸っているなら、まあそういうこともあるか。

「それならもういい。それで、悪魔の実のことは大丈夫だったのか?それがなくても、いきなり現れた、まだ子供と言える歳の娘が皇帝になって、不満が出たりしていないのか?」

さつきから大勢の叫び声が聞こえるんだが……背中を晒し上げられたりしてないよな? その時は九蛇^{クヅヤ}海賊団を潰しても問題ないよな?

『それも問題ニヤい。闘技台で実力も悪魔の実の能力も披露し、蛇姫様とかゴルゴン三姉妹とか呼ばれて慕われておるよ(ロゼが耐えておったニヨで気付かなかったが……まさかあそこまでだったとは。そなた、あんなものを耐えておったニヨじやな。この国に、ハンコックを咎められる者などおらニユ。わしらが頑張るか……)』

本当に強さが重視されているのだな。姉さんが羨ましがりそうだな。

最近正式に実戦投入されたのだが、女だからと軽んじられているとか、いやらしい目で見られるとかセクハラされるとか愚痴をこぼされる。いやらしい目で見られるのはまあ美人だから仕方ない部分があるが、セクハラは訴えればいいんじゃないか? ヒナ告訴。軽んじられるのは実力や実績でこれからねじ伏せればいいじゃないか。おそろくただの嫉妬だ。

それでもやまないなら、海兵らしく直接訓練でボコボコにしてやればいい。オレの鞭、貸そうか?

「そうか、受け入れられているようで良かった。まあ思う所はあるが、

ひとまず皇帝即位おめでとうと伝えておいてくれ。海賊と敵対する場合なら手も貸せるし、まあ何もなくても、また連絡してくれ。母さん達にも、元気でやっているようだ伝えておく」

『うむ、ではまたニヤ』

それにしても歴代皇帝が死に至った病……女ヶ島特有の風土病か？ ニヨン婆もそうだが、あの三姉妹の誰かが罹ることがなければいいんだが……。

☆☆☆☆

カームベルト
風海、女ヶ島

突然の新皇帝の即位に、国中は大騒ぎとなった。新たな皇帝の治世に不安があつたからでも、若くして皇帝になった実力を疑問視したからでもない。

ただただ……彼女が美し過ぎた。

「アマゾン・リリー―新皇帝となった、ボア・ハンコックじゃ。手始めにわらわが狙う獲物は……王下七武海の座！ アマゾン・リリーは、九蛇海賊団は長きに渡り中枢（※世界政府のこと）の者達と争ってきた。このわらわの決定を疑問に思う者もおるであろう……だが！

カームベルト
中枢の者達が風海を渡る技術を編み出した今、従来通りのやり方だけでは不十分！ 部分的に手を結び、力を蓄えるのじゃ！ これは奴らへの屈服を意味するのではない……闘争が新たなステージへと移行したに過ぎぬ！ だが安心するがよい……そなた達はこれまで通りの……いや、これまで以上に幸福な生活になる。何故だかわかるか？ わらわ達三姉妹が怪物ゴルゴンを討ち取る強者だから？ 否！

ゴルゴンの呪いにより強き戦士の証としての力を得たから？ 否！ わらわが霸王色の覚醒者だから？ 否！ では何故じゃ？」

その美貌に誰もが見蕩れ、静まり返った国民に、凜とした、良く通る声で問いかける。堂々と胸を張ったその姿は、はるか高み、天上の領域から国民を見下ろし、自身はなおも高みを目指し、上を向いていた。

アマゾン・リリーでは強い者こそ美しい。そしてハンコックはこの国の誰よりも美しく、誰よりも強かった。だからこそ、たとえ今日即位したばかりの皇帝からの問いかけに対しても、国民の答えは誰もが同じ。

「二「キャ〜!!!」♡♡♡ 蛇姫様がお美しいからです〜!!!♡♡♡」

各々が、出せる限りの声で叫ぶ。

強く美しい、ボア・ハンコックという絶対正義の名の下に、国民の心は1つとなった。

自分達は、この方に奉仕するために生まれて来たのだ、と。

「その通り……わらわが美しいから!!! 遠征の準備を始めよ! 捕捉した海賊はすべて生け捕りにし、わらわの前に連れてくるのじゃ! 石像に変え保管し、七武海の席が空けば中枢にまとめて送りつけてやる! その時こそ、わらわ達九蛇クジヤの戦士の武名を、美しさを、全世界に轟トビかせてやる時じゃ!!!」

即位1日目にして、すでに皇帝として、船長としての風格を備え、老若男女を問わず魅了する暴力的なまでの美で君臨しているハンコックが、九蛇海賊団クジヤの船員、それぞれが一騎当千の誇り高き戦士達に号令を下すと、

「二「キャ〜!!!」♡♡♡ 仰せの通りに、ハンコック様〜!!!♡♡♡」

自身より年下の、だが自身より強く美しいハンコックに、命令を下されたことが至福の喜びであるかのような反応をし、新生九蛇海賊団クジヤの新たな船出に取り掛かる。

もしハンコックに死ぬと命じられれば、すぐさま自身の首を切り落とし果て、生きろと命じられれば、どのような死地からも生還し、たとえ死しても冥界の門番を切り殺し押し通り、再び現世へと、ハンコックの下へと舞い戻り、次の下知を待つであろう。

「二「ハンコック様、サンダーソニア様、マリーゴールド様、ゴルゴン三姉妹万歳!!!」♡♡♡ ハンコック様、蛇姫様、皇帝陛下万歳!!!♡♡♡」

ハンコックを、三姉妹を称え、国民達が熱狂の渦に巻き起こまれる。その渦の中心で、ハンコックは不敵に、そして妖しく笑っていた。

「ふふふつ、やはりわらわは美しい。この国の者達に限らず、全世界の誰もがわらわに跪き、すべてを献上する。ま、まあ？ 1人くらいわらわと同じ目線に立つ者もおるかもしれないが？ だがそれも今の話。待っておれ……自分をさらに磨き、直に会いにゆくぞ」

「す、凄いわね……こんな僅かな時間で、人心を完全に掌握したわ……良いこと言ってる風でも、その動機は私利私欲みれなのだけ……（抱き着かれたりしてたのに、最初以外はなんだかんだ石化にも耐えてたロゼって凄かったのね……ここの国民は全員、大人も子供も老人も、赤子でさえも、ただ立っているだけの姉様に、1人残らずメロメロになって石化しちやっただのに）」

「七武海になったら、ロゼも怒らない。海賊を海軍本部に連行する名目で会いにも行けるって言ったら、回りくどいこと言ってから受け入れてたわね」

「最初は七武海の1人を直接倒して入ろうとしてたけど、止まってくれて良かったわ……（その方法だと、たぶん一度賞金首にされるわね。どうせ世界政府公認の海賊、七武海を目指すなら、懸賞金は付かない方が私達にとって都合がいいわ）」

「今の演説も後半はともかく、前半はグロリオーサ様が姉様を説得するために仰っていた内容そのまんまだものね（というかこの人達、ちゃんと話を聞いてたのかしら？ ずっと目をハートにしてたけど……ちよつと怖いわね。たとえ石になったとしても、私達のお風呂を覗きに来そう……特に姉様の。背中のことがあるし、姉妹で交代で見張ってた方がいいのかも）」

「じゃが、皆に認められたのは間違いなくハンコックの、いや、蛇姫様自身の力じゃ」

姉の圧倒的美貌とカリスマで、たった1日で虜になった全国民にドン引きしながら、信じられないような目で見るサンダーソニアとマリィーゴールドの2人。

そこへ、ロゼとの連絡を終えて、小さな体でゆっくり歩いて近づいて来る、アマゾン・リリー先々代……いや、先々代皇帝グロリオー

サ。

「グロリオーサ様」

「ニヨン婆でよい……わしは皇帝ではなく、ただのニヨン婆じゃ。蛇姫様もそう呼んでおるじやろう」

「あの時姉様はまだ皇帝じゃなかったけどね……いきなり過ぎてびつくりしたわ」

女ヶ島にようがしまへボートで移動中、突然今までのグロリオーサへの殊勝な態度が嘘のように振る舞い始めた姉を思い出し、苦笑いするサンダーソニア。

私は美しい⇒誰よりも美しい⇒だから一番偉い（※九蛇クジヤ的発想）⇒誰に対しても様付け、敬語共に必要なし⇒ロゼが呼んでたしニヨン婆でいいか。

このような思考の経緯から、女ヶ島にようがしまにボートで移動中、突然ニヨン婆呼びになったのだが、3人には知る由もない。

「む？ ニヨン婆！ 電話が終わったのか!? まったく、わらわ達にあんな雑務をさせて、自分だけ連絡するなど……」

演説を終えたハンコックがグロリオーサに気付き、不満げに近づいて来る。

「無事島民に受け入れられているようで良かった、皇帝即位おめでとう、と言うておりました。流石に驚いていたようですニヤ」

「ふふふつ、わらわに平伏さぬ者などおらぬ……当然の結果じゃ」

「あと、何もなくてもまた連絡してくれじゃそうです。次は蛇姫様が連絡ニヤさいますか？」

「わらわは皇帝じゃぞ？ そんな時間があるものか……だ、だが？」

先々々々代皇帝のそなたが言うのであれば、聞き入れるのもやぶさかではないかもしれぬのう（まだ数日しか経っていないのに、もうわらわと話したがつて……!）」

「々がせん一個多いですじゃ……」

別の世界に没頭しているハンコックに、ツツコミを入れるグロリオーサ。

「（言葉と声だけでロゼをわらわの虜にするには……）そうじゃ！ あ

のゝなんといつたか？ シャツキーの店にあった、音楽を流す機械は」

「『シューでーぷれいやー』のことですかニヤ？」

「CDプレイヤーでしょ、ニヨン婆……」

珍妙な発音をしたグロリオーサに訂正を入れるマリーゴールド。

「わしはあの子達とは違い、外界の『はいてく』には疎いニヨじや。ボタンが多すぎてようわからニユ……」

「まあ発音はどっちでもよい。あれとCDを録音するものを調達するぞ！」

「気に入ったの、姉様あね？ あれすごいわよね。きれいな歌声が何度でも聞けて。私もいくつか好きな歌があるの」

「それもいいが、外界にはスターとかアイドルとか呼ばれている者がいるそうじゃ。わらわ達も国民から楽器の演奏が得意な者を集い歌を録音して、外界にCDを売り収入源とする！」

国を挙げて、九蛇クジャの芸能方面への進出を提案する現皇帝ボア・ハンコック。

「CDを売るって、どうやって売るのが？」

アマゾン・リリーは外界との交流がない国家、サンダーソニアの疑問ももつともである。通貨も外界で一般的に流通しているベリーではなく、独自のゴルという貨幣を発行している。

「七武海入りの条件として手伝えと政府に突き付けてやればよい。少しでもこちらの言い分が通りやすいように、より海賊を捕らえねばな」

「う、売れるのかしら？」

「歌などこれから練習すれば良いし、わらわ達の写真でもプリントすれば飛ぶように売れるじやろう。衣装も得意な者に作らせよう。たまにコンサートにようがしまを行い、ファンに貢ぎ物を献上させるのじゃ！（さらには女ヶ島にようがしまに今までなかった外界の技術を取り入れるために電話をするという、皇帝の責務として、国の発展のためにロゼと話す大義名分を得た上、自然な話題作りも可能な完璧な案……！ わ、わらわがただ声を聞きたいわけでは断じてないのじゃ！ か、歌詞の作成のた

めと、愛の言葉を囁き、逆に囁かれることも……」

高次元領域へと意識を羽ばたかせるハンコック。ファンに聞かれれば激怒され、即座に応援をやめフリスビーのごとくCDを投げつけられそうな発言だが、それも彼女であれば許される。

何故なら……ボア・ハンコックが美しいから!!!

「そ、そんなことをしたら、私達のことであの天竜人にバレてしまうんじゃない!?!」

「そ、そうよ、姉様! 考え直して!」

自分達にトラウマを植え付けた存在に気付かれることを恐れて、不安がる2人の妹達に、

「ふふふつ、安心しなさい、ソニア、マリー。あのような汚物に屈する私じゃないわ。たとえここまで来たとしても、あなた達にも私の国民にも、指一本触れさせないから!」

「(蛇姫様もまた王の資質、霸王色の覚醒者……いらニユ心配じゃったかニヨウ)」

「あ、姉様あ……!」

同じ地獄を経験したにも関わらず、その地獄を作り出したものにもったく臆さず、優しく微笑みかけてくる、人攫いに攫われる前の昔のように、自信に溢れ頼もしい長女。先ほどまで心ここに非ずだったとはとても思えないその姿に、感服する次女と三女。

後に、当然のように三姉妹を奴隷にしていた天竜人にバレて、

「七武海も男子禁制も知らんえ! ついでに奴隷を補充するえ!」

と再び三姉妹を、さらには国民達を奴隷にすべく、女ヶ島にまでやって来たが、奴隷時代のトラウマを完全に克服したハンコックによつて、一緒に乗って来た護衛ごと石像に変えられてしまい、拳句の果てには海王類のエサとして凧の海にポイされ、無事(?)海難事故扱いになる。

「では、機材を調達出来次第、九蛇海賊団の船員達とボイストレーニングを始めるぞ。ソニア、マリー。世界をわらわ達の歌声に酔わせてやるのじゃ!」

「わかったわ、姉様！」

「皆で一緒に頑張りましょう！」

「ほっほっほ、どれ、このわしも一肌脱ぐとしようかニョウ……！」

かつて皇帝として国をまとめ上げたが、その身を焦がし焼き尽くさんばかりの熱く滾る恋心により、やむなく途中で放棄したグロリオサが、今こそ祖国のために、皇帝になった自身のその自慢の美しさで再び世界に一花咲かせようとして、

「「あつ、ニヨン婆はいいわ。座つてて」」

ズザーツ！

しわしわの老婆があまり無理をするなど、心が1つになった三姉妹に盛大に出鼻を挫かれ、ずっこけた。

「失礼ニヤアツ!!!」

グロリオサが立ち上がり文句を言うが、三姉妹はこれからの話をしながら見向きもせず、すたすた先を歩いていった。

瑞々しく美しい花が多く咲くアマゾン・リリーに、たしかにかつては美しかったかもしれないが、もはや見る影もない枯れ花の出る幕など、最初から存在するはずがなかったのだ……。

皇帝即位から2年後にハンコックは、大量の海賊の石像と、アイドルとしてのデビューシングルCD『わらわにメロメロ♡』と、『わらわを七武海に入れ、アイドル活動をサポートせねば、次は貴様らがこうなる』というメッセージが書かれた、自分の口に人差し指を当てウインクをしている写真を、豪華特典としてCDケースに封入し、まとめて九蛇海賊団の旗を掲げた船に乗せてマリージョアに送りつけた。それにより、懸賞金0ベリーの王下七武海入り及び世界政府との契約による衝撃的なアイドルデビューを果たし、新王下七武海 海賊女帝（※命名海軍）"にして 貢ぎ物がないと会いに来てくれない海賊女帝系アイドル（※命名世界政府）" ボア・ハンコックの名前は、ニユースとして瞬く間に世界中に広まる。

さらには妹達とユニット『ゴルゴン三姉妹』、続けて九蛇海賊団の船員達とユニット『KJP48（※KuJaPirates48人の

略)〃を結成し、九蛇^{クジャ}の戦士は、〃歌って戦うアイドル戦士〃としてその名を全世界に轟かせ、群雄割拠の大海賊時代に強く美しく咲き誇った〃海賊アイドル〃として人類史に残ることになる。

そして前代未聞の九蛇^{クジャ}の〃海賊アイドル〃としての飛躍の陰には、男嫌い、政府嫌いのハンコックに声をかけるだけで、

『気安くわらわを呼ぶでないわ!』

と冷たく一喝されるにもかかわらず、

『出た! 蛇姫ちゃんの見下し過ぎのポーズだ!』

『見下し過ぎて逆に見上げてる!』

と歓声を上げ、最後の

『わらわに会いたくなったら、また貢ぎ物を用意して……?』

の一言を聞き、

『蛇姫ちゃんマジ女帝!!』

と喜んで貢ぎ物を献上する狂信者^{ファン}達の存在を聞いて驚き呆れ、苦虫を噛み潰したような顔で、

『どういう……ことだ? 海賊とは、何だ? いや、いい歌ではあつたが』

と頭を抱え、海賊という言葉のゲシユタルト崩壊を起こしそうになりながらも、

「当人達が納得している以上、暴力で略奪するよりはマシなはず……というか世界政府加盟国の国民、そしてあろうことか王族や貴族、天竜人に至るまで金品や物資を喜んで渡すなど、一体どうなっているんだ? 世界政府の先はもう長くないかもな……」

警告は守られている上ある意味平和と無理やり自分を納得させながら、こんな下らん理由で滅ぶならばいつそのこと滅んでしまえと、天竜人や自分の嫌いな国の貴族達にハンコック達のアイドル活動の宣伝を行うよう人知れず指示する、蛇姫ちゃんファンクラブ名誉会員第0号に任命され、毎回サイン入りCDやミュージカルのDVD等を真っ先に本人から手渡される賞金稼^{バウンティハンター}ぎがいたという。

“竜宮城にぐ招待”

タイガーさんのマリージュア襲撃から10日が経過し、海軍本部はざわついていたし、流石に異変があったことはシャボンディでも広がっているが、具体的なことは広まっておらず、まだ新聞でニュースにもなっていない。天竜人からの事情聴取が済んでいないのだろう。中には重傷を負った者もいるはずだし、衛兵からはタイガーさんの生死は不明。前代未聞の事件だ、軽はずみな報道はさせられないのだろう。世界政府の威信に関わる。

そういえば最近、というかハンコックが皇帝に即位したと聞いてから、毎朝電話がかかってくる。口調がちよつとニヨン婆に似ていた。皇帝になったのだから、それにふさわしい喋り方をするようにと言われ、変えたそうだ。

国の発展のためと、科学技術の話を聞かれて教えたりした。風の海カームセルトを渡るのに使った蒸気船を貰いたいそうなので、父さんの仕事場に保管中だ。海楼石も『わらわ、欲しいのじゃ……』と言われたが却下した。蒸気船はどうせ手放すつもりだったが、海軍から手に入れた物を流石に海賊に渡せるものか。

あとは、七武海入りを目指し、手土産に海賊の石像を量産しているらしく、オレの警告を守る気があるようで嬉しいので、どうぞご自由にお捕りと下さいといったところだな。

いくらアマゾン・リリーに覇気使いが大勢いるといっても、女しかない特殊な島、人口の増え方は緩やかだ。対して海軍は、大海賊時代で増える海賊を取り締まろうと毎年多くの海兵が入隊している。海賊行為による収入が大半の、外界との交流を持たない孤島……精鋭揃いの九蛇海賊団クジヤが遠征で留守の間を攻めて、数少ない畑や牧場ごと島を焼き払えつてしまえばひとたまりもないな。

まともな国ならともかく、代々海賊国家として海賊を出す国民を攻撃対象から外すほど甘い考えじゃない人は多い。オハラがダメならあそこもダメじゃないか？ このまま何もしなければ滅ぶのも時間の問題だろう。

七武海入りを目指すのは良い判断……ニヨン婆の進言か？ オレが頼まれて海軍で覇気使いを増やしていること等も知っているし。ハンコックも霸王色の覚醒者、上手くいけば延命出来るな。海楼石が欲しいなら七武海入りした後に、自分で取引するなりして手に入れてくれ。

それと、何でもCDを売りに出すそうで、機材を揃えるため必要な物を聞かれたり、意見を求められる……何故そんなことに？ まあ海賊行為ではないし反対する理由もないので、応援していると伝えたが、よくわからんことをする……毎回途中で倒れてソニアかマリーに代わるのだが、体調は大丈夫なのか？ 歴代皇帝が亡くなった病に罹ったんじゃないよな？ 忙しいのだろうか、ちゃんと休んだ方が良い。(※歌詞の愛の言葉を囁かれて、意識が昇天しただけです)

そして今日、タイガーさんとアラディンさんが我が家に訪れた。「いらつしやい。アラディンさんとはひさしぶり。2人共、そのマーク……」

タイガーさんは胸、アラディンさんは左脇腹に、赤い太陽のマークが刻まれている。たしかその場所は……

「これか？ おれ達のシンボルだ。おれやアラディン、奴隷にされた奴らに、おれ達と一緒に来てくれるっていう連中と海に出ることにした。奴隷だった者とそうでない者の区別がつかねエように、あの焼印の上から全員……同じ海賊団の証としてな」

「そうか。まあ気を付けてな」

「い、意外だな……10日前はタイガーさんと少し揉めたんだらう？」
「だからだ。その時すでに話して約束もした。それに海賊になるのも、まあ宣戦布告と言った時点で、あれだけで終わるつもりはないだろうなと思っていた」

タイガーさん達と天竜人の奴隷は奪還したし、シャボンディの人間屋は潰したが、それらは世界の闇のほんの一部にすぎない。天竜人以外に奴隷を持つ奴らなど腐っているほどいるし、その方が多いくらいだ。人間屋もシャボンディ以外に存在する。

人間屋のオークションで売られる寸前だった奴ら、ちゃんと光の中で生きていければいいんだが。オレと同じ能力者も何人かいた。闇の中に生きていたならば、オレが終わらせてやるのが筋すじだよな。

「ああ、これからも人を奴隷にすることを容認するつもりはない……ロゼ、お前と仲の良い海兵と戦い、傷付けることになっても」

「ふははっ……面白いことを言うなア……海賊？ 海軍を舐め過ぎだ」

それは聞き流せん。死にたいのか。

「(覇王色……いやあの時と違う、ただの気迫か……)」

「海賊が信念を海賊旗に掲げ命を懸けるように、海兵もまた自分の正義を背負い命を懸けて海賊と戦う。魚人の身体能力が生まれつき常人より優れている？ 覇氣が使えるようになった？ 水中戦や海上戦はたしかに魚人が優位だろうが、そんなことは彼らに勝てるなんの保障にもならん。体を鍛え抜いた屈強な海兵の身体能力は常人の10倍なんて生易しいものではないし、覇氣を使用者は海軍にはゴロゴロいる。正義のコートは簡単に落ちるようなものではない……オレへの気遣いなどせず、自分達の心配だけしているといい」

あの人達の身体能力が10倍なんてかわいいもののはずがない。覇氣だって、10日前に覚醒したタイガーさんはもちろん、オレが生まれる前から鍛錬を続けてきた人なんて大勢いる上、今なお覇氣使用の数は増えている。オレが覇氣を目覚めさせた人だっていることだしな。

今年入隊したヴェルゴさんは最初から使える。長時間の全身武装硬化も出来るし、強かったな……レアだけど、まあ悪魔の実の能力者ほどじゃない。生まれつき、鍛錬、戦闘のショック、誰かの覇王色を浴びた、覇氣覚醒の可能性が4つもある。何故か彼には避けられているけど。オレ、何かしたのだろうか？ 覚えはないが……まあいいか。

「……なんでお前、それで海軍に入るつもりないんだよ？ (入って欲しいわけじゃねエが……)」

「他にもやりたいことはあるから」

「ああ、農園か。去年に言ってたな」

「そういうことだ。ふははっ、他の理由も、家に入ればわかるかもな」
今日は父さんがいるし。」

その後、2人を家に招き入れて、話をした。色々。

「そういえばタイガーさん、すごいな。あの後海軍本部で試したけど、オレは正拳突きで五百枚しか瓦を割れなかった」

「……いや、充分なんじゃねエか？ お前いくつだよ」

「今年で9歳だ」

「やっぱ充分じゃねエか……」

【鉄塊片鱗テツカイヘンリン 黒腕こくわん】も使えばもつといくだろうが、実戦ならともかく、それで瓦割りの記録を更新しても意味ないしな。

そんな世間話の他にも、

「『冥王』シルバーズ・レイリー……聞いたことある名前、というかロジャー海賊団だったのか……」

「やはり、思う所があるかね？」

父さんが自分のことを明かした。

魚人島は大海賊時代の被害が大きいからな。いやまあ、大抵の島は大海賊時代前と比べて大きくなってきているのだが、偉大なる航路グランドドラインの後半に行こうとすると、海賊なら必ず通る場所だ。

「まあ多少は。だが、ロジャー海賊団に何かされたわけじゃねエからな」

「あんた達には恩がある。それに……正直、生きていたことへの驚きの方が強い……（海軍に入らない他の理由ってこれか……）」

仲違いせずに済んで何よりだ。

それ以外のオレにとつての懸念事項は……

「オレを竜宮城に招待したい？」

「ああ、オトヒメ王妃がお前に会ってみたいそうだ」

「……タイガーさん達って王族と面識があるのか？」

「旅で地上で見たことを島に戻る度に報告していてな、その縁だ」

「おれは、元ネプチューン軍の兵士だからな」

抜かった……この人達、オトヒメ王妃と交流があったのか。そして心の声を聞かれて、オレのことがバレたそう。たぶん去年のタイガーさん達のことも含めて知られている。

会ったことはないが、話は聞いている。オレと同様に生まれつき人の心がわかる、強い見聞色の使い手。正直会いたくない。生まれた時から人の心を聞いて、まともに育つはずがない。断言出来る。オレがそうだ!!! 何食わぬ顔で多くの秘密を抱え、バレたらアウトなことをしまくっている。

今回のこともただ会いたいただけのはずがない。もしオレが彼女の要求を満たさなければ、オレという人間ヒューマンシヨップ屋とマリージョアの襲撃犯を手土産に、政府に何かを要求する気か？ 王妃の座を手に入れていることから、権力欲が高いことが予想出来る。一体どんな要求されるのか……だが行かなければこのまま報告されるだけ……くつ、おのれえ……オトヒメ王妃の高笑いが聞こえるようだ。

おーほっほっほ！（※幻聴）

（※オトヒメは魚人や人魚と友達のロゼに、魚人島の人間との共存、魚人島を地上に移すために人間の意見を聞きたいだけです）

「私も魚人島に行ってみたいです！」

トリスタンが無邪気に言っ来て来るが、

「ダメだ！」

「何故ですか!? 私だってメイプルさんや、話に聞くシャーリーさんに会いに行きたいです！」

連れて行けるかっ！ これはオトヒメ王妃の罠だ！（※違います）
「お前、少し前に心を読まれたらどう？ 余計なことを知られるかもしれないし、今日の所は留守番して、声を隠す練習でもしていてくれ」
「気にするなって言ってくれたのに、気にしてるんじゃないですかあ……」

そんなに落ち込むな、魚人島のおかしを買って来るから……無事に、帰って来られたらな……。 （※無事お土産におかしを貰って帰って来ます）

☆☆☆☆

タイガーさん達は、船をコーティングして行くつもりだったみたいだが、あまり待たせて王妃様にしびれを切らされては困るので、装備品ごと全身を機械に変えて泳いで引っ張ってもらい、魚人島に向かった。空気など必要なし。クウイゴスの木片で作ったサンダルは、浮力が邪魔でスピードが遅くなるので、雨靴にした。このサンダル、もう今のオレの体重では水面に立つと足が少し水に浸かるが、まあサイズが合う内は使うか。沈まない分ないよりマシだ。

今どのくらいの深海なのだろうか？ 喋れないから聞けんが、周りが非常に暗い。たまに発光しているものがあるが、たぶんチヨウチンアンコウだな。何か大きな気配が周りにわんさかいる。海獣か海王類か……今2人とはぐれば、オレは丸呑みにされ、エサになりそうだな。運が良ければ気付かれなかもしれないかもしれんが、体を動かすことも出ず、ただ海底に沈んでいくだけ。呼吸は問題なくても誰かに引き上げられなければ、いずれ体が錆びて朽ち、緩やかな死を迎えるだろう。

しばらくすると、大きな光が見えてきた。光の方をよく見ると、巨大なシャボンが鏡餅のように2段に積まれており、下層には色鮮やかなサンゴ礁が見える。上層に見える城が竜宮城だな。そしてそのシャボンの周りに巨大な樹の根が生えている。

海底1万メートルの魚人島に光があるのは、陽樹イブのおかげだと聞いている。地上から魚人島に太陽の光と空気を伝えているという樹だ。

魚人島に無事到着。きれいだ、海獣や海王類も周りを泳いでいるけど。帰ったら壁に映して見せてやるか。いざとなったら手足の1, 2本を爆弾に変えて自爆して逃走、体を見えなくして、おかしを代金を置いて勝手に持って行ったりしながら潜伏して、海賊のコーティング船を奪って帰ろう。自分の体を爆破して体が元に戻るかはわからないが(※元に戻りません)、それで死んだことに出来るなら安い。海上にさえ浮上出来ればいいから、いざとなればクウイゴスの木片を体に

括り付けてシャボンの外に出るのも、最後の手段としてはアリだな。場所的に島のどこかに必ずあるはず。

魚人島の南東に位置する港町、サンゴが丘に上陸する。大きな貝を屋根にした変わった家屋が建ち並んでいる。陸地に着いたことだし、これでようやく能力を解除出来るな。まずは音速移動で体の海水を落とす。

周りの人から遠巻きに見られているな……疑問、不信、恐怖、怒り、そして少しの好奇心といったところ。シャボンデイでのオレの扱いと大して変わらないな。タイガーさん達が人間と一緒にいるのが気になるようだ。

シャボンを付けて宙を泳ぐ魚に乗って、上部のシャボンへ通じる連絡廊を進み、いくつもの門を抜け、竜宮城へ向かう。城の後ろには大きく口を開けた竜の像が建っていてかっこいい。だが油断は出来ん。この国の牙がいつオレに突き立てられるかわからないのだから……。

城内に入り、玉座の間に着く。

「ようこそ、リュウグウ王国へ。わしがネプチューンじゃもん！」

頭の上に王冠を乗せ、オレンジ色のふさふさの髪と髭を蓄えた「海の大騎士」の異名を持つ王に挨拶される。でかいな。何メートルあるんだ？ タイガーさんの倍はあるぞ。

「お初にお目にかかれて光栄です。私はロゼと申します。本日はお招き頂き、ありがとうございます」

「うむ。ゆるりとしてゆけ、客人よ」

「(口調こそ丁寧だが全然遜^{へりくだ}ってねエ……胸を張り過ぎだ)」

「(なんて敬語の似合わない奴なんだ……むしろ腹が立つ、慇懃無礼だな)」

少しの言葉遣いで難癖を付けられ首を刎ねられては堪らないので、少々嫌味なくらい丁寧に話す。くつ、これが権力つてやつか……。 (※ネプチューンは子供相手にそのくらいで目くじらを立てませんし、首も刎ねません)

「(普段はこんな口調じゃないの？ 緊張してるのかしら?) 初めまして、私がオトヒメよ。まさかその日の内に来てくれるとは思わなかつ

たわ」

金髪の髪を頭の上で結った、鱗模様のような服を着た王妃様に話しかけられる。この人がそうか。とても若く見えるが、立って歩いているということは、服で隠れて見えないが尾ひれが

「どうかしました？」

オトヒメ王妃はにっこり笑っている……だがオレの生存本能が確実に警鐘を鳴らしている。

それ以上は止めておけ!! と。

「いえ、友人達よりお噂はかねがね……実際に見ると噂以上にお美しいですね」

「あらお上手ね、ありがとう」

ふう、なんとか虎口を脱したな。

これ以上このことについて考えるのはよそう。人の秘密を探るのは趣味じゃないし、女の歳はアンタツチャブルだそうだ。

オレ、母さんの年齢も知らんからな……大分若いし、オレが今年で9歳だから……30くらいか? (※今年で49歳の美魔女です)

「あとは、魚人島を地上に移すために演説をしていると」

「それについて意見を聞きたかったの。あなたはどう思う?」

なんだ、そのくらいのことか。

「私が申すまでもなく、人間の魚人達への認識についてはご理解されていることと存じます。しかし、すべての国や島で偏見や差別意識が根付いているわけではありません。私も直接訪れたわけではありませんが、異なる人種を受け入れ共存している場所もあります」

天竜人やいくつかの国の貴族層では、魚人や人魚を魚類と教育している所も多くあるみたいだが、すべてがそうじゃない。

同じ偉大なる航路グランドラインの国であれば、新世界の平和の象徴と呼ばれるドレスローザでは、小人族のトンタッタと共存しているそうだ。それはマリージョアで、タイガーさんも小人族から聞いたはず。あの人小人族からリク王やノーランドみたいだと言われていたからな。

モンブラン・ノーランドの名をあの場所で耳にすることになるとは……当時島を荒らしていた密猟者からノーランドに救われたのだそ

うだ。たしか北の海発行の2500万ベリーの賞金首として、モンブランの姓を持つ栗頭の手配書があったが……まさかな。

「ですが恐れながら、そういう国と友好を結ぶためには別の障害が、今のこの国にはあります」

「……何かしら？」

「この国が、大海賊、四皇『白ひげ』の『ナワバリ』だということですよ。この国が『ナワバリ』になった背景を考慮しても、『白ひげ』の名前の影響力は、良くも悪くも大き過ぎます。普通の国は海賊の存在を容認出来ません」

『白ひげ』の縄張りになっても加盟国のままなのは、海賊の捕縛のためにリュウグウ王国の国民に被害を出した負い目もあるのだろうが、まともな国なら、海賊の縄張りになっている国との友好など願わずに下げだろう。リスクが高いし、ましてや『白ひげ』……ありえん。

『かいぞくしろひげ♪オニよりこわい♪』、子供でも知っている。そんな大海賊のことを気にせず、魚人島と友好を結べる場所が果たしてあるのか？ 世界政府に睨まれたり、四皇同士の勢力争いに自国民が巻き込まれる可能性だってあるというのに。

海賊の被害から魚人島の住民を守るためには良い効果を発揮するだろうが、国同士の友好にはデメリットでしかない。海賊の、無法者の縄張りになるといふのはそういうことだ。

ハンコックが皇帝となったアマゾン・リリーなら、あの三姉妹のタイガーさんへの恩もあつて、魚人に対して差別意識などない……といふかハンコック達は女ヶ島にようがしまの外で初めて男を見たらしいから、あそこに住人は魚人や人魚を知ってもいない可能性が高いが、あそこも海賊国家、友好を結んでリュウグウ王国が世界政府に睨まれるのは想像に難くない。加盟国からの除名もありえる。

せめてハンコックが七武海入りすればぎりぎり……いや七武海と四皇が表立って友好はマズイ。海軍本部、王下七武海、四皇の三大勢力の均衡を乱すと判断されれば、今度はハンコックが七武海を除名されかねん。それにあそこは男子禁制という障害もある。どちらにし

でも問題はあるな。

海賊の縄張りでも相手を選ばなければ手を結べる相手はいるだろうが、この人達、そういう世界とは縁がなさそうだし、あまり友達の国にアンダーグラウンドの住人が出入りするようになるのは避けて欲しい。

たとえば、四皇「ビッグ・マム」の支配する万^{トットランド}国は、様々な人種が住んでいるらしいが、海賊業界一の情報力と言われるだけあり様々な裏社会の帝王達のコネクションがあり、巨大なマーケットを構築している。

まず、ビッグマム海賊団に歯向かった者は基本的に殺され、その親類縁者は捕らえられ、「福の神」ル・フェルドが闇金で破産させ身売りすることになった者達と一緒に、「深層海流」ウミットの海運会社の船に乗せ運ばれ、死体は使える臓器を臓器販売業者ジグラが売り、売れる部位がなくなった死体は大手葬儀屋ドラッグ・ピエクロにより闇の中に葬られ、「隠匿師」ギバーソンの倉庫業という隠語で行われている人間^{ヒューマンショップ}屋で奴隷として売られる。不都合な情報は『海の戦士ソラ』も連載している世界経済新聞社社長、「ビッグ・ニュース」モルガンズにより情報操作のアフターケアまで完備している。

間違っても関わって欲しくない世界だ。

「ネプチューン王と「白ひげ」が友人だというのは伺っていますが、であるならば尚のこと、いつまでも厚意に甘え守られ続けるのは、却って友情を損なうのではありませんか？」

「……はつきり言う子供なんじゃもん（右大臣と左大臣みたいなんじゃないもん……あの2人の小言もきついが、子供に諭されるのもつらい……）」

「でも参考になったわ。またお話ししてくれる？」

意外だ。ネプチューン王はへこんでいるし、そろそろ首を刎ねられるかと思っただが……。

「……よろしいのですか？ お気付きかと存じますが、私は海賊が嫌いです。今は「白ひげ」と争うつもりなんてありませんが、未来のこ

とまでわかりませんか？ 私バウンティハンターが賞金稼ぎで、相手が海賊の賞金首である限り。たとえその海賊がこの国を守っていたとしても」

オレには「冥王」の息子という秘密がある。白ひげ海賊団と何度も殺し合ったロジャー海賊団の副船長、「海賊王の右腕」の息子という秘密が。それを知られて「白ひげ」本人や海賊団の隊長、船員、傘下の海賊達がオレを殺そうとすれば、戦わざるを得ない。

「そんな思う所があるあなたと仲良くなれたならば、魚人島と人間の友好の道も、少し進むと思わない？」

微笑みながらそう言われた。

言葉遣いこそ気を付けたものの、結構辛辣なことを言ったつもりなんだが、芯が強い人だな……ひよつとして、この人ただの良い人なのでは？ そのとおりでございます(※Exa c t r y)

「それと、私には普段通りの話し方をお願いね。無理してる上に、あまり似合っていないみたいだから(それにしてもこの子の声は聞こえないわね……たまに会う白ひげ海賊団の人と同じように)」

解せん……天竜人に取り入ろうとしていた人の口調を、完璧にトレスしたはずなんだがな。

「そうだ！ 良かったら、子供達と会って行かない？ あなたと年も近そうだし、地上のことを教えて欲しいの」

「わかりま……わかった。オレの能力を使い、映像として見せることも可能だ」

「あら、そんなこと出来るの？ あの子達も喜びそうだわ！」

この人まったく感情を隠さないな……全部表情にそのまま出してる。そんなに取り繕って喋るのはダメか。まあこの方が楽だから助かるけど。これは本当に話がしたかっただけみたいだな。取り越し苦労だったようだ。

「というか王妃様？ 頬を膨らませて睨みつけるって、そんな子供みたいなかわいいことを30過ぎたゾクツ!!」

「何か？」

「いや、あなた方の子供なら、それはよく出来た子供なのだろうなと」

「ええ、そうなのよ！この前も……」

危機を逃れたか……迂闊なことを考えられないから、さつきまでとは別の意味で気が抜けんな……。

その後子供部屋に案内された。タイガーさんとアラデインさんはネプチューン王と話している。

長男のフカザメの人魚フカボシ王子はオレと同じ年で、ノジコよりは濃く、アインよりは薄い青色の髪を肩につくくらい伸ばしている。

1つ下の次男のリユウボシ王子はリユウグウノツカイの人魚で、オレンジの髪を長く伸ばし、なびかせている。歌が得意だそうだ。

オレの4つ下の三男のマンボシ王子はアカマンボウの人魚で、帽子を被り茶色い髪を伸ばし、耳の位置にヒレが生えている。ダンスが得意なようだ。

末っ子のしらほし姫はまだ1歳で、ピンクの髪のまだ鼻を垂らした赤子だが、オレや3兄弟どころか母親より大きい。ビッグキスの人魚だそうだ。近付いたらいきなり体を驚掴わしづかみにされ、口に入れられた。オトヒメ王妃が、「コラッ！ ペツしなさい、ペツ！」と叱ると出してくれたが、体が睡でベトベトだ……。

貸してもらったタオルで体を拭いてから、人間社会の勉強としてオレの能力で映像を見せる。とりあえずオレが見せても問題ないと判断した範囲で。裏社会科学見学はまだ早いだろう。一応、底辺に近い闇は叩き潰したことだし。

中でも太陽と遊園地が気に入ったようだ。遊園地はわかるが太陽もか。

「そんなに気に入ったのか？」

「ああ、初めて見た」

「いつかこの目で直接見たいな……」

「本当にキレーだなー」

「わたくし、タイヨウとけっこんけっこんしたいです！ タイプおタイプです！」

たしかにこの海底には太陽の光は届かないな。それに、タイガーさん達のシンボルも太陽だった。ここの人達にとっては未知の、だからこそ憧れるものなのか。

赤子のしらほし姫まで喜んでいゝ。心を読んだところで、「！すで
プイタ　！すでいたしんこつけどウヨイタ、しくたわ」と相変わら
ず意味不明だが。

なんかナミちゃんを思い出すな……あの3人、元気にやっているだ
ろうか？

イーストブルー
東の海、コノミ諸島、ココヤシ村

「うわーん！」

「コオ〜ラッ！　なんであの子達泣かしたのよ？　ノジコ、こんなこ
とをするためにあんた強くなりたかつたの？」

「子供のすることだからいいわよ、ベルメール。元気な証拠よ」

ノジコとナミの姉妹が泣かした子供達とその親の前で、2人を叱る
ベルメール。

「だつてえ〜！」

「あいつら、あたし達のみかんはマズイって」

「こんのがキヤアツ!!」

「コラ、ベルメール！」

自分達のみかんを貶され、まるで子供のように怒り、そして叱られ
るベルメールいい大人。

ココヤシ村は今日も平和だった。

グランドライン
偉大なる航路、リュウグウ王国、竜宮城

「太陽はオレだけでは無理だが、遊園地ならなんとか出来るかもな」

「本当か!？」

「ああ、時間はかかるが」

どのみちしらほし姫のサイズではシャボンディパークのは無理だ
し、オレの能力次第で……出来れば協力者が欲しいな。腕のいい大工
が。たしかここには……材料はいつも通りに

「嘘ついたらハリセンボン飲まずぞ!」

「絶対に実現するから、それはしまつてくれ」

マンボシ王子よ、何故魚のハリセンボンの木彫りなど持っている……? 嘘ついたら飲まずのは針千本ではないのか。これがリュウグウ王国のジョークなのか。

「(皆あんなに目を輝かせて……来てもらって良かったわ)」

王子達と指切りして、今は城を出てタイガーさん達と魚人街に移動している。

なんか、すごく良い人達だったな……奴隷も連れていないし、本当にタメ口を聞いても、発砲も斬首もしないなんて思わなかった。あんな権力者、話には聞いても見るのは初めてだ。能力でいつでも首を分離する準備はしていたんだが。お土産におかしまでシャボンで包んでもらってしまったし……他に何か出来んものか。

そうだ。魚人島が海賊の縄張りになっている現状が気に入らんから、オレが自分達で国を守るよう鍛えればいい。王族の3兄弟とも組手をしないか誘ってみようか。

ふっはっはっ、今まで海底ということもあり来たことがなかったが、俄然やる気が出てきた。あれだけ言えばオレを“白ひげ”の関係者と会わせようとはしないだろうし、シャボンデイの用事もひとまず終わって時間の余裕が出来た。たまに来て訓練にも混ざるか。決闘デュエルを挑まれて逃げてはネプチューン軍の名折れ、受けざるを得まい。人間の海賊と戦う機会が多いからか、町よりもこの城の方がオレへの警戒心が強かった。人間が気に入らないのであれば、オレを決闘デュエルに託かこつけて痛めつければいい、出来るものなら。

父さん達に教わった戦い方は、少々国の軍隊の戦法としてはマズイか。相手を言葉で挑発して見聞色を乱す、とかあるからな。ゼファーさん達に仕込まれた海軍式訓練を披露するでしょう。加盟国だし問題ないはずだ。

海兵たる者、拳と背中で語るもの。オレは海兵ではなく、正義を背負っていないので、その分拳で語るか。これから存分に語り合おうで

はないか。ン熱血指導だア！

“魚人街の人々”

再び全身を機械に変えて引っ張ってもらい、魚人島を出る。

タイガーさん達の出身地である魚人街は、魚人島の外の深海地区にあるらしい。

下に泳いですぐに着いたが……

「なあ、あの馬鹿でかい船は何なんだ？ 魚人島の半分くらいあるぞ」

「ああ、あれは“ノア”だ。来たるべき時まで決して動かさちやいけねエって話だ」

「ネプチューン王が言うには、大昔に魚人島民総出で造った“約束の方舟”なんだそうだ」

「ほう……オレが生きている間に、あのデカブツが動く日は来るのかな」

興味あるな。動かすなと言っても、そもそもこんな帆もない船を、一体どうやって動かすつもりなのか。

「さてと、あいつらがいる場所に行くぞ」

ここでも周りから見られるが、こっちは魚人島よりさらにわかりやすいな。大体敵意で少し困惑。よほど魚人と人魚と人間が一緒にいるのが不思議らしい。

しばらく歩いて進むと、船首が魚の船が見えてきた。帆に太陽のマーク、あれがこの人達の海賊船か。

「大アニキ、もう準備は出来てるぜ！ ……その人間のガキは何なんだ？」

ギザギザした長い鼻の魚人の男に指差される。

わかりやすく不機嫌だ。ふははっ！ 敵意も牙も剥き出しで、いっそ清々しい。

「前に話しただろ。おれとアラディンが世話になった、ハチ達が入りしてる所のロゼだ」

「ああ、能力者だっていう。チツ、あいつらも酔狂なことをしやがる……人間の、海に嫌われた憐れなガキにわざわざ会うなんざ」

「お前は人のことを言えるような立場か、チンピラ」

口から大きな2つの牙が見える、強面の魚人の男が言い捨てた。

言い方こそオレを弁護するようだが、こちらも別に歓迎しているわけではなさそうだ。追い出す気はないが進んで仲良くする気もないといった所。まあオレもそうだからお互い様だな。

「ニユ？ おくロゼ！ タイガーさん達が呼びに行ったのは知っていたが、随分早いな」

「船をコーティングするだけでも、もったかかるはずなんやけどなア」
はっちゃんとういりーさんの、結構会う2人だな。

オレも2人に近寄って行く。

「船に乗らず、引っ張って泳いでもらったからな。2人もタイガーさん達と行くのか？」

「おれはそうだな」

「わいは残ることにしたわ。何人も一気におらんようになったら、この治安が心配やからな」

「そうか、良かった。はっちゃんなら、改めてオレが言わなくてもわかるよな？」

オレが海賊に対して、どういう態度を取っているか知っているはずだ。見たこともある。

「ニユ、おれアタイガーさんを手伝ってエだけだ」

大丈夫そうだな。

「では気を付けて。オレの基準はともかく、海賊の罪は死ぬまで消えん。手配されれば尚更な」

「(レイリーのことか)ニユ。ウイリーさん、ロゼ、おれがいない間、メイプルのこと任せて良いか？」

「ああ、もちろん」

「わいもハーケンさんに頼まれたし、そのつもりや」

「ハーケンさんって誰だ？」

初めて聞いた。

「言ってなかったな」

「メイプルの亡くなった親父さんや。クラークの人魚の、えらい体がデカイ人やった」

「やっぱり他界していたんだな……」

魚人街に住んでいるから、そうだろうと思っていたが。

クラークンか……実物を見たことなどないが、かなり大きなタコかイカのような見た目と聞く。北極に住んでいるとか。

メイプルと大分違うな。あいつは小さいミナミハナイカ（※約6〜8cm）の人魚だからか、人魚なのに足があり尾ひれじゃないからか、小さいイカちゃんだ。5歳下のオレと変わらん。はっちゃんも急に大きくなったから、これから伸びるかもしれないが。

「ああ、メイプルも顔を覚えちゃいねエだろうが、生まれたばかりのあいつを連れて、重傷でこの魚人街までやって来たんだ」

「そんなの怪我で息を引き取ってもうたが……」

あいつにそんな過去がなあ。

2人と話しながら、タイガーさん達のいる所に戻る。

「たしか、そっちがジンベエさんで、こっちがアーロンで合っていたよな？ ウイリーさん」

「ああ、せやな」

「ちよつと待て、クソガキ！ なんでおれだけ呼び捨てなんだ!？」

何かと思えば……そんなの決まっているだろう。

「海賊だから。敬意が必要だとも？」

「タイの大アニキやジンベエのアニキもそうだろうが!」

「まだ旗揚げしたばかりだから海賊扱いしていないだけだ。海に出れば2人にもさん付けするつもりはない。お前は以前から海賊を名乗っていたのだから、呼び捨てで問題ないだろう」

オレはこの男をそんなに嫌っていない……むしろ、海賊狩りをしてることと昔メイプルの毒を食らってもおかしを食べ続けてくれていた話を聞いていることもあり、海賊にしては評価が高いくらいだ。

だがそれはそれ、これはこれだ。今年になつて初めて例外も出来てしまったが、基本的に海賊と仲良くする気はない。

「ふん、アーロン。お前、自分が人間を傷付けまくっておるのに、人間に好かれるはずがないじやろう」

ジンベエさんが何か的外れな勘違いをしているな。

「いや、何故オレが海賊を倒すことを咎めねばならん？ オレは賞金稼ぎ、海賊等の賞金首を捕らえて金を得ている者。ここまで来るってことはアーロンが倒していたのはほぼ海賊、人間だろうが好きに潰せばいいだろう」

オトヒメ王妃の人間との共存のための活動を邪魔していることも聞いていたが、もういなくなるのだからわざわざ文句を言わなくてもいいだろう。

「……変わったガキじゃのオ……同じ人間がどうなってもいいと？」
「ジンベエさん。あんたはさつきアーロンのことをチンピラと呼んでいたけど、魚人だからって理由で同じだと思われたいのか？」
「ああ、なるほどのオ……ごめんじゃな（オトヒメ王妃が演説でそんなことを言うておったのオ。わしらは人間の一部のことしか知らんと）」

「おいアニキ、そりやねエだろ!？」

一緒にされたくないのだろう。オレもだ。海賊を一番出す種族は人間だからな。人口が一番多いから。

「あつ、やつぱりいるじゃなイカ。おーい！」

「ちよ、ちよつとメイプル！ 今はマズイって！ 兄さんがいる所じゃ……！」

聞き慣れた声の友達と、フードを被り、黒い前髪で右目が隠れた、両手で水晶玉を抱えた青い瞳の人魚が、メイプルに連れられ近づいて来る。

「ロゼ！ こつちがよく話してたシャーリーでゲソ。実は今度一緒にシャボンデイの家に行きたくて」

「ああん!! ダメだダメだ！ 今はまだ子供だから連れてけねエが、シャーリーはおれと一緒に、兄妹仲良く人間共をブチ殺すんだよオ！」

話を聞いてたアーロンが血相を変えて物騒なことを言う。

嫌な仲良死兄妹だな。シャーリーさんにその気はなさそうだが。

「お前まだそないなこと言うとか。ええ加減諦めエや。しつこい奴ヤなア」

「うるせエ！ てめエは関係ねエだろうが！ すつこんでろ！」

「(やつぱりこうなった。だから言ったのに……)で、でも兄さん……そんなことしてたらインペルダウンに入れられたり、麦わら帽子を被った人に鼻を折られたりするって、私の占いで出てるし……」

シャーリーさんの占いはよく当たると聞いているが、すごく具体的だな……麦わら帽子と言えば、死人を除けば「赤髪」が有名だが、四皇にケンカを売るのが。無謀じゃないか？ せめてタイガーさんやはつちちゃんと関係ない所でやってくれ。そして鼻を折る程度で済ませてくれるのか……。

「シャーハツハツハ！ 心配するな、水中で息も出来ねエ下等種族の人間なんざ、おれが皆殺しにしてやりやアいいんだよ！」

「どうせアーロンさんいなくなつちやうんだからいいじゃないか！」

「家の教育方針、人間撲滅に口出しすんじゃないやねエ！」

それは家庭の教育方針では断じてない。

千年抗争の最中の手長族と足長族なら、国の教育方針に互いの殲滅を掲げているかもしれないが。ハーフには生き辛い世の中だ。

「おい、アーロン！ おれは何度も殺すなど言っているはずだぞ、たとえ相手が誰であつてもだ！」

「何を甘エことを言つてんだ、大アニキ！ そんな海賊、聞いたことねエぜ！」

タイガーさんとアーロンが言い争っている。平行線で埒が明かな。オレとしてはタイガーさんの言うことの方が好みだし、こういう時は

「おい、決闘しろよ」
デユエル

ビクツツ!!

オレの言葉に、ウイリーさん、はつちちゃん、メイプルの3人の体が震える。

安心してくれ、そつちじゃない……カードなんて今は持っていないし。

「あアン？ 下等種族の能力者のガキがこのおれと戦うだとオ？ シヤハハハハ！ 自殺ならさっさとシヤボンから出たらどうだア？」

「オレが勝ったら、今後シャーリーの好きにさせる。貴様が勝ったら、オレはシャーリーの訪問を今後一切断る。気絶するか死んだ方の負けでどうだ？」

まあオレが断ったところで、父さん達の誰かが認めればあの家には来られるので、実質シャーリーさんは何も賭けていない。

アーロンはオレを殺そうとするだろうから、賭け金はオレの命だけ。

まあそんなことはどうでもいい。勝つのはオレだ。

「ちよ、ちよつと!?! 兄さんは強いし、人間が大嫌いなんだよ? そんなこと言ったら」

「(あかんシャーリー……それ逆効果や。あいつ妹に強い言われてすつかりその気になつとる。まあ平気やろ、トランプとかやない分まだマシや。あれは理不尽で心折れるわ……)」

「ほオ? 言っておくが、ガキだからって人間相手に手加減なんざする気はねエぞ、おれア。降参なんか受け付けねエし、気絶程度で済ませると思うなよ?」

乗って来た、話が手っ取り早くて助かるな。凶悪な面だ、自分が負けるなんて微塵も考えていない。オレも考えてなどいないが。

こつちを向いたタイガーさんに目配せする。カモにするなら今だ。
「脅しのつもりか? 構わん。海賊との戦いに命の保証などないのは当たり前のことだ。ふははっ、下等種族のこのオレの心配なんて随分とお優しいなア、上等種族様は? 殺したければ殺せ。貴様に出来るものならな」

「アーロン、じゃあおれとも賭けを追加しねエか? お前が勝てば、おれはもう何も言わねエ。お前が負ければ、言う通りにしてもらおう(任せた。おれに負けた所で、こいつは堪えねエ)」

オレの意図が伝わったようで何よりだ。

「いいのか? はっ、願ったり叶ったりだ!」

決まりだな。ゴークルを付ける。

「タイガーさんまで……止めないと!」

「大丈夫じゃないか? ほら、危ないから離れておくでゲソ」

メイプルが8本の腕でシャーリーさんの体を軽く持ち上げる。

「下ろしておくれよ、メイプル！ あの子、あんたの友達じゃなかったのかい!？」

「だから平気でゲソ。カードゲームじゃないから大丈夫」

「なんでそうなるんだいっ!? どう考えてもカードゲームの方が平和だろ!？」

「それはない（シャーリーもロゼも初期手札がおかしいでゲソ……）」
シャーリーさんが水晶玉を抱えたまま、尾ひれをピチピチ跳ねさせてもがいていたが、メイプルに遠くに連れて行かれた。

「シャーハッハッハ！ 下等な人間の！ 泳げねエガキが！ 生意気言っでンじゃねエ!!」

2人が充分離れた距離に移動してから、アーンが向かって来る。

オレの首を噛み千切る気か。

「ほら、どうぞ？ もっとも、自慢の歯がズタボロになるかもしれないが」

プライドを刺激し挑発しながら、噛みやすいように、左腕をアーンの方に差し出す。

一度自慢の歯を防ぐか。首より腕を噛まれた方が殴りやすい。

「アアッ!? 後悔するなよッ、下等種族!!」
【鮫・ON・歯車!!】
牙を剥き、体を回転させながら、こちらに猛スピードで突進してくる。

「【鉄塊片鱗 // 黒腕】」

ガキイン!!

オレの左腕にアーンが噛み付き、金属音が辺りに響く。衝撃で吹き飛ばされないように踏み止まる。

修行の結果、全身はまだ無理だが、体の一部に【鉄塊】をかけられるようになった。

ゼファーさんの命名で【鉄塊片鱗 // 黒腕】。正直メカメカの能力

と被るが、だからこそ慣れていて使いやすい。両腕の肘から先だけに

【鉄塊】をかけ、武装硬化で強化している。このまま殴ることも可能。
「（な、なんだコイツの腕はッ!? 噛み切れねエッ……!）」

「どうだ、お味の程は？ ミンク族からは噛み応えが良いと評判だったんだが、お気に召したか？ まあいい。ここからはオレのターンだ……」

【電撃】

バリバリ！

「ガアッ!？」

噛み付かれている腕から電気を流し、

【五百枚瓦正拳】！」

ドン！

「ゴファッ!？」

空いている右拳でアローンの腹に正拳突きを放つ。【鉄塊片鱗テツカイヘンリン」
黒腕コクワン」を使用したまま。

「なんや、タイの大アニキ。ロゼに魚人空手教えたんか？」

「いや、教えちゃいねエ……」

「じゃが、あの正拳突きはあんたの打ち方じやろ？」

「見せたことがあるだけだ（あいつ、たしかにあそこで何度も見せたが、まだ10日だぞ？）」

歯が腕に噛み付いたまま外れて、アローンの体が後方に飛んで行く。

たしか歯が取れてもまた生えてくるとはっちゃんから聞いているから、大丈夫だろ。自分で外して手に持って武器に使うこともあると聞いた。

「(クツ、このおれが下等種族のガキに殴り飛ばされるなど……とにかく態勢を)」

「まだオレのバトルフェイズは終了していない」

ヒュンヒュン

左手で腰の鞭を取り出し、アローンの首に巻きつける。

腕を振るった衝撃で、抜けた歯が地面に落ちた。

【電撃鞭】

バリバリ！

「ガアアツ!? (コ、コイツ、またア……!)」

電気を流しながら、鞭を引っ張りこちらに引き寄せ、

「スクラップ・フィスト」!

ドゴン!!

鞭を持ったまま、左拳で飛んで来た顔面をぶん殴り、地面に叩きつけた。

「ガッ……ハア……」

気を失ったか。

アーロンの体から力が抜け、倒れ伏す。

「(アーロンがまったく歯が立たんか。話は聞いておるし、敵対せん内は頼もしいが、たしかあのガキは賞金稼ぎバウンティハンターで海軍本部によく出入りしておるとか……場合によっては一波乱あるかもしれんのオ)」

「アーロンの自慢の歯を防いだ上で連続攻撃。なんというか……えげつねエな」

「そうか?」

近寄って来たアラディンさんがアーロンの治療を始める。

「オレの勝ちだな」

「や、やり過ぎじゃないか……? (最後のパンチは必要なかったような……)」

「オレのことは殺してもいいって条件だったんだ。大分軽いだろ」

後遺症すらないはずだ。

ゴーグルを外しながら言葉を返す。

「本当に兄さんを倒しちゃったよ……しかも無傷で」

「オレもそれなりに強いから、地上でのボディガードは任せられた。何ならシャーリーさんも少し鍛えてみるか?」

「え〜つと…… (あつ、思ったより普通の訓練なんだね) ……じゃあお願いするよ」

「任せられた」

シャーリーさんが水晶玉を見てから、オレの提案を受け入れた。いい結果の占いで出たのか?

「いや、あの、シャーリーはアーロンさんほど丈夫じゃないから、お手

「柔らかに頼むでゲソよ？」

「ああ。軽くいく」

「覇氣が使えるようになるだけで大分違うはずだ。」

「新世界の海賊も来る可能性があるこの場所で、それだけでは物足りないが、まあ大丈夫だろ。」

「身を守るためには必ずしも敵を倒す必要はない。元々地の利はある。水中まで逃げられれば、そう簡単に殺されたり捕まったりはしないだろう。」

「このおれが、人間の、こんなガキに……おれは……メダカ以下だ……」

「意識を取り戻したアロンが、膝をつき項垂れ、ボソボソと呟いている。」

「オレという化物相手に、お前の常識で考えるからそうなる。タイガーさんが賭け金を上乘せした時点で、警戒すべきだったな」

「オレを年齢で判断して舐めてかかって来る相手は倒しやすい。」

「新兵の訓練では、『見た目に騙されて敵を侮るな』という教訓を与えるためだと、毎年ゼファーさんに全員の相手を頼まれている。だが、オレは別に騙してなどいない。戦場で敵の気を削ぎ、自分を有利な態勢に持ち込んでいるだけだ。」

「さらに下等種族の人間のガキが何をしようが、自分の優位は変わらないと見下していたから、簡単に挑発に乗って来た。」

「……お前より強い人間はどれくらいいる？」

「子供より強い奴なんてたくさんいるな。オレもまだまだ強くなる。この程度で終わるつもりはない」

「チツ、クソがッ！ ……シャーリー、好きにしろ。大アニキも、さっきの約束、受け入れた」

「いい、いいの!? 本当に!? (正直こっそり行くつもりだったけど、兄さんが認めるなんて……)」

「おう、これからはちゃんと加減しろよ」

「シャーリーが驚き、タイガーさんが念を押す。」

「意外だな。もつとごねるかと思って、もう一戦やることも考えていたんだがな」

「二(まだ殴る気だったのか……)」

「勘違いするな、化物！ てめエとの約束だから守るんじゃないよ……」

「そうか。まあ納得したのなら、オレはどちらでも構わん」

「てめエと行動することは認めるがな、シャーリーに傷一つ付けるんじゃないエぞ!? それに、ウストラトンカチのナンパ野郎も近付けさせるな！」

「ああ、あの人……」

「ニユ、あいつも悪い奴じゃねえんだけどな……」

周りの人達は納得しているが、誰のことだ？ まあその内聞かか。

「その妹のことを放って海賊などやっている奴の言うことなど知らんが、オレの前で傷付けるような下らん真似はさせん」

「ぐうっ!? 可愛げのねエガキがッ……!」

海賊に可愛げがあると云われたところだな……悍ましい。

「(アーロンさん、気にしていたんじゃないイカ……)」

「そういうば、シャーリーさん」

「シャーリーで良いよ、メイプルも呼び捨てらしいし」

「じゃあ、シャーリー。どうして今までは来たことがないのに、急に来る気になったんだ？」

オレを睨みながら複雑な表情をしているアーロンを無視して問う。

さつき好きにしろと言った手前、人間に呼び捨てを許可することに文句が言えず、さらに妹にはさん付けなのに自分自身は呼び捨てにされているのはそれはそれで嫌、といったところだろうか？

「(反対するだろウ兄さんがいなくなるから、とは言えないね……)私、カフェをやりたくて、参考に話を聞いてみたかったんだよ」

「なるほど。母さんに海賊からのぼったくりの極意を学びたいと」

中々お目が高い。母さんのぼったくりはそんなじよそこらとは桁が違うからな。

「えっ……? いや違」

「策を練って人間を騙し、欲しい物を奪うその狡猾さ。おれとは形こそ違うが、それがお前のやり方なんだな。やられたらやり返す！それが孤高なるサメの流儀だ！ 流石我が妹！ シヤハハハハハハハ!!」

「(もうこの場ではそういうことにしといた方がいいかもね……)」

その後、タイガーさん達と別れを告げ、帰りはイカとサメのマーメイドコンビに体をシャボンディまで引っ張ってもらった。

アラディンさんの覇気は目覚めさせていないが仕方ない。海賊を強くする気はないから。バレたらその時はその時だ。とりあえず、自力で習得して心の声を聞かれないようにしてくれと言っておいた。無茶言うなど言われたが、普通は自力で習得するものだし、女ヶ島にようがしまでは出来ているらしいから、存在を認識して出来ると信じることも大事なはず。

母さんの店が落ち着くまでに、改めて自己紹介をして、ついでにシャーリーに占ってもらったことになったんだが

「あんたは………うん、女誑しだね(こんな未来のビジョンは初めて見たよ……)」

「違う……」

それ、占いなのか？

「いや、違わないね。私の水晶玉がそう言ってるんだよっ！ これが女誑しじゃなくてなんだって言うんだいっ!?!」

シャーリーがカツと目を見開き、そう叫ぶ。

「いや知らん。その水晶玉が曇っているんじゃないか？」

すごく叩き割ってやりたい。何を見た？

「私も常々そう思っていました、やはりロゼはそうなんです……」

「流石シャーリー……何でもお見通しじゃないカ」

「何でもは見通せないよ。水晶玉が映し出す、断片的な未来のビジョンだけ。それに、見たビジョンに自分の姿も映らないから、自分のことはわからない」

こいつら……オレという共通のオモチャを前に結託している。

「私はファーストキスを奪われたし、よく気付いたら膝の上で寝かされてるでゲソ……」

「どちらかといえば奪われたのはオレだし、泣きついて来て、オレの膝を濡らして勝手に寝るのはお前だ」

「……丁寧に頬を染めているが、お前の変色はもう見慣れた。」

「私も体を撫で回されたり、一晩中抱きしめられたりしてます……」

「ミンク族にはただの挨拶なのだろう？ それにオレを抱き枕にして、涎で寝巻をベタベタにするのはお前だ」

お前が嫌がつているかどうかは、見聞色を使わずとも、尻尾を見ればわかる。

「2人共、記憶が定かではないと言うなら、オレの過去の記録ログに証拠が残っているから、上映会でもするか？」

「……ごめんなさい、調子に乗りました。だから寝顔を映すのはやめて!!」

「ならばよし」

まったく……お前達がオレに、腹黒さで勝てるはずがなかろうが。

「まあ、そんなうら若き乙女の寝顔を何度も盗み見ているあんたが、やっぱり女誑しなのは明らかだけでも」

「言い方……」

「好意を伝えられて即拒否するのはオススメしないね……その子達が死ぬかもしれないよ？」

「そんなバカな！」

「というか達って……」。

「なんというか、あんたを好きになる子って、あんたの言うことを聞かなかったり、脅してきたり、面倒見ないと死ぬかもしれないなかったり、拒絶されたら身投げか心中しようとする子だから、その……頑張りな、ロゼ。場合によつては国が減ぶよ？」

「え、いや、冗談だよな？」

なんか本気で心配して、オレを憐れんだ目で見ているような……見聞色で真偽を確かめたくない。

最初の方はともかく、甘えられるのは構わんが、自立して生きられ

ん軟弱者はあまり好きではないんだけどな……鉄の意志も鋼の強さも感じられない。鍛え直してやらねば。

そしてそんな理由で滅ぶ国など一回滅んでゼロからやり直せ。ふざけているのか。働け権力者。

「そうだ、まだ時間はあるみたいだし、トランプでもしないかい？」

ビクッ!!!

オレの言葉がスルーされる。まあいい、所詮は占いだ。

放たれたシャーリーの言葉に、父さん、トリスタン、メイプルの体が震える。さつきも似たようなのを見たな。

「オレはいいぞ」

「乗り気だね。私、カードゲームで負けたことがないんだよ」

「気が合うな。何を隠そう、オレもだ」

「シャーリーさんってお強いんですか？」

「ロゼと同レベルでゲソ……」

「ああ……別次元領域の住人でしたか……」

「どつちが勝つんだろ？」

「私達に勝ち目は？」

「あるわけではないでゲソ」

「ですよね。はあ……」

お通夜ムードの2人を余所よそに、オレとシャーリーの視線がぶつかり、火花を散らす。

「……では、私がカードを配るから、子供達でやりなさい」

「ありがとう」

「何か悪いね……」

「何、気にすることはない」

「(二)あつ、その位置ずるい!!」(二)

「(は)っはっは、これが大人の状況判断というものだ、若人よ！ 世の中戦うだけがすべてではないと知りなさい！)とりあえずババ抜きでいいかね？ 手札が同時になくなれば引き分け、覇気も能力も、当然イカサマも使用禁止の、ぼったくりB A Rバースペシャルルールだ」

「ああ」「ええ」

「はい……」

そうしてババ抜きが始まり、父さんがジョーカー1枚を含む53枚のトランプを、熟練のカード捌きでカット&シャッフルする。クザンさんもやったりフルシャッフル（※ショットガン・シャッフルとも言う）だ。

なんであの人海兵なのにカードの扱いに手慣れていてマジックまで出来るんだ？ あそこまで達者なカード捌き、今まで一体どれだけサボって遊んで身に付けたんだ……よく部下の人達と遊んだりもしているが、元は女を口説くのに覚えた可能性が高い。父さんがよくやる手口だ。

それぞれにカードが配られ、同じ数字のペアを場に出し、手札を作ると

ざわ……ざわ……

「初手おかしい……」

「クソゲーです……」

オレの手札が14⇒2枚、シャリーが13⇒1枚、トリスタンとメイプルが13⇒9枚になった。

「なかなかやるようだね……ババ抜きで私の場の支配から逃れて、初期手札がそんなに減るなんて」

「そちらもな。オレの無手札必殺ハンドレス・コンボによるZEROゼTターUーNンKキIルLルが防がれるとは……凄まじいフィールだ」

凄腕デューリストの決闘者のようだ。もっとフィールを高めなければ。

「この2人は一体何を言っているんです？」

「さあ？ 見えている世界が違い過ぎるでゲソ……1人で壁とやつてると、変わらないんじゃないか？」

「では……決闘開始イイイ！」

父さんが高らかに宣言する。

順番は時計回りで、トリスタンがメイプルから引き、オレがトリスタンから引き、シャリーがオレから引き、メイプルがシャリーから引いて一周する。

そして、オレのターン！ ドロー！

「どうやら、オレの方が手札を捨てるのが早かったようだな」

「(早い……)」

6のペアが揃い、場に出す。オレの勝ちが決定した。

「まだよ！　これで同じ数字を引き当てれば引き分けに持ち込める！」

「果たしてそうかな？　ならば、オレのカードを引くがいい」

シャーリーが引いた、オレの最後のカードは

「(ジョ、ジョーカーJOKERッ……！)」

不敵に笑う道化師が描かれていた。

「とりあえず、一戦目はロゼの勝ちみたいでゲソ」

「何なんです、この人達？　積み込みですか？」

「そんなことをしていないのは知っているだろう？　当然能力も覇気も使っていない」

オレは配られる前のカードに触れてはいけないというハウスルールがある。イカサマなどしたことはないというのに……。

「使わずにこれという事実が恐ろしいでゲソ……」

「私も、やると大体こうなるんだよね。そして勝ってしまう。負けるなんて初めてだよ」

「何ですか、その怪奇現象は。確率を無視しないで下さい」

「自分の望むカードを引けずに、決闘者は名乗れない」デュエリスト

「でゆえりすとって何でゲソ？」

順当にシャーリーがまず上がり、トリスタンとメイプルの熾烈なドベ争いの結果、メイプルが勝利した。

「負けました……」

「(感情が尻尾に出ているじゃないか。わかりやすい)」

「次は私が勝つわよ？」

「受けて立つ」

「もう2人でやって下さい」

「私達は見てる方がいいんじゃないか？」

トリスタンとメイプルはやらないようだ。

なので、その後は2人で他のトランプのゲームをした。

「すごい……神経衰弱がただのじゃんけんです。じゃんけんで勝った方が全部めくつちやいます……」

「(ダウトなのにうそつきがない……初期手札がマーク以外完全に同じになって配られてるでゲソ。シャッフルした後半分のカードでやっているのに、1〜13が互いの手札に揃うなんて……どちらもダウトを宣告せず先攻を取った方が勝つから、ただのじゃんけんじゃないか)」

「(ちゃんとシャッフルしてるよな？ 私も今まで旅の中で色んなものを見てきたが、世界にはまだまだ未知が溢れている……)」

「私とほぼ互角……やるわね、ロゼ」

「シャーリーもな……またやろう」

シャーリーと握手を交わした。今回は引き分けに終わったが、次は負けん。

「(まだやるんですか……)」

「(あんなイカれた手札でやって楽しいのか？ まあ仲良くなったみたいだし、良イカ)」

「それと、あの子の手伝いしてくれて、ありがとね」

耳元で小声で礼を言われる。

「どういたしまして……そういえば、アーンはよくあれでメイプルを怒らないな」

たしかシャーリーがメイプルのおかしの、最初にして最長の被害者と聞いているが。はっちゃんには効かないから。

『『あいつに悪気はない。ただあほなだけだから』ですって』

どうにかしてその寛大さを、人間に向けるよう仕向けられないだろうか……厳しいか。

客が捌けて店が落ち着いて、客となることを拒んだものを放り出し、血も拭いた後で母さんも合流し、いくつかシャーリーが母さんに質問して、お土産に貰って来たおかしを食べながら過ごした。

その後でシャーリーの覇気も目覚めさせたのだが、

ギン！

「加減してるとはいえ平気そうだな。人によっては弱い電流が流れる

みたいな感覚が苦手みたいなんだが」
「そういうのはメイプルのおかしで慣れたよ」
「憐れな……。」

〃王下七武海〃

マリージョア襲撃から2年が経った。

タイガーのことも指名手配され、今では〃大洋のタイガー〃2億3000万ベリーの賞金首。彼を船長とするタイヨウの海賊団は、海賊としては異例の不殺を貫く海賊団として知られている。海軍の追手の軍艦を何隻も沈めながら、未だに死者は0だそうだ。他の船員も、〃海侠のジンベエ〃7600万ベリー、〃ノコギリのアロン〃2000万ベリー、〃40段クロオビ〃900万ベリー、〃六刀流のハチ〃800万ベリー、〃水砲のチュウ〃550万ベリーなど他にも多数、1つの海賊団にしては賞金首が多い。はあ……手配されてしまったか……。

たまに商船を襲ったと報道されるが、その新聞の写真の隅には首輪が付いた人がちらほら写っている……まあ、商船には違いないのだろうな。巷じゃ〃奴隷解放の英雄〃とも呼ばれているらしい。

まあそれはいいか。彼らがその辺にいる普通の海賊みたいな略奪をするとは思えん。それよりこの額……そろそろ覇気使いが動くし、捕まえるための作戦も練られるだろう。シャーリーに気になることも言われたし、注意しておくか。未来なんて自分で切り開くものだ。この世に決まった運命などあつてたまるか。

「わらわが来たぞ。茶を入れてくれ。サロメ、椅子」

「はいはいお姫様」

考えていると、ハンコックが鍵を開けておいた玄関から入って来る。まあ気配でわかっていたし、今朝の電話で訪問すると聞いていた。この皇帝になった後の口調も、もう聞き慣れたな。たまに前の口調も出るが。

もうすでに何度か見たが、両耳にへびのピアスをして、赤を基調としたへびと花の模様が入った服を身に付け、上から九蛇クジャの白いマントを着用。蹴りを繰り出しやすいようにスカートには足の付け根まで

大きなスリットが入り、ハイヒールを履いている。

露出が高めだが、九蛇クジヤの服装は大体こうだし、何より非常に眼福だ。石化しないって素晴らしい。あの忌々しい屈辱の「メロメロ甘風メロウ」は、電話中にハンコックが倒れた時に解除されたようだ。

ソニアとマリーよりは露出が控えめと言える。あの2人は水着みたいな服の上から、マントを羽織っているだけだからな。まあそれが九蛇クジヤの一般的な服装だ。あの2人の場合は動物系ゾオンの能力者である都合で、そうしないと変身で服が破けるのはわかつてはいるが……マリーなんて【生命帰還】で体型を戦闘時と普段で大きく変えられる、あれは凄い。

海軍の軍服みたいにルビノクヨ繊維で作った服なら人獣化で体が大きくなっても耐えられるが、閉鎖国家にはまだないだろうな。あれではいつか焼印が見られるぞ？ 去年出来た海列車、パツフィング・トムが通る島の1つ、春の女王の町と呼ばれるセント・ポプラなどの場所でルビノクヨ製の服が作られている。

「いらつしやい、ハンコック。サロメも久しぶりだな」

「お姫様シヤ、アナタのことばかりでもう耳タコツよ。私シヤに耳はないけど」

普段ハンコックに巻きついている、骸骨を被った、白い体に赤い模様がいくつもあるサロメにも手を伸ばしながら声をかけると、チロチロと伸ばした舌で舐めてくる。少しくすぐつたい。この大蛇はハンコックのウエストよりも太い。たぶんメスヘビ。

ヘビって発声器官あつたっけ？ まあ、サロメは鳴くし、こいつの種類はあるだろう。耳もないはずだけど、ハンコックの命令もちゃんと聞く。今も主人の要望に応え、とぐろを巻いて椅子になっている。椅子ぐらいちゃんとのるのだが……ヘビは人に懐かず慣れるだけって聞いたが、懐いているようにしか見えん。

トリスタンも九蛇クジヤのようにヘビを飼い、連れ回り弓代わりにはどうかと提案したことがあるが、ヘビが弓では【エレクトロ】を使えないからと採用されなかった。確かにミンク族にそれは痛いな。

今日は、最近七武海同士の争いがあり、片方が殺害され、下手人の方は他にも問題が発覚し除名され、消息を絶つたので、ハンコツク達は海賊の石像を船に乗せて、オレの伝手で世界政府に送り付けた帰りだ。おそらく問題なく加入出来るだろう。個人としても勢力としても実力はあるし、あまり長い間、七武海にいくつも空席を作りたくはないはずだ。出来るだけ早く埋めるため、今なら多少の無茶を言っても通るだろう。

一緒に突きつけた条件に、アイドル活動のサポートなんてものもあるらしいが……まあ、好きにすればいい。オレも好きにするから。その結果戦うことになったとしても、その時はその時だ。思い切りぶつかった後で和解すればいい。といっても、アイドルをやることで、オレと戦うことになるとは思えんが。

それにしても、首輪を付けられ死んだ目をしていたあの姉妹が、天竜人の支配を振り切り、立派になったな……トラウマだらけの場所だろうに。まあ来る度にすれ違った人達を石化させ、通り過ぎた後で解除し前後の記憶を消すという荒業をするが、体に傷も異常もないことだしギリセーフか。

椅子サロメに座ったハンコツクの前にお茶を出し、ついでにサロメ用にバケツに水を入れる。

「あら、ありがとう」

顔だけバケツに突っ込んで、口を動かし水を飲んでいいる。中々愛嬌があつて良い。

「数か月ぶり……のはずなのだが、あまりお前とは久しぶりという感じはしないな。毎日のように話もしていることだし。ソニアとマリーは、母さん達に何か用なのか？」

2人は店の方に行った。トリスタンも今は向こうで開店前の母さんの店の掃除を手伝い中だ。

ニヨン婆が来ないのは電話で聞いている。まあ、前にも会った。たまに父さんとルスカイナの無人島を借りてサバイバル生活なり、戦闘

なりをする時に会う。

前に蒸気船を取りに来た時に、代わりにルスカイナの上陸許可をくれた。今のままの法でも、あの島なら男を上陸させても問題ないと。正直助かる。この島で派手に戦闘を行えばバレるからな。

三姉妹も修行に交じって一緒に父さんに相手してもらおうこともあるが、中々多彩な技で器用な戦い方をする。というかやつぱりヘビはかっこいいじゃないか。もっと胸を張って良いと思う。

あの島は四十八季といって、週一で春夏秋冬の季節が変化する、中々愉快だが慌ただしい変わった気候で、そんな環境で生き残った強い動物が多く生息しており、人間は大昔に滅んでしまった。だがそんな環境でもオレの能力は本当に便利だ。キッチンを内蔵しているようなものだから、遭難しても困らない。そもそも飛べるのでサイクロンにさえ出くわさなければ自力で脱出可能。

一番困ったのは食料だ。肉が嫌で野菜ばかり食べていたら、好き嫌いせずに食べると怒られた。せっかく動物が寄って来ない場所で栽培したりしていたんだが仕方がない。それ以降は、倒した動物の尻尾を切り落として、焼いて食べてもいた。あそこの動物はデカイから尻尾だけでも食べごたえがある上、治癒力が高く時間が経てばまた生えてくる。食うに困らん。

「うむ。あの2人はシャツキーやトリスタンと積もる話でもしておるじやろう。他の船員達は、島を見たり、船に残っておったりじゃ（レイリーが今は自宅におらぬのはリサーチ済み。姑と看護師の足止めは任せたぞ！）」

2人とは後で会うか。

九蛇海賊団クジヤの船員とは……会う理由がないな。あいつらは三姉妹の親衛隊みたいなもので、非常に面倒臭い。前に一度、全員と戦闘する羽目になった。別にもう戦いにはならんが、自分から会いたくもない。あのテンションにはついていけない。

オレの能力については、ゴルゴン三姉妹とは別の悪魔（の実）を食らい、悪魔を体に宿し異能を使えるようになった代わりに、海に呪わ

れカナヅチになつたと、一部を除いてほぼ事実を伝えている。悪魔を食べたのか……と引かれたが、些細なことだ。

「顔色も良さそうだな。最近では電話中にいきなり貧血で倒れることも減つて来たし、皇帝の業務に慣れてきたか？」

「あのような雑務、元より造作もない。ただ少々朝は低血圧なだけじゃ（へ、平気な顔をしておつて……わらわに毎朝あんなことを言つておいて……）」

「じゃあ夜に連絡した方がいいんじゃないか？」

「いや、このままで良い（朝でないとそなたがいるかわからぬし……朝一番に話がしたいのじゃ）」

「そうか」

こいつがそう言うなら良いか。

「それでじゃ。今日来たのは、そなたに渡したい物があるからなのじゃ」

そう言つて、おもむろに服の内側に手を突っ込んで、CDケースとカードを取り出した。

「……なんて所に物を入れている」

「他に入れる場所がないのじゃから仕方なからう。ふふふつ。じゃがそなた、まったくわらわから視線を逸らさなんだな？」

「目の前で、服がはだけた絶世の美女がいたならば、そりや見るだろう！ 男なら!! 見られたくないのなら、せめて前もって一声かけろ」

何を当たり前のことを……女しくない島ではこういうものなのか？ 無防備過ぎる……。

「ち、力強い!!（褒められておるが、思っていたのと違うのう。もつと、こう……）」

♡♡♡♡♡

『そつ、そんなことはつ……?!?』

『ふふふつ、そんなに慌ててどうした？ 何なら……触つてみるか?』

『一介の賞金稼バウンティハンターぎに過ぎんオレと、今や一国の皇帝となった、世界一美しいお前とでは釣り合わない……随分と差がついてしまった』

『いいのよ、そんなことは。私が欲しいのはただ一つ……これからは

私の言うこと、何でも聞いて?』

『ハンコック……』

♡♡♡♡♡

こんな風にしたかったのじゃが、赤面すらせぬとは……)」

「男は皆すけべだから、気を付けるように」

「(冷静に注意された。やはり手強いのか……むっ?)それはそなたもか?」

「当然だ。例外はない」

「(み、見たい……わらわに夢中になる姿……!)」

「ともかく、それが例の曲のCDなのだろうが、そっちのカードは?」

「う、うむ。これは……わらわのファンクラブの会員カードじゃ!」

「随分気が早くないか?」

まだデビューしてすらいないだろう。

「アマゾン・リリーでは国民全員が持つておるぞ?」

「身分証明書みたいになっているな……」

オレは持つていないが。

「ふふふつ、それも会員N.O. 0のプレミアものじゃぞ!」

「それってすごいのか?」

「すごいに決まっておるじゃろうがッ! 若いN.O. は闘技場で勝者の景品になり、N.O. 4〜50くらいまでは九蛇海賊団クジヤの船員達が独占しておるのじゃぞ!」

「そんなバカな……」

ハンコックに怒られたが、それでアマゾン・リリーは大丈夫なのか? いや、あの九蛇海賊団クジヤの船員達なら、喜んで家宝にするかもな。

(※国民も家宝にしています)

「ちなみにN.O. 1がソニアでN.O. 2がマリー、N.O. 3がニヨン婆じゃ」

妹2人は角も立たないし順当だが、ニヨン婆もか……先々々代皇帝だというのに。

「まあ、すごい物だというのは伝わった。だが、オレに渡してしまつて構わんのか? 話を聞くと、あいつらだつて欲しがりそうなんだが」

「これは本来わらわの自分用じゃ……それに、そなたに持っていて欲しいのじゃ。ダメか？」

いつもの自信満々な態度から変わり、少し不安げに尋ねられる。何かが欲しいとねだってくる時の、媚びたような作った表情とも違う。

なるほど、父さん……これがギャップ萌えなのだな。言葉で説明されても意味不明だったが、実際に見て理解した。心に來るものがある。

「わかった。ありがたく頂戴しよう。そして誰にも渡さない」

「う、うむ！（そんな……わらわを誰にも渡さないなんて）（※おいしい）ウインクしたハンコツクの写真が貼つてあるCDとファンクラブカードを受け取る。

会員カードはとりあえず財布に入れておくか。

「このCD、聞いてもいいか？」

「それなのじゃが、そなたの部屋でわらわの歌を披露したいのじゃ」「今歌つてくれるってことか？」

「うむ！ わらわの美声に酔いしれるがよい！」

すごい自信だな。楽しみだ。

ハンコツクをオレの部屋に案内する。と言つても、何度も居候していた時に入つて来ていたが。オレの部屋なのにオレ以上に寛い^{くわろ}でいた。

「（相変わらず本が多い部屋じゃ）ここは久しぶりじゃのう……ではサロメ、マイクスタンド」

「へび使いの荒い^{シヤウ}お姫様ね」

サロメが、頭に被つた骸骨の目の穴から舌で取り出したマイクを咥え、ハンコツクの口の辺りに近付き、ピンと体を伸ばし固まり、その胸をハンコツクが持つ。オレの部屋にスピーカーはないから、ただの雰囲気作りのアイテムと化しているが。

それにしてもサロメ、そんな特技まで身に付けたのか。主人もそうだが、お前も多芸だな。

「曲はかけた方が良いか？」

「うむ。インスト ver. があるからそれを頼む」

2年前まではほとんど何も知らなかったのに、外界の文化に詳しくなったものだ。

CDをケースから取り出し、プレイヤーで再生し、オレは自分のベッドに座る。

「♪〜☒」

言うだけあってきれいな歌声だ。電話した時に出てきた歌詞のフレーズがいくつも入っている。その時も思ったが、曲に合わせて改めて歌で聞いてみると、まるで告白でもされているかのような錯覚を覚える。

それにしても、歌も上手いが、踊りの振り付けまであるのか。九蛇クジヤ海賊団の遠征に皇帝の仕事、戦闘の鍛錬に、歌とダンスのレッスン、いくら【生命帰還】が使えるといっても倒れて仕方ないな。

美しい鈴のような声で響く歌声に、天女の舞を思わせる踊り、桃源郷とはこんな……!?!

ポキッ!

ツ〜! お、おのれエ……あの忌々しい感覚は……この歌は、【メロメロ甘風メロウ】と同タイプの技か……左手の小指を犠牲に助かった。

というかこの女、まさかCDを売りに出して無差別石化テロでも起こす気か? なんて恐ろしいことを……いやでも、まさかそんな……だが念のため後で確認しておこう。そのためにも、そしてちゃんと最後まで聞き届けるためにも、この天国と地獄が隣り合わせになったようなコンサートを、無事に乗り切らねば……!

「!? ♪〜☒(ま、まさか指の骨を折ってわらわの【メロメロ旋律メロディ】に抗うとは……一度石化させてしまえば、あとはロゼのコートに入った海楼石クジヤの手錠で拘束後、ベッドに押し倒し、ニヨン婆より教わった九蛇流房中術の出番なのじゃが)」

数分後、4本の指を生贄に、オレは生還した。仕方がない、必要経費だ。

左手の指を全部折ってしまえば、自分に【指銃シガン】を撃つしかなくな

る。

「何故そこまでするのじゃ。命を取るつもりなど毛頭ないと言うておろうに……ああ、そなたの左手、親指以外の指があらぬ方を向いてしまっておるではないか。もう解いたから折るでないぞ?」

「せつかく聞かせてくれたんだ。途中で寝落ちするのは失礼だろ。良い歌と踊りだった。指が逝ってしまうくらい」

指を元の方向に矯正しながら感想を言う。だが出来れば普通に楽しみたかったな……後で牛乳を飲んでくつつけるか。

「そ、そうか……そうなのか……ふふふつ（最後までわらわの歌を聞くために、自分を傷付けてまで……）」

こ、こいつ……オレの折れた指を見て笑っている……愉悦を覚えている! 天竜人に痛め付けられること約4年、性癖が歪んでしまったか……。

「(むっ? 今、ロゼの左手はボロボロ……今ならヤレル!?) サロメ、ゆけ! 左手は避けよ」

「ちよつと大人しくしててね」
「えっ?」

突然マイクスタンドがオレの体の左手以外に巻き付いてくる。

何故? さっきの水が美味しくなかったのか? ……でもこいつ、怒っていないな。じゃれてるのか? どうせ心の声を聞いたところで意味が理解出来んし……。

考えていると、ハンコックにベッドに押し倒された。

今度は何だ!?

「な、何の真似だ?」

「すべてわらわに任せておけ……すぐにいかせてやる……天国にな」

顎を指で軽く持ち上げられ、ハンコックと正面から向き合わされながら言われる。

逝か……殺られる!?

「どうでもいいかもしれんが、たぶんオレは地獄行きだぞ!」

「大丈夫じゃ。わらわが良い声で鳴かせてやる」

あつ、そつちか。

オレの傷を見て、蛇姫様の嗜虐心に火が付いてしまわれたのか……
そういうのはちよつと……。

「ハンコックウ？ 何をしているのかしらア？」

オレの部屋のドアが空き、母さんが入って来た。

あつ、これキレイている。今まで見たことがないほど怖い。

服の装飾として付いている小さな翼が、悪魔みたいに禍々しく巨大化して見えるようだ。怒るところなるのか……。

「しゃ、シャツキー!? これは、愛し合っているだけなのじゃ！」

「えっ？」

オレをアブノーマルに巻き込むな。痛み付けられ悦ぶ趣味はない。

「へエ……そうなのオ。でもオ……それっておかしくないかしらア？」

「な、何がじゃ？」

「いやおかしいだろ」

オレは指の骨を折って耐えていただけなんだが……愛とは一体。

「傷付けるのがあなたの愛の形なんでしょオ？ ロゼは骨が折れて痛がつてるのに、あんたは無傷……愛し合うならあんたも痛みを味わわないとねエ？」

「そこなのか母さんッ!？」

そんな特殊なプレイは御免被る。そういう店にでも行ってやってくれ。シャボンデイにもあるから。

「だからねエ？ ハンコックウ……続きは私としましょうかア？」

「ヒイツ!？」

絶対一方的に痛み付ける気だな……。

「その辺にしといてやったら？ まあ美人で優しいオレの自慢の母さんのことだ、おいたが過ぎたハンコックに少し警告しただけだよな」
「……アハハハ……当たり前じゃないの。ちよつと懲らしめただけよ」

「(嘘よッ……!!)」

母さんから出ていた謎のプレッシャーが消えた。

「あつ、牛乳入れてくれないか？」

「いいけど……あんた、いくら【生命帰還】が使えるようになってきたからって、わざわざ自分を傷付けるもんじゃないわよ?」

「確かにそうかもしれないが、石になるよりはマシじゃないか?」

「ハンコックをぶっ飛ばしちやえばいいじゃない」

「そこまでするほどではないかな」

他に被害は出ていないし、殺気は感じなかった。それでも石化は嫌だ。

「(はあ……こうなると頑固なんだから) じゃあ、さっさと強くなっちゃって、私を安心させてよね」

「ああ、頑張る」

母さんが冷蔵庫から牛乳を持って来てくれて、2杯飲んだ辺りで折れた骨がくつついた。オレが手を閉じたり開いたりして具合を確かめ、それを見届けてから、母さんが退室する。

ふむ……まあいいか。放っておこう。

「あ、ありがとう……お礼に、私を慰める許可を出してあげないこともないわ!」

「回りくどい……口調が素に戻っているぞ?」

「こほん! ふふふつ、褒美にわらわの頭を撫でさせてやっても良いぞ?」

回りくどいのは変わらんのか……。

ハンコックは、ずっとオレにしがみつきビクついていた。というか今もしがみつかれている。

サロメは母さんが入って来た時点で、オレの拘束を解き、今はベッドの傍らでとぐろを巻いて待機中。賢い奴……。

じゃあとりあえず、頭を撫でるか。こいつの髪、きれいなんだよな。

「なあ皇帝陛下、ちよつとその姿は情けくないか?」

「シャツキーには色々世話になったし、どうも頭が上がりぬ……」

ニヨン婆にも世話になっているはずなんだが……扱いに差を感じる。

ニヨン婆は何故か女ヶ島にようがしまに行ってからツツコミの切れが増した。ノリツツコミまで習得し、ハンコック相手によくやっている。

「それにしても、すごくサラサラの髪だな」

「当然じゃ、毎日手入れを欠かしておらぬ……わらわの髪に触れることを許可する男など、そなただけなのじゃぞ?」

「それは光栄だ……あつ、ところであの歌のCD、聞いてたら石化する、なんてことにはならないよな?」

「【メロメロ旋律】^{メロデー}のことか。あれはわらわが生で歌や演奏を披露せねば効果が出ぬ。録音では意味がないのじゃ。電伝虫も、通話中にそなたにちよつと試したが、効果はなかったのう」

「知らん間に実験台になっていた。そういえば楽器の演奏が聞こえたことがあるな。」

「世界に復讐とか言つてテロをする気なわけではなかったようだ。良かった。」

「あれ、そういえばサロメや電伝虫には効かんのか? ……耳がないからか。」

「(これ、良いのう……)こ、これからもわらわに尽くすのであれば、またこうして髪に触れさせてやっても良いのじゃぞ?」

「偉そう……実際に偉いのか。」

「では、お前の1番、いや0番のファンとして、応援しよう」

「うむ。ではまずは、わらわをもつと褒め称えよ^{たた}」

「アバウト……じゃあ、紹介したとはいえ、よくマリージョアに行けたな。別にあいつに任せればいいものを。怖くはなかったか?」

「わらわにとつてあの場所は、消し去りたく忌々しい過去ではあるものの、恐怖の対象などではないわ。それにわらわが臆すれば妹達や船員達にも移る」

「強いな、長女兼船長は」

「偉い偉いと頭を撫でる。」

「……それよりわらわとしては、あの女とそなたがどういう関係なのかの方が気になるのう? そなたの事情を考えれば、仲良く出来るとは到底思えぬのじゃが」

「あいつはオレの情報源であり、協力者であり、ストーカーだ。ちよつと悪質なファンだな」

あと……これは言わなくていいか。

それにしても、本当に弱みを握られ脅されるとは……シャーリーの占いは馬鹿に出来ん。だが、これからのためにも必要ではある。いざという時のために、見張っておいてもらうか。あいつぐらいにしか出来ん。

「そなたの運は良いのか悪いのか……（今思えばソニアにもバレておったし……わらわにとっては運が良いが）」

「結果的には良いんじゃないか？」

「随分綱渡りな幸運じゃ。努々ゆめゆめ落ちずに渡り切るのじゃぞ」

「今の所敵対することはなさそうだし、まあ大丈夫だろ」

「……あまり仲良くされるのも複雑じゃのう。あの女とも、海軍とも」

「海軍もか？」

賞金稼ぎバウンティハンターのオレが海軍と関わらないのは不可能なのだが。

「わらわ達があそこで捕らわれておった時、何をしてくれたわけでもなし。あんなに近くにおるのに、見て見ぬふりをおった。嫌じゃ……」

……こいつらには、文句を言う資格くらいあるか。

「海軍にも今はまだ出来んことがある」

「だがそなたはやった。ここでもあそこでも」

「たまたま手に入れた能力を使つてな。それに、オレには失う立場もない。だから出来た。あまりオレに恩を感じ過ぎるなよ？ オレは自分のやりたいようにやっているだけだ」

「あつ、それは問題ない。正直もう恩とかどうでもよい」

「そ、そうか」

中々新しい反応だ。ならいいか。

恩を返そうとするのは立派なことだが、自分の好きにやっているだけのオレには必要ない。あえて言うなら普通に仲良くしたいぐらいか。隠し事をせずに済む関係は心地良い。

「きっかけではあったが、そんなこともう関係ない……ただただ欲しい……さつきはああ言ったが、わらわも少し、ほんの少しは不安だったようじゃ。だから、たまにこうさせてもらっても良いか？」

そう言つて、オレの胸元に顔を沈めてきた……かわいい……！
【メロメロ甘風^{メロウ}】の効果中ならアウトだった。自傷する余裕があつたかどうか。

「もちろん構わん。お前達が今のままでいる限り。だが、お前がこうやって頼れる相手はオレだけか？」

ハンコックの頭を抱きしめながら問う。

「(や、優しく抱きしめられっ耳元で……！ はあん……♡) い、妹や国民達の前で、あまり弱気な態度は見せられぬ」

「たしかに、お前はそうだろうな。だが、その妹達は姉の力になりたいんじゃないか？ なあ、ソニアとマリー？」

「へにやつ？」

少し惚けたハンコックを余所^{よそ}に、ドアの隙間から覗き見てる2人に言う。

「(ば、バレてたツ……!?)」

1人ただの出歯亀もいるが。

「(うわ〜！ うわ〜!! あ、甘々です……)」

「若いわね……」

「なっ、ななななっ?! い、いつからそこにいたのよ、あなた達ツ!」

「母さんが出て行った後だな。あと、言葉遣いが乱れているぞ？」

「そんな前から!」

オレから離れようとするハンコックの頭を後ろから抱きしめながら、疑問に答える。

逃がさん。もつとゆつくりしていけ。

「口、ロゼよ、もう良いのじゃぞ?(さ、さつきよりも力強く……うれしいが、ソニア達の前で、こ、こんなっ……)」

「ふははっ、遠慮するな。もつと甘えればいい。普段強気なお前が頼つてくれて、オレはうれしい」

「(うわあ……いじめっ子がいますよ。恥ずかしがっているのを知りながら、反応を楽しんでいますね……ハンコックさんの顔、真っ赤になっっちゃってます……かわいいっ!)」

「水臭いわよ、姉様^{あね}。私達、ずっと一緒だったのに。弱音なんて好きな

だけ吐けばいいじゃない」

「あ、姉様あねっ……！ 私、もつと強くなるから！ 安心して弱みを見せられるくらい、強くなるから！」

「う、うむ。わかった、わかったから……ちよつと離れて……」

ソニアとマリーも、前からハンコックに抱き着く。

後ろはオレが押さえているし、この抱き枕、もとい蛇姫様、もう顔以外隠れて見えんな。大変気分が良い。こんな皇帝陛下の表情はそう拝めん。恥じらう顔が庇護欲をそそる。

その後も、ソニア達とハンコックに構っていたが、これ以上見ていると家うちで保護して世話をしたくなりそうだったので解放した。しばらくの間ハンコックがもじもじしており、オレの理性が悲鳴を上げていたので、店の方に行つて、母さんにブラックコーヒーを入れてもらった。うん、苦い……。

ハンコックの王下七武海入りが決まり、彼女らが帰った後、『海賊女帝』ボア・ハンコックの七武海入りと……何やら頭がわいてるようなキヤッチフレーズがついたアイドルデビューとCD発売を知らせる、一面に顔写真が印刷された新聞が発行され、新聞もCDも飛ぶように売れたらしい。ファンクラブの会員カードは、無駄にならなさそうだな。

女にようがしまヶ島へ帰還途中のパフューム遊蛇号ユダ(※九蛇海賊団クジャの船)、その船長室

「ソニア、マリー、実は提案があるのじゃが……」

「何、姉様あね?」

「何でも言つて!」

三姉妹でアフタヌーンティーの最中、照れくさそうに切り出すハンコックに、冷静に対応するサンダーソニアとうれしそうなマリーゴールド。

「フィッシュャー・タイガーの所では、船員達が皆体に太陽のマークが入っているそうじゃ」

「ええ、あの船は私達と同じ、天竜人の元奴隷も乗っているらしい（※新聞の情報）から、区別が付かないようにするためにしようね」

「それがどうかしたの？」

「わらわ達もあれの上からタトウーを入れぬか？ 薔薇のタトウーを」

「え？」

長女の提案に、次女と三女の感想は同じだった。

重い。1人でやって欲しい、と。

「上からタトウーを入れるのは良いかもしれないけど、全員同じにする必要はないんじゃない？」

「ええ。姉様がROSEあねにしたいのはわかったけど、私達はほら、九蛇クジヤ海賊団のマークとかでいいんじゃない？」

自分達を巻き込まないで、そう遠回しに伝えようとする2人。

「そのじゃな……ロゼをわらわ1人でモノにするのは手に余るので、手伝って欲しいのじゃ」

「え？ は？ ええ!? 姉様あね、いつもの自信はどうしたの？」

「心配しなくても、回りくどいことせずに正面から押し倒せばいけると思うわよ?」

マリーゴールドが少々強引なことを言っているがそれも当然。

九蛇クジヤは恋煩いという、惚れた相手を思う余り、恋心でその身を焦がし世を去る者もいる部族。だから総じて恋に積極的で、所謂肉食系女子の集まりである！

「というかそもそもその話、姉様あねはロゼが自分以外とその……アーン♡（※自主規制）していいの？」

「む、むう……わかった、正直に言おう」

ハンコックがテーブルの紅茶を一口飲んで、一拍置く。

ソニアとマリーも喉を潤す。

「ひ、人に見られながらするというのも、悪くないと思ったのじゃ……」

「ブーッ!？」

顔を赤らめ、両の頬に手を当ててもじもじと身をくねらせ、かわいら

しい様子で、とんでもないことをハンコックが口走った。

妹二人が口に含んでいた紅茶を吹き出すという、淑女にあるまじき粗相をするが、それも致し方なし。長女が痴女染みた性癖を目覚めさせてしまったのだから。

長い間苦楽を共にしたとはいえ、互いのすべてを理解出来るわけではない……とはいってもいきなり過ぎる。戸惑う2人を責められはしまい。

では一体誰に責があるのか、あえて挙げるとするならば、

「(ロゼ……姉様^{あね}になんてことをしてくれたのよッ!?)」

今はここにいない、元凶のシルバース・ロゼしかないだろう。

『ソ、ソニア姉様……これ、どうするの?』

『普段はとても頼りになるのに、ロゼ絡みだとホントに斜め上を吹き飛ばすわね、姉様^{あね}は……』

姉妹のアイコンタクトと、ソニアは心の声を聞く見聞色で意思疎通を図り、姉の世迷言の対策を立てる2人。長年の助け合いによる以心伝心と、望まぬながらも2人が手にした動物系^{ソオン}の能力で研ぎ澄まされた感覚の無駄遣いである。

『あれ? でも人に見られるとかは置いといて、そんなに悪くないのかも』

『えっ? ちょ、ちよつとマリー? あなたまでそっちに回ると、私の負担がとんでもないことになるわよッ!』

『だって私達、そう簡単に他人に気を許せないし、恐怖こそ薄れたものの男は好きになれない。年も結構近いし、まだ子供だけどそれは時間が解決してくれる。おまけに強い。ロゼって私達の条件にちようど良くない?』

『……(一番の問題は海賊だってことだけど、姉様^{あね}へのあの軟化した態度なら)……確かに』

2人もお年頃(※今年17歳と15歳)、そういうことに少しは興味がある……否! 長女(※今年18歳)と一緒にニヨン婆先生の特別レッスン(夜の部)を受けるくらいには興味津々だった。

『姉様^{あね}がこうなったのもたぶん大体ロゼが原因だし、責任取ってもら

「いましてよう?..」

『…:…:…:そうね。こういうのは男が責任を取るものだって、ニヨン婆も言ってたし』

ロゼ（※今年11歳）に将来すべての責任を取らせよう、という結論に至り、姉妹のアイコンタクトは終わった。

「わかったわ姉様^{あね}」

「一緒にロゼを押し倒しましょう」

「おお！ わかってくれたか！」

本人のあずかり知らぬ所で、ロゼの自由を束縛する三姉妹同盟が結成されたが、これもロゼの好きにやった結果。男なら、責任を取るのが当然の筋であろう。

アマゾン・リリー帰還後

「二」というわけで、三姉妹まとめてロゼとピーツ！（※自主規制）する方法を教えて欲しい二」

「ほっほっほ、最近の若い者は進んでおるニョウ…:…:いやそなたら何を考えておるニョじゃツ!？」

ビシイツ!!

ニヨン婆のノリツツコミが九蛇城^{クシヤ}に響く。

引退した先々々の気苦労が増えてしまったが、かつて国を放り出した天罰が下ったのかもしれない。

“酒は飲んでも飲まれるな”

早朝、非番の女海兵の部屋

「う〜ん、頭が痛いわ……ヒナ頭痛……」

オリオリの実の能力者のヒナ、21歳。二日酔いだろう頭痛がする頭を押さえながら目を覚ます。

3年程前に海軍に入隊し、今は曹長の出世した、上層部の覚えも良い優等生。入隊した頃は他の同期の女海兵達と相部屋だったが、軍曹になった頃から今の個室が与えられた。

「昨日、何したかしら……？ 確か、いつもの2人にロゼと一緒にお夕飯を食べて……」

いつもの2人とは、己の信じる正義感の強さ故に、その正義から外れた上官の命令は効かずに歯向かい、狂犬と呼ばれる問題児のスモーカーと、地雷を踏むと簡単に発砲し、後で始末書を書かされることもあるが、仕事に関しては優秀なダデイの2人である。

2人共ヒナと同期で海軍に入隊し、実力に関しては申し分なく、スモーカーは世にも珍しい悪魔の実の中でもさらに希少な自然^{ロギア}、モクモクの実の能力と鍛えられた体術で手柄を立て、本来はもつと昇進してもおかしくないのだが、命令違反のペナルティで、それでもヒナと同じ曹長に。ダデイは非能力者でありながら海軍随一の狙撃の腕で、体中に装着した拳銃を次々に持ち替え途切れることのない精密射撃で手柄を立て、軍曹まで昇進している。

この3人には愛煙家という共通点がある。よく休憩時に喫煙所で遭遇し話をするようになった。もっとも真面目なヒナと愛娘の前でタバコを吸わないダデイはともかく、スモーカーは普段から色んな場所^所で葉巻を吸っているが。

面倒見の良いヒナが問題を起こしたスモーカーのフォローをするというのがよくある光景となっている。

「とりあえず何か飲み物を……」

ヒナが布団から出ようとする、

「う〜ん……」

自分以外の声と同じ布団から聞こえてきた。

見ると、彼女が実の弟のように可愛がつているロゼが無防備な寝顔を晒していた。というかヒナの抱き枕と化していた。

確かにヒナはこの少年から姉さんと呼ばれ、人から見れば少々良過ぎなくらい良好な関係を築いているが、実際は血の繋がりのない赤の他人。

たまに、『一緒に住んで本当の姉弟にならない?』と本気8割冗談2割で持ちかけているが、のらりくらりと躲されている。決して普段から同じ部屋の、同じ布団で一緒に眠る関係ではない。

「(二日酔いのような頭痛に、朝起きたら一緒に寝てる……いえ、落ち着きなさい。まだわからないわ。覚えていないけれど、たぶんこれはお泊り会でもしたんでしよう。ヒナ推測)」

11歳になったばかりの少年を、酔った勢いでついっもお持ち帰りからの朝チュンにコンボを繋げてしまったわけでは断じてない、そう自分に言い聞かせ冷や汗をかきながら、弟のほっぺを指で突いて平常心を保とうとする姿は、傍目には現実逃避以外の何物にも写らない。

「ん〜、ん?」

そうこうしていると、頬を好き放題弄られていたロゼが目を覚ました。

「お、おはよう、ロゼ。ちょっと聞きたいことが」

「おはよう姉さん。昨日着せた時もあったが、ゴージャスな寝巻だな。お嬢様っぽくてよく似合っているけど」

「ヒナ有罪!!」
キルティ

服を着せられたということは、つまり服を着ていない状態があったということ。限りなくクロである。

ヒナは1人で布団を被り閉じこもってしまった。

「えっ? 姉さん? お〜い、どうかしたのか?」

ロゼが声をかけるが、天岩戸に籠った天照大御神のごとく、不動の構えをヒナは取り、復活するのに時間を要した。

☆☆☆☆

どうしたものか……。

今朝目を覚まし姉さんに挨拶をしたら、布団の中に引きこもられた。何故だ。

根気強く呼びかけた結果、顔と手だけ布団から出して、見た目は亀みだいだ。今はオレが入れたコーヒーをちびちび飲んでいる。

寝巻を指摘したのが不味かったのか？ 似合っているのに、あのフリルが付いた白いゴージャスなネグリジェ。

「そ、それで、昨日一体何があったの？」

コーヒーを飲んで少し落ち着いたので、姉さんがおずおずと聞いてきた。

「何がって……もしかして覚えていない？」

「ええ……一緒にご飯を食べたくらいしか覚えていないわ。ヒナ忘却」

「そうか。つまり、何故オレがいるのかわからなくて混乱したと」

「……まあ、そういうことね（気になるのはヤツたのかヤツてないのか）だけど。ロゼの態度を見るにヤツてないのかしら？ ヒナ無罪ノットギルティ」

「？」

ならば話は簡単だ。

「では、昨日起こったことを伝えるところ……オレの能力を使って

！ 立体幻像ソリッドビジョン、起動!!」

ベッドに座って、姉さんから見える位置に昨日の出来事を3D映像として映し出す。

とりあえず、食堂でごはんを食べた辺りのことをオレ視点で流している。

「えっ、ちょっと何これ？ ヒナ困惑」

「ふははっ、人の夢がある限り、それを叶えるためにも、科学は日々リンクアップする。これはDr. ベガパンクの試作品、バーチャルシミュレーション具現化システム。ようするに、立体的に映像を映し出

す機械だ」

見聞色で読み取ったオレの過去をそのまま映し出しているので、細部までバツチリだし、音声も再現している。

こんな複雑な機械、いくらメカメカの実を食べてから機械のことを理解しやすくなったとはいえ、過去を見る見聞色がなければオレには再現出来ん。それを素で思い付いて作り出してしまったDr. ベガパンクはやはり頭がおかしい。良い意味で。まだ製作費がかなりかかるが、オレには関係ない。

「(えっ? えっ? つまりもしヤッていた場合は……わたくしとロゼのチュドーン! (※自主規制) が立体的にツ!?)」

戸惑う姉さんにこれで昨日のことを伝えるところ。

○○○○○

海軍本部で訓練に混ざった後、任務帰りの3人と会い一緒に夕飯を食べることになり、今年になって手に入れた子電伝虫で家に連絡してから食堂に来た。

「おい、ロゼ。火イ点けてくれ」

食堂で注文するために、夕食時で混雑した列に並んでいる間、吸い口を切った葉巻を向けられ頼まれる。

「ちよつとスモーカー君、ロゼの前で、というかい加減に喫煙所以外で吸わないでくれる? ヒナ忠告」

「食堂の席は喫煙OKなんだから、ここもほとんど変わらねエだろ」

「キャロルの前で吸ったらコロス」

「姉さん、タバコや葉巻には慣れているから気にならない。それよりダデイさん。スモーカーさんが噂の愛娘に紹介されているのに、オレは会わせてもらっていないことの方が傷付く」

タバコや葉巻を吸う海兵は多いし、母さんもタバコを吸っている。副流煙に負けるほど柔やわな体はしていない。(※ロゼは特殊な訓練を受けています。真似しないで下さい)

「キャロルがもつと成長して、自分で判断が出来るようになるまでは

認めん!!」

「そうか……」

人差し指から火を出し、スモーカーさんの葉巻に着火すると、満足そうにスモーカーさんが吸い始める。

「フ、この点け方でいいんだよ。この前は危ねエ点け方しやがつて……」

「【指弾^{シダン} 火花^{シカ}】のことか？ あれは本来動く敵の目をピンポイントで焼く技だから、動かん葉巻に火を点けるなんて造作もないぞ？」

親指と中指で指を鳴らす瞬間、中指から火を出し目標に飛ばす技だ。【飛ぶ指銃^{シガン} 撥^{バチ}】の威力を抑えスピードを上げた、敵の目に放ち一時的に視力を奪うために使っている【指弾^{シダン}】の派生技。

「お前そんなえぐいことしてんのか……」

「流石に人に撃つたことはないけど、猛獣と戦う時には便利だ。髭に着火したりするな」

「いや、シャボンディには猛獣なんているの？ ロゼ、危ないから大人しくわたくしの家^{うち}に来なさい？」

「シャボンディではなく、たまに飛んで行く無人島にいる。それと、海賊を探しにシャボンディに来るのが面倒だから遠慮しておく」

ルスカイナの動物は、威力を落とした【指弾^{シダン}】じゃ効かず目潰しにもならん。オレの【指弾^{シダン} 火花^{シカ}】程度の小さな火でも、顔に火が点けば流石に動揺するので動物相手には効果覲^{てき}面だが、その程度の火傷なら次の日には治っている。環境に適応した結果、本当に自然治癒力が強いな。

個室を貰ってからたまに姉さんからこんな風と一緒に住まないかと誘われるが、流石に悪いし、オレにはちやんと帰る家がある。

「あなた、もう遊んで暮らせる額稼いでいるらしいじゃない。興味本位で調べた海兵が言い触らしていたわよ？ 少し休業したら？」

「姉さん。お金はあるに越したことはないし、海賊はいない方が良いでしょう」

そんなことを調べる暇があるなら、訓練するなり海賊の情報を集めるなりした方が良くないんじゃないか？

「ほう……腕に自信有りか。おれと射撃勝負でもしてみるか？」

「拳銃ではなく指銃これでいいならまたの機会に」

何やら海軍切つてのスナイパーのプライドに火が付いたらしい。

「射撃に限らないただの勝負なら食後でもいいけど？」

「……やめておく。お前の体に銃弾で傷を付ける術は、今のおれにはない」

まだ武装色が出来ないからな。まあこの人ならもつと昇進すれば、オレかセンゴクさん辺りに目覚めさせられるんじゃないかな。

新兵の頃の訓練で、オレやゼファーさんがスモーカーさんに攻撃していたのを見たから、覇気はきの存在はこの人も知っている。ゼファーさんは能力者には必ず覇気はきの存在を拳で体に叩き込む。能力で効かないと油断している所に、武装色の一撃を食らい致命傷を負うのを防ぐために。

「ダディ君、そもそも効こうが効くまいがロゼを撃たないでくれる？」

この子の体は自分の意志で変えているから、能力が間に合わない可能性はあるのよ？ ヒナ警告」

「関節を撃ち抜いて動きを封じるだけだ」

「目を撃ち抜かないだけ良心的だな」

どっちも撃たれるつもりはないが。

「そう思うならお前も止めろ」

「しかしだスモーカーさん。オレの【指弾シッダン】は一時的に視力を奪い、後遺症は少々視力が落ちるかもしれないくらいだから、充分良心的だ」

「お前それ絶対ぜってエおれに撃つなよ……？ 狙撃手は目が命だ」

目では捉えられない相手は見聞色で捉えれば良いが、両方優れているに越したことはないな。

「言われずとも。海兵から未来を奪うつもりはない。海賊には撃つけど」

捕まえている時点で未来は奪っているも同然。流石に火の方はあれだが、必要とあらば躊躇ちゅうちゆう理由はない。普段撃っている動物よりのが小さいので、あまり速い相手だと狙えないが。止まっていれば余裕。

「おれ、たまにお前が何で海賊を今まで殺したことがねエのか不思議になるな。実は何人か殺^やつてるだろ?」

非常に失礼なことをダディさんに言われる。

「殺^やつていない。海兵の海賊の討伐は処刑と同じ扱いだが、オレは民間人だぞ? 捕らえた海賊をどうするかは法が決めること。たとえば

DEAD OR ALIVE^{生 死 問 わ}の賞金首でも殺さん」

「お前はそこらの海兵より海兵らしいな。そこらの海賊より海賊らしくもあるが」

「失礼な!!」

「いやだって、海賊の物は身に付けている服以外、根こそぎ剥^むぎして辱^はらしいじゃねエか」

「法的には何の問題もない。海賊は人権を剥奪されるから、あれは誰の物でもない。だからオレが貰^くって構^わわん」

「理論武装してやがるが、七武海とあまり変わらねエぞ?」

確かに似た部分はあるが……

「オレは海賊以外から剥^むぎした覚えはない。それに収穫の一部を納めてなどいないな」

「ふん、賞金稼^{バウンテイハンター}ぎと七武海を一緒にするな。海賊はどこまでいこうと海賊だ。信用ならねエ」

スモーカーさんが話の流れを変える。

もしかして庇^{かば}ってくれたのか? この人は何気にオレに、というよりも子供とか民間人に優しい。歩く時に歩幅を合わせてくれたりする。指摘すると絶対に否定するけど。オレを子供かつ民間人として扱^あう非常にレアな人。

「最近も問題を起こして除名されたのと、殺害されたのがいたわね。たしか……」

「逃^にがっているのが『擬身^{ぎしん}』で、死んだのがウロボロスだな。あと七武海殺害だけでなく、Dr. ベガパンクの研究所から資料も奪^うわれたらしい。オレも行ったことはないが、新聞に載^のっていた……:というか本人に直接聞いた。治療してやった恩を仇^{あだ}で返^{かえ}されたって」

『錬金術師』ウロボロス、元2億7000万ベリーの懸賞金が懸^かけ

られていた、黄金を生み出し操る、覚醒したゴルゴルの実の能力者だった。

能力で生み出した黄金で七武海の地位を買っていた彼は、世界政府にとつては非常に良い金づるだっただろう。死んで能力で生み出した黄金は消えただろうな。もう使ってしまったとしても、世界のどこかでババを掴まされた人がいる。

空いた席にはハンコックと、最近新世界で四皇の「百獣」に敗れて壊滅したスリラーバーク海賊団の船長、元3億2000万ベリーの賞金が懸けられていた、カゲカゲの実の能力者の「影法師」が加入した。今は魔の三角地帯に潜んでいるらしい。

「そうそれ……あれ？ あなたが海賊を異名で呼ばないのは初めて聞いたわ。「錬金術師」じゃないの？ ヒナ疑問」

「死人はもう海賊じゃないだろう」

あとは引退した海賊のことも異名で呼ばないな。

会ったことないけど、イヌアラシ伯爵とネコマムシの旦那とか。

「スモーカーさん的には、死人も海賊？」

「いや、死んでんだからそこは正直どうでもいい」

「でもロゼ。あなた、ゴールド・ロジャーのことは死んでいるのに「海賊王」って呼んでるし、嫌っているじゃない。ヒナ指摘」

「「海賊王」は死んで海賊じゃなくなっても嫌いだから。スモーカーさんはローグタウンで処刑を見たんだって？」

この人の出身は偉大なる航路だと聞いていたが。

「ああ、たまたまな。だからあの言葉も聞いたし、死に際の顔も見た。あの男、確かに笑っていた。自分の死を受け入れて、笑ってやがった」
ふうん、だから海賊はどこまでいこうと海賊って言うのか？ 「海賊王」が死の間際まで変わらなかったから。

「ふははっ、死に際の言葉を直接聞いても海賊にならないあたり、本当に人の言うことを聞かないな」

「そんな理由で海軍に入ったわけじゃねえよ!!」

「冗談冗談」

「つたく……とにかく政府に認められようが七武海は海賊、信用なら

ねエ」

まあ、王下七武海制度がいらないと考えている人は海軍でも別に珍しくはない。

「おれは七武海には興味ないな。狙撃手がいらない。それより赤髪海賊団の『追跡者』^{チェイス}とか、白ひげ海賊団16番隊隊長とかと決闘したいな」

どっちも狙撃手で有名だな。

海兵が四皇の船員とそう簡単に戦えないと思うぞ。下手を打てば海軍全体の戦争になるかもしれないから。

そもそも

「白ひげ海賊団はともかく、赤髪海賊団は今東の海だから厳しいな」^{イーストブルー}

四皇が一体何しに行つたんだか。元船長の墓参りか？

「ちつ……相変わらず、どこから情報を仕入れてくるんだか」

「新世界から東の海^{イーストブルー}に行つて、シャボンディで目撃されないわけじゃないか。四皇から七武海に話を戻すと、『砂漠の王』は海軍内でも人気が高いぞ？ 召集には必ず応じるし、顔に似合わず紳士で礼儀正しいって」

「じゃあお前は信用してるのか？」

「いや全然。海賊が紳士だの礼儀正しいだのと胡散臭い」

オレが信用している七武海はハンコックだけだな。直接会つたことがあるのもあいつだけだし。

「そもそも七武海を信用なんかする必要はない。ただ海賊の時代を終わらせるために利用すればいい。王下七武海制度自体は間違っていないと思うぞ？ 政府の人選に問題があるだけで」

周りに聞こえないように小声で言う。

本当に何故あの裏切り者を七武海に選んだ。案の定、問題を起こして抜けたじゃないか。

「ロゼ、絶対他の海兵にそんな政府を貶すようなこと言っちゃダメよ？ ヒナ注意」

「オレは相手を選んで言っているから」

「スモーカーとヒナはともかく、おれはいいのか？ 口を滑らせるか

もしれんぞオ？」

「その時はオレも、たまに訓練外で撃たれていることをうっかり滑らせてしまうかもしれない」

「おれとお前の仲だ、安心しろ」

「ああ、安心だな」

そうこう話していると順番が回ってきた。

財布を出して料金を払おうとして、落としてしまう。

「もう、何やってるの？」

姉さんに拾い上げてもらった。

「ありがとう。ちよつとドジった」

「……………はい、財布（今のつて……………後で話をする必要があるわね）」

注文を受け取り席に着き、食事をしながら話をする。

話の内容は、主に今年に七武海入りしたハンコックと『影法師』についてだ。能力や強さ、エピソードなど、ハンコックの情報はすでにまわっている範囲で、『影法師』のは知っていることをすべて話した。

ハンコックについては石化の能力者というくらいしかまだ広まっていない。あいつの場合、九蛇海賊団船長『海賊女帝』の悪名より、アイドル蛇姫ちゃんとしての方が有名だ。すでに何度かコンサートを開いたとか。そしてその帰りに賞金首を捕らえて海軍本部やシャボンディに来る。海軍にもファンが出来た。今はハンコック1人だが、やがてソニアやマリー、九蛇海賊団もデビューするらしい。もうハンコックの次の世代からは、海賊国家じゃなくてアイドル国家としてやっていけばいいんじゃないか？ 応援するぞ？

『影法師』の悪魔の実の能力は、自分の影を実体化させ攻撃したり、自分と影の位置を入れ替えたり、他人の影を奪い自身の強化を行い、影を奪われた者が太陽の光を浴びれば消滅する、等の多彩な攻撃が可能で、影を奪いさえすればどんな鍛えた奴でも太陽の光で殺せるという凶悪極まりない能力だ。

食事を終えて、スモーカーさんは葉巻を買いに、ダデイさんは走っ

て自宅に帰った。朝は家族と食べるが、帰りはいつになるか海次第なので、待たずに食べてもらっているそうだ。

「ねえロゼ、わたくし明日は非番だし、今日は部屋に泊まって行かないかしら？ ヒナ招待よ」

「いや……いきなり言われても着替えなんて持って来てな」

「服ならあるわよ。サイズも合うはず」

「……なんでそんな物が姉さんの部屋にあるんだ？」

「こういう時のために。合わなくなったら孤児院に持って行くわ。ヒナ寄付」

「わかった。ちよつと連絡してくる」

というわけでまた母さんに連絡し、ため息を吐かれながらも許可が出る。

今度ウイスキーを用意して持って帰るか。今11歳で、どこから見ても子供にしか見えんオレに普通の店で買うことは出来ないが、方法はある。

「というわけで、今日はよろしく」

「ええ、お喋りしたりしましょうか……」

適当に飲み物やらを買ってから、歩いて姉さんの自宅に到着。

お邪魔したこと自体はあるが、泊まるのは初めてだ。よく整頓された上品な部屋で、変わった所は小型のワインセラーにシャンパンが保管されていることと、ドネルケバブを焼くための回転する調理器具があること。

ワインセラーはもつと大きいのが家にあるが、あんな調理器具は初めて見た……業務用じゃないのか？ あれ。

「さてと……じゃあ」

ガシャン!!

オレの首にピッタリ【禁縛^{ロッキング}】される。何の意味が？

「ロゼ、正直に答えてね？ ……財布に入っていた『海賊女帝』のファンクラブカード、しかも0番ってどういうことか、わたくしにわかるように教えてくれるかしら？ ヒナ尋も、質問」

……あく、さつき財布を落としたりした時に見えたのか。そういえばハンコックの話をしていた時に睨まれていた。それで詳しく聞きたために今日は泊まらないかって……この首輪みたいな【禁縛】^{ロック}は、また脈を測って嘘を見破るため？ 能力で錠として完全に分離しているとはいえ、元は体の一部、感覚が共有出来るようになることも充分あり得る。

三姉妹の秘密に触れないよう言葉に気を付けながら、正直に話しか。

「ファンだから持っている。カードは貰った、本人に」

「弟が知らない内に海賊に誑かされた!? ヒナ絶望!!」

床に手をつけて項垂れてしまった。

本人に渡されたなんて話を簡単に信じる辺り、やはりこれで脈を測っているようだ。

しかしこれは良くない流れ。

「誑かされていない。あと、会ったのは海賊になる前だ」

一度は石化させられてしまったが、誑かされてはいない。情に絆さ^{ほだ}れてはいるかもしれないが。

「……嘘じゃない……では何故、九蛇^{クヅヤ}の女と海賊になる前に会ったことなんてあるのかしら？ ヒナ糾弾」

ワインセラーからシャンパンを持って来て開け、グラスに注ぎながら聞かれる。

「どうせ飲むなら話が終わってからにすれば？」

「飲まなきゃやってられないのよ、ヒナ飲酒！」

グラスを一気に飲み干し、また注ぐ。

良いやつだろうに……シャンパンも手に入れるか。手間は同じだ。

「そうか……それで、海賊になる前に会っていたのは、あいつがシャボンデイで行き倒れていたのを（ニヨン婆が）拾ったからだ」

「流石にそれは……嘘じゃ……ない、ですって？」

「ああ、女ヶ島^{にようがしま}から（人攫いに攫われて）出て来たものの、故郷に帰りたくても（奴隷にされたせいで）帰れず、（マリージョアから逃げて）シャボンデイに辿り着いたそうだ」

すごく言葉を省きながらも、嘘は言っていない。

「……結局、どうやって帰ったのよ？」

呷りながら聞かれる。

かなりのペースで飲んでいるが、大丈夫なのか？　もう顔は赤い。

「ビブルカードは（ニヨン婆が）持っていたようだから、シャボンディにいた海賊から蒸気船を奪って、凧カームスルトの海を越えて帰った」

「つまり、彼女にとってあなたは恩人？」

「そういう言い方も出来る」

「そう……逆だったのね……やっぱり飲まなきゃやってられないわ。ヒナ焦燥（このままでは……）」

「いや、もう止めておいた方が……いくら明日非番だからって、体を壊すぞ？」

「あなたが原因よ。ヒナ自棄やけ」

オレの静止も聞かず次々に瓶を開けて飲んでいく。

尋問、もとい質問は終わったので首を分離して首輪を外す。

そして……

「ふふっ……ロゼえく、なあんでそんなに離れているのおく？　もっところつちに來なさい。ヒナ命令めいれえく」

とろんとした目付きで手招きされる。

完全に酔っ払いが出来上がっていた。酔った影響で普段よりかなり雰囲気きふきが緩い。ヒナ泥酔。

「別に離れていない。姉さんが酔っばらって、視覚の遠近感が狂っているだけだ」

「何を言ってるのおく？　わたくしはあ酔ってなどいくまくせくんっ

！　ヒナ素面しらふう」

「酔っ払いは皆そう言うんだ!!!」

とはいえ、酔っ払いは人の話を聞かないし、こっちが大人しく言うことを聞くことにした。

このままでは何度も何度も同じことを言われる無限ループが発生する。

「はい、ロゼ確保お。わたくしはあ、狙った獲物は逃がさない。今日

はもう離れてはだ〜めっ♡」

近付いた所を捕まり膝に乗せられる。これは今日はオモチャだな。ロゼ玩具。

「聞いてよ〜。この前ねえ〜……」

その後は酔っ払いの愚痴を聞かされることになった。普段から結構聞いているが、酔っているせいか中々容赦がない。

「というか……海兵って、大変だな……」

「な〜んで能力者のわたくしが水泳訓練を受けないだけで、ブーイングなんてされなくてはいけないのよう。同じ能力者のスモーカー君は何も言われなかったのにい。ヒナ不満〜」

「それは、皆姉さんの水着を見たかったんだろ。その気持ちはオレにもわかる」

ついに遡って新兵時代の愚痴まで言い出した。

水泳訓練は海で戦う海兵なのだから、能力者でないなら泳げるに越したことはないし、報告していない隠した能力者がいないか探る意味もある。

「ふふっ、じゃあ〜後で一緒にお風呂に入る時に見せてあげるわねえ〜。ヒナ水着い」

水着は持っているのか。オレはない。泳ぎの練習をする前に能力者になったから。

「いや、あれだけアルコールを摂取して風呂は止めた方が」

ただでさえ能力者だから危ないのに、下手をすれば心臓発作で死ぬぞ。

「後で一緒にお風呂に入りますよ〜」

「いやだから」

「一緒に入りますよ〜」

正に無限ループ！

もういいや。出来るだけ水を飲ませてアルコールを薄めながら時間を稼ぐか。もしかしたら酔いが醒めてなしになるかもしれないし。それはそれで残念だが。

「わかった。楽しみだ。だがもう酒は飲まないでくれ。飲むなら水

を」

「は〜い！ ふふつ、楽しみなんてえ大胆ね〜！ ロゼ助平〜！」

テンションが高いな……。

「まあ、周囲からの評価に不満や不平があるなら、これから変えていけばいい。もうすぐ姉さんも将校、自分の部隊が持てるようになる。多くの部下に慕われている人間には、自然と他の人間からも人望が集まるものだ。姉さんなら大丈夫、面倒見の良さはオレが保証するから」
確か少尉以上になれば、誰か上官の部隊に所属するか、自分の船を持って部隊を率いるか選べるはず。スモーカーさんは絶対に自分の部隊を持つだろうな。

「励ましてくれてるの？ ありがとう！ ヒナ感激よ」

「あれだけ愚痴を言われれば励ましもする。本当……毎日お疲れ様」

しばらくされるがままに揉みくちやにされてから、

「……でも、あなたはあなたで心配だわ。ロゼ、もう少しあの島での自分の評価を改めようとしなさい」

真面目な口調でそう言われる。ようやく酔いが醒めてきたか。

一緒にシャボンディパークに遊びに行った時のことだな。悪いことをした。

「海軍に入るわけでもなく、お金のために力で人を傷付けているんだ。たとえその対象が海賊でも、あの反応は仕方ないさ。彼らは弱い。オレを恐れるのは当然だし、関わることで巻き込まれる可能性は確かにある」

改めようにも、ああも避けられては話が出来んし……行動あるのみだな。

「せめて、自分が捕まえた海賊の子供の面倒を見るのは控えなさい……聞いているのよ？ わざわざ鍛えているって。復讐でも考えていたら……」

「それは出来ん。親が海賊でも子に罪はないし、あいつにとっては家族。知らなかったで済まんし、たとえ知っていてもあの海賊のことは見逃さなかつただろう」

似たような境遇で、自分は家族が大事なくせに他人の家族はインペ

ルダウン送り。地獄があるならオレは地獄行きだな。

親の海賊船から海賊旗を外し、船で生活していて、様子を見るついでに軽く鍛えている。これから何をするにしても、オレに出来ることなんて限られる。いつまでも親の仇に付き纏われるのは嫌かもしれないが、この大海賊時代に自分の身を守るくらいのは必要だ。それまで我慢してくれ。復讐がしたくなったら何時でも相手になるから。「はあ……本当に譲らない所は譲らないわね。でも、お風呂は一緒に入りましょうね？ ヒナ混浴」

「覚えていたか……だがもう少し時間を置いた方が」

「大丈夫よ。体の隅々まできれいにしてあげるから♡」

「いや、流石にそれはマズ」

「一緒に脱ぎ脱ぎしましょうね？」

そしてオレの服が脱がされ……

☆☆☆☆☆

「ぐくり……」

「ここから先は見せられない」

ソリッドビジョン
立体幻像を停止させた。

姉さんが覚えていると言った所はがつつり飛ばしたので、そんなに時間はかからなかったな。

「ちよ、ちよっと！ どうして止めるのよ!? (ここまでは思い出したわ。励まされたのがうれしくて、『海賊女帝』に取られたくなくて、わたくしが完全にヤル気だったことも！ 結局最後まで出来たのが全く思い出せないっ！ ヒナ不覚……)」

「そうは言うが流石に入浴中は……では音声だけということだ」

「………仕方ないわね、それでいいわ。ヒナ妥協ね」

「だが、知らない方が良いと思うぞ？」

「ここまで見てそれはないわ。ヒナ却下」

はあ……仕方ない。姉さんが何を知らりたいのかは察しが付いた。そこだけ流すか。

『ねえ、ロゼ……禁断の関係って、どう思う?』
『ごほっ?!』

自分の声の録音を聞いて咳き込む姉さん。
だから言ったというのに……コーヒーを飲み干していて良かったな。

『そりゃあ、いけない関係だ』

『そうね……だからこそ燃えると思わない?』
すると紐を外す音が聞こえる。

確か水着を脱いだのだったか。濃い赤色のビキニを。てつきり競泳水着だとばかり思っていたが、よく考えれば泳げん能力者が競泳水着なんて買うわけがない。しかし大変良いものだった。水着ありも水着なしも。

2年前オレがハンコックの魅了の石化に、ある程度は自傷もせず耐えられたのは、美人からのスキンシップに慣れていたらだろう。あと気合。

『待て、落ち着くんだ! 今の姉さんは酔って正常な判断が出来ていない!』

『そこは、『ダメだ、オレ達姉弟なのにそんなこと……』って言われた方がより燃えるわね。ヒナ興奮』

『興奮させたら意味ないだろうがアツ!!』

本当にそれ。酔っ払いに言っても意味がないが、姉弟ですることではないとわかっているなら止まってくれ。

『あなたがいけないのよ? わたくしを惑わして……それに、あなたのズキーン! (※自主規制) はすっかりその気みたいだけど? ふっ……ロゼも自分に正直になりなさい』

正直にと言われても、ただでさえ“冥王”の息子って爆弾を抱えている上に、相手が酔っぱらった姉……スリーアウトだ。

『素手で全身隈なく、体を密着させてじっくり洗われたりすればこうもなる! ありがとうございました!!』

かなり気持ち良かった。だからこそきつかったとも言う。あのエロい洗い方は絶対にわざとだ……。

「げほっ!？」

「止めるか？」

「いいえ、早く続きを聞かせなさい。ヒナ催促！」

目が血走って腕を掴まれる。今は逆らわない方が良いな。

『大丈夫……優しく奪ってあげるから。姉さんと、もつとイケナイコトしましょう……?』

ドサツ!

そう言った後に何かが倒れるような音がした。

「えっ? ここまで来て何なのこれは?」

「あれだけ飲んで風呂に長時間入れれば倒れもする」

受け止めたが、目の前で意識を失い倒れられるのは非常に心臓に悪い。

「……これで終わり?」

「この後はオレが体をタオルで拭いて、服を着せて髪をドライヤーで乾かせた後に、ベッドまで運んで一緒に寝て、今日の朝までぐっすりだ」

「……なんでわざわざ一緒に寝てたの?」

「今日は離れてはダメって言うていたじゃないか。これに懲りたら、風呂の前後に酒を飲まないように」

1人でそれをやったら命に関わる。人がいれば良いってわけでもないが。

「(結局最後までは出来なかったと……ヒナ未遂)」

「返事は?」

「わかったわ、気を付けましょう(続きはまた今度……血の繋がりはないからセーフ。ヒナ義姉)」

こうして、お泊り会というにはあまりにインモラルな一泊は終わった。姉弟ですることではない……普段真面目な人がストレスを貯め込むとああなるんだな。

組織に所属するというのは、大変で気苦労が多いものだ。オレはこれからも賞金稼ぎで気ままにやろう。

後日、オレが捕まえた海賊の子供の様子を見に行くと、

「気に入らねエことがあると八つ当たりにもぶん殴ってくるろくでなしの親だったし、てめえのことは恨んじやいねエよ。だからもうあの厳しい修行は止めろオ！ 悪いと思うならもつと甘やかせエ。トリスタンとチェンジ！ モフらせろく!!」

と言われた。

「ええ……恨んでないなら恨んでないで別にいいが、それはそれとしてあの程度で音を上げるとは、甘ったれ過ぎじゃないか？ そんな調子でお前はこれから先の人生をどうやって生きていく気だ。渡したお前の親の懸賞金も、使うだけで稼ぎがないならいずれなくなるし、子供が大金を持っていたら狙われるぞ？ おまけにカナツチ……修行は続行だな」

「止めろつつつてんだろうが！ そもそもてめえ以外ならなんとか出来てんだよ！ 聞けよ、人の話を！ この鬼イ！ 悪魔ア！ 人でなしイ！」

「なんとも言え。お前を一人前にするのがオレの責任だ」

鬼（教官）も悪魔も友達だな。ヒトデナシは会ったことないけど。ヤツデヒトデの魚人の。

“under the rose”

シャボンデイの無法地帯。その比較的華やかな区画にある店。

本来であれば年齢制限が発生してしかるべき店に、オレは入っている……薔薇の花束を持って。ここに来る時は必ず持つて来るように言われている。非常に目立つが、こういう条件だ。シャボンデイの間は、この薔薇が枯れない間に会いに来てくれと。でないとうっかり口が滑ってオレの秘密を喋ってしまうかも……だそうだ。

受付で名乗ると、このオーナーの部屋の鍵を渡される。本名ではなく別の名を言っているが、正直変えて欲しい。わかりやすくはあるが、自分で名乗りたくはない。

部屋に移動中に従業員から、何故子供が……という目で見られるが、何やら数人がひそひそ話した後、オーナーはシヨタコンだ、とか言う声が聞こえる。あいつ、自分で自分の首を絞めているじゃないか。この店を会場場所にしてこんな目立つものを持って来させるから……まあ別に風評被害ではなく事実だが。

そのシヨタコン呼ばわりされているオーナーの部屋の前に着き、鍵を開けて中に入る。

オレが今までに持って来た薔薇が、何本か花瓶に入れられたりしている。壁にはオレの写真が何枚も貼られており、人間屋ヒューマンショップに手配されていた時の顔写真まである。薔薇はともかく写真は引く。全部カメラ目線ではない盗撮の写真だ。

「ふふふ、いらつしやい。今日はどのコースにする？ 私のおすすめは、『女王様の朝までじっくりコース・本番あり♡』よ、『茨の主いばらのあるじ様♡』」

「開口一番それか……セクハラで訴えるぞ？ ステューシー」
ベッドに腰掛けた女王様に花束を手渡す。

まだ若く（※ロゼの主観）スタイルの良い整った顔立ちの女性。肩を出した袖なしの、スカート丈が膝上の赤いドレスの上から、腰までの長さの白いマントを羽織っている。

短めのウェーブがかかった金髪の上に、白い帽子を被り、その帽子

には赤い薔薇。

このオーナーで、他にも世界各地に飲食店に娯楽施設、このよ
うな大人の紳士淑女のための店等を経営しており、弱冠20代（※口
ゼの憶測）にして裏社会で「歓楽街の女王」の異名を持つ女に、出会
い頭のジャブ代わりに言葉をぶつけられる。

「残念ながら、あなたは未成年という以前に、世界政府非加盟国の国民
どころか戸籍すらないから、訴訟を起こせないわよ？」

渡した花束の薔薇を花瓶に移しながらそう言われた。

オレはその隣に座る。

「そうだった……オレ、海賊と同じで人権なんて持ってなかった。社
会的弱者だった。このまま泣き寝入りか……」

例えばオレが誰かに殺されたとして、その人間は罪には問われな
い。そもそもオレは存在していないことになるから。法的に人とし
て認められていないから。

「大丈夫、私が泣かせるのはよがり声だから。気持ちよく寝かせてあ
げるから♡」

「11歳のオレを個室に連れ込んでそんなことを言っているから、店
員達にシヨタコンと呼ばれるんだ」

「あら、見当違いも甚だしいわね。私は将来有望な男に、今の内から唾
をつけているだけなのに。保健体育の実技を自分好みに教えている
だけで、まだ我慢しているのに」

あれは我慢の内に入るのか？ 本番はやっていないだけで、何も我
慢していないだろ。

ここから帰るとトリスタンから、雌の匂いがするって言われるんだ
よな……せめて女って言ってくれ。

「では報酬はお金で良くないか？」

「嫌よ。お金で「茨の主」様は思い通りにならないじゃない。いつ
も通りあなたのか・ら・だ♡」

そう言って舌なめずりをするステューシー。

やはりお前はシヨタコンだし、我慢する気もないだろ。こいつの対
象外の年齢になる前に、可能な限り友好関係を築いておかねば。まさ

か体を売る羽目になるとは……すまん母さん、あれだけ言われていたのに、シヨタコンに捕まった。それも無駄に高性能な。

「その『茨の主』って呼び方なんとかならんのか？ 受付で名乗るのは恥ずかしいんだが……」

ROSEだからバラで茨、あと茨のroad（道）と茨のlord（主）をかけているらしい。

誰の未来が茨の道だ。まだ11年しか経っていないオレの人生を勝手に決めるな。こいつによると、オレは間違いなく四皇とぶつかるそう。それも、オレの血筋だけが理由じゃないとのこと。何を知っているんだか。

「あら、だったらどれで名乗る？ 『機甲のロゼ』？ シルバーズ・ロゼ？ 九蛇の男？ 他には『奴隷解放の共犯者』とかかしら？」

論外なのは置いておくとして、そもそもこの店でオレとわかる名で入りたくないな……。

「……わかった。『茨の主』でいい」

「ふふふ、私の情報収集能力の前では、あなたは丸裸も同然よ。この技術を買われて、私は世界貴族直属、世界最強の諜報機関、C P I—AEGIS〇〇に選ばれたのだから」

そうなのだ。このシヨタコンストーカーこそ、ハンコックの七武海入りを政府の中枢にいるという五老星に話をつけてもらった伝手にして、C P I—〇の諜報員。

経営している店の利益から天竜人の遊ぶ金を生み出したり、政府にとって邪魔な人間を女、酒、麻薬で骨抜き、廃人にして闇に葬るエージェント。さつきは冗談半分で訴えるなんて言ったが、訴えた所で意味はない。C P I—〇の任務には超法規的措置が取られる。だから麻薬を使おうが、シヨタコンだろうが罪に問われない。

今のこいつの大きな標的は四皇『ビッグマム』。あの女は5歳で5000万ベリーの賞金首になり、37年前から夫を替えながら毎年子供を産み続け、妊婦のままでも暴れ回った信じられん海賊だ。妊娠中くらい産休を取れ。ついでに海賊をやめろ。子供に海賊などさせるな。信用を得て近付き、内部から崩壊させようとしているそう。

「ビッグママ」の後継者は、誰が2代目船長にふさわしいのか？ という火種を焚き付けているとか。

この若さ（※ロゼの個人的な見解）で六式ロクシキと覇気をマスターした才色兼備の作業員でありながら、シャボンディで賞金稼ぎバウンディハンターをしているオレのファンという中々個性的な人物だ。

オレをCサイファーボール Pに勧誘し、一緒に「歓楽街の帝王」として活動しようとよく言ってくる。海軍は迷うこともあったが、これに関しては論外だ。確かに能力的には向いていると思うし、戸籍のないオレは足がつかないからと政府も認めて簡単に潜りこめるだろうが、任務で人を殺す気がない。

「空を飛ぶオレを【月歩】ゲツポウで尾行するとは……それもオレに気取られない距離を維持して」

オレだけでなく、父さん達からも自分の存在を隠して家を見張るとは……。

「確かにあなたの見聞色は並外れているけど、普段から全力で使っているわけじゃない。標的に気取られないよう気配を消すのと、自分の心を殺して任務に徹するのは、コネで入ったどこぞのボンクラでない限り、覇気を使いこなせていない諜報員でも出来る、Cサイファーボール Pの必須技能よ。私なら、普段のあなたに気付かれずに尾行するのも難しくないわ」

何故その凄い技術をオレのストーキングに使ったのか。

こいつの恐ろしい所は、オレがマリージョア襲撃事件の犯人として怪しいと疑って調べていた……というわけではまったくなく、それ以前に人間ヒューマンシヨップ屋襲撃事件についてシャボンディで調べている時にオレのことを見かけて、それ以来オレのファンになりシャボンディに拠点として店まで建てて、ただただマナーの悪い追っかけとして尾行をしていたら、オレが必死に隠していた秘密を好き放題手に入れてしまった所だ。将来性と自分の今の力に満足しない強欲さが気に入ったらしい。

そんなん対策出来るか。ふぎけるな。ソニアに気配がしないこと

で見破られてから、民間人程度の気配は出すようにしていたのだが、まさかそれが原因で尾行しやすくなつて、こんな形で裏目に出るとは……仕事もせずにオレのストーキングをしていたくせに、他のCP-Oが気付かなかつたオレの犯行に唯一気付いた辺り、世の中おかし
い。

オレを脅してきた時に、心の声を聞く見聞色でこいつのことは調べた。調べて後悔した。自分に向けられる情欲を詳しく知るとい
うのは中々堪える……オレに自分の心を知られることで絶頂すら覚えて
いて、ドン引きだつた。

「私がいる時に、あなたが客としてこの店に入ってきた瞬間、私は運命を感じたわ……（あれはもはや、つまみ食いしちやえ♡という天啓よ）」

「……あの時は、素直に最高だつたんだがな……」

そう。オレはまず最初に自分からこの店に来た。

当然性欲を持って余したから……ではなく、あれはオレが精通を経験した日のこと。両親に盛大に祝われた。誕生日よりも。人生に一度だからと。戸惑いながらも『何故知っているのか?』と聞けば、口を揃えて『見聞色』と返される。やめてくれ。本当にやめて。

正直放つておいて欲しかったが、羞恥に耐えながら『ありがとう』と伝える。

トリスタンだけがオレと一緒に顔を真っ赤にしていた。あいつにはオレの気持ちがかかるというか……すでに通つた道というか……まあお互いに強く生きよう。

ここままで終わつていれば、まだ愉快な家族の笑い話だつた。だがオレの父親は、『海賊王の右腕』、『冥王』シルバース・レイリーは一味違う。

その数日後の夜、『風俗に行つて大人の男になつてこい』と言われた。拒否すれば師弟関係を解消するとも。普通そこまでするか……？ だが所詮はオレも男、行かなければ師弟関係を解消されるから仕

方ないと言いつし、エロへの探求心に屈して行くことにした。父さんはそこまで考えて、わざとあ言ったのか……？

オレを送り風俗店に放り込んで、笑顔でサムズアップをしていた父さんの顔を見て、オレは修行以外で初めて、あの顔をぶん殴ってやりたいと思ったものだ。

入ってから、『そもそも年齢制限で追い出されるのでは？』と初めて気が付いた。浮かれ過ぎだ。だがここは無法地帯、お金さえ払えば問題ないようだ。

そして受付で淫靡な雰囲気醸し出している数々のコースから『どれにしようか？』というかどれもどういう内容なのかさっぱりわからん』、と思っていると、電伝虫が鳴り響き、受付の人が取りに行つて受け答えすると、その表情が驚きに染まる。

何事なのかと思つてしていると、このオーナーがVIPルームにお連れしろと言つていたのでそうだ。『そうか……結局あのコースはどういう内容だったんだろう？』、なんてこの時はのんきに考えていたが、そもそもこの時点で大分おかしい。ここ以外の店に来たことはないから多分だが、普通はVIPルームに案内などされないはず。すべてを察することは不可能でも、少しは警戒すべきだった。

後で知つたが、この時ステューシーは、『カモがネギ背負つて食べられに来た！』と小躍りしたそうだ。

そして案内された部屋で、オレにとっては初めてステューシーと会い、彼女にとってはオレを見た時以来初めてオレの半径10メートル圏内に入った。

自己紹介の後に、何故呼ばれたのかを尋ねると、『実は私はシャボンバウンティハンターデイの賞金稼ぎ、機甲のロゼ”様のファンで、入り口の監視用電伝虫の映像を見て（※実際は見聞色の気配探知）もしやと思い、居ても立つても居られずお呼びしました。不躰な真似をして申し訳ありません。ですが、お会い出来て光栄です……！』と言われ、その後も、普段はまったく聞かないような賛美を続けられた。

オレの会つて話してみた印象は清楚な高嶺のお嬢さんというものが、よく考えればこんな店を経営している人間がそんなわけないのだが、

この時のステューシーは、オレを逃がさないために全力で良い子ぶっていた。そしてオレは彼女の張っていた蜘蛛の糸にまんまと掛かった、どうしようもなく愚かな虫けら。

「私にとつても最高の夜だったわ……♡ 穢れなき少年が雄々しい男へと変わる瞬間……堪らないわ!」

「だからお前はシヨタコンなんだ」

「言いがかりはやめてちょうだい? まだあなたのドカーン! (※自主規制) は貫つてないのに。チュドーン! (※自主規制) にバーン! (※自主規制) やダダダダダ! (※自主規制) しかしてないじゃない。こいつのどこが清楚なのか。あの時のオレの目は節穴過ぎる。」

「オレはカーン! (※自主規制) の方が好きだ……待て、話が進まん。本題に入ろう」

「そうね、続きはまた後で♡」

「それで、ハンコック達を奴隷にしていた天竜人、方が付いたかたと言っていたが、どういうことだ?」

「あいつらが七武海に入つて、さらにアイドルなんて目立つ真似をして、バレないはずがない。」

「だから前に来た時ステューシーに頼んで、行動をチエックしてもらっていた。マリージョアに不法手段でなければ出入り出来んオレでは難しいが、C P O のこいつには造作もない。」

「他には母さん用のウイスキーと、姉さん用のシャンパンも用意してもらった。」

「ああ……死んだわ。海の藻屑ね」

「……何をした?」

「あら、私が殺したと思ってる? 殺したのはあなたがファンの蛇姫ちゃん……厳密に言えば海王類かしら? 私がしたのは天竜人が向かっていると電伝虫で教えたのと、彼女達に気付いた天竜人の背中をちよつと押しただけ。『所詮一度は心を折った、貴方様の物なのだから、望むがままに。七武海だろうと男子禁制だろうと、世界の創造主の末裔たる貴方様には関係ありません』って。誰にも話さず海軍の護

衛も付けず、自分の雇った護衛だけ連れて女ヶ島にようがしまに行つて、ボア・ハンコックに返り討ちよ」

「そうか、死んだか……。」

「出来れば女ヶ島にようがしまに向かった時点で連絡して欲しかったが、因果応報だな」

「もし連絡したら、あなたはもうどうしてたのかしら？」

「簡単なこと。飛んで行つてすべての記憶が飛ぶまでぶん殴つていた」

殺しはせん。治療しながら何度も何度も頭を殴る。すべてを忘れれば、あの三姉妹もオレも安心だ。後はその辺の海賊に罪をなすりつけて海軍に引き渡せば問題ない。オレの能力を使えば、暴行現場の映像を簡単に捏造出来る。

「だから言わなかったのよ……でも驚いたわ。私が始末して、あなたがお気に入りのあの三姉妹に恩を売るつもりだったのに、自分でなんとかするなんて。『茨の主』いばらあるじ様は彼女達に一体何をしたのかしら？」

特に長女（あそこにいた時とはまるで別人じゃない）

「カウンセリングしただけだが……まあ暗示に近いこともしたな。ハンコックは思い込みが激しいので、あとオレが罪悪感から力を入れたので効果が強い。元々九蛇ククジャは強い者が美しいという価値観。それぞれ2人きりの間に、お前は美しいと、表現を変えながら褒め続けた。だから醜い天竜人のことなんて、恐れる必要はないと」

「なるほど。『強い者が美しい』から、『美しいから強いし、醜いから弱い』にすり替えたのね（そしてだから……ろくに男を知らない子達に、罪な人ね。これから先成長すればどうなるのか、ぞくぞくするわ……！）」

「それよりも……自分で始末するつもりだったって、流星にマズイだろ。お前の護衛対象だぞ？」

何かあったら教えてくれとしか頼んでいないのだが。

「ちよつとした罪滅ぼしよ。七武海入りの手助けでは足りないでしょうし。私は彼女達を助けなかったから……まあ不発に終わったけどね。それに私、本格的にあなたに鞍替えすることにしたから」

「は？　どういうことだ？　オレをC　Pサイファーポールに勧誘するのはもういいのか？」

「今でもあなたが向いていると思うのは変わらないけど……もう世界政府も落ち目かしらって。C P—Oの仕事は続けるつもりだけど。その方が助かるでしょ？」

「確かにそうだが……」

「鵜呑みにしていいのか？　こいつはC P—O、それに最初に会った時も……」

「簡単に信用出来ない、といった所かしら？　なら方法は決まっているじゃない。最近のことだからすぐに終わるわ」

「はあ……そうするか」

自分の手袋を外す。こいつの過去を見るために。

「ああ……私の過去があなたに丸裸にされるのね♡」

何か他に方法……思い付かん。残念だ。

立ち上がって、仕方がなく素手で、座っているこいつの頬に触れる。

「あら、そこでもいいの？　私はどこでもいいのよ？」

「それは後で」

「放置プレイで焦らす、というわけね」

お望み通り無視して、ステューシーの過去を見る。

こいつが政府に愛想を尽かせたエピソードだけを検索………ヒットした。

浮かび上がってきたビジョンは……ハンコックのコンサート？

ドクロの周りに9匹のヘビ、九蛇海賊団クジャのマークが至る所に入った、紫色の、詰襟で横に大きくスリットの入った、スカートの丈の長い、袖なしのワンピース（※早い話がチャイナドレス）をハンコックは着ている。

湧き上がる客の中には新聞で見たある国の要人や、天竜人の姿も。歌唱前のマイクパフォーマンスで、初対面の時以来見えない見下すポーズをされながら罵倒し、何故か歓声が上がる。

そしてハンコックの歌声に合わせて、全員がペンライトを持ちキレ

のある動きで踊り出す。当然天竜人も。もう何度もやっているような、一糸乱れぬ訓練されたダンスだ。

演奏が終わり、ハンコックがかわいい顔をしながら、要約すると『またお金を用意しなきゃ来ない。来て欲しかったらお金を払え』という要求をする。それを合図に、今度は天竜人以外が跪き、天竜人が真っ先にハンコックに貢ぐ。今更跪いても、天竜人を敬っているようにはもう見えん。お前らさつきまであんなに仲良く踊ってただろ……ステューシーの知識によると、マナーの悪い客はハンコックに石にされるのでこうなつたらしい。あとファンの間で貢ぎの品を早く渡せるのは非常に名誉なことなのだそう。意味不明。海賊に金品を渡すのが名誉？ 海賊ってなんだ？ 天竜人が去るまで他の客はずっと跪いている。

この時ステューシーはゴミを見る目で天竜人を見て、『なんで私こんなの守ってるんだろ……？』と自分の職場環境を嘆いていた。

次に見えたのは……あれが噂の五老星か。会議で熱く語っている。蛇姫ちゃんのアイドルプロデュースについて。ウロボロスに代わる金なる木だと。いい年に見えるご老人方が熱心にアイドルについて真面目に話し合う姿は正直引く。たまに接客業の専門家として呼ばれたステューシーが意見を聞かれるが、当の本人は内心『こんなことで私を呼び出して……世界の秩序について話さないよ』と思いつつ、死んだ目で受け答えしていた。

これが宮仕えのつらさか……もういい、充分だ。

過去を見るのをやめる。

「お前はお前で苦勞しているんだな……というかハンコックが原因か」

「本当に。まあハンコックちゃんはかわいいものね。昔を思い出すわ……」

「お前も全く見劣りしない美貌だろ。この肌も滑らかで絹のようだ」
頬を撫でながら労う。

昔を思い出すって……たかが数年くらい（※ロゼの推定）の話で大

げさな。

「ふふふ、ありがとう（“茨の主”いばらのあるじ様に比べて、あそこの人間はどいつもこいつも二言目には乙女の秘密を無遠慮に……やっぱりこっちの方が良いわ）」

触れていた手を両手で握られ、頬ずりしてくる。女は少しでも若く見られたいものなんだな。

「だが、オレに鞍替えも何も、CP—Oは辞めないなら今までと同じじゃないか？ 給料でも払った方が良いのか？ 現金で」

結局天竜人の護衛も自分の任務も続く。まあ、辞めるなんて言った所で、はいそうですかと辞めさせてくれるとは思えんが。外部に漏らされたら困ること、いくらでも知っているだろう。

「誰かの下に付くのが無理そうあなたには理解出来ないかもしれないけど、世の中誰もがトップに立ちたいわけじゃないのよ？ 誰かを神輿に上げて自分は実権を握り支配だけしたかったり、甘い汁だけ吸いたかったり、そして私みたいに、誰か自分が仕えるに足る人物に仕えて奉仕するのが悦びだったり。仕える対象が変わるだけで同じ仕事でも愉しくなるわ。あなたの周りだとトリストランちゃんもその氣質ね。それと給料はもちろん貰うわ、体で♡」

たしかにトリストランはそんなかんじだな……何でもかんでも自分でされては恩を返しにくいから、もつとダメになつて世話をさせろ、という意味の言葉を言われたことがある。ひどいことを言う奴だ。

そしてこいつもひどいな。オレは誰かの下に付くのが無理そうって、遠回しに社会不適合者って言つてないか？ 何かでトップに立ちたいわけではないが、確かに誰かに仕えたい気持ちは理解出来るんだが

「誰かに仕えるのが喜び？ 女王と呼ばれるお前が？ あと肉体関係が報酬って愛情がないみたいで嫌とは思わないか？」

「誰かを悦ばせる術を知り尽くしているからこそ、私は“歓楽街の女王”と呼ばれているのよ。そんなの報酬のためと愛を育むため、二度抱けばそれで解決ね♡」

「なるほど……確かに一理ある」

実際、こいつに聞いた喫茶店の経営のこと、シャーリーが参考になつたと言っていた。

そろそろ手を引つ込めて、また手袋をはめる。

「あら、もう止めちゃうの?」

「必要以上に人の過去や隠し事を詮索したくはない。それにお前の場合、知ってはマズイことも知っていそうだ」

「そう、まあ賢明ね」

「では早速、2つほどお願いがある」

「お願い? どちらかと言えば、命令の方が気が乗るのだけど」

細かい……。

「はあ……まずはハンコックの宣伝をしろ。天竜人と、上が腐った国で。奴隷なんて買うなら、そっちの方が余程良い」

天竜人については機会はいくらでもあるし、後者も世界中にあるこいつの店で宣伝すれば、労せずして出来るだろう。

「私にとっても気がかりが取り除けて嬉しいわ。ところで天竜人は簡単だけど、上が腐った国ってどのレベル? 加盟国にまったく不正がない国なんて、ほとんどないわよ? 国家元首がまともでも、私腹を肥やそうとする人は少なからずいる。世界貴族って頂点が好き放題やっている、真面目にやるのが馬鹿らしくなっちゃうのね」

天竜人の護衛にして世界最強の諜報機関が言うと言葉に重みがある。オレの想像以上に、世界貴族は腐ったみかんだったようだ。

「では、まずは奴隷売買や麻薬に関わっている人間で。お前なら当然わかるよな?」

「私はもう取り扱ってないけど、確かにその対象ならわかりやすいわね。ついでに完全に私と裏社会との縁を切らせる気かしら?」

「いや、むしろそのまま潜入してもらいたい位だ。後で潰すために。得意だろ?」

「私のことを理解してくれて嬉しいわ。それで、もう一つは?」

正直こっちは出来るかわからんが。

「タイガーの対応について、C Pや海軍の動き、探れるか?」

C Pについてはわかるわ。彼には不干涉になったから」

「何？ どういうことだ？」

「マリージョア襲撃事件……あれって、私達サイファーポール C Pの失態ってことになったのよ。ふふふ、マリージョアから私達を空っぽにさせたのはどこのどいつだとツ……!!」

「すまん……」

オレが人間ヒューマンシンヨッフ 屋を襲撃してたからだな。

「あら、あなたはいいのよ。命じたのはあの人達だし。まあそんなわけで、あなたとの素敵な出会いもあったけど、私達では任せられないって言われたのよ。ふふふふふ……」

すごく根に持っているな……。

「それで、海軍については？」

「彼の件は海軍が全権を任せられることになったわ。あのセンゴク大将、五老星を上手く乗せてたわね。たぶんこれを機に海軍の発言力を上げようとしているのでしょう。強いだけじゃなくてやり手ね。具体的な作戦については全く。私達 C P-O が海軍から何て言われているか、あなたなら知ってるでしょう？」

「天竜人の傀儡か」

海軍も把握出来ない越権行為を行うことがあるため、そう呼ばれている。

同じ世界政府の下部組織とはいえ、海軍と C Pでは管轄が違うから、たまに同じ任務で協力することがあるものの、いつも仲良く手を取る間柄ではない。

それにしてもセンゴクさん……よくガープさんの手綱を握らされているからな。まああまり制御出来ているとは言えんが、あの人よりは扱いやすかったのだろう。あの人は話している途中で寝ることがある。寝ながらもせんべいを食べ続け、起きた時に『誰じゃア!! わしのせんべいを勝手に食ったのは!!』と怒鳴ることもしばしば。お祖父ちゃん、もう自分で食べただろう？ そう指摘すると、『む？ そうじゃったか？ ぶわっはっはっは!!』と笑いながらまたせんべい食べて、また寝る。ボケてしまったのかと思うが、若い頃から割とあつたらしい。

「その通り。随分嫌われちゃってるから、聞き出すのは無理ね。あなたの方がまだ可能性があるわ。あとはそうね……フード付きのマントを着た集団が、彼に接触しようとして探ってるみたいね」

フード付きのマント？ そんなむしろ怪しさが増して目立つ服装、しかも集団、余程の理由がない限り……

「もしかして、ミンク族ではなかったか？」

「確かにそんな報告もあったけど……知り合いなの？ 歴史の本文についても探ってるらしいのだけど」

ノックス探検隊か……そんな格好で歴史の本文を探す集団はそういない。

確か彼らは、魚人島で歴史の本文について聞いて回ったと言っていた。時期はタイガーとマリージョアに行く前。会って親交があってもおかしくない。

「ああ……たぶんな。その彼らの情報を隠すことは出来るか？」

「今から完全には無理だけど、遅らせるのは可能ね」

「それでいい」

せっかくまだ手配されていないのだから、このまま見つかるなよ。

「今日の所はこれで充分だ」

「仰せのままに。じゃあ……これからはお愉しみといきましょうか」

☆☆☆☆

ノースブル
北の海のある島

「フッフッフ、お前がトレイボルの言っていた、おれと取引がしたいって言う命知らずか」

そう言って笑うのは、この場所を根城にする海賊団の船長、天夜叉。ドンキホーテ・ドフラミンゴ。懸賞金3億4000万ベリーの海賊。

3メートルある長身の男で、口元は不敵な笑みを浮かべているが、

サングラスで隠れた目が何を映しているのか、真意は見えない。金髪を逆立たせ、黒いシャツに赤いネクタイを締め白いズボンを穿き、ピンク色の羽毛の派手なコートを着用した、無法者と言うにはフオーマルかつ身綺麗な服装をしているが、海賊らしく危険な雰囲気纏った男。

「はい、末端の人では話にならない……というよりも、信用出来ませんので。何せ取引の物が物、元王下七武海『錬金術師』ウロボロスが生前持っていた黄金を生み出す能力、ゴルゴルの実ですから」

大きなケースから、渦巻きのような奇妙な模様の果実を取り出しながら、中肉中背のこれといった特徴のない男が言う。

悪魔の実。売れば一億ベリーは下らないとされる海の悪魔の化身と呼ばれる果実。食べた者に特殊な能力が身に付く代わりに海に嫌われ泳げなくなるデメリットがあるが、黄金を生み出す能力を手に入られるなら、船長に取り次がず、ドンキホーテ海賊団を離脱しても強奪しようとする末端の船員はいると、この男は言っている。

「確かに、その実を欲しがる奴は多いだろうよ。だから解せねエ。何故自分で食わねエ？」

「欲しがる人が多いからですよ。こんな物を食べたら、この実が欲しい人に命を狙われるかもしれません。元王下七武海にして、元白ひげ海賊団、『擬身のカメレオナー』がそうしたように。金は欲しいですが、命はもつと惜しい。だから、今この北の海で最も金と力を持つあなたに売ろうと思つて来たんです」

悪魔の実は同じ時期に2つと現れない。

能力者が死ねば、その能力の悪魔の実が世界のどこかに復活するとされている。

「ほう、だが……おれはわざわざ金を払わずとも、お前を殺せばそれを手に入れられるよなア？」

欲しい物があるなら力づくで奪う、それが海賊のやり方。

海賊と対等取引がしたいなら、武力、知力、財力、情報力……等の、それ相応の力が必要。ないならただ奪われるだけ。

「それをするなら、そうする前に僕がこれを食べますかね。そして今

度はあなたの部下になる代わりに、僕を守ってもらえるよう取引でもしますか」

億越えの海賊相手に臆した様子もなく、一步前に進み、ゴルゴルの実を自分の口に近付ける男。

「フッフッフ、考えなしに来たわけじゃねエようだな。少し試したただけだ。最近、悪魔の実の取引絡みでムカつくことがあったからなア。最高幹部の紹介だ……金は用意していた。その取引に応じてやる」
「ありがとうございます」

そうして表面上は比較的穏やかに、ゴルゴルの実の取引は行われ、男は金を持って去って行った。

「何者だ……？ おれの糸を躲しやがった。それに覇気使い……カタギじゃねエな。フッフッフ、まあいい。このゴルゴルの実は本物だ。客寄せにはもってこいだし、ゆくゆくは……」

「んね〜ね〜ドフィ〜？ もう終わったのか〜？」

ゴルゴルの実を持って来た男が去った扉から、ドンキホーテ海賊団最高幹部、トレーボルが入って来る。

船長同様サングラスをかけた、帽子を被り、地面に付くほどの布団のように厚い大きな上着を着た、ドフラミンゴの参謀。

「ああ、終わったとも。こいつがゴルゴルの実だ」

先程手に入れた果実を手に持ち、トレーボルに見せるドフラミンゴ。

「べへへ!! 流石我らがボスだ！ よくゴルゴルの実を手放そうとする奴なんて見つけたな〜」

「ああ……待て。あいつはお前が見つけて来たんだらう？」

「ん〜？ おれが〜？ 何の冗談だ〜？ 昨日ファミリーの前で、今日ゴルゴルの実の取引をするから、この時間帯は倉庫に入らず、周囲を見張っておくよう言ったのはドフィだろ〜？ べへへ、鼻出るわ！」

汚く鼻水を垂らすトレーボルと、出した覚えのない命令を訝いぶかしむドフラミンゴ。

確かに昨日トレーボルの方が、ゴルゴルの実の取引をしたい奴が自

分との取引を望んでいると言っていた。その時のことを思い出して……よく鼻水を垂らしている、今も垂らしているトレーボルが、昨日のあの時は一度も鼻水を出していなかったことに気付く。

「フッフッフッフ!! そういうことか! あの能力はくしゃみをする
と解けるんだったなア。それにしても、わざわざ自分のヒントを出す
とは……一体いつから入り込んでいた……?」
擬身ぎしんのカメレオー

ネ!!」

「ん〜? 七武海を除名されたコピコピの実の能力者……つまり、
昨日のドフィはあいつの変身で、ゴルゴルの実を持って来たのも
、そいつだったって言いたいのか?」

「ああ、そういうことだ(だが……つまりあいつは、殺して奪ったのか
! ゴルゴルの実を! どうやってその方法を知った……? あい
つがやったのはウロボロス殺害と……)」

カメレオーネが七武海を除名され、懸賞金が上がった時の新聞で、
グランドライン
偉大なる航路のどこかにあるという海軍科学班の研究所から資料が
奪われたと書かれていたのを思い出すドフラミンゴ。

海軍にはドフラミンゴ自身が相棒と呼ぶ腹心のヴェルゴをスパイ
として潜入させているが、海軍本部で科学班に彼を近付けることは出
来ない。入隊時、全身を武装硬化したヴェルゴを覇気が切れるまで翻
弄し、硬化が解けた瞬間一方的にボコボコにしてヴェルゴを子供嫌い
にした、シャボンデイの賞金稼ぎ、バウンティハンター
「機甲のロゼ」がよく接触してい
るそうだ。

『海軍と関係があり過ぎて今はまだバレないように殺せない。あのガ
キが成長して更に力を付けてから、それを上回り完膚なきまでに叩き
潰し屈辱を晴らす』

と、ヴェルゴがベビー5が泣き出す程の、般若のような形相をしな
がら、しかし淡々とした口調で漏らしていたのをドフラミンゴは思い
出す。そのガキは心の声を聞ける見聞色の使い手と報告を受けてい
る。迂闊に近付けない。最高幹部、初代コラソンのヴェルゴを傷付け
た、ドンキホーテ海賊団ファミリーの敵だが、今はヴェルゴにブチ殺されること

が決定済みのガキ一匹に気を取られる時ではないと考えた。

ドフラミンゴもヴェルゴも知らないことだが、「機甲のロゼ」が心を読むことが出来る。海軍内で広めているのは、海軍本部中將「大参謀」つるの発案であり、心を読まれたくない海軍本部のスパイや不正者の炙り出しのために、以前ロゼ関連で隠し子だの隠し孫だの噂されたことをチャラにする交換条件として、ロゼと話し合ったことである。海軍^{びいき}鼻^{びいき}眞^{びいき}のロゼは二つ返事で承諾して、最後まで聞いて考えてから決めろと怒られたが。

すでに何人も処断されているが、ヴェルゴに関しては、訓練時にロゼに敗れてひどくショックを受けた姿がよく知られているため、接触を避けても疑われずに済んだが、自分が当時一桁のガキに敗北したことが知れ渡っているという事実がヴェルゴのプライドをひどく傷付け、そのことでロゼに対して激しい殺意を抱いているのを見聞色で悟られないよう、徹底して接触を避けているが、いずれこの手で殺す為、海軍偉大なる航路^{グランドライン}第5支部に異動してからも日々訓練に励んだ結果、2年の修行ですでに六式をマスターするだけでなく、海軍のはみ出し者が多い第5支部で唯一真面目な海兵として、支部の人間や支部周辺の住民から人望を集めている。

「さつきまでいたんなら、追いかける〜」

「いや、最低おれとお前はもうコピーされている。他にも何人コピーされたかわからねエ。追っても混乱するだけ無駄、どこるか同士討ちになりかねん。放つておいて、まずは幹部以上を召集するぞ……フツフツ!!」

「なんか、嬉しそうだね、ドファイ?」

「何のつもりか知らねエが、良い情報を貰った。ドレスローザを返してもらおう準備が出来たら奪うとしよう……王下七武海の席を!!」

七武海の地位を得て、科学班の研究所に直接近付く。

悪魔の実の良いビジネスになるだろうと、ドフラミンゴは幹部を集めて今後の方針を話し合った。

ドンキホーテ海賊団のアジトから離れた場所

「そろそろ良いか……」

先程海賊と取引をしていた特徴のない男の姿が変わる。

長い舌にカメレオンを模したヘルメット、その下からピンクの髪を伸ばした男に変わる。背中にはカメレオンのマーク、裏地には多くのドクロを刺繍した虹色のカラフルなコートを地肌の上に着て、前は全開で左肩に舌の、腹にはGIVE MEとタトゥーが入っている、緑のズボンにフタマタのシューズを履いた、非常に目立つファッションの男だ。

「ギジギジギジギジ!! やっぱこの服装じゃねエとな! ドファイにちやんと俺様のプレゼントは伝わったか……? いや、あいつも中々素敵なファッションだった。気付くだろう」

男が独り言を言うが、素敵なファッションと察しの良さには何の因果関係もない。

この隠密とは程遠い服装をした男が、9年前に白ひげ海賊団でありながら「白ひげ」の首を狙うが撃退され、逃げ延びた元白ひげ海賊団1番隊船員。

「オペオペの実が手に入らなかったのは残念だが、ドファイのセンスは良いし、海賊団ファミリーの能力者の記憶メモリーも頂いたし、居心地は悪くなかったな……だけど「白ひげ」のオヤジじゃあるめエしよオ、海賊が家族なんて下らねエモンくだに未練がましいのは頂けねエな。だからお前は弟をまた殺す羽目になるんだよ……今度会ったらピストルなんて使わず、ちやんと首を刎ねねエとな。俺様が殺やったみたいによオ。おかげで1つ分能力メモリーの記憶得したが」

敗れたものの殺害した当時の白ひげ海賊団の他の隊の隊長2名、船員数十名の首を手土産に加盟したが、今年に除名された元王下七武海。

「Dr. ベガパンクも頭の出来は良いが、固かてエ奴だったな……悪魔の実の伝達条件の仮説なんて、実際に能力者を殺して確かめりゃあいじやねエか。良かったな、合つててよオ。ゴルゴルの実は覚醒したウ

ロボロスの記憶メモリーを頂いたからいらねエが、研究資料の方はウチの科学者が喜んでたな……特に巨大化のレポートは」

海軍科学班の研究資料を奪い、同じく七武海「錬金術師」ウロボロスを殺害し、七武海を除名されたにも関わらず、四皇からも政府や海軍からも行方を捕捉されずに暗躍している、「擬身ぎしんのカメレオーネ」。現在懸賞金6億ベリーの海賊である。

「約1年間、世話になったなア……ドファイ。楽しかったぜエ？ お前の海賊団フアマリは。能力者が増えたらまた来るから、頑張って増やしてくれよ？ 俺様は別の場所で、計画の準備のために記憶メモリーを増やすとするか」

突然カメレオーネの周囲の地面が動き出し、人の形に変化していく。

悪魔の实の能力は、稀に覚醒し、強い力を使えるようになることがある。

カメレオーネは変幻自在人間。覚醒したコピコピの实の能力者。自分の意のままに動く、能力や人格をコピーした操り人形を作り出す。

変化が終わると、そこにいたのは

「ギジギジギジ！ 相つ変わらず髪型だけはセンス良いなア、マルコ」
「うるせエよい」

胸に白ひげ海賊団のタトゥーを入れ、パイナップルのような特徴的な髪型の、無精ひげを生やした男。

白ひげ海賊団1番隊長にして船医、「不死鳥マルコ」の異名を持つ、自然系ロギアより更に希少な動物系幻獣種ソオン、トリトリの実モデル「不死鳥フェニックス」の能力者。

その人物をコピーした人形だった。

「そんじやまア……アシ、よろしく！ 動物アレルギーを治療して貰ったから、心置きなく使えるぜ」

「サイクロンが来ても知らねエよい」

「そんな時やお前をナミユールあたりに変えるわ」

体を不死鳥へと変化させたマルコの人形の背に乗り、カメレオーネ

は飛んで行く。

彼らの海賊団が再び世を騒がせるのは、まだ先。

☆☆☆☆

「ただいま」

夕飯を食べに帰宅した。

「おかえりなさ……雌の匂いがします！」

出迎えに近付いて来たトリスタンにそう言われる。

ちゃんとシャワーは浴びて来たんだがな。

「せめて女の匂いって言ってくれないか？」

「これは雌の匂いで間違いありません！ またイケナイ夜遊びですか

！ 日も沈まない内に！ このスケベ！」

「知っている」

トリスタンに甘噛みとマジ噛みの中間くらいで噛まれたので、宥めるため頭を撫でる。

そのまま抱っこしてソファに座り、トリスタンを自分の膝の上に乗せた。

「キュル〜。こ、こんなので誤魔化されななんですからねっ！」

「わかってる。もっとやれっつてことだな」

「ひゃうっ!?!」

ポカッ！

後ろから軽く頭を殴られる。

振り向くと、呆れた顔の母さんがいた。

「何セクハラしてるのあんた……昔の清らかなロゼはどこに行ったのよ」

「これはセクハラではなくミンクシップだ、母さん。あとオレは成長したに過ぎない」

嫌がることもしていない。

「レイさんの似なくていい所を受け継がないで欲しいわね」

「済まない母さん……オレは男なんだ」

「はあ……あの日から、どんどんこうなつて……あの女にロゼが毒されていく……（少しでも嫌がる素振りを見せれば私も動くけど、この子ノリノリだし……）」

「大丈夫だ。最後の一線は越えていないから。オレはスキンシップで満足だから」

「それはそれで質悪^{タチ}いわ……（あの女も歳考えなさいよ……）」

「わははは!!」

父さんはそんな会話をするオレ達を見て、大笑いしていた。

“赤髪と鷹の目”

ハンコックや最近デビューしたソニアとマリーによる各地のコンサート、そのついでに九蛇海賊団クジャによる海賊狩りと、シャボンディとウォーターセブンの間の魔の三角地帯フロリアン・トライアングルに潜む“影法師”、そして海軍の巡回レヴェリーによって、シャボンディまで来る海賊が少なくなってきた。今年是世界会議、海軍は忙しそうにしている。加盟国の要人の護送や空になった国の防衛の担当決めとか、マリージョア周辺、つまりシャボンディの治安の強化とか。

海賊が少ないので、最近バウンティハンターは賞金稼ぎ以外の時間が増えてきた。魚人島で海底遊園地アトランティスパーク（仮）の建設、アインやビンズと科学忍術合戦、リュウグウ城で王子達と修行、アインもついて来るようになったDr.ベガパンクの研究の手伝い、ステューシーから報告を受ける密会、ネプチューン軍に熱血指導ウ、ガープさんや姉さんから愚痴を聞きながらのティータイム、最近シャーリーが開店しメイプルも手伝っているマーメイドカフェに訪店、シャボンディでトリストンと一緒にオレとミンク族のイメージ改善のためにボラントイア、ルスカイナでの修行等々、色々やっている。

先程まではルスカイナでの修行をしていたのだが、今回の修行中、ハンコックに加え、ソニアとマリーのファンクラブ会員カードの0番を持っていくことが、ついに九蛇海賊団クジャの船員達にバレ、カードを賭けて、一度目は一対一サシの決闘デュエルを50戦程行い、二度目は復活した全員から一斉に襲撃を受けたので、気配を消してドリルで地中に潜り行方を晦ませ、途中で隠れて食事をしながら、ルスカイナの動物とぶつかるように誘導して倒したり、闇討ちして倒したり、普通に倒したりして決闘デュエル終了。

その間父さんは、いつの間にか知り合ったハンコックの侍女をしているエニシダという女に酌をしてもらい酒を飲んでいた。というか父さんが奴らにバラしていた。これも修行の内だそうだ。

目を覚ました彼女達から口々に、『くっ、殺せ！』とか言われたが、

そこまで命を懸けるなよ……纏めて船長ハシゴックに引き取りに来てもらうと、一週間ルスカイナに島流しかつゴルゴン三姉妹に接触禁止という、非常に重いらしい判決を下され、燃え尽きていた。こいつら、ハシゴック達が死んだら後を追って自害しそうだ。

全員あまりにも気落ちして、この世の終わりのように悲しみに暮れていたのを流石に憐れ、ではなく鬱陶しく思い、立体幻像ソリッドビジョンで過去の三姉妹を映してやったら、『無礼を働きすまなかつた。お前がN.O.Oで良い』と簡単に手の平を返され、すっかり打ち解けてしまった。七武海セブシカイの海賊団だし別にいいか。シャボンディでもこのくらい簡単にいけば良いが……いやしかし、これでは何かキツカケがあればまた簡単に裏返りそうだ。

飛んでシャボンディに帰還。でかい気配があるな……何かあったのか？

父さんと一緒に歩いていると、

「おい、まさかレイリーさんか!? こんな場所にいたのか!!」

オレ達2人の後ろから潜伏している父さんの名前を、驚きが混じった、よく通る大音量の無駄に良いバリトンボイスで叫ぶ男がいた。

内容からして父さんの昔の知り合いか。たまたま人通りがないからまだいいが、気を付けてくれ。

振り返ると……大物がいた。気配は普通だったが、このくらいのこととは出来て当然か。

「わはははは!! ようやく気付いたか! 実は今までも何度かこの島ですれ違っていたんだぞ?」

イタズラが上手くいった子供のように笑う父さん。楽しそうで何よりだ。

「いや、だったら声かけてくれよ!! あのあんたが死んだとは思っちゃいかなかったが……えっ!? ずっとここにいたのか? すぐそこに海軍本部があるのにな?」

「たまに別の島に出かけるが、本拠地はここだ。賭博場に行ったり、遊園地で遊んだり、女と寝たりしてるが、未だにバレてはおらんな」
「だっはっはっはっは!! マジかよ!? 大胆不敵過ぎるだろ!」

大口を開けて、無邪気に笑うこの男は、かつて前人未到のグランドライン偉大なる航路制覇を果たし、解散した「海賊王」の船の元見習い。よく下らないことでケンカして、船員達の間でどっちが勝つか賭けの対象になっていたという見習いコンビの、バラバラの赤っ鼻ほなではない方。

現在は偉大なる航路後半の海、新世界に君臨する四皇の一角、赤髪海賊団大頭おおがしらの「赤髪のシャンクス」。

異名にもなっている赤髪に、見習い時代はなかったと聞くが、手配書と同じ左目の三本傷。口の周りにうっすら髭を生やし、胸元を大きく開けた白いシャツに柄のズボンはを穿き、腰の右側に帯刀し、上から黒いマントを着てサンダルを履いているが、麦わら帽子がなく、それどころか新聞でも見たが……戦争でもしてきたのか？

まあそれはともかく、強さに興味がある。父さんに気を取られて笑っている間に、見聞色で覇気を見極めてみると……底が見えてこない。これが海賊のトップクラスか。

「おつ？　なんだ、そっちのガキ。使えるのか？（ルフィより上くらいか。この変わった前髪にゴーグル、どっかで見たような……？）」

覇気のことだな。

探られたことを特に気にした風ではない。というか面白い物を見つけた、というように笑っている。

「ああ、使える。失礼、お尋ね者を見かけたので、少々偵察を……南極さん」

見習いコンビの間で、南極と北極のどっちの方が寒いかケンカになつて、実際に行つて確かめて来いと父さんが言ったことがあるらしい。

クザンさんが海を凍らせながら最近お気に入りの自転車でちよつと北極に行つたり、サカズキさんが海賊焼きに行つたついでに南極に寄つたわけでもないならば、通常南極の方が寒い。

「ブツ!?　ま、また懐かしいことを……レイリーさん、もうちよつと他に言う話とかいくらでもあるだろ……」

「何を言うか。他のも話してるに決まつておるだろうが。それで、

行ってみたのか？」

「ああ、気温計がマイナス20度までしか測れなかったから、カンストしちまって結局どっちの方が寒いか数字はわからずじまいだったが。まあでも、やっぱり南極の方が寒かった!!」

「ロジャーと同じことをしておつて……今の今まで忘れていたが、バカをやったものだ」

やったのか……。

「それで、そっちは弟子か何かか？」

「ああ、弟子で息子だ」

「へえ！ あんた息子がいたのか！ 名前は？」

「ロゼだ。まあ、縁があつたらよろしく」

聞かれたので答える。

これから縁があつたとして、敵対か放置、“赤髪”とはどっちだろうな。

「ロゼか、ん？ ロゼ……ロゼ……ああ！ “機甲”か！ なんか見たことあると思つたら、1億とか書かれてたあの！」

見られていたのか。

「今は店がないけど、試しに新世界に連れて行ってみるか？」

ステューシーに事前に教えてもらい、新しく出来る人間屋ヒューマンショップの店が完成間近になつたら、姿を消して放火しに行っている。作っている側からしたら相当ウザイだろう。

「それは遠回しにウチの海賊団に入りたいつて言つてんのか？ はっはっは、やめとけ、ガキは大人しく父ちゃんと遊んどけ（ルフィみたいに、海賊に憧れてるのか？ レイリーさんと仲良さそうに手繋いでるし）」

なんでそうなった。オレを捕まえて新世界の人間屋ヒューマンショップに売り飛ばすという発想がないのか？

「誰が海賊になどなるか。お前の方こそ海賊には程遠い。さつきと自分の旗を降ろして焼き払い、故郷に引っ込んで女子供とキャベツ畑でも耕していればどうだ？」

「いや、おれそこまで言われるようなことお前にしたか!？」

「あゝ、ロゼ。今のはどういう意味で言ったんだ？」
「どういうって……」

『海賊のくせに南極さんは高く売れる子供を捕まえようとしないうちで、性格的に向いていなさそうだから、早く海賊稼業から足を洗って、故郷で家庭を作り農業でも始めて、自給自足のスローライフで、余生を妻や子と孫に囲まれながら暮らしてみてもどうだ？』という意味だ」

「そんなにわかりにくいかな？ 海賊と農家は対義語みたいなものだろう。略奪者と生産者。」

「すっげえ良い意味!? お前一体どんな口してんだよ、悪口になる呪いでもかけられてんのか!？」

「能力者だから、呪われているといえれば呪われているが。魚人島では悪魔の实の能力のことを呪いという人が多い。泳げなくなるからだろう。水中を自由に泳ぐ種族らしい言い方だな。」

「赤髪」が父さんを手招きして少し離れる。なんだ？

「とかいうかレイリーさん。こいつの海賊のイメージどうなってるんだ？」

「実は仲悪^{わり}イのか？（おれの会うガキは、なんでこうも両極端なんだ……?）」

「よく自分を売り飛ばそうとする海賊や人攫いに襲われていたから、ロゼの常識では、海賊は喜んで子供を売るのが。断じて私が原因ではない」

「偏り過ぎだろ……仲良いのは表面だけで、虐待でもされてんのかと思っただ……」

「誰がそんなことするかッ！」

しばらく話してまた戻って来た。

「のんびり話している余裕はあるのか？ なんか来ているが。」

「あー、それでだな。さつきから気になってたんだが……シャンクス、お前左腕と麦わら帽子は一体どうした？」

「そう。麦わら帽子は割とどうでもいいが、四皇が片腕を落とすとは只事ではない。それも新世界ではなく東^{イーストブルー}の海で。」

「ああ、そうだ！ 東^{イーストブルー}の海に面白^{おもしろ}エガキがいてな！ たぶんロゼより

下で、海賊になるって騒いでた奴なんだが、そいつにくれてやったよ！ どっちも！ はっはっはっはっはっは！！」

「はあ？」

父さんと声が重なる。

つまり子供に左腕を切り落とされた挙句、麦わら帽子を取られたのか？ 四皇が？ 東の海はいつの間にも魔境になったんだ……ベルメールさん達大丈夫か？

オレの驚きと戸惑いを余所に「赤髪」は続ける。

「おれア驚いたよ！ ルファイってただけだな、ロジャー船長と同じことを言ったんだ。あの言葉を……！」

「ほう……？」

「……ルファイ？」

その名前に東の海、オレより年下で海賊になりたい……ガープさんの孫と「赤髪」に接点があるのは知っていたが、祖父さんが祖父さんなら、孫も孫なのか。

「もしかして、その子供はドーン島にいなかったか？」

「そうだが……なんだ、知り合いなのか？」

「いや、その祖父さんと友達だ。たぶん」

「あいつの祖父ちゃんかあ……どんな人なんだ？」

「『拳骨のガープ』と呼ばれ、海軍本部中將をやっている、元気な祖父ちゃんだ」

「へえ、拳骨の……はあ!? ルファイの奴、英雄ガープの孫なのに海賊になりたいって言ったのか!? だっはっはっはっはっはっは!! やっぱバカだあいつ！」

どうやらツボに入ったようで、目尻に涙を浮かべ、腹を抱えて笑っている。よく笑う男だ。

ガープさんにとっては全く笑えん話だ。前にジンジャーエールでヤケ酒に付き合った。『またなのか、またわしの家族はアツ……おのれエエ「赤髪」イツ!!』と嘆きながら酒を呷るガープさんに。

会った時たまたま一緒にいたクザンさんは、捕まるのが嫌で床を凍らせ、【荊】で地面を蹴り加速しながら、スケートの要領で滑って逃げ

たが。

だが笑っている場合か？ あつちはお前が目当てだろ。

「(シャンクスに麦わら帽子を託されたグループの孫か……一度、会ってみたいな。海賊になるなら、いずれここで会うだろう……ジジイの方は結構だが) ロゼ、私は行くが、お前は どうする？」

「オレは遠い2つは問題ないけど、近い2つがわからないな……まあ、大丈夫だろ。ここでいなくなっても、どうなったか気になるし」

「私も気になるから、後で見せてくれ。あとシャンクスに家の場所を教えといてくれ、後で飲もうと」

「ふはは、了解。夜にならない内から飲み過ぎないようにな」

そう言っつて父さんが走って行った。大変だな、潜伏中の身は。

「あく、笑った笑った。あれ、レイリーさんは？」

「身を隠した。13番グローブにあるぼったくりBARバーにいるから、会うつもりなら周りに気を配って来てくれ。後で飲もうだそうさ。ほら、客が来たぞ。たぶん南極さんに」

最低2人はそうだろう。随分怒っている。で、おそらく捕まっているのだろう1人に、残りの1人は誰だ？

「……いい加減その呼び方やめてくんねエか？ シャンクスでいいつて」

「では「赤髪」と」

「意地でも名前で呼ぶ気はねエツてか？」

「オレは賞金稼バウンティハンターぎだ。それに南極さんとは別に親しくもない」

「お前賞金稼バウンティハンターぎだったのか。それなのに賞金首みたいなことされたのか！ だっはっは！ だが海賊がお前の事情を気にしてやるとでも？ 名前で呼ぶならジユースやるぞ？」

イタズラ小僧のような笑い方だ。

頭に触れようとしてきたので避ける。

ジユースって……いくらなんでもナメ過ぎだろ。

「賞金稼バウンティハンターぎが賞金首の事情を考慮するとでも？ まあ海賊というよりは、人をからかって遊びたいだけのおっさんといったところだが」「ぐっ!? おま、おっさんはやめろ……まだ20代だから」

気にしているなら髭を剃ればいいじゃないか。それで若く見えるだろう、髭以外老けて見える所はないのだから。

……そろそろ「赤髪」から距離を取っておく。

ズバアンツ!!

遠方から「赤髪」に向かって斬撃が飛んで来る。

「おいおい、相変わらず随分な挨拶だな。「鷹の目」」

キインツ!!

その斬撃を腰から抜いたサーベルを振るい、容易く相殺して金属音が響く。

サーベルを鞘に戻し、自分に斬撃を飛ばしてきた相手に、場違いなほど親しげに話しかける。

このくらい、いつものことのようなだ。

「東の海で片腕をなくしたというのは本当だったか……それも、よりにもよって利き腕を。新聞で見た時は俄かに信じがたかったが。貴様ほどの男が最弱の海で片腕を失うなど信じたくはなかったが。そのザマで何を大声でへらへらと笑っている……?」「赤髪」イツ!!」

斬撃を飛ばしてきたのは、羽飾りのついた黒い帽子を被り、鷹を思わせる鋭い目つきで整った口髭、黒を基調とした花の模様が入ったマントを地肌の上から着て、前は開いている。十字架を首にかけ、白のズボンを穿いている男。

そしてその手に持つのは十字架を模した大きな刀、最上大業物12工の一振り「夜」、大剣豪「鷹の目のミホーク」だ。海賊団を持たず、ただ強者との戦いを求め、1人海を渡る孤高の海賊。昔もいたらしいな、団を持たない海賊。

「赤髪」と「鷹の目」の戦いは度々耳にしていた。幾度も死闘を繰り広げながらも、未だに雌雄を決することはなく、戦い続けていると。

それにしても凄い怒気と覇気だな。気付いて近い1人もこつちに来ている。それ以外も。「赤髪」の仲間か、オレみたいな野次馬か。

「貴様の腕を奪ったのはどこのどいつだ?」

「それを聞いてどうする?」

「知れたこと。おれ達の決闘の決着は付いていない。そして、永久に全力の貴様と決着を付ける機会にはもはや失われた。代わりにそいつを切り捨てる」

「東イーストの海の魚」

は？ ガープさんの孫じやないのか？

「ふざけているのか……？」

「しようがねエだろ？ 友達が死にかけて助けてつつつてんだから。面白いガキでな……」

その後も続けているが、オレの耳には入らない。

この男……そのために利き腕を犠牲にしたのか。

四皇の1人が。海賊団の船長が。海賊が。

自分の身を守ることすら忘れて、友達を取ったのか。

「……だから、お前がおれの友達に刀を向けるなら」

ドン……!!

霸王色の覇気が「鷹の目」に向けられ、空気が震える。

「おれが相手になる。そもそも……おれの片腕がなくなっただくらいで、勝手に勝った気になるなよ」

ギロリと睨みつけ、腰に手を伸ばす。

さつきまでの海賊らしくない人好きの笑顔とは違い、幾多の戦場を越え、死線を潜くぐり抜けて来た、精悍な、歴戦レキセンの猛者の顔。

これが四皇、「赤髪のシャンクス」か。

「（覇気はむしろ上がったか。だからこそ惜しい……！）片腕の貴様と決着を付けたところで何の意味もない……おれの渴かわきは満たされん。魚やガキを切ってもな。そのガキというのは、そっちの「機甲」の小僧か？（一度戦いを見に来たが、やはり剣士でなければ）」

「誰が海賊に命を助けられるかアッ!!」

そんなことになったら、オレは憤死しかねない。

それにしても「鷹の目」にまで知られているのか。この男、1人だというのに。

はあ……やはり顔写真と子供、1億という額は結構印象に残るのか。あの写真よりは成長しているのだがな。まだある所にはあるし、

ステューシーなんて部屋の壁に貼っている。

「だっはっは！……こいつも変わってるが、違ちがエよ。麦わら帽子もそいつに渡してきた」

「赤髪」の表情から険が取れ、腰から手が離れる。

「フン、ずっと肌身離さず被っていたあれを手放すとは、随分な熱の入れようだ」

「鷹の目」が刀を背の鞘に戻し、近付いて来る。戦意はもう感じない。

とりあえず、ここがこの2人の戦場にはならないようだ。普通ならここで暴れる海賊なんてもはやそういないが、この2人の決闘デュエルの日々の話を考えると、場所を選ぶようには思えない。

「片腕を失った貴様を討ち取り、成り上がろうという輩が現れ始めている。この機に貴様らのナワバリに攻め込もうと準備を始めている奴らもいる。おれが認めた男が、あまり無様な姿を晒すなよ」

「ここに来る途中にもいたなア……まあ、向かって来るなら戦うだけだ。ははっ、ロゼ。お前も狙ってみるか？」

「今は狙う気はない。賞金稼バウンティハンターぎが海賊と戦うかどうかなんて、どうなるかわからない先の事はともかく、南極のおっさんの懸賞金はいらないな」

戦うことはあるかもしれないが、この男を海軍に引き渡すことはなさそうだ。

「お前………ついに混ぜやがったなア!？」

「さっきまでは冗談で言っていたが、今は親しみを込めている」

「よりバカにされてるようにしか聞こえねエよ」

「南極？…なんのことだ？」

「鷹の目」は知らないのか。仕方ない。

「むかしくし昔、ある海賊団に、麦わら帽子を被った「赤髪」とバラバラの赤ばなっ鼻が……」

「言わんでいいッー!」

「まあ今はそんなことより、また1人客が来ているぞ?」

「(気になる……)」

「これもその名を上げようって輩なのか？」

「いや、これは客というか……その、なんだ……」

「？ 知り合いなのか？」

「煮え切らない態度だな。何だというんだ。」

「くくく！ この男の愛人だ」

「鷹の目」が親指で隣の「赤髪」を指しながら、面白がって笑っている……この男、笑うんだな。

いや、当たり前と言えば当たり前だが、どこか行動が浮世離れしているから。

剣士としての腕を磨き、得た力で何をするわけでもなくただ戦う。

「赤髪」とは違う意味で海賊らしくない。

「ちゃんとした客じゃないか。オレ達、消えといた方がいいのか？」

邪魔だろ」

「違う！ そうじゃねエ！ てか、ガキが余計な氣イ効かせるな！」

この狼狽うろたえよう……やれやれ、しょうがない男だ。

「やることヤツといて認めないのは感心しないな。ふはは、気にするな。愛人くらい珍しくない。父さんにもいる」

「はあ!? あの人ガキの教育に悪過ぎだろ!? 初めて笑ったと思ったら、何てこと言いやがる！」

「海賊に子供の教育がどうか言われてもな……孕ませた愛人から逃げる海賊に言われてもな……ちゃんと避妊しないから。海賊だから危険で側に置けないのだろうが、顔くらい見せてやれ。女と子供が可哀想だ」

む？ 待てよ？ 上手くこちらに向かっている人に引き渡せば、海賊を引退させられるかもしれん。

やってみるか。

「違ちがエツつってんだろ！ というかお前、そういうかんじの奴だったのか!？」

「会ってからまだわずかしか経っていないのに、オレのことをすべて理解出来るはずがないだろう。何を驚く？」

「ワツハツハツハツ!! 確かに変わったガキだ……翻弄されっぱ

なしではないか、『赤髪』。くくくー！」

『鷹の目』が狼狽^{うろた}える『赤髪』を見て、心底愉快そうに笑っている。

「『鷹の目』エツ!! お前さつきから他人事だと思つて笑いやがつて! 言つとくが、ルフィはこんなんじやねエぞ!? もつとからかい甲斐のある奴だからな!」

「子供のことをからかい甲斐のある奴つて……ガープさんに殴られて頭蓋骨陥没骨折してしまえ」

人の孫にそんなことをしているから、仕事で中々会いに行けん祖父^{じい}さんを怒らせるのだ。

「お前エ……仕舞いにや（レイリーさんの子供だつてこと）バラすぞ!?!」

「海賊の脅し、譲歩には一切耳を貸さない。これは海軍の常識だ。一度でも要求を飲めば、そのまま良いように搾取されるばかりか、調子に乗らせ海賊が増える一方で、大海賊時代はいつまで経つても終わらない」

「そんな大層な話はしてねエよ!」

「シャンクス様く!!」

ついに来たか。

一体どんな……黒髪ロングをオールバックにして、左目の周りに口を開けたヘビのタトゥー。背中には『鷹の目』の『夜』^夜程ではないにしても、大きな鎌を背負っている。何故か着物を着て、腰に鎖を巻いているが、先代九蛇^{クジャ}海賊団船長の『妖妃』^{ようひ}だな。病で死なずに存命していたようだ。

この女はまだ海賊扱いで良いのだろうか? それとも引退済みか?

「げっ!」

「ふははっ、女性からの黄色い声に『げっ!』はないだろう、色男?」
「くくく、まったくだ。ほら、ご指名だぞ」

「ああ……なんてことっ!? わたくしが花嫁修業で離れている間に、あなた様の御左腕がつ! 一体誰が、『鷹の目』、あなたですか?」

幾度も死闘を繰り広げた、〃赤髪〃の左腕を奪った容疑者最有力候補に、今初めて気付いたようだ。恋は盲目というやつだな。

ついさつきまでは恋する乙女のような緩い表情だったが、今は冷たい目付きで〃鷹の目〃を見ている。

「フン、おれであれば今頃生きてはいまい」

「ふははっ、愛されているじゃないか。というか〃妖妃〃だったんだな。なんで一緒に行動していないんだ？」

〃鷹の目〃と〃妖妃〃が睨み合いながら言葉を交わす間、〃赤髪〃に聞く。

民間人かと思いきや、九蛇の先代皇帝……覚悟なんてとつくに出来ているだろう。

「ウチの船に女は乗せねえんだよ！」

「何故だ？ 何か彼女に不満でも？」

〃赤髪〃越しに2人を視界に入れながら聞く。これは海賊を減らすチャンスだな。心配なのは、別に赤髪海賊団として船に乗せても大丈夫なだけの實力はあるところか。

「いや、そうじゃなくて……『男は船、女は港』って言葉知ってるか？」
「昔の船乗りの間で言われていた言葉だな。海の女神が嫉妬するから、女を船員として船に乗せないという」

他にも、男は船のようにあちこちの港（女）に停泊して、女はそれをただ待つしかない。とか、色んな解釈もあるが。

「そういうことだ。海つてのはきまぐれで嫉妬深いんだよ。女を乗せたら雷落とされちまう」

「それだけなのか？ はあ……今の時代になんと非科学的な迷信を。女海兵などたくさんいるし、海賊でも、そんな理由で海の女神の怒りを買うなら、〃ビッグ・ママ〃が四皇などと呼ばれるものか。〃妖妃〃がいた九蛇海賊団など、女しか乗っていないが、何ともないだろう？」

そもそも女を乗せようが乗せまいが、偉大なる航路、特に後半の世界は、常に海の女神が癩癩を起しているかのような気候らしいじゃないか。雷が降っている島もあると聞いたが。

「まあ、年貢の納め時ってことで」

「なんだ？ おれと戦う気にもなったのか？ ……ってホントに
なんだよ？」

突然足にしがみ付かれて、戸惑う「赤髪」。

「はあ……普段の隙が多い男だ。だから片腕を失うことになるのだ」
「ああん？」

ヒュンヒュン

「赤髪」の体に何かが巻き付く。

先端に分銅が付いた長い鎖だ。

「赤髪」が顔を引くつかせながら鎖を視線で辿ると、鎖の付いた大
きな鎌、いや鎖鎌を持ってニコニコ笑っている「妖妃」と、呆れてい
る「鷹の目」がいた。

「……おいロメリア、なんのつもりだ？」

「『鷹の目』が『連れて行くなら今』と。攻められる時に攻めません
と、シャンクス様はすぐお逃げになられるので」

「こんなもの引き千切って」

「まだ慣れていないようだな。貴様は片腕だろう」

片腕で体に巻き付いた鎖を引き千切るのは、少し厳しいだろうな。

「ちなみにサーベルはオレが貰っている」

鎖が巻き付いた時に外した腰のサーベルを掲げて、「赤髪」に見せ
る。

その後歩いて「妖妃」に手渡す。

「ありがとう、ぼうや！ あなたはわたくしのキューピッドだわ！」

「骨抜きにしてやってくれ。あと、もう気配は隠しといた方が良く」

自分のキューピッド姿を想像して、あまりの似合わなさに吐きそう
になるのを我慢しながら、サムズアップをした。

「お、お前ら……いつからグルに……！」

「貴様が余所見をしている間にアイコンタクトで」

「女と乳練り合いながら、子供と……遊びでもしていきい（※家族
仲良く暮らせよ、の意）」

「では参りましょうか！ 実は先程ここに来る途中休憩場所を見つけ

まして……」

「お前ら覚えとけよオオオオオオオオ……!」

断末魔の叫びを上げながら、「赤髪」は抱えられ連れて行かれ、小さく見えなくなった。

うん、良いことをしたな。

「……貴様なら、片腕を失わずに助けることも出来たはずだろうに……それほど焦っていたか」

オレに言っているわけではなく、つい零れた言葉のようだ。

余程「赤髪」と決着を付けたかったのだろう。心なしか髭が垂れて、背中から哀愁が漂っているように見える。どこか寂しそうだ。

そんな「鷹の目」の様子を見て、

「そこまで「赤髪」と対等な条件で決着が付けたいならば、お前も利き腕を切り落とせばどうだ？」

今ならいけるかもしれないと思い、大剣豪の海賊を弱体化するよう、ダメ元で唆してみた。

「!!」………ふう………小僧、そんなことをして付けた決着に何の意味がある？ 無益だ」

思ったより惜しかったが、やはりダメか。

………おつ、来たか。タツチの差だったな。

「「赤髪」イクツ!!! よくもわしの孫を誑かしおつたなアアアツ!!!」

ガープさんが【月歩】^{ゲツポウ}で海軍本部から空を駆けて来た。

片手でクザンさんを掴んでいる。一緒に連れて来られたか。

「随分怒っているな、ガープさん」

「ロゼか! 「赤髪」がどこに行ったか知らんか!」

「女と一発やりに行った」

「あんのガキヤアアアア!!! どこまでもわしをナメくさりおつて!!」

「ガープさん……うるさい。鼓膜破れる……」

クザンさんが耳を押さえている。

アイマスクして結構余裕そうだが。

「黙つとれ青二才がア!! 忌々しい「赤髪」めエ……!!」

「軽く聞いてみたら、一応命の恩人みたいだけど？」

「確かにルフィを救った様じゃが、そもそもルフィが悪魔の実を食ってしまったのは奴の管理が甘いせいじゃし、ルフィが山賊にケンカを売ったのも『赤髪』が原因!! 最初に山賊をブチのめしておればそれで済んでおった!! 何より……わしよりルフィに好かれとるのが気に入らんツ!!」

なるほど。詳しい事情は知らんが、絶対最後のが怒っている理由だな。

「クザン!! 『鷹の目』はお前がやれ! わしは『赤髪』の若造を殺る!!」

「いや、おれはともかく、あんたはそもそも任務じゃないでしょ……勝手に四皇の『赤髪』と接触するのはマズインじゃないのオ?」

「ガープさん任務じゃないのか……というかクザンさん任務で来たのか……てつきりサボって昼寝中に連れて来られたとばかり。何故任務で来たクザンさんがアイマスク着用で、任務じゃないのに来たガープさんが殺る気満々なのか。」

「そんなもんセンゴクに任せて適当に言っとけばいい!!」

「酷い……センゴクさん可哀想」

「滅茶苦茶じゃないっすか……あ痛っ!?!」

「ガープさんがクザンさんを地面に叩きつけ去って行った。見当違いの方向に。」

頭に血が昇り過ぎて見聞色を使えていないな。それでも父さんがいる方向に向かっていているあたり恐ろしい。

クザンさんがアイマスクを頭にずらし、体を払いながら立ち上がる。

「嵐のような男だ……それで、貴様はおれと戦うのか? 海軍本部大將『青雉』」

そう、クザンさんは大將に昇進した。いい加減サカズキさんより階級が下で、ことあるごとにそのことを言われるのが嫌だったようで頑張っていた。反動で最近またサボり気味。

だから階級的にはガープさんの方が下なのだが、さっきのやり取り

からとてもそうは見えない。

「あららら……クールに見えて、結構血の気が多いじゃないのオ。ガープさんはともかく、こっちはそういうんじゃないよ。まずはこれを……あれ？ どこにやったつけ？ なあロゼ、あれアどこだ？」

自分の服のポケットに手をつ突っ込み、何かを探しているクザンさんに聞かれるが……

「いや知らん。そもそもあれって何だ？」

「ああん？ そりやお前……あれだ。え〜つと………ああ!! そうだそうだ!! センゴクさんが五老星から渡された、〃鷹の目〃の王下七武海への推薦状だ」

「そんな大事な物を忘れるな！ ……って七武海？ 今欠員いないだろ？ 去年補充したばかりじゃないか。2人も」

「まだ公表されちゃいねエが、片腕を失った〃赤髪〃相手に挑んで、返り討ちになったんだよ。前回みてエに元七武海が政府の手を離れて野放しになったわけじゃねエから、公表されるのは後任が決まっただらだろうなア。つたく………ただでさえ世界会議レヴェリーで忙しい時に、気軽に寝れやしねエ」

そういえばさつきシャボンデイに来る途中で、誰かと戦ったみたいなことを〃赤髪〃が言っていたな。あれ七武海だったのか。軽いな。有象無象と大して変わらん扱いだっただぞ。

まあハンコックではないだろ。ルスカイナから帰る前に会ったし。

「あんた大将だからもしもの時の各国要人の警護のために、マリージョアか海軍本部から動かないじゃないか」

「ああその通りだ……サカズキと一緒にな」

「それは寝れないな。だがまあ、普通に仕事中寝るのが悪い」

まあたぶん、クザンさんがサボらないようにそう言ったんだろう。

「ボルサリーノさんはいないのか？」

「あいつは今別件だ。まあそういうわけで、シャボンデイに〃鷹の目〃がいるってんで、七武海に勧誘したいが、半端な奴じゃ決裂した時マズイってことで、おれが貰って気分転換がてら来たってわけだ。そんな時ア手伝ってくんない？」

「え、いいぞ」

「ここで暴れられたら困るからな……最悪海兵が集まって来て父さん達が見つかる。メインの戦闘は任せて、サポートでいいだろ。」

「……おれから言つといてなんだが、軽いなア。まあサンキュー。おつ、あつたあつた」

「そう言つて、懐から書簡を取り出し『鷹の目』に見せる。」

「どうする？ おれとしちゃア、受けてもらった方が楽でいいんだが」
「普段であれば一考に値しないが……今のおれは少々飢えている。条件次第だ」

「おつ、結構話せるじゃないのオ。なんだ？ 呑めるかどうかはおれには判断出来ねエが、掛け合つてはみるぞ？」

七武海の任命権は世界政府にある。海軍に出来るのは政府に話を通すくらいだ。

「定期的に海軍本部中将クラス以上の実力の強き剣士と戦わせろ……手始めに貴様だ。ヒエヒエの実の能力で氷のサーベルを作つて戦うらしいな。見せてもらおうか、貴様の剣術を」

「そんな条件あるか？」

可哀想に……間違いなくこの条件は通る。政府の懐は痛まない。何なら決闘の内容を中継して、天竜人の余興に出来る。海軍本部中将以上と王下七武海、どっちが負けようと、結果を知られば海賊に影響を与えるので、勝敗は非公表で行われるだろうが。

「あららら……そう来たかア。これ、どっちにしるおれとは戦う流れじゃないのオ……気分転換のつもりがえらいことになつたな……こいつじゃダメか？」

「そう言つてオレを指差す。」

「ふははっ、残念だったな。オレは剣士ではない」

「おれだつて別に剣士じゃねエし、お前も足をチェーンソーに変えて戦うじゃないの」

「何？ 小僧、それは本当か？」

『鷹の目』が目を見開き喰い付いて来た。どれだけ戦いに飢えているのだ。

「確かにそうやって戦うこともあるが、せいぜい剣使いだな。剣士とは言えん」

「そもそもチェーンソーって剣か？ 工具だろ。いや、武器として使っているオレが言うことではないが。」

「けどお前、斬鉄も飛ぶ斬撃も出来るだろ」

「あんなこと剣士じゃなくても出来る。動かず意志を持たない鉄を切るより、人を切る方が余程難しい。飛ぶ斬撃も【嵐脚】が出来れば剣がなくとも出来る」

何故オレが「鷹の目」、それも七武海になりそうな奴とこんな理由で戦わねばならんのだ。

こいつ、弱い人間に興味がないそうで、全然民間人を襲わないのに。目の前で暴れられるならともかく、気が乗らん。放置したい。その上仮に七武海を倒せたところで懸賞金は0、得る物なし。ハイリスクノーリターン。割に合わん。

「足で切る……邪道の類の剣術か。興味が湧いた。だがまだ発展途上の子供。今はそれより貴様だ、『青雉』」

「参ったなあ……とりあえず報告して、七武海に任命されてからだな。ここだとマズイから場所も変えるぞ」

「構わん。おれは一度、帰って寝る。決まれば伝書バットなり何なり寄越せ」

「おれはまだ寝れそうにねエな……」

「オレまでロツクオンされたじゃないか」

参ったなあじゃないぞ。参っているのはこっちだ。

「良いじゃないのオ。どうせお前エ、その内標的になつてたと思うぞ？ 七武海入りの条件に組み込んだ方が、死ぬことはないんじゃない？」

「クザンさんクザンさん、オレは海軍本部中将以上ではない。野良の賞金稼ぎだ。対象外だ」

「海軍本部中将クラス以上の実力のだから、海軍所属じゃなくても大丈夫でしょ。お前は中将以上の条件、覇気を習得してるんだし（前にロゼの海賊との戦いを見たが……はつきり言つて別人だ。態度もそ

うだが、こいつア訓練で海兵と戦う時より、海賊と戦ってる時の方が
覇気が強い。意図したものじゃねエようだが、子供が高額賞金首を圧
倒しといて名前を広めたくねエ、『鷹の目』に目を付けられたくねエ
なんてのは無理でしょ。気持ちはわかるがなア……こいつ、向上心は
あつても功名心はねエし。自分が捕らえた海賊を海軍が捕まえたこ
とにしてくれって言うくらいだ。懸賞金はちやんと持つてくが」

別に覇気が使えないからといって中将になれるわけではないはずだ
が。基本的に手柄がないと昇進は出来んだろ……あつ、オレ手柄ある
な。海賊を捕まえまくっていた。

「強き者と戦えるならどちらでも構わん。まったく……おれが何のた
めに海賊になったと思ってる。その方がより多くの強き者と戦え
るからだというのに、貴様ら海軍はいつの頃からか全くおれを追わな
くなった。つまらん。暇だ」

「暇で……駄々っ子か」

なんて理由で海賊になったんだこの男。

「お前は強い奴しか狙わねエし、追手をやらなきや襲つても来ないか
ら、放置して他を対処することになってんのよ」

「勝手なことを……」

「ところでロゼ、お前なんか焦げ臭くねエか？」

「そうか？ 煙の匂いが移ったのかもしれない」

焚き火を起こしたりしていたし、すっかり匂いに慣れてしまった。

「いや、そんな残り香ではない。小僧、貴様の胸辺りだ」

胸？ 何も焦げてな……待てそこには

「お前鼻良いな……」

「五感を研ぎ澄まさねば、勝てん相手もいる」

ドクン!!

心臓が跳ねる。

自分のコートの内ポケットに手を入れ、中の物を取り出す。出てき
たビブルカードの1つ、タイガーの物が焦げて小さく……ビブルカー
ドは爪を使った本人の生命力を表す。つまり……ッ！

「用事が出来た！ 【ジェット・ウォリアー】」

そう言い残して、ビブルカードが動いた方向へ飛んで行く。

『魚人のタイヨウが落ちる』

シャーリーに言われた言葉が、色んな解釈が出来る占いの結果が脳裏に浮かぶ。

まだだ……まだ燃え尽きてはいない！ 全身を武装硬化させ、今の自分の限界のスピードで飛行した。

“黄昏のタイヨウ”

見聞色で周りの気配を探知しながら、ビブルカードが動いていた方向にまっすぐ、音速を超える速度で飛ぶ。

途中で関係ない船を見つけては、勝手に乗り、立ち止まってビブルカードの示す方向を確認する。まだこの紙が燃え尽きていない以上、タイガーは死んでいない。また空を駆ける。

そうして飛び続け、日が暮れ始めた頃、見つけた。海軍の軍艦だが、知った気配がいくつもある。捕まったのか、奪ったのか。

見聞色で気配を探ると小さい反応が1つ。ビブルカードの確認をすると、焦げて小さくなっているものの、まだ残っている。

甲板に着地し、ゴーグルを外して船内に入る。

「は、ははは……どうしたア……ロゼ？　こんなとこまで来てよオ……おれアお前との約束を破っちゃいねエゼ……？」

体の至る所から血を流し、今にも命の灯が消えようとしているタイガーがいた。

その周りには傷を負い血を流している、はっちゃんにアラデイン、
“海侠”に“ノコギリ”等のタイヨウの海賊団の船員達がいる。
奪った方だったか。

オレに気付いて驚きや戸惑い……そして怒りの感情を向けられる。
海賊に怒りの感情を向けられるなんていつもの事。どうでもいい。
そんなことより

「何故さっさと輸血しない!?　その輸血パック、SのRH―だろう、タイガーと同じ！」

タイガーが寝かされているベッドの脇には輸血パックを付けた点滴スタンドからチューブが伸び、先の針をアラデインが持っているが、何故か一向に輸血を始めない。

「そ、それは……」

「おれア……海軍の、奴隷を容認してやがる奴らの血で生き長らえたくはねエ……」

言いよどむアラデインより先に、タイガーがか細い声で答える。

「だったらオレの血を使え！ オレもSのRHだ！ オレの血も受け入れたくないか!？」

「よせ……自分でわかる……おれアもう死ぬ。お前の血がもつたいねエ」

「うるさいッ！ 海賊が、それも死に損ないの怪我人がオレに命令するな！ アラディン、輸血パックだ、急げ！」

コートから輸血パックを取り出し、駆け寄ってアラディンにすべて渡す。

もしもの時のために、トリスタンに定期的に輸血してもらっているのを持ち歩いていた。

タイガーのことに限らず、自分用に。

「だ、だが……」

アラディンがタイガーの方を窺^{うかが}う。

本人の同意なしに輸血は出来ないってことか。

「はは、ホント勝手な奴だ……初めて会った時も、あの時も……アラディン、構わねエ……」

「ああ、わかった！」

アラディンが輸血パックに血を流すチューブを取り付けスタンドにかけ、針をタイガーに打つ。

「……何があつた？」

深呼吸をしてからタイガーに問う。

「お前の場合、聞くより見た方が速エだろ……お前に隠すことなんて、もうねエよ。誰かに知られたくねエことなんて、お前にはもう知られてらア……」

「わかった……アラディン、オレからも血を抜いて用意しといてくれ。オレとタイガーでは体の大きさが数倍違う。あれだけでは足りん」

「ああ、準備するから、椅子に座ってくれ！」

「あと何でもいいから肉を。食って血を作る」

「なんだそりや、滅茶苦茶だな……第一お前、肉嫌いじゃねエか……」
「下らんことを言っている場合か！」

椅子に座り針を刺してもらってから、手袋を外しタイガーに触れ、

ここ最近の過去を見る。

○○○○○

今から数週間程前、タイヨウの海賊団がある島に立ち寄った時、1人の人間の女の子を託された。

名前はコアラ。名前は今初めて知ったが、オレと大して変わらない歳だったからよく覚えていた。3年前までマリージョアで天竜人の奴隷にされていた、笑顔以外の表情が作れなくなった少女。

トラウマは、特に幼少期のトラウマは容易に克服出来るものではない。マリージョアでも姿を消し声を変え、背負って運びながら言葉を掛けたが、あの短時間で言葉だけではどうにも出来なかつた。

コアラの故郷はその島ではなくフルシヤウト島、故郷に返してやりたいが、島の住民達の航海術で偉大なる航路グランドラインの海を越え、送り届けることは不可能。

だから巷で“奴隷解放の英雄”と呼ばれるタイガーを頼った。

タイヨウの海賊団にコアラを加え、魚の船首の海賊船、スナツパーヘッド号は航海を始める。

コアラは船員達から何を言われようと、アーロンに殴られようと、ニコニコ笑いながら謝り、掃除の手を休めない。

だがその笑顔は表面だけ。覇気に目覚めたタイガーには、いや、覇気が使えずとも、コアラが他人に心を閉ざしているのがタイガーにはわかつた。

わけがわからない船員達にアラデインが説明する。

コアラは見てきたのだろうと。泣くからと、掃除の手を休めたからと殺される他の奴隷達を。だから何をされようと泣かないし、笑っている。ずっとそうしてきたから自分は生き残れたと、奴隷の生き方が体に染みついていてなのだ。

タイガーは、コアラの天竜人の烙印を焼きこてで太陽のマークに書き換える。痛みで気絶するコアラ。

だがこの烙印がある限り、コアラは奴隷であった過去を忘れられない。克服出来ない。タイガー自身も人間を恨み嫌う自分自身と戦っていた。タイガーがマリージョアから逃れて来て4年、すべての人間を恨み嫌ってこそいないが、自分を追って来る海軍を、『生かして倒すなんて生温い、殺してしまえ』と囁き実行しようとする、自分の黒い感情を押さえている。

気絶から目覚めたコアラは、気絶してしまったことを笑いながら謝り、殺さないでください、と笑いながら繰り返した。

そんなコアラにタイガーが告げる。

『泣きやあいいじやねエか！ おれ達を天竜人共あのかと一緒にすんじやねエ!! おれ達は誰も殺さねエ!!』

その言葉で、今まで我慢してきた感情が溢れ出し、おそらく奴隷になつてから初めてコアラは泣いた。3年の時を経てようやく、天竜人の支配から解放されたのだろう。

『行くぞお前ら、こいつは必ず、故郷へ送り届ける!!』

タイガーが船員達に号令を出す。

航海の途中、タイヨウの海賊団との触れ合いで、まだ困ったら掃除をする癖があるものの、徐々に感情を表に出すようになるコアラ。

最初はコアラが人間ということを受け入れがたかった船員達も、すっかり心を許すようになった。

ただ1人、アーロンだけは人間である以上敵だと言い続けている。これまでの航海で、自分達を蔑む目で見ていた人間と同じだと。自分の慕うタイガーが手配され、奴隷を解放したことを悪だと断定され、海軍の追手と戦い続け、人間嫌いに拍車がかかったようだ。オレにはそれほどコアラを拒絶しているようには見えんが。最初はコアラを殴つたこの男だが、それ以来手を上げていない。口で言うだけだ。

アーロンの言葉にジンベエは、自分は違うように感じたと言う。蔑む者も確かにいるが、それは一部で他は怯えているように見えたと。シャボンディでしか普通の人間を知らないオレには判断出来ん。オレは魚人を蔑む人間を多く見てきたし、魚人の何が怖いのかもわから

ない。

疑問を解消するためジンベエがコアラに問う。何を恐れているのか、自分達が海賊だからかと。それに対してコアラが、何も知らないから、と返す。それを聞いて何か考え込んでいる。ジンベエはアークンとは別方向に変わったようだ。

フルルシャウト島のエターナルボース永久指針の針が示す方へ海を越え、ついにコアラの故郷に辿り着く。

村までタイガーが付き添う。他の者達も来たが、自分達は海賊、大勢で訪れても怖がらせるだけとタイガーだけコアラに同行することになった。

『あたし、村のみんなに言うよ!! 魚人には良い人達がたくさんいるって!!』

コアラが手を振り、タイヨウの海賊団に別れを告げる。

『良い人達って……おれ達や海賊だぜ?』

『海賊でも良い人達だよ! “英雄”とその仲間だし!』

話しながら、コアラと手を繋ぎ村まで送る。

無事村に着き、村人の反応を訝しみながらも、コアラとその母の再会を見届け、満足した船への帰り道。タイガーは海軍の部隊に包囲された。全海兵が剣とライフルを装備している。

部隊の指揮官はストロベリー少将……オレが、覇気を目覚めさせた人だ……。

『君達がこの島に来ることは、ある島の者から通報を受けている!!』

あの村の大人達も、ここで少々騒ぎが起こることを承知してくれた…… “大洋”、君が先程届けた娘を見逃すという条件でな』

そこでタイガーが気付く。

先程の村人の住人の反応は、いつものように自分を恐れてのものではない。コアラの母の涙もただ娘との再会を喜んだだけのものではない。あれは……自分に向けられた後ろめたい感情、村の子供を送り届けてくれた人物への罪悪感。

『(海賊なんだ……まあ……しゃあねエか。にしても、汚ねエ真似しや

がる)』

『我々としても子供を天竜人に引き渡すのは避けたい……本来、このまま捕らえ天竜人に引き渡して終わりだが、君にはチャンスがある。運が良いな』

『チャンスだと……?』

『ああ、条件を飲むのであれば、君を王下七武海に推薦する準備がある。つい最近、片腕の四皇に挑んで2人欠けてな』

……『赤髪』の奴、2人も倒してたのか。

『世界政府公認の海賊か』

『条件は、マリージョア襲撃事件当時の、君の協力者達を教えることだ』

『何だと……? あれはおれ1人でやった!』

『あれほどの短時間で、奴隷の解放にボンドラの制御室の制圧、マリージョアすべての電伝虫の破壊など、1人で出来るはずがない!』

『お前には関係ねエ話だ。おれは七武海にはならねエからな。お前らと違って、おれは人を売ることを良しとしねエんだ』

『ツ……残念だ……! 一斉射撃!!』

ドドドドドンツ!!

包囲していた海兵が照準を合わせ、ライフルから一斉に銃弾が発射。辺りに銃声が鳴り響く。

タイガーも武装色で急所はガードしたが、手足を銃弾が貫く。

『覇気使いだったか……!』

『おれの首は、お前らにはやれねエな……押し通らせてもらおう!!』

銃弾を食らい血を流しながらも少将相手に奮闘するが、1人对ストロベリー少将含む海兵数百人、多勢に無勢。さらに攻撃を避け反撃しようとして動けば動く程、タイガーの体から血は流れる。血を流す程動きは鈍くなり、斬撃や銃弾を食らいやすくなる。ジリ貧だ。

銃声を聞いて、途中で船に残っていた船員が合流する。そちらでも奇襲にあったようで、戦闘の傷が所々見られる。

負傷したタイガーとの2人がかりで、ジンベエがストロベリー少将に深手を負わせ、軍艦数隻、総勢数千人に及ぶ1旅団の包囲網の一部

を突破。海軍の軍艦を一隻奪って逃走し、アラディンがタイガーの体内の銃弾を摘出したが、タイガーの血液型は希少なS型のRH⁺。船員達と同じ血液型の者はおらず、奪った軍艦にあった血を輸血しようとするが、タイガーがそれを拒む。そして、自分が奴隷だったこと、マリージョアの奴隷達を放つてはおけず3年前の事件を起こしたことを告げた所で、情けない顔をしたオレが来た……。

☆☆☆☆☆

「何故、受けなかった……？ バレたとしても、オレは自分のことは、自分でなんとかする……」

過去を見るのをやめて、タイガーに聞く。

「最初に聞くのがそんなことか……第一お前……受けたとして、通ると思うか……？」

「ッ……！」

……厳しいと思う。たとえば海軍が推薦しようと、決めるのは政府。絶対に通るとは言えない。

「それに……たとえ通ったとしても、おれは、何があろうと友を売らねエ……!!」

「そのくらいのこと、オレは売られたとは思わんし、恨みもしない……」

「おれの問題だ……いいか、よく聞け……お前らも！」

タイガーの言葉に、少し離れていた船員達が駆け寄って来る。

「おれは好きなように生き、結果、オトヒメ王妃をひどく邪魔しちゃったが……あの人は正しい！ 誰でも平和が良いに決まってる!! だが、本当に魚人島を変えられるのは、コアラのように何も知らない世代、人間への怒り、憎しみを持たない次の世代だ!!」

息を荒くしながらも、タイガーは続ける。

「だから頼む……！ 島には何も伝えるな……!! おれ達に起きた悲劇、人間への怒りを……!! この世には、心の優しい人間はいっぱいいる……！ 海賊嫌いのくせに、海賊のおれを助けに来てくれたお節

介もな……だが、おれのことをそのまま伝えちまえば、魚人島が変わる未来が遠のいちまう……おれは、死んだ後まで恨みを残し、あの人の邪魔をしたくねエ……！」

「縁起でもないことを言うなツ!! 輸血を負えて傷を癒せば、また元気になる! 4年前もすぐに治っただろう!!」

「お頭かしら、そんな弱気なことを言わんでくれ! 生きられる命なんだ! あんたはこんな所で終わる男じゃない!!」

「解放してもらったすべての奴隷にとって、おれにとって、あんたは一生の大恩人なんだ!! 偉業を成した『魚人島の英雄』なんだよ!! まだおれ達は、あんたに何も返せちゃいねエんだ、生きてくれ!!」

「……! 嬉しいねエ……だが、もうおれには、お前らの顔も見えねエんだ……お前ら……全員……愛し、てる、ぜ……」

笑いながらそう言った後、上に伸ばしていたタイガーの腕が力なく下がり……オレの手の中のビブルカードが、燃え尽きた。

「……お頭かしらア……!!」

船員達が涙を流し、悲しみの声を上げる。

何故、タイガーさんが死ななければならぬ? どうすれば助かった?

ドクン……

海軍が悪い? 違う。海軍は海賊を倒しただけ。任務を果たしただけ。どこも責める所はない。

通報した島の住人が悪い? 違う。海賊の情報を海軍に知らせるのが間違っているはずがない。

フルルシャウト島の村の住民が悪い? 違う。どの道海軍の奇襲作戦は実行された。子供と海賊、天秤に掛け、子供を選んだ判断を責められるはずがない。

天竜人が悪い? 違う。事の発端は奴らだし悪いことなど腐るほどあるが、今回奴らは何もしてない。マリージョアで上手い飯でも食べているだろう。

タイガーさんが悪い? 違う。海賊になるのは悪いことだが、その後の行動は『英雄』とさえ呼ばれるもの……そもそもタイガーさん

は笑って最期を迎えた。自分の死を受け入れていた。何も、後悔して
いない。

ドクン……ドクン……

なら……

「お前エ……!!!」

アーロンが、オレの胸倉を掴み上げる。

オレの腕に刺していた針が抜ける。

「なんで、なんでもっと早く来なかつたツ……！　なんでエ……もつ
と早く、来てくれなかつたんだア……!!!」

その目から涙が溢れている。

こいつはオレに怒っているんじゃない。嘆いている。

何故、タイガーさんは助からなかつたのか、死ななきやいけないの
かと。

「よさんか、アーロン……！　タイのお頭かしらの危機に、遠くシャボンディ
から駆けつけてくれたんじゃないぞ……!!!　お頭かしらの死を悲しみ、共に涙を
流している子供にすることかアツ……!!!」

「わかってんだよ、そんなことは!!　だがよオ……タイの大アニキは、
元奴隷でありながら、天竜人にケンカ売って、種族関係なく奴隷を解
放して、この3年間も商船から奴隷を解放して、それで人間が何をし
た!?　賞金稼ぎバウンテイハンターのガキと元奴隷のコアラ以外に、他に人間が大アニ
キのために何かしてくれなかったかッ!?　あんまりじゃねエか……あの人
は、最後の最後に、人間に裏切られて、また売られて死んだんだぞ!!」

ふざけるなアツくそオ!!!」

オレを離し、アーロンが飛び出して行く。

オレの体が地面に落ちて尻餅をつく。

「アーロンさん!」

「好きにさせてやれ……今のわしらに、奴を止める言葉は見つからん
……」

ドクン……ドクン……ドクン!

そうだ……目を逸らして、考えないようにしてただけだ。オレが
悪い。

タイガーさんを助けたくて、助けられなかったのはオレだ。オレにはタイガーさんの死を未然に防げる行動を取る選択肢があった。だがそうしなかった。

結果、助けられず、泣いているのは弱いオレだ。泣くしか出来ないのは力なきオレだ。

もつと速く飛べていれば……力があれば、間に合った。力がないから、間に合わなかった。

電気による心臓マッサージ、トリスタンがいるからと練習しなかった。していれば、助けられたかもしれない。

タイヨウの海賊団にタイガーさんが助かると希望の光を見せ、力が足りず、より深い絶望の闇に落ちたのはオレだ。それが現実だ。

弱いことは罪じゃない。だが、力がないと自分の目的は達成出来ない。

ドクン……ドクン……ドクン！ ドクン！！

「ロゼ、すまねエ……お前も大分血を失った、輸血を」

「いや、ズズツ、いい……これくらい、ズズツ、食事を摂れば戻る……」
力がないと、選択肢はない。運命を変えられず、屈した。

こうしていれば、そうしていれば、ああしていれば、どうしていれば……終わってしまった後で悔やむだけ。

弱い奴には、いや

「弱いオレには、何も、誰も、守れないッ……!!」

ドクン……ドクン……ドクン！ ドクン!! ドクン!!!

弱くちつぽけなオレとは裏腹に、先程から心臓が強く、大きく脈打っている。

何かが暴れているように。殻を破り、何かが誕生しようとするように。

「一体何じゃ?! 床や壁が!!」

オレの周りの物が勝手に動き、集まっていく。椅子が床が壁が変化し、オレの目の前に、一つに集まり、体を構築する。

そして、金属的な甲高い産声を上げたのは、体長5メートル程の巨大な機械仕掛けの鳥。おそらくは、オレが力と速さを望み、設計した

イメージが具現化したハヤブサ。

運命に反逆し、逆境を乗り越え今より高みへ飛翔する翼を備えた、敵を襲撃し、勝利をもぎ取る爪を研ぎ澄ませた猛禽、
Raid Ra ptors。

悪魔の実の能力者は、稀により強力な力を扱えるようになる。覚醒したのだ、メカメカの能力が。悪魔の実の力が。

「害はない、オレの能力だ……」
【R R —ライズ・ファルコン】。邪魔をした、オレはもう行く」

「ニユ、ロゼ、大丈夫か……？」

はっちゃん心配そうに聞いてくる。

自分だって悲しいだろうに、今も涙が流れているのに。余程今のオレはひどい顔をしているようだ。

「ああ。しばらくは休むが、いつまでも立ち止まらない……タイガーさんは魚人島の現状を憂うれいでいた。この力で、少しは役に立てるだろう……もうオレに出来るのは、それくらいだ……」

オレに頭こぶを垂れる「ライズ・ファルコン」の背に乗り、船から飛び立つ。

速い、そしてオレ自身が飛ぶより自在に飛ばせる。どうも能力で浮かすことも出来るようだ。方向転換にいちいちジェット噴射せずに済む分、動きに無駄がない。

シャボンデイへの飛行途中、1隻の船を見つける。

来る時にも見かけた船、漆黒の船体にドラゴンの船首、立派な船だ。海賊旗はないが、大量の砲台で武装しており、大勢の気配がする。今の時代、民間の船でも大砲くらい積むが、それにしても多い。海軍の軍艦以上の数だ。戦闘を前提としているかのような武装。

……この進行方向だといずれタイヨウの海賊団と鉢合わせするな。海賊船が海賊旗を普段は降ろし民間の船に擬装し、襲撃の時だけ掲げるのは別に珍しいことではない。

海軍の軍艦に乗っているとはいえ、この武装は……彼らも腕に覚えがある……海賊だが、今は、今だけは、そつとしておきたい……そつ

としてやりたい。

少々手荒だが、見極めるか。

ギン!!!

霸王色で正体不明の船を威圧する。

次々と消えていく気配……ただの民間人達だったか？ そう思ったが、5つの気配が残る。それも今までより大きな気配を放っている。覇気使い……その気配の内4つが甲板に出てくる。1つは出ようとした直前で引つ込んだので、大きな足しか見えなかった。

手配書では見たことがない顔だな……見ていたら絶対に忘れない。だが、カタギではなさそうだ。あんな民間人はいない。いてたまるか。

タトウー黒マントとアシンメトリークラブ、グラサン痴女に……形容しがたい変態。なんだ、あの濃い連中？ しかし、突然来訪、いや来襲したオレに攻撃をする意志が感じられない。ただ突然現れたオレに戸惑っている。凄腕の使い手のようだが、この様子だと、タイヨウの海賊団とも戦闘にはならないだろう。

そのまま放置して、オレはシャボンディに向かった。

☆☆☆☆☆

「な、なんだったんだっチャブル!? あのマシンボーイ……」

そう言うのは、4メートル半の長身だが巨大な顔故に三頭身の人物。

紫色のアフロヘアの上に王冠、長い付けまつげ、紫の唇に特徴的な出っ張った顎、首に真珠のネックレス、手には肘の手前の前腕を覆う長い手袋に、詰襟が付いたハイレグ水着のような服、しかし明らかにサイズが合っておらず、体の前面が剥き出しになっており、更には網のマントに網のストッキング、ヒールのロングブーツの、赤紫色で統一されたコスチュームを着ている。

先程の言葉をロゼに聞かれれば、『お前がなんだ?』と返されること間違いなしの、どこに行っても恥まじずかしい、紛まじう事なき変態の服装。

母親のシャクヤクが我が子の教育上、偉業はともかく見た目が完全にアウトだと判断し、情報を遮断していたが故にロゼは知らなかったが、この男、いや、性別という俗世の垣根を超越したこの新人類は、新人類拳法総本山カマバツカ王国女王の位を永久欠番にした最後の女(?)王、女王在位時には数々の民衆を救い「奇跡の人」と崇められた、エンポリオ・イワンコフその人である。

「霸王色の覇気……私達以外は全員気絶したな。ゴア王国で拾った新入り達はもちろん、正式な同志達も。猛禽類みたいな鋭い眼光だったが、あんな涙の跡が残った、赤く充血した目のぼうやに睨まれてもな……」

ピンク色のショートヘアの上にゴーグルを付けた帽子を被り、サングラスを掛け、上半身裸にネクタイを締めジャケットを着ているが前は開きつ放し、前が非常に短く後ろは長いフィッシュテールスカートにニーハイソックスとハイヒールを履いた、過激な格好のスタイルの良い女性ベロ・ベティが、泣いた痕跡がある子供を慮っているが、その子供からは痴女扱いされているとは夢にも思っていないだろう。

「目？ 先程飛んでいた時はゴーグルを付けていたが、今は外していたのか……だが猛禽類は中々の的を射ているな、ベティ。あの子供は『機甲のロゼ』。シャボンディ諸島では名の知れた賞金稼ぎ、狩人だ」
ベティの言葉に、この中では現在最も顔が知れ渡っており、顔を知られているとマズイと判断し、姿を見せなかったクマのような大男が、ロゼの情報を伝える。

クマ耳の付いた帽子を被り、黒の長髪、服の上からマントを着てフードを被ったこの男は、バーソロミュー・くま。世界政府加盟国ソルベ王国の国王。

「賞金稼ぎだったのね……どうしますか、ドラゴンさん？ あのマシンボーイを追いかけて勧誘？ それとも予定通り、一度バルティゴに帰還しますか？ どちらにしろ、このままでは船が動かさませんが……」

ロゼの言う所のアシンメトリークラブ、トランプのクラブのような髪型で、頭にサングラスをかけ体には膝下までの長さのファー状の口

ングコート、髪とコートが正中線から右半身が白色、左半身がオレンジ色の左右非対称なカラーリングで、片手にワイングラスを持った女性、イナズマだ。グラスに飲み物が入っているが、まだ未成年なので当然アルコールではなくただの赤いジュース。

そしてイナズマが尋ねた相手こそ、この一癖も二癖もある個性的なメンツを纏めるリーダー。

顔の左側に大きなタトウウーを入れた、黒ずくめの格好の、後に『世界最悪の犯罪者』と呼ばれるようになるが、今は無名の男。モンキー・D・ドラゴン。

「(あの子供が、昔親父の言っていた……)」

ドラゴンの脳裏に、数年前のガープとのやり取りが浮かぶ。

『今、見所のあるロゼって子供を鍛えてるんだが、嬉々としてついて来て、ついやり過ぎてしまう。ぶわっはっはっはっはっは！』

『親父のあの扱しぎに喜しんでついて来るとか……子供って何歳だ？』

『たしか……4歳とか5歳とか言っていたなア』

『それ人間か？ 海王類の5歳とかじゃないだろうな？』

「(親父の話を聞く限り、仲が良い海軍にも入る気がないのに、おれについて来るとは思えんな。下手に接触すれば、将来素性が海軍や政府にバレる恐れも……そうなればルフィの自由は……)いや、やめておこう。それより気になることが出来た、少し寄り道をしてくる。お前達は気絶した者達を起こしていきなさい」

「ちよっ、ドラゴン!? ヴアナタは一体どこへ……って、もういないイッスンヌ!？」

ドラゴンは1人、ロゼが飛んで行ったのと逆方向に向かった。

☆☆☆☆

フルルシャウト島から離れて移動中のタイヨウの海賊団。

タイガーが死に、二代目船長にジンベエがなり、タイガーの遺体を海軍の軍艦で魚人島へ運んでいる途中。

船員達に指示を出し、タイガーの遺体の傍らでジンベエは、先程の

ことを考えていた。

『弱いオレには、何も、誰も、守れないッ……!!』

ロゼの泣きながら、絞り出すような言葉を。

そして同時に、まだ自分がアロン達と共に魚人街でゴロツキをやっていた頃、タイガーと会った時のことを思い出していた。

『まだまだだな……踏み込みが甘いんだ。そんな拳じや、誰も守れねエよ?』

『あア? 守る? ぐわッ!』

腕に自信があつた自分やアロン、他の者達を、次々とタイガーが薙ぎ倒していった時のことを思い出していた。

『他に挑んでくる奴がいねエんなら、おれがこの魚人街を仕切る!!』

おれはタイガー!! おれがアニキになったからには安心しろ、お前達の命はおれの命だ。子分達はおれが守ってやる!!』

タイガーがいたから、今の自分がいる。

タイガーがいなければ、自分は魚人街で今も腐っていただろう。

「(魚人と人間、海賊と賞金稼ぎバウンティハンター。種族や立場が違えども、タイのアニキとロゼは、同じ所もあつた。何かを、誰かを守るために、力を求めていた。オトヒメ王妃の言う通り、わしは人間を何も知らなかったようじや……いや、歴史がすでに証明していると知った気になって、知ろうともしなんだ)」

「驚いた……海軍の軍艦なのに魚人が乗っているのはおかしいと思つたが、まさか勧誘しようとしていた『奴隷解放の英雄』がいるとは。海賊嫌いと聞いていたが……? すでに息はないが……血はあるか。魚人の、マリージョアを素手で登り切るほどの、この男の生命力ならば、もしかすれば……」

「誰じやア、貴様はッ!?!」

考え事をしてしていると、いつの間にかいた、ぶつぶつと独り言を言う見知らぬ男に誰何すいかするジンベエ。

その叫び声に船員の何人かが気付き、そして黒ずくめの格好にフードを被った男にも気付き、取り囲む。

「何者だ、お前!」

「海軍の追手か!？」

「おれはドラゴン……革命家ドラゴン。この男、おれに預けてくれれば、今ならまだ蘇生出来るかもしれん」

「……なんじゃと?」

「ジンベエさん、耳を貸すことはねエ!　こんな突然現れた得体のしれない男に!」

「ああ、こいつが政府の手の者じゃない保証なんてどこにもない!　お頭かしらの遺体を見せしめに公開されるかもしれねエ!!」

猛反発する2人の船員、黒髪のアフロヘアを上で2か所ゴムで留め、道着を着て黒帯を締めた、肘に大きなヒレがある男と、金髪に半袖のTシャツに半ズボン、大きく突き出した口が特徴的な男。2人の、クロオビとチウウの言うことはもつともだ。

大事なアニキ分の遺体を、突然現れた男に自分なら助けられるかもしれないと言われても、信用出来る材料がない。そもそもタイガーはついさつき人間に罠に嵌められ命を落とした。この男も、天竜人に逆らったタイガーを死後も辱め、今後反逆者が出ないようにしようとする政府関係者かもしれない。

だが、ジンベエには目の前の男が嘘を言っているようには見えな
い。自分を魚人と蔑まず、恐れず、目を背けず、正面から対等の人と
して見て、タイガーを心から助けたいと言っているように見える。

それは気のせいではなく、ジンベエはこの3年間の戦闘を経て、そ
して先程の海軍の罠で窮地に陥れられた時、微かすかに覇気に目覚めてい
た。ストロベリー少将に深手を負わせた時も、自覚せずに武装色の覇
気を纏って攻撃していた。見聞色の覇気で、目の前の男が本心からタ
イガーの生存を望んでいると感じ取っている。

「本当に出来るのか……?」

「ジンベエさん!？」

「ああ。政府に、世間に生存がバレずに済む方法もある。だが、それを
使えば君達との再会は遅れるかもしれないが……」

ジンベエの脳裏に、魚人島の未来を思うタイガー、数週間共に過ご
したコアラ、先程駆けつけたロゼの姿が浮かぶ。

「……タイのアニキを頼む」

「本気か、ジンベエさん……あんなことがあった直後に！」

「わかっておる……だがわしは、タイのアニキの意志を消したくない……人間を信じてみたい！」

「任された……この男の運命は、まだ終わってはいない」

☆☆☆☆

場所が戻って漆黒の船、ヴィント・グランマ号

「ドラゴン！ ヴアナタ、こっちの返事を聞かずにいなくなるのはい加減やめっチャブル!!」

リーダーなのに、よく単独行動をするドラゴンを諷めるイワンコフ。

「すまんイワ、許せ」

「ゆるる〜せエ〜？ そんなこと言われても簡単にイ……ゆる……ゆる……許ウ〜す!! 許すのかよ、一本取られたよ！ ヒーハー!!」

いつもならツツコんでくれる新人類ニューカマーのキャンディ達がいるのだが、今はいないため、ボケとツツコミを1人でこなすイワンコフ。

自身の片腕、イナズマは現在、ゴア王国で拾った重傷かつ記憶喪失の少年、サボの看病をしている。

「イワンコフ……顔がうるさい」

「いやいや顔は関係なっシブルよ、ベティ!？」

「ドラゴン、全員目は覚めた……いつでも船は動かせる。その男、フィツシャー・タイガーか？」

リーダーが帰って来ても、非常にマイペースかつ漫才のようなやりとりをする2人を無視して、くまがドラゴンの連れて来たものいち早く気付く。

「そうだ。今は心臓が止まっているが、お前達ならなんとか出来るだろう？」

「本人次第だっチャブルよ。すでに死の運命……どころかもう死んでるわ。並大抵の生命力では蘇生しなっチャブルね」

「ああ、こりやダメだな……諦めてるタマナシ野郎のイワンコフに、奇跡は起こせないんだろう?」

「ヴァターシは野郎ではなく、オカマだっシブル!!」

「イワンコフ、その指摘は的外れだ。ベティも口が悪過ぎるぞ」

口では悪態をつきながらも、皆タイガーに集まる。

まずくまが手袋を外し、手の平の肉球を曝さらけ出す。

くまはニキュニキュの実の肉球人間。一体何の役に立つのかわからないような悪魔の実の能力者だが、手の平の肉球であらゆるものを弾くことが出来る。自身を弾き飛ばす事で瞬間移動をしたり、相手の攻撃や大気、更には体の痛みや疲労といった実体がないものまで弾き飛ばすことが出来る。

ポンツ!!

その肉球でタイガーの肉体のダメージを弾き、肉球型のそれを海に落として、今はタイガーの胸に手を当て、心臓マツサージを行っている。

その間にイワンコフが、ドラゴンの持つて来た血液パック、ロゼのSのRHの血液パックを使い、タイガーの腕の血管に針を刺し、輸血おこなを行っていた。

「ヒーハー! さっさと帰って来いやア〜ンナ!! 【エンポリオ・治療ホルモン】! オラア!!」

ドスツ!!

注射針のように伸びた指先をタイガーの体に刺す。

イワンコフはホルホルの実のホルモン自在人間。様々なホルモンを指先から注入し、性別・体温・色素・成長・テンションなど、人間を内側から変えてしまう人体のエンジニア。

タイガーに注入したのは傷を癒す【治療ホルモン】。使用した対象者の寿命を削るリスクはあるが、もう既に死んでいるタイガーに躊躇いなく打ち込んだ。

そして、タイガー、イワンコフ、くまの後ろで

「もつと気合入れるオ!! お前らアアア!! それでもキ〇タマついてんのかアアア!」

船内から取って来た旗を振り、応援(?)と声援(?)を送るベティ。コブコブの実際の鼓舞人間。

彼女は鼓舞した相手の内なる力を呼び起こし、身体能力を増強させることが出来、その力で3人の力を底上げしている。決して罵倒しているわけではない。

「お黙りベロベロガール！ ヴアナタにもキンタ〇付けてやろうかア!? 汚れたバベルの塔建設してやろうかア〜ンナ!?」

「騒がしい奴らだ……」

「もう一人くらい、こいつらを纏める器を持つ者が欲しいな……」
実力は確かだが、癖が強過ぎるメンツを眺めて、ドラゴンは自分達の組織のNo.2を欲していた。

傍目には医療行為にはとても見えない光景が繰り広げられ、タイガーが息を吹き返した。

「げほっ(っ)ほっ！ い、一体何が……なんだお前ら!?」

目の前の個性が溢れ過ぎている人物達に驚きながら、事情を聞き、札を言う。

そして

「あ、あんな死に別れをして、どんな顔してあいつらに会えばいいんだ……?」

タイガーは地面に両手をつけて沈んでいた。黄昏たそがれていた。

「どんな顔して会えばいいかわからないイ〜ンナら、いつそ変えてみれば、ヴアナタの世界も変わるかもねエ……【エンポリオ・女ホルモン】！」

ドスツ!!

「ぐう!?!」

イワンコフにホルモンを注入されるタイガー。

すると、タイガーの体に変化し、髭はなくなり、丸みを帯びたフォルムに、女性の体に変化する。

「な、なんじゃア〜りゃアあ!?!」

タイガーが、大きく変わった自分の胸を掴みながら吠える。

元々タイガールの服装は頭にバンダナ、下はジーパンにサンダル、上はシャツを着てコートを羽織っているが、シャツもコートも前が全開でタイヨウのシンボルを曝け出していたため、ベティ以上にモロ出しである。ドラゴンとくまが黙ってタイガーから目を逸らす。

「どの道ヴァナタが生きていると政府にバレたらヤバっシブル。死亡が広まるまではその姿でいた方がいいわ。会わせる顔が決まったア〜ンナら、ヴァターシにお言い！ ちゃんと戻してあげるから〜」
そう言つて、サムズアップしながらウインクをする。

ハ☒☒☒チヨーン!!

「危ねエツ!？」

ウインクで起こった爆風を避けるタイガー。

規格外だなど思いつつも、自分を氣遣つての事、そして元に戻るのならと、この時は感謝したタイガーだが、後にイワンコフがインペルダウンに投獄されたせいで、これから10年も女のまままで過ごす目になってしまうことはまだ知らない。

「それで……結局お前達は何なんだ？」

「我々は……革命軍。世界に改革をもたらすものだ。フィツシャー・タイガー、君を我々の同志として勧誘したい。人々の自由のために、我々と行動を共にしないか？ 世界が君を必要としている」

“燃えさかる剣”

シャボンディ、海軍本部から少し離れた場所。

元は何もない海上だったが、自然ロギアの能力者達が少々やり過ぎて出来た、ちよつとした無人島。

オレ達は、そこで模擬戦おこなを行っていた。昔は海軍本部の特訓場でやっていたのだが、超人パラミンシアの能力者3人が戦うには手狭になってきた。ビンズの能力は場所を取るし、アインは流れ弾が危険、メカメカの能力が覚醒してオレも特訓場を消しかねないので、消えても構わないここですいている。

ルールは、オレは2人を気絶させれば勝ち。2人はオレを気絶させるか、アインの能力でオレを1年でも戻せば勝ち。オレは今12歳、アインの能力で12年戻されれば、0歳児時代の体になってしまうからだ。赤子でも能力で「R R」を召喚し戦えはするが、ミスれば訓練でこの世から消えかねないのでこうなった。

かつては殺風景だったこの無人島だが、今ではビンズのモサモサの実際の能力によって、緑溢れるジャングルへと変貌している。

おかげでアインの姿が見えん。

気配も消しているし、どこに行つた？ あいつから目を離すのは危

険なんだが……

「未ひつじ、寅とら、巳み」だいそうじゆ「木遁・大槍樹の術」！

ズズズズズズ……！

ビンズと交戦中のためアインを探せない。

雲の模様の忍者装束に、太刀と大型手裏剣を背負ったビンズが印を結ぶと、移動中に地面にバラ撒いていたのだらう種が急速に成長し、4本の木となってそれぞれオレに向かって囲むように伸びてくる。

先端は枝分かれしており、相手の体に巻き付け拘束したり、槍のように突き刺したり出来る。オレの体を縛ってそのまま海に落とす気だろう。

ビンズの戦闘スタイルは、自身に目を向けさせ成長させた植物で攻撃しながら、辺りを植物で埋め尽くし、その植物に無理矢理自身を隠

して、本命の攻撃用の植物や太刀と大型手裏剣で奇襲をかけるというものだ。木を隠すために森を作っている。まだ一度に操れる植物は数本だが、この森の植物をすべて操れるようになったら厄介だな。

「雌伏のハヤブサよ……逆境の中で研ぎ澄まされし爪を挙げ、反逆の翼、翻せエ！ 現れるオ！」
[R R R |ライズ・ファルコン]！」

拳を分離して下に飛ばし、覚醒した能力の効果範囲の地面を機械へと作り変え、新たに「ライズ・ファルコン」を呼び出す。今はオレの意志による手動操作だが、自動操縦モードにして、命令を与え自立行動させることも出来る。

オレの覚醒した能力は、自分以外の武装色を纏われた物や他の能力で支配されている物を機械に変えることは出来ない。だからモサモサの能力に操られている植物を機械にすることは出来んが、元はマグマグの能力の地面は現在操られていないので機械に出来る。

「迎え撃て、【ブレイブクロールポリューション】！」
「キーー！」

オレ自身はもう一体の「ライズ・ファルコン」に乗り空を飛び、攻撃させた方の「ライズ・ファルコン」が甲高い鳴き声を上げ、爪で木を切り裂こうと襲撃する。

キーン！

金属音が鳴り響く。

ビンズが操る植物は、その強度を能力で鉄のように硬くしている。生物相手では十分な攻撃力を持っている【ライズ・ファルコン】の爪だが、まだオレが使いこなせていない。武装色も纏えていないし。

オレは生来見聞色寄りの覇気使い。オレとメカメカの能力で生み出したものは見えない何かで繋がっている。
[R R R]をアンテナのようにして移動させることで、自分の見聞色の索敵範囲を広げること
はすでに出来るから、訓練すれば自分の体や身に着けている物のように武装色を纏うことも出来るようになるはず。

だが今は出来ない。ビンズもまだ植物に武装色を纏えないが、これでは時間がかかる。

仕方がない。

「ゴッドバードアタック」……芸術は、爆発だ……！」

爪で切り裂くのは不可能と判断し、「ライズ・ファルコン」のボディを爆弾に作り変え、爆発させることにした。

今は安らかに墓地で眠れ、また今度頑張ってくれ。

「喝ー！」 「キー!?!」

ボウン!!

心なしか驚いたような声を上げ、「ライズ・ファルコン」の体が爆発四散する。

その衝撃と爆炎で、ビンズの「大槍樹」だいそうじゆも吹き飛び、焼け落ちる。

「爆遁で自分のモンスターごと吹き飛ばされたか……!」

「ライズ・ファルコン」は犠牲になったのだ……「ゴッドバードアタック」はこうやって相手を道連れに自爆する技だ。そして「R R」は

また元に戻せる。こんな風にな……紅蓮に燃えさかるハヤブサよ!

渴望の翼を燃やし、我が魂を照らせ!! 現れるオ!レイド・ラフターズ 「R R」

ブレード・バーナー・ファルコン!」

たえスクラップになろうと、また能力で復活出来、オレの体力が続く限りまた動かせる。

自爆させ飛び散った機械片をまた一か所に集め、再構築し、別の

レイド・ラフターズ 「R R」を呼び出す。

体の前面に大きな1本のブレードを備え、両翼の羽根等至る所にブレードを装備した攻撃的なフォルムの「R R」レイド・ラフターズ。代わりに乗り心地とスピードは「ライズ・ファルコン」に及ばないが。

「焼き払え、【火炎弾】!」

ボオウツ!!

「ブレード・バーナー・ファルコン」が宙を舞いながら口から火炎を撒き散らし、辺り一帯に放火する。炙り出すか。どの道2人共このくらいで終わらない。

「いかん! (子、戌、寅) 【木遁・木錠壁】!」

ズズン……!」

ビンズを守るように、二重三重に木が重なり、半ドーム状の木製シエルターが出来上がる。

だがそれも時間の問題。火炎でこのまま焼け落ち

「タイム・マジック」

ピュン!

紫色のビームがオレの「ブレード・バーナー・ファルコン」に当たり、ただの固まったマグマに戻る。

本当に厄介だな……1年前にはサカズキさんが出した冷えたマグマだったものを能力で変化させたただだから、問答無用で消される。だが

「見つけた……【拳・骨・衛星】」

自分で空を飛び、乗っていた「ライズ・ファルコン」を分解し、50のロケットパンチに変化させ、オレの周りに浮かせる。

「拳・骨・流星群」!!」

キュイン!!

その内10個をビームが発射された方向へ高速で降り注がせる。これもまだ武装色を纏えない、課題は多いな。

アインのモドモドの光は触れたものの時間を戻すという特性上、鏡に反射しない。当たった瞬間鏡の時間を戻し光が消えるから。つまりその方向に必ずいる。

「えっ!? 何これ? あいつこんなこと出来たっけ!」

この反応……影分身のアインか。

光で照らした影から過去の自分の分身を生み出す技、「ヘイスト・スperl」。1年前なら12人まで、2年前なら6人、3年前なら4人、4年前なら3人、6年前なら2人、12年前なら1人の影分身を生み出せる。

影分身が傷を負えば、能力を解除した後で本体に同じ傷が出来るというリスク付き。影分身が1人でも殺されれば、能力解除後本体も死ぬだろう。さらに能力者が自由に動かせるわけではなく、それぞれが考えて勝手に動く。修行を人の12倍、いや本体も入れると13倍ですること出来るが、解けば傷や疲労のフィードバックでしばらく動けなくなるなど、便利ではあるがリスクも大きい。

そして1年前だから当然、オレの今年覚醒した能力のことはよく知

らない。戦う前に軽く教えはしていたようだが、覚醒してからオレの技は格段に増えた。早々対処出来るようなものではない。

そして【拳・骨・衛星】^{ゲン コツ サテライト}でアインを囲み、ビームを回避させながら、1つを服の上から体に触れさせ

【電撃】^{エレクトロ}

バリイ!!

「ぎゃあああッ!!」

悲鳴を上げ、影分身のアインが気絶するのを、ピンズを視界に入れないながら上から見下ろす。

やはり電気は使いやすいな。全身に武装色を纏えないと防げん。だからまだ出来ないアインには効果覲面だ。それにこれだと影分身を1人ずつ消せば、ダメージのフィードバックで死なずに済む。

アインの服装は、出来るだけ肘や膝など手以外の部位からもモドモドの光を出せるように、袖なしのシャツノースリーブに非常に丈の短いホットパンツ、太ももにコンバットナイフのホルスター、そして黒のハイヒール。シャツは詰襟とフリルの付いた前立てが白く、基本無地の紫色、ホットパンツはグレーでベルトをしておらず、スラリとした脚線美を惜しげもなく晒している。しかもへそ出し。かわいいが、露出高いな……。

影分身は気絶した時点で消えないので無抵抗。これが実戦なら殺されて、敵を倒せても能力を解除した瞬間死ぬだろう。影分身それぞれが【タイム・マジック】を使えるため、技を使った後のインターバルも補え、一斉射撃も出来る良い影分身だが、やはり地力を上げるための修行用に使うのが一番だな。戦闘は、1〜12秒のインターバルと引き換えに最大12年の時間を戻す、【タイム・マジック】と純粹な体術を鍛えれば充分強い。

さてと

「この胸の大きさは1年前の影分身か……? いや、だがアインは着痩せするタイプだし……せっかくだ、脱がせて生でじっくり揉んで確かめるか」

「こっつ、この変態! なんて遠目の目測でわかるのよ!」「揉んだこと

なんてないでしょ！ えっ、ないわよね……？ 1年後のわたし……？」「ヒナさんに言いつけるわよ!?」「セクハラマシン！ 訴えるわよ！」「昔はもつと真面目な良い子だったのに！ ……ちよつと変だつたけど」「気絶した女を襲うとか最ツ低！ 父さんに殴られちゃえー」「この痴漢！」「強姦魔！」「女の敵！」「スケベ！」「エッチ！」

オレが手を拡声器に変え、一帯に聞こえるように言うと、辺りから痴漢オレを非難する声が聞こえる。当然脱がせていない。まだ攻撃に使った【衛星】サテライトを飛ばしているので、脱がして揉もうとすれば出来るが。

凄い技のはずなのだが、こんなしょうもない方法で釣り出せるからな……11人の気配を捕捉。1人足りない。本体にはもう前にもやった手なので尻尾を出してくれないか。影分身達は話を聞いていても、オレが手段を変えているので動揺を隠せていないようだ。

前の時はパンツを脱がすと言ったな……セクハラで訴えられるのが怖い。裁判抜きで実刑判決下される。

鬼教官兼父親ゼファアーさんに言われるのも怖い。人生やり直させられる。(※やり直させられないけど男として責任取らされる)

姉さんはきつと大丈夫。優しいから。(※優しいけど大丈夫ではない)

「行け、【衛星】」サテライト

キュイン!!

気絶させた影分身の近くの10と自分の周りに浮かせている内の1、合計11の【衛星】サテライトをそれぞれの気配に向けて1つずつ飛ばし、残りはオレの周りで動かしながら待機させる。捨て身で【タイム・マジック】を撃ってきた時のための壁だ。

オレの本体の現在地は、アインの影分身達の見聞色の射程範囲外。この攻撃は、目や耳で捕捉するしかない。それか、突然射程範囲が広がったり、物の気配を感じられるように、見聞色が成長するかだな。

「イヤーーッ！」

アインの影分身を襲撃しながら見張っていると、ついに動いた。地上のビンズが背中的大型手裏剣に武装色を纏い、放ってくる。

【嵐脚】
ラシキヤク

キーン!

嵐脚で鎌風を巻き起こし、向かって来る手裏剣を空中で撃ち落とす。

いくら武装色を纏っても、大きく重い手裏剣を重力に逆らい上に投げるのではどうしても威力は落ちる。

だがこれで終わりではあるまい。その証拠に印を結んでいるが、戌いぬ、酉とり、巳み、この印は……何のつもりだ？

【木遁・果樹来降】
かしゅらいこう

ズ　ズ　ズ　ズ……!

柿、栗、葡萄ブドウ、桃……果樹が育ち、果実をつける。オレが一番よく見る術だ。能力を鍛えれば一瞬で辺り一面果樹で埋め尽くされるのだろうか……素晴らしい!

「何故戦闘中に……いただきます」

両手を合わせるオレ。

「ふっ、敵に塩を送るはずなからう。このまま成長させ続ければ、どうなると思う?」

どうって、そりやこのまま時間が経てば……!?

「待て、やめろオツ!! そんなことしちゃいけないツ!!」

「真剣勝負に待ったはない。【木遁・枯れ木の術】」

オレの懇願もむなしく、果樹達は成長し続け……無慈悲にもすべての果実が枯れ、力なく木ごと地に落ちた。

ブチッ!

「貴様アアア!!! 最高の能力を最ツ低の使い方しやがってエエ……再び現れるオ!! 【ブレード・バーナー・ファルコン】!! 辺り一面焦土にしてしまえエツ!!」

いただきますと手を合わせていた手を分離、地面に飛ばし【ブレード・バーナー・ファルコン】を呼び出す。

「(作戦通り……それにしても、ここまで効果覲面とは……)」

「アインツ! どこにいるか知らんが、ちゃんと避けるよ? 避けね

ば死ぬぞオツ!! 【火炎旋風】!!」

ギヤイイイン!!

アインの本体、まだ残っている影分身に警告しながら、「ブレード・バーナー・ファルコン」の全身が炎に包まれ、全身のブレードがチェーソンのように回転し、そのまま周りの木々に突撃させる。

ズババアツツ!!

すれ違いざまに木を焼き切り、倒れた木が炎に包まれ、周りにも火の手が広がっていく。

まるで今のオレの憤怒の心境が具現化したような光景だ。

「徹底的に炙り出してやる……!」

火から逃れて出てきたアインの影分身を、【電撃】^{エレクトロ}で気絶させ、そのまま【衛星】^{サテライト}で服を掴んで火中から引きずり出し一か所に纏めながら、残った【衛星】^{サテライト}を一つに合体させる。

そろそろ【ブレード・バーナー・ファルコン】が限界だな。あの技は破壊力はあるが、今のオレでは一定時間使うと熱で内燃機関がイカレてしまう。

ふう……仕方ない。一度クールダウンだな。オレ自身も。

【拳・骨・彗星】!!」

キイイイン!!

5メートルの大きさのロケットパンチを、加速させながらビンズに落とす。

「(このままではマズいな……^み巳、^{ひつじ}未)【木遁・皆布袋の術】」

ズドオン!!

地面から大きな木の手が生えてきて、オレの【彗星】^{コメット}と激突する。

「受け止めたか」

「(今の内に……!)」

その間にビンズが移動する。

「さて……2個目はどうする……ビンズ?」

キイイイン!!

「何ッ!?!」

動いたビンズの後ろから、もう一つの【彗星】^{コメット}が飛来する。

限界が来た【ブレード・バーナー・ファルコン】を作り変えたものだ。上から来る方に気を取られている内に、背後に回しておいた。

「くっ、【鉄塊】」

ドゴオン!!

能力による植物操作が間に合わないかと判断してか、【鉄塊】で体こそ硬くしたようだが、衝撃でビンズの体が吹き飛び、そのまま海に落ちる。

それを【彗星】で追跡して、溺れたビンズを引き上げる。

オレの能力で作りに出した物は海に落ちても元に戻らない。更に、機械化したオレが水に沈めば呼吸こそ不要ではあるものの、能力も使えず体も動かないが、オレ自身さえ水に浸からなければ、問題なく海中に作った機械を送り出せる。おかげでメイプル達の手を借りずとも、潜水艦を作って乗り込み、能力で操縦して自力で魚人島に行けるようになった。つまり陸・海・空、あらゆる戦場に対応した機械を作り出せる。夢と行動範囲が広がるな。

さて、後はアインだけだな。

【タイム・マジック】

ピュン!

「おっと……!?」

紫色のビームが飛んで来たのを、腕で受ける。

コートに当たったので、オレ自身は何ともない。コートも新しくなっただけで消えていない。1〜12年前には存在していたようだ。

「見つけた。では、ここからは「対」で闘ろうか」

腰の鞭を取り出し、アインの方へ

ピュン!

【タイム・マジック】……いいえ、これで終わりよ」

「えっ?」

背後からビームでヘッドショットを食らい、オレの体が縮んでいく。

「14人目? 影分身を呼び出せる数が増えたのか?」

4, 5歳くらいの姿になってしまった。

振り返ると、人差し指と親指を立て、ピストルの形にしたアインがにっこり笑っていた。周りには気絶した影分身が寝転がっている。

「いいえ。わたしは途中、「ヘイスト・スペル」で1人しか影分身を出してなかったわ。よっと」

「わく、懐かしい〜！ ほっぺたプニプニしてる〜！」

歩いて近づいて来た、アイン（本体）に抱きかかえられ、アイン（影分身）に頬を突かれる。

「だが、1、2……そっちのアイン、そして気絶しているのも入れると、影分身は最大の12人いるぞ？」

「どういうことだ？」

「あなたがキレて見聞色が使えていない間に、追加で出されたのよ」

【電撃^{エレクトロ}】は持って来ておいたDr. ベガパンク製の耐電スーツを着て防いで、さつき脱いでおいたわ」

「ちゃんと確認しないからよ。見聞色を頼り過ぎたわね」

なるほど……最初にオレの前で影分身を出して12人いると印象付ける。オレが見失っている間に1人影分身を消して、オレの言葉には前に使った手だから引つ掛からなかったのではなく、全員きちんと気配は捉えていたが、オレがあと1人見つけられないと思ひ込んでいただけか。

そして、本体は耐電スーツでオレの攻撃をやり過ぎし、気配を偽装しやられたふり。ビンズが挑発してまんまと馬鹿^{オレ}が引つ掛かった所で1人新たに影分身を呼び出し、影分身がオレを攻撃して注意をさらに引き付けた後で背後から不意打ちしたと。

よく確かめていれば影分身の中に本体がいると気付く機会はあるた、してやられたな。

「ちなみに、果樹を枯らせてお前を怒らせるといのは、拙者ではなくアインの発案だ」

溺れて気絶していたビンズが目を覚まし、そう言ってきた。

「なんだと!？」

「この前と、そして今回の分も含めて仕返しよ、スケベなロゼ君。あなたが覚醒してから、2人がかりでようやく勝てたわ……」

実際にパンツ脱がしを実行したわけではないのに、根に持たれてたか。

片手で頭をグリグリされる。

「はあ……だが、所詮は負け犬の遠吠えと受け取ってもらっても構わんが、オレにしか通用しない対策ばかりで勝っても、強くなったとは言えんぞ？ 第一、「レヴオリューション・ファルコン」の対策は出来たのか？」

「まあ、その通りなんだけど……あんなものどうしろって言うのよ……」

「あれは『機甲のロゼ』の卑劣な術だ……自身はこちらの攻撃が届かない安全圏、遙か上空から爆弾を投下し爆撃を繰り返す。どんどん足場がなくなり、爆風で海に落とされてしまう……今の拙者らに攻略法はない。一方的過ぎて訓練にならん……あれは禁術だ」

「相手に何もさせないという鉄の意志と、敵を速やかに殲滅し一刻も早く戦闘を終わらせるための鋼の強さを感じさせる、非常に効率が良く平和的な戦術なのだがな」

「平和……？」

味方に被害を出す間もなく戦闘終了、実に平和ではないか。

問題は焼け野原になるから、周りを巻き込み、使える場所が少ないことだ。出来るだけ海賊船は無傷で回収したいので、海上戦でもそうしなければ勝てない時以外やりたくない……あとは、海賊のアジトを跡形もなく吹き飛ばすくらいしか……投下する爆弾の種類を増やして、非殺傷の無力化手段を作るか。

「さて、まあオレの負けとなったわけだが、一体2人は何を要求するつもりなんだ？」

今回、勝った方が負けた方に1つ要求を呑ませることが出来るという条件で戦っていた。

金銭は賭けないというのでやってみたが、やはりギャンブルなんてするものではないな。

「あなたのビブルカードよ」

「拙者もだ」

「……そんな物で良いのか？ 欲がない奴らだな」

口ではそんな物と言うが、結構痛い。海軍関係者にオレのビブルカードを持っていられると、いざという時死んだふりをしても後でバレル。1回本当に死んで、後でトリスタンに蘇生してもらえば消えないものか……ダメだ。それでは何のために、あの時ノジコにビブルカードを渡したのかわからなくなる。自分の死が原因で、命の紙の消滅を人に味わわせたくはない。また別の生存手段を考えないと……あれしかないか。成功すればオレの気も楽だし。

まあ仕方がない。自業自得だ。それに、こいつらには渡しても良いと思う自分もいる。良いキツカケになった、そういうことにしておく。

ポケットから自分のビブルカードを取り出し千切り、まずはビンズに渡す。

「ちなみに、お前は何を頼むつもりだったのだ？」

「ビンズには、珍しい果実の種でも渡して木にしてくれと頼むな」

「わたしには？」

「そんなもの、当然エロいことを要求したに決まっている」

「……なんであなた、こう育っちゃったんだろうな。ロゼの影分身を作って、フィードバックで洗脳、もとい、性格を矯正とか出来ないかしら……？」

首を捻り見上げながらビブルカードを渡すと、アインが受け取りながら、遠い目でどこかを見てぶつぶつと呟いている。

普通にオレを抱き上げたりしているくせに変な奴だ。

「そろそろ気は済んだか？ オレを元に戻してくれ。さつきから胸が当たっているぞ。嫌なら離せ」

「……もうちよつとダメ？ もっと勝利の余韻に浸りたい。それに、今のあなたは4歳児だから気にならない」

小さくなったオレは、目に見える勝利の証、ということか。

「長くなりそうなら、拙者は先に帰っても良いか？」

「はあ……では、先にビンズをオレの【ライズ・ファルコン】でマリッフォードに送るとしよう」

「……爆遁は使うなよ?」

「当たり前だ」

今日何度目かの【ライズ・ファルコン】を召喚し、オレと感覚を共有する。

これで【ライズ・ファルコン】の見たものをオレも知ることが可能。代わりに痛覚も共有しているのも、もしこの状態で【ゴッドバードアタック】など使おうものなら、オレはこの身を引き裂かれる幻肢痛を味わうことになる。

「ふふつ、冗談だ。では御免」

ビンズが【ライズ・ファルコン】に背に乗り、オレが飛ばして送り届ける。

帰って来る頃にはアインも満足したのか、オレも元の姿に戻れた。

「か、体が……」

そしてアインは、影分身1人分のダメージのフィードバックを受けて、行動不能に陥っている。

「先程とは立場逆転だな」

自力で歩けなくなつたアインを、オレがお姫様抱っこで抱えて、【ライズ・ファルコン】の背に乗り飛行している。落とさないようスピードは少し押さえて。感覚共有はもう解除している。オレが同行するなら必要ない。

「……変な所に触ったら、舌噛み切つて死んでやるから」

「服装の割に貞操観念高いな」

「なんでこの服装なのかあなた知ってるでしょ!？」

「色仕掛けのためだったか? 忍法いろいろけの術」

「違うわっ!!」

アインの体が動いたら、ビンタかパンチを食らっていたな。今は。

「すまんすまん。まあ安心しろ。お前に変な所などない、きれいな所しかない。それに、絶対に死なせないから」

「そ、そういう問題じゃないわよ……抱きしめるな頭を撫でるな耳元で囁くな!!! と、年下のくせにい……」

「悪いが、お前を年上だと思ったことはない」
「何をウツ!? ……な、なんか顔近くない?」

お姫様抱っこを普通の抱っこに変えて、抱きしめ頭を撫で耳元で囁いた後でそう言われた。

近い、というよりは近付けている。現在進行形で。

「この状態で舌を噛み切るのを防ごうと思えば、キスで止めるくらいしかあるまい」

「キッ……!?!? もうちよつと他にあるでしょ!?!」

「そうだな。お前が舌を噛まなければ、それで済む」

「……………も、もう噛むなんて言わないから離れて…………」

「ふははっ、了解した」

アインから顔を離す。

「……………珍しく沈んでたみたいだけど、もう大丈夫そうね」

「別にいつも通りだろ?」

「あなたはポーカーフェイスが上手いからわかりづらいけど、最近あまり笑ってなかったわよ?」

そうなのか。海軍関係者だと、他には姉さんにも指摘された。

気付いてはいるけど、ひとまず様子を見ている人もいるかもな。

「まあ、大丈夫だ。ありがとう」

○○○○○○

タイガーさんの死は、すでに報道されている。

人間に献血を拒否され、タイヨウの海賊団船長フィッシャー・タイガー死亡、と。そして船員「ノコギリのアーロン」の逮捕も新聞で世界に広まった。あと有名な舞台女優が行方不明になったとか。

あいつがそんなことを、逆ならともかく……………いや、どうだろうな。直接会ったのはたった二度、あの男について語れる程、オレは奴のことを知らん。オレが間に合わなかったのをそう捉えたとか。だが、それにしてもオレの所に事情を聞きに、もしくは捕縛しに海軍は来ない。

気になるのはシャーリーの反応。兄は問題ないと言っていたが、同時に驚いてもいた。何か見えたようだが、あいつはオレに占いの結果を教えたことを悔やんでいた。オレに不安を押し付けたと。不安くらしい一緒に背負ってやると言っておいたが、しばらくは理由を教えてくださいなそうだ。

その後、シャボンディに着いたオレは家に帰らず、ステューシーの所に行った。

父さんの伝言は伝えておいた。今、店にいるかもしれない「赤髪」と、海賊と顔を合わせれば、八つ当たりしかねない。久しぶりの再会に水を差したくない、そう思い避けた。

『私の落ち度ね……あなたの下に付くって言っておきながら、得意分野でこれじゃあ……んくっ!?!』

テーブルの椅子に座り、ステューシーが入れた紅茶を飲みながら話をする。落ち込み出したので、立ち上がり口を塞いだ。キスで。舌も入れて。りんごと紅茶の味がした。

『（熱く、柔らかい、優しい口づけ）あっ……』

抱きしめ、互いに舌を絡ませること数分、口を離す。

『力、抜けたか？ 今回のことはオレの落ち度、オレが背負うもの、一生忘れてはならんものだ。けど、気遣いはありがとう。頼りにしているから、これからもよろしく』

『はい…… “茨の主”^{いばらのあるじ}様……（もう私、シヨタコンでも何でもいいかあ……）』

『……お前はいつになったら、オレを名前で呼んでくれるんだろうな……』

『えっ？ い、いやその……名前で呼び合うのは恥ずかしいっていいか……』

『恥ずかしがるポイントがおかしい……』

何故赤面……他に恥ずかしがるポイントなんていくらでもあるはずだろうが。この部屋の壁にオレの写真（※以前より増えている）を貼っていることとか。自分を黙らせたければキスで口を塞げとか。

他にも……

☆☆☆☆☆

「ねえ……なんかハレンチなこと考えてない？（表情は変わってないけど……）」

少し前のことを思い出していると、アインに中断された。

「いや、まだ考えていない」

「ふうん、まだ……語るに落ちたわね。これから考えるつもりだったってことじゃない」

「ああ」

ジト目で見てくるアインにそう返す。

「少しは隠しなさいよ！」

「そんな言うまでもないことより、2人共、来年海軍に入隊するのだから？ どうだ、自信の程は」

「（言うまでも……）別に。今までも勉強に戦闘訓練はしていたし、いつも通りやるだけよ」

「クールだな。昔は早く海軍に入りたいて言っていたのに。ゼファーさんによじ登って」

「それはもう忘れて……」

別に照れることはないと思うがな……立派な志だ。

「……あなたはやっぱり海軍に入らないの？」

「そうだな。他にやりたいことがある。海軍に入ったら、それをやる余裕がなくなりそうだ。海軍は忙しいから」

「……海軍にもサボってる人達はいるけど」

「あれを真似したらダメだろ。それに、あの人は今までの実績があるから御目^{おめこぼ}溢しを貰えているだけで、新米が同じことやっていたら軍法会議ものだ」

スモーカーさんとか。あの人の場合はサボったわけではないけど。

「まあそうよね……ていうかわたしがサボらせな……ッ!? ね、ねえ……? なんか、わたしの体に硬い物が当たってるんだけど……?」

「ん？ ああ、これは……ふはは、触って確かめてみるか？」

「へ!?! いやでもこれって……」

「問題ない。後学のために……それに、姉さんだって触ったことがある」

「はあ!?! 前からおかしいとは思ってたけど、ついに……ッ！」

「おかしいって何だ。ただの仲の良い姉弟だろ」

「それはないわ!!」

力強く否定された。解せん……。

「それで、どうする?」

「えっ、いやでも……だけど本人が良いって言ってるし……」

ぶつぶつ言ってから、葛藤の末手を伸ばし

「ってこれ海楼石の手錠のケースじゃないのよ!!」

触れてから絶叫した。

「能力者としては、海楼石に触れるとどうなるか、知っておいた方が良
いだろう?」

「とつくに知ってるわよ! わ、わたしはてつきり……」

「世の中には2種類の人間がいる」

「な、何よ突然……?」

「アイン……お前はむっつりスケベだ」

「やかましいわ!! このオープンスケベ!」

その後、アインを医務室まで連れて行ったが、その間ずっと話しかけても無視された。少しからかい過ぎたか……まあ、これで大丈夫だとわかってくれただろう。

『人生は、出会いと別れの繰り返しだ。私も何人も友と出会い、ロジャーに限らず、何度も友を失ってきた。その度に泣いた。ロゼよ、焦るな。ゆつくりでいい。辛い時こそ人の真価は問われる。お前なら、乗り越えられる』

もう充分休んだ。貰った。

父さん達やアイン達に限らず、心配してくれる人が周りにたくさんいるから。

☆☆☆☆

東の海、^{イーストブル}とある海域の小さな港のシモツキ村、その村外れの森

「体力を付けるんだ、刀をいっぱい持っても平気なように！ 2本でダメなら3本だ！」

口にはダンベルを咥え、木の枝に先に大きな岩を結んで付けたロープを2つ掛け、両手に持って交互に前に突き出す。

二刀流でも倒せないライバルに勝つために、三刀流という常識外れの剣術を編み出そうと道着を着て修行している、緑色の短く刈った髪型の少年、ロロナア・ゾロ。

将来海に出て世界一強い剣豪になるという野望を抱き、一心道場の男子の門下生では一番強い。だが、それでも一度も勝てない相手がいる。それも自分と少ししか変わらない、道場の師範コウシロウの娘くいな。ゾロとくいなは今までの戦績は2001戦0勝2001敗。「約束したんだ！ おれかあいつ、どっちかが世界一の剣豪になるって、どっちがなれるか競争するって！ もっともつと強くなつてやる！！」

昨日の真剣を使った勝負での敗北、その後の約束を思い出しながら、今日も修行に励んでいる。

「ゾロ！ 大変だ！」

ゾロが修行をしていると、同じ一心道場の門下生達が走って来た。「くいなが家の階段で転んで……！」

ゾロ達が道場に向かうと、治療を受けているくいながいた。命こそ助かったものの、後遺症で左腕が動かせず、この村の医学では治すことは難しいと診断される。

「ははっ、ドジっちゃったなあ……！」

「畜生オ……！ お前昨日おれと約束したじゃねエかよ！ そんな腕じゃ」

約束はどうなるのか、もうくいनाは剣を握れないのかと、悔し涙を浮かべ叫ぶゾロに

「せいっ！」

「痛ッ!？」

くいなが手刀で面打ちした。

「早合点して、私の腕がもう治らないって決め付けないでくれる？」

「は？ いや、だってさつき医者が」

「この村じゃ治らないって言ったのよ。今はまだこのままかもしれないけど、諦めるつもり、ないから」

「……女だからって理由だけでも、昨日は世界一にはなれないって泣き言言つてたくせに、出来んのかよ……？」

「今更障壁が増えた所で、こっちの野望は変わらないのよ。私をその気にさせといて、女だから、怪我してるからって理由で私に手加減したら……約束破つたりしたら許さないわよ？ あんたが言い出したことなんだから」

くいなだって不安がないわけではない。片腕のハンデは大きい。たとえ治せてもリハビリがある。今まで通り剣が振れるかわからない。だが、それでも剣を手放す気にはならなかった。

自分が初めて会った時は、道場破りに来た時はただの素人、どころか竹刀を握ったことすらなく、両手と口に3本ずつ、合計9本の竹刀を持って戦おうとし、あっさり自分に負けたゾロ。だが、彼はそれで終わらなかつた。この1年で、たった1年で道場の門下生で一番強くなった。自分を除いて。

ゾロの成長速度は明らかに異常。天才の部類だろう。それも自分を倒す為に並外れた努力をする天才。負けてたまるかと必死で自分も努力しているが、差が埋まって来ているのを実感していた。父親の言う通り、女では世界一強くなるとはなれないのか、これが男と女の差なのかと焦っていた。

だが昨日、自分に負けて泣いて悔しがるゾロに、自分の悩みを打ち明けて、言われた。

『おれに勝つといて泣き言言うなよ！ 卑怯じゃねエかよ、お前はおれの目標なんだぞ!! 男だとか女だとか、おれがいつかお前に勝った時もそう言うのか！ 実力じゃねエみたい！ 一生懸命お前に勝

つ為に特訓してるおれがバカみてえだろ！ そんな事言うな！ 約束しろよ！ いつか必ずおれかお前が世界一の剣豪になるんだ!! どっちがなれるか競争するんだ!!」

この約束は、自分に勝って世界一になるというゾロの誓いだけでなく、自分に対するゾロの不器用な優しき。ゾロは毎日自分に負けても不屈の精神力で食らい付いて来た。自分はそのゾロの目標なんだ。女だから、片腕が動かないから、そうやって理由を作って諦めるのはもうやめだ。約束は守る。何があろうと、誰に何と言われようと、世界一になつてやる。好敵手に情けない姿は見せない。

「いつまで泣いてるのよ、男のくせに。情けないわよ、ゾロ?」

「うるせエ！ そんなに言うなら、絶対諦めんなよ！ だけど、世界一の剣豪になるのはおれだ!!」

「いいえ、私よ!!」

「強くなりましたね……くいな。親に、誰かに無理だと言われて折れるようでは、それが何であれ実現することなど到底出来ません。ゾロ君に感謝しないといけませんね……彼が来てから、くいなは更に強くなりました。そしてこれからも……女の子の親としては少々複雑ですが、迷いはないようですね……)」

同じ師の下で、2人の若き天才剣士が世界一強い大剣豪を目指し、切磋琢磨する。

2人の名が世界に轟くのは、そう遠くはないかもしれない。

“機甲VS戦争屋”

フィードバックで動けなくなったアインを医務室に送った後で、海軍本部を歩くオレ。もう何度もやっているのだから、少しお姫様抱っこで運んだくらいで茶化さないで欲しい。アインが照れて降ろしてと騒ぐから。暇人じゃあるまいし。

アインも科学班の研究についてくるようになったけど、まあ科学班には入らず普通にゼファーさんみたいに海兵になるだろうな。ずつと言っていたし。かつてゼファーさんが大将時代に掲げていた「生かす正義」を背負うつもりなのだろう。

科学班の、というよりDr. ベガパンクの研究・開発費用がすごいことになっているらしい。前にステューシーの過去で五老星がお金を必要としていたのは、他にもあるのだろうがそのためだろう。まあ、世界政府の最高権力者がわざわざ話し合うことではないと思うが。アイドルのプロデュースなんて下の人間に任せればいいことだ。もしかしたら送り付けたハンコックの写真に少し魅了されていたのかもしれない。

オレの能力が覚醒して、自分の体を変化させるだけでなく、より大きな機械を作り出すことが出来るようになったので、実現可能と判断出来たものを作り出すため、加速度的に必要な開発費は増えているそう。最近は人工衛星とやらを作るための、太陽の光を電力に変換するという太陽電池を作ろうとしている。

世の中には不思議なことがたくさんあるが、オレが一番不思議なのはDr. ベガパンクの頭の中がどうなっているのかだな。だが知らずに放っておいた方が良いパンドラの箱のような気もする。

「貴様が、“機甲のロゼ”だな？（こいつがベガパンクの言っていた、機械の能力者。それも覚醒した……）」

そんなことを考えながら、海軍科学班のマリンフォードの研究室の前を通っていると、声をかけられた。

言葉からしてオレの知らない人物、振り返って確認すると……金髪

で長髪の頭に金の兜を被り、尖った長く黒い髭と二つに割れた顎、白い手甲に黒い靴、グレーの上下の服の上にオレンジのマント。そして、マントの下のロングコートの膝の部分には66……マジか。66……ってまさかあの……おそらくオレの想像は合っている。

「ええ、そうです。優雅な立ち振る舞いから、高貴な身分の方とお見受けいたしますが、私は下賤の身ゆえ存じ上げません。宜しければ御尊名をお聞かせ願えませんか？」

「そうでもなければ」

「(違和感が凄いねエ……誰これエ？ 言っちゃアなんだけどオ、気持ち悪いねエ……)」

大将「黄猿」、ボルサリーノさんが付いているはずがない。

長年元帥をやっていたコング元帥が退き、センゴクさんが大将から元帥に、ボルサリーノさんが中将から大将に、ストロベリーさんが少将から中将に昇進した。

「知らずとも無理はない。私の顔を知り生きている者など、取引相手が国民くらいだ」

「ターゲット標的は殺すから……ということだろうか？ 遠回しにこれ、「私はお前に取引を持ち込みに来た。断れば殺す」って言っていないか？

考えすぎか？ だがあの戦争屋ジェルマだからな……去年も東の海イーストブルーのコジアに侵攻したらしい。

「私の名はヴィンスモーク・ジャッジ。ベガパンクから聞いているだろう」

「ええ、常々。優秀な科学者で、なおかつ「ガルーダ怪鳥」の異名を持つ戦士、そして、世界政府加盟国最強の科学戦闘部隊を持つ、科学国家ジェルマの王と」

あと、ジェルマの悲願、北の海ノースブルーの武力制圧に取り憑かれた亡霊と。「なら話が早い。貴様を我がジェルマ王国に招待する。世界会議レヴェリーも終わり、もうすぐ我々はここから離れる。その前に我が子達の相手をしろ」

「はあ……ここまで嬉しくない招待をされたのは初めてだ。それはこちらの返答を一切聞いていない一方的な宣告。頷いて当然といっ

た傲慢な態度。

やはり王族というのはこういうのが多いんだな。オトヒメ王妃やネプチューン王と会うまでのオレの中の王族のイメージそのまんま。リユウグウ王国の王族達の、なんと慈悲深く心優しくったことか。

「お招き頂き光栄、恐悦至極に存じます。私も科学に僅かながらに関わる者として、あのジェルマ王国に足を踏み入れられるなど、一生の誉れ。感謝の極みにございます」

「(こいつ凄いなエ……絶対そんなことオ、1ビット(※デジタル信号の最小単位)も思っていないでしょオ?)」

内心不満しかないが、今は出さない。

「そうであろう。物わかりのいい人間は長生きする。支度を済ませ、すぐにこの研究室に來い」

「あく、わっしもちよつとこいつに用があるから外すねエ」

「構わん。そのままいなくなった方が良くくらいだ」

「それは無理でしょオ」

ジャツジ王が研究室に入ったのを背に、ボルサリーノさんがこちらに來る。

「用って何だ？　というかいなくなった方が良いつて、護衛じゃないのか？」

「ジェルマ 6 ダブルシックスの総帥に護衛なんていらなでしょオ。わっしは『怪鳥』が研究室で妙な真似しないように監視だよオ。去年みたいなことがあるかもしれないしねエ」

王下七武海だった『擬身』がやったあれか。監視でこの人つてことは……妙な真似をしたら戦闘つてわけか。物騒だな。

そういえば、この人も北の海の出身だったな……用が無事終われば聞いてみるか。

「それで用つてのはア、君イ、あんな簡単に受けちゃってエ後でとんでもないことになるかもよオ？」

「断つたら断つたで面倒そうだから、とりあえず様子見。向こうが何もしないならオレも何もしない。だがオレを脅迫したり強硬手段に

訴えて来れば、それ相応の手段を使う。最善は切るだけ、最悪は国を爆撃して吹き飛ばしてでも帰って来る。ジェルマ王国は加盟国だけど特殊……それで海軍が動くことはないだろう?」

ジェルマ、というよりヴィンスモーク・ジャッジは一度は逮捕されそうになった男。それが加盟国の王としていられているのは、ジェルマの科学力を政府が、そして加盟国の多くが欲しているから。もしジャッジ王がオレを手配するよう要請しても、ジェルマが出し惜しみしている科学力、レイドスーツ辺りを奪ってステューシー経由で渡せば、手配されずに済むだろう。司法取引……は少し違うか。闇取引だ。

あいつはオレの監視の任務を、シャボンデイに店を持っている自分以上の適任者はいないと豪語しもぎ取り、C P Oの任務として、天竜人の繁栄のため、世界のために、オレをストーキング出来るようになった。今までと変わらないようにも聞こえるが、他が来なくなるというのは大きい。

オレはステューシーのことをC P Oではなく、知り合いのきれいなお姉さんとして扱っている、今はそう上に報告しているらしい。他の奴に見張られるよりは大分良い、というか結果的には幸運と言える。報告の内容も、事前にオレと話して決められているし。だが、血縁のことか他のことはバレておらず、悪魔の実の能力だけでこれか……いや、もしかすれば霸王色も含めての判断かもしれないけど。数百万人に1人の割に、使える人間が何人か知り合いだから忘れていた。オレには数百万人も知り合いなどいないのに。

「……過激だねエ（海軍には好意的だしイ、わっしらが動かずに済むよう配慮するから忘れそうになるけどオ、敵にはこういう奴だったねエ。海軍じゃア上層部しか知らねエことだけどオ、能力が覚醒してからC P Oが付けられたってエ話だ。まあ抹殺じゃねエってこととはつまりイ、政府にとって利用価値があるって思われてるってエこと……古代兵器が復活した時の対抗策候補。相手がジェルマならア、

たとえそうなっても切られるのは向こうの方だろうねエ。それにしてもオ、傍で見ているだけで危なっかしい立ち位置にいる奴だねエ……)」

「ボルサリーノさんの任務も、オレの事言えないと思うけど？」

「そうかもねエ。それで、もう一つ聞きたいんだけどオ……君イ、フィツシャー・タイガーと知り合いだったりしたかい？」

……来たか。まあ、どこまでのことを聞かれているかはわからないが、オレの答えは変わらない。

「ああ、友達だった。『ノコギリのアーロン』から聞いた？」

「いやア、あいつは君のことなんて何も言わなかったよオ。けどオ、最近元気がなかったしイ、魚人島に出入りしてるのは聞いてたからア、そうなのかと思ってねエ」

「まあ、目の前で友達が死んだ経験なんて、今までなかったからな……」

「……彼の死に立ち会ったのかい？」

ボルサリーノさんが目を見開く。

本当に何も言わなかったのか。ということは……いつもの情報操作か。

「タイガーさんのビブルカード、貰っていたから」

「それはア、クザンと会った後つてことでいいかい？」

「そうだな。あの時初めて、タイガーさんのビブルカードの異常に気付いて、飛んで行った」

「……ロゼ、君の血液型は確かア」

「SのRH」。タイガーさんと同じだ。オレの血で輸血しても、間に合わなかったけど」

「……フィツシャー・タイガーが、襲撃事件を起こした理由、何か心当たりあるかい？」

「見捨てられなかったからだろうな。自分と同じ境遇だった者達を」

質問にはすべて嘘偽りなく答えた。

「(するつてエとオ……こいつは、フィツシャー・タイガーの奴隷の過去を知つて、助けようとして助けられず、その上友達の死に様が事

実と違う報道をされたことも知っている、と。今回の件で、こいつのわっしらへの印象は最悪のはず……なのにイ）なんで君イ、まだここに足を運ぶ？ わっしらが憎くはないのかい？」

しばらく黙って考え込んでから、そう聞かれた。

「タイガーさんは、天竜人に逆らえばどうなるかわかっているやっつた。海賊になることがどういうことかわかっているやっつた。覚悟が出来ていた。そしてオレは、こうなる可能性も思っていた。それでも助けられなかったのは自分が原因。海軍が海賊を倒すのはいつも通りの当たり前の任務。オレが恨むのは筋違いだ」

オレにとっては海軍にも友達が多い。

タイガーさんとは別の方法で現状を変えようと、内側から変えようとしているのも知っているから。

第一、タイガーさんを殺したのはオレだ。

「……ストロベリーが言ってたよオ。フィッツシャー・タイガーに言われたことにイ、何も言い返せなかったってエ。これが自分の正義なのかって」

それはおそらく、ゼファーさんもかつて思い悩んだことなのだろう。

「そうか……オレは海軍も、ストロベリーさんも恨んではいない。だが、ずっと大嫌いなものがある」

「なんだい？」

「民間人を脅かす海賊が蔓延る大海賊時代が、タイガーさんが海賊にならざるを得なかった今の時代が、殺したい程、嫌いだ……！」

吐き捨てるように、そう言った。

「（フィッツシャー・タイガーの協力者ア、こいつなんだろうねエ……けどオ）君にとつてエ、海賊って何だい？」

「悪。たとえ善人であろうと、一度海賊になれば命を狙われても文句が言えないほどの大罪。だから海賊になるなら命を懸ける覚悟をしていてしかるべきだし、そんな海賊を相手にするオレみたいな奴も同様。オレの判断基準は正義か悪かだけではないから、海賊であっても見逃すことはあるけど。それで、どうする？ オレを捕まえるか？」

これだけ話せば、気付くだろう。

「(やっぱリイ……たとえそうでも、他の奴ならともかく、こいつが海軍に牙を剥くことはア、なさそうだねエ……)ん？ 何故だア？ 相手が海賊とはいえ、怪我人に輸血したのはアただの世間話イ。マリージョア襲撃事件はア、首謀者が死亡しCASE CLOSED、解決済み。もう終わったことだよ」

ウソつけ。あんな真剣な態度で、今まで世間話をしたことなんてなかっただろう。今は笑っているが。見逃されたか。

色々考えた結果、政府や海軍に恩を売って協力的な態度を示す。オレが嫌なことは絶対にやらないが。加えて、オレの秘密がバレようが手が出せないくらい強くなる。捕まえて処刑するより、このまま利用した方が得だと思われるほどに。

そして、あわよくば免罪という形で、父さんの手配書も取り下げてもらえないか、という発想に至った。オレがすべて帳消しに出来るくらいの功績を立てる……たとえタイガーさんが生きていても、この提案には乗らなかつただろうけど、選択肢は増やせる。

今から12年前、ロジャー海賊団の船、オーロ・ジャクソン号を作ったことで、ウオーターセブンの船大工トムが死刑判決を受けたが、廃れゆくウオーターセブンの救済案として海列車の構想を発表し、10年の執行期間を得て、2年前に海列車パツフィング・トムを完成させ、司法の島エニエス・ロビーとの線路を開通させた。

現在は他の3つ、カーニバルの町サン・ファルド、春の女王の町セント・ポプラ、美食の町プッチとの線路を作っているらしいが、このままいけば免罪になるだろう。

一緒に魚人島で遊園地を作っているデンさんの兄でもあるし、良かった。

ただ船を作っただけで死刑。では副船長の罪は、オレは一体何をすれば免罪に出来るだろうな……。

「では世間話ついでに気になるんだが、最近偉大なる航路のどっかの島で、自分が船長をやっていた海賊船を降りたつていう、モンブラン・クリケット。北の海ノースブルーに、そんな姓の登場人物が出てくる童話があると思うけど」

北の海ノースブルー発行の「うそつきノーランド」。この人なら詳しいことを知っているかも……。

こんな雑談レベルのことをステューシーに調べてもらうのは忍びない。

「ああ。彼はそのモンブラン・ノーランドのオ末裔つて話だよオ〜？」
「本当か!? まさかとは思ったが……そうなのかッ……!」

「……君もオ、絵本とか興味あるんだねエ〜」

「モンブラン・ノーランドといえば、確かに絵本の方が有名だが、新種の植物を発見・研究した、植物学者としても大きな功績を残した冒険家だぞ? オレが興味を持たないわけあるまい!」

話とか聞けないものか……ああだが、相手は賞金首か。船は降りても手配書は残る。懸賞金は2500万ベリバウンティハンター。オレは賞金稼ぎだから、第一印象から悪いな……。

「なるほどオそつちかい……じゃあ、わっしは任務があるから、もう行くねエ〜」

そう言つて、ボルサリーノさんが研究室に入つていった。

☆☆☆☆

一度家に帰り、『ちよつとジェルマに行つてくる』と書き置きしてから、研究室に戻つてくる。

その後、ジャツジ王が海軍本部から出るまではボルサリーノさんも同行し、赤い港レッドポートでポンドラに乗つて、オレの生涯二度目の聖地マリージョア。

といつても、赤い土の大陸レッドドラインに上がった後は、マリージョアから離れた場所にある城を乗せた、66と書かれた巨大な電伝虫に移動。

その城内でジェルマの王族と対面した。

全員共通で眉毛がぐるぐるしている。すごい所が似ているな。わかりやすい姉弟だ。姉1人に弟3人。

ピンク色の髪でシャーリーのように右目が隠れ、肩まで伸ばした髪を後ろで跳ねさせて、カチューシャを装着。紫色のスカーフを巻き、ダーツの的のような模様の袖なしのワンピースを着て白のロングブーツを履いているのがレイジュ王女。

赤色の髪で右側が長く顎まで伸ばし、くせ毛なのか固めているのか、3つに分かれた髪型で、首に真紅のスカーフで1と書かれた赤いTシャツを着て、白のスボンに茶色いロングブーツを履いているのがイチジ王子。

青色の髪でイチジ王子より更に分かれてリーゼントみたいに伸びた髪型、目にはゴーグル、水色のスカーフ、2と書かれた青いTシャツで下はイチジ王子と同じ格好のニジ王子。

そして緑色の髪でドングリみたいな髪型、オレンジのスカーフ、3……ではなく4と書かれた緑のTシャツで下はイチジ王子と以下同文のヨンジ王子。

中々特徴的な髪型を……オレは他人の事をどうこう言える髪型をしていないか。だがそれにしても髪の色がカラフルだな。

見た目以外の特徴としては、レイジュ王女は長女でオレと同じ年。顔は笑っているが、顔しか笑っていない。作り笑いだな。唯一オレを名前で呼ぶ。

男3人は三つ子でオレの3つ下、イチジ王子が一番王族としてのプライドが高く、オレを庶民と呼ぶ。ニジ王子が一番キレやすく、オレを平民と呼ぶ。ヨンジ王子が一番バカそうで、オレを変な髪型と呼ぶ……確かにお前がこの中で一番普通の髪型かもしれんが。

明らかにサンジ王子がいるであろう名前の付け方だが、ここにいないということは、もう亡くなっているのだろうか。王妃の姿も見えないし、余計な詮索はしないでおく。

自己紹介をして、客間で子供と侍女だけになってから、要約すると『平民にも何か取り柄くらいあるだろう、見せてみる』というようなこ

とを言われたので、平民から連想してトランプで大富豪をしたのだが、

「不条理だ!!」

「イカサマだ!!」

「非科学的だ!!」

オレの手札はAが4枚、2が4枚、4が4枚、そしてQが1枚。

先攻は譲ってやると言われたので、革命を3連発してから、ハートのQを出して上がった。

「……私は何もしてないわよ?」

レイジユ王女が恐る恐るそう言う。

彼女はカードを侍女に配らせず自分が配り、ゲームには混ざらなかつた。姉なのに呼び捨てにされているし、姉弟仲良くないのか?

だがそもそもこの三つ子も全員呼び捨てで呼び合っているし、こういうものなのかもしれん。

「バカな……このおれが負けるなんて!」

負けて打ちひしがれるヨンジ王子。

「それでは先程仰られました通り、この憐れで卑しく変な髪型の平民かつ庶民に、あなた様方へ碎けた口調で献言する許可をいただけますでしょうか?」

「好きにしろ! おれ達に勝っておいて皮肉のように卑下しやがつて!」

「実際に皮肉だからな。はあ……疲れた。息苦しいことこの上ない」

「お前ツ!! さては最初から平民の分際でおれ達に敬意を払ってなどいないな!」

「(あの子、後で国王様に殺されないと良いけど……)」

憤慨するイチジ王子とニジ王子。

今更気付いたか。オレのことを庶民だの平民だの変な髪型だの言つて笑う奴らのどこを敬えと言うのか。全部事実だが……いや、髪型は少々人と違うだけで変ではないはず。ただ個性的なだけだ。

「ふふつ……あつ、私もその口調で良いわよ? なんかさつきまでの言葉遣いは遜り過ぎて気持ち悪いし」

「そうか、助かる」

今のは普通に笑っていたな。

今度は表に出て、『王族である自分達が直々に鍛えてやる、ありがたく思うがいい』というようなことをニヤニヤしながら言われ、1VS3で戦うことになった。なるほど……これがイジメか。「死ね」とか「殺してやる」とかはよく言われるが、初体験だ。そしてまたレイジュ王女は不参加。三つ子の男に姉1人つてのは馴染み辛いものなのかもな。

3人が数字が書かれた缶詰めみたいなものを腰に当てると、数字を軸にグルグル回転し出す。そして一瞬で戦闘服に変わる。

何あれカッコいい！これが変身……生ジェルマか。世界経済新聞で見たやつだ。

そして王族3人直々の、オレへの訓練とやらが始まってしばらく。

「何だこいつは!？」^{スパークング}「火花ファイガー!」

カッ!

火花を撒き散らしながら、イチジ王子^{トウガラシ}の拳がオレに向かって来る。

「壁」

「ぐおっ!」

それを、姿を消してオレの背後に回っていたニジ王子^{ブルーベリー}で防ぐ。さっき【拳・骨・隕石^{ゲンコツメテオ}】を撃った時、周りにいた兵隊を壁にしてきたので、その仕返しだ。普通に避けてこいつらを攻撃したが。

「フン……少しは壁にされる者の気持ちがあわかったか?」

「き、貴様アツ! 何故ニジの【ステルス】が効かん!」

「覇気だ!」

「この平民意味わかんねエ……」

イチジ王子^{トウガラシ}に答えると、片手で掴んでいるニジ王子^{ブルーベリー}が呟く。

覇気が使えないのは戦い始めてすぐにわかっていたが、まだ存在を教わってもないのか。ジャツジ王は覇気使いのようだったが。

「くそっ、【巻力断頭^{ウインチダント}】!」

ヨンジ王子^{キャベツ}が手を伸ばして体を掴んできた。地面に叩きつける気だな。

「お前が飛べ！」

逆に手を掴んで振り回す。

「うおっ!? (こいつ、おれより力がッ……!)」

【巻力キャベツ断頭】!」

「キャベツじゃねエ! ヨンジぐわアッ!?」

ガン!

「ぐっ、このウストラトンカチがッ……!」

ヨンジ王子の頭をイチジ王子の腹に叩きつけた。

「沈め、トウガラシにキャベツ! 【起電ブルーベリードロップ】!」

「おれがトウガラシだとッ!?」

「誰がブルーベリーだ! てかそれおれの技「ギヤアア!!」」

バチバチバチ!!

ニジ王子を放り投げて、ニジ王子ごとイチジ王子とヨンジ王子にド

ロップキックをかまして放電する。

「くっ、王族を足蹴に……なんと無礼な庶民だ!」

「戦場に王族も庶民もあるか」

「おれ達が3人がかりで……化物め!」

「はいはい化物化物。よく言われる。最高の褒め言葉だ」

「そもそも何故貴様おれ達の技を使える!? 変な髪型のくせに!」

「世界経済新聞に載っているから。髪型は生まれつきだ」

お前らのレイドスーツの能力、オレはすべて「海の戦士ソラ」で見ているからな……スパークングレッドにデングキブルー、そしてウインチグリーン。メカメカの能力の参考になっているものもあるし、こいつらが覇気を使えていないのも戦力差として大きい。

「いや、何故知ってるかじゃなくて、何故出来るかを聞いているのだと思うわよ? (こいつらが相手にならないなんて……お父様でもここまでワンサイドゲームにはならないのに。参加しなくて良かった……)」

「ん? ジャッジ王から何も聞いていないのか? オレはメカメカの実を食べた機械人間、さっきのは悪魔の実の能力だ」

てつきり聞いているものと思っていたが。

「化物ではなく悪魔だったか……ん? 待て、貴様さつき地面を変え

ていたな。そ、それで合体ロボを作れたりは……」

「何だ?!」

「で、出来るのか……?!」

3人が目を輝かせ始めた。

まあ、普通であれば気持ちはわかるが……

「出来るが……興味あるのか? ジェルマなのに?」

あれ、お前らをぶっ飛ばす側の敵だと思っただが……。

「あれこそ王道、王たる条理だ!!!」

「そうと決まれば早く見せろ!」

「何故さつき言わなかった?! 出し惜しみしやがって!!」

「(トウガラ、イチジ達のある姿、初めて見た……まあ、確かに全部の情が消えちやっただけではないにしても……)」

早く早くとせがまれた。

王道で……確かに合体ロボは王道かもしれんが、ジェルマの政治は霸道だと思っぞ?

だが、ようやくこいつらに親しみを覚えた。

「ふははつ、わかった。ちよつと離れている……現れる、3体の超量機獣。【マグナライガー】【グランパルス】【エアロボロス】」

呼び出したの陸・海・空の機獣。

赤い機体の虎とライオンの雑種ミックス、ライガーの陸戦兵器【マグナライガー】。

青い機体のイルカが2体並列した見た目の潜水艇、海戦兵器【グランパルス】。

緑の機体の翼を持つ戦闘機、空戦兵器【エアロボロス】。

「変形合体」

能力で宙に浮かせ変形。【マグナライガー】を胴体と頭部、【グランパルス】を両脚部、【エアロボロス】を両腕部と背の翼に変え、合体させる。

ガシャーン!!!

「超量機神王グレート・マグナス」、降臨!」
合体ロボの完成だ。

「おお……これがツ!!」

「夢にまで見た合体ロボ……!!」

「すごいぞーかつこいいぞー!!」

「(……サンジもいたら、喜んだのかしら……?)」

凄じい喰い付きだ。キヤツキヤツキヤと喜んでいる。

「おい庶民。これをおれ達に寄越せ!」

「えー……やだア〜」

「何だとツ!? くつ、また作れるくせに足元見やがってエ、この平民……」

「チツ、いくらなら、譲ってくれる?」

「いや、お金ではなく、こんな危険なものを戦争屋に渡せるか」

「当たり前だろ。惨劇になるわ。いくら血が流れることか……」

「フンツ、笑止! 勝者こそ正義! おれ達が何を使おうが、気に入らなければ勝てばいい。弱い奴が悪い!」

「じゃあさつきオレが勝ったんだから、正しいのはオレだろ。変わらず渡さない」

「……いや待て、今のは無しだ!」

イチジ王子が取り消した。早^{はえ}ーよ。

「別に無しでも構わん。どちらにせよ、今の大海賊時代に勝った者が正しいなんて、そんな略奪者、海賊を正当化するような理屈は認めない。肯定出来ん。否定する。正義を貫くために力は必要不可欠だが、奪われ虐げられる弱い民間人に罪はないし、悪くなどない。第一オレは勝ったが正義ではない、悪だ」

「……? (なんで、自分を悪なんて言うんだろ……?)」

「貴様ア……庶民が言うに事欠いて、我々ジェルマのあり方を海賊風情と同じだと!」

「……なるほど。確かに戦争屋が負けるなど論外だな。悪かった」

負ければ死ぬな。そういう考えにもなるか。

「誰が論外だ!!」

「ん?」

……あー、そうか。こいつらはさつきオレに負けたから、この言い

方だとお前らは論外だと言ったも同然だな。こいつら視点だと、敗者に言葉で鞭を打つ凄まじく嫌な奴だな、オレ。

それにしてもこれほど反応するとは……平気そうに見えて、実は結構気にしているのか？ 負けたことを。

「おれ達はあの出来損ないの失敗作とは違う！」

「？ 何のことだ？」

「……お母様がなくなられてから、サンジって弟が、ここからいなくなったのよ。こいつら元々四つ子なの」

王妃が命を落としているのも、サンジ王子がいるのも、まあ予想通りだが……

「いなくなったとは？」

「あいつは逃げ出した。失敗作だからな。おれ達について来れず、父上にも見放され、死んだことになって檻に入れられてたんだよ」

「そろそろ死んだかもなア、あいつ」

「ギヤはは！ どこでどうやって野垂れ死んでたら面白いかな？」

【拳・骨・流星群】!!!

「痛エ〜!!」

また【拳・骨・衛星】を作ってしこたまブチ込んだ。3人にタンコブが積み上がる。

決めた。後であの虐待髭仮面にも叩き込む。

「何しやがるこのド平民が!!」

「教育的指導だ。失敗作とか、死んだら面白いとか、ふぎけたことを言っているんじゃない」

「ふぎけたこと？ ふぎけているのは、不条理はお前の方だ！ あい

つはヴェインスモークの恥！」

「そうだ！ 落ちこぼれを笑って何が悪い！」

「まだ言うか……」

少しは親近感が湧いたと思っただら……

「……無駄よ。こいつら、無感情の戦闘マシンだから」

「レイジュ王女、お前もか。こいつらが年の割に強いのは認めるが、感情がないとか、そういうのは肉親に言うことでは」

「と、年の割にイツ……!?」

なんか3人がシヨックを受けている。

なんでだ？ 褒めているじゃないか。筋が良い。

「そういうことじゃなくてツ！ はあ……ちよつとこつち来て。あんた達は頭でも冷やしてもらってきなさい（それにしても、こいつらが年の割に、かあ……普通に大人の兵士倒してるんだけど……?）」

「待て、レイジュ！ まだおれはそいつとの話が終わって」

「いいからさつきと行って来いツつってんのよッ!! また拳骨食らいたいの!？」

レイジュ王女が一喝し、オレの腕を掴み、拳を3人の方に向けると、しぶしぶ侍女を連れてどこかに行った。

そんな人のことを猛獣でもけしかけるみたい……どちらかという銃口を向けるみたいか？

オレ達も移動し、階段を降りて牢屋がある場所に着く。

「最初の印象より気が強いんだな」

「あら、気が強い女はお嫌い？」

「いや、従順なお人形さんより、自分の意見をはっきり言う人の方が好ましい。それで、どうしたんだ？」

「あそこには映像電伝虫があるから。私達の戦闘とか身体能力を記録するために」

「……牢屋の方がありそうなんだが？」

ここから逃げ出さないように。逃げ出してもすぐわかるように。

「ないわよ。ここは元々サンジを閉じ込めるためにわざわざ作った場所。私達ならこんな檻壊せるけど、サンジには無理だから監視なんて必要なかった。それに今は誰も入ってない、使われてないから」

「だが、現に檻は曲がっているぞ？ サンジ王子が自力で壊して脱出したんじゃないのか？」

たとえ最初は無理でも、出るために鍛えたのかもしれない。

「お父様達もそう思ってるけど、違うわ……それ、やったの私だから」

その後、少しずつレイジュ王女は教えてくれた。今までであったこと

を。

レイジュ王女の幼い頃、ジャツジ王がこれから生まれてくる四つ子に、戦争に勝つために感情をなくすため血統因子の手術を行い、ソラ王妃はそれに猛反発し、腹の中の我が子達の血統因子に影響を及ぼす程の劇薬を飲んだ。

イチジ王子、ニジ王子、ヨンジ王子はジャツジ王の思惑通り、戦闘に不必要な感情をなくし人間を越える異常が見つかった。だが、サンジ王子だけは違い、力は普通、感情も備えた、普通の人間として成長した。

ソラ王妃はそのことを心から喜んだが、薬の後遺症で衰弱し、今から1年以上前になくなった。

以降、ジャツジ王は起きた事のすべてをサンジ王子のせいにして、辛く当たる様になり、鉄仮面を付けられ半年以上ここに監禁。

コジアを攻めに東の海イーストブルーに行った時に、サンジ王子が檻から出て鉄仮面の鍵を取りに行った時にジャツジ王に遭遇。その時にジャツジ王が、『こんな役立たずでも自分の子を直接手にかけることは出来なかった。自分の意志で消えてくれて助かるよ。私がお前の父親であることは絶対に人前では口に出さないでくれ。誰にも知られたくない汚点なのだ』というようなことをサンジ王子に言った。

2人で泣きながら城を出た後、サンジ王子を船に乗せて逃がしたそうだ。

「……気に入らない話だ。オレには『怪鳥』ガルーダがイチジ王子達を愛しているのは、親として子を愛しているのはわずかでしかなく、ほとんど便利な戦争の道具として愛しているように聞こえる」

でなければ、サンジ王子にそこまでの仕打ちが出来るとは思えん。『……否定は出来ないわ。私にも情は残ってるけど、身体能力の強化と毒を操る特殊能力が備わってる。そして何より、父に逆らえないよう血統因子を改造されてるわ』

「サンジ王子と一緒に、逃げようとは思わなかったのか？」

「逃げる……？ 逃げられるわけじゃないじゃない!! ロクにジェルマの

ことも知らずに、簡単に言わないでよ!? サンジが逃げられたのは父に見限られたから。父が見捨ててくれたから! 私は違う!! 私が逃げたら必ず父は追って来るわ、どこまでも! どこまでも!! どこまでも!!! それに、私は今までずっと一緒にイジメられたくないからって、あいつらと一緒にサンジを笑ってたのよ!? 今更一緒に行く資格なんてあるわけじゃない!!」

涙を流しながら、レイジュ王女が叫ぶ。今まで我慢して溜め込んでいたものを吐き出すように。

それで最初、作り笑いが張り付いていたのか。

「それはサンジ王子が決めることだ……どつちに転ぶかはわからんが、1つ提案がある。それに乗るかどうかは、お前が決める」

たとえばレイジュ王女がオレの提案に乗らずとも、乗ってどちらに転ぼうが、あの男は一発どころではなくブン殴る。

☆☆☆☆

「ねえ、ロゼ。上手くいくかしら……?」

日も落ちた頃、^{ガルーダ}「怪鳥」に呼ばれ、レイジュ王女と手を繋いで玉座のある部屋に向かっている。

レイジュ王女は呼ばれていないが、オレの提案に乗ったので連れてきている。

イチジ王子達にも話した。合体ロボをやると言ったら、快く引き受けてくれた。そして、オレの提案が必ず失敗するとも言っていた。

「心配するな。たとえば失敗してもお前は変わらない。失うのはオレだけだ。どう転ぼうが失敗するつもりはないが」

「なんであなたがそこまでするのよ……?」

「オレが^{ガルーダ}「怪鳥」を殴りたいのだから、オレが自分のすべてを懸けるのは当たり前だ。一国の王を殴るなんて、何をされても文句が言えない悪だ」

「まあそうかもしれないけど……そういえば、昼間はなんで、自分を悪って言ったの?」

レイジュ王女が聞いてくる。

色々理由はあるが、彼女に一番わかりやすいのは

「自己紹介した時に言っただろ？ オレは賞金稼バウンティハンターぎ。他人を暴力で傷付けて金を手に入れてる。そんな人間が正しいはずがない」

「確かに私もそうやってお金を稼ぐ戦争屋ジェルマは滅ぶべきだと思うけど、あなたが倒しているのは賞金首でしょ？」

まあ確かに、オレもオレ以外の人間が賞金稼バウンティハンターぎをやっているのを見て悪だとは思わない。オレが悪である理由は他にもある。会ったばかりで言いたくないだけで。

「悪を倒したらそれは正義、なんてことには断じてならない。正義はそんなに単純ではない。悪と悪が戦うことだってある。賞金首にも、海賊にも、良い奴らはある。だが、それで海賊が悪でなくなることは決してない。海賊をやめない限り。免罪されない限り」

相変わらずオレに正義はわからないが悪ならわかる。悪が悪を倒して、それが正義になってたまるか。オセロじゃあるまいし、そんな簡単に引っくり返るはずがない。

そんな簡単に変わるなら、何故タイガーさんは正義じゃない？ 認めない。海賊を見逃すことはあっても、他の海賊が悪でないなど断じて認めない。例外はハンコック達七武海だけがいい。

そして、タイガーさんを助けられなかったオレが正義になることも認めない。オレは悪だ。

「じゃあなんであなたは賞金稼バウンティハンターぎを続けてるのよ……」

「オレは生まれて1年経っていない頃から海賊が嫌いだから、気に入らないから、肯定出来ないから、否定する。海賊に悪くないと言える奴がいても、それは海賊だからではない。悪くない奴が海賊になる今の時代が間違っている」

オレは別に悪でいい。

海軍正義とは戦いたくないけど、海軍正義は悪でも見逃すものがある。利用価値があれば見逃す。その最たるものが天竜人。

あいつらや海賊程堕ちたくはないが、そこまでいかないなら悪でいい。

最後の一線は守る。殺さない。殺されようが殺さない。絶対に殺さない。タイガーさんがそうやって死んだように。

もう二度と殺さない。オレがタイガーさんを殺した時のようには。

「よく覚えてるわね。生後1年未満なんて、そんな昔の事……」

「ああ、毎日声を聞いていたからな」

悲鳴嘆き阿鼻叫喚。海賊が作り出すこの世の地獄。海賊は疑いようのない悪だ。

人を助けるか否かに正義か悪かは関係ない。ただ力があるかどうか。悪でも人を助ける。海賊が人を助けようが、オレが人を助けようが、悪が正義になることはない。オレは悪だ。

海軍は海賊を殲滅する。海賊が生み出す悲劇をなくすために。今の世界を変えるために。海軍は正しい。肯定出来る。

だがたまに理解は出来ても納得出来ないことがある。それはオレが間違っているからだ。悪に正義は納得出来ない。オレは悪だ。

海賊として奴隷にされた人々を解放したタイガーさんより悪でいい。不殺の悪だ。

「さてと、【拳・骨・衛星】」

床から【衛星】と

「獰猛なるハヤブサよ……激戦を切り抜けしその翼ひろがえ翻し、寄せ来る敵を打ち破れ！ 現れろオ！」

赤と黒の機体の【R R】を呼び出す。

「え？ な、何？」

「戦闘準備」

ガシャン！

「これで良し。こいつらは部屋の外で待機させる。お前も準備してくれ」

「わかった。それにしてもこれが……大丈夫なの？　なんか、すごく大きいけど」

「大丈夫だ。怪鳥ガルーダは殺さないし、戦闘で付けた傷も、お前達の問題

も解決する当てがある。連絡はしたし迎えも送った。そろそろここに着く。怪鳥ガルーダのジェルマの悲願、過去の栄光に継る妄執はオレ

が断ち切る。お前はその後頑張れ。弟に会いたいんだろ？」

「！ ええっ！」

良い笑顔だ。これからもこいつが心から笑えるように、オレも頑張るか。

機械を配置し、玉座の間に入る。

「来たか……レイジュ、お前は呼んでいないはずだが？」

「オレが連れて来た。気に入ったから。良い子だな」

「ああ、自慢の娘だ。昼間と違う口調が気になるが……まあいい。昼間の戦闘はモニターで見っていた。重要なのは力だ。戦争に勝つ力だ。お前の機械の力があれば、北の海の制圧ノースブル、ジェルマの悲願も成就に一気に近づく。何が欲しい？ 金か？」

やはり力が目当てか。まあ最初からそう思っていたし、手間が省ける。

「ではこの子をくれ。さっきも言ったが気に入った。そうしてくれればいくらでもオレの力を貸そう」

そう言つて、レイジュ王女の手を強く握る。

「嫌よー。なんで私があなたなんかにも！」

「(レイジュの力は確かに強いが、一度に相手出来る敵は精々数人、だがかいつの能力は違う。昼間の戦闘では見られなかったが、本人がその気にさえなればバスターコール並の殲滅力があると聞く。1人の能力で軍を、国を滅ぼせる。サンジの穴はおろか、レイジュを手放してもおつりがくる) 良いだろう。レイジュはお前の好きにしる」

……受け入れたか。受け入れてしまったか。レイジュ王女が嫌がっているのに。こんなあつさり。

イチジ王子達は貴様が断ると言っていたよ。レイジュは失敗作ではないからと。オレもそつちを望んでいた。貴様がレイジュ王女を手放すことを拒み、オレが逆上したふりをして貴様を襲い、目的を果たす。その後レイジュ王女がオレを倒して親子和解。そうなければいいと思っていた。イチジ王子達は、オレが貴様に負けるからどの道失敗すると言っていたが。信じられているな。

レイジュ王女の手を指で1回ノックする。あらかじめ決めていた合図。1回ならジャツジはオレの提案を肯定、2回なら否定。

すると、レイジュ王女が涙を流した。

「ごめん……まだ終わってないのはわかってるけど、嬉しくて。これで私、サンジと同じになれたのね……」

子供が、親に手放され、涙を流し、悲しむと同時に喜んでいる。そこまで追い詰められていたか。そこまで追い詰めていたか。

今、何を言ってもこの子には聞こえない。黙ってハンカチを渡し、背中をさする。

「チツ、ジェルマの悲願が達成されるというのに、あの失敗作の名を口にし涙などを流すとは……やはりお前の感情も消すべ」

「黙れ。自分の娘が泣いて、何も感じないのか？」

「感じているとも。レイジュの感情も消すべきだったと。このままではサンジのような出来損ないになるかもしれない。まあいい。お前の力が手に入れば、それでいい。充分穴は埋められる……なんだその目は？ 言いたいことがあるなら、男なら拳で」

「拳・骨・隕石」!!

ドゴオン!!

武装色を纏った拳を飛ばし、仮面の上から叩き込む。

そして、レイジュ王女の肩を叩き、部屋の外に出て避難するよう指で指示する。

「グオツ、何を!？」

壊れた仮面が外れ、素顔が見える。

そんな顔をしていたのか。

「オレの拳は聞いてなかったのか？ ならもう一度口でも言ってみてやる。戦争屋、ジェルマ 6 6は、今日！ オレが!! 殲滅する!!!」

「何だどツ!! 乱心したか！ レイジュ、この愚か者を捕らえるぞ！ ……レイジュ、聞いているのか!？」

自分の言う通り動かず、ただ避難して行くレイジュ王女に声をかける。怪鳥”。

その間に拳を付けなおす。

「聞いていない。違う、聞こえていない。彼女は耳を栓している。ここに来る前に。貴様の前に入る前に」

命令に逆らえないなら、そもそも言葉を聞かなければいい。もちろんこんなものはその場しのぎ。

だから、耳を塞いでいる間にオレが終わらせる。

「レイジュ、お前も私を裏切るのか!?!」

「裏切る? 違う、裏切ったのは貴様の方だ。子供を、妻を、裏切った愚かな親にして夫が貴様だ。来い、【衛星】」

部屋の外から飛ばして自分の周りに浮かべる。

「文句があるならオレを倒せ。オレを捕らえ、感情を消すなり絶対服従の兵器にするなり好きにしろ。勝った者がすべてを手に入れ、負けた者はすべてを失う。それが悪の流儀だろ?」

「小僧がツ、正義の味方にもなったつもりか!?!」
ブチッ!

「オレが正義だと? ふざけるな、オレは悪だ!! 来い、貴様のすべてを奪ってやる」

ボッ!

武装色を纏い、電気を発生させた槍を持ち、靴から噴射し、加速して「怪鳥」がオレに向かって来る。

「【電磁シャフト】!」

ガキンッ!!

オレの拳と「怪鳥」の槍がぶつかる。

「悪だ?!? 悪の世界にも仁義はある! 取引を反故にし、王に歯向かう逆賊がッ!」

ガキン! ガキン!

「仁義だの、王だの、親の責任を放棄し、妻を死なせたことを子に八つ当たりした臆病者風情が、偉そうに吠えるなアッ!!」

ガキン! ガキン!

拳と槍が何度もぶつかる。

「やはり武装色はあまり得意ではないようだな! 拳がボロボロだぞ」

「構わん」

「ならばこのまま砕けろ！ 【電磁クラック】！」

バリイッ!!

電気を発生させた靴で蹴りかかってくる。

「砕けて結構。【剃】」

その蹴りを靴を掴み、拳を分離。もう片方の靴も飛ばした拳で掴む。

そしてオレは距離を取る。

【拳・骨・超新星】

ボボウン！

「グオッ!? (自分の両拳を爆発させた!? 靴の加速装置と浮遊装置がッ!)」

拳を自爆し、靴を破壊。

「その拳は元々作り物だ。ここに来る前、付け替えた」

ガシャン!!

周りに飛ばしていた本当の拳を付ける。

「機動力は奪った。これでオレの攻撃を躲せない。【拳・骨・流星群】!!」

ドゴゴゴゴゴン!!

拳が「怪鳥」に降り注ぐ。

何発かは槍で防いでいるものの、数十発の拳を体に叩き込む。

「クッ、この騒ぎに兵達は何をッ……!」

「来ない。兵達は王子達の命令で待機中。自分達の命令には絶対服従、貴様がそうした。そういう兵を望んだ。だから来ない。来い、【ブレイズ・ファルコン】」

待機させていた【R R】が飛んで来て、オレの前に降りる。

「次は、その槍とレイドスーツだ……赤熱の怒りを滾らし、反逆の槍を突き立てろ! 【迅雷のラプターズ・ブレイク】!!」

ビュン!!

電気を帯びた金属の粒子を、【ブレイズ・ファルコン】の体内の加速器内で電圧をかけて、亜光速まで加速させて口から放つ。

槍を貫き、レイドスーツごと肩を貫通させた。ベースボールの球くらしいの風穴が空き、血が噴き出す。

「か、荷電粒子砲……実現したのかッ。ベガパンク……!」

レイドスーツは機能を失い、オレの打撃と砲撃のダメージで、^{ガルーダ}“怪鳥”の体が地面に倒れる。

「いや、実現していない。理論だけでまだ悪魔の実際の能力が前提の試作段階。それに、武器として有効にしつつ殺さない程度に威力を抑えるのに、苦労していたようだ。もつとも、Dr. ベガパンクが考案した本来の用途、重粒子線治療。医療方面ならすでに実現している。さあ、最後だ。終わらせようか」

歩いて近づくオレ。

……そこ。

「機甲の慚愧」

ザンツ!

足をチェーンソーに変え、倒れた^{ガルーダ}“怪鳥”の体の上、虚空を切った。

「何故、切らない……? 殺す気だったのでは……(すべてを奪うと)」
「いや、切った。貴様が今まで妻や子を犠牲にしてまで達成しようとしていた、最も大事なものの、ジェルマによる北の海ノースブルーの武力制圧。体を切らず、貴様がそれに懸ける思いだけを切った。奪った」

最近出来るようになった。本来は戦いを避けるために、人を切らず、物を切らず、相手の戦意や闘争心だけを切る技だが、今回はこの男をブツ飛ばしたかったので、ブツ飛ばしてから切った。

見聞色で捉え、こいつから切り離れた。切り捨てた。

まあ、思いを切っても過去は変わらない。このままだとまたジェルマの悲願を成し遂げようとするかもしれない。一時的なもの。

試し切りをした時、天竜人の驕りを切っても、次に見た時にはまた戻っていたし、リユウグウ王国のオレに殺す殺すとうるさい兵士の殺意を切っても、戻っていた。ただ切るだけでは無意味。

だから、ここから先はレイジユ王女達の戦場だ。ただの他人のオレの言葉より聞くだろう。効くだろう。

「そして殺さない。殺さず生かす。親が子を縛るものじゃない。もう

あいつの好きにさせてやれ。ジェルマの悲願などという、下らん雑念が消えたすつきりした頭で、精々考えてみることだ。貴様が今まで何をしたのかを」

「何を……」

オレの言葉を聞いた後に、「怪鳥」^{ガルーダ}は気を失った。緊張の糸が切れ
たか。

「それで？　ここに2人でいるということは、無事成功したのか？

Dr. ベガパンク」

レイジュ王女の隣にいる、白衣の男に話しかける。

連絡した後、オレの「ライズ・ファルコン」をオートパイロット自動操縦モードにして送った。オレが許可した人間の言う通りに動き、現在地は把握出来る。

「ああ。勿論だとも。血統因子の治療法について、私以上に知っている人間はいないと自負しているよ。彼女はもう、ジャッジの命令に逆らえる」

「頼もしくて助かる。その調子でイチジ王子達も元通りにしてくれ」

「話を聞く限り、素直に頷くとは思えないけどね、感情を戻す方は。私の戦闘力は一般人かそれ以下。バナナの皮に足を滑らせ転べば骨を折る自信がある。階段の上から転げ落ちれば死ぬ自信がある。彼ら相手に力尽くなんて、私には無理だよ？」

そう言っって細い腕で力こぶを作っている。

簡単にへし折れそうだ。

「あんたにそういうのは求めていない。説得はもうしている。『レイジュ王女には元々感情がある。感情を戻して弱くなるということはお前達はレイジュ王女より兵士として劣っている。というか、お前らオレに負けたよな？　感情があるオレに。庶民かつ平民で変な髪型のオレに3人がかりで負けたよな？　それでジャッジ王の理想の戦士か……はっ！』って鼻で笑ったら、承諾した」

怒っていたが。あいつらに怒りの感情があつて助かった。

「……自分より年下の子供を唆して、君は悪い子だね、ロゼ」

「ああ悪い。他にも国王を殴り飛ばして風穴を開けた。反抗期だか

ら。あれ、本当に治るのか？」

風穴から血を流し気絶しているジャツジを指差す。

どのくらいなら治せるか聞いたら、体の一部が吹き飛んでも治せると返されたが……

「治るよ。私が治す。クローン技術は元々、臓器や脊髄等体の一部を再生させるために生み出したものだ。まさかクローンの軍隊を作り出した上、自分の子の血統因子を操作し理想の兵士になんてするとは……元同僚の暴走を止めてくれてありがとう。本来は私がすべきなのだが、私が行っても、捕まるだけなのがね……私の発明を使ってこの国を吹き飛ばすわけにもいかないし」

この人は善人過ぎて、自分の発明が悪用されるという発想も悪用の仕方もない付けない。そのくせ一つ間違えば大量殺戮兵器として悪用されるような物を次々と思いつく。非常に怖い人。

まあ、悪用しているオレが言うのはなんだが。もし他にこの人の発明が悪用されたら、オレが壊しに行こう。制御を乗っ取って自爆させよう。

「礼には及ばない。気に入らないから倒しただけだ。ここの姉弟達の感情と命令への絶対服従を何とかしてくれればそれでいい」

「血統因子を弄った結果、生まれた能力は放っておいて良いのかい？」

「それは本人達次第で。自衛手段は必要だろ。レイジュ王女はどうしたんだ？ ……レイジュ王女？」

何やらボーっとしているレイジュ王女に近付き、呼び掛ける。

「え？ ええ、私はそのままにしたわ。消してあいつらにバカにされるのは嫌だから……本当にもう終わったの？」

「終わった。もう彼の北の海制圧ノースフルへの思いは切った。お前も彼の言いなりになる必要はない。父を説得するもよし、出奔して弟を探しに行くもよし」

「本当に……？」

「ああ。お前を閉じ込める籠カゴは壊した。もうお前は好きに生きられる。困ったことがあったら呼んでくれ。すぐに飛んで行くから。じゃあまたな」

踵を返す。

もう遅いから家にでも帰るとするか。

「嫌!!」

突然手を掴まれた。

嫌? 何が?

「東の海でこんな言葉を聞いたわ……私には、縁なんてないと思ってたけど」

「何だ突然? どんな言葉だ?」

「〃恋はいつでも!! ハリケーン〃!!!」

それ、昔ニヨン婆からも聞いたな……。

「あなたと一緒に生きたい♡ 好きな人と好きに生きたい♡ 大好き♡ 私の王子様♡」

「え? は?」

レイジュ王女に力強く抱き着かれた。オレは丈夫だから大丈夫だが、これ普通の人間だったら潰されているな。

見ると、髪で隠れていない方の目がハート形になっている。

ふっはっは、ジェルマの科学の産物か? ……そんなわけがないよな。

「レイジュ王女?」

「レイジュって呼んで♡」

「ではレイジュ。あの」

「これで呼び捨てで呼び合う仲♡ 素敵♡」

途中で遮られた。オレの話を聞いてくれ。

「そうだわ♡ お父様は確か私をあなたに渡すって言ったはず♡ 私は耳栓して聞いてなかったけど、確かにあなたが提案して合意されたはず♡ 私と結婚して♡」

確かに合意はしていたが、しかし……今はあの人があるので、小声で言うか。

「ぎゃっ♡」

「オレは海賊の子だ。王族と結婚するって、たぶん許可されないと思うぞっ。」

抱き寄せて耳元で言った。Dr. ベガパンクに聞こえないように。
「私のお父様は戦争屋、私は人殺しの娘よ♡ お揃いね♡ お父様達なら大丈夫♡ 絶対もう戦争屋なんてさせないし、あなたとのことも認めさせるから♡」

オレの胸に頬ずりしながらそう言った。

そうきたか……お揃いなのか……。

「会ってたった1日で、結婚なんて決めるものではない」

「その1日で、私の世界はがらりと変わったわ♡ そ、それとも、ロゼは私のこと嫌い……?」

「いや好きだ。ヴィンスモークの良心はサンジだけじゃない。お前だって愛情と優しさを備えた強い人だ。今までよく1人で耐えた。確かに、お前はサンジに間違ったことをした。だが、サンジはお前の存在に救われたはずだ。逃がしたこと以外にもな。お前は良い姉になるよ。間違いなく」

「嬉しいっ♡ 私が今まで生きてきたのは、きっとあなたに会うためよっ♡」

絶対他にもっとあると思うが。

「お前の人生はこれからだ。楽しいことなんていくらでもある」
「ええ♡ あなたと一緒になら、何があっても私は一生幸せよ♡」

話がッ！ 噛み合わないッ……！

「君はあれだね。海賊を殺さないけど、女殺しだね」
他人事だと思つて笑っている天才白衣もやしがいる。

「下らんことを言っている暇があるなら、助けてくれ」

「いや、私も恋する乙女の邪魔をして、馬に蹴られて死にたくはないし……というかその子に蹴られたら、たぶん私は余裕で死ぬよ?」

「オレではなく、そっちで気絶しているヴィンスモーク・ジャツジのことだ。【R R】で一緒に運ぶから」
レイド・ラフターズ

「ああ、いきなり恋物語が始まったのですっかり忘れていた……これ、急がないとマズイよ!!」
ラブロマンス

「何イツ!？」

「まあ大変♡ お父様のお葬式と私達の結婚式、どっちを先にする？」

ロゼ♡」

「頼むから帰って来てくれ……」

とにかくジャツジを連れて全速前進だ！

☆☆☆☆☆

ジャツジの傷を治してもらい、ベッドで寝かせる。

その後、イチジ達の能力はそのままに、感情を戻し、ジャツジの命令に逆らえるようにしてもらい、Dr. ベガパンクはオレの「ライズ・ファルコン」に乗り帰ったのだが、3人全員泣きに泣いた。

レイジュはそれを見てドン引きしていた。それでもオレから離れなかったが。

特にイチジが酷い有様で、『おれは弟サンジになんということを……！

王には王たる、兄には兄たる条理があるツ。おれはなんて不条理な兄だアツ……!!』と酷く取り乱し、頭を床にガンガンと叩きつけ、トウガラシヘアーが折れていた。

レイジュの話だと、イチジは感情が最も欠落し、冷酷な性格だったようなので、感情を取り戻した影響が大きいのも当然か。

その様子を見て、『男がいつまでも泣いてんじやないの！ 泣いたところで私達がやってきたことは変わらんないでしょ！』と言って、レイジュが活を入れていく。

口調はきついけど、やっぱこいつ良い奴だな……ジャツジに呼ばれるまで話していた時、今までの愚痴を聞いていた時は、可愛げのない冷酷な弟達に、戦争に勝って先祖の過去の栄光を取り戻すことしか頭がない傲慢な父で、一緒にいて息が詰まるって言っていたのに、見捨てていない。

もし父さん達がジャツジやイチジ達みたいなら、オレはすぐさま家族喧嘩、いや家族戦争を起こすぞ。オレは父さん達が親だから好きなわけでも海賊だったから好きなわけでも全くなく、ただその在り方、性格、オレへの愛情等で好きだけなのだから。

それにしても、オレにもそんな感じの喋り方で良いんだけどな。

そしてジャツジが目を覚ました後、レイジュ様によるマシンガン
トークの火蓋が切られました。言葉の弾丸でジャツジめを蜂の巣に
なさる。

非常に饒舌でいらつしやった上、同じことを繰り返し何度もループ
して仰られていたので、僭越ながらこの私めが要約させていただく
と、

『お母様が反対してたのに弟達の感情を消すとは何事か。そのせいで
お母様はなくなつたのにサンジに八つ当たりまでしてそれでも親か。
ふざけんな。そもそも戦争屋なんてロクでもない。300年も大昔、
それもたつた66日の天下にいつまでも未練がましくしがみ付くな。
みつともない。見苦しい。現実を見る。ジェルマの時代はとつくの
昔に終わった。それでもまだ続けるなら、私がロゼと一緒にこの国を
滅ぼすぞ、けつあごのおっさん』

とのお言葉をヴェインスモーク・ジャツジは感涙に咽びながら、床に
正座し、心に深く深く刻んで頷いており、その様子をご覧になり、レ
イジュ様は大変ご機嫌麗しい様子であらせられました。今まで御労
しくも仰ること叶いません境遇でしたので、鬱憤が溜まっていたので
しよう。

しかしながら、私めはこの国を滅ぼすことに頷いておりませんよ？

戦争屋ジェルマ66を殲滅するとは申し上げましたが、あなた様
ダブルシンクス
の国は残すつもりでした。あなた様にお仕え出来ない国民達が大変
憐れなので。ジャツジめを折檻し悔い改めさせるだけのつもりでし
た。悔い改めなければまた参上^{つかまつ}仕り、何度でも何度でも何度でも叩
きのめすだけで終わらせるつもりでしたよ、レイジュ様？

その後、『あなたが、自分の意見をはつきり言う人が好みだつて言っ
てたから、思つてたこと全部言っちゃった♡』と、先程までの無慈悲
ながらもどこか美しく凜とした女王様は一体どこに行つたのかと思
うくらい、無邪気で可憐なお姫様が舌を少し出して、オレの腕に抱き
着いてきた。かわいい。守ってあげたい。とりあえず体勢を変え、背
中から抱きしめた。

だがイチジ達が怯えているぞ？ 取り戻した恐怖心で。

この5人の新たなヒエラルキーの頂点が決定した。レイジュがトップだ。

色々話した後に、レイジュに離してもらおう代わりにオレのビブルカードを渡すと、お返しに、そして二人が出会った運命の記念としてと銀朱色のスカーフを貰った。RRと刺繍がしてある。Ra^レid^{イド}・Ra^ラpt^プor^{ター}s^ズではなくRe^レij^イu^{ジュ}・Ro^ロse^ゼのイニシャルらしい。いつも付けて欲しいと言われた。

その後、我が家に帰ると、『ジェルマに行くなんて大事をおかしこんな短い書き置きで済ませないで』と母さんに怒られた。今日あったことを話せば呆れられた。オレだってこうなるとは思わなかったぞ。

後日、というか次の日、レイジュから番号を教えていた電伝虫に連絡が入った。

ジェルマは戦争屋を廃業、クローン兵は今いる人達はそのままにもう生産は中止、以降はオレが置いて来たロボを解体バラして研究し、機械兵を生み出すことになったらしい。まあ、軍隊は必要だろうし、戦争屋をやめるなら別に構わない。オレの機械を飛ばして送っても良い。解体バラしてもオレの能力で作った物、場所はわかる。そもそもジャッジがまた何かしようとした時には、発信機にも爆弾にもなる合体ロボとして置いてきたからな。

戦争屋をやめた代わり、ジェルマの科学でゲームを作って売り出すことにしたらしい。イチジ達がオレに勝てるカードゲームを作ろうとしているとかなんとか。『次に会った時は、貴様に神を見せてやる』との伝言を預かったと。

そして、許可は出た、というか出させたので、オレの準備が出来れば一緒に旅について来るそう。ジェルマの力を使わず、自分でサンジを探すのと、見聞を広めるために。

それまではジェルマの科学を頭に叩き込む、あと今度会う時までにもっと女を磨くと。

楽しみにしておこう。

「闇夜の裁き」

魚人島、竜宮城。

「クソがアアッ!! ふざけやがって人間がアアッ!! 【撃水】うちみず ウ!!」
ビュッ!

飛んで来る水滴を避ける。

このリュウグウ王国のネプチューン軍相手に訓練に混ざり出してからもう4年。馴染んだ者もいれば、昨年タイガーさんの死でまた遠ざかった者もいるが、まあ基本的に敵意は向けられていない中、1人敵意どころか只ならぬ殺意を向けてくる者がいる。今日の前にいるホオジロザメの魚人、ホーデイ・ジョーンズだ。

まあ、目の前にいるといっても、今のオレには見えていないが。

「寝たままおれに勝つだとオ!? 魚人をナメるなア下等種族がアッ!!
ブツ殺オス!!」

「むにや……魚人をナメてなどいない……すぴー、オレがナメているのは貴様だ、ホーデイ・ジョーンズ。ぐー、仮にもネプチューン軍に所属する者の言葉遣いではないな」

ドスッ!

「オエツ!」

噛み付いて来たホーデイ・ジョーンズの大きく開けた口から喉のどの奥に、【鉄塊片鱗】テツカイヘンリン「黒腕」こくわんを使つたままの左拳を突つ込んだ。

そして拳を開き、人より大きく却つて掴みやすい喉彦を握る。

「むにや……貴様が齒に自信があるのはわかつたが、ぐー。正面から大口を開けて突つ込んで来るからそうなる、すぴー」

寝言で指摘する。オレと同じように素手でする奴がいるかはわからんが、剣や槍で突き刺す奴はいるだろう。

今使っているのは【生命帰還】せいめいきかん「夢遊覚醒」むゆうかくせい。眠つたまま自分の体を動かし戦う技で、相手をしている。

1年くらい前にこいつが入隊してから、何度戦つて何度殺意を切つても殺す殺すと言われるので、ならばいつそアプローチを変えて、思いつきりナメて戦つてみている。力の差があり過ぎるから諦める

と。色々。それか、腹が立つならさっさと動け。

「ぐー……これではオレに勝てんし、殺すなど不可能だなア……す
びー」

見聞色でもものの核を捉える要領で、関節の正確な位置を捉える。

「指銃^{シガン} 解体^{バラ}」

ゴキツ!

捉えたホーディ・ジョーンズの左肩の関節に、右手で「指銃^{シガン}」を放ち、肉に刺さず、骨を外した。

「ゴホッオエツゴホッ!」

「指銃^{シガン} 解体^{バラ}四散^{バラ}」。むにゃ」

ゴキツゴキツゴキツ!!!

そのまま肩が外れ、手を引き抜かれ咽^{むせ}ているホーディ・ジョーンズの右肩、両股関節を両手の指で次々と外していく。

機械の拳を作り出し浮かせる「拳^{ゲン}・骨^{コツ}・衛^{サテ}星^{ライト}」と組み合わせた、そ

のままの意味で何十発も飛ばせる「指銃^{シガン}」である「機^{マシ}関^ン銃^{ガン}」で放てば、複数人の関節を同時に外せる。

もうこいつはまともに動けん。デコピンで後ろに体を倒す。

「ぐー【夢遊^{むゆう}覚^{かく}醒^{せい}】、解^{かい}。ふう……終わりだ。【機^{シル}甲^{バリス}の慚^{ソウル}愧^{シエイブ}】」

ザン!

崩れ落ちたこいつの体の上を、チェインソーに変えた足で切り払う。もう何度目かの、こいつの殺意を切った。

これで諦めたか? ……無理だろうな。はあ……どうしたものか。別にオレに向けられるだけなら何の問題にもならないが、今はまだ見通しが立っていないとはいえ、これから人間と魚人が友好を深めていく過程で、確実に問題になるよな、こいつ。

というか問題はもう起こっている。まだこいつ自身は動いていないため証拠がなく捕まえられんが。せめてさっさと動けば牢獄にブチ込めるんだが。お仲間達のように。腹立たしい。

「寝言を言うガキに……おれは……金魚以下だ……」

「では関節を元に戻すため、担架で医務室にでも連れて行ってやってくれ」

体が動かず地に倒れ、落ち込んでいるホーデイ・ジョーンズを指差し、周りの兵に言う。

白い肌に黒い長髪、ネプチューン軍の格好をして、背中からサメのヒレが出ている。まあ、そのヒレは今は仰向けに倒れているから見えないが。

「おい、ロゼ君本当に寝たまま勝ったぞ……それもほぼ指だけで。ホーデイだって弱かない、というか新入りの中では技術はともかく力はむしろ強いのに、あの子何？ あの子より強い人間が地上にはいるらしいぞ。一度も勝てない相手がいるらしいぞ。地上ヤバイ……怖い」

「おれはホーデイの方が怖エよ……なんで毎回あんな殺意剥き出しなんだ？ あんだけ殺す殺す言ってるのにあの子加減してアドバイスまでしてるのに。まあ今日のはアレだったけど。おれはああはなるまい……」

「そもそもあの子は王子達の客人で、人間との共存を願うオトヒメ王妃のいるこの城で、客人の人間に新米兵士があんな暴言吐いているのにクビになっていないのは、他ならぬあの子が止めているからなのに、そこはどう思っているんだろうな？ ……まあクビを止めるように言ったのは、野放しにした方が危険そうという理由らしいが。見える所に置いておいた方がよさそうという理由らしいが。あれを見ると本当に何かやらかしそうで反論出来ん……」

「オトヒメ様の活動も、フィツシャー・タイガーの死後あまり上手くいってはいないが、あの子が手伝ってくれていることは、人間が護衛も兼ねて手伝ってくれているのは王妃にとって力強い……たまにケンカというか、じゃれているが」

「この前の酒を飲んで呂律が回ってなかったオトヒメ様……可愛かったなあ。よく聞かせてくれたロゼ君！」

「「ネプチューン王に言いつけなきゃ」」

「やめてくれ!?!」

なんか周りの兵達が楽しそうに話してるけど、早くこいつを連れて行ってくれないかな……。

まあ、その内運ばれるだろう。放っておいて、フカボシ達の所に行こう。

「ロゼツ！ あなたという子はっ！ よくもこの前は私をベロンベロンに酔わせて、放送マイクを渡しましたね！ あれから恥ずかしくて外に出られなくなったのですよ!？」

「ふっはっはっ、『うるへいっ！ あたすいは酔ってねいっ！』のだろう？ 麗うるわしのオトヒメ様。この国の住人は、少しはあなたの気持ちを知るべきだ。人間に近付くのは怖い、彼らがそう思うのは仕方がないことかもしれないが、人一倍力が弱いあなただつて、人間に近付くことに恐怖がないわけではないのに。人間のことを理解する前に、彼らはまずあなたの勇気を理解するべきだ。まあ強引だったとは思いますが、あまり溜め込み過ぎると潰れるぞ？ 外に出られないのなら、フカボシ達と休むが良い。幼いしらほしは特に心配していたぞ？」

移動中、この前ヤケ酒を飲ませ、酔ったまま魚人島一帯に放送した王妃様に捕まった。

ただこの人の愚痴を、心情を、住人達に吐露してもらっただけのつもりが、思いの外良い演説だった。結果オーライと言えるだろう。

それと、しらほしはどうもオレやオトヒメ様と同様、生まれつき見聞色を使っていたようだ。まあ親子だからな、そういうこともあるのかもしれない。あの子と初めて会った時、オレが食べられそうになったのは、オレが見聞色で聞かれないよう気配その他を消していたので、物か何かと思つて口に入れた可能性が高い。

フカボシ達には心優しきオトヒメ様に睨まれない程度に、軽く覇気の戦闘法を教えているが、しらほしには見聞色の使い方だけ教えている。あの子は性格的にまったく戦いには向いていないが、それくらいはしないと苦労しそうだ。自分の力に振り回されるとか。オレみたいな。

「わざわざ能力で私の声真似までしてっ！ それに、何がなに『溜め込み

過ぎると潰れるぞ』ですかっ！ タイガー^彼の死後、自分は悪などトチ狂ったことを言い出したおバカさんがっ！ 1人でなんでもかんでも背負い込んでるのはあなたの方ではないですかっ！ あなたののおかげで私の天使達との時間が増えましたあ、ありがとうございますすう〜！」

皮肉を言われた。

この人も言うようになったものだ。オレの悪影響か？

「何を言っているのだ、オトヒメ様？ あなたは知っているだろう。オレがマリージョアを攻めたことを。子供でも……まあしらは生まれて間もなかったから知らんだろうが、今の時代の最も重い罪の1つを犯した。オレが悪でなくてなんだと言うんだ。【紙絵】」

すかっ

オトヒメ様が平手打ちをしてきて、オレが躲す。

このやり取りも慣れたものだ。これが原因で【紙絵】を習得したくらいに。

これでオレは【指銃】^{シガン}【嵐脚】^{ランキヤク}【剃】^{ソル}【月歩】^{ゲツボウ}【鉄塊】^{テツカイ}【紙絵】^{カミエ}、六式を一応すべて習得した。能力で飛ぶことに慣れているので【月歩】^{ゲツボウ}と、見聞色で先読みし相手の攻撃にカウンターを叩き込む方が好きなので【紙絵】^{カミエ}、この2つはまだ苦手だが。

もつとも、それでも未だ、ただの一度も父さんに勝ったことはないが。能力が覚醒した後も。

父さんがオレにもものすごく手加減していたことが発覚した。手加減されているのは前からわかっていたが、まさかあそこまでの差があるとは……あの技、【冥王斬月波】^{めいおうざんげつは}を使われれば、オレの【R】^{レイドニラプターズ}も【拳・骨】^{ケンコツ}も、無力化される。オレ自身の体術と覇気で戦わなければならぬ。距離を取って射程から出ればイケそうだが、互いの体が目視出来る間合いで戦闘を開始すれば、それも厳しい。なんともまあ高い父親兼師匠の壁だ。

「何故いつも躲すのですっ！ 私はあなたのためにブツのですっ！

だからお受けなさいませ！」

すかっ

オレはまったくダメージを受けない。

「躲さないとあなたの手の骨が折れるから。オレは丈夫だから、折れるどころか粉々に砕けるかもしれん」

こっちは割と気が気ではない。あまり自殺行為をしないでくれ。

「そんな思いやりのあるあなたが、私やフカボシ達の心配をしている優しいあなたが、何故自分を悪などと否定するのですかっ！」

すかっ

平手打ちを傷付けないよう軽く受け止め、左から右に受け流す。

「オレがそんな人間かは知らんが、正義か悪かに、思いやりがあるか否か、優しいか否かは関係ない。思いやりがあり優しい人間だろうが、悪は変わらず悪。オレは悪だ」

オレは別に自分のすべてを否定しているわけでもなし。

「この頑固者っ！ めんどくさい性格！」

すかっ

ひらりと身を躲す。

「確かにオレは面倒な性格をしているかもしれんが、今の時代がオレ以上に非常に面倒だ。第一、オレが自己否定ならば、あなたは自己犠牲。あなただつて何度兵士に止められようが、王族なのに海賊がうろつく島内を出歩き、人並み外れて弱い体だろうが、自分の骨が折れることも厭わず平手打ちをかます頑固な“愛の人”。人のことは言えんなア？」

「口ばかり達者になって！ あなたや兵士達がいるからいいじゃないの！」

すかっ

しかしオレには効かなかった。

「悪い。周りが心配する。出歩く方はまだしも、怪我の方は特にマズイ」

「それはあなたも同じでしょう！」

すかっ

オレは涼しい顔をしている。

「だからオレは悪だ。悪いし周りに心配かけている。もっと強くなら

んな」

「……あなたその理屈ずるくないですか!?(間違っていると言っても『悪だからな』で流され、決して変わらぬ。何なのこのなかなか落ちない頑固な油汚れみたいな悪への考え……! 一番不思議なのはこうなつてから気楽そうだということ、どういふことなの……?」

「うう……お母様、ロゼさん……ケンカですかあ……?」

「あ」

しらはしが、オレとオトヒメ様のやり取りで泣きそうになつていた。また体が大きくなつてゐる。成長期が来たらどれだけ大きくなるのだろうか?

というかいたのか、気配を隠すのが上手くなつたな。

フカボシ達みたいに呼び捨てにしてもらいたかつたが、そう言い聞かせてゐる時に保護者に見つかつて途中で中断した結果、さん付け呼びという妥協案で落ち着いたようだ。

オレだけさん呼びなので、『あなた……しらはしに何かしたの?』と過保護者の追及を受けたが。呼ばれ方を変えようとしただけだ。

この人は、前に島民の子供が鼻を垂れてゐた時、『片方の鼻だけ垂れているからバカみたいに見える! 垂らすなら両方から垂らしなさいませ!』とよくわからんことを言いながら平手打ちをして自分の骨を折つてしまつたが、自分の子には『ああかわいい、鼻水が片方から垂れてるけど』と非常に甘、愛情溢れる接し方をしてゐる。

「ケンカじゃないわよ、しらはし(あなたが頑固だから、しらはしが泣きそうじゃないですか!)」

「本当ですかあ……?」

「(それはお互い様だろう) 本当だ。ただのお話……それにしても、上手に気配を隠してゐたな。偉いぞ」

互いに心の声を読み合い、裏で結託し、しらはしに対処することになつた。

「頑張つて練習しました!」

「しらはしは頑張り屋さんですね。そういえば、この前行つた遊園地はどうでしたか?」

「はい！ こうバーンってなってビューンってなって凄かったです！」

泣きそうだったしらほしが、身振り手振りを交えて嬉しそうに話してくる。

「ああ……かわいい。全然何が気に入ったのか伝わってこないけど」

この前ネプチューン軍の嚴重な警戒態勢の上で、遊園地に王族一行が遊びに来た。

まだ完成はしていないが、場所や骨組みは出来たので、乗り物部分だけをオレが能力で作れば動かせる。

電力は、シャボンの外の海から水圧管路を通して発電所へ送り水力発電。水は中心の湖に貯水され、余分な水は空中にシャボンで加工して作ったウォーターロードを通り、シャボンの外に排水される。このウォーターロードは何本も通っており、移動手段にも出来る。ここまでするのに非常に時間がかかった。

デンさんはリュウグウ王国から給料をちゃんと貰っている。オレは拒否して、代わりに海賊の（賞金）首をここで現地調達して、地上に連れて行く。

最初はデンさんが作ってオレが材料集め、たまにウィリーに手伝ってもらったりしていたが、いかんせん人手不足。だが、去年オレが能力を覚醒させて一気に進んだ。貝殻やサンゴ礁をオレが能力で機械に変えてから戻すことで足場を作り、デンさんがコーティング。その後デンさんは普通に大作業、オレは能力で変化、戻すを駆使することで、鉄を好きなように加工出来るようになった。人手も機械で増やせる。

今のこの島は、竜宮城がある上層、島民の居住区、そしてその居住区の隣に、増設した遊園地をくつつけているので、3つ目のシャボンで覆われた空間が出来た。

「それは良かった。まだオレがいる時しか動かせないが、いずれ完成

するから、フカボシ達と楽しみにしててくれ(邪魔さえ入らなければ、もっと早く出来るんだがな……オトヒメ様、彼らの様子は?)」

順調だが問題がないわけではなく、ふざけた覆面を付けた人間嫌いの魚人達から実力行使の妨害を受けるようになった。あのホーディ・ジョーンズもこいつらと関係あるようだ。まだ何もしていないが、ネプチューン様にはもう話し、警戒してもらっている。怪しい動きをすれば即座に捕らえられるのに、仲間と接触してないらしい。

国から給料も出ており、遊園地建設は歴れつきとした国の政策ということになっている。他にもこの覆面達は人間に輸血した島民を放火などで襲撃する、通称「闇夜の裁き」というのも行おこなっているので、罪人、逆賊として捕らえて問題なし。

出来るだけオレを狙ってくれるように、あの遊園地はオレの能力で作っていることにしている。オレが死ねば消えると。実際はオレの死後も使えるように普通に作っているが。まあ能力も使って作っているし、今は能力で出来た乗り物もあるのでまったくの嘘ではない。

「あなた、もうちよつとなんとかなりませんか? 毎回体も心も弱り切った状態で連れて来て……もう反省して大人しくしてます」

「あの状態でないと、牙を折らないと、檻の中とはいえ危なくてあなた達のいる城に連れて来れない。それに、あれだけボロボロにすれば、平手打ちは必要ないだろう。アメは任せた」

捕らえた下手人はオレが鞭で少々特殊な拷問をしてから、ここの牢屋に連れてきている。

オレというムチの後にオトヒメ様のアメで更生の流れ。

「(自分で出来るくせに……)」

「(あんな英雄気取り、英雄ごつこのクソガキ共、自力で立ち直るまで放っておくくらいでちょうどいい。オレはあなたのようにには慈悲深くない。嫌ならやめればいいが、嫌とも思わずやめないのはあなただ。それを責める気はないし、あなたらしく素敵だと思うが)」

「(……あなたの、他ならないあなたの怒りはもっともなのだけだ……)」

それに、今は人間であるオレやその周辺の方に来ているが、このま

まオトヒメ様の活動が続けば、人間との友好が上手くいきそうになれば、あいつらはあなたの活動を邪魔、いや、もつと直接的な手段も使うかもしれない。

良い機会だ。しばらくは、あなたの天使達と過ごして休んでいてくれ。

「母上、しらほし、ロゼ。こんな廊下でどうかしましたか？」

「お母様とロゼさんが大きな声でお話してましたので、こっそり近付いて驚かせました！」

それで気配を消していたのか……かくれんぼみたいなものか。

「ああ、またか……」

「フカボシ数日ぶり。またですまん。リュウボシとマンボシも元気にしてたか？」

フカボシ達が廊下を通って来た。

「ロゼはまた反抗期か？」

「反抗期？ 反抗期〜？」

フカボシの後に、左右から同時にリュウボシとマンボシに聞かれる。

「そうだ」

「絶対これ反抗期じゃないわよ、天使達……何か拗こじらせてるわ……」

フカボシ達に、オトヒメ様はまだ心労でお疲れだから、一緒にいて癒してやってってくれと言ってから、城を出てマーメイドカフェに向かった。

「この覗き魔！ ようやく捕まえたよ！」

「おれの【カムフラージュカーペット】を見破り、【ボディ・DE・水晶クラッシュ】を破るとは……人間と関わるなどという乱心をして、腐ってもアールロンさんの妹か……！」

「【ボディ・DE・水晶クラッシュ】って、ただ水晶玉を投げつけられただけじゃないか」

店の前で人だけが出来、何やら騒いでいる。

「どうかしたか？　もしかして、来た？」

「ああロゼ！　よく来たね、こんな奴ほつといて、ゆつくりしていきなよ」

「シャーリー、去年からロゼに優しくなイカ？（最初は私が抱えてたけど、今ではロゼに陸上でお姫様抱っこで運んで貰うようになったし）」
「いやいやそんなことないよ？（前見た時と未来が変わってた……こんなこと初めて。気になる、もっと知りたい）」

「出やがったな、このイカサマ人間が！」

「イカサマ？」

見ると、青と水色の横縞のストライプの格好をした魚人がいた。分銅鎖で体を縛られている。切り傷もあるし、スミで麻痺もしているのだろう。

たしかサメのオオセの魚人。姿を消せる、自称“魚人街の貴族”のゼオだったな。厄介なのを捕まえられた。今は素顔だが、覆面を付けて“闇夜の裁き”を行っていた主犯格の1人だ。

それにしても、こいつらシルエツトが特徴的だから覆面程度ではバレレなのに、何故これでバレないと思ったのだろうか？　こいつに至っては姿を消せばいいだけだから、覆面は必要ない。

おそらくホーディ・ジョーンズはそのことに気付いていて加わらず、しかし人間に輸血した島民を襲撃もしたので、指摘せずにこいつらにやらせていた。もうすでにオレの見聞色で見た過去の犯行の現場を、能力で作りに出した印刷機で紙にプリントし、指名手配している。

確かにこの国には、「人間に血液を分かつ事を禁ずる」という法律が古くからあるらしいが、それで輸血した人を襲って良いということにはならない。そもそもオトヒメ様が、たとえ海賊でも人間の難破船の救助をネプチューン軍の兵士達おこなと行い、輸血もしているので、罰則を与える者など城にはいない。ただの危険分子だ。

「打撃、斬撃、銃撃、砲撃、爆撃、炎撃、電撃に陸・海・空中戦！　1

つの悪魔の実際の能力でどれだけ網羅する気だ貴様ア！ インチキ効果もいい加減にしろ！」

調べたのか？ いや、ホーデイ・ジョーンズからのリークかもな。こいつなら接触しても気付きにくい。

「ふん、いくらオオセの魚人だからと、服ごと体の色を変化させ、周りに同化出来る貴様に言われたくはない。たしか貴様は科学者だったな、お仲間達から聞いているぞ？ どうやって変えているのか、科学的に教えて欲しいものだ」

オオセにそんなことは出来ん。体の色など変えられず、岩や砂に紛れ易いだけの保護色だ。

「(でもそれだってロゼも出来るじゃないか。私のアイデンティティーの1つが……)」

「崇高な純血の選ばれた魚人族であれば、そのくらいただの体質で出来て当然！ オオセの魚人であって、オオセそのものに非ず^{あら}。魚の性質を備え、人間を超越するよう進化した至高の種族こそ魚人族だ！

フツ、もつともオオセ？ その汚れた人間^{けが}の血が混ざった雑種はスミも制御出来ず、服は消せないよう」

【茨の鞭】!!」

バチイン!!

鞭で顔面を打つ。

本来は武装色で硬化し、鞭の弾力は残したまま横薙ぎに複数人まで鞭打つ技だが、今は拷問なので武装色は使っていない。痛みだけ与えればいい。

「アウツ!？」

それにしても本当に腹立たしい奴らだ。

シャーリーをアローンの妹なのに人間と関わる乱心者などと勝手なことを言うのも、メイプルが人間と人魚のハーフであることを罵倒するのも、当然不愉快だが。

「メイプルも含めて、うちの人魚達の着替えを何度も覗いといて偉そうに」

「ロゼ？ 私は言われ慣れてるから気にしないでゲソよ？ 実際、今

まで出来なかったわけだし。服ごと消える方は今も」

「まあ、それもあるから普段よりも怒っているみたいだけど……」

「人間などに屈しない！ 人間に殺されたタイガーは選ばれた英雄ではなかったが、彼の意志は我々が」

バチイン!!

「オウツ!？」

どいつもこいつもタイガーさんの名を勝手に叫びながら、人間に輸血した魚人や人魚を襲撃しているのが、本当に腹立たしい。

さてと

「私はあなたのためにブツのですっ！ だからお受けなさいませ
!」

バチイン!!

「そんなわけアウツ!？」

「あつ、始まったでゲソ」

「これって、刷り込みというか……調教よね?」

オトヒメ王妃の声を能力で再現して、鞭で叩く。

シャーリーの言う通り、調教だ。こいつらが人間との友好を叫ぶオトヒメ様に、危害を加えないようにするための。

「今からお前は最低の存在から最高の兵士に生まれ変わる！ いや、私が生まれ変わらせる!」

「い、嫌だ……い 嫌だあああああつ!!」

「口でクソたれる前と後ろに “S i r”^{サー} と言え！ わかったか、ウジ

虫!!」

バチイン!!

「サ、サー！ イエッサー!」

「『声が小さい!』」

バチイン!!

「サー!! イエッサー!!」

「オトヒメ様はこんなこと言わない……」

当たり前だ。あの人が言うわけないだろ。そもそもあの人は女性だから “Ma, am”^{マム}だ。

これはゼファアーさん達が新兵時代に訓練教官の鬼軍曹に食らったという、前時代の海兵隊式新兵訓練を参考にしたものだ。当然今はこんなに酷くない。一番食らったのはガーブさんらしいが、あの人は絶対に受ける前とまったく性格は変わっていないと思う。

叩く事数十回

「おれは貴族などではなく、ただの覗きです……」

だが、芯がない奴には良く効く。

天竜人にもやりたいが、去年、元帥に就任したセンゴクさんにチーズおかきを持って行った時、社会を良くするために、社会のトップの腐敗をブチ壊すためにもやって良いかと聞きに行ったら、『絶対やめろ!! それが発端となって、巡り巡って私が今どれだけ苦労しているとツ!?』と言われた。『頼む。お願いだ。お前まで、私を追い詰めてくれるなアツ……!』と。ダメか……昇進した瞬間なら許可が下りるかもと思ったが、あそこまで反対されるとは。何だあの魂の咆哮、ほうしゅう誰かもうやったことがある人がいたみたいだな。

「よし！ 貴様に対して理解出来たのは、女の裸を見たいという、その気持ちだけだ！」

「(見たいんだ……)」

もう良いだろう。「ライズ・ファルコン」を呼び出し、連行する。

「そういうえば、トリスタンはいないみたいだが、一緒ではないのか？」

自分のお腹に手を当てている2人に聞く。

戦闘の傷ならないが？ 締まった細いウエストだ。

トリスタンは潜水艦に乗って一緒に来て、『ここでお菓子を食べてます』と言っていたはず。

それが今は入り江の方にいるな。

「あの子なら、流れ着いた難破船の救助に行ったよ」

「ホタテサンドを頬張りながら、跳ねて行ったでゲソ」

あいつらしいな。どっちも。

「では見張りも兼ねて、少しここで食べて行くか。帰って来るかもしれないし、遊園地には用心棒がいるようだし」

オレがいる時は問題ないが、いつも魚人島にいるわけではない。数

日置きくらいにしか来ないため、いない間のために念を入れて遊園地とデンさんの護衛を依頼した。

マーメイドカフェとその従業員の人魚達も開店した時から依頼している。本来は海賊相手を想定した護衛だったのだが、魚人も含まれるようになるとは……報酬の値上げを要求されたので上げた。

「それにしても、開店当初から思っていたけど、よくあの人を味方に付けたでゲソな……」

「家のバーうちで作っている酒をかう常連客だし、お金で簡単に雇えた」
人種が違えど、お金は大事だったようだ。

「ああ……」

いつものように足が尾ひれのシャーリーを抱えて、3人で店に入る。

「あらロゼ、いらつしやうい」

「ちよつとダメよ？ シャーリー店長とメイプルキッチンチーフがいる時に仲良くしちゃう。2人に睨まれちゃう」

店員の女性人魚達と挨拶する。相変わらず華やかな店だ。

「今日のおやつは毒入りデザートで良いってことでゲソね」

「減給とサービス残業、どっちが良い？ 嫌な方にしてあげる（子供相手にそんな……結構いい男になるみたいだけど。背も伸びるみたいだし……）」

「ひいっ!？」

「……もしかして、この店の労働環境はブラックなのか？ こんなに魚人島のきれいだころが集まった、美人な店長とかわいいチーフがいる目に優しい楽園のような場所なのに」

なんか夢が壊れるな……。

2人共、今年で18歳だが、随分背が伸びた。つい1, 2年前まではオレと大して変わらなかったのに。

メイプルは170センチくらいで、シャーリーは2メートルを越えて、まだ伸びているらしい。少々抱えにくくなった。

「私、お菓子作ってくるでゲソ」

「私は占ってあげるわ。ちよつと手の平見せて？」

メイプルがキッチンに行き、椅子に降ろしたシャーリーにそう言われる。減給とかは冗談だったのか？

それにしても、今日は水晶玉じゃないのか。最近バリエーションが増えたな。手相以外だと、トランプにタロット、人相とか。恋愛占い等もやっているらしく、シャーリーの占いはこの店の名物の1つだ。

「(助かった……)」

人魚達の踊りを見ながらおやつを食べて休憩していると、

「あのお、この方どうすればいいのでしょうか？」

トリスタンが困り顔で入店して来た。

片手で持っているのは

「ダルマじゃないか」

小さな体と鋭い牙が特徴で、指名手配中のダルマザメの魚人だ。

【エレキテル】を使ったのだろう、体がびくびくと痙攣している。

ミンク族としてはひ弱な部類だったようだが、トリスタンもやるようになったものだ。

「どうしたんだい？」

「難破船の怪我人に輸血していたら、いきなり地面から出て来て襲われました……」

顔が出回って後先がなくなったからか、夜以外でも動くようになったか。

「でかした。では表でやるか」

「……もしかしてお手柄ですか？ ならご褒美を要求します」

「いいぞ。手始めにここで好きなだけ食べてよし」

「やりました！」

跳ねるトリスタンから下手人を受け取り、店を出た。

バチイン！ バチイン！ バチイン！

鞭打つ事数十回

「おれなんて、火達磨ひだるまになって死ねばいい……」

「火達磨になっても生きろ！」

仕事を終えて、また【ライズ・ファルコン】で連れて行かせ、入店

した。

「いや、あの、勝手にそんなことして大丈夫なんですか、ロゼ？ あなたこの国の人じゃないでしょう？ 人種問題以外にも、国際問題とか……」

悲鳴を聞いていたのだろうトリスタンに聞かれた。

「前に言っただろう？ オレはこの国に滞在している間だけだが、現在この国唯一の人間の住民扱いだぞ？ 第一勝手にではなく、鞭打ち刑むちについても許可を取っている」

そもそも国際問題って、オレはここ以外無国籍かつ無所属だということに、どこも問題になるんだ。

あえて言うなら、アマゾン・リリーかジェルマ？ どちらとも毎日連絡を取っている。ハンコック達はもう少ししたらまた会いに来ると言われ、レイジユには弟や父のことを世話が焼けると言いながらも少し嬉しそうに話される。

「そういうえば、前にお菓子を食べながら聞いたような……つまりロゼは、人間なのに人間社会では国籍がなくて、魚人島では国籍があるんですね。変なの……」

確かにおかしい。現代社会は複雑怪奇だ。

何度も入国審査をするのが面倒だからと言われ、あと人間との友好のための政策の一環として、リュウグウ王国の限定付きとはいえ国籍を認められ、告知もされている。身分証明書が出来た。

「さてと、トリスタンの顔も見たし、オレは遊園地の方に行く。今日も美味しいメニューときれいなダンスをありがとう」

お代を払う。

このメニューは肉や魚を食べられない人魚のために、貝や海藻を使った物が多い。つまりオレやトリスタン好みということだ。オレは貝もあまり食べないけど、海藻は好き。浅瀬がないシャボンディではどちらもあまり見ない。

「別にあんた達なら色々世話になったし、お代なんていらぬのに……あんたのところ程じゃないにしても、うちもぼった、特別料金だから（陸上でさつきみたいにお姫様抱っこしてくれるだけで充分なん

「だけど……」

「その時はチップになるだけだから貰つといてくれ。ではまた後でお土産を買いに来る」

「いつもの3つなら、今から作っておこうか？」

「お願いする」

母さんもこの海藻メニューを美容に良いからと気に入っている。ワカメブリュレとかモズクタルトとかコンブスフレとか。すでに息子のオレの目からも一児の母に見えず驚きだというのに、まだアンチエイジングするの……オレが生まれた時と見た目がまったく変わっていない。凄いな、人体。

マーメイドカフェを後にし、遊園地に来た。

「ドスン……おれのハンマーがつー！」

「オトヒメ派のウィリーはともかく、なんでアロンさんに何度も誘われながらも従わなかったお前が、人間の味方をするツビ、ヒョウゾウ!？」

砕けたハンマーと刃ごとぶつ切りになった槍が地面に落ちている。

ピンク色の髪に青い肌の巨体、シユモクザメの魚人のドスン。黒色の髪にヘルメットを被った8本腕、ダイオウイカの魚人のイカロス・ムツヒ。さっきの2人と合わせて、主犯は全員だな。

まだ残っているのが他にもいるし、竜宮城にも^デホー^カデー^イ・^イジョーンズ^ズがいるが。

「アロンにはさん付けでわいは呼び捨てか……まあそれはともかく、オトヒメ様を呼び捨ててるたア、随分偉なつたなア？」

「おれが大して酔う間もなくノサれちまったくせに、ナマア言ってるじゃねエよガキ……飲み足りねエぜ、ひつく。人間だの魚人だの、おれにはどうでもいい……あいつは今までの誰よりも金払いが良いからなア。恨むなら、自分達の気の毒な程薄っぺらな財布を恨め」

「転がった指名手配犯の側に立つ2人の内の1人は、魚人街で『闇夜の裁き』の下手人を探していたウィリー。」

そしてもう一人は、黒髪で突き出た口、酒が回り少し赤みがかった肌。酔った熱さ故か、ネクタイを締めず首に掛け、下の方しかボタン留めていない白シャツに黒のスーツを羽織り、酒の入った瓢箪を片手に持つという、父さんもたまにやっている、同僚と職場帰りに一杯やった帰宅途中みたいな酔っ払いスタイルの用心棒、ヒョウゾウだ。もう片方の手には鏢のない刀を持っている。

ヒョウゾウは毒種ヒョウモンダコの人魚で、如何にも毒を持っていてそうな色と模様のタコ足6本の人斬り上戸。泥酔すると誰彼構わず刀を振るう、酒癖の悪い危険な飲兵衛^{のんべえ}。覇気使いになつたはつちやんに、覇気なしの剣術で渡り合っていた、両手と足を駆使した八刀流と足から分泌する猛毒の使い手。

飲んでいるな……まあ飲むのは良い。人を切らんなら良い。早く飲んで泥酔しても人を切らないようになってくれ。捕まるには、遊ばせておくにはもったいない実力。というかそもそも、タイヨウの海賊団の船員として実力者が出ていった今の魚人島で他に対等に渡り合えるのは、ウイリーかネプチューン様くらいだろう。

追加料金を払って、さらに殺せば減給と念を押しているので、今の所死なない程度の加減はしてくれている。

遊園地完成後はネプチューン軍が巡回するので問題なし。その後は以前同様、マーメイドカフェで質^{たち}の悪い客、主に海賊からの護衛だけしてもらおう。

彼は彼で放っておけば殺し屋か辻斬りになり得^うり危険。種族の区別なく、善悪の関係もなく、お金次第で何でもするし、誰でも切る。お金を払うなら、それが人間だろうが別に良く、雇主として扱うのが救い。

「大漁だな。デンさんは？」

「ん？ おお、ロゼ。向こうで作業中や」

「そうか、順調そうで何より。ではこいつらにも拷問拷問つと」

バチイン！ バチイン！ バチイン！

鞭打つ事数十回×2人分

「おれは魚人なのにカナツチ頭だコツン……海底に沈めばいい……」
「おれなんて、一杯やるのに丁度いい、ただのスルメだツヒ……」
「おいロゼ、酒持ってねエか？ こいつ炙って酒の肴にする……ひっく」

「やめる酔っ払い、血迷うな。こいつは牢屋で干す。酒なら自分の手で持っているだろ。バーの酒って意味なら、魚人島に来た時、マーメイドカフェに置いて来た」

さつさと2人を「ライズ・ファルコン」に連れて行かせる。

「二日酔いの時に飲むあそのシジミ汁は一段と上手い……ひっく。それに、シャーリーはアローンの妹の割に、タダで酒の肴くれて気前が良い」

「ヒョウゾウ、お前絶対わいがおらん時に深酒すんなよ？」

「ケチなこと言ってるじゃねエよ……ウイリー。酒は飲みてエ時に好きにだけ飲むもんだ……ひっく」

「飲んで良いから人を切らないでくれ」

「コイツの方がまだ話がわかる……ひっく」

オレが話がわかるのではなく、酔っ払いが人の話を聞かんのだ。

その後、しばらくデンさんと一緒に作業をしたが、誰も襲って来なかった。何故だ？

「止まれエツ人間ツ!!」

遊園地を出て魚人島を巡回していると、人通りの少ない場所で乱暴に声を掛けられた。

ようやく来たかアツ!!!

「何を嬉しそうに笑ってやがるツ!! 同志達を何百人も捕まえやがって、ふざけんじゃねエぞ!!」

「嬉しいからなア、潰したくて潰したくて仕方がない奴らが目の前に現れたのだから。探していたぞ？ 貴様らも“闇夜の裁き”の下手人だな？ ならばオレが相手だ!」

見ると、確かハモの魚人のハモンドとカサゴの魚人カサゴバ、アンコウの魚人ヌルだったな。

「誰がテメエみたいな化物相手にバカ正直に正面から突っ込むかア！
ハモハモハモ！　だが、その余裕も今日までだ！　こつちにはこいつがいる！」

最初の頃はバカ正直に背後から襲って来ただろうが。オレにこいつらでは正面も背後も大して変わらん。帰りの水中で襲われたこともあるが、魚雷と放電で撃退した。

3人の後ろから、体中からトゲの生えた男、確かハリセンボンといった。

そいつが魚人の、オレより年下そうな男の子を抱えていた。ギザギザのヒレが生えている。あの子もカサゴの魚人か？

「その子が秘密兵器か？　強そうには見えないが」

というか怯えて

「こいつは魚人街出身でありながら人間と仲良くなりたいたってエ、言うなれば魚人族の聖戦参加を拒否した裏切り者だ！　こいつの命がギンツ!!!」

覇王色を子供以外にぶつけて気絶させる。

手前勝手な理論で人を襲っているような奴らが、聖戦なんてきれいな言葉を使うなよ。同胞を襲撃しといて、どの口で魚人族の裏切り者などとほざく。

「^{ソル}刺」。おい、怪我はないか？」

倒れてトゲが刺さる前に、魚人の子供を抱える。

「う、うん……ありがとう……（速っ、いつの間にか？　というか何今の。睨み倒した？）」

「礼なんて言ってくれるな。悪かった。オレがさっさとこいつらをブチのめしていれば、怖い目に遭わずに済んだのにな。1人で帰れるか？　無理そうなら遊園地に魚人街の出身の2人がいるから、送ってもらうか？」

「うん……ねえ、1つ聞いていいですか？」

恐る恐るといったかんじで聞かれる。

「なんだ？」

「人間って、良いの？　悪いの？」

「それは自分で考えるべきことだ。そもそも、オレの価値観は少々他と違うらしいから、あまり参考にならない。まあ、1つ言えるとするれば、魚人に見た目や考えが違う色んな奴がいるように、人間にも良い奴もいれば悪い奴も色々いる」

「……お兄ちゃんは？」

「悪い奴」

「じゃあきつと、良い人間はいっぱいいますね。おれはお兄ちゃんのこと、良い奴だと思いますから。色々聞いてますよ」

そうきたか……オレはこの住人にいつも通りに接しており、人間に幻想を抱き過ぎないように、自分の攻撃的で苛烈と言われる面も隠さず出しているつもりなんだがな。まあここでのその主な対象は、海賊と「闇夜の裁き」の連中の2つに対してだけだ。

オレが繕ったところで、魚人を偏見なく見る人間もいるが、魚と差別し見下す人間だって確実にいるという現実が変わらないから。

そして、それはどうも権力の上の方にいる人間程多い傾向らしい。この国が人間と友好を求めるなら、前にオトヒメ様が酔って演説で言っていたように、人間にぶつかるとの気持ちはちようどいい。

変わらなくてはいけないのは、最近の「闇夜の裁き」で明るみに出た、魚人島の、特に深海の魚人街で受け継がれてきた人間への怨念めいた感情もそうだが、人間の側の方こそ多い。どうにか出来ないかな……主に天竜人^{腐ったみかん}。あれが変われば世界は大分変わると思うんだが……。

ハモンド達を拷問の後に連行。

その様子を見て、「う、うん、やっぱりわからない……どつち？」と呟いていた、オニカサゴの魚人だったららしい少年をウィリー達所に送った。少々刺激が強すぎたか。

その後、マーメイドカフェに行く途中、

「ロゼ、久し振りじゃな」

「海侠のジンベエ」、1年振りだな……何故そんなに親しげなんだ？」

最近七武海になったらいい、2代目タイヨウの海賊団船長に遭遇した。

初対面時は、間違っても笑顔で話しかけられる仲ではなかったが。まだ会うのは3回目だ。

「タイのアニキのために飛んで来てくれたお前さんに、今までのような態度は取れん……それに、住人達から話は聞いた。色々力になってくれとるそうじゃな。恩に着る」

「助けられなければ意味はないし、自分の好きにやっているだけ」

「そのことなんじゃが、今からネプチューン王にも話すのじゃが……」

ジンベエの話によると

「……タイガーさんが生きているかもしれない？」

顔半分にとトウーを入れたドラゴンと名乗る男にそう言われ、預けたらしい……よく信じる気になったな？

「その男の船ならオレもあの帰りに見かけた……というか、威嚇して何百人も気絶させた」

「はあ!? 何やつとんじゃあお前!?!」

「いや、怪しい武装船だったから。だが船もなく1人だったなら、おそらくそいつは能力者。生きているなら、そいつか仲間の能力で何かしたのだろう」

もしそうなら、威嚇せずに放置しておいた方が良かったか？

そうか、生きているかもしれないのか……連絡がないのは副作用でもあるのか？ 動けないとか記憶が飛ぶとか。(※副作用で寿命が数年縮み、副作用関係なく性別が変わりました)

まあだが、たとえ生きていたとしても、オレが一度死なせたことに変わりないか。生きていれば、いずれ会うことになるだろう。

「ところで、アラディンやはっちゃんもいるのか？」

「ああ、シャーリーが始めたという店に行つたわい」

「なるほど。あそこの海藻メニューは美味い」

「そうなのか。わしゃあもずくとフルーツが好きでなア。アーロンにゃあ『その顔でフルーツ好きなんて似合わねエ』と笑われつつが」「何？ お前もフルーツ好きなのか？」

「そう言うゆうことはお前もか？」

オレの中のジンベエの評価が上がった。

瞬発的に成長する植物の種、ポツプグリーンのごとく、
偉大なる航路でたまに起こる、突き上げる海流のごとく急上昇した。
人魚ならともかく、魚人でフルーツ好きは珍しい。

「そういうえば、インペルダウンから釈放されたというノコギリの
アロンもいるのか？」

しばらくどこのフルーツは美味しいとか、そういった話をしてから、
思い出して聞いた。

問題ないとはシャーリーが言っていたが、あの場所から出てくると
は思わなかった。丈夫だからインペルダウンの拷問では死なないと
かそういう意味かと。

もしくは前に言ってた、まだ麦わら被った奴に鼻を折られてないか
らとか。あの麦わら帽子はガープさんの孫に渡ったみたいだが、その
ルフィとぶつかるのか？

「いや、あいつや他のいくらか、主に元アロン一味は来ておらん。タ
イのアニキが生きてるかもしれんなら、探すとしようとした。会うまで
この国に戻るつもりはないとも」

探すつもりなのか。手掛かりはドラゴンって名前くらいだから、厳
しいんじゃないか？ あと個性的な船員達。

まあだが、こう言ってはなんだが、あいつが来なくて良かった。
ホーデイ・ジョーンズとは会わせない方が良い。

彼は同じ魚人族まで襲うような奴ではないと思うが、タイガーさん
が死んでから変わっている可能性もある。

「シャーリーにも会わないのは、少し腹が立つが……」

「そこはお前がいるからじやろう」

「そうかア？」

その後、マーメイドカフェまで一緒に行き別れた。

店に入ると、1年振りの2人、アラデインとはっちゃんと再会。

トリスタンがアラデインから医学を教わっていた。アマゾン・リ
リーのベラドンナという医者からも習っていた。その姿勢は素晴ら

しい。こいつは基本独学だから勉強になるだろう。

はっちゃんもタコ焼きの屋台を再開するようだ。あとヒョウゾウを雇ったことを驚かれた。

何故皆驚く？ まあ確かに善人ではまったくないが、非常にわかりやすい奴だ。お金が好きで酔っ払いなところが、生まれた時から知っているような親しみを覚える。

話し込んでいたら遅くなったので、お土産を買いトリスタンと潜水艦に乗って帰った。

〃海侠のジンベエ七武海加入記念コンサート in 魚人島〃

オレは今マリンフォードにある政府の孤児院に来ている。最近来るようになった。

ベルメールさんがノジコ達を引き取らなければ、あの2人も東の海にある孤児院に引き取られていたそうだ。

「うわーん！ サデイちゃんの、サデイちゃんのスティックがあー！」
オレンジ色の長髪の、両目が前髪で隠れカチューシャをしてワンピースを着た少女。自分をちゃん付けで呼んでいるサデイが泣いている。オレの1つ年下だ。

今朝起きた時、可愛がっていたペットのスティックが亡くなっていたらしい。あの謎の小動物は、結局何という生き物だったのかわからずじまいだったな……。

「元氣出してよサデイちゃん。ブルブルと遊んでいいからさあ……」
泣いているサデイに、坊主頭で少し鼻が尖った7歳の少年、サルデスが、自分のペットの、かなり厳いかつ顔のブルブルという名のブルドッグを連れて来た。サルデスよりデカイ犬。

このブルブル、サルデスにかなりの芸を仕込まれており、二足歩行に前転、さらにはブレイクダンスの背中や肩で回転するウインドミル、頭で回るヘッドスピン、所謂いわゆるパワームーブが出来る。

今は腹を見せてゴロゴロしており、あの腹はとても柔らかい。あれでなんとかサデイの涙も止ま

「かわいくなくっついっ！」

しかし、サデイのお眼鏡には叶わなかったようだ。一蹴された。
「バウッ!？」

ブルブルがショックを受けている。

元氣出せと腹を撫でる……少し太ったか？

「何だとオ!？」

「あーサルデス。サデイは小さい動物の方が好きなんだから、たぶん。

ステイックも小さかっただろう？ その内ブルブルの良さだってわかるようになるさ」

怒るサルデスを宥める。

「むう……ちよつと散歩行ってくる」

「気を付けてな」

サルデスはブルブルに乗って行ってしまった。

あいつは動物好きだし、悲しい気持ちもわかるから抑えてくれたんだろう。

「ん〜！ サデイじゃなくてサデイちゃん〜！」

「すまんサデイちゃん」

この子はちゃん付けで呼ばないと拗ねるといふ、少々気難しい所がある。

「悲しい時は好きに泣いていいからさ」

そう言つて背中をさする。

「うん、お母さん……」

誰がお母さんか。なんでそうなった。せめてお兄さんか、百歩譲つてお父さんだろ。

「お母さん、サデイちゃんも、こつちでサッカーしない？」

「なあお母さん、お母さんには炎が効かないって本当か？ 私にも教

えてくれ！」

オレをお母さんと言つてきたのは、サッカーボールでリフティングしている、前髪で右目が隠れた金髪少女のドミノと、赤とオレンジの中間くらいの色の髪の毛、手の甲に酷い火傷の跡がある少女イスカだ。2人共オレと同年代だ。

「オレがサッカーをやると、加減しないと物が壊れるからやらん。サデイちゃんと一緒にいてあげてくれ」

「私はペット飼つたことないから、なんて言えばいいかわからないんだけど……じつとしてないで体動かしたら？」

「オレだってペット飼つたことないが、遊ぶ気になんて今のこいつにはなれないだろうな。気の利いたことなんて言おうとしなくていいから。イスカも、まあ教えるからこつち来い」

「はい、お母さん」

2人に軽くデコピンをした。

「痛あつ!? 何するのお母さん!」

「体罰反対だ、お母さん!」

「お前らがお母さんお母さん言うからだろうが」

ブーブー文句を言う2人に言い放つ。

デコピンくらいで大ききな。

「サデイちゃんだつて言ってるじゃない!」

「泣いてる子とからかつてる子を同じには扱わん」

「鼻貞だ鼻貞!」

「文句があるなら他所よその子になりなさい」

2人から背中をペチペチ叩かれるが、全然痛くない。

とうかさつきからサデイちゃんが静かだな。見ると

「この子寝ている……」

泣き疲れたようだ。オレの腕の中で眠っている。

庭で寝かせるのはまずいので、抱き上げて中に運ぶか。

「あなたすごいわね。会ってまだそんなに経ってないのに懐かれて

……」

「とうか距離感がおかしい。お前自然に手を繋いできたり、落ち込んでたら抱きしめてくるけど、普通そんなことしないからな?」

室内に入り、布団の上に寝かせ毛布を掛ける。

そして少し離れた場所で座って会話中。

「安心しろ。オレはお前達も含めて、あまり異性としては見てないから。そういうことは第二次性徴が終わってから言ってくれ」

「セクハラね」

「私はそれで構わないから、早く教えてくれ」

イスカに急せかさされる。こいつは放火で両親を亡くして、その時自分を助けてくれた海兵に憧れて海軍になりたいそうだ。まあ覇気について教えても構わないだろう。

「結論から言つて、炎に過度な苦手意識がある内は、オレと同じことをしても平気にはならないだろうな」

そもそも、オレも能力なしではまだ武装硬化しなければ平気ではない。

ある程度熟練した武装色の使い手なら、硬化せずとも平気だったりするが。

「なんでだ？」

「あんまり怖がつて心が乱れているとそもそも使えないし、出来たとしても炎が効かないレベルの覇気を纏えるかどうか」

練習すれば、武装色の上から体に炎を纏い、攻撃することも出来る。

マリーは髪に炎を燃え移らせ、「生命帰還^{せいめいきかん}」で炎ごと髪を2匹の巨大な大蛇に変化させ操る技、「蛇髪憑き炎の蛇神^{へびがみつ サラマンダ}」を使える。武装色のおかげでそんなことをしてもキューティクルが痛まない。

「まあつまり、炎への恐怖心を克服すればいいわけだ。なに、炎が怖いなんて極めて普通のことだから、慣れればいけるだろう。まずはそつちを頑張れ。手伝ってやろうか？」

「お前結構スパルタだからな……」

「安心しろ。海軍の教官の方がスパルタだ。だからオレで慣れておけ」

「安心出来ねエよ」

海兵の場合、スパルタだろうが厳しくしないと実戦で死ぬからな。

オレも海賊相手に負ければ、殺されるか売られるかの2択だろうし。

「お邪魔するわ」

そう言つて扉を開けて入つて来たのは、金髪縦ロールの髪型で、人形が着ているみたいなゴスロリファッションの5歳の少女、ダディさんの愛娘のキャロル・マスターソンだ。

この子の母親、つまりダディさんの奥さんが事故で亡くなり、シングルファアザーとなったダディさんに、たまに様子を見てやつてくれと頼まれ、最近初めて会つた。ここに来るようになったのも、この子が家に1人で居ても暇だからとよく足を運ぶからだ。

それにしても、あの時のダディさんの、苦渋の選択を迫られたような苦虫を噛み潰した顔は、非常に気に入らない。何故そこまで警戒さ

れねばならん。

「こんにちわ、キャロル」

「今日も演奏を聞かせてくれるのか？」

「あなた達が良ければ」

「じゃあよろしく」

キャロルはフルートを持ち、吹き始める。趣味だそうだ。

あと、1人でも出来るから、という少し悲しい理由もある。『お仕事で疲れたダデイダバに聞かせてあげるんだ』という言葉聞き、泣きそうになった。

高音のきれいな音色が、鳥の囀せせすりのように宙を舞い、耳に入ってくる。上手いもんだ。オレは楽器はまったく出来ない。

数分後、演奏が終わり、賛辞を送る。サデイちゃんも気持ちよさそうに寝ている。

「フルートは好きだ。名前がフルーツと似ている」

「浅っ!?!」

「フルートの奏者をフルーティストと呼ぶ。もうそれだけで生活に潤いを与え、生き生きとした人生を送れそうな音色を奏でるとは思わんか?」

「演奏の感想じゃないわね」

「お前がフルーツ好きなのは充分わかった」

「ま、まあ、褒められていると受け取っておくわ……」

こいつなら、前に手に入れた悪魔の実を上手く使えるかもな。結構強力だと思うが、少々人を選び、海軍に売っても使える人がいなさそう。我が家の住人達はいらないみたいだし、魚人島の人は悪魔の実を食べようとは思わないだろう。今度ダデイさんもいる時に欲しいか聞いてみるか。

その後、サルデスが散歩から帰ってきて、サデイちゃんは昼寝から目覚め、ドミノ達とサッカーボールで蹴鞠をした。ボールを蹴り壊さないように加減して。

そうして日も暮れてきた頃、キャロルと一緒に孤児院を後にした。

「パパ、大丈夫かな……」

「戦いに絶対はないが、お前のパパは強いから大丈夫だ」

「励ましてくれるなら、もっと安心出来るように励まして欲しいわ……」

「戦場は何があるかわからんものだ、お嬢さん。だが、オレみたいに一人で戦うわけでもないし、滅多なことはないだろう」

雑談しながらマリソフオードを歩く。キャロルに合わせてゆつくり。

そうして進むことしばらく、任務帰りの姉さんに会い、3人で話しながら歩く。

「ヒナさん。パパと煙のおじちゃんは？」

「ぶっ!？」

「？」

姉さんと2人同時に噴き出した。

キャロルは首を捻って不思議そうにしているが、煙のおじちゃん“って、スモーカーさんのことだよな？ ふははっ、あの人キャロルからそんな呼ばれ方をしていたのか。

姉さんによると、ダデイさんと煙のおじちゃんとは別任務だったように知らないそうさ。

「……パパから、あなた達2人の関係はヤバイと聞いていたのだけど、思ったより普通なのね」

「失礼なことを言う人だ」

「本当ね、ヒナ心外。よくベロチューしたり、たまに泊まってお風呂で洗いっこしたり一緒に寝る程度よね？（まだ食べるのは協定違反だから。ヒナ自重）」

「ああ。義理の姉だからセーフだ」

血が繋がってたらマズイが、義理なら西の海ではノーカンだと姉さんが言ってた。ウエストブルー西の海のマフィアの義兄弟は、男同士で尻の穴を掘り合って絆を深めるらしい。（※ヒナのデマ）

ウエストブルーワノ国の侍も嗜むという衆道だな。西の海生まれでなくて本当に良かった……。

「なるほど……確かにあなた達は色々手遅れみたいね」

キャロルを送って姉さんとも別れた後、マリソフオードから「ライズ・フアルコン」に乗りシャボンディへ移動すると、九蛇クジヤの海賊船、パフューム遊蛇号ユダが泊まっているのを見つけたので下降する。

「この前の新曲良かったよ、九蛇クジヤの戦士達。リンドウ、タバコ吸うなら火イ点つけようか？」

甲板に着地し、飛行中に着けていたゴーグルを外しながら、呼び掛ける。

基本的に全員、水着みたいな格好にマントを羽織っているだけ。年は全員、オレより上。5つ上前後。

あの三姉妹に続き、こいつらまで歌い出した。もうオレの理解の範疇をはるか凌駕されてしまいわけがわからん。今オレが知覚している世界は本当に現実なんだろうか？

「ん、じゃあお願い。ついでに「レヴォリユーション・フアルコン」だっけ？ あれの砲弾もちょうだいよ」

黒い髪を後頭部でシニヨン、お団子頭にしているリンドウに、拳を飛ばして人差し指の先から火を吹き、啞えたタバコに点ける。

上着の前を全開にして素肌が見えているという、女にようがしまケ島の外では割と正気の沙汰ではない格好をしているが、去年九蛇クジヤでもないのに同じ格好をしていた痴女をを偉大なる航路グランドラインで見つけてしまった。前を開けている代わりに、下は非常に短い皮のスカートとニーソックスを履いている。九蛇クジヤの戦士の戦闘服は、基本水着みたいな格好だ。

「欲しければ海軍科学班辺りから買え。ただの生活家電ならともかく、武器や兵器を一応は海賊に渡す気はない」

海賊で良いんだよな？ 海賊旗掲げているし。

アイドルこいんな海賊なんてこいつら以外に知らないから判断に困る。

「あれ1発1発の値段が高過ぎでしょ……」

「七武海の地位のおかげで売って貰えるだけ良いだろう。高いのが嫌なら、鉄球に武装色を纏って撃ち何度も再利用するなり、バズーカ砲を持って物理で殴るなりして頑張れ」

リンドウは片手に持ったバズーカ砲を武器に戦う。普通の砲弾や

鉄球以外に、炸裂弾や網に煙幕と種類がいくつかある。

「……あなた、最初と違って、随分態度が柔らかくなったわね（最初は素顔も晒さなかったのに、タバコに火を点けたり、頑張れって言うなんて）」

お前達も変わったがな。

ハンコック達への態度も多少落ち着いて来た。まだあの3人がいる間には、こいつらに会いたくないが。

「それはお互い様だろ、ラン。お前にオレは矢を一体何回射られたよ？ それに今の状態こそが異常。基本的にオレは海賊にはあんな態度だ。まあ七武海だし、問題ない」

黒髪のシヨートヘアーを七三分けにして両耳にピアスをしている。上はまだ普通、しかし下は水着にガーターベルトの危ない服装をしているが、格好以外は割と常識人。

一緒にいるヘビを弓にして背負った矢を放つ。毒を塗った矢もあるので、紙一重でなくちゃんと躲さないと危険。その上射た矢の軌道を曲げられる。

「ザハハハ！ あなた全然当たってなかったじゃない」

「蛇姫様達に向かって『お前』とか無礼な言葉遣いするからデシヨ」

「何度殺そうとしても死ななかつたし。丈夫ね丈夫ね！」

「オレは海賊専門の賞金稼ぎバウンティハンター、海賊に殺されても文句は言えんが、まだまだ死ねんな」

薄茶色の毛むくじやらかな髪型で笑い方が特徴的なデージーと、金髪の大柄で九蛇クジャの帽子を被ったコスモス、髪留めを付けた茶色い髪にオレより小さな体のブルーファン。

全員武器を使わず、覇気を使った素手の体術で戦う。

「こらデージー、笑い方下品」

「言う程下品か？」

リンドウがデージーを窘めるが、口元に手を当てているし、そうでもないと思う。

「男と女じゃ求められる品のハードルが違うのよ」

「そんなものか」

「ところであなた、ニヨン婆様に聞いたけど、本当なの？」
ランに聞かれる。

なんだ、話したのか。別に構わんが。

「ああ、本当だ。それがどうかしたか？」

「なんであなた、女に生まれてこなかったのよ！ もったいない！
仲間になってたかもしれないのに！」

とても残念そうに言われた。失礼だな。

「今のオレの存在を全否定するような言葉だな……だが、たとえ女
だったとしても、九蛇^{クジヤ}……というより海賊になることはない。別に今
の九蛇海賊団は嫌いではないし、むしろ好きだが、それでもありえん。
それはもはやオレではない。見ているだけがいい」

オレに歌って踊れと言うか。

「どうかしたのササ？」

「あら、あなたは会うの初めてだったわね。彼は……」

「パンダマン!？」

パンダ顔のパンダマンがいた。だが、髪が伸びツインテール。

そしてあるうことか胸が膨らんでおり、九蛇^{クジヤ}の服装をしている。

「パンダマンが何故ここに……!?! それにその恰好……取ったのか？」

自力で性転換手術を？」

「え？ 何ササ？」

「パンダマン！」

ドス！

「グウ……！」

オレの腹に拳が叩き込まれる。

見ると、デージーにやられたようだ。

オレの体が甲板に倒れ伏す。

「ザハハハ、彼女はパンダマンではないわ、会長。パンダウーマン美
よ。というかパンダマンって誰？」

「パンダウーマン美……？ なんだその安直なネーミングは……とい
うか何だ会長って……？」

「……蛇姫様達のファンクラブの会長」

そんなものを作った覚えなどない。いつの間にか祭り上げられていた。

「何ササ、この人？」

起き上がり話を聞くと、手術で男の象徴を切り落としたパンダマン……ではなく、昔からアマゾン・リリーで生まれ育った、パンダウーマン美。今はメイクさんとしてこの船に同行しているそう。母親とはすでに死別しているらしいが、父親がパンダマンと同じとかだ。うか？ 母親は普通の顔だったそう。

世の中同じ顔の人が3人いるとは聞くが、性別が違うのに顔が同じなんてあるんだな。もしかしたらオレに違いがわからただけで、本人達やパンダが見れば全然違うのかもしれないが。

「まあいいか。ハンコック達は？」

ランに聞く。

こいつに聞くのが一番手っ取り早い。

「あなたの家よ。コーティング、もしくはこの船を潜水艦に変えてもらうために」

「オレに頼むなら、何のためかによるな」

「あなたもよく行ってるらしい魚人島で、コンサートするのよ。新しい七武海の……『海侠のジンベエ』、だっけ？ その七武海入りを機会に、魚人と人間の友好のため、だったかしら。ボランティアね」

ああ、気にしていたからな。何も返せないまま終わってしまったと。

世界貴族の天竜人にケンカを売ったタイガーさんと、政府公認の海賊である王下七武海のハンコック達。接触しようにも信用されにくく、タイガーさん以外に進んで過去を打ち明けたくはないだろうし、仕方ない。

ジンベエの言っていたことはハンコック達にも教えたが、まだ生死があやふやだからな。自分達に出来ることを考えた結果だろう。

あの3人はタイガーさんが死んだ後、すぐに家に来た。

そして揉みくちやにされた。妖しい手つきで。ちゃんと生きてい

るか確認のためと言っていたが、途中から傷がないか確かめると言つて服を脱がされそうになった。うん、まあ……騒がしくて気分は少し回復したよ。

そして帰りに、元気を出してくれと、何を思ったのか自分達の写真集を渡してきた。

どういう意味だ、そういう意味で元気を出せということなのか？と中身を確認したら、ハロウィンとかの普通のコスプレ写真集で安心したよ。仮にもっと露出が多ければ、母さんの見聞色に見つかり焼かれるから。ステューシーに貰った写真は焼かれた。1枚残らずすべて。

「そういうことなら構わないか。じゃあまたな」

「また明日ね。どの道今日はここに停泊するから」

「ああ……つとそうだ。オレの修行について来てもらうために、ルスカイナの動物達の内、覇気を目覚めさせたのもいるから、修行で行くなら気を付けろよ」

「……「なんてことを……」」」

別れを告げて家に帰る。

帰宅し、家の中に入ると、三姉妹に出迎えられた。

お客さんは向こうの方なのだが、まあそれは構わない。

「なあ、お前達。確かにオレは子供だし、子供扱いされるのは構わん。だが、これはやり過ぎじゃないか？」

オレは今、ハンコック達の膝に代わり代わり乗せられていた。子供扱いというより、犬猫ペット扱いかもしれない。

「良いではないか、良いではないか。そなたにこう出来るのも、まだ子供である今を逃せば、もう機会は訪れぬやもしれぬのだから」

「初めて会った時より、背も伸びてきたわね」

「欲を言えば、もう少し甘えられたいわ」

「オレは人に甘えるより、甘えられたいタイプなんだ」

最近気付いた。

オレは人に、特に自分1人でもしつかり自立して頑張れる人に、たまに甘えられるのに弱い。普段とのギャップにときめく。

ハンコック達に甘えられたり、去年レイジユにもそうされた時に気付いた。

「それで、魚人島に行くことは政府も知っているのか？」

「うむ、ステューシーを通して伝えてある。わらわ達とそなたの関係は政府や海軍に隠しておらぬから、魚人島のためにそなたに頼まれたということにしてあの女がリーク。その結果、放置して問題なしという事になったそうじゃ」

「仲良くなったものだな……」

意外過ぎる。過去を考えれば尚更に。

何故か姉さんとも知り合いになっているし。予想外過ぎる。

「彼女には私達の広報もしてもらってるしね（あとあなたの写真も貰ってるから）」

「確かに頼んだが、あいつ働き過ぎじゃないか？」

ソニアの言った広報以外に、普通のC P Oとしての任務も、オレの監視やら『ビッグ・ママ』絡みもやっているのに。

「何から何まで自分の手でやってるわけじゃないみたいだし、平気じゃない？ 自由に使える手足は多いみたいだし……それに、あなたに癒してもらってるみたいだし（協定違反ギリギリのことをしてるらしいじゃない）」

マリーにそう言われた。嫌味かもしれない。

結構気軽に人に言えないようなことをしているのに、それを話すなんて、本当に仲良くなったものだ。

「彼女は場所的にも役割的にもずるいわね。あなたはルスカイナには来ても女ヶ島にようがしまには来ないし。せっかく姉様あねが『皇帝の許可がある者は男でも入国可』って法律を変更したのに（レイリーは来るのに）」

「せっかくの奇跡みたいな女だけの国に、男のオレが入るのは無粋」

「あなた、初めて会った頃はそのままじゃ滅ぶって言ってなかった？」

「あの時とは事情が変わった。というかお前達を変えた」

本当にどうしてああなったのか？

「まあ良い。今日はわらわ達がじっくりと愉しませてやるから覚悟するのじゃ……逃がさんぞ? (そなたへの包囲網は着々と出来ておる。知っておるか? アマゾン・リリーは女しかおらぬから、結婚に関する法がない。ニヨン婆に早いと止められた故今は我慢するが、重婚罪などというつまらん法もないのじゃ。あつてもわらわが握り潰すが)」

その後、人獣型になったソニアとマリーにハンコツクの膝に乗せられたまま巻き付かれ、2人には両耳の中を耳掃除として蛇舌でチロチロと舐められ、ハンコツクには耳たぶをハムハムと唇で弄ばれた。どこで覚えたこんなもの。あれはマズイ、人をダメにする。

ハンコツク達との特殊なプレイをした次の日、船を潜水艦に変えて、魚人島に行った。

風のないカイムベルトの海でも航海出来るよう船を引っ張る、巨大な毒ウミヘビの遊蛇ユダは、シャボンデイでお留守番。

ハンコツク達がオトヒメ様達やジンベエ達と話をしてから、ギョーンコルド広場でコンサートが開催された。

何気に直接コンサートに来るのは初めてだな。生演奏が初めてだ。あのよくわからんファンの儀式みたいなのもないし、とても楽しめた。

住民達もそう悪くない反応だったし、タイガーさんが死んだすぐ後に比べれば、大分持ち直して来たかもな。

☆☆☆☆

魚人島が九蛇クツヤ海賊団のコンサートで盛り上がる中、怒りの炎を燃やす男がいた。

「(クソツクソツクソツ!! 魚人と人間の友好だと? ふざけるな、この国はイカレてやがる!)」

リュウグウ王国の目が届かない深海、魚人街で受け継がれてきた人間達への怒り、憎しみ、復讐の意志。それを色濃く受け継いだ男、ホー

デイ・ジョーンズ。

次々と仲間が捕まり、思い通りにいかない間も、少しずつ進む人間との融和。ホーデイの怒りは日に日に増すばかり。

「(あいつだ。あの人間が来てからどんどんおかしくなった……!)」

その怒りの矛先は、フィッシャー・タイガーが連れて来て、自分が憧れたアーロンと自分を蚊でも払うかのように倒し、魚人島で人間との友好を叫ぶオトヒメに、金魚の糞のようについて回り、仲間を何百人と捕らえ、タイヨウの海賊団2代目船長のジンベエとも仲良くしているという、目の上のたんこぶのように鬱陶しく目障りな人間、機甲のロゼ機”に向けられていた。

「(ジャハハハ、だが良いことを聞いた)」

ホーデイは、七武海として政府の、人間の狗に成り下がったと見下しているジンベエが、自身が忠誠心を欠片も向けていない国王のネプチューンに話していたことを思い出す。

「(あいつは、フィッシャー・タイガーの死に際にいた。そしてタイガーは、人間に献血を拒否され死んだ。これは使える。だがもう後はない……邪魔な奴はあの人間とオトヒメ。上手くいけば一度にどちらも……)」

魚人島の暗黒の感情、怨念は、数が減っても今なお燻っていた。

“造った船に男はドンと胸をはれ”

赤^{レッド}土^{ドライン}の大陸の上、聖地マリージョア。

その中心にそびえたつ巨大なパンゲア城の中の通路を、1人の端麗な容姿の貴婦人が、溜息混じりに歩いていった。

「(マズイわね……せつかく彼が食事中以外で珍しく、年相応に可愛く喜んでいたのに、余計なことを……!)」

天竜人直属、CP-0の諜報部員ステューシー。

彼女が考えているのは、先程知った他のサイファーポール、CP-5の主官スパンダムが、古代兵器の設計図の情報を手に入れ、五老星に『世界政府が古代兵器を所持し、これを用いて大海賊時代を打ち払うべし』と進言し、一任された件だ。

彼女にとつて、政府が古代兵器の設計図を手に入れるのは別に構わない。この設計図を嗅ぎ回る海賊も存在するならば、政府が保管するなり破棄するなり古代兵器を復活させるなり好きにすればいいと思っている。それが兵器、機械であるのであれば、たとえ暴走したところで自分が主と仰ぐ者なら、悪魔の実の能力でどうにでも出来ると。

「(あの間抜けの七光り、出世欲だけは一人前ね。私が直接動いて上に怪しまれても困るわ。彼の立場を守るために、私のCP-0の立場は必要。ただでさえ彼には、こちらから手を出さずとも『赤髪』以外の四皇との戦争になり得る火種が4つ……いえ、また増えて6つもあるのに。リンリンとの火種だけでも、私が情報を止めないと……)」

問題は、その設計図の、古代兵器プルトンが、1発放てば島一つを消せる威力を持つと言われる、造船史上最悪の化物と称される戦艦が、ウオーターセブンで造られた物であること。

そしてプルトンの設計図は、数百年間代々ウオーターセブンの船大工の間で受け継がれた物であり、現在所有している可能性が高い人物が、コンゴウフグの魚人の船大工トム。

かつてロジャー海賊団の船、オーロ・ジャクソン号を造った罪を、ウォーターセブンとエニエス・ロビー、サン・ファルド、セント・ポプラ、プッチの4つの島を結ぶ4本の線路とその上を走る海列車パツフィング・トムを完成させたことで、もうすぐ免除されるだろう。免除されるはずだっただろう。何もなければ。

「(こういう時は、他に動いて貰いましょうか。貸しは作ってあるし、偶然だけど縁もある。どの道もう見つかるのも時間の問題。そして何より、ギリギリ間に合う距離。彼らの判断に委ねれば、ロ、ロゼに後でバレても問題ないでしょう)」

自分の父親、シルバース・レイリーの船を造ったことで死罪になるのが帳消しになりそうだと聞き、誕生日にプレゼントに何が貰えるか楽しみにしている子供のように、まだかまだかとトムが免罪になるであろう裁判の日を楽しみにしていたロゼの様子を思い出し、ステューシーは自分の、サイファーポールとは別の一般人の部下に連絡し、トムを奪還すべく行動することを決めた。

たとえ相手が自分より年下の少年であろうとも、ロゼの与り知らなあずかいところで色々と動いていても、ステューシーは尽くす女だった。

3日後、ウォーターセブン

トムの判決を決める司法船が到着し、その裁判をウォーターセブンの多くの住人が傍聴に来た。

14年前の裁判時には、『“海賊王”の船を製造した事実を世界的凶悪犯への加担とみなし死刑』というトムに下された判決に対し、『当然の結果』『世界中が迷惑してる』『仕方ない』と考えていた住人達も、並の造船技師には到底作れない海列車を開通させたトムとその造船会社トムズワーカーズを称え、誰もが死罪は帳消しになると思っていた。

ドゴオン!!!

停泊した司法船とその周りで皆がトムの到着を待つ中、突然号砲が

鳴り響き、司法船に砲弾が撃ち込まれる。その砲撃は1発に終わらず、次々と船に放たれる。

1人、トムズワーカースの人達より一足先に港に来ていた、水色の髪を逆立たせ、額にゴーグル、アロハシャツに半ズボンで裸足のラフな服装をしているトムの弟子の船大工の1人、カティ・フラム……トムズワーカースの人々からはフランキーと呼ばれている青年は、砲撃が放たれている海を見て……戦慄した。

今まで自分が造ってきた戦艦「BATTLE FRANKY号」。
3日前にその35号で全長100メートルはあろう海王類すら仕留めた自分の戦艦が船団を成し、司法船を、人を襲っていた。

何故？ 一体誰が？ こんなことのために作ったんじゃない。

フランキーが混乱する間も、襲撃は続き、司法船のマストは倒れ、火は燃え上がり、怪我人は増えていく。自分の船を人を傷付けるために使われ、怒り戸惑うフランキーが船に向かう。

時を同じくして騒ぎに気付いたトムと、フランキーの兄弟子アイスバーグも、襲撃を止めるために船に乗り込むと、すでにもぬけの殻。どこか近づいて来た別の戦艦に砲撃され、フランキーが着いた時には、2人は傷を負い、特にトムは体に深く銛が刺さり重傷だった。

これは、出世のチャンス逃したくないCP-5主官スパンダムが、古代兵器の設計図を手に入れるために、トムの罪が帳消しになつては困ると、罪人として取り調べるために仕組んだ、卑劣な策略。フランキーの造った戦艦を使い、トムズワーカースに罪を着せ、逮捕するため。

トム達3人は、スパンダム達CP-5に捕まり、手錠を付けられ町に司法船の襲撃犯として連行される。

フランキーが、襲撃はスパンダムの仕事と、裁判長や町の住人達に訴えるも、戦艦に乗っていたフランキー達を現行犯で捕らえた政府機関のCP-5とその戦艦を造った船大工。信用は天と地の差で、信じる者はいない。

「あんな事する船なんて……！　もう、あんなのはおれの船じゃねエ！！」

ドカンッ！！

自分の造った船が人を、自分の大切な人達を傷付けたことで、自分の船であることを否定したフランキーを、トムが手錠の鎖を引き千切り、殴り飛ばした。

トムが拘束を外したことで、周りの海兵が銃を構える。

「……………!!?　トムさんが……………!!　フランキーを初めて殴った!!」

驚くアイスバーグ。

今まで武器や戦艦ばかり造るフランキーに、凶器を存在させた責任を何度も問い掛けてきたアイスバーグに対して、トムは笑って許してきた。先程フランキーの戦艦に襲撃された時にアイスバーグが彼を責めても、トムは深手を負いながらも笑い、責めなかった。

そのトムが、初めてフランキーを殴った。

「何すんだア!!!」

『「おれの船じゃねエ」!!?　フランキー……………それだけは……………言っちゃいけないエ……………!!」

「言って何が悪い!!　後悔してんだ!!　あの船さえなきや、誰も傷付けずに済んだんだ!!!」

「どんな船でも……………造り出す事に、善も悪もねエもんだ……………!　この先お前がどんな船を造ろうと構わねエ!!　……………だが」

体に刺さった銃を、フランキーが刺さっても抜けないように作った銃を、怪力で無理矢理引き抜き、傷口が抉れ血を拭き出しながら、トムは言う。

「生み出した船が誰を傷付けようとも!!　世界を滅ぼそうとも……………!!

生みの親だけはそいつを愛さなくちやならねエ!!　生み出した者がそいつを否定しちやならねエ!!　船を責めるな!!　造った船に!!!

男はドンと胸をはれ!!!」

それが、船大工としてのトムの矜持。信念。

罪を被せてきたのは世界政府、裁くのも世界政府。今回の疑いは晴

れるはずがない。

トムは覚悟を決め、アイスバーグとフランキー、2人の弟子に、自分がこれからする事への口出しを禁じた。

フランキーの造った船をこんなことに使ったスパンダムを殴り飛ばし、周囲の海兵に麻酔弾で撃たれ、膝をつくトム。

そして、司法船襲撃の罪を認め、海列車を造った事で何か1つ罪が消えるなら、今日の司法船襲撃の罪を消して欲しいと裁判長に頼む。

「たとえばその望みが通ったとしても、14年前の振り出しに戻るだけだ。お前は再び極刑となる、『海賊王の船製造』の罪が残るぞ!!」
「ああ……その方がいい……!! わしは、ロジャーという男に力を貸した事を、ドンと誇りに思っている!!」

フランキーへの言葉通り、トムは胸をはり、オーロ・ジャクソン号を造った事を誇る。

自分の造った船の責任から逃れようとしたフランキーへの、師としての最後の教え。船大工としての信念を貫く姿を、弟子達に堂々と見せつけた。

自分の罪名が14年前に戻っても、大海賊時代以降廃れて人々に活気がなかった昔と違い、今のウォーターセブンは力に満ちている。たとえこれから自分の身に何が起きても、自分の造った海列車パツフィング・トムが町の力になれる。自分の夢はやっと走り始めたのだ。

そうフランキーに伝え、体に麻酔が回ったトムは、倒れた。

トムという男の信念に心動かされた裁判長が、彼の頼みを聞き入れ罪名を変更。司法船襲撃犯3人の逮捕から、『海賊王』の海賊船製造の罪によりトム1人が、司法の島エニエス・ロビーに連行されることになった。

司法の島へ行った罪人が帰って来た試しは一度もない。トムは2人の弟子を連れて行かせないために行動したのだ。世界政府を敵に回しては命がいくつあっても足りない。だから耐えろと、悔し涙を流しながらアイスバーグとフランキーを諭すトムの秘書ココロ。

だがフランキーはトムを連れて行かせないと、スパンダムを殴り飛ばし暴れ回り、海兵達相手に大立ち回りを繰り広げるが、トムは海列車に乗せられ、エニエスー・ロビーに向かう。

「止まれ、パツフィング・トム。てめえ……生みの親をどこへ連れてく気だよ!!」

ドン!! ドドン!!

トムのペット、角界ガエルのヨコヅナと先回りして、武装したフランキーが線路の上に立ち、大砲を撃ち、海列車を止めようとする。

「止まれ、海列車ア!!」

ゴオツ!!

しかし、トムの造った海列車には傷一つ付かず止められず、フランキーは海列車に轢かれ、体が宙を舞い、海に沈んだ。

「ワハハハ!! バカめエ! ただの船大工が、世界政府に、おれに楯突くからだア!!」

「スパンダムさん、大変です!!」

数十分前に、海列車に吹き飛ばされ死んだであろうフランキーの姿を思い出し、高笑いを上げていたスパンダムに、C P ー5の諜報員が、先程フランキーが追って来た事を報告した時より慌てた様子で、後ろの車両から駆けこんでくる。

「今度は何だア!?!」

「侵入者です! 先程、この海列車に近付いてきた船から、数人が飛び移り、海兵や他の諜報員達相手に暴れ回っております!!」

「何イ!?!」

目的は何だ。

スパンダムがそう言う前に、

「じゅうけんからじし獣剣唐獅子!」

ズババンツ!!

「ホベアーツ!?!」

トムに殴られ、フランキーに殴られ、結果顔が曲がり歯が抜け落ち、体が包帯で覆われ足にギブスと、すでに満身創痍だったスパンダム。

そのスパンダムが、突然現れたミンク族の男に体の至る所を剣で切りつけられ、先程海列車に轢かれたフランキーよりボロボロになった、ボロ雑巾のような体が吹き飛ぶ。

「スパンダムさん！」

「道力たったの5のスパンダムさんがまたやられた！」

「おれ達の一番の穴が！」

スパンダムが海列車の壁に叩きつけられ、騒ぐ彼の部下達。

道力とは、人間の体技の強さの単位。武器を持った1人の衛兵の強さが10道力。

つまりスパンダムの強さはその半分で、必ずしも直接戦闘するとは限らない諜報部員とはいえ、最低限の強さすら備えておらず、本来CP-5の主官など務まらないが、一般人には知られていない暗躍諜報機関CP-9の長官だった父スパンダインのコネで主官に就いた。

「包帯でわかりづらいが、紫の髪に目の周りの隈と黒い鼻、ゆガラがなんとかパンダだな」

「スパンダムだ……！ てめえら、こんなことしてただで済むと!？」

「元より覚悟の上！ ロジャー達の、旦那達の、おでん様の船を作ってくれた恩人を、このまま連れて行かせはしない!!」

「(こ、こいつロジャー海賊団の関係者か!? やべえくっ!!) ……がくっ」

ロジャーの名と自分を切った攻撃から、最初から戦う気などない自分分は当然、連れて来た部下では敵うわけがないと見切りを付け、早々に気絶したフリを実行。スパンダムの、出世と保身のためなら普段の数倍は働く弁舌べんぜつと脳細胞の内、脳の方がフル稼働する。

結果、先程自分のことを道力たったの5だの穴だのと言うだけで、壁にも盾にもならなかった使えない部下達を切り捨て、責任を押し付け人身御供にする算段を立て終わった。

そしてスパンダムがそんなことを考えている間にも、ミンク族の男、ノックス探検隊船長ペドロが剣を振るい、残りのCP-5を倒す。

その後、彼らがいた車両の先。海列車の機関部、動力室に入り、海列車を止めるペドロ。

「おい、ペドロ！ トムさんを見つけたはいいが、結構な深手だ！ 応急処置はしてあったが、どこかでちゃんと手当てしないとマズイぞ！」

他の車両を制圧し、トムの身柄を押さえたペドロの相棒ゼポが、寄って来て伝える。

「……船に残ったペコムズ達が追いついて来たら、久し振りにあそこに行くか」

懐からビブルカードを取り出しながら、そう言うペドロ。

「？ ああ、あそこか！ ビブルカード貰つといて良かったな」

「あガラに治せればいいんだが……」

「(ヒヨウがペドロ(※ジャガーのミンクです)で、名前がわからねエシロクマ。何のミンクか、ミンク族かどうかもわからねエがペコムズって奴。くそつ、どこに向かうんだ……?)」

ペドロもゼポも、スパンダムが気絶していないことには気付いているが、戦闘の意志なしと放置している。

たとえ向かって来たとしても、何の問題にもならない程弱いので、相手にされていなくても言う。

船を操り追いついて来たペコムズ達と合流したペドロ達。

麻酔と傷で眠っているトムを連れたノックス探検隊は、舵を切り、ビブルカードを頼りに船は進む。

船首が向かう先は、彼らが5年振りに訪れることになる、シャボン玉が飛び交う島。

シルバース・ロゼの住むシャボンディ諸島。

☆☆☆☆

シャボンディ諸島のオレの家。

椅子に座ってペドロ口から話を聞いていた。

「ということがあったんだ」

「それはまた……」

「前から思ってたけど、うちの子ってトラブルを引き寄せる体質ね……」

久し振りに来たペドロ達ノックス探検隊。そして重症で風船のよ
うに丸い体の魚人。

珍しく慌てて駆け寄った父さんによると、薄黄色の肌で目の上に角
のようなトゲが生え、白くフサフサの髭と髪、頭にバンダナ、青く波
の模様の入ったシャツにジーンズに革靴を履き、腰に斧や金槌などの
工具を付けたこの人が、船大工のトムさんらしい。魚人島のデンさん
の兄の。

ペドロ達が偉大なる航路前半の、毎年襲ってくる大規模な高潮アク
ア・ラグナによる水害に水位の上昇と大海賊時代以降増える海賊の被
害で、衰退していく一方だったウオーターセブンに代わり、現在造船
業で一番有名な島に滞在していた時。

自分達以外の旅の2人組が

『ねえ知ってる？ なんか、なんとかパンダとかいう紫色の髪で
目の周りと鼻が黒い奴が、海列車を造った人を罫に嵌めようとして
るんだって』

『マジで？ 確かロジャー海賊団の船を造ったトムって魚人でしょ
？ 海列車作って免罪になるんじゃないの？』

『それがさ、その人が持つてる物を取り押さえたくって、罪人じやな
いと困るんだって』

『それマジヤバくない？ 激ヤバのヤバタンなんですけど』

と、何故か無性に腹が立つてくる口調で、大声で話しているのを聞
き、トムさんを救出しに行ったそうだ。

なんでそいつらはそんな政府の陰謀みたいなことを知っていたん
だ？

それにしても、フロリアン・トライアングル魔の三角地帯を通過してよく無事だったな。運が良

い。

昔からあそこは毎年100隻以上の船が消息不明になっていたそうだが、今のあそこは特に危険地帯。ステューシーによると、『影法師』は七武海入りする条件に、インペルダウンの囚人の影を要求し、各地で手に入れた死体に影を入れて、カゲカゲの能力で作った不死のゾンビ軍団を組織し、あの海で影狩りを行っているらしい。ゾンビの強さを入れた影の持ち主や死体の強さに比例し、名だたる海賊の影や死体も手に入れているとか。

「たっはっ!! ……!! ……!! ……ドンと生きてた!!」

「まだ安静にしてて下さいね? ちゃんと塞がったら糸を抜かないと」

傷口の縫合手術が終わったトムさんが大口を開けて笑い、トリスタンが注意する。

こいつはどちらかというと内科医で、手術があまり得意ではないけど、切傷や刺傷の縫合手術は上手くなった。なんか……ゴメンな? いつも海賊相手に暴れて。

目が覚めてすぐに、舌を噛み切って自害しようとした時は焦った。政府に古代兵器の情報を与えないためだろうが、子供にミンク族、果ては『冥王』という客観的に見て意味不明なメンツにトムさんがフリーズした瞬間に、口に硬化した手を突っ込んで止めた。

「お疲れ様」

「キュルキュル〜♪」

ここが自分の椅子だとしても言わんばかりに、当然のような顔をしてオレの膝に横向きに座ったトリスタンをねぎを労う。

「すまない、トム。我々の船を造ったばかりに」

「たっはっ……! なアに、あそこまでドンと乗ってもらえりゃあ、オーロ・ジャクソンも船冥利に尽きる! あいつを造ったことはわしの誇りだ!」

「……うれしいことを言ってくれる」

申し訳なさそうに頭を下げる父さんに、笑って返すトムさん。

一切の悔いなしか。器のデカイ人だな、この人は。

「トムさんは、レイリーがここにいることに驚かないんだな」

「驚くも何も、シャボンデイでコーティング職人をやるからやり方を教えてくれてドンと頼まれた！」

「え？ そうなのか？」

「ああ。海賊団が解散して、シャボンデイに住むと決まってから会いに行った」

初めて聞いた。

デンさんもコーティングが出来るから、同じく魚人島出身の船大工であるトムさんが出来ることに不思議はないが、父さんが出来るのはそういう理由だったのか。

思い付きのノープランであればやりたいとかこれがやりたいとか言い出す「海賊王」の要望にあれこれと応えていたら、色々出来るようになったと言っていたので、器用だなくって思っていた。

「それにしても、勿体ないな。古代兵器の設計図なんかより、あんたがこれから船大工として他の島々も海列車で繋げられれば、世界中の交易が大きく変わるだろうに。そこらの船大工には作れないんだろう？」

オレが能力で作れたとしても、気絶か死亡で消える危険な乗り物になつてしまう。

「たっはっ………！ ……！ その夢はアイスバーグとフランキーにドンと託してきた！ あいつらならやれる、わしの弟子だ！ わしはこいつらの船で船大工をやらせてもらうかな」

へえ、弟子も腕が良いのか。ウォーターセブンはここから近いし、旅に出たら探してみるか。

「一緒に来てくれるなら心強いが、いいのか？ ここからすぐ下の魚人島がゆガラの故郷なんだろう？」

「デンに会ったならそれでいい。あの国も立場は微妙、わしがおると今回みたいにドンと不利な事になりかねん。それに、お前達の旅が終われば、久し振りにイヌアラシやネコマムシに会ってみたいしな」

「旦那達も喜ぶだろう。よろしく頼む！」

「ああキャプテン・ペドロ。船の改造、修繕はドンとわしに任せておけ！　どんな海も越えられるようにする！」

ノックス探検隊に船大工が加入か。

これから新世界に行くらしいし、あの海は前半よりも異常な海域が多いらしいから、心強い味方になるだろう。オレとしても政府に追われる身となったペドロ達と、政府に古代兵器の設計図を狙われているトムさんが、力を合わせて身を守れるのは、少し安心出来る。

重要なのは

「今回の件で写真や情報が集まれば、お前達は指名手配されるだろうが、聞いておきたいことがある」

「？　なんだ？」

「お前達は海賊団か？　それとも探検隊か？」

「!!？」

膝の上のトリスタンが、ビクツと震えてもがきだした。

心配せずとも、海賊と名乗ったからって追い出したり戦ったりはしない。海軍にあまり被害を与えたくない、だがペドロ達に死んで欲しくもない。だから、オレがどこまで手を貸せるのかの線引きを明確にしたいだけだ。

「(なんだ、トリスタンのあのジエスチャー……?) おれ達はまだ探検隊のつもりだが……世間からは海賊団と呼ばれるんじゃないか？　別に構わんが」

「そうか、お前達が海賊になる気がないなら別に良い。海賊旗を掲げないなら別に良い」

「(良かった……ロゼのあれは、もはや海賊アレルギーです)」

トリスタンを撫でながら言う。

助かった。オレは普通じゃないからな。九蛇^{クジヤ}海賊団はまだ無理だが、ハンコック達とかは大丈夫だし、ペドロ達なら海賊であったとしても大丈夫だと思うが、気軽に海賊を助けられない。タイガーさんの件以来は特に。

今までも頭痛に腹痛、吐き気を催したりはしていたが、前にどうせ

もう悪だからと、医者というわけでも戦えない民間人というわけでもないオレが、自分で捕らえた、特に気に入ったわけでもない海賊の手当てをするという、海賊の被害に遭った人に殺されても文句が言えない極悪非道をしたら、血を吐いて倒れ、自分の血溜まりに沈み、慌てたトリスタンに回収された。

トリスタンからは病気だと言われてしまったが、三つ子の魂百までと言うし、まあ仕方がない。タイガーさんと同じくらいには助けようと思わないと、体が受け付けない。タイガーさんを助けられなかったくせに、こんな奴は助けるのかと拒絶しているんだろう。

「そういうえば、ペコムズはもう月の獅子スーロンの制御が出来るようになったのか？」

「いや、まだだ……」

「そう落ち込むな。実はあの後思ったことがあってな。確か、ペコムズは能力者だったよな？」

「ああ、カメカメの実のカメ人間だ」

モデルは不明……と。

カメといえは、硬い甲羅と長寿辺りが特徴。あまり強いイメージはないな。ライオンのミンクと合わさって、噛む力が強そうというくらい。まあこの際それはいい。

「悪魔の実についてはまだ解明されていないことも多いが、聞いた話では2つ、大きな力を発揮することがある。1つは『覚醒』、まあオレがそうだが、超人パラミシアの場合は……」

適当に壁を冷蔵庫にでも変えて、また元に戻してみせる。

「こんな感じで周りに影響を与えたり、能力の範囲が広がったり……動物ゾンの場合は、超人的なタフネスと回復力が得られるとか。そして、もう1つが『暴走』。悪魔の実には意志があるって話も聞くし、能力者に操りきれず能力が独り歩きし、勝手に体が動いたりするらしい。悪魔の実の能力と月の獅子スーロンの力、この異なる2つの要因があるから、上手く扱えないんじゃないか？ 月の獅子スーロン中に悪魔の実の能力が暴走しているとか」

「ガオ……けど、たどえそうだとしても、そんなもんどうすれば……」
「そこでそれ」

意識がないトムさんに付けられていた手錠を指差す。

鍵も一緒に奪って持って来ておいて良かったな。なければ外すために、一度両手を切り落として、縫い合わせてくつつける羽目になる所だ。

「ガオ？ 手錠がどうかしたか？」

「ただの手錠ではなく、これは海楼石の手錠だ」

一度手錠を引き千切ったらしいから、能力者でもないのにこれを付けたんだろう。普通の手錠はオレでも腕力で壊せる。

「ほう、これがそうだったのか……海楼石はワノ国で採れると、昔聞いたことがある」

「海と同じエネルギーを発する鉱物で、能力者の力をドンと無効化し、並の技術では加工すらままならんと聞いたな」

ペドロとトムさんが話に加わって来た。

「どちらもその通り。パイロブロインって成分が含まれていて、現在ワノ国でしか採れず、加工技術が一番高いのもワノ国。それでワノ国の黒炭オロチが足元を見て値段を釣り上げているから高いそうだな。その手錠も、能力者が触れると能力が使えず体の力が抜けるが、罪人が自力で歩ける程度に作られている」

「つまり、これでペコムズの能力を封じた上で、まずは月の獅子^{スーロン}だけの制御を試してみる、ということか？」

「そういうことだ。色々試して海楼石の効果の穴を探すのとかも楽しいし、慣れれば能力者でも海楼石に触れた状態で覇気を使える。オレはやったことないけど、対能力者の戦闘にも使えるしな。手錠を掛けて腕を切り落とせば回収も出来る。民間人や海兵にやったらブツ飛ばすけど」

海楼石に触れても能力で作ったものは消えない。少なくともオレの機械はそう。

なら、能力によっては合鍵なんかを作って海楼石の手錠や檻を開けることも出来そうだな。クザンさんのヒエヒエの能力であれば、鍵穴に

水を入れて凍らせて作ったりとか。元々あの人は海を凍らせることが出来るし、可能だろう。

「民間人や海兵でなければ良いのか……それじゃあ、ペコムズのスツパーであるおれが持つておくか」

そう言つて、ペドロが海楼石の手錠とその鍵を懐にしまった。

非能力者の方が能力者より使い勝手が良いだろうな。

どの道放つておいても、能力者が戦闘中に海楼石の手錠を掛けられたら、敵なり味方なりに腕を切り落としてもらつてでも外すだろ。死ぬよりマシだ。オレなら敵の攻撃を利用して切り落とす。後で縫い合わせてもらうなり、義手を作ればいい。

「暴走つて言つてもよオ、ペコムズの能力つてそんな危険か？ カメだぜ？ 攻撃に使つてるの見た事ねエよな？」

「防御の時は使っているが、普通に手で殴っているな」

「だが、甲羅の硬さはダイヤモンド並だ！ ガオ！」

ゼポとペドロの言葉に、ペコムズが答える。

ふむ……

「ダイヤモンドの硬さの甲羅に入ったペコムズを人間砲弾として射出し、【エレクトロ】を使いながら敵に向かって突撃するというのはどうだ？ 名付けて、【カタパルト・タートル】」

「その手があつたか」

ペドロとゼポが手を打つ。

「ガオ!？」

「たつはっ……!! っ!! ……!! 射出機カタパルトならドンと任せておけ!! ……!! ……!!」

何なら甲羅の上に誰か乗せて、一緒に突撃も出来るな。

ミンク族には尻尾を回して飛べる奴もいるらしいし、というかペドロが出来るらしいから、帰りはそれで帰つて来れば良い。

「そんなことしたら滅ぼすぞ!! ガオ!!」

なんだか笑いのツボに入っているトムさんに、ペコムズが掴みかかった。

まだ怪我は治つてないから、程々にな？

「ペコムズ……大丈夫だ、問題ない。だから安心してロケットのように飛べ」

「ペドロの兄貴!？」

ノックス探検隊の旅の話の話を聞いたり、ペコムズが人間砲弾として射出されてたまるかと、カメの能力を使った新しい技を編み出すのに付き合ったり、ペドロに新世界の島の永久指針エターナルポースを渡したり、ゼポにパンダウーマン美というパンダマンに似た奴がいたことを教えたり、トムさんの覇気を目覚めさせたりして過ごすこと数日。

トムさんの傷口が塞がり抜糸が済み、療養中に父さんがコーティングしたノックス探検隊の船で魚人島に行くのについて行き、去年中に完成した遊園地の管理人となったデンさんの所に案内した。

兄弟でも、2人は似ていない。デンさんはオオカミウオの人魚で、青白い長髪の上から黒いシルクハット、眼鏡をかけ両耳にピアス、細長い体形をしている。両腕に四葉の刺青、同じ所にトムさんには、太陽のような刺青が入っている。

「たっはっはっ!! 元気だったか、デン? しばらく見ねエ内に楽しげなのがドンと建つとる! お前が造ったのか?」

「ハハハ、うん。手伝ってもらったけどね。兄貴こそ色々あつたみたいだけど、ドンと生きてて何よりだよ! ココロさんからの手紙で司法の島に連れて行かれたって聞いた時は肝を冷やしたけど、ドドンと元気そうだねエ……でもお弟子さんのフランキーって子が……」

「たっはっ、なアに、あいつはしぶとい! 初めて会った時も廃船島のガラクタで大砲造つて遅たぐましく生きとつた! わしが生きてたんだ、あいつもドドドンと大丈夫だ!」

「そのお弟子さんのこと、ドドドドンと信頼してるんだね!」

……この2人は、何度ドンドン言うんだろう。太鼓か?

デンさんも普段からよく口癖で言っているが、2人揃うとより一層凄いな。

「まあ、オレも海に沈むのはともかく、列車に轢かれたくらいで死なないし、旅に出たらそのフランキーを探してみよう。水色の髪の子海パン

野郎だよな？」

「たつはっ、そう、海パン野郎だ！ ドドドドドンと恩に着る！ ……！ ……！」

「海パン野郎がツボに入ったみたいだねエ……それにしても、なんか悪いね？ 遊園地のアトラクションの構造を教えてくださいたりした上、人探しまで……」

「遊園地の件はこっちから頼んだことだし、海パン野郎探しもついでだから、気にすることはない」

「でも、旅の仲間の船大工のお誘いも断っちゃったし……そうだ！ まだ船なかったよね？ 僕にドドドドドドンと任せてくれないかい？」

「良いのか？ 凄く助かる。ドドドドドドンとデカイ機帆船が良い」

「どんどん『ド』が増えていき、どこまで増えるんだろうとか考えていたら、嬉しい申し出を受けた。

シャボンディでは、そんなバカデカイ船が造れるかと断られていたんだ。

「ああ、ドドドドドドンと任せてよ!!」

「動力の熱機関は当てがある。完成したら地上から持って来て、オレも船造りをやるよ。その方が愛着も湧く」

「この遊園地を完成させた後に、Dr. ベガパンクの故郷の冬島、未来国バルジモアを島ごと温める未完成だった土暖房システムを、オレの作った機械を自動操縦オートパイロットにして労働力として貸し、完成させた代わりに、船の動力を作ってもらえることになった。そっちに体力を吸われ過ぎて、干乾びひからてミイラになるところだったが。寝ながら食事が出るようになって良かった。

ようやく船が手に入るのか。最悪別の島の造船所まで飛んで行き、作ってもらおうかとも考えていたので、渡りに船だ。

“伝説の人魚姫”

「なんで地上にいるんだ……?」

ついさつきまで、アインと科学班の研究室にいた帰り。レッドポート赤い港の方に移動している、覚えのある気配を捉えて飛行している。

すると、大きな魚に引つ張られている竜宮城と書かれた船に、オトヒメ様と、天竜人の防護服を身に着け、包帯を巻き、鼻を垂らした、顔がムカつく男が見えた。

とりあえず「ライズ・ファルコン」から飛び降り、シャボン突き抜け甲板に降りる。

「何だえ！ この小汚い少年は！ わちきの上を飛んで無礼だえ！

……何故空を飛べたんだえっ!」

「この子はむしろ身綺麗だと思えますが……」

5年前にマリージョアで見た顔だな。魚人を大勢飼い潰していた天竜人。

「ふははっ久し振り、オトヒメ様（……船にはあなたとこいつの2人だけ。周りに他に人はいないし、消すか?）」

ゴーストを外しながら、オトヒメ様に挨拶する。数週間振りだな。

「ああ、この子は私の友達なのです！ ねえ、ロゼ?（『消すか?』じやありません！ 何を考えているのですか!）」

オトヒメ様と互いに心の声を読み合う。内緒話はこの手に限る。

消すと言っても、記憶だけだから。記憶が飛ぶまで殴るだけだから。

それにしても、裏表がなかったオトヒメ様が、こんな見事に会話と心の声を使い分けられるようになったのは、間違いなくオレが原因だな。表面上は普段通りの穏やかな笑顔で、心では叱責される。

「ええ、そうなのです（軽い冗談だ。無理矢理この魚人コレクターに連れて来られたわけではない様子だったから。険悪そうだったら、こんな絶好の状況、聞く前にもうやっている。詳しい事情を教えてくださいませんか?）」

まあ、ティータイムといった様子で席に着いて話をしていたから、そこまで心配はしていなかったが。首輪も付けられていないようだ。だからこそわけがわからん。

「だから何故飛べたんだえ!？」

「反抗期なので重力に逆らっております」

目の前の男を適当にあしらいながら聞いたところ、数週間前、オレがルスカイナでいつものように父さんにズタボロにされる修行をしている間、海底生物にでも襲われたのか、魚人島に傷を負った天竜人が乗った難破船が漂着した。

名はミヨスガルド聖。こいつ以外の船員は、全員死んでいたらしい。悪運が強いな。

この男に奴隷にされていたタイヨウの海賊団の船員達が、こいつを撃ち殺そうとしたのを、子供に人間への怒りを植え付けるなど庇い、銃弾で負傷。

人質にでも取ろうとしたのか、これがオトヒメ様に拳銃を向け、その行動が原因でしらはしが泣き叫ぶと、その声に呼び寄せられたかのように数匹の海王類が現れ、これが乗って来た船が食われ、続いてこれも泡を吹いて気絶。

そしてそれから数週間後の今日、元奴隷のアラデインの治療を終え、『家畜の分際で飼い主に銃を向けた事……必ず後悔させてやる……!』と捨て台詞を吐いて、1人竜宮城の船で帰ろうとしたこの雑草に、オトヒメ様がまだ話があるみたいなので同行すると言い、二人で話しながら浮上し、現在に至ると。

「なんで当たらないえ!」

「狙いは正確ですよ。お上手ですね。しかしこのままだと護身用の銃の弾丸を撃ち尽くしてしまいますよ? ……そうだ。せつかくないで送って差し上げましょうか?(やっぱり記憶を消した方が良くないか?)」

オレを銃弾で仕留めて奴隷にしたいらしい。ハンティングゲーム

だ。ジェルマが発売したゲームでも代わりにやってくれ。

アラディンや元奴隷のタイヨウの海賊団の船員が我慢して、彼らより因縁のないオレが、オトヒメ様の邪魔をするわけにもいかないのだから相手にしてないが、ちよつと鬱陶しい。

そりゃあこの男と一緒に行くなんて言えば、ネプチューン様も自分が代わりに行くのと反対もするだろう。弱い自分が帰って来れなければ、地上の安全を証明出来ないと突っぱねたそうだが。

「この子はとっても強いから、あなたの護衛にもなると思いますよ？（この方も話せばきつとわかってくれますよ。今はパニックになつていただけで、結構順調でした。というか、あなたの方が余程頑固ですよ？）」

順調だったのか。信じられんが、この人だし……多少の歩み寄りでも凄いな。

「強いなんてとんでもない。精々銃弾を掴み取る程度だ（解せん……）」

跳弾がオトヒメ様に当たるかもしれないからと、テツカイヘンリン「鉄塊片鱗」こくわん黒腕〃を使用して手でキャッチしていた、拳銃の弾丸を手放す。

ヒュヒュヒュンツ!!

「ひえっ……!?」

正確には、親指でコインを弾くように弾丸を弾き飛ばし、音が聞こえるよう天竜人の両耳のすぐ横を通過させた。

船に当たらないよう注意して、手の中の全弾がなくなるまで。

「ねっ、無駄でしょう？ もう止めて頂けませんか？（だが、海王類関連は最低限の口止めが必要だろう。というか、オレにも教えない方が良かったんじゃないか？）」

青ざめる天竜人がコクコクと頷くのを見ながら、心でオトヒメ様に聞く。

オトヒメ様は、海王類を呼んだのはしらほしかもしれないと思っ
ているそうだ。

リュウグウ王家の言い伝えによると、数百年に1人、海王類と心を

通じ合わせられる人魚が誕生し、その海王類と話せる人魚の元に、いつかその力を正しく導く者が現れ、世界に大きな変化が訪れるのだとか……王家の伝承なんて重要そうな情報は知りたくなかったな。

王家の言い伝えの内容はともかく、しらほしがその海王類と話せる人魚だとして、世界政府誕生から800年、過去他にもいた可能性は充分。政府は海王類と話せる人魚の存在を知っているかもしれない。差別意識が今なお残っており、魚人と人魚を魚類と分類していたにも関わらず、リュウグウ王国を世界政府加盟国にした200年前が怪しい。

この前のトムさんの持っていた古代兵器の設計図の例もあるし、しらほしの力を理由に魚人島の移住を認めず、このまま海底に隔離しようとするならまだいい方。しらほしを拉致し力の行使を強要、または危険分子として殺害……オレの考え過ぎかもしれないが、用心して知られないようにした方が良さそうな情報だ。

「友人同士がいがみ合うのは悲しいです（海王類のことは、あまりの光景に夢の出来事だと思っっているみたい。あと、私はあなたみたいに、心の声で伝える情報を選ぶ、なんてことは出来ません。言葉と思考を分けるので精一杯。それに、あなたは悪用する気なんてないし、このことを知ってもあの子への態度を変えたりしないでしょう?）」

「すまん。オトヒメ様を悲しませるのは、あなたも心苦しいでしょう? ここで手打ちとしませんか?（それは買い被り過ぎだ。悪用なんてしないが、力を暴走させないためにも、今まで以上に絶対に泣かさないう態度は変える。魚人島のシャボンが割れかねん）」

「あ、ああ……」

引きつった顔のミヨスガルド聖に手を差し出し、握手する。

まさか応じられるとは……ここまで順調だったのか。『下々民と握手しもじんをするくらいだったら、手首を切り落とした方がまだマシだえー!』くらい言われ、手を振り払われるかと思っていた。

「ああ、良かった!（そういうことではなく……まあ、やっぱり問題ありませんね）」

オレも同行することになり、席に着いて話に加わる。といっても、ほとんど2人で話していて、たまに意見を聞かれるだけだが。凄い……天竜人と会話になっている。天竜人^{こいつら}って、コミュニケーションが可能な生き物だったんだ……話にならないと思っていたけど。

オレが入れる所まで送った。というか、オレに四六時中護衛されては、地上の安全を証明することにならないと、他ならぬオトヒメ様に同行を拒否られた。

この人、オレとミヨスガルド聖の仲裁をしたかっただけらしい。オレの事を頑固とか言えないだろ。

仕方がないので、後はマリージョアにも行けるステューシーに影ながら見てもらい、1週間が経過した。

「命を救ってくれた人達と、愚かな私を諭してくれたオトヒメ王妃への恩を返すため、そして過去の愚行の償いとしても、全力でリュウグウ王国の助力をさせて欲しい!!」

「オトヒメ様……洗脳でもしましたか？ それとも改造？」

オトヒメ様が魚人島に帰ると聞いたので見送りに来ると、そこには顔つきから何まで別人になったミヨスガルド聖がいた。

本心からそう思っているようで、『魚人族と人間との交友の為提出された署名の意見に私も賛同する』と一筆^{いっぴつ}した紙まで用意している。

更に自分で父親を説き伏せ、奴隷にしていた人達に土下座し、帰りたい者には一生遊んで暮らせる額を渡して故郷に送り、もう身寄りがない者は年収みたいな月給で使用人として雇ったらしい。

誰だこいつ……？ 1週間前に、『わちきの奴隷にするえ』とオレに言ってきた奴と同一人物とはとても思えない。

非常に良い変化なのだが、あまりの心変わり具合に、正直オレは引いている。オトヒメ様の影響力が恐ろしい。

「何をバカなことを言ってるんです……真剣にお話しただけです

よ」

実はビンタで叩いた人を洗脳する悪魔の实の能力者でした、と言われた方がまだわかる。

真剣に会話しただけでここまで180度意見が変わるなんて、今まで一体何を考えて生きてきたんだ……？ 感情が戻ったイチジ達みたいな変わりようだ。1週間前までのミヨスガルド聖は、もう死んだも同然だろう。新しく生まれ変わった。

ハッピーバースデー、ディア、ネオミヨスガルド聖。

「ロゼ、先日は済まなかった！ 許されることではないと思うが、謝罪させて欲しい！」

「え？ いやいや。オレに関しては、あんなの日常茶飯事だから構わない。売り飛ばすとか、奴隷にするとか、ブツ殺すとか、挨拶みたいなものだろう。『バイバイ』みたいな」

そんなのいちいち気にしていたら、世の中生きていけない。

オレの今までの人生で、出会いの言葉である『初めまして』よりよく言われてきた別れの言葉だ。

「銃で撃たれたことが抜けていますよ？（『この世からバイバイ』と『奴隷の売買』をかけているのかしら？ なんでこの子は唐突にボケてるんでしょう……？ 実体験から出た言葉だから、黒くて笑えませんか）」

「それこそ日常過ぎてどうでもいい。あなたのビンタよりよく食らう」

「私のビンタはいつも避けて、当たったことなんてないじゃない」

あなたのビンタは避けないと怪我人が出るから。ビンタしたオトヒメ様本人という。

それに慣れていなければ、銃弾を掴めるようになっていないだろうな。手を使わず、口だけでも止められる。サッカーボールよりも頻繁に、オレの方へ飛んで来る。もはや銃弾は友達と言ってもいいくらいだ。

「……!? 地上は、そんな無法地帯と化していたのか……！ そうとは知らずに、私は今まで何不自由ない暮らしをのうのうとツ！」

ネオミヨスガルド聖が突然男泣きし出した。

まあ実際、オレが住んでいるのは無法地帯だが……。

「確かに全然平和ではありませんが、この子の日常は地上でも特別物騒な部類でしょうから、そこまで気にすることは無いと思いますよ……？」

「全くもってその通りだ、ネオミヨスガルド聖。そもそもオレだって、特に不自由な生活をしているわけでもなし……むしろ悠々自適に暮らしている」

「(ネオって何……?)」

言うてはなんなので言わないが、この人が地上のことを知っていたことが知ってしまいが、オレの生活に何の変化もないだろう。

だが、オレの生活は変わらなくても、このことが世界に与える影響は大きい。何せ誰も意見出来ない天竜人の中に、奴隷を持たない天竜人が誕生したのだから。天竜人なら天竜人に意見出来る。拳骨しようが説教しようが問題なし。

さらに彼を改心させたのがオトヒメ様というのを知れば、もうそれだけでリュウグウ王国に好印象を持つ人もいるんじゃないか？ 銃弾を掴むより余程難しいことをこの人はした。世界政府誕生以来初めての快拳かもしれん。

本人に全然自覚がないみたいだけど。どころかオレの方が頑固だったとか言っていたけど。

そして見送りだけで、オトヒメ様1人で船に乗って帰った。人魚のオトヒメ様しか乗っていないのでコーティングもしていない。

再三に渡り、『地上の安全を証明するためなんだから、ついて来てはダメですよ』と言われたが、もう水中に潜るだけなのだから、地上は関係ないだろうと、バレないよう潜水艦に乗ってついて行き、無事に魚人島に着いたのを見届けてからオレも帰宅した。

☆☆☆☆

「全く、男だけで行くなんて、何を考えてるんだい？」

「別に男がケーキを食べても良いじゃないか」

あと別の店でケーキを食べて、マーメイドカフェじゃケーキは食えないと、ケンカを売っていると思われたら嫌だし。そんなことはなかったみたいだけど。

前にタイヨウの海賊団のメンツやウイリーにデンさん、ヒョウゾウとケーキバイキングに行った時の話をしたら、何故誘わなかったのかと怒られ、シャーリー、メイプルのマーメイドコンビにトリスタンと、4人で同じ店に行った帰り、ギョソルコルド広場を通っている最中、いつものように陸ではオレが腕に抱えているシャーリーに膨れられた。

飲食店の店長とキッチン担当に配慮した結果なんだけど……それに海賊と友好的に行動している時のオレは、万が一の場合血を吐くぞ。ジンベエ達は大丈夫だったみたいだけど、去年に魚人島で九蛇海賊団の何人かの服の買い物に付き合った時は吐いた。大丈夫か？手を差し伸べられさらに吐いた。

女性の服の買い物に同行して血を出すなら、そこはせめて鼻血だろうに……ハンコック達とは行っても平気だったのにな。服の買い物というよりファッションショーみたいになったけど。

ただケーキを食べに行くだけでも、何故かどこまで血を吐かずに済むかのチキンレースみたいになる。

「その拗ねた顔も甘えられているみたいで良いけど、いつもの凜としたシャーリーに戻ってもらうために、オレに出来ることはないか？」
「え？……ちよ、ちよつと考えさせて！今は何もしてないから、何か思い付いたら、それを聞いてくれるってことでいいかい？」

「いいぞ。いつでもどうぞ」
「フ、フフ、フフフ……♪（何にしようかね？ 未来を占って、最適のタイミングで使おう）」

まだ何もしていないのにもう機嫌が直ったようだ。
元々シャーリーの頼みを断ることなんてないだろうし、良かった良

かった。

「(何故かロゼが将来の墓穴をドリルで掘ったような気がしますね、そっとしておきましょう) それにしても、凄い人の数ですね」

「私達はもう何年も前に署名を出したから、あれに並ばずに済んで良かったでゲソ」

署名箱に地上への移住の署名を入れに殺到している人達を見ながら、トリスタンとメイプルが言う。オトヒメ様が魚人島に帰って来てから、この広場には署名を手にした人々が集まっているそうだ。

オトヒメ様がフカボシ達にしらほしの力について教えている間に、話し相手になっていたしらほしが、最近オトヒメ様が嬉しそうだと、言った本人も嬉しそうに話していた。

「うわああああ!!」

「なんだ?」

突然上がった悲鳴の方を見ると、署名箱が燃えていた。

「署名箱が突然燃えたぞオ!!」

「火を消せエ!!」

「早く火を消して!! 署名が!!」

ネプチューン軍の兵士やオトヒメ様が、署名箱に樽で水を掛けたり、署名を取り出し火から遠ざけようとしている。

署名は燃えてもまた書けばいいが、魚人島の住民が人間との友好に、オトヒメ様に賛同する人が大勢増えている中での、その流れに異を唱えるかのようなこの出来事。もしかすると……気配を探り、目的の人物を捉え、心の声を聞く。

「すまん。急ぎの用が出来た。オレは行く」

全身を機械化させ頭部を分離し、首から上だけでオトヒメ様の方に飛んで行った。

「え? 体を忘れていつてますよ!! いくら急ぎだからって……」

「首から上だけで充分な急用なんじゃないか? 実際頭さえあれば、会話、思考、戦闘……ロゼは大抵のことが出来るじゃないか」

「フフフ……♪」

そしてオトヒメ様のすぐそばに着いたところで、
パン!!

銃声が響き、飛んで来た銃弾を歯で噛んで食い止めた。

「え、な、生首……!?」

「(どこまでも邪魔を……!　だが、お前だけでも)」

オレの頭部だけの姿を見て、オトヒメ様が気絶してしまった。

すまん、急いでいたんだ。下手人を霸王色で気絶させるという手もあつたが、ブタ箱にブチ込みたかつたので頭を使った。

「お、おい……お前さん何をしておるんじや……?」

「オトヒメ様が狙撃された」

噛んでいた銃弾を、近くに来たジンベエに見せながら言う。

「何じやと!?　オトヒメ王妃が狙撃されておる!!　当たり前こそしなかつたが、皆、王族をお守りしろ!!」

ジンベエの言葉に兵士達が署名箱の消火から、王族の警護へとシフトする。

しらはしの周りでフカボシ達が騒いでいるが、あつちでも何かあつたのか?　心の声を聞いてみると……うん、後でオレも加わりたい。

とりあえず地面を機械に変え、拳を1つ飛ばし、仮のボディを作り合体する。

「人間がア!!　我が国の……!!　王妃を狙撃したア!!」

「ち、違う!　おれじゃねエ!　おれはやつてねエ!」

ネプチューン軍の兵達やジンベエ達タイヨウの海賊団が王族の周囲で警護する中、オトヒメ様を撃った張本人、ホーデイ・ジョーンズが、人間の海賊を指差し、大声で宣告した。どの口が言うか。

ここから先あいつがどう動くかは、心の声を聞いてわかっている。

オレにとつて良い状況ではないが、あの時霸王色で気絶させていたらいいつを檻にブチ込めない。今気絶させるとオレへの疑いが濃くなる。王族側からオレが疑われることはないだろうが、問題は国民がどう思うかだな……。

「それだけじゃねエ!　おれがオトヒメ王妃を狙撃した人間を撃つたら、機械の拳に邪魔をされた!　今も邪魔をされている!　この人間

は、そのオトヒメ王妃の近くにいる、機械の能力者の人間とグルだったんだ！ そいつは、おれ達を騙して、この国を乗っ取ろうとしていたんだよオ!!」

今度はオレを指差して言う。

その言葉通り、オレはさつき飛ばした拳である逆賊の拳銃を取り上げ、素手で殺そうとするのを邪魔している。

これで海賊を守ったオレは、今は能力で機械化しているおかげで問題ないが、解いて生身に戻った後で吐血確定だ。だが、たとえば金で雇われ、署名箱に火を点けた海賊のクズでも、殺すわけにはいかん。

せめてホーデイ・ジョーンズの顔を見れば証人になるんだが、忌々しいことに、顔を隠して人間のフリをして雇っていた。最初から、オトヒメ王妃を殺し、その罪をオレに被せ、ここから排斥しようという策だったようだから当然か。それに、今の状況では人間同士口裏を合わせていると思われるかもしれんし、海賊を頼りたくない。

ホーデイ・ジョーンズと、ついでに海賊を捕らえ、かつ魚人島の住民達の信用を取り戻す……キツイな。あいつの言っていることには色々突っ込みどころはあるが、今の状況と、人間への不信感を煽るやり方がこの国ではマズイ。

今オレが何を言っても、とても信じられないだろう。周りに任せ、自分は何も出来ないというのは、無力だな……。

「そういえばさつき、オトヒメ様の近くで、歯を見せてニヤツて笑っていたぞ！ まるで計画通りって風に！」

「そんなっ！ 今までおれ達を、オトヒメ様を騙していたなんて……！」

「ヒドイッ!!」

……本当にキツイな。さつきジンベエに銃弾を見せた時のを笑顔と捉えられたか。ただ壁になるだけでも良かったが、銃弾を確保した方が危険を伝えられると判断したのが裏目に出た。

「何をバカなことを言うておる！ こいつはオトヒメ王妃を狙う弾丸

を噛み止め、わしに見せただけじゃわい！」

「それこそバカな！ そんなことが出来ると本気で思いか、ジンベエ親分！ 最初から銃弾を隠し持ち騙そうとしていたと考えた方が自然！ それに、おれは知っているんですよ!? その人間は、フィツシャー・タイガーの死に際にいたと!! そいつこそが、フィツシャー・タイガーへの供血を拒み、殺した人間だ!! 今まで王妃の側にいた間も、我々のことを心の底では見下し、嘲笑っていたんだよオ!!」

その瞬間、周囲からのオレへの疑念が敵意と殺意に変わった。

これは完全に分が悪いな……判断を誤ったかもしれない。もう、これから何年もかけて信用を取り戻すしか

「タイのアニキとロゼのことを何も知らんで、勝手なことをほざくなアツ!! あの2人は」

「ジンベエツ!! 何を言うつもりだ!! タイガーさんが伝えるなど言っただのを忘れたかアツ!!」

口出しするつもりはなかった。だが、気付けば叫んでしまっていた。

「もしタイのアニキがこの場におつたら、今のホーデイの言葉をそのまま聞き流すはずがなろうがア！」

「現にタイガーさんがこの場にいない以上、おまえの言葉は憶測に過ぎない！ 海賊が船長の最後の頼みを無碍にするつもりか！」

「海賊嫌いの賞金稼ぎバウンティハンターが海賊を語るでないわ！ ここでわしが黙ってお前への疑念を解かねば、タイのアニキの仁義を通せんじやろうがア！」

「そんなものはオレがこれからの行動でどうにかすればいいだけのことだ！ 余計な真似をするなアツ、海賊嫌いの七武海!!」

もう後には引けない。

オレもジンベエも一切自分の主張を譲る気はなく……

ドンツ!!!

互いの拳がぶつかった。

☆☆☆☆

「初めて会った時に、いつかぶつかるやもしれんとは思ってたが、こんな形でぶつかるとは思わなんだわ！ この聞かん坊がアツ!!」

「ごちらこそ！ 普通^ノ海賊であるなら戦つても不思議ではないが、政府公認の海賊、王下七武海になってからぶつかるなどと思つてはいなかった!! この仁義魚人ツ!!」

「海侠のジンベエ」と「機甲のロゼ」。どちらも海賊嫌いとして魚人島で知られている両者の拳が激しくぶつかり合う。

すでに半径50メートルの範囲には人がおらず、ネプチューン軍も、魚人島の住民も、遠巻きに両者の戦闘を眺めている。

「【五千枚瓦正拳】 ツ!!」

「【スクラップ・フィスト】 オツ!!」

ドゴオン!!!

両者本気の一撃による衝突で、周囲に衝撃波すら発生させながら、戦闘を続け、ヒートアップしていく「海侠」と「機甲」。

そんな両者を眺め

「凄い戦いだ……両者一步も譲らない」

「ああ。そして、わかったことがあるな」

「あなたも？ 私もそうなのよ」

「おそらく皆考えていることは同じだろう」

「そうね……」

「……」
「……」
「……」

白熱する海賊嫌いかつ魚人初の七武海と、血反吐が出るほど海賊嫌いな機械の賞金稼ぎバウンティハンターの戦いとは裏腹に、オーデイエンスはクールダウンし、ロゼに対する疑いは消えていた。つまり、2人が戦う理由はすでに消滅している。

「だよなあ……タイガーさんの頼みを無碍にするのかつて、あのジンベエ親分と戦うような子が、タイガーさんへの供血を拒んだり、オトヒメ様を手伝うふりして嘲笑うなんてしないよな……」

「そもそもあの子が全部仕組んでいたなら、首だけで飛んでた意味がわからない……本当にギリギリ歯で噛み止めたんじゃない？ 良く考えればあの子全然普通じゃないから、そのくらい出来ても不思議じゃないわ」

「第一、どうやったらオトヒメ様が死んだり、オトヒメ様を庇ったりして、この国を乗っ取れるんだよ……？ でも、それなのに疑ったのは、あの子が人間だから、なんだろうな」

「今まで海賊から助けてもらったり、地上のことを教えてもらったり、オトヒメ様と仲良い姿を何度も見たりしていたのに、ほとんど人間だからってだけで、疑ったよな……」

一時はロゼという人間への怒りに囚われていた人々が、ジンベエとロゼの本気喧嘩を見て冷静になり、もう疑念は完全に晴れていた。

そうとは知らず、タイガーへの思いは同じでも、互いに譲らず、今も本気で戦っている2人は、少し滑稽かもしれないが、近付こうとすると両者から睨み殺さんばかりの鋭い眼光を向けられるので、誰も止めに入れないのが現状である。

「(何故だ何故だ何故だ!? 途中までは予定以上に上手くいった!」

あの下等種族の人間とジンベエがぶつかった時は、これであいつも終わりだと確信した!・それが何故!? これではむしろ以前よりも……ツ!!)」

魚人島の住民達から少し離れた場所。

目論見が破綻し、魚人島と人間の友好を台無しにするどころか、一歩進めてしまったような状況に、1人絶望に打ちひしがれている道化^{ピエロ}は、今日の騒ぎの発端、オトヒメ王妃暗殺の首謀者、ホーデイ・ジョーンズである。

その体は手錠を付けられ、鎖で縛られていた。ホーデイがオトヒメを撃つたと言って殺そうとした、自分が雇った人間の海賊と一緒に。「以前より、おぬしは監視していたんじゃないか。わしの目が黒い内は、おぬしの好きにはさせんじやもん!! (あ、危なかった!!) まさかオトヒメを暗殺しようとするとは……たまたまロゼがおらず、オトヒメを亡くしていたら、わしはどうかなくなっていたかもしれんじやも

ん……)」

ホーデイのことを見張らせていたネプチューンは、人間の海賊を雇って署名箱に火を点けようとするこまでは知っていたが、オトヒメ暗殺とそれに派生したロゼへ罪を被せることは、まったくの予想外だった。

ネプチューン軍ではホーデイとロゼの険悪な関係は周知の事実であつたので、ロゼがホーデイの言った通りの行動を取つたと思つた者は一人としていなかったが、他の事案も重なり、更には自分達が庇う前に、ジンベエとロゼが何故か戦闘体勢に入つてしまつたので、その間に先にホーデイの身柄を確保することにしたのである。

そして今日、他に捕まつたのが……

「バ、バホ……」

魚人島の皆が、倒れたオトヒメ王妃とそれに関わる一連の騒ぎの方に気を取られている間に、しらほしを追い掛け回していたこの男は、フライング海賊団船長、バンダー・デツケン九世。ハットを被り、オーバーオールを履いた4本足の魚人だが、傷だらけで転がつている。

「しらほしを泣かせた不屈き者ツ！ 私達兄弟がいる限り、しらほしには指一本触れさせん！」

「うわーん!! 怖かつたです、お兄様あ!!」

「アツカマンーボ♪ アツカマンーボ♪ 見ろっしらほし！ ダンスは♪ たーのしっいな♪ ウー♪」

「たーのしっいな♪ たのしいな♪ 何でもないぞ♪ 歌おうしらほし♪ おれ達が♪3人♪ いつでもついてラシド♪」

泣いている妹の周りに、優しい3人の兄が集まつていた。

数週間前、ミヨスガルド聖が魚人島に漂着した時、デツケン九世は物見遊山でたまたま見に行き、しらほしの泣き声に呼ばれたように、海王類が集まつて来た光景を目撃。そして、しらほしが彼の一族に伝わる、初代バンダー・デツケンが探し求めた海王類をも従わせる信じがたい才能を持つ人魚姫だと確信し、自分の妻にして手に入れると決意した。

デツケン九世はネコザメの魚人にして悪魔の実、マトマトの実の能

力者。

手で触れた相手を^{マト}的と定め、あらゆる投擲物を自動追尾で標的に飛ばすことが出来る。標的に出来る数は手の平の2か所。この能力でしらほしに触れ、求婚^{プロポーズ}をする恋文を能力で投げ渡そうとしていた。

しかししらほしは生まれつきの見聞色の覇気使い。

母が倒れ一度は驚いたが、ロゼの特徴的な髪型の頭が側に浮いているのを見て、じゃあ大丈夫だろうと安心した。体は大きなこの幼女、母親とは違い、実はロゼの生首姿を見慣れており、たまにやっつと頼むくらいだった。

そして落ち着いた心でロゼに習っていた見聞色を発動させたところ、背後から忍び寄る知らないおじさんが自分に触ろうとしていたことに気付き、泣きながら大きな体と大きな尾ひれを精一杯動かし逃走。

まだ6歳幼女のしらほしを妻にしようとして追い掛け回した住所不定無職（海賊）の25歳男性。もう少ししらほしの心が弱ければ、シヨックで海王類をも従わせる才能を暴走させ、今頃魚人島は海王類の群れに蹂躪され、滅んでいたことだろう。許されざる海賊にして変質者だった。

異変に気付いたしらほしの兄達、フカボシ、リュウボシ、マンボシが、遊び半分とはいえ、ロゼに習った戦闘技術と覇気を使い、泣いている妹を追い掛け回しているデッケン九世に、怒りを露わにし勝負を挑む。

マトマトの能力の本領は、相手から視認すらされない場所からの一方的な遠距離攻撃。更に標的に出来る数は2か所。3人いる王子達に囲まれ逃げ場をなくし、接近戦の前に成す術なく敗れた。

話はそこで終わらず、デッケン九世を捕らえた後は、その部下のフライング海賊団の船員達が船長を助けろと襲い掛かり、ネプチューン軍は王族を守るため、フライング海賊団と戦っていた。それが、ロゼを庇えなかった理由である。今ではフライング海賊団は一網打尽にされ、無力化済み。

「どうしてあなた達が戦っているのですか!？」

魚人島の誰もが思っていたことを、ようやく目を覚ましたオトヒメが代弁し、二人の間に割って入ったことで、ようやく敗者も意味もすでない戦いに終止符が打たれ、2人は和解した。

「ガハアツ!!!」

そして、海賊を助けると吐血する、反吐が出るほど海賊嫌いのバウンティハンター賞金稼ぎであるシルバース・ロゼが、能力を解き体を元に戻した後で、血反吐を吐き倒れた。

「おれの血を使ってくれ！ 疑って悪かった！」

「いや、オレの血を使ってくれ、おれもS型だ！」

罪悪感から、血を提供すると住民達が押し寄せて来たが、

「オレの血液型は、SはSでもRH—だから、あんた達の血を貰うと大変なことになる……気持ちだけありがとう……トリスタン、いつものお願い……」

「は〜い♪ もう、ロゼは私がいないとダメなんですから……」

「喜ばないでくれ……」

トリスタンが持ち歩いているロゼの血液パックと輸血器具を使い、手慣れた様子で処置を施す。

たとえば血を吐いたとしても、甲斐甲斐しいリスミンクのナースに輸血され、きれいなアオザメ人魚の占い師に膝枕され、可愛いミナミハナイカの半人魚のパティシエに汗と血を拭いてもらっているロゼに、同情する余地も価値もないかもしれない。

「母上を守ってくれてありがとう」

「気にするな……」

礼を言い近づいて来たフカボシに、膝枕を堪能しているロゼが返す。

「弱っている時に悪いんだが……」

「見聞色で途中まで聞いていたから察しが付く……あの能力者のことだろう……?」

「ああ、手で触れたものを的に、投げれば絶対に当たるといふ能力だったんだが……」

「皆まで言うな……つまり、二度と能力を使えないよう、両手を切り落

としてくれと言うんだろう？ 任された……」

「いや、海楼石の手錠を貫えないかと思っただが……」

「なんだ……その程度で済ませるのか。お前は優しいな……」

そう言っつて、コートから取り出した海楼石の手錠を、フカボシに手渡した。

デッケン九世本人は知らぬことだが、ロゼが吐血したことで、彼は両手を失わずに済んだ。

吐血で倒れていなければ、ロゼは海賊の悪魔の実の能力を封じるために、そのくらいはする男だった。

中々の人数の大捕り物の後、ロゼは竜宮城に呼ばれ、ネプチューンからオトヒメの命を助けた礼として、魚人島に代々伝わる伝説の宝箱である玉手箱、その中身の薬を10粒程賜与された。1粒飲めば2倍の力を得るが、代償として寿命を縮めてしまい、摂取し過ぎると老人になってしまうこともあるらしい。

ロゼ本人は、玉手箱の中身が本来より少し数が減っていたとネプチューンが溢したことを気にして、薬自体にはさして興味を持っていない様子だった。強くなりたいなら鍛えればいいと思っっているようだ。

それでも礼という事でありがたく頂戴し、トリスタンに渡して研究してもらったことにした。

“耐え忍ぶ戦い”

『リュウグウ王国の国宝の薬ねえ……私もちよつと興味あるかも。今度、船が完成して会いに行った時に、見せてもらっても良いかしら?』
「勿論良いぞ。ポイズンピンクであるお前の専門は毒。毒と薬は紙一重だからな。ドーピング以外にも、薬に利用出来る成分とか含まれているかもしれない」

有用な薬でも作れたら、竜宮城に持って行こう。

レイジュと家の電伝虫で通話している。内容はリュウグウ王国で起こった事について。

リュウグウ王国で起こった、オトヒメ様暗殺未遂事件としらほし強制わいせつ未遂事件は無事解決。ジンベエとの和解も兼ねてはっちゃんが作ってくれたタコ焼きを皆で食べた後、帰宅した次の日だ。海王類が集まって来た日にいた人も何人かいたみたいで、生きた心地がしなかったと聞いた。

『毒にしても薬にしても、ジェルマの発達してる科学って、基本的に戦闘関係なのよね。発売してる携帯ゲームも、元々は戦闘シミュレーションだし……』

「たとえば元は戦闘のために生み出された物でも、それをどう使うかは人次第。人の健全な娯楽のために役に立ったなら良いじゃないか」

『そうね……私達の代で平和な科学技術が発達した国に変えてみせるわ。あなたと一緒に♡』

「手伝えることなら手伝おう」

機械の能力者であるオレと科学者になるレイジュ。

客観的に見ても、パートナーとしての相性が良いよな。Dr. ベガパンクとの関係みたくに。旅に出ても、彼が考えた設計図が送られて来て、それを完成させ送り返すことになっている。

2人共、存分にオレの能力を活かしてくれ。なんかDr. ベガパンクの方は、部下が暴走して今までの研究所が封鎖されたらしいけど。

『じゃ、じゃあ……私達のさらに次の世代のために、ちよつと一緒の布団に』

「オレ、自分の子を危険な海の船旅に、本人の意志を無視して連れて行く気がないし、陸に置いて旅に出て育児放棄するのも嫌だから、自分の夢を叶えるまで子供は作らない」

第一、2年前にお別れのキスをしてと言われた時のこと。レイジュがお姫様という事で手の甲に口づけをしたら、それだけで顔を真っ赤にして腰を抜かしていたじゃないか。

電伝虫の通話では慣れたのか、目がハートになる回数が少し落ち着いたらけど、再会した時どんな反応をするだろう……？

蝶よ花よと育てられた、というわけでは本人にとつて残念なことに違うが、世間と離れて育った箱入り娘と言えなくもないし、本当にちゃんと意味をわかって言っているんだらうか？

『冗談よ冗談。まだ早いものね。何もしないから。一緒に寝るだけだから。う、腕枕とか……♡』

「だったら良い。抱き枕でも何でも好きにどうぞ」

『ええ♡ それで、騒動の後始末はどうなったの？』

「全員竜宮城に」招待。ただし檻の中だけだな」

以前に投獄された中で、心を改めたって奴が釈放されてなかったら、足りなかったんじゃないか？

オレは参加出来なかったけど、バンダー・デッケン九世はしらほしの力が目当てだったらしい。しらほしを妻にするという心の声を聞いた時は、ああこいつロリコンなのか……と思った。

ロリコンではなかったようだが、ロリコンよりも危険。周りにしらほしのことをバラされないよう、九世は1人隔離されている。あそこの王族に愛されまくっている末っ子しらほしを傷付けた罪は重い。あいつはもう檻から出て来れないかもな。

『魚人街って人間嫌いの魚人達が多いんでしょ？ その内溢れちゃうんじゃない？』

「今回オトヒメ様が狙われたことで、ネプチューン様も目の届かない所で今までのように放置しておくのは危険だと決断してな。魚人街を魚人島に浮上させ繋げた」

ノアは海の森に置いて来たけど。

『自分の言うことを聞く人で固めるって、ちょっと前までのジエルマ、お父様みたいね……』

「そうかもな。言葉そのままの意味で1人で生きていける人間なんてそういない。1人で賞金首を捕らえお金を得ているオレも、店で食料を、薬を、服を、本を買っている……人の社会と繋がっている。人類が進化したのは狩猟だけでなく農耕を始め、安定した食料確保が可能になり、人口が増え社会を形成したからだ。つまり何が言いたいかと言うと、海賊はさっさと引退して畑を耕せ！」

まあ土地がないのかもしれないが。

赤い土の大陸レッドラインが残念過ぎる。

『教育を受けたことがないとは思えないわ……それにしても、結局最後はそこに着地するのね』

学校に行かずとも、本屋に本は売っているからな。たまに不愉快な本があったりするが。魚人は魚類と書かれているとか。

「褒め言葉と受け取っておく。オレは暇さえあればそんなことを考えているので、結論がこうなるのは仕方ない。とりあえず、大海賊時代を終わらせる方法は、今の所3つ思い付いた」

『聞かせて、あなた』

「まず1つ、海賊全員捕まえる」

『無理ね』

「ああ無理だ。きりがない」

それが出来たら誰も苦労しない。

海軍が働いても追いつかないほど増えているのが、今の大海賊時代だ。

「2つ目、ワンピースを破壊する。公開処刑する」

『まだマシだけど、それはワンピース目当ての海賊にしか効果ないわね。そもそもどこにあつて、壊せる物なの？』

「さあ？ 聞いてないし。だがワンピース目当ての海賊には効くから、無駄というわけではない。壊せなかつたら、海軍に渡すなりすればいい」

父さんに、壊したいから場所を教えてください、なんて言えるはずがな

い。

『それで、3つ目は?』

「誰かが海賊王になって、そいつが政府や海軍と手を組み、他の海賊を取り締まる。罪なき人が虐げられるのが嫌いで、ただ冒険したいだけの奴が好ましい。冒険のついでに海賊を狩ってもらおう。言うなれば海賊王の王下七武海加入、1人増えて王下八武海だな」

そういえば最近メンバーが1人変わった。

『……そんな人が海賊になるの? もうロゼがやった方が早くない?』

「なれるかどうかはさておき願ひ下げ。いや、そもそも海賊王どころか、海賊になるくらいなら死んだ方がマシというか、たぶんオレの場合は本当に死ぬ。アイドルをやっている海賊がいるくらいだし、どこかにいないものか……そんなオレにとって利用価値がある都合の良い頑丈な海賊は」

『海賊に対してナチュラルに悪魔……そうだ。私には常々不満があるわ。あなたの周りに女が多過ぎるといふ。そのアイドル海賊を含めて。やっぱり男の人ってハーレム願望があるの? イチジ達が男の夢だつて言つてた。あと気が強くて胸がデカイ女は最高だとも』

急に話が変わった。

あいつらとそんな雑談をする仲になったのか。良かったな。

だがあいつらの女性の好みなんて非常にどうでもいい……。

「ハーレム願望のない男なんて、同性愛者か玉無しなんじゃないか?

私は妻一筋だ、口ではそんなことを言つても、ハンコックにあつさり魅了され、財布を差し出す……そんな男がこの世には溢れているらしいぞ?」

『そんな話は聞きたくなかった……』

まあ仕方がない。愛情と欲情は別物だから。

「それにしても、そんなに多いか? 男の方が多いけど……海兵は男だらけだし」

『男友達が多いからと言って、女が少ない、ということにはならないわ』

「生きていたら人と関わる。人間付き合いというものは、誰かに頼まれて行うものではなく、自然と出来るものだと思う」

『そうやって気付いたら女の子が増えてましたってこと？ ロゼは霸王色の覚醒者だものね。ハーレムだって簡単に作っちゃうのね……』
拗ねられた……。

「霸王色の覚醒者は確かに少ないが、そんな良いものじゃない」
『どうして？ 人の上に立つ王の資質なんでしょ？ ロゼに覇気を目覚めさせて貰ったって言ったたら、お父様が教えてくれたわよ？』

以前オレがジャツジに風穴を開けた日、戦闘になるまでの時間に、レイジュの覇気を目覚めさせていた。まあ保険だ。万が一オレが負けていた時に、一人で好きに生きるための力として。

「そう呼ばれることもあるが、そもそも霸王だ。オレを含む知っている霸王色の覚醒者の数は少ないし確信はないが、逆らう者を、歯向かう者を、敵対者を力づくでも捻じ伏せ、叩き潰し、殲滅する。そんな苛烈さを秘めた者に備わり、ただの優しくて良い奴には備わらないとオレは思っている」

オトヒメ様に人の上に立つ資質がないとオレは思わない。だが彼女には苛烈さが一切ない。ネプチューン様もそれほど苛烈じゃない。

オレの会ったことのある霸王色の覚醒者は、全員敵に容赦する性格をしていない。オレ自身も含めて。霸王色の覚醒者がいないなら、それで世界は少し平和になるかもしれない。

初めて霸王色が使えるようになった時も、ノジコを人質に取られてキレた時だし。全員ブツ潰そうとした時だ。

ノジコ達、元気にやっているかな？

「まあ霸王色は置いといて、もうすぐ一緒に旅するから、好きだけ埋め合わせをさせてくれ。これからもよろしく」

「♡ ええ！ ダーリン♡」

レイジュの反応に、彼女の将来が少し心配になった。

☆☆☆☆

東の海、コノミ諸島

平和だったこの島だが、つい先日、ある海賊の支配下となった。王下七武海、タイヨウの海賊団、アーロン一味によって。

大人1人10万ベリー、子供1人5万ベリー。この毎月の奉貢ほうぐを払えなければ、アーロン一味に連れて行かれ強制労働を強いられる。

幸いにして全員払うことが出来、誰も連れて行かれずに済む……はずだった。しかし、ココヤシ村の外れにある、元海兵の家の子供が書いた海図に目を付け、奉貢を払ったにも関わらず連れて行かれそうになり、その子供の家族を含めた村民達がそれに逆らい、アーロン一味に鎮圧され、連れて行かれた。

相手は政府公認の海賊、王下七武海。海軍の助けは期待出来ない。付けられた傷を治療し、包帯を巻き、武器を取って戦うことを決めた村民達だが、そこに連れられた少女、ナミが帰って来て、アーロン一味の測量士になって海図を書くことを告げる。その肩には、アーロン一味の刺青が入っていた。

酷いことをされ、脅されているのかと強く聞く彼女の母親ベルメールに、ナミが札束を出し、お金のためにやると告げる。涙を堪え、腕を振るわせながら言う様子は、誰が見ても嘘をついていた。

武器を持ってアーロン一味のいる場所に向かおうとするベルメール。その足にしがみ付き、『お願いだから誰もいなくならないで！傷付かないでお母さん！』と泣きながら言うナミに、ベルメールや村民達が、怒りに身を任せ、自棄になった行動を止める。

全員が昨日の戦闘とも言えない一方的な鎮圧で気付いていた。自分達ではまったく相手にならないと。従わなければ生き残れない。

ナミが、アーロンと1億ベリーでココヤシ村を買う約束をしたことを話す。

自分が辛くても我慢して、1人で必ず集めて皆を救うから、だからそれまで耐えてと。

ナミの話を聞き終わり、しばらく村民達が話していると、ナミの姉、もう1人の娘のノジコがいつの間にかいなくなっていることに、ベル

メールが気付いた。

急いで探し始める村民達。

一緒に探していたベルメールとナミの前に、ノジコが帰って来た。肩から血を流し、アーロン一味の刺青をして。

ナミを一人で戦わせないと、アーロン一味のアジトに1人で行き、アーロン達の前で、自分の肩を自らナイフで刻み彫った。

元海兵のベルメールは元より、他の大人達ではナミと一緒に島を出ることを認められずとも、子供の自分なら、舐められると踏んで。

「な、なんで……？ 私が頑張るって言ったじゃない！ 一生消せないんだよ!？」

「こんなの、ただの飾りだよ……ナミを1人でなんて戦わせない。もう見てるだけなんて嫌だから」

「お姉ちゃん……」

「えっ、今お姉ちゃんって」

「何でもない!」

ナミがぷいっと顔をノジコから背ける。

「勝手にそんなことして……絶対あいつの影響でしょ……」

「そうかもね。約束した年になったらロゼが来ちゃうから、それまでに終わらせる！ 1億ベリィは大金だけど、あいつは簡単に集めてたし、私だってやってやる！ もしアーロンが約束を破ったら、私がアーロンを倒す！ 戦うのはその時にして?」

ベルメールに、ノジコが宣言する。

ノジコは、昔会った子供なのに賞金稼ぎバウンティハンターをしていたロゼの影響で、子供という弱い立場を利用し、ロゼの影響で、海賊が約束を守るなどと信じていなかった。

ノジコが海に出るのは、お金を稼ぐためではなく、アーロンを倒せる力を身に着けるためだった。

「はあ……わかった。任せとけ。あんたを鍛えた元海兵の力を見せてあげる」

「ロゼ……？ ロゼって誰……うっ頭が!」

「あつ、しまった……」

ナミが突然の頭痛で頭を抱える。

未だロゼのことを忘れていているナミの前で、ベルメールもノジコもロゼの話題を避けていた。

だが、影響は残っている。ナミが誰かがいなくなることを恐れるのは、幼少期のロゼとの別れが原因だろう。どちらかというといなくなったのは自分達の方だけだ。

そんなことを考えながら、ノジコはナミを守りながら、自分を鍛えながら、賞金稼ぎバウンティハンターの真似事をすることを決意した。

ロゼがココヤシ村に来るまで、あと4年。

☆☆☆☆

グランドドライン
偉大なる航路後半の海、新世界。愛と情熱と妖精の国、ドレスローザ

この国の王、リク王家は隣国の危機にも積極的に援助を惜しまず、そのため国民の生活は貧しかったが、800年間戦争が一度も起きない、奇跡のような平和な国であった……つい先日までは。

突如王宮に舞い降りたドンキホーテ・ドフラミンゴ。世界政府加盟国の天竜人への貢ぎ金、天上金の輸送船を奪い、政府を脅し七武海になった男。元の総合賞金額トータルバウンティ8億1300万ベリーの大海賊団の船長。

ドレスローザは800年前までドンキホーテ一族が支配していたが、ドレスローザを含む20の国の、20人の王が世界の中心に集い、世界政府という巨大な組織を作り上げる。アラバスタのネフェルタリ家以外の、創造主である王達は、それぞれの家族を引き連れ聖地マリージョアに住むことにした。その創造主の末裔こそが今なお世界に君臨する天竜人。

ドフラミンゴは、ドレスローザの旧王家、ドンキホーテ一族の末裔であり、元天竜人。

現国王リク・ドルド3世に、自身こそがドレスローザの正統なる王だと主張し、

『100億ベリーでこの国を売ってやろう。本来こんなチャンスを与える事もなく、奪い取っても良いんだ。リミットは明日の夜明け!! 国外の援助はなし……!! 王としての力が試される。おれの存在は国民には喋るな』

と、驚愕するリク王に告げ去った。

リク王軍の兵士達に命じ、国中から金をかき集めることにしたリク王。

ドフラミンゴと戦うことを主張する者もいたが、これを却下。ドレスローザリク王朝800年。戦争がないことは自分達が獣でない証。殺し合いなど人間のすることではないと。

裕福でないドレスローザ国民から、理由も話せず100億ベリーをかき集める。大きく信頼を失うだろうが、成せねばドレスローザは海賊の国に成り下がる。

映像電伝虫でドレスローザ全土に、ありつたけの金を自分にお貸し頂きたいと土下座するリク王。その姿を見た国民が、心優しいリク王が悪意から金を差し出せと言うはずがない。何か只事でない理由があるに違いないと、金を集める国民達。

これがリク王の人徳……そしてリク王家800年への信頼。きつとこの国は救われる。

リク王軍軍隊長、タンク・レパントはそう思った。

しかし事態は急変する。

ドレスローザ南の町セビオに、馬に騎乗したリク王が現れ、火矢で町に放火し、剣で国民や兵士達を襲い始めた。そしてしばらくして、兵士達も暴れ出す。

ドフラミンゴのイトイトの実の能力で、体の自由を奪われ、操り人形のように操られ、国民を傷付けさせられる。

惨劇が続く、国中が恐怖し、リク王を心底怨みきった時、ドフラミンゴ率いるドンキホーテ海賊団が現れ、リク王とリク王軍を駆逐。

すべてはドフラミンゴの罠だった。いや、たとえリク王がどう行動

していた所で、結果は変わらない。ドフラミンゴからは逃げられない。

国民はリク王を憎み、暴力を称え、ドレスローザは、海賊の国に成り下がった。

そして2日後。

6年以上前に死んだことにして王族ではなくなり、ドレスローザ東の町、カルタの丘にて、花畑の花を売って娘とひっそりと暮らしていた元女王スカーレット。

王宮が燃え、派手なコートにダイヤのマークが入ったジーンズのドンキホーテファミリー最高幹部、ディアマンテを始めとする追手に襲われた所を、見ず知らずの動くおもちやに助けられ逃げ延びたは良いが、もう2日も何も口にしておらず、おなかを空かせた娘、レベツカのために町に食料を買いに行った所、夕立が降る中、銃を構えたディアマンテに見つかった。

「これでリク王の血筋も、残りはレベツカだけだな」

「(ツじゃあ、お父様とヴィオラは……!?)」

パァン!!

鳴り響く銃声。周りの悲鳴。

恐怖で目を瞑っていたスカーレットに、しかしいつまで経っても撃たれた痛みがやってこない。

「おい、お前……なんのつもりだ?」

目を開けたスカーレットの前にいたのは、銃を構えたディアマンテの姿ではなく、

「人を助けるのに、理由はいらないササ!!」

白黒頭の筋骨隆々の背中があった。

「逃げろオーツ!! 早くッ! (何故スカーレットがこの町に!?! そうか……リク王様や町の人々だけでなく、キミの中からも、私は消えたのか……!!)」

ディアマンテと銃弾を武装色で防いだパンダマンの両者が睨み合う中に、ライフルを撃ちながら、他のドンキホーテファミリーの構成

員を撃破しながら、片足のオモチャの兵隊が現れた。

「またお前か……シユガーム。どこのどいつか知らんが、ドジツたな」

このオモチャは元は人間。名はキュロス。

19年前、親友を殺した者を殺め、殺人の罪でコリーダコロシアムの囚人剣闘士となり、100勝で仮釈放となるそのコロシアムで、9年間三千戦全勝の記録を打ち立てた、歴代最強、無敗の剣闘士。

スカーレットの夫で、レベツカの父である。

「もしかして、この前の……どうして……？」

だが、スカーレットも、レベツカも、この世に生きるすべての人から、キュロスは忘れ去られている。それが、キュロスをオモチャにしたホビホビの實の恐ろしい能力。オモチャにした者の記憶が、思い出が、すべての人から消え去る。本来であれば契約を交わし、オモチャが逆らえないように出来る能力なのだが、キュロスは契約で縛られていない。

ディアマンテがファミリーの幹部、ホビホビの實の能力者、シユガーがドジを踏んだと言ったのは、このことである。

2日前、キュロスがドレスローザで何が起こったのかを王宮へ確かめに行く前、スカーレットとレベツカに、赤い花畑で自分を待つよう言っていたが、キュロスを忘れたことで、その言葉も忘れてしまった。スカーレットにとって今のキュロスは、2日前に自分とレベツカを逃がしてくれた、見知らぬ片足のオモチャの兵隊。

「……私は、ドフラミンゴに嵌められたリク王様に大恩ある者！ キミとレベツカを全力で逃がす！」

「お前……何をどこまで知っている……？ だが、今はあっちが先だ！」

「行かせない！ すまん、パンダの御仁！ 力を貸してくれ!!」

「最初からそのつもりササ！」

走るスカーレットを追おうとするディアマンテと、追わせないキュロスとパンダマン。

ディアマンテ対パンダマンとキュロスの戦いが始った。

人間だった頃は無敗のキュロスも、慣れないオモチャと片足の体に思うように戦えない。

パンダマンが関節技や投げ技等のプロレス技を仕掛けるも、ディアマンテは、ヒラヒラの実を食べ、自身と触れたあらゆる物を強度を問わずに旗のようにはためく物質に変えることが出来る旗^{フラッグ}人間。体を変え、ヒラヒラと身を躲し、攻撃を回避する。

ディアマンテの方は、2人相手に攻めあぐねているものの、段々押し始めている。

戦況は、ディアマンテの優勢に傾いてきていた。

「この男、強い……………」

「ウハハハハ!! おれに勝てるでも思ってたかア? 何人いようが関係ねエんだよオ!!」

「なら、おれ達の相手もしてもらおうか……………」
カシャン!

ディアマンテの左腕に手錠がかかる。

「な、力がツ!? ……海楼石の手錠だとオ!? なんでこんなモン持つてやがる…………!!」

「答える必要はねエな……………いくぞペドロ!」

「ああ、ゼポ!」

「【獣剣乱舞】!!」

ズババババン!!

シャボンディを発^たった後、ロゼに貰^エった永久^{エターナル}指針^{ポース}で旅を続けて、ドレスローザに辿り着いたノックス探検隊。

銃声を聞き、昔会ったパンダマンが戦闘しているのを見て、気配を消して近づいて来ていたペドロとゼポが、左右両側からディアマンテに切りかかり、ディアマンテの体を切り刻み、海楼石の手錠がかかった左腕が切り飛ばされる。

「グワアアツ!!」

「死にたくなければ退け! ゆガラ相手に手加減する余裕などない」

ペドロが手錠を回収し、ディアマンテに告げる。

「ゼポ!? 久し振りササ!」

「おう! だが、話は後だ! そつちのオモチャも、さつさと逃げるぞ!
! デカイのが来てる!」

約5年振りの再会に驚き、喜ぶパンダマンに、視線の先で周りの建物より大きな巨人が近付いて来ているのを見ながら、避難を促すゼポ。

「待てエ! お前ら全員生きては」

「お待ち下さい。まずは止血を」

「モネか」

去っていくキュロス達を、激昂しながら追おうとするディアマンテ。

その背から、分厚いレンズの眼鏡をかけ、後ろで緑の髪を纏めた女、モネが制止し、切断された左腕や他の傷口を、自身のユキユキの実の能力で凍らせ、止血する。

「(あのオモチャ、シユガアの……本当にミスで契約し忘れたのかしら?
? あの子も迷っているのかも……)」

モネはドンキホーテファミリーの潜入部隊の幹部。潜入部隊といっても、モネの他には今の所、海軍にスパイとして潜入している初代コラソン、ヴェルゴと、もう1人の男の3人しかいないが。

1年程前からドレスローザ乗っ取りのためスカーレットの妹、王女ヴィオラの侍女として潜入していたが、彼女は迷っていた。自分とシユガアの姉妹を3年前救い出してくれたドフラミンゴやファミリーへの忠誠と、そのファミリーの最高幹部、ヴェルゴに抹殺対象として狙われている、〃機甲のロゼ〃への恩義の間で揺れていた。

5年前に、奴隷として売られていた自分達を買った貴族が、シャボンデイ諸島へ行つた時、貴族や護衛が何故か気を失い、気付いた時には首輪が外れていて逃げ出したが、路頭に迷っていた所を助けられ、故郷に向かう船を用意してもらった。結局その後、また窮地に陥り、ドフラミンゴ達に救われ、ファミリーに加入。

自分達を助けてくれた恩に報いるために、別の恩人を殺そうとしているファミリーの任務をこなす……自分は一体何をしているのかと思っている所に、ヴィオラに姉を助けてくれと涙ながらに懇願された。

彼女はギロギロの実の能力者で、透視や読心、千里眼など、全てを見透かすことが出来る眼力人間。カメレオーネというファミリーに忍び込めるネズミを見分けることも出来るその力を欲したドフラミンゴが、2日前に片足のオモチャが逃がした、父リク王を殺さない代わりに、ドフラミンゴの部下になった。

千里眼で姉スカレットの危機を知り、モネの迷いを見透かし、賭けに出たのだ。そしてヴィオラの思惑通り、その姉の助命の懇願を拒めず、手を回して、ファミリーへの背信と言える行動を取っている。

「(本当に、私は何やってるのかしら……)もうすぐピーカ様が来ます。ここは瓦礫の山になるでしょう。腕のこともありますし、一度お退きになって下さい」

最高幹部ピーカの能力は攻撃範囲が広い。広域殲滅力はファミリートップ。

ピーカの攻撃した跡には大抵死体も残らない。だからこそ、生死の確認が疎かになる。運良く生き残れるかもしれない。2人揃ってスカレットを追われるのが一番マズイ。自分に出来るのはここまでが限界。モネはそう考えて進言した。

「何を言う！ あんな奴ら片腕だけでさっさと片付け、ピーカが来る前にスカレットを殺してやる！」

「マンシエリーの能力で治すにしても、早い方が良いでしょう」
リク王の乱心、ドンキホーテ・ドフラミンゴのドレスローザ国王即位を聞き、非常に人を信じやすい性格のトンタッタ族は、新国王であるドフラミンゴにトンタッタ族の姫、マンシエリーとその護衛500人と共に挨拶に向かい、生物の傷を治癒させるチユチユの能力に目を付けられ、騙され捕らえられてしまった。

モネは知らないことだが、腕を切断されても縫い合わせさえすれ

ば、完全に癒すことが出来る。

「たかが片腕失ったくらいで、最高幹部が引き下がれるか！」

「今ここであなたに万が一があれば、ファミリーにとって大きな痛手です」

「よせ……そんな人のことをファミリーの切り札みたい……」

おだてられるのに弱いディアマンテが、謙遜しつつも次第に態度が大きくなってきていた。

「……あなたはファミリーの切り札、ここで片腕を失おうものなら、もうファミリーに未来はありません」

いつも通りの反応に、上手くいくことを確信したモネが乗る。

「やめろって……そんな……」

「じゃあやめま」

「そこまで言うなら、退くしかあるまい!! あんなカス野郎共、ファミリーの最終兵器であるオレが直接手を下すまでもない!!」

時間が惜しいので、普段ならもう少しおだてる所をすぐに梯子を外すと、ディアマンテがご機嫌な様子で自分の腕を持ち、宮殿に向かった。とても先程腕が切り落とされたとは思えない、軽やかな足取りで。

「(このファミリーの最高幹部、全員面倒くさい……とはいえ、これ以上はもう無理ね。バレたら私もシユガーも、若様に殺されちゃう。たぶん、若様は私達の迷いに気付いてる。だから私達と一緒に行動させようとしな……恐ろしい人。ドレスローザの乗っ取りが終われば、私は元海軍の科学者の所にまた潜入か……)」

退いたディアマンテと、スカーレットを探して殺そうとしている体^{てい}のモネから場所が変わり、スカーレットを逃がし、迫るピーカから逃げようとしている面々。

他のノックス探検隊の船員と合流し、自分達の船を確保しに行った者達と別れ、スカーレットを探しながら情報を共有しているキュロス、パンダマン、ペドロ、ゼポ、そしてトムとペコムズの6人。

「お前達か、ドファイの敵は!!」

正面に十字状の飾りがついた兜を被り、肩は丸みを帯び、しかしトゲが生えた特徴的な形をしている、肩や兜、ベルトにスペードのマークが入った巨漢の男、イシイシの実の岩石同化人間ピーカが6人に追いついた。

瓦礫と一体化し建物より大きなサイズになったピーカが、その巨体に似合わぬ甲高いソプラノボイスで声を上げ、

「たっはっは!! 声たっか!!」

「せ、せっかく耐えたのに……ガオ! 似合わねエ!!」

「ぶっ、コ、コラ……やめないか……! 人の身体的特徴を……!」

笑いの沸点が人よりかなり低いトムが大笑いし、他の者もつられて笑い出す。

自身の高い声を気にしている、ピーカの逆鱗に触れてしまった瞬間である。

「笑うなア~~~~!!」

激昂したピーカが、瓦礫を吸収して出来た超重量の拳を、怒りのままに上から叩き込む。

「笑っている場合ではない! 来るぞ!」

キュロスの言葉に、笑っていた者達が我に返り、

「ガレオンランチャー獅子砲甲!」

ペコムズがカメラカメの能力の甲羅に一度腕を引つ込め、溜めてから拳を撃ち出し、

「【金剛張り手】!」

トムが張り手、

「【パンダヘッドバット】!」

ドゴンツ!!!

パンダマンが頭突きで、それぞれが武装色を纏った攻撃で、ピーカの拳を3人がかりで相殺する。

その間にペドロとゼポが腕を駆け昇り、ピーカの岩石の体を切り落としていく。

「石が切れても、お前らじゃおれの武装色は切れねエし、傷付けられやしねエ!!」

ピーカの本体が姿を現し、キュロスがライフルで狙撃するが、武装色を全身に纏い、黒く硬化したピーカの体を傷付けることは出来ない。

「ならば別の方法で消えてもらう！ やれ、ペコムズ！ トム！」

「よしてきた！ ドンといけ！」

「ガオ！ 暴投するなよ！」

ペドロの号令に、甲羅に頭と手足をすっぱり収納し、甲羅だけになったペコムズをトムが掴み、ピーカに向かって全力で投げる。

「フツ飛べ！ 【亀殻手榴弾】！」

ズドンツ！！

甲羅から一度引つ込めた足を撃ち出し、また引つ込め、出す。それを繰り返して、【月歩】^{ゲツボウ}の要領で空を蹴り、加速しながらピーカに突進。武装色で硬化した体を傷付けられはしなかったが、衝突の勢いで、ピーカの体が飛んで行き、ペコムズが頭と手足を出し自分の勢いを止め着地する。

「なんだかんだ言いながら、投げられることを受け入れてるな、ペコムズの奴……」

「あなた達が、スカーレット様を助けてくれた人達れすね！ 親切な眼鏡の大人間^{だいにんげん}に聞きました！」

「？ 誰だ？」

最初は嫌がっていた割に、結構ノリノリなペコムズの様子に思わずゼボが呟いた時、どこかからか声が聞こえるが、姿は見えない者に、ペドロが不審に辺りを見渡す。匂いはすれど誰もいない。

「この声……トンタッタ族のレオか？」

「そうれすが……あなたは誰なのれす？」

キュロスが、スカーレットに会いに来ていた小人族を思い出し、そうなのかと聞くと、ピーカの一部だった瓦礫の影から、緑を基調とした服装の尻尾の生えた小人族、レオが飛び出してくる。

「私はスカーレットの味方だ」

彼も他の例に漏れず、自分のことを忘れているだろうから、手短に自分の立場を伝える。

「そうなのれすか！ スカーレット様とレベツカ様は、ぼく達がグリーンビットにお連れしたのれす！ あなた達も来てください！」

この国で、一体何があったのれすか？」

「私が話そう。あなた方は……」

「乗りかかった船だ。おれ達も行こう」

レオを加えた一行は、ノックス探検隊の船でグリーンビットへ向かい、トンタツタ族と、スカーレット、レベツカ母娘と合流する。

パンダマンがノーランドの銅像に驚き、隣に立ったフィツシャー・タイガーの銅像と合わせ、トンタツタのヒーローだと説明を受ける。

そしてキュロスが、ドフラミンゴの策略でリク王が陥れられ、ドレスローザが乗っ取られたことを話し、体調を崩したスカーレットと心配するレベツカ、護衛として数名のトンタツタ族の戦士とパンダマンに側に居てもらい、キュロス達が話を続ける。

「では、マンシェリー姫が帰らず、歓迎パーティーの招待状だけ送られてきたのは……」

「ドフラミンゴの罠だな。先程聞いた800年前までのように、労働力としてこき使うつもりなのだろう」

自分がスカーレットの夫でレベツカの父親であることを明かしたキュロスが、ペドロの方に向き直り、2人をドレスローザから逃がして欲しいと懇願する。

「先程の戦闘で思い知った。今の私には、妻と娘を守るだけの力がない……！ 不幸中の幸い、あのオモチャの能力者、ダイヤモンドがシユガーと呼んでいた少女によって、すべての人々から、私の記憶が消されているようだ。リク王様とヴィオラ様が亡くなったと言えば、2人がここに留まる理由はほとんどない……見ず知らずのあなた方に、図々しい頼みなのは百も承知！ だが頼む！ 愛する者を、死なせたくないのだ!!」

地に手をつき、深く頭を下げる。

「……ゆガラはどうするつもりだ？」

「人殺しの獣だった私を人間にしてくれたリク王様の、私の人生の大

恩人の名が貶められた！ その汚名を雪がずに、ここを離れるわけにはいかない！」

「わかった。だが、おれ達自身も、故あって政府に追われる身。だからおれ達が困になり、ドンキホーテ・ファミリーと戦う。その間に、パンドマンにシャボンディまで連れて行ってもらう」

決意が固い様子のキュロスに、ペドロが協力を決め、しかし自分達と一緒に別の危険が付き纏うので、囹役を買って出た。

「スカーレットを守ってくれた御仁か……彼なら私も、そしてスカーレットも信頼出来るだろうが、何故シャボンディに？」

「シャボンディには、海賊嫌いで腕の立つ友人がいる……あガラなら、ロゼなら必ずあの母娘を見捨てない。それに、もしドフラミンゴにバレても、海軍と、そして他の七武海2名とも交流のある奴だ。容易には手は出せまい」

「……七武海と？ 本当に大丈夫なのか？」

七武海に国を乗っ取られたキュロスが、難色を示す。当然の反応だろう。

「その七武海は、海賊嫌いの『海侠のジンベエ』と政府嫌いの『海賊女帝』ボア・ハンコックだ。ドフラミンゴに与くみすることはないだろう」

「……わかった、元々無理な頼みをしているのはこちらの方、あなた方の判断を信じる！」

本人達の与り知らぬ所で話が進んでいるが、この後、スカーレットとレベツカは悩んだ末、パンドマンは快く受け入れシャボンディへ向かい、ほとんど無関係な立場で突然丸投げされたロゼは、構わないと即答することになる。

そしてその後、キュロスを隊長としてトンタッタ族と小さなリク王軍を結成し、ドレスローザでドンキホーテファミリー相手に戦闘を仕掛ける。

それと同時に、ノックス探検隊が船でドレスローザを出発し、囹として追って来る敵と戦っている間に、パンドマンに連れられたスカーレットとレベツカ母娘が、港で手に入れた船で密かにシャボンディへ

向かい、すべてをギロギロの能力で見ていたヴィオラが、姉と姪の生存を確認し、安堵の涙を流した。

これで戦いが終わったわけではなく、長きに渡るドンキホーテファミリーと、その反対勢力の戦いが始まったのである。

“世界を滅ぼす兵器”

「構わない」

先程、パンダマンから電伝虫に電話がかかってきた。

番号を教えた覚えはなかった、というか持つてなさそうだったから無駄と思つて教えなかつたんだが、ペドロ達から聞いたらしい。彼らにはトムさんが受話器を作っていたから教えていた。

そして、赤い土の大陸を挟んだ反対側の赤い港まで飛んで行き、約9年ぶりに再会を果たした。見た目が全然変わつてないな。

そして、一緒にいた母娘、スカーレットとレベッカの保護を頼まれたので、承諾した。

「あの……頼つて来たのはこちらだけど、良いの？ まだ何の事情も話していないのに……」

「経験上わかる。奴隷にされてたとか、あらぬ罪を着せられたとか……何か危ない目にあつたんだろ？ 手配書で見た顔ではないし、その細腕、荒事とは無縁そうだ。むしろどこか仕草に品がある。そうだな……貴族の生まれで、お金目当てで近付いてきた執事なんかには、家も財産も奪われ、挙句殺されそうになつたところ、一家で逃走してきたといった感じか？」

船旅に疲れて眠つたのだろうレベッカを抱え、困惑した様子のスカーレット夫人にそう答える。

「あつ、少し惜しいササ」

「たぶん勘違いしてるみたいだから言つておきますけど、私とこのパンダマンは、そういう関係ではまったくありませんからね？」

なんだ。レベッカはパンダ顔じゃなくて母親似だと思つていたが、パンダマンがパンダマンになつたわけではないのか。

その後、事情を話したい様子だったので聞いてみた。

「なるほど、事情はわかつた。変わらず構わない。『天夜叉』もオレのことなんて知らないだろうし、あなた達のことをバレないよう、オレからドンキホーテ海賊団に近付くこともしない」

正直今までで一番気が楽だ。バレたら困る秘密なんて、生まれた時

からあった。

不特定多数の人間が欲しがりそうな情報であるしらほしのことに比べれば、気を付けなくてはいけない範囲が狭くて助かる。何より、見つかったても海賊と敵対するだけで済む。いつものことだ。

「……たぶん、ドフラミンゴは私達のことを、そこまで探さないと思うわ」

「何故だ？ 実際に追手に狙われたんだらう？」

「おそらくは、私が反ドフラミンゴの旗印になることを恐れてね……でも、国の有事に逃げ出した元王女のところなんかには、人が集まったりはしないから……」

起こった出来事を考えれば当たり前だが、あまり良い精神状態じゃなさそうだな。

「きついことを言うが、あなたが残っていたところで、何も変わらない。一国の軍隊を3人で滅ぼす戦力を相手に、あなたがいて何になる？」

「だけど……」

「とつくの昔に王族としてのあなたはもう死んでいるんだ。だったらあなたは、母親として出来ることだけ考えていればいい。他の人間の前はいざ知らず、娘の前でもそんな顔をしているつもりか？ オレの親も追われる身だ。それで不便なこともあったかもしれないが、2人共よく笑っている」

「親がそういう状況で、あなたは、どうなの……？」

「ふははっ。あの2人が親で、オレは幸せだと胸を張って言える」

「ありがとう……少し、気が楽になったわ」

そう言っただけで彼女が微笑んだところで、ぐくと、まるで誰かの腹の虫でも鳴ったような、小さくかわいい音が響いた。

レベッカかと思ったが、違うらしい。

そのレベッカを抱えた目の前のスカーレット夫人が、頬を染め、プルプルと震えながら下を向いていた。

「さてと……話も終わったし、オレの家に案内する。乗ってくれ。腹も減ったし、落とさないよう気を付けながら、急いでいく」

3人が乗って来た小さい船を、能力で変化させながら言う。

「えっ？ いや今のって」

「パンダマン、そういえばお前と同じようにパンダの顔をした女に会ったんだが」

「美人だったササ!？」

話を逸らすと、飛び付いて来た。

その間にスカーレット夫人が足早に「ライズ・ファルコン」の背に乗る。

安心しろ、飛んでしまえば腹の音なんて風の音で聞こえないから。

だがそれにしても、返答に困ることを聞かれた。パンダウーマン美が美人かどうかの見分けなんて、パンダマンと同じに見えるオレにはつかん。

「手先が器用で、よく気が利く人だ」

「スタイルは？」

「良い」

「紹介してくれササ!」

「いいぞ」

それはいいが、お前は大丈夫なのか？　すごく冷めた目で見られているぞ？

これだから男は……みたいなの。すまない、これが男なんだ。

それに、パンダマンの境遇を思えば、この反応は仕方なくないか？

自分と似た見た目の者がいない中で見つかった異性。運命的だな。

「それでは飛ぶ。自信がなかったら座って乗るように。まあ、落ちてもオレが拾うから」

そして移動途中、起きたレベツカがはしやいだので、スカーレット夫人は「ライズ・ファルコン」から落ちた。オレが抱えて飛んだ方が早く着いたかもしれない。

まあそれでも、落下中娘を離さず自分の体を下にしていたのは、流石と言っておこう。おかげで拾いやすかった。

☆☆☆☆

パンダマンから電伝虫へ連絡があった日から数週間が経過した。

最初は意外にも、いや、当たり前と言うべきか。スカーレットのオレの両親への印象は最悪だった。

理由は単純にして明快、海賊だったから。海賊嫌いのオレに、それを責める資格は米粒程もありはしないな。

父さんは普通に顔でバレた。元とはいえ世界政府加盟国の王族が、海賊王の船員クルー、ましてや副船長の顔と名前を頭に入れていないわけがなかったな。母さんは、父さんがバレたなら自分だけ隠しても仕方ないと、自分から打ち明けた。

といつても、家に帰る前の会話もあつて、2人の子であるオレに配慮したのか、罵倒したりはしなかったが。ただ直接話さず、会話はすべてオレを介して行おこなっていた。

それに対してオレの両親はどこ吹く風。普段通りの自然体で対応。海賊なんて嫌われていて当たり前と、気にもしていなかった。

どころか父さんは口説いていた。『確かに私はお尋ね者だが、可憐な美女を口説かないなど、それこそ失礼を通り越して罪だとは思わないかね?』とは父さんの言葉。別にそんなことで罪になるとは思わんが、流石の貫禄である。

今では母さんとはママ友で、父さんのあれも華麗にスルーするようになった。最初は『ふしだらなっ!』と言っていたが、順応したようだ。

レベツカの方は、たまにオレが魚人島で船を作る時について来て、最近引きこもり気味のしらほしと遊んでいる。同い年の友達はお互い初めてだったようだ。

パンダマンは……パンダウーマン美と乳繰り合っているんじゃないかな。

そしてノックス探検隊。彼らは手配されてしまった。まあ、時間の問題だっただろうが。彼らには最悪ゾウという発見されにくい避難場所がある。だから大丈夫なはず……。

トムさんは手配されていない。おそらく古代兵器の情報の拡散を防ぎたいのだろう。そもそも司法の島に連行されたことになっている。隠蔽する方向になったようだ。

「選べ。まだオレと戦うか、オレのいない安全な檻の中へ行くか……」
「あ、あんたがいないなら、どこでもいい……！」

そして現在、例によって例のごとく、しかし回数は減ってきている、海賊との戦闘を終えた。

掴んだ髪を離し、後ろ手に手錠をかける。これで全員か。

いつもと違うのは、子電伝虫にセンゴクさんから連絡が来て、サカズキさんがシャボンデイに出張って来たので、周りに被害を出さないよう上手く壁を作ってくれと言われたことだった。

あの人のマグマを防ぐ防御壁を作って戦闘終了を待つ……なんて面倒なことをするより、オレが先に目当ての海賊を潰した方がシャボンデイの住人にとって安全と判断し、実行した。

「フン……無駄足になったのう」

「どの道あんたがここに来た以上、こいつらに未来はなかっただろうし、懸賞金はいらないから大目に見てくれ。それに、まだこいつらを連れて行くっていう役目があるだろ」

「懸賞金なんぞどうでもええわい。それに、連行はわしが直接やることじゃありません」

後から来たサカズキさんに、自分の分がないじゃないかと愚痴られる。

「それにしてもお前、妙な連中に囲まれちよるのう。どんな気分じゃ？ 今まで散々化物呼ばわりして迫害してきた連中が、手の平返して自分を称えちよるというのは」

「騙してるみたいで複雑だけど、楽しそうだし良いんじゃないか？ 危ないから、今までのようにオレの戦場から離れるという正しい判断をして欲しいけど」

【R】レイド・ラブターズを何体か配置した向こう側に、住民達が野次馬に来てい
る。良い意味、というより、オレを売り飛ばそうとしない、本来の意

味でのオレのファンだ。

今まで気付かれないうよう避難させていたのを、普通に避難させて、血生臭く敵を倒していたのを止めて、「レイド・ラフターズ R」を敵を逃がさん包囲網兼周りの人の盾にして、子供にも見せられる戦い方を心掛けている。

「フツ、安心したわい。わしの睨んだ通り、お前はわしよりイカレちやる。誰に嫌われようが誰に好かれようが、お前は海賊を狩り続けるじやろうな」

「……オレがイカレてて安心するとか、あんたの方こそ頭は大丈夫か？」

「……というか少し傷付いた。」

オレ、この人にイカレていると思われていたのか……こっちは気に入らない所はあれど、シンパシーも感じていたというのに。

「まさかいつまで経っても海賊を殺さないから、イカレているとか言っているんじゃないよな？」

「正確ではないが、まあ、多くは違わんのう……まず最初にじやロゼ。わしがお前を同類じゃ思うたのは、お前が毎回海賊団ごと潰している所じゃ。バウンティハンター賞金稼ぎは数いるが、そこまでの、しかも3つのガキがやっていたのはお前だけじゃけエ」

多くは違わないのか……殺してイカレていると言われるのはわかるが、殺さずイカレていると言われるのは、何か納得がいかない。「何を当たり前前のごことを……取り逃がして、そいつがどこかでまた悪さして、その時一体誰が責任を取れるって言うんだ」

「バウンティハンター賞金稼ぎが、誰も責任なんぞ取ろうとせんわ。逃がした奴らが悪さして賞金が懸れば狙う、そういう連中が普通じゃ。まあ単純に実力不足でそこまで出来んつちゆうこともあるが」

「オレは海賊を家畜にして酪農をする気などない」

それじゃあ海賊の数は減らないだろ。

「そしてじゃ。相手を殺さず自分も死なず、倒して制する。言うは易いが行うは難い。お前は覇気使い。拳句の果てにその若さで悪魔の実の能力が覚醒。強い力を持つ者は、殺さないうつもりでも殺さない方

が難しい」

「実際、危ないこともあつたな」

ジャツジが死にかけた。

手動であれでは、自動操縦オートパイロットで戦闘なんてとてもさせられない。だがオレの手動で複数同時操作にも限度があるので、戦力強化のために避けては通れない。

「それで始めたあの修行が極めつけにイカレちよる」

「レイド・ラフターズ R」との戦闘のことか？ 別に自分で作った機械と戦つても良いじゃないか」

「そこで『自分を殺せ』と命じるのがおかしい」

「殺さない方法と殺す方法は表裏一体。そして、それは殺されない方法にも繋がる。自分の体でどんな攻撃が死にかけて、どんな攻撃なら大丈夫か、を体験出来て、レイド・ラフターズ Rの自動操縦オートパイロットの教育にもなる。殺す攻撃を覚えさせなければ、『殺さず倒せ』という命令が出来ん。色んな効果を見込める、とても効率が良い修行じゃないか」

あいつらは機械オートパイロット、自動操縦にすればオレにも攻撃の先読みなんて出来ず、目や耳で反応するしかない。見聞色に頼りがちなオレにはちようどいい。

「じゃあ、お前はあの修行を人に勧めるか？」

「何？ そんなわけないだろ。死んだらどうする」

この修行、父さんとの修行より死の危険性が高いのに。

父さんはこれ以上やったら死ぬってところで止めてくれるけど、オレのレイド・ラフターズ Rとの修行は『オレを殺せ』と命じているから、オレが命令を撤回するか消すかするまで止まらない。

今のレイド・ラフターズ Rは、どんな攻撃で人が死ぬのかわかっていない子供。まだ『殺さず倒せ』と命じてても、殺す攻撃をしてることがある教育中の身だ。

「じゃからお前はイカレちよるんじゃ。そしてその修行の成果が、死なないが死んだ方がマシかもしれないん痛みを与える攻撃の取得か。割に合つちよらんのか」

何か呆れられているな。

死んだ方がマシかもしれないん攻撃は、先程の海賊達にもやった。もう連行されてここにはいないけど。

「リスクなしに自分より強く経験もある奴らを越えたいなんて、ムシが良い話だろ。というか、海賊を殲滅して、用済みになった天竜人も皆殺しにして、最後に法を破った自分自身を殺せば悪は消える……なんて過激過ぎる発想を持っている人に言われるのは、納得がいかない」

「何度も言うちよろうが。人間正しくなけりやあ生きる価値なしと」

誰であろうと、自分自身も例外ではない、か……。

「人口が激減しそうだ……」

「あそこまでするなら、わしももう何も言わん。文句があるなら、今日のようにわしより早く、お前のやり方で終わらせてみせい」

「……ふははっ、そうさせてもらおう」

他の2人がいないからかもしれないが、この人が譲歩してくれるとは。天変地異の前触れか？

そう、本人に知られたら怒りそうな失礼なことを考えていると、目立つ長身の男が、素つ転ぶのが目の端に映った。結構派手に転んだのに音が聞こえない。というか気配もしない。数年前から見なくなつた光景だな。

しかし、どういうことだ？ このまま話しかけたら、最悪サカズキさんに敵前逃亡としてあの人……

「そういえばサカズキさん。最近オレの友人のサッカー少女が、サカズキさんの家の近くでリフティングしながら散歩しているんだけど、あんたの盆栽ってどこに置いてるんだ？」

「蹴鞠遊びは人の通らん広い場所でやらんか。軽く叱りつけてやらにやあ、ロクな大人にならんけエ、見かけたらちいとお灸を据えるところか（無事でいてくれエ！ わしのアカマツウツ!!）」

そうやって、サカズキさんは表面上クールに去って行った。

後で、もう散歩しながらリフティングをするなどドミノに言いに行こう。でないとマグマ親父が噴火する。

さてと

「ロシナンテさん、あんたは戦死したんじゃないのか？」

転んだと思っていたら、いつの間にか服に火まで点いて、地面を転がって消していた男、ロシナンテさんに手を差し出しながら話しかけた。

「?!?!」

何か口をパクパクさせているが、声が聞こえてこない。

「【カーム風】を解除してから喋ったらどうだ？」

「あつ、忘れてた……」

まあ、それどころじゃなかったんだろう。

オレの手を取って立ち上がる。

「ありがと。それで……お前誰だ？ 能力のこととか知ってるみてエだが」

「はあ? ……ああ、ゴークルをしているからか？」

ゴークルを取って、顔を向ける。

「ああ……あゝ? 悪イ、やっぱ誰?」

「……ロゼ」

「ロ、ロ……ロー?」

「誰だ!? ロゼだと言っているだろうが!」

……もしかして、記憶がないのか? ありうる。死んでいなかったにしても、死にかけの傷を負ったり、ショックを受ければ飛ぶことは結構ある。オレが今まで倒した連中にも、記憶がなくなったのはいるし、スカーレットとレベツカも、夫であり父のことを忘れていたようだった。

『プルルルル……プルルルル……』

そこまで考えた時、子電伝虫に連絡が着た。

このタイミング……センゴクさんだな。丁度良い、この人にも早く教えよう。息子のように想っていたと、涙を流し落ち込んでいたし、喜ぶだろう。

『ガチャ』

「今オレの目の前に、死んだはずの人間がいる。誰だと思う?」

『? いきなり何を……シナン、何故お前がその島にいる?』

シナン? ……ロシナンテの真ん中の三文字か。
「センゴクさん?」

突然の呼称を普通に受け入れているロシナンテさん。

何故そんな呼び方を……生きているのを隠している? 通信の盗聴を警戒しているのか?

「……もしかして、知ってた?」

『……ああ。そいつを今まで隠していたのは私だ』

「あれ演技だったのか!? オレの涙を返せ!」

秘密を抱えているオレに言う資格はないかもしれんが、それでも文句ぐらい言いたい。

『嘘はついていない。お前とはもう会えなくなった……と言ったのだ』

「子供のオレに気を遣った婉曲表現だとばかり思っていた!」

「ガープの修行に笑ってついていくお前を見て、私は子供扱いなど無意味と悟った」

この「仏」、まったく悪びれない。

「どうか、『嘘はついていない』って……演技はしてたってことじゃないか。」

『とりあえず、事情を話すから、私の部屋に來い。お前の能力は使うな。最悪墜落する』

「墜落って……【ゲッポウ月歩】で走って來いってことか?」

『シナンに聞け……ガチャ』

通話が終了した。

あの努めて平静を装っているかのような素っ気ない態度……またオレは余計なことに首を突っ込んでしまったようだ。誠に遺憾である。

「それでシナンさん。どうやってマリソフオードに行くんだ?」

「オレの移動手段を使う。ついて来てくれ」

そう言った、ロシナンテさん改め、シナンさんの後を歩く。

それにしてもシナンか……本名から取っているが、何故そんな呼称にしたのか、とてもわかりやすいな。

しばらく歩いた先にいたのは……

「超フラミンゴ？ 北の海の^{ノーストルー}」

「ああ。相棒のミンゴだ」

「フツフツ^{グァツ}、待ちくたびれたぞ……ロシー^{グア}」

水辺で泳いでいる巨大なフラミンゴがいた。何故かサングラスをかけている。

「こいつで直接元帥の部屋の窓から入れってことだろう」

「何故それで今までバレない……」

「普段はオレから会いに行かねエからな。じゃあ乗ってくれ、ロー」

「だから誰だよ……ロゼだ」

2人で背に乗り、飛んで行った。

そして海軍本部の元帥室の窓から入る……ギリツギリだな。ミンゴの背から降りる。

室内の壁に掛けられた額縁には、「君臨する正義」と書かれ、扉の前に開けられないためだろう机やらソファーやらが置かれていた。

「シナン、音を消してくれ」

窓とカーテンを閉めながら言うゼンゴクさん。

「【サイレント】」

パチン！

シナンさんが指をならし、部屋を覆う防音壁を張る。これで内外の音は遮断された。

「さて、まずはサカズキの件、ご苦労だった。そして……すまんかった
!!」

勢い良く頭を下げられた。

「いいよ。腹は立ったけど、必要なことだったんだろ？」

「いや、見聞色の強いお前をどうやって誤魔化そうかと思っていたら、普通に信じられて涙を流されたから、つい演技に熱が……」

「殴りたい」

オレは『つい』で騙されたのか……確かにオレはよく疑うが、流石に人の生き死にに関わる知らせを、わざわざ見聞色で真偽を確かめるほど疑り深くはない。

「はあ〜……まあいい。何故死んだことにしていたかも、別に言わなくていい。シナンさんのことは黙っていれば良いんだな?」

「お前のその踏み込み過ぎない姿勢は私も買っているが、今回に限っては構わない。元々、一部は告げるつもりだった。お前も無関係ではない(こいつ自身は踏み込み過ぎないようにしているのに、本人も知らぬ内にドツプリ浸かっているな……不憫な奴……)」

そう気になる前置きをしながら、お茶とお茶請けを用意するセンゴクさん。

全員着席し、テーブルの上のお茶を飲みながら、今までのことを話された。

ロシナンテさんが「天夜叉」の実際の弟で、ドンキホーテ海賊団に潜入し、最高幹部コラソンだったこと。

3年前、オペオペの実際の取引があった日にスパイ行為がバレて殺されかけたが、記憶を失ったものの辛くも生き延び、死んだことにして、以降シナンと名を変えたこと。

「『天夜叉』の弟だったのか。兄を止めるためにねエ……そして、土壇場で能力を覚醒させ、銃弾が致命傷になる前に止めた、か……」

音を消す能力が覚醒し、周りの物体の動きを止める能力が増えたか……音を消すだけよりも使い勝手は良さそうだ。

風は本来無音ではなく無風状態。だからか?

オレに能力を使うなど言ったのは、オレの機械が止められるかもしれないからか。ナギナギの能力を使わなければ良いだけだが、この人の場合、何かの拍子で使ってしまったりしそうだからな……。

そしてミンゴは動物だからその心配はないと。

「何かそうらしいな。覚えちゃいねエが……」

「元天竜人というのは驚かんのか?」

「いや、驚きを通り越して……ガープさんだなアつて……」

元天竜人というのは、実はスカーレットからもそうかもしれないと聞いていた。

空白の百年後、ドンキホーテ一族が天竜人となった後、リク王家が誕生したと伝わっていると。この情報を知っていることも、殺されか

けた理由かもな。

20年以上前、ガープさんが天竜人に拳骨をかまし、説教をした結果、数年後マリージョアを降りたのが「天夜叉」の父、ホームング聖らしい。

「それで、死んだことにしてドンキホーテ海賊団を探ってもいるのか？」

あまり驚いていないことに疑問を持たれても困るので、話を逸らす。

「いや、因縁深いドフラミンゴに下手に関わらせ、何かのきっかけで記憶が戻り、パニックになって見つかる可能性もあるので、別のことをしてもらっていた」

ぼかしたな。これには突っ込まないでおこう。

「それで、『天夜叉』が七武海になれたのは、出生関係で何か不都合な情報でも握られている、とかかな？」

「……見聞色は使われていない。つまりたまたまか……？ 恐ろしい……まあ、そんなところだ」

「だからこそ、何故海軍は動かないんだ？ 要するに天竜人にとっては邪魔な存在なんだろう？ 具体的に言えばバスターコール。世界のすべてを恨んでいるらしいドフラミンゴを、状況が少し似ているオハラのように消したりはしないのか？ ドレスローザごと消して欲しいわけではなく、むしろやって欲しくないから聞きたいんだけど」
本当に。不安で仕方がない。

理由として、『スカーレットとレベツカの故郷だから』、『ドレスローザの国民が攻撃される謂れはない』、というの^{いわ}は当然あるが、まだオレはドレスローザに一回も行っていない。

最後に会った時、ヴェルゴさんに『ドレスローザは自然豊かな国だから、きつと君も気に入るだろう。是非行って見たまえ』と教えてもらった。消されるのはとても困る。

「あの時とは似てはいても状況が違う。理由は2つ。1つは時期だ」

「時期？ 大海賊時代開始すぐだったから、機先を制したかったとか？」

「そういう面もあるが、もつと単純だ。あの年に何があつた？」

何って、オレの父さんが人間屋ヒューマンショップに身売りして、爆破して帰って来た……というのはセンゴクさんも知らないことだろうし、もつと、当時2歳のオレでも知っているような……

「なるほど。『金獅子』のインペルダウン脱獄があつたな。確か、あんたが『金獅子』を追っていたんだよな？」

「その通りだ。奴は、オハラが研究していた世界を滅ぼす兵器、それを手に入れ、世界を支配する計画を立てていた。その奴がああタイミングで脱獄……黙って余生を過ごすつもりとは思えん。何としてもシキが兵器を手にかつることだけは阻止する必要があつた」

政府の思惑はともかく、それが、この人がオハラへのバスターコールを決断した理由か。

「どこにいるかわからない『金獅子』を探すより、何の関係もなかったオハラの住民を消した方が早いと？」

「1人でも何か知っていれば、そこから世界が滅ぶ危険があつた。情報を聞き出す手段はいくらでもある。お前なら理解しているはずだ。見聞色が並外れたお前なら。だからお前は必要以上に踏み込もうとしない。覇気使いでもない学者や住民達に、心の声を聞く見聞色に抵抗する術などない。たとえシキにその力がなくとも、奴の仲間に1人でもいれば終わりだ」

見聞色以外にも、悪魔の実の能力や、誰でも出来る暴力で脅すという手段がある。

「だから民間人ごとく？ お前らを利用する凶悪な海賊がいるから、でもそいつがどこにいるかはわからないから、危険な情報を持っているかもしれない手軽に殺せるお前らが死ねと？」

「オハラの件、すべての責は当時大将として指揮した私にある」

この人は揺るがない。

オレの言うことなんて、全部すでに考えて、その末の行動だったんだろう。

「はあ……すまん、もう終わってしまったことに。理屈では理解出来る。そして、理屈で理解させられた以上、あんたを言い負かす言葉を

オレは持たない。だが感情では納得出来ない。無関係なオレが納得出来ない以上、死んだ住民達も納得出来ないだろうし、生き残った当時8歳の子供にとつては、終わったことと流せないんじゃないか?」「たとえそうだとしても、兵器の復活は何としても阻止せねばならん」つまり、「悪魔の子」ニコ・ロビンが、古代兵器を復活させるような奴でなければ、覇気を目覚めさせて鍛え、「金獅子」や兵器を求める者から逃げられるようになった方が都合が良いな。

もし鍛えた後に心変わりして、古代兵器を求めるようなことがあれば、オレがその企みを潰せば良し。

「そういえば、さつきからシナンさんが静かだな。【カーム風】でも使った?」「話に入り込める空気じゃなかったんだよ……センゴクさん。さつき言ってたロー……。ゼがガープ中将とやった修行つてどんなの何です?」

何度オレの名前を間違えそうになれば覚えてくれるのかな? たった2文字だぞ?」

「新兵に自分達を狙撃的にして撃たせ、銃弾が飛び交う中での組手だ。ちなみに、こいつは機械の能力を使用禁止という条件付きでだ」センゴクさんが懐かしの修行内容を答えた。

ガープさんは飽きっぽいから修行内容がコロコロ変わるが、あれは新鮮だった。

能力の鍛え方なんてガープさんは教えられず、オレが自分で見つけるしかないから、覇気と身体能力の育成がメイン。新兵の狙撃だからミスショットもあり、見聞色で先読みした通りに飛んで来るとは限らない上、ガープさんを狙った流れ弾が飛んで来る可能性もあり。中々スリリングだった。

思えば、あれが原因でダデイさんはオレへの発砲に躊躇いがなくなつたのかもしれない。

「……ドン引きです」

「どつちに?」

「当然2人共に、だ」

「さて、話を戻すぞ。ドレスローザにバスターコールをしない理由、も

うーっはドフラミンゴを倒して終わりではないからだ」

「どういうことだ？」

「奴は裏でカイドウと繋がっている」

「真っ黒じゃないか……三大勢力の均衡はどうした」

「百獣」の異名を持つ、一対一なら最強と言われる四皇じゃないか。

「ドフラミンゴは、自分を倒さないことが三大勢力の均衡を保つことになるという状況を作り出したのだ。話し合いが通じるような男ではないカイドウに、どうやって取り入ったのか……狡猾な男だ。そしてお前に関係があるのはここだ」

「何？　どんな内容だ？」

どこにオレが入り込む余地があるのだろうか？　どちらとも接触はないはずだが。

「ドフラミンゴがカイドウに、お前がカイドウの縄張りに入ってきたら、生け捕って渡してくれと言っていたらしい」

「はあ!?　オレは『天夜叉』と会ったことなどないぞ!？」

心当たりはあるが、スカーレットとレベッカのことが原因なら、何故自分の部下を送って来ない？

狙われているなら仕方がない。新世界に行くのは、四皇と戦える位強くなつてからにしよう。それまでは前半や4つの海を訪れてみるか。

「だろうな。お前と接触する機会などなかったはずだ。気になる様なら、お前も海軍に入隊すれば、安全だと思うが」

「市民の安全を守るべき海軍に、我が身可愛さに入隊なんて資質なしじゃないか？」

「入る気はないか……まあわかっていたことだ。『機甲』が気に入らんようなので、別の異名まで考えていたんだが(戦闘力だけでなく、七武海2人に加盟国の2か国との繋がり。欲しい人材ではあるが、海軍に入れずとも、こいつは変わらん。無理に入れる必要を感じん)」

「へへ、なんて言うんです？」

シナンさんが聞いた。

「海賊を討つ破魔の色、銀だ。入隊するなら教えるが？」

「海軍は好きだけど、他にやりたいことがあるから」

銀だシルバーと……？ 実は血筋のことがバレていて、泳がされているんじゃないだろうな？

だが、それにしてもサカズキさんの態度が……あの人は、悪と判断すれば仲良くなっていても肅清するタイプ。その後涙の1つでも流してくれるなら御の字だろう。

「そうか……まあ心配するな。ヴェルゴ大佐がドフラミンゴを見張っている」

「ヴェルゴさんが？ そういえば因縁があるのだったな。ドンキホーテ海賊団が主催する闇オークションを見つけ出して、見事ゴルゴルの実の奪取に成功して食べたんだよな？」

ヴェルゴさんにドレスローザに行くことを勧められたが、まだまだ行けそうにないな。残念だ。

「ああ。彼はドレスローザの件で、一番近くの支部にいたのに止められなかったと、責任を感じていてな。これ以上奴の好きにはさせんと、進んで見張り役を買って出てくれた。ドフラミンゴに話を付ける時は自分が行くと」

「あの人は真面目だからな。〃鬼竹きちく〃なんてあまり音が良くない異名が付いているが、あの戦闘力の高さ、破竹の勢いから〃破竹のヴェルゴ〃の方が相応しい」

「正に然り。はみ出し者が多い海軍G-5支部において、例外的に市民からの信頼も厚く、模範的な海兵だ。ゴルゴルの実という厄介極まりない能力をドフラミンゴから奪取出来たのは僥倖。彼であれば、人格的にも能力的にも安心して任せられる。ドフラミンゴへの切り札だ」

「新兵時代とはいえ、オレがヴェルゴさんに勝てたのは運が良かった、これに尽きる。あの武装色の全身硬化に対して、オレは破る術を持ち合わせていなかった。小細工を弄しなんとか勝てた。いや、優しいヴェルゴさんが勝ちを譲ってくれたのかもしれない」

オレに出来たのは口で挑発したり、足を引っかけて転ばせたり、地

面を蹴り碎いて埋めようとするくらいだった。硬化が切れた瞬間攻撃を叩き込むことでなんとか勝てた。

「お前にしては少々加減を知らん攻撃をしたようだな。まるで海賊を相手にしているような」

「言い訳はしない。ただオレが未熟だった」

一撃入れた瞬間、猛烈に嫌な予感がした。まるで濃密な殺気でも向けられた時のような。

それに驚いて、つい手に力が入り過ぎて、多めに殴ってしまった。修行不足だ。

「な、何故か知らんが悪寒が……？」

「『天夜叉』の、記憶を失った原因であるところの兄の話をしたからじゃないか？」

「かもしれないな。記憶が戻るに越したことはないが、ドレスローザ乗っ取りが既に終わった以上、あまり急いでも仕方ない。焦らずいけ」

「はい……」

用も済んだので、窓から飛んで帰った。

「お帰りなさい、お兄様」

「ただいま、レベツカ」

トテトテ駆け寄って来たレベツカの頭を撫でる。

よくわからんが、手袋越しに頭を撫でられると落ち着くらしい。

初めて言われた時は、『直接私に触らないで』とでも言われているような錯覚に陥りそうになったが、そういうわけではなく本当に落ち着くようだ。不思議なことを言う。

「ロゼをお兄様と呼んで懐いてるレベツカとっても可愛い……シャツキーさん。あの子レベツカの兄にくれませんか？ ロゼが息子なのも、それはそれで良いです」

「アハハ……ダメ。ぶっ飛ばすわよ？」

母さんとスカーレットが不穏な話をしていた。

「スカーレットに不満はないけど、オレの母も父も一人ずついれば良

い。他には不要だ。レベツカの兄になることには何の異論もないがレベツカを抱えて近付きながらそう言った。

「お兄様はお兄様だよ？　また後でご本読んで〜」

「はいはい」

「ふふふ……ごめんね、スカーレット。この子私のこと大好きだから……ちよつと貸してあげるだけよ？」

「母さん!？」

突然裏切られた。貸し出された。

シヨックだ……スカーレットとレベツカの生活費を出しているのはオレなのに。子供に養われて良いのか？　前に父さん達ではなくオレが出しているって言ったら、『一回り下の子に養われてた……!？』と落ち込み、『借りてるだけ、後で返すわ!』と復活していた。

「というか、妹が増えるのは良いんですか？　確か1人いるんですよ？　妹同然の子が」

「あ、ああ……そりゃあ、妹や弟って後から増えるものだから」

トリスタンの質問に答える。

まだダメージが抜けていないが。

その後、レベツカに本を読んだりして、家で穏やかな時を過ごすことしばらく、ドミノに注意するつもりだったことを思い出し、マリルフォードまで飛んで行くと、時既に遅し。マグマが噴火した後だったようだ。

謝ると、『この裏切り者〜ツ!』と怒られた。

すまない。完全に忘れていた。

“切り落とされた黒腕”

「行け！」^{レイド・ラプターズ}「R Rーレヴオリューション・ファルコン」！ 革命の火に焼かれて、散れ！ 「レヴオリューショナルエアレイド」！」

もう何十回目かの三大将とのバトルロイヤル。大将が相手してくるって、今更ながら随分恵まれた環境だな。

全員大将になつてもう出来なくなるかと思いきや、むしろ戦闘回数が増えた。大将が海軍本部から大きく離れる程の事態はそうないらしい。本部と聖地マリージョアの守り、新世界で四皇の不穏な動きがあつた時にすぐ対応するため、等が理由らしい。この場所も、すぐに戻れる距離だ。チャリでサボって出かける人は当然例外。

ガープさんが大将への昇進を蹴つてたらしいのは、そのあたりが理由か。あの人はじつとして苦手そうだし。

最初にオレが足場を蒸発させてから、「レヴオリューション・ファルコン」に乗り上を取つて、空からまた出来た足場に爆撃している。

こいつは空中戦専用と言うか、一方的に上から砲弾を落とす機械とつか、もうフォルムからして鳥じゃない。頭部と砲弾の発射口も付いている両翼が辛うじて鳥。砲弾自体もオレの能力で作りに出した物なので、落とした後から操り軌道を変えられる。

おそらくこれが今出来る一番良い戦い方だと思う。空中戦ならあの3人の誰が相手でも撃ち落とされる気がしない。だが普段は周りへの被害が大きい上、相手によっては殺してしまうので殴つた方が早いというのが何とも言えん。

実戦で使う機会は来るのだろうか？ オレは今の所訓練や修行で死にかけることはあつても、実戦で死にかけたことはない。ビブルカードを持つているビンズには、『その内修行で死ぬんじゃないか？』と心配された。アインには、『またあいつ死にかけてる……』と慣れられた。たぶん他の人達にも慣れられている。

「革命……ケンカ売つちよるなア……」（物理攻撃は自然で受け流せる^{ロギア}

と無視すりゃあ、後から破片に遠隔で武装色を纏ってぶつけて来よる)」

「挑発だろ。いつもの（覇気の省エネって言ってたが、あいつ、戦闘の時は普段より性格が悪イな……あれじゃあ警戒せざるを得ねエ）」

「あいつが革命軍に入るのも、ちよつとあり得そうだからシヤレにならないねエ」（接近戦でわっしの速さに対応するようになった癖にイ、まだ勝てないからと今出来る最善の戦法……潔くて腹ア立つねエ）」

革命軍、最近リーダーの名前と顔写真が割れた。顔にタトゥーが入ったドラゴンという男だそうだ。

少し安心した。活動内容から、タイガーさんを助けても不思議じゃない。

下ではオレの爆撃音を聞きながら、3人が戦っている。

オレが上からちよこちよこ攻撃してくるから、こつちに気を配りながら余力を残して抑え目に。

何度か隙をついて、全員海に突き落とすことがあるので警戒されている。まあ、一対一ではまだ誰にも勝てんし、最近は決着がつかず時間切れで終わることが多い。

最初の頃は勝手に3人がケンカしだしてやりやすかったのにな……オレへの注意がなくて。

「そろそろもう一発撃てるな……」
レイド・ラフターズ
「R R —サテライト・キャノン・ファルコン！」

オレがいる位置より更に上空で待機させ、太陽光発電でチャージしていた【サテライト・キャノン・ファルコン】の照準を合わせる。

「さつき開幕ぶっぱで足場を海ごと消し飛ばしたあれか……！ 古代兵器には近代兵器つつって生み出したらしいが、おれ達でもなきや骨も残らないでしょ、あれ。まあだから、事前通告ありとはいえ遠慮なく撃つんだろが、あんなもん何発も撃たれちゃ堪ねエな）」

「(わっしのビームが盗られたねエ)。それも威力が桁外れ……作り

出したバガパンクも恐ろしいがア、あんなとんでもないエネルギーを消費する兵器を、素で撃った後戦える体力のロゼも大概だねエ〜」
「あんな威力の兵器を持ちながら、未だにその手で殺めた者はなし。やり過ぎたと倒した海賊に応急処置をしては、血を吐いておった海賊嫌いの癖に、不殺を続ける……とんでもない奴じゃのう」

「エターナル」

『プルルルル……プルルルル……』

今まさに再び足場を消し飛ばそうとしたその時、オレの腕の子電伝虫が鳴り出した。

『ガチャ』

「もしもし?」

「二普通に出るのか……」

いやだって、緊急の用かもしれないじゃないか。

こっちのことは気にせず続けて欲しい。攻撃が来ても躲すから。音がうるさいからオレは攻撃しないし。

『父さんが、父さんの腕が……!』

アインか。様子からして普通じゃないな。

確かゼファアーさんは新兵の訓練で海に出ていたんだっただか?

「今どこだ? すぐ行く」

『海軍本部の医務室……』

「わかった」

『ガチャ』

通話を切る。

「オレの負けでいい。用事が出来たから行く」

「クリームシチュー」

「ブタの生姜焼き」

「キムチチャーハン」

「了解」

罰ゲームの飯の奢りが決定した。

そのまま、戦う3人を放置し、【レヴオリューション・ファルコン】で海軍本部へ飛んで行く。【サテライト・キャノン・ファルコン】は

……元に戻そう。さらばだ、もう休め。

☆☆☆☆☆

海軍本部の医務室に着き、泣いているアインに飛びつかれながら事情を聞く。

新兵の訓練中に能力者の海賊に襲撃され、ゼファーさんは右腕を失い、生徒達は全滅したらしい。知らせを聞いて本部で待機していたアインとビンズが治療中に駆けつけた。

説明後、元気づけて正気に戻ったアインに、くつつき過ぎだと張り倒されるといふ、中々理不尽な目に遭ったが、今は置いておく。

治療を終え、生徒達を失い、自分を責めるゼファーさんを、2人が元気づけようとしているが、あまり効果があるようには見えない。上の空だ。

ちよつと成功するかわからないが、冒険してみるか。

失敗したら、オレは嫌われるだろうが、このままより良いだろう。

「訓練教官として同行していた以上、確かにあなたに何の責任もないとは言えんな」

「あなた何をッ！」

アインが睨んできているが無視する。

「だがそんなもの、襲撃した海賊の方が悪いに決まっている。まあ、これからはオレがかつてのあんたみたいに、殺さず海賊を捕らえ続けるから、もう休むと良い」

「……おれの真似をすれば、いつかおれと同じ悲しみを味わうかもしれないぞ……？」

「ふははっ。とても残念なことに、オレはアンタ程優しくも慈悲深くもないから、家族がいるからって海賊を見逃さないなア……人の大事な物奪つといて、自分の番になったら見逃してくれなんて、通らない。それに何より、オレはあんたの正義が間違っているとは思わない。まあ、大海賊時代はオレがついでに終わらせてやるから、もう余生を楽

しんでな。そろそろ引退時だろう」

「何イ……？ 若造がデカイ口を。そういう口はおれに勝てるようになってから言え」

かかった。これで8割方成功したと言って良い。

「Dr. ベガパンクなら新しい腕を作れるかもしれないが、今まで通りとはいくまい？ あんたに徹底して基礎を固められたオレだ、流石に片腕相手では負けん」

「お前程クソ真面目におれの訓練に何年もついてきた奴は今までいなかっただが、10代半ばの子供がほぎきやがる。背が伸びて心まで大きくなったか？」

そりやあオレより長く鍛えてもらった人はそういないだろうな。

新兵の訓練だから、長くて3年とかだろう。オレはもう12年か。

この人の訓練は基礎訓練が多い。基礎は大事。ガープさんと父さんは細かい差こそあれ方針には大差ない。オレを追い詰めること。人間死にかければ何かしら掴むものだ。父さんなんてオレに修行をつける時は、毎回『絶対に死ななくてくれ』と言ってから始める。

その後、少々口喧嘩気味のやり取りをした後、Dr. フィツシュポーネンに、『怪我人を刺激するな！』と医務室から放り出された。オレの他にアインとビンズも一緒に。

あの人は良い人だ。何度もオレが怪我を治してもらいに行き、その度に『もう来るな』と怪我しないよう注意されるが、何度行ってもなんだかんだ治療してくれる。

「それで、なんでアインは膨れているんだ？ ゼファーさん、元氣になっただじやないか。一緒に追い出されたのはすまん」

「私達が何言って慰めても元氣を取り戻してくれなかったのに、あなたがケンカ売ったら戻った……」

嫉妬されてた。ビンズがちよつと呆れているぞ。

だがかわいいなオイ。だからお前は年上に見えないんだよ。

「なんであれで元氣になったの？」

「あれって……場合によるぞ？ 明らかに責任がないのに自分を責めていたら、そりゃあ『お前は悪くない』と言う方が良い」

去年のスカートレットとかがそうだな。

「だが、教官の自分がその場に居たんだ。責任がない？ そんなことをあの真面目で責任感の強いゼファーさんは認めるものか。こうならないために自分は生徒についていたと考えるだろう」

オレがああの立場でも確実に自分を責める。現に今まで2回そうなった。誰が何と言おうと譲らない。オレの責任だ。

「ああいうタイプは、放っておけばいつまでも自分を責める。誰かに責められたり罰されたりした方が、それでむしろ気が楽になる。罪の意識が軽くなる。それだけでなく、相手が失敗しようがそのまま受け入れてやるのが大事……といったところか。あとは、男は辛い時に優しくされ過ぎると自分が惨めに思うことがあるから、発破をかける」と良いこともあるな」

「ああ、それはわかる。負けた時に優しくされると却って辛いものだ」
ビンズの共感を得た。

男は見栄を張りたいたんだ。慢心にも繋がるが、向上心にもなるので、一概に悪いとは言えない。

「出たとこ勝負の賭けだったってこと？」

「いや？ 見聞色で感情を探りながら話していたから、途中で上手くいくと思っていた。見聞色で探れないようなら、表情を見ろ。時間が解決してくれることもあれば、時間を置けば拗れることもあるけど、まあお前らがいれば大丈夫だろう」

まあ失敗したら、もうすぐいなくなるオレが嫌われるだけだし、元気が出るかもしれないなら、やらない選択肢はない。

「男の人ってメンドクサイ……」

「女は女で面倒だろ。例えばアイン、オレがお前の私服を『似合ってる』とか『きれい』とか言うのと、決まって『ジロジロ見ないで。いやらしい』とか文句を言うけど、毎回新しい服着て来た時はチラチラこっちの様子を窺ったり、あの露出が高い恰好を何種類も揃えているあたり、絶対喜んでてもがアツ!？」

アインに2丁の拳銃、 “赤丸” と “黒丸” を口に突っ込まれた。

「その余計なことを言う口を、今すぐ閉じなさい……！」

「^{もがもがもがもがもがもがもがもがもがもがもがもがもが}やめてくれアイン。その銃弾はオレに効く」

こいつの拳銃に装填された弾丸は、盾を構えた装甲兵を背中まで撃ち抜く威力。通称 “キャンディジャケット”。技術の進歩は著しいな。良い武装を揃えている。一発の値段が高いのに。

能力と武装色で防御しても、流石にゼロ距離射撃では、こいつの武装色と合わせて、オレでも怪我は覚悟する威力だ。

「あなたなら怪我で済むわ」

「^{もがもがもがもがもがもがもがもがもがもがもがもがもが}何故オレの言うことがわかった!？」

もがもがしか言えてないのに。舌が回らない。

「なんとなく」

以心伝心だな。

そろそろ身の危険を感じるので、2丁の拳銃を口から出す。

「……舌で私の腕力を押し返すって、どんな力してるのよ」

「鍛えているから。仕舞いにはこちらも物理的に口を閉じさせるぞ」

「どういう鍛え方してんのよツ!? ビンズからも何か言って……あら?」

アインが隣を見ると、そこには誰もいない。

オレもいなくなったことに気付かなかった。いくら戦闘後とはいえ、気が抜けた間に、音もなく、気配を消し、素早く逃げたな。付き合いきれんと。忍者スキルが上がっている。

「逃げたわね。はあ……もういいわ」

許しを得られたようだ。

「それで、もうすぐシャボンディを発つのか?」

「ああ。お金と時間はかかったが、船も出来たし、ようやくだな」

サイズがサイズなので仕方ない。作業中にオレ本体がない間も機械を置いて動かしていたのに大分かった。

流石にすべては用意出来なかったが、外側とかは宝樹アダムを買ってそれを使っている。まあ、部屋のドアとかまでアダムを素材にする必要を感じないので別に良い。おかげで札束が半分消し飛んだ。

お金と言えば、ヒョウゾウへの用心棒代は、シャボンデイの母さんの所まで取りに来てもらうことにした。家にもいくら残していくし、数年はもつだろう。

「ふうん……やっぱり行くのね」

「ああ……寂しいならお前も一緒に来るか？」

「行かないわよ。こっちの誘いを蹴つといて、それはムシが良くない？」

そう言っているが、嬉しそうだな。

少し強引に誘えばいけそうだが、実際ムシの良いことを言っているし、やめておく。

「それで、あなた一人なの？」

「いや、他にもいる。お前の知っている人なら、ダデイ、キャロルのマスターソン親子」

「もうすぐ海軍を辞める少佐ね。まあ、あの人の親バカは有名だし、時間の問題だったというか……でも、よく誘えたわね」

『娘に医者とパティシエ、同年代の友達は欲しくないか？』と聞けば、釣れた」

「なんでちよつといかかわしい誘い方してんのよ……」

だって、キャロルがこの理由で一緒に来たがっていたから。

事前に説得出来ないかと聞かれてオレが代弁した。どの道キャロルが普通に頼めば、あの人は頷いたと思うがな。

「あなたがあげたっていうあの子の能力なら、大抵なんとかなるんじゃない？」

「戦わせる気ないけどな。それよりあの能力で修行したい」

「あれを修行……？ まあ、あなたが娘を無理矢理戦わせようとする人間じゃないから、少佐も一緒に行くことにしたのかもしれないけど」

いやいや、あの能力の有効な使い方は間違いなく補助だろ。

戦闘利用なんて、覇王色があるオレには必要ない。

「そして医者のレストランと、パティシエのメイプル」

シャーリーも誘ってみたが、店があるからダメだった。こっちも押

せばいけそうだったが、まあ無理に誘う気はないし。どうせ飛んで年に数回は会うだろうし。

たこ焼き屋をしているはっちゃんにも、自分に賞金が懸っているからと断られた。こっちはちよつと無理そう……現七武海の二元船員で、800万ベリーなら、なんとか出来ると思うけどな……。

「ああ……何度か聞いたことあるわね」

「あと同年代の友達ことオレの妹とその母親」

「？ あなたのお母さんではないの？」

「違う」

「あなたまた血の繋がらない姉か妹を作ったの？ 何人目よ……」

「姉1人に妹2人の3人目。友達に3人兄がいるのを見ていたら、羨ましくなつたらしい」

「しらほしのことだ。」

あんな良い兄が3人もいるのを見たら、欲しくなる気持ちもわかる。

『私のお兄様になつてくださいっ！』なんて言われたら、もう『妹よっ』と言いながら抱きしめて、頭を撫でる以外の選択肢はあるまい？』

付け加えるなら、断られたらどうしようと不安げに、恥ずかしげに、故郷の国を追われた幼子が、だからな。

「流石に他にもあると思うけど……噛んでるわよ？」

「ああ、噛んだんだ。可愛いだろ？」

「あざとい……」

「いやわざとじゃないだろ」

もしかしたら露出狂の可能性はあるが。お前と気が合うかもしれない。

この前レベツカ、スカーレット、オレの3人で水着を買いに行った。オレは泳げないけど、まあ男避け兼護衛だ。

店内で椅子に座り待っていると、レベツカが水着を持って駆けて来た……表面積の非常に狭い紐みたいなやつを。あれを着るなら、何も身に着けない方がまだマシだろう。全裸よりエロい。九蛇クジヤでもあれ

は着ない。

そして自分の体に当てて、『似合う?』と聞いてきたので、『お前にはまだ早いから、あつちのワンピースタイプにしておけ。だからそれはお母様に勧めような?』と言ったら、レベツカを追って来たスカレットに頭を叩かれた。

その後レベツカに紐を渡され、『お母様にピッタリだと思う!』と言われ、赤面しあたふたするスカレットの様子は大変見応えがある良いいものだった。子供から目を離すからこうなるということを読んで欲しい。

「その2人って、強いのか?」

「弱いぞ? 別に強さで選んでいるわけでもないし、戦闘はオレがいるし。まあ、妹がオレの真似をし出して危ないから、少し鍛えている程度だ」

オレの真似なんて自殺行為は、させるわけにはいかないからな。程良く稽古を付けた方がマシだ。

ついでにスカレットの方も運動がてら軽く。

「じゃあ並以上ね（覇気を目覚めさせているでしょうし。こいつの強さの基準は海軍本部の将校だから、言葉そのままに受け取れないわ）」
本当に弱いんだけどな……そもそも戦闘向きの性格ではないし、回避や逃走優先の鍛え方だから、足腰の鍛錬ばかりだ。つまり重要なことしかやっていない。

「強さで選んでないってことは、何か特技でもあるのか?」

「え? ……しいて言うなら、お花屋さんと踊り子?」

レベツカはオレと一緒に水をあげたりしているし、スカレットはたまに路上で顔をベールで隠し、踊ってお金を稼いでいる。妹とよく踊っていたそうだ。少々扇情的な服装で踊っているのです、自分の身の上を嘆きそうになっているが、それも立派な職業だぞ。

それに、プライドで飯は食えない。別にオレが出す分には構わないのに、それを良しとしていないのは自分自身なので、頑張れ。自分で決めたことだろう? 質の悪い客は追い払うから。

「待って、たぶんお花屋さんが言い方的に妹よね?」

「そうだ」

「あ、あ、あなた！ 子持ちにどんな踊りさせてんのよ!？」

「フラメンコ」

ギター等の演奏に合わせて、手に持ったカスタネットを鳴らしながら、激しいステップを踏み踊るダンスだ。

オレが演奏しているが、誰も演奏なんて聞いていないので問題ない。露出多めの服で激しく踊っているスカートレットに視線は釘付けだから。

ちなみに父さんの発案である。まあ、大した用意もなく路上で出来ることなんて限られているからな。元手もほとんどいらぬ。

「エロい踊りじゃなくて、なんかゴメンな？ それで、何を想像した？

ストリップショー的なものか？」

「ち、違うし!?! あなたがエロいからそう思っただけよ!?!」

責任転嫁されてしまった。

まあ、顔を真っ赤にして可哀想なので、このくらいにしておこう。

「ごほん! ……それで、他にはいるのかしら？ 私はそちらの方が気になるわ」

「パンダレスラーと、こっちは異名で言った方が知っているかもしれないな…… “魚雷” だ」

「(パンダ？ 覆面レスラー?) “魚雷のウィリー” は知ってるわ。あ

なた以外の、しかも魚人の賞金稼ぎバウンティハンターね」

「賞金稼ぎは本業じゃないけどな」

あの人は魚人島の移住の件で、地上を知るために同行するという使命もある。たまに竜宮城に顔を出して報告に行く。昔のタイガーさんと似たようなものだな。

パンダマンは、まあ成り行き？ ドレスローザの件で手配されたら、その時はその時で考えよう。

「あとは……女科学者。お前と被かぶっているな」

「はあ?」

「すまん、オレが悪かった」

人を殺せそうな絶対零度の視線を向けられた。

科学に絞っている分、レイジュの方が科学者として上かもしれないことも言わないでおう。まあ、相手はジェルマの姫だし仕方ない。環境がな？ たまにDr. ベガパンクに学んでいるとはいえ、流石にな？

「お前は能力とコンバットナイフに2丁拳銃、航海術など幅広く身に着けているから、全然被ってなかったわ。流石努力家の天才肌、万能だな」

少々露骨に持ち上げる。

「別に気にしてないわよ？ 聞いてみれば女ばかりねとか、良い御身分だとか思っていないわ。私は大人だから。あなたより4つも年上だから。最近背が私に追いついてきたからって、調子に乗らないでくれる？（努力家の天才肌で万能……？ 他の人に言われたら嬉しいけど、こいつにだけは言われたくない。嫌味か……自覚ないだけでしょうけど）」

なんか飛び火した。オレの背が伸びたの不満だったのか？

そりゃあ、あれだけ動いてあれだけ食べて、それで背が伸びなかったら嘘だろう。父さんも母さんもそれなりの背丈はあるし。たまにいる巨人族の血が混じってそんな人達程ではないが。

「悪かった。埋め合わせするから」

「……何？」

「マッサージ、大した効能はないけど、気持ち良いと評判」

逆に、トリスタンのマッサージはすごく痛い、筋肉痛が取れたり体の悪い所が良くなる。両極端だ。

「変なところ触ったらあなたを殺して私も死ぬわ」

「了解了解」

そしてその辺の部屋に入って行き30分後、

「もう良い……許す、許すからあ……これ以上はホント無理い……」

蕩けきった顔をした、少々人前に出せないアインが出来上がった。

何故か毎回こうなる……父さんやステューシーに言われた通りにしているだけなんだけどな……？

“船出”

今日はようやく出航、シャボンディを発つ日だ。

しばらく来ることもなくなるだろうということで別れの挨拶と、ゼファーさんのお見舞いに海軍本部に来ている。

さつきはDr. ベガパンクの所に行った。前の研究所が立ち入り禁止になってからは本部にいる。ジャツジとは3年前のあの時以来、頻繁に連絡を取るようになったそうだ。

物に悪魔の実を食べさせる瞬間は初めて見たな。失敗だったみたいだけど。天然物じゃないと駄目なのかもしれない。悪魔の実の模様も、渦巻きではなく丸模様だった。

オレみたいな子供が、昔考えた戯言を実現しようとするとは……オレ自身はもう試す気はないんだけどな。モサモサの実はビンズが食べたし、メカメカの実で充分だ。だが、成功すれば確実に海軍の戦力が増強されるな。

発想としては“鬼の跡目”のガシャガシャの能力が近いか。

“鬼の跡目”ダグラス・バレットは、昔の父さんと肩を並べる強さだったらしいが、ロジャー海賊団を降りた後にバスターコールの前に敗れたそうだから、どちらが強かったかは明白。父さんならバスターコールも返り討ちにして、酒を飲みに行っていたはず。

父さんもオレと修行するたびに強くなっている気がする。

そして今は、ヒナ^姉さんとスモーカーさんに会ったので、ゼファーさんの病室に行く道すがら、話して歩いている。

「もう行っちゃうのね……月日が経つのは早いものだね。ついこの前までこんな小さかったのに。ヒナ感慨」

自分の腰の辺りまで手を下げ、オレの昔の背の低さを表現する姉さん。

「小さいままの方が良かった？ 足を取ったらそのくらいになれるけど」

「その行為に、一体何の意味があるんだ……？」

すっかり髪を刈られることも少なくなったスモーカーさんがやれやれと呆れている。

別に命令違反がなくなっただけではなく、階級が上がって少し見逃されるようになっただけだ。海軍は実力社会だから。

「腕も取ればだるまだつこが出来るわよ？ 煙のおじちゃん」

「だそうだ、煙のおじちゃん」

「お前らがその呼び方してんじやねエ……!!」

やはりこの人、子供に甘いな。

「それにしても、姉さんはアクロトモフィリアだったのか？」

「いえいえ、そんなマニアックな趣味はないわ。ただ身動き出来ない無抵抗な口ゼも趣おもむきがあると思っただけよ。ヒナ普通ノーマル」

身動き出来ない無抵抗という辺りから、仄ほのかにSの香りがするな。うん、知ってた。

「何言ってるのか意味はわからねエが、マニアックな話を廊下でしてんじやねエよ、姉弟プレイ異常バカップルアブノーマル」

本当に四肢欠損性愛の意味がわかってないみたいだな。まあ、実際マニアックだ。

「私達のどこがプレイでバカップルなのかしら、スモーカー君？」

「今の自分達の状態をってみろ」

言われて、2人で互いを見る。

姉さんと手を握って、たまに肩が当たっている。

「何もおかしい所はないな」

「そうね」

「おれは恋人繋ぎしている真面まともな姉弟を見たことがない」

いやいや、このくらい普通だろ。この前、母さんともやった。遊びに行った時に。

「仲が良かったらするんじゃないか？」

「そうか、もう手遅れだったな。今更済まない」

心底疲れたような顔をするスモーカーさん。

「それにしても、能力者相手とはいえ、ゼファー先生がやられるなんてな。あの人、お前の機械を何体も爆発させてただろ」

話を変えるように、ゼファーさんの話を振ってきた。

まあ確かに。いくらあの人でも大勢の新兵を守りながらはきつかったか、相手が桁違いに強かったか。どういう理由か知らないが、その海賊が誰なのか情報が伏せられている以上、後者かもしれない。「ゼファーさんの『ブラック・パンク』は、オレの弱点の1つだからな。それも、武装色が弱いオレには対策し辛い類の」

「……あなた、弱点なんてあったのね。というか、あなたが武装色弱いって、冗談でしょ？」

「弱いぞ。今の中将で、オレより武装色が強い人なんてわんさかいる。見聞色では誰にも負ける気がしないが」

オレが武装硬化を出来るようになった時、『お前でも出来るならおれにも出来るんじゃないか』と、結構な人がコツを聞きに来た。【鉄塊】^{テツカイ}が出来た人には、『鉄塊】^{テツカイ}の要領で武装色を固めてみてくれ』と言えば、その場で出来るようになった人が何人もいた。『あつ、出来た』って。

正直あれは辛かった。オレは習得に何年もかかったんだけど……父さんには六式^{ロクシキ}を見せたら、一目で再現されたし。どいつもこいつも天才か。

オレが強くなっても、周りの人だって当然強くなる。ガープさんとかいう大将への昇進を拒否した中将詐欺はともかく、他の戦ってくれる人には白兵戦で勝てるようにもなったが、油断すると負ける。

人の技をパクれば、自分の技もパクられる。

まあ、『今は弱い』ということは、『まだ伸び代がある』と考えておこう。

「中将の人達に勝ったりしているのに、武装色が弱いのか？」

オレの心を読んだように、姉さんに聞かれた。

「見聞色では負けていないから躲せばいい。それに武装色の強さでは負けているが、その差を技術で補って五分五分^{ごぶごぶ}に持ち込んでいる。『ブラック・パンク』みたいなかんじだ」

正確には能力も上乘せしているが。

武装色が捉えるのは能力者の実体。能力を無効化しているわけではない。海楼石よりも抜け道はある。

「技術？ あれって、硬化した腕でただ殴ってるだけじゃなかったのか？」

ああ、そこからか。

「全然違う。あの技は、硬化した黒腕が」レイド・ラフターズ「R R」を殴った瞬間、オレの哀れな程薄っぺらな武装色を無理矢理ブチ破り、機体の噴射口や銃口みたいな穴から、もう片方の腕とかの攻撃に不要な部分の武装色を流し込み、内側から破裂させることで爆発しているように見えるだけだ……どうかしたのか、姉さん？」

横で、オレと繋いでいない方の手の指を顎に当て、何か考えていた。「ゼファー先生の黒くてぶつといあれが、ロゼの薄いものを無理矢理破り、中に流れ込んできて壊れちゃう……？」

「待て、待つんだ姉さん！ それはいけない、それ以上いけない！ その道は修羅の道だ！」

姉さんの腕を両手で軽く引つ張る。

「修羅道ではなく衆道。ヒナ訂正」

「どちらでもいい、やめてくれ……！ 鳥肌が立つ」

「ふふ、ロゼはこの手の話題がホント駄目ね。その表情、すごくそそるわ……！」

「歪んでやがる……（こいつはこいつで、修羅場の地雷原でタップダンス踊ってやがるし、正気か……？）」

スモーカーさんが呟く。

オレの心からの懇願が、姉さんのSっ気を刺激してしまっているようだ。物理的に引つ張ったところで止まらない。非常にご機嫌そうな様子。

だが無理。タイガーさんと一緒にマリージュアで目撃した、腐った女天竜人が奴隷にさせていた、身の毛もよだつ貴族の狂宴が脳裏に蘇る……まさかあのような悍ましき精神攻撃マインドトラップが待ち受けているとは。

覚悟が足りていなかった。というか、あんなものを目撃する覚悟など最初からしていなかった。記憶から消し去りたい。歴史の闇に葬りたい。

あの時は思わずフリーズし、タイガーさんもあんな経験があるのかと疑い、無言で数歩分距離を取ってしまった。だが、流石にこれはオレも悪くないと思う。

それにしてもスモーカーさん、この話題はわかるのか。

「おい、なんだその疑惑の目は？」

「オレ、男に興味ないから」

「おれだってねエよー」

スモーカーさんに怒鳴られた。

オレもこんな疑惑を向けられたくないので、普通の反応だ。慌てたりしたら怪しいが、ただ怒っているだけ。問題なさそうだ。

「そうか、良かった。ドレイクと同じかと」

「女が苦手⇨男好き⇨図式はやめてやれ。というかお前、あいつに嫌われてねエか？」

「嫌われているというか、苦手意識は持たれているな。せつかくフィジカルが強いのにメンタルが貧弱だったから、新兵時代に語尾に『ドン』とか『ザウルス』とか付けて煽った結果ザウルス」

爬虫類とか恐竜好きの、リユウリユウの実古代種、モデル「アロサウルス」の能力者であるドレイクには効果覷面で、『恐竜をバカにするなアツ!!』とすごくキレられた。

その甲斐もあつてか、はたまた関係なく自分に自信が持てたのか、オドオドしていたのがちゃんと胸を張って話せるようになったように良かった。

「あなたその、別に嫌われてもいいやっていう考え方どうにかならないの？ ヒナ苦言」

「人を育てるって難しいから。それに、嫌われても二度と仲直り出来ないわけでもなし」

先生とか人を鍛える立場って、嫌われるものじゃないのか？ よく

『あの先公マジうぜえ……』といった心の声が聞こえてきたけど。

「(彼はあなたより年上……:というかわたくしと一つしか変わらないのだけど)そういうえば、あなたが面倒見ていた海賊の子はどうしたの?」

『汗臭い修行はもうこりこりなんだよ! もつと甘やかしてくれて、一生だらだらしても怒られない場所に行ってくる』って置き紙して消えた。アツカンベーした絵と電伝虫の番号も書いてたな」

「仲が良いのか悪いのかわからないわね……」

置き紙の過去を読み取ったが、誰かに攫われた様子でもなかったし、たまに電話がかかってくる。獣臭い奴がいるとか愚痴られる。

「話を覇気に戻して、実演するところだ」

ポケットからレベルツカと武装色の訓練を兼ねて遊ぶ用のバルーンアートの風船を取り出し、

パン!

武装色を流し込み、内側から破裂させた。

武装色が弱いオレがしても大した威力は出ないが、ゼファーさんがこれをやると一撃で敵を戦闘不能にする必殺技になる。

父さんが奴隷の首輪を外した方法もこれだそうだ。武装色が強い人間がやれば、海楼石の手錠も壊せるかもな。少しずつ上がってはいるものの、今のオレには不可能だが。

「武装色の流れを感じるようにならないと、コントロールが上手い人間相手だときついぞ。先程まで自分の武装色で防げる拳が、一瞬で危険な攻撃に化けるから」

「……拳銃を使う中将以上の人が少ないのって、これが理由?」

自分の武装色で拳銃を壊してしまうから、ということか。いい線いっている。実際、壊さないよう少量の武装色しか発砲前の時点では纏えない。

「それもある。後は新世界の海賊には銃弾を避けられる奴はゴロゴロいるらしいから、当てるためには相手を上回る見聞色が必要になってくる。逆に使っている人は、発砲の瞬間、拳銃から飛び出た銃弾に武

装色を流す素早い武装色のコントロールと、相手の動きを読み切る見聞色に自信がある人だな」

オレは見たことがないが、おつるさんがライフルを使っていたとか。ダデイが拳銃で練習中だ。

20年程前にインペルダウンに投獄されたという。世界の破壊者。バーンデイ・ワールドは、モアモアの実の能力で銃弾の大きさと速度を最大100倍まで倍加させ使用していたと、父さんから聞いたな。

武装色を纏うなら矢やボウガンの方がやりやすい。ガープさんがそこまで考えているかは知らないが、あの人の【拳・骨・隕石】は意外と理に適っている。砲弾を大砲より速く投げられるなら、手で掴んで武装色を纏い投げた方が威力が出る。

「じゃあアインちゃんには自信があるってこと？」

「あいつはあいつで特殊というか例外というか、悪魔の実の能力の裏技を使っている」

「どういうことだ？」

「能力者と能力は見えない何かで繋がっている。それを利用して、あらかじめ銃弾をモードモードの能力で1年戻して、銃弾が発射されてから目標に着弾する前に武装色を流しているから、時間の余裕がある分、普通よりスピードが必要ない」

オレが【レイド・ラプターズR R】でよくやる手だ。

利点がある反面弱点もあるが、それをやってくるのは父さん位だ。赤髪”や”鷹の目”辺りは出来るかもな。オレはまだ出来ない。

「スモーカーさんだと、自分の体ではない、葉巻の煙なんかも操れるようになれば、煙を吸った相手を内側からズタズタに出来るようになるから、厄介だな」

クザンさんが氷を操るように。

あの人は水も操るようになったが。ネプチューン軍の訓練に混ぜて覚えた【水心】をパクられた。氷の能力が水と相性が良かった

のか、魚人族や人魚族のように、オレより大量の水を操れる。

「煙は武装色で防げないってこと？」

「煙というか空気？ 防げるものに個人差はあるだろうが、オレは武装色を使っている間、呼吸が出来なくなっただことなんてないな。スモーカーさんみたいに、能力で体を煙に変えているなら、問題なく攻撃出来るが」

こちらの攻撃の風圧に身を任せ避けるようになってきたのがやりにくい。そのうち理科の実験みたいに、煙で雲を作りだすかもしれない。

「当たり前と言えば当たり前だが、つまり毒ガスも防げないってことか……それにしてもお前、負けると普通に悔しがる癖に、そういうアドバースとかはするな？」

「敵ってわけじゃないからな。相手が強くなったなら、その上で超えていけばいい。それに、そういうことはオレを倒してから言ってくれ。スモーカーさんに負けたことはないぞ？」

「はっ、言ってる」

「ふははっ、歳はオレが下だが、先輩としてのアドバイスだ。覇気は奥が深い。能力と組み合わせればさらに力も増す」

言いながら、両手の人差し指を上に向け、指先から武装色を流し、文字を形作り硬化させる。

宙に正義の文字が浮かぶ。

「あら器用……でも、これ意味あるの？」

「当然ある。出来るようになったら教えようか。どう使うのか、考えておいてくれ」

「この歳で宿題を出されてしまったわ……」

そこまで話したあたりで2人と別れた。

さて、ゼファーさんの病室に行くか。

「ぶわっはっは！ 思ったより元気そうじゃな、ゼファー！ 煎餅食うか？」

「フツ、腐るのは止めだ。あのクソ海賊はおれが捕らえる……あとそ

の煎餅は、元々おれへの見舞いの手土産だ」

「お茶入れるから大人しくしてな(驚いたねエ……ガープじゃないが、もつと塞ぎ込んでるものと思ってたよ)」

「まあ今は休んでおけ(少々危ういが持ち直したか……今度ばかりはもうダメかと)」

病室に近付くと声が聞こえてくる。ガープさんにおつるさん、センゴクさんが来ているようだ。

海軍首脳会議の会議室ですか？　ここは。

コンコンコン、と扉をノックする。

「今日シャボンディを発つしがない賞金稼バウンティハンターぎだ。入っていいか？」

「おお、ロゼだな。入れ入れ！」

「……ここはおれの部屋だ、ガープ。まあいいが。数日ぶりだな」

許可を得てから扉を開き入室する。

ゼファーさんがベッドの上で体を起こし、傍らに椅子に座った2人と空いた椅子が1つ。おつるさんが急須でお茶を入れている。

「3人とは結構会うけど、おつるさんは久しぶり」

「……元帥のセンゴクと訓練教官のゼファーはともかく、なんであたと同じ中將のガープは久しぶりじゃないんだろうねエ？」

「んっ!? あ、いや、それはあれじゃ。高度の柔軟性を維持しつつ、臨機応変に対処するためにじゃな……」

「目が泳いでるよ」

慌てるガープさんを尻目に、椅子を持ってきて、お茶を貰う。

「ありがとう。前に会ったのは、ガバナーの武器の横流しの証拠を渡した時だったな」

「そうだねエ……20年程前の軍法会議じゃ証拠不十分で無罪になったけど、よくまああそこまで詳しい証拠を見つけたねエ」

過去を覗いて現場をそのままプリントした。この手に限る。

他にはネズミとかの横領も押さえたな。

「それで、どうなったんだ？」

「相応の処分が下されたよ。正義つてのは時に非情な選択を迫られるもんさ。でも、それはあたしらの力不足故のこと。驕つちやいけない

よ。ましてや、金銭欲や権力欲に溺れて私腹を肥やすなんて言語道断さね」

「はあ……情けない。新兵時代にぬるくし過ぎたか……?」

「だからお前は今は休め。ガープ、お前には後で話がある(情報違いであつて欲しい……)」

「えーッ」

考えてみれば、この同期の4人が揃う所を見たのは初めてだな。おつるさんがたまにしか会わないから。

「はいこれ、ウチのパティシエに作ってもらったお茶菓子」

ゼファーさんに、持ってきた紙袋ごと渡す。

「ああ、機甲旅団の」

「機甲旅団……? オレと愉快的仲間達のことか? 牛や鶏を数に入れても旅団規模の人数なんていないぞ?」

航海士で、航海日誌を魚人島に報告するウイリー。

狙撃手のトリガーハッピー気味なダディ。

操舵手の、この前借金取りのトマトギャングに肩代わりして借金0ベリーになったパンダマン。

医者の特リスタン。内科医寄り。尻尾含む色々もふもふ。

科学者のレイジユ。レイドスーツのデザインがエロい。ジャツジの趣味……?」

そして娯楽枠に、パティシエのメイプル、音楽家のキャロル、踊り子のスカーレットとお花屋さんのレベツカ。

牛乳や卵を恵んでくれる牛や鶏達。

最後に、操帆手、船大工、斥候、教官、看守、飼育員、戦闘員その他を担う農民であり雑用、ついでに名目上の船長のオレ。

合計10人とちよつとだ。正直あの船に乗るにしては少な過ぎる人数。足りない人手はオレが補っている。元々は1人で動かそうとしていたし。

「お前1人でそのくらい増えるだろ」

「ただの旅する団じやな」

「まだ人数欲しいな。船大工に植物学者、ファッションデザイナーあたりが特に」

他には、出来ればコックも欲しい。今の所交代で作れる人が作ることになっている。

「船大工はまあ普通だな。植物学者も、お前の目的を考えれば納得だ。ファッションデザイナーってなんだ……？」

「衣食住は人間生活の基本だろ。船員……団員には健康で文化的な生活をしてもらいたい」

「そーいやサンダルはやめたのかい？ 革靴になってるねエ」

おつるさんがオレの靴を指差しながら言う。

「……レストランなんて行ったことがなかったから知らなかったが、男のサンダルは服装規定違反だった。ずっとオレはサンダルで魚人島の王族に会っていた、人間族の恥さらしだったんだ……恥ずかしい！」

スカーレットに聞いて初めて知った。無知の知らぬ無知の恥だ。

何故オトヒメ様達は教えてくれなかったのかと思っただが、人口の半分近くが足がなく尾ひれの国にそんなマナーはなかったようだ。

文化の違い。ワノ国なら市中引き回しの上打ち首獄門が妥当であつただろう……いや、あの国は草履だからサンダルでも問題ないか？ サムライ！ ハラキリ！ ブシドウ！

「妙なこと抜けてる子だねエ……まだ10代のひよこが、そんなに気にすることじゃないよ」

「ぶわっはっはっは！ ロゼも昔に比べればデカくなったが、おつるちゃんにはひよこか！」

「あたしやアンタのことも、デカイジジイのガキだと思ってるよ」

「ジジイのガキって何じやあ……？」

「的確な表現だ」

そんなことを話して、お茶を飲みながら過ごし、病室を出た。

☆☆☆☆

病室を出て食堂、三大将にこの前の奢りをしながら、ゼファーさんの様子を話した。

その後はオレの旅の行き先の話になり、

「それで、お前はまずどこに向かうんだ？」

「とりあえず、魔の三角地帯を迂回してウォーターセブンに行く」
フロリアン・トライアングル

あそこに島はないし、七武海と無用な衝突も避けたい。あの男があの海域に潜んでから、ウォーターセブンから来る海賊は実際いなくなつた。

ステューシーの話では、特別だの異常だの過負荷だのスベシヤルというズンビがいるらしい。

もし除名でもされれば狩りに行くかもしれないが。

「まあ、あそこは避けた方が良さそうねエ（シキみたいな脱獄防止を兼ねてるとはいえエ、政府は少々モリアに力をつけさせ過ぎな気もするけどオ……）」

「新世界に行けい、新世界に。何を呑気に観光旅行なんぞしようとしちよる」

「今のオレが行っても、ドラゴンの群れにアリが突っ込む愚行だろ」

こつちには10歳未満の子供が2人もいるんだぞ。あんまり危なつかしい真似が出来るか。

「アリはアリでもシロアリ、それも羽つきの増殖するシロアリじゃ。お前には、勝てずとも負けん戦い方が出来るじやろうが。屋台骨を食いちぎって引っ掻き回してこい」

「羽虫の害虫扱いは流石にキレそうだ。あんな霸王色で駆除出来る程度の存在と同等だと……？」

せめて益虫のクモならまだしも。

「お前、害虫駆除に霸王色使つてんのか……（というか、ナチュラルに『新世界に行く』四皇にケンカ売る』って思考回路してんのな、こいつら）」

「すぐ終わるし、殺虫剤いらずで子供の体にも優しい」

おかげで我が家に飲食店の天敵、黒光りして増殖し飛翔するGはい

ない。昔メイプルに言ったみたいに、賞金稼バウンティハンターぎと食材集めしながら、飲食店やるのもありだな。

「餞別じゃ、持って行け」

食事を終え席を立とうとした時、そう言っサカズキさんが渡してきたのは

「髭の生えた電伝虫？ 何だこれ？ 初めて見たけど」

噂に聞く盗聴妨害の電波を飛ばす白電伝虫か？ 希少種の。

「わしのゴールデン電伝虫の電波を受信するシルバー電伝虫じゃ」

ゴールデン電伝虫、バスターコールを発動させる時に使われる特殊な電伝虫。

バスターコールとは、海軍本部中将5名と大型軍艦10隻を一点に召集する緊急命令。

国家戦争クラスの軍事力を有し、島一つを消し去ることが出来る程の力を持つ。任務を遂行のためならば、敵味方関係なく無差別攻撃することも厭いとわない。

オハラや「鬼の跡目」等を対象に発動されたことがある。

「オレのことをバスターコール扱いするのはやめてくれないか？」

何が餞別だ。オレを扱こき使う気満々じゃないか。

「『機甲』は気に入らないんだろ？ じゃあ『一人バスターコール』とかでよくない？ あつ、おれも渡しとくわ」

何その物騒かつ寂しい異名。

オレ以外人が集まらなかつたみたいだ。オレだけハブられたみたいだ。

「オレがぼつちみたいだからやめてくれ。というか、あんたらもオレと同じような結果が出せるだろ」

「見た目の物量的にイ、キミが一番似合ってるねエウ。わっしのも、はい」

どんどんオレにシルバー電伝虫が集まってくる。

こんなにいらぬ。というか一つもいらぬ。何故この人達は、オレを弄る時は一致団結するんだ。

「返却する。不要」

「海兵以外の人間の発言は却下じや」

「圧政!? 世経せけいに取り上げられて世間様からバツシングされる!」

「あそこは政府と繋がっちゃうけるけエ、そんな見出しは書かん」

サイファーボール
C P お得意の情報操作か……。

「お前なら民間人に被害出そうとしないだろ? (まあ、バスターコールする気ないけど)」

「コスパが良い上、軍艦10隻を動かすより、君1人飛んで行った方が速いからねエ〜」

「動員出来る戦力は多いに越したことはないわい」

三者三様の返答がくる。

「それに、本当に返してしまっただ構わんのか?」

「何? どういうことだ?」

もしかしてバスターコール以外に、他に使い道が

「わしに返せば、オハラの時のように、お前の思想に沿わないやり方にバスターコールが使用されるかもしれんぞ?」

「なっ!? や、やり方が汚いぞ!! それが正義のやることか!」

あくどい顔しやがって……まるでマフィアの首領トクシだ。

「必要な犠牲じや。文句があるなら口先ではなく行動で示せ。わしの言いたいこと、わかるな?」

「ぐぬぬ……」

つまり、『口で否定するだけなら誰でも出来る。代案を出せ。言う通りに動いてやる義理はないから、そうしたいなら先に自分で行動しろ』といったところか。

「なんでこいつら、これで意外と仲良いんだろ?」

「海賊を倒すに至る過程や手段が違うだけでエ、好みが全く合わないわけじゃないからじゃない? この前盆栽の話で盛り上がったたよオ〜」

「渋いな……」

サカズキさんの脅しと言える言い分に屈し、結局受け取ることにはした。レイド・ラフターズ【R R】だけ送るか。それが最適解。本体であるオレを倒せば

消えるのにオレの居場所が遙か彼方。

それで海賊だけ倒して民間人は逃がそう。オレなら見聞色で見分けられる。

寝ている間も、そして今も能力を使い船の出航準備をしているせい
か、日に日に悪魔の实の能力が上がっているのを感じる。

さつきサカズキさんが言っていた『屋台骨を食いちぎれ』とは、
レイド・ラフターズ

「R R」だけでひたすら四皇の縄張りを荒らし回り、兵糧や金を焼
くなり奪うなりの嫌がらせをしつつ倒せる敵は倒して、勢力の力を削
れということだろう。

性格は悪いが、やられたら非常に困る手だ。オレならキレて本体を
草の根分けても探し出し潰しに行く。だから今はやらない。

船にはアジサイを含むいくつかの花もあるから、たんとお食べ、シ
ルバー電伝虫達。なんか名前で親しみを覚える。

「金はいらんが、オレを呼ぶ度に貸しが発生すると思ってくれ。まあ、
オレがいなくなっても、仲良くしなよ……あつ、すまない」

「あん？ 何謝ってんだ？」

「サボリ魔に」

クザンさんを指差す。

「マイペース」

「ん〜？」

次にボルサリーノさんを指差す。

「そして味方フレンドリーファイアへの誤射ならぬ、味方フレンドリーマゲマへの肅清」

「なんじやい」

最後にサカズキさんを指差す。

「……こんな3人に『仲良く』などという、高度に社会的な行動を期待
するなんて……無茶を言つて、本当に申し訳ない。オレの頭はどうか
していたようだ。まあ、殺し合わないことくらい、出来るよな？ そ
れとも、ちよ〜つと難しかったかな〜？」

「シロアリキツと一人バスターキコールの意趣返しか。煽りおるわ」

「これでケンカしたらア、もオ〜つと小馬鹿にされそうだねエ……」

「幼子に接するみたいなの口調が腹立つ」

レベツカと話したり、シャボンデイの子供に路上でレイド・ラフターズ「R R」のサーカスもど擬きの芸を披露する時の口調が出てしまったか。

まあいい。オレは確かに貸しだと言った。記録はした。気軽にポンポン呼び出そうものなら、オレも遠慮なく取り立てるからな。金でなんて済まさんぞ。

というか海軍所属じゃない者にこんな物を……外堀を埋めようとしてる？ 入隊させるための既成事実作り？

まるで家に来た時に歯ブラシを置いて帰って、自分の痕跡を残そうとするような……ダメだ、あの3人で想像するな。吐きそう。

☆☆☆☆☆

マリンフォードから飛んでシャボンデイに帰宅する。

父さんと母さん、ハンコック達に、珍しくニヨン婆もいるな。

「ただいま。ニヨン婆久しぶり。元気にしてたか？」

何かまた縮んでないか？

「おお。そなたの門出じや。見送りにニヤ……そなたのわしへの態度は昔と変わらぬニョウ」

「ん？ ああ、九蛇クヅジャじやないからな」

「あそこの者達は、年々わしへの対応が雑になってきておる。近頃の若い者は……もつと年寄りを労わる心をじやな」

あそこは強いものこそ美しい。

年老いてかつての強さを失った元皇帝には、たいした敬意は払われ
ないらしい。

「いつまでも年寄り臭い話をしておらず、さっさとそこをどかぬか！」
「なんじやとオツ！」

「いつかみたいにニヨン婆蹴り飛ばしたら、しばらく電伝虫の着信拒
否する」

以前、『誰じや!? こんな所に老婆を置いたのは!?』とニヨン婆を蹴り飛ばすという考えられん暴拳に出たハンコックにドロップキックをかまして九蛇海賊団クヅジャと戦争ケンカした。

懐かしいな。今考えたら皇帝を足蹴にしたオレも大概だな。

「お、おのれエ……（老婆の分際でわらわを差し置いてチャホヤされおって……！）」

「もう少し敬老精神を持って、罰は当たらないんじゃないか？」

ていうか、ニヨン婆がいなかったらお前達は女ヶ島にようがしまに帰れなかったかもしれないのだが。

「姉様あねは、この前口ゼをお持ち帰り出来なかったからご機嫌ななめなのワン」

「ニヨン婆に妬いてるメエ」

「気に入ったのか、それ？」

ソニアとマリーがイヌ耳とヒツジ耳のカチューシャを付けていた。ワンダーソニア（仮）とメリーゴールド（仮）だな。

今年最後にルスカイナを訪れた時のこと。

ハンコック達が料理を作ってくれたというのでありがたく御馳走になると、美味しそうな鍋が運ばれてきた。

何でも出来るなど思いながら、一口食べて美味しいと感じた瞬間、舌が石化した。フウ、またこれか……。

喋れなくなったので見聞色を使いハンコックの体に直接聞くと、隠し味にメロメロの能力を使って、拉致しようとしていた。「メロメロメロメロ献立」というらしい。

ハンコックは普通にしていたら完璧で幸福な美人なのに、どうして余計なこととしてオレの評価を落とすのだろうか？ 解除してもらって食べたら味はとても美味しかった。

何故最初から素で出してくれないのか……歌の時も似たようなことを思ったな。

Sの皮を被ったMなんじゃないかと疑問。なので、試しに角に翼、尻尾を付けて悪魔みたいな仮装しないとしばらく口を聞かないと軽く辱めてみた。

コケティッシュな衣装に身を包み、口では『屈辱じゃ……！』と言いなながらも、どこか満足そうなサタンコック（仮）が降臨した。この

人どっちの気もあるわ。

ソニアとマリーが今付けているのは、その時戯れたわむに付けてたやつだな。

「妬いてなどおらぬ、怒っておるのじゃ！ 全く、しばらく会い辛くなるのでわらわが直々に会いに来たというに、しわくちやの老婆と戯れおってからに……」

「？ 旅に出るから今まで通り、遊びに行くつもりだったんだけど、まずかったか？」

「え？」

「え？」

なんでそんな予想外みたいな顔なんだ。

その後、ハンコックの機嫌が直ったのかいつもの調子に戻り、

「双子岬に行って灯台守のクロツカスに会ったら、これを渡しておいてくれ」

父さんから手紙を渡された。

双子岬は偉大なる航路グランドラインの入り口だな。

たしかクロツカスという男は、人探しのために数年同じ船に乗っていたんだったか。

「わかった。急いだ方が良いか？」

「なに、ただの世間話だ。ついででいいさ」

そうか。東の海イーストブルーに行く時、もしくは偉大なる航路グランドラインに戻ってくる時ついでに寄るか。

手紙を懐に入れる。

「ハンカチ持った？ テイツシュは？ 何かあったらいつでも帰ってきなさいね？」

「大丈夫だ、問題ない」

遅くても次の誕生日にはまた会うだろう。

オレの誕生日は毎年、感謝の手紙を父さんと母さんに渡す日だ。

「そろそろ行かせてやらんか、シャツキー……もうかれこれ1時間だぞ」

「ていうかあと3年くらい遅らせても良くないかしら？　まだ15歳よ、15歳」

「ワノ国なら元服して大人の仲間入りだから平気」

今年になって旅に出ると言ってから始まった母さんのブロックを躲し、コーティングした船がある魚人島に向かった。

☆☆☆☆

魚人島に着き、竜宮城でしらほしと遊んでいるレベツカ、キャロルの子供2人と保護者のスカーレット、あと挨拶すると言っていたレイジュを迎えに行く。他の船員は船の方だ。

「お帰りダーリン♡」

「ただいま……ここオレの家じゃないけど」

「私があなたの帰る場所！」

レイジュが腕に抱きついて来た。

初めて会った時は、可愛くも、控えめに言って今のレベツカ達と変わらないつるぺただったが、しばらく見ないうちにずいぶんきれいになった。前に写真を見せてもらった母親によく似ている。会えなくて残念だな。

少し離れた場所では、ネプチューン様にオトヒメ様、スカーレットがティータイムと洒落込んでいる。ネプチューン様、居心地悪そうだな。

「それで、あの子達は何してるんだ、フカボシ？」

「聞けばわかる……」

何か言い争っている様子の子供3人を遠巻きに眺めているフカボシ達に促され、耳を傾ける。

「私のお兄様達の方がすごいです！　歌って踊って戦えます！　3人に勝てるわけじゃないです！」

「私のお兄様の方がすごいもん！　飛行機雲で絵を書いたり、花火打ち上げられるもん！　なんか良い匂いするし！」

「まあ結局のところ、私のパパが一番すごいんだけどね？」

ああ、なるほど。自慢されてうれしいから止め辛いのか。ケンカというにはかわいいじゃれあいだな。

まあでも、いつまでも待つてられないから、ここらで止まってもらおう。

「おーい、そろそろ行くぞー!」

「お兄様は黙ってて!」

「そうです!　がーるずとーく中です!」

「今大事な話をしているところなのよ!」

総スカンである。姦しい。

「大人はそういう時、みんなすごいって優劣つけず結論出さず、仲良く笑い合うもんだぞー!」

「キャロルちゃん様のお父様はお会いしたことがありませんのでわかりませんが、ロゼさんも高性能ですごいのです」

「ダディさん、渋くてカッコいいよね。さすらいのガンマンってかんじで!」

「しらほしちゃんのお兄ちゃん達の歌と踊り、わたし好きよ」

背伸びしたい年頃なのだろう。この手に限る。

「あらあの子、子供の扱いに手慣れ過ぎ……?」

「普段レベツカにも、嫌われるどころか慕われた上で、上手く勉強とか教えてますね」

「あの子わからないところを見聞色で読んで教えてるらしいですよ?」

ウチのしらほしに一番厳しいのもあの子だけど、全然嫌われてないし(ロゼがいなくなると、外に出る度に左大臣達の小言が……天使達と一緒に連れて行きましよう。最近遅しくなってきたし)「たぶんわしらがりらほしに甘過ぎるんじゃないもん……」

無事妹とキャロルを回収。

だがまたオレにレベツカの矛先が向いた。

「お兄様は戦わない方が良いと思うな……雰囲気怖くなるし。特に目が怖い」

「そ、そうか。怖いか……」

「私は大好きよ！ 何もかもを見通すような鋭い眼光、あなたの前じゃ私は丸裸……」

「……ありがとう。かなり大げさだけれどうれしい」

「ああダメ、直視出来ない……♡」

「おっと」

目を見て礼を言うのとダウンした。早く慣れてくれないものか……。

「何ですかあれ？」

「元々好いていたのが、久しぶりに成長したロゼの姿を見て、見た目にも惚れ直したそうです」

「若いですね。私にもあんな時代がありました……」

「（あの娘、声がオトヒメに似ている上内容が内容だから、話している声が聞こえると複雑な気持ちになるんじゃないもん）」

「オトヒメ様だってまだお若いじゃありませんか」

「いえいえ、あなたのお肌もとってもきれいで、妬いてしまいます」

「（女子トーク混ざり辛いんじゃないもん）」

とりあえずレイジュを背負う。

「とくにくかくく！ お兄様はもっと私に構うべき。ネグレクト！」

「ふははっ、構ってちゃんめ。心配せずとも、これからは一緒に居る時間が増えるだろう」

「ホントツツ!？」

「ああ。だからその分、いっぱい勉強しような」

「ワイイ、オベンキョ。レベツカ、オベンキョ、ダーイスキ……」

レベツカの目から光が消えた。子供がしている顔じゃない。

学校に行っている子に比べたら、短い勉強時間なんだがな。ノルマを達成したら終わりだから。ウチの妹は優秀だ。

「ご愁傷様……」

「嘘嘘。さっさと終わらせて遊ぼうな」

「私、空を走れるようになりたい！」

表情がコロコロ変わって、賑やかな子だ。

「【月歩】^{ゲツポウ}か。まずは壁走りや水面走りが出来るようにならないとな。あと他人事みたいな態度をしていたが、キャロル、お前も勉強だ」

「何故!? どうして!? WHY!?!」

「嫌がり過ぎだろ……最低限の知識は身につけなさい」

「いつしよ! なかーまー!」

レベツカがキャロルの手を握る。

まるで『お前だけ逃がさないぞ』とでも言いたげな様子だ。

別れを告げて、竜宮城を出る。

起きたレイジュにスカーレット、子供2人を連れて、港町サンゴが丘に到着。

城から見えていた我が船、船首がハヤブサを模した巨大船
レイド・ラフターズ

R R 号に近付いていく。

「パパート! 助けてパパート! ^{悪魔}ロゼが、^{知識}シルバース・^{悪魔}ロゼが
^{洗脳魔法}数学の公式でわたしを操ろうとしてる!」

「何のこつちや……?」

「まるで意味がわからんササ……」

キャロルがダデイに泣きついた。

たぶんオレのことだろうが、ウィリーとパンダマンには通じていない。そりやそうだ。

「おお、可愛いキャロル! 女の子が大きな声出して走るのははしたないからダメダメよ〜?」

娘の前ではだいたいあんなかんじだ。初めて見た時は驚いた。

そのダデイが顔を引き締めこちらを向く。

「おい、キャロルはまだ7歳なんだから、別にいいだろ。教育ママじゃあるまいし、お受験戦争でもするつもりか」

「あれで意味がわかったんですか!?!」

「ゲソー……あれが親子の以心伝心……」

「私達には馴染みがないわね……」

トリスタンとメイプルが驚き、魚人街出身のシャーリーが何気に悲しいことを言っている。

「良いのか? キャロルの教養が足りず、チャライ男に騙されて、

『ちーす！ おれ、ちよつと前から？ キャロルと付き合ってたアス！ つーことでエ、しくよろ、お義父さん』とか言ってくる日が来ても」

「カツハツ!? 済まないキャロル……パパは無力だ……!」

「パパ！ しつかりパパ!」

ダディを仕留めた。

「むごいのう……」

「ニユル、一撃だな」

「たぶん、娘を持つすべての父親のウィークポイントをドンと抉ったねエ」

「自分だってレベッカあたりがそんな男を連れて来たら、吐血するか血の涙でも流すだろうに」

ジンベエ、はっちゃん、デンさん、アラデイン、魚人島の男達から非難の視線を浴びる。

何とでも言うがいい。オレとて団員を守護まもらねばならぬ。団員を守護まもるのがオレの仕事だ。

皆を船に乗せ、改めてデンさんに船の礼を言い、魚人島の皆とのしばしの別れの言葉を交わす。

そしてオレ自身も乗船する。

「さて、出航準備はすでに済ませてある。忘れ物はないか？ ……な
いみたいだな。それでは出航する。まずは浮上し、ウォーターセブン
に向かう」

港を出て、地上に向けて発進するRレイド・ランナーズ R号。

お前が地上に出るのは初めてだな。今はちよつときつそうだが、これから能力さらに鍛えて、いずれはお前を丸ごと空まで飛ばしてやるから、これからよろしくな。

“A t e b r e v e ! O b r i g a d o !”

友人達に見送られながら、レイド・ラフターズR R 号が魚人島から出航し、船に大量に繋がれたクウイゴスの木片の浮力により上昇する。

「何度見ても大きい海獣に海王類……」

「本当ね……でもまったく襲ってこない。まるで魚人島を守っているみたいね」

今まで何度か魚人島に来ていたスカーレット、レベツカ母娘が、魚人島の周りを遊泳する海王類達を見て感慨深げに呟く。

実際に守っているのかもな。しらほしのこともあるし、昔人魚姫が誰かに頼まれたとか。

「それで、最初はウオーターセブンやったか？」

「ああ、魔の三角地帯は避ける。エターナルポースこれが永久指針だ。その後は海列車で行ける島々を巡りたいな。ただしエニエス・ロビーは除く」

航海士のウィリーに渡しておく。
他のも後でシルバー電伝虫を置きに行くついでに、部屋から持つてくるか。

こいつらの受話器に『赤、青、黄』と書いて誰がバスターコールをしたかわかるようにしておこう。一度ポケットに入れたことでもうごつちやになってしまったが、過去視で判別出来るだろう。

「フロリアン・トライアングルなんで魔の三角地帯？そこを避けるの？」

「お前、ゾンビに会いたいか？悪魔の実の能力で死体を動かしている七武海がああ海に潜んでいるんだが」

「絶対にイヤよ！」

質問してきたキャロルが顔をしか顰めて拒絶する。

もつとグロテスクなものを生み出せても、死体は嫌なようだ。
キャロルがダディにしがみ付きに行った。ダディの顔が緩む。

「ゾンビなんて見たくないでゲソ……」

「私もゾンビはちよつと……」

「ゾンビだけでなく、幽霊船の噂もあるぞ？」

「お、オバケ!？」

「ふふふ、そんな幽霊なんて、非科学、非科が、非科かかか……！」
「ふ、震えてますよ？ レイジユさささ……！」

フロリアン・トライアングル
魔の三角地帯を避けることにして正解だったようだ。

死体はキャロル、メイプルが。

幽霊はトリスタン、レイジユが。

スカーレットとレベツカはどっちもダメなようだ。顔が青ざめ体が震えている。

「動く死体だの幽霊だのより、影取られて太陽浴びたら死ぬ方がヤバい」

「塩が効くってジンのアニキ（※ジンベエのこと）に聞いたなあ」

「借金取りの方が恐ろしいササ……」

男性陣は平気そうだな。

パンダマンは、あのトマト頭の取り立てがそんなに怖かったのか。『金がないなら、腎臓売るなり心臓売るなりして作らんかいワレエツ!!』とか言われていたな。もう借金するなよ。闇金は特に。他にも原因不明の失踪の噂もあるし、霧が深くて作物にも悪そうだ。

「まあ心配するな。死体は火葬でもすればいいし、幽霊は武装色で攻撃出来るから」

「わーい！ お兄様頼もしいー！」

レベツカがスカーレットの手を握った逆の手で袖を引っ張ってくる。

もし出てきたら、鞭で叩いて除霊（物理）してやろう。レベツカを怖がらせる死人は冥界に帰れ。

「火葬って……少し罰当たりな気もしますが……」

「他にどうしろと」

医者の特リスタンから苦言を呈されるが、流石にもう死んでしまっていてはな……海に落として水葬の方が良いか？

「……どうして、幽霊に武装色が有効だと知っているのササ？」

「やっぱいるんでゲソか？ 幽霊殴ったことあるんでゲソか？」

「こいつやったら、見えたり聞こえたりしても不思議やないなア……」

「電波系なものね」

「怪しいものがあれば、とりあえず殴る脳筋でもある」

「いやいや、そんなまさか……幽霊なんて存在するなら、ジェルマも天竜人もとつくの昔に犠牲者の呪いで滅んでるわよ！ だからいいわ！ 私が生きてるもの！ Q. E. D.」

「あなたはそれで良いの、レイジユ……？」

「？？」

スカレットが手を繋いだままレベッカの耳を塞ぎ、オレのさつき
の発言が話題に取り上げられている。

確かにたまに、誰もいない場所から声が聞こえることがある。恨み
がましい、怨嗟の声のようなものの中にはあった。

オレは人間以外の動物や無生物の心の声も聞こえるが、意味不明の
言語で聞こえる。意味が分かるということは、つまり人間の声のはず
だが……このことを言っても恐怖心を煽るだけだな。

話をしたり、シルバー電伝虫を置いて来たり、持ってきた永久指針^{エターナルポース}
をウイリーに渡していると、地上の光が見えてくる。

シャチの魚人のウイリーが、超音波を出し周りの生物に道を開けて
もらったおかげで、何事もなかった。

ウイリーは、水中ではクリック音と呼ばれる音を、地上では『ぶ
るあああ!!』と大声を出し、その反響音を聞くことで周囲の状況を知
ることが出来る。反響定位^{エコーロケーション}と呼ばれる、ソナーと同じ原理のもので、
シャチの他にはコウモリが用いることで有名だ。

これにより、魚群や海王類の探知、さらに巨大な海流や渦潮等を事
前に知ることが出来る。複雑怪奇な気候の偉大なる航路^{グランドライン}で、頼もしい
特技を持つ航海士だ。

ズバン!!

無事海面まで浮上したところで、「ブラック・ローズ・ガイル」の鎌

風で船を覆うシャボンを切り裂く。

鞭を覆う武装色を刃物のような鋭利な形状に変えて硬化する【魚鱗ぎょりん】
「黒鞭こくべん」を使うことで、飛ぶ斬撃の切れ味を上げている。

シャボンデいとそう離れていない所に出てきた。

海軍の軍艦と九蛇クジャの船が泊まっているな。あの2人、何をやってるんだ？

「さっさと鞭で切る変態……」

「銃弾を銃弾で撃ち落とす変態に言われたくはない」

刀では不可能な曲がりくねった軌道で斬撃を飛ばせるから、避けにくいという利点があるんだぞ？

「どっちもおかしいです」

「鞭どころか足や手、果ては箸でも物を切れるのに、『オレは剣士ではない』と主張しているでゲソ」

お前達はお前達で変わっているからな？

ドーピングして殴る弓兵アーチャーに八刀流剣士よ。

「剣士を名乗るなら、剣ではなく自分の体で相手の攻撃を受けたら負けみたいなものなんだよ。オレは【鉄塊テツカイ】や能力を使って体で受けることも多々あるから剣士ではない。レベツカは頑張つて剣士になるうな」

出来ればレベツカに【鉄塊テツカイ】の修行をしたくない。本人がどうしても習得したがつたら、心を鬼にするけどさア……。

「……竹刀でえ〜？」

「竹刀で。竹刀でもオレみたいに【魚鱗ぎょりん】を使えるようになれば切れるから」

「剣なんて、お母様許しませんからね！ レベツカが怪我したらどうするんですか！ ていうか戦わせませんよ!? 危なっかしい！」

レベツカは不満そうだが、保護者の許可が下りんからな。今まで海賊から没収した武器の中には、普通の剣も仕込み刀もあるが、仕方ない。

刃を潰した剣ならセーフかもしれんが、竹刀には剣よりも柔軟性があるという利点もあるから。武装色の訓練をすればある程度は変わ

らん。流石に切れ味は劣るが、子供が剣を持っていたら逆に変なのが寄って来そうというのものもあるからな。竹刀なら剣道少女で通るか？

「ん？　　なんや誰かこっちに駆けて来てるなア」

「ゲッポウ月歩」だな。大した姉ちゃんだ」

ウイリーとダデイが見ている方向から、ステューシーが飛んで来ている。

あっちの船2隻と関係あるんだろうか？

「あつ、サイファーボールC Pのエロい人です」

「……偉い人だろ？」

エロい人ってトリスタン……。

「いえ、エロい人で合ってます」

「エロいのか……」

「えっちなのはいけないと思います！」

散々な言われようである。

あと止めてくれレベッカ。その言葉はオレに効く。人差し指を立てて『めっ！』ってしてるのはかわいいが。

「なんか、酷い言われようね……悲しいわ。今度誰かさんにこの悲しみをベッドで慰めてもらわないと」

ステューシーが甲板に着地して、アンニユイな表情で頬に手を当て、こちらを見ながらそう言った。

「これはエロいササ」

「あの……ウチの子達の教育に悪いので、帰ってもらえませんか？」

「あら冷たい……私は彼へ挨拶に来たのもあるけど、そちらの方の女王様？　あなたに、元リク王家王女であるあなた達母娘のために来たってのもあるのよ？」

スカーレットから冷たい視線をもらう。

これは、『色香に惑わされて自分達のことを喋ったのか？』、という感じかな？

「きれいなお姉さんは好きですか？」

「大好きだ」

「やはりッ……！」

「待て、オレは喋っていないぞ。誘導尋問だ」

「言い逃れはお止めなさい被告人。見苦しいですよ？」

訴えられてしまっていた。

スカーレットにほっぺたを軽くつねられ回される。尋問は既に拷問に変わっていた。

このままでは最終的に処刑に変わってしまう。

「完全に浮気がバレた奴だな……いつかこうなると思ったた」

「その内捕まるで？」

一瞬で孤立無援になった。冤罪である。

「ふふふ、本当に彼からは聞いていないわよ？ この人が何の事情もない人間を、気安くあの家に招くとは思えないから、また厄介事の種を拾ったと思って調べたのよ。どうせ、他人の秘密は聞いても教えてくれないでしょうし。国を挙げて葬式が開かれていたはずだけど、生きていたのね」

ちゃんと弁護人がいたようだ。

「なるほど……この人に隠し通すのは分が悪いですね。ま、まあ？」

私は最初から信じてましたよ？」

「ならこっちを見て言ってくれませんか？」

目が泳いでいる。

別にいいが。ここにいる人間は知っているが、この2人の生命線だし。

「それで、この2人がどうしたんだ？」

「素性を調べたついでに知っただけで、あなた達、七武海のドフラミンゴ氏の依頼で暗殺対象になってるわよ？ それも、成功しても失敗しても結果を伝えないようになって、妙な念が押されているみたい」

その念押しに一体何の意味が……？

それにしても暗殺か……殺しのライセンスを持つCP-9が動くかもな。

「わかった、教えてくれてありがとう。手出しはさせない」

レベツカの頭を軽く撫でながら言う。

呼び捨てにしてただの町娘を装うだけでは不足か？ 一応護衛は

オレだつたり【R R】レイド・ラプターズだつたりを付けておくが、正面からでなく暗殺だと不安だな……ノジコの時みたいに女子トイレを狙われるかもしれんし。風呂とトイレと睡眠中はどうしても無防備になる。

少しずつ修行のレベルも上げるか。幸いレベルツカは体を動かすのが好きなようだ。勉強より楽しいってだけかもしれないが。

「あの……」

そこで、レイジュが一步前に出た。

何かステューシーに用があるのだろうか？

「何かしら？ ジエルマの王女様？」

「好きな人を首つたけにする良い方法はありませんか？ 体で」

「「オイ」」

エロい人にエロいことを聞いたかったようだ。

周りからツツコミが入る。

「ふふふ……難しいこと考えず、本能の赴くままに押し倒せばいいのよ」

「オレに聞いてくれれば直接……」

ドンー！

「お前ら黙れ」

元海おまわりさん兵のダデイが上に発砲する。

直接狙っていないので温情な措置。娘の前で自重しているな。

オレも少しは自重するか。

「ごめんなさい」

2人揃ってダデイに謝った。

「……まあ、またな」

「用があつたらまた来るわ。私の店は色んな島にあるし」

繁盛していることで。

「そういえば、あの2人は何をしているんだ？」

「さあ？」

シャボンデイの沿岸部でハンコックと姉さんがキャットファイトしている。

マリーも【生命帰還せいめいきかん 蛇化身へびスリム】で、いつもは絞って縮めている筋

肉を元に戻し、戦闘態勢というか戦闘体型になっているようだ。

姉さんの黒檻部隊に入ったアインも、「ヘイスト・スペル」の影分身を生み出している。

殺し合いじゃないみたいだが、一体何が……？

○○○○○

時を遡ることしばらく、ロゼがぼったくりバーを出た後のこと。

ハンコック達が遊蛇ユダに引かれた船に乗り、ロゼが魚人島から浮上してくるであろう辺りに向かうと

「誰じゃ一体！ わらわの通り道に、軍艦を置いたのは！」

「あれは……『黒檻のヒナ』の軍艦ね」

先客がいた。ヒナ待機。

マリルフォードでロゼと別れ、自身が指揮する黒檻部隊の船で、ハンコック達と同じように最後の見送りをしようとしていた。

「なぬ？ ……なるほど」

ロゼからヒナの名前を何度か耳にしていたので直感した。先を越された。

「よし！ 大砲を撃て！」

「えっ、いや、あの、姉様あね？ 一応海軍とは協定があつてね？」

「全然よしじゃないわよ？」

よもや姉の乱心かと、やんわり止めようとするサンダーソニアとマリゴールド。

「あの船の向こう側に海賊がいる気がするのじゃ！ わらわの勘に間違いはない！ 海軍本部の将校なら、このくらいの砲撃は何とかするじゃろう！」

「勘つてそんな……」

ちなみに、実際ハンコックの勘に間違いはなかった。

誰あろう『冥王』シルバース・レイリーとシャクヤクが、ハンコック達が店を出た後、こっそり息子の船出を見に来ていたのだった。

「それに、もしもただの勘違いでも問題ない。何故なら……わらわが

美しいから！」

ハンコック達が軍艦に近付いてきた同時刻

「何か聞こえるわね」

「七武海のボア・ハンコックがよくわからないいちやもんをつけてきているようです。兵達が浮足立ってますね」

その軍艦に乗って、声を耳にしたヒナが、自分の部隊に引き入れたアインから報告を受ける。

入隊前から付き合いがあつたので、仕事中の距離感がまだ少し手探り状態になっている。

ちなみに同期で入隊したビンズはゼファー繋がりでクザンの部下になった。クザンがサボろうとすると、奴を植物で拘束する日々がこれから待ち受けていることだろう。

「『海賊女帝』が？ ……なるほど」

目的は同じだと直感したヒナ。

そこでハンコック達の方を向くと、九蛇クツヤの船の向こう側に、手配されている海賊の姿がたまたま目に入る。

「アインちゃん……いえアイン。九蛇クツヤの向こうのあそこを見て」

「……あれは、プリンス・ベレットですね。元王族の。よくこの距離でわかりましたね」

ヒナの指差した方に目を凝らして、アインも気付く。

プリンス・ベレット。国王だったベレットの父親が、カマバツカ王国でオカマになって国に戻り、国も家庭も崩壊し、海賊になったという。ちなみに何故妻子持ちの彼の父が、男をやめたくなつたかは謎である。

「すぐに捕縛してきます」

「まあ待ちなさい」

どんな事情があろうと、民間から略奪し被害を与える海賊を野放しには出来ない。

そう一步前に踏み出したアインに、ヒナが待ったをかける。

「？ わたしでは力不足だと？」

「いえいえ、わたくしにそんなつもりはないわ。すぐに彼を捕縛しなければなりません」

「そうですね」

「しかしわたくし達とターゲットの間には、七武海がいて邪魔です」

「まあ、はい」

「例えば、今から海賊を捕らえるために砲撃して、仮にそれが運悪く射線上の七武海の海賊船に当たってしまったとしても……一発だけなら誤射よね？」

「えっ、本気ですかヒナさん!？」

七武海は海賊だが、一応は立場上政府やその直属の海軍とは味方になる。

ヒナの発言が、自分の聞き間違いではないかともう一度確認するアイン。

「あのねアイン、あなた知ってる？」

「な、何をですか？」

「ロゼって、あの『海賊女帝』のファンクラブに入っているのよ」

「すぐに大砲の準備に入ります。完璧で幸福な七武海であれば、この程度の砲撃回避してくれます。もし万が一海の藻屑と沈むようであれば、さっさと交代するべきです。次の七武海はきつと上手くやってくれるでしょう」

「ふふふ……わたくし、あなたとは上手くやれそうだわ。ヒナ満足」

ああ無情……未来ある女海兵が、海軍の、そして女の暗黒面ダークサイドに堕ちてしまった。

こうして、2隻の船からほぼ同時に砲撃が開始。

特に重い背景のない、ごくごくありふれた女同士の戦いが幕を開けたのだった。

☆☆☆☆

「ヒナの奴、何やってんだ？」

「あちらの2人ってどちらが強いです?」

「十中八九ハンコック。悪魔の実の能力は姉さんが少し相性が良いが、覇気と身体能力はハンコックが上だ。ただ、ハンコックは普通に殴れば勝てる時でも、追い詰められるまでは相手を魅了して石化で倒そうとする癖があるのが隙だな」

何にしても、このまま放っておくのはな。

オレとて2人と修行で戦うことはあるが……あつ、父さん達いた。手を振る。

「あら? ウチの電伝虫」

レイジュが見ている赤い土の大^{レッド}陸^{ドライン}の方を見ると、ジェルマ王国の水陸両用巨大電伝虫がいた。レイジュの見送りだろう。

「もう……どうせなら直接顔見せればいいのに」

「まあ、オレがいるし。この前あいつらにはボコられたから、会ったらリベンジしようとするだろうし」

『姉をよろしく頼む』って……一対一で、カードゲームじゃなくて戦闘だったらかつこよかったんだけどね」

初めてやる、デュエルモンスターズという、わかるようでわからないルールのカードゲームのルールブックを渡され、三対一で『デュエルだア!』と挑まれてしまった。

いきなりするにしては、少し複雑過ぎるゲームじゃないかな……『モンスターではない、神だ!!』とこっちのモンスターの効果が効かないと言われたが、カードテキストに書かれていない効果が多過ぎる。まるで意味がわからんぞ……2人倒すのが限界だった。

「でもうれしかったんだろ?」

「……うん。あつ、メカシルバーの席が空いてるわよ?」

「照れ隠しで捏造するな。そんな粹はない」

というか、さつき気絶してからこちらと目を合わさなくなった。オレに慣れるまでそうするつもりか。

「さて、そろそろ止めるか。祝砲代わりに打ち上げるから、2人が止まったら割って入ってくれないか、ステューシー?」

「まあいいわよ」

祝砲と言っても空砲ではないが。

では「レヴオリューション・ファルコン」を呼び出すか。

☆☆☆☆☆

王下七武海クツヤ九蛇海賊団と海軍本部黒檻部隊が大砲を撃ち合っただけらしく、戦いはハンコックとヒナの一騎打ちへと移行していた。

ハンコックの、自身に魅了された者を石化させる「メロメロ甘風」メロウを、ヒナが能力で両手から生み出した「裕羽檻」あわせぼりで阻むことで直接効果を受けないようにして、戦況は膠着している。

「ええい、ロゼの【拳・骨・衛星】ゲン コツ サテライトみたいな防ぎ方をしておって……見せているつもりかア！」

「ふふ、あなたは石化でわたくしはオリ。金属という共通点がある分、わたくしの方がロゼと近い戦い方が出来るのよ（生で見るのは初めてだけど、なんて美貌……ヒナ嫉妬）」

このような具合に、舌戦ではヒナが優位に立ち、終始ハンコックの心を乱し見聞色の先読みを封じること、ギリギリ決着がついていないのであった。

「出たわね……姉様のツンデレ」あね

「本人の前では年に1、2度程度しかわかりやすくデレない姉様あねだけど、本人以外の前では結構素直だわ」

「……別に、能力の相性なんてオマケだし。それに、わたしならそうちロゼの分身作って増やせるし……若くなるけど」

同類のアインが呟く。ツンデレ

傍らには、結局普通に捕らえた先のプリンス・ベレットが、ヒナのオリで拘束された後ハンコックの石化の流れ弾に当たり石像と化している。

まあ、彼の怨敵である「奇跡の人」エンポリオ・イワンコフは、現在インペルダウンに収容されているので、探す手間が省けたと言える。

もつとも、彼……彼女？ ……彼の新人類は看守達に存在を知られ

ていないLEVEL5とLEVEL6の間にある、昔能力者によって作られた空間にいたので、そのことに気付くのはまだ先の話になるのだが。

「なん……じゃと……？」

「11〜15歳のロゼを揃えて、夢の弟ストレートフラッシュの完成……？」

戦闘中の2人が、アインの眩きを拾って手を止めていた。耳聡い。「シヨタい頃のロゼを大勢生み出して、一体何をするつもりなのかしら……？」

「中枢の女はいやらしいわね……」

「はあ!? 代々風の海を越えてきた強い男と、集団で盛さかって栄えてきた九蛇クツジャに言われたくないわよ!？」

「だって女しかいない国だし!」

「こいつらッ……!」

何やら場外乱闘まで発生しそうになったところで、

ドン!! ドン!!

号砲が響く。

誰か乱入してきたかと、音の鳴った方向を見ると、空に花火が打ち上げられていた。

そして、その場の人間に見慣れた機械が宙を舞い、飛行機雲で文字を浮かび上がらせる。

A t e b r e v e ! O b r i g a d o !

別れの際に、相手への感謝と再会を願う言葉。

ハンコック達が視線を下に向けると、巨大な船に乗ったよく知る人物が手を振りながら、こちらに何かを喋っている。遠すぎて聞こえていないが。

「しまった……時間をかけ過ぎたか」

「ヒナ不覚」

「あら……私が何かするまでもなく、止まったようね」

皆が上を見ている間に、【月歩】^{ゲッポウ}で空中を蹴って近付いてきていたステューシーが声をかける。

「なんじゃ、いたのか」

「写真屋さん？」

こうして、ちよつとした騒ぎが収まったのだが、この時ステューシーが落としてしまった、ロゼとシャクヤクの、まるでカツプルのデートのような、人妻とイケナイ関係でも構築しようとしているように思えなくもない写真を見られてしまい、親子と知らないヒナとアインに『ロゼ』不倫野郎』疑惑をかけられるという、極めて些細なことがあったが、それはどうでもいいことだろう。

「またなー！ 仲良くケンカしろよー！」

「ケンカはええんかい」

「殺し合いでなければ。戦って相手のことがわかることもあるから」

見送りに来てくれた人達に手を振り、少々遠回りになるが、パンダマンが舵を切り、一行はウォーターセブンに向かった。

☆☆☆☆☆

海軍本部、元帥執務室

「……では、革命家ドラゴンの本名は、モンキー・D・ドラゴンで間違いないと？」

「ああ、そうじゃ。よう知つとるのオ、センゴク」

いつもの通りのガープと、若干こめかみをひくつかせているセンゴクが、向かい合い座っている。

最近巷で噂の革命軍。その調査を、幼い頃に保護したドンキホーテ・ロシナンテ……今は死んだことにしている上記憶を失っているのデシナンと名乗らせている元海軍本部中佐に頼んでいたところ、革命軍の正体不明のリーダーの名が明らかになった。まさかの同期で海軍に入隊したガープと同じである。

いやいや、まさか。とりあえずガープに探りを入れようと、聞いた

結果が今である。

この世に神はいないのか。オーマイブツダといった心境のセングク。

「うっそだろお前……なんでそうなった……?」

「ほんとになア、なんでこうなったかなア……さっぱりわからん!」

ぶわっはっはっは、と笑うガープに

「ふざけるなアツ!! 笑つとる場合かア!!」

セングクの堪忍袋の緒が切れた。

「な、何じゃ!? 落ち着かんか、血圧が上がるぞ!」

「お前が原因だアーツ!!」

今は大海賊時代。

だが、海の治安を守る海軍のトップたるセングク元帥の最大の敵は、海賊ではなくストレスだった。

さらに、息子が旅立ったことで、今までロゼの修行等に当てていた時間が余り、暇を持て余した『冥王』シルバース・レイリーが賭博場やその他で遊ぶ時間が増えた結果、度々その目撃情報が海軍の耳に入ることになる。

今まで以上に頭を抱え胃を押さええる日々が始まってしまった。

『賞金稼ぎ』

シャボンディを出発し、機甲旅団の愉快的仲間達と一緒に、フロリアン・トライアングル魔の三角地帯に立ち込める霧に沿って、ウォーターセブンを目指し海を渡る。

船が大き過ぎて、作った機械を送って会話が出来るオレ以外が連絡を取り合う時は、移動して会いに行くか、各々の子電々虫での連絡が必要なのが少し不便だな。

基本的な船の設備の他に、田畑と居住区に修行場、果てはプールに大浴場等の娯楽を詰め込み過ぎたせいな気もするが、航海を楽しむためには止むを得ない。

こんなちよつとした島より大きな船を、よくぞ作ってくれたデンさんよ。オレ1人で作っても、どこかの作りが甘くなつて船の自重で壊れる気しかない。

航海中に起きたことを挙げると、

ウィリーが反響定位で事前に察知した大渦の報告を受け、

「そういえばウィリー。大渦を魚人柔術で投げたり、逆回転させて打ち消したり出来ないのか?」

『出来る人もおるな。ネプチューン様とかすごいぞ? まあ、ワイはサイズによるわ』

「そうか……む? オレの魚人柔術はまだまだ未熟だが、【拳・骨・衛星】で手を増やしたり、【拳・骨・彗星】の巨大な手を作れば、直接接触れるのと違い海の影響を気にせずに済むし、大量の水を操れる可能性があるのか?」

『色々考えつくくなア。試すんやったら正面やで』

「ちよつと行ってくる」

『パンダマン、ええつて言うまで取舵』

『アイアイササ』

操舵室のパンダマンに伝えて、【衛星】でロープを引っ張り帆の向きを変えてから、思いついた発想を確かめるために、【ライズ・ファル

「コン」に乗り、【彗星】コメットと一緒に飛んで近付き、
「さて、【ウルトラマリン】！ おつ、案外いけ……ダメだこれ。回転
エネルギーが強過ぎる。やはり力不足か……だが、渦は中心に向かっ
て移動するわけだから、【彗星】コメットを水中に沈めて、上からではなく下か
ら海流の中心部を掴み、激流に任せてそのまま動かせば……」
思いつきを技に変えることに成功し、大渦を下から掴み引つ張り上
げ、魔の三角地帯の霧の中に投げたり、

「牛頭鬼じずき（※ウシの名前）にこけコッコ（※ニワトリの名前）達。今
日もミルクとタマゴよろしくな」

「うくん、今日のおやつはチョコクロワッサンで良イカ？」

「やったぜ」

牧場のウシやニワトリ達の世話をしながら食事やおよつの材料を
調達し、

「うう……美味しい。でも、体重があ……」

「充分スリムで引き締まっているだろ……気になるようだったら、腹
回りに余分な肉なんて付けられない程鍛えてやる」

皆でおやつを食べたり、

「お花さんお花さん、お水おいしい？」

「うん、美味しいよ！ いつもありがとうレベッカ！（※スカーレット
裏声）」

レベッカとスカーレットが仲良くお花の世話をする傍らで、

「来たる収穫のためにもえんやこくらせツと」

ズドン！ ズドン！ ズドン！

修行を兼ねて五本指で放つ【指銃】シガン、【五指銃】ゴシガンを両手で交互に放ち、
土を休ませている……というか新しく手に入れたものを植える用の
畑を耕したり、

「あれ……？ もしかして私、天才……？ ペンが止まらないわ」

「やはりキャロルは天才だったか……」

「はいはい天才天才。レベツカはどこかわからない所あるか？」

「この因数分解って、一体何の役に立つの？」

「お店の売り上げを要素ごとに分ける時とかね」

「計算はお兄様がいればそれで良くない……？」

「数学を勉強することで論理的思考がだな」

教鞭を執り、保護者の授業参観の下で子供達に勉強を教えたり、

「先攻ヒグルミモンキーボードツ!? サレンダア!!」

「ああつ、試作品の薬を摂取したロゼが謎の呪文を唱えて卒倒ツ!?」

「……も、もしかして、これは私が吸い出すチャンスなのでは……？」

「口から」

「ま、まあ？ 医療行為ですし問題ないはず……次は私が人工呼吸を」

「じゃ、じゃあ、私からいただきますま」

「必要ない」

「え？ ん？ んツ、ちゅつ、んゝ♡（口、ロゼのが、私の中に入り込んでくるツ……!）」

「（幸せそうな顔してますね……）」

「ごち。決闘者としてのオレの生存本能が、せいめいきかん【生命帰還】で免疫系を活性化し、熱く燃え盛る抗体が血中の毒(?)を焼き尽くしていなければ死ぬところだ。さて……」

「な、何故私の方を見て、近付いて来ているのでしょうか？ お、お仕置きですか……？」

「いや、物欲しそうな顔をしているからおかわりを」

「乱暴に、強引に、激しくお願いします……!」

「了解」

トリストアン 医者レイジユと科学者のインテリコンビによる、怪しげな薬物実験に協力して役得だったりした。

他には、姉さんとアインから電伝虫から電話がかかってきて、『人の道を踏み外してはいけない』というような内容のことを遠回しに、諭すように言われた。

ヒューマンシヨツプ
人間

屋や天竜人関連で、正直オレは潔白の身とは言い難く、脛に傷だらけで、叩けば埃ほこりが出るどころか体が埃で出来ているので、一体どれがバレたのかと思っただが、母さんのお出かけが見られて何故か不倫疑惑が浮上しただけみたいだ。

地味ヤンに説明し辛い……手配はされていないはずだが、母さんは元海賊だからな。

とりあえず、『息子さんがオレに似ているので(※というかロゼが本人)、よくしてもらっている』とぼかして言ったら、絶句された。

何故だ？(※子持ちに『頻繁よに』愛人関係的な意味で『シてもらっている』と捉えられたから)

そして現在、オレの部屋で3日に1回する風呂上がりのレベルカの髪を乾かし櫛くで梳かす(※他2回はスカーレットがする)、穏やかな一時ひとときの最中、

「船の反応？」

『ああ、方角は……』

ウィリーに知らされた方向に、紫色の機体を透明化出来る、主に隠密による偵察と拘束用の「R R — エトランゼ・ファルコン」を飛ばし、視覚情報を共有することで船を確かめる。

掲げているのは海賊旗……あの兜を被ったドクロのマークは大力ブト海賊団。船長が懸賞金3千600万ベリー、船長を含めた船員全員が兜を被っていることで有名な海賊団だな。

甲板を見ると、乱闘騒さわぎが起きている。オレより少し下くらいの少年が暴れているな。船員の誰かの子供か？ 身軽だな、良い体のバネをしている。だがまだパワー不足つてところか。

聴覚も共有すると……いつの間にか船に入り込んでいた侵入者で、海賊団とは無関係か。よし、あの少年以外全員ブタ箱にブチ込もう。

「ふんふんふん♪」

「はい、終わり。ちよつと出かけてくるから」

「エトランゼ・ファルコン」をアンテナ代わりに、遠隔で見聞色を発動させ、視覚と聴覚の共有は解除し、膝の上で鼻歌を歌っているレベッカに言う。ハンコックの曲だな。

「? どこ行くの?」

少し首を捻ってこちらを見ながら聞いてくるレベッカ。

ストレートヘアーも似合っている。ていうか何でも似合う。必ず似合うはず。

もし似合わないと言う奴がいれば、そいつはきつと視神経に重大な損傷を受けているのだろう。病院に行くといい。

やはりファッションデザイナー急募。人目を引き過ぎず、かと言って地味ではなく、レベッカやウチの綺麗所を引き立たせる、なんか良い感じの衣装を作るファッションデザイナーがッ!

セント・ポプラ辺りで見つからないだろうか?

魚人島にもはっちゃん友人のヒトデ、ヒトデの魚人ではなく人語を解するヒトデのパツパグがクリミナルブランドを立ち上げていたが、彼はデザイン画は書いても自分で服を作ることには出来ないからな。

ヒトデだから細かい手作業が出来ん。絵が描けるだけでも驚きだ。ていうか何故喋れる? 生命の神秘か……。

「ちよつと海賊団潰してくる」

「(そんな面白い物行ってくるみたいにな)……私も行っちゃダメ?」

「ダメ」

「なぐんぐで?」

ちよつと膨れて不満気だ。

「すぐに終わって出番がないから。来ても意味がない」

「むう……私、ホントに強くなってるの? 誰にも勝てたことない」

「それは周りが強い上、さらに上達しているだけだ。初めに比べたらレベッカも格段に強くなっているさ。その勝ちたいって気持ちは持ち続けるように。オレも負けてばかりだよ」

「海賊相手に負けなしだって、シヤボンデイの人に聞いたけど？」
「それは知られていないだけだ。父さんに毎回負けている。元だけど」

ジンベエは……あれはお互い拳だけで殴り合った、ただのケンカとして、他にも海賊になる前とはいえハンコックに石像にされたし、
赤髪”と鷹の目”も、戦いになれば負けていたな。

当たり前のように武装色を使った飛ぶ斬撃に、鞘から抜くと同時に全身の武装色を剣に流し集中させ、軽く打ち消すあの挨拶代わりのやり取り。完全に格上だ。

ワノ国のサムライが乗っていた、元ロジャー海賊団の見習いである
赤髪”はともかく、鷹の目”は独学……？ もしくは赤髪”の技を見て覚えたのか？ そっちの方が恐ろしいな。

「1つ新しい技を見せてやるから、それで勘弁」
「私にも出来る？」

「今は無理。もっと脚力を鍛えようか」
「鍛えてるもん！ いつも！」

櫛を返しながら言う、『頑張ってるからもっと褒めろ』といった感じで、せっかく髪を整えた頭をオレの体にグリグリと押し付けてきたので、膝から降ろして頭を撫でつつ整える。

まあ、【月歩】^{ゲッポウ}ならオレより早く出来るようになるだろう。オレは悪魔の実の能力とか、他のことも鍛えたり覚えながらだったからな。

「よし、頑張っているレベッカにこれをあげよう」
タンスの中から取り出した物を手渡す。

「ネコ耳？」
「ああ、ネコ耳カチューシャだ」
ピンク色でもふもふである。

「……なんでこんなものをお兄様が持つてるの？ 付けるの？」
オレが付けても悍ましい^{おぞ}だけじゃないか。
レベッカの頭に付けてみる。これが正しい使用法。

可愛い子に可愛いものが付いて、その相乗効果からくる魅力の破壊力は、見る者の精神に干渉するロリコン製造機の域に達しているが、

既にシスコンのオレには何の問題もなかった。

「レベツカ……大人には、色々あるんだよ。オレはまだガキだけど」
「？」

よくわかってない様子のレベツカに、後でスカーレットの前で、カチューシャを付けたままネコの真似をすれば喜ぶと伝えながら、甲板に出る。

「さて、以前に説明した通り、【ソル剃】は瞬時に地面を数回蹴り、その反動で高速移動する技だが、1度の踏み込みで【ソル剃】を使えたならば、何が出来ると思う？」

レベツカから少し距離を取りながら質問する。

「え〜つと……【ソル剃】のスピードで【ゲッポウ月歩】が出来る？」

「正解、よく出来ました。【ソル剃】と【ゲッポウ月歩】の複合技、その名も【カミノリ剃刀】
さらにそこに【ランキヤク嵐脚】をプラスした足技3つの複合技【ギロチン断刀】もあるが、剣士には必要ないだろう。【カミノリ剃刀】をしながら竹刀で切りかければいいだけだ。

「今からそれをやるから、ちゃんと見ておけよ？」

そう言つてゴーグルを掛け、周囲に突風を巻き起こしながら、オレは【カミノリ剃刀】で海賊船に向かった。

「速すぎてちよつとしか見えなかった……【ジェット・ウォリアーや
レイド・ラプターズ】があるのに、あの技つてお兄様に必要なのかな……？」

ロゼが飛んで行った後、自室に帰るレベツカ。

スカーレット 母親の待つ部屋の扉を開く。

「あつ、おかえりレベツカ」

「ただいまニヤン♪」

ネコ耳カチューシャを付け、ノーマルな人間もロリコンに変えかねない、罪作りのネコポーズをするあざといレベツカを見て、

「えっ……天使？ 大天使レベニヤン!？」

「ニヤツ!？」

壊れたスカーレットがネコまつしぐらに大天使レベニヤンに抱き

ついた。

☆☆☆☆☆

シルバーズ・ロゼに目を付けられた海賊船。

甲板に透明化した状態の「エトランゼ・ファルコン」を待機させ、再び感覚を共有することで、少年が海賊との戦いに危なくなれば割って入れるようにしながら、本体が【剃刀】カミソリで空中走行している最中。

忍び込んでいた少年が兜を被った船員達に囲まれる。

「ウハハハハ……コソ泥が。誰に手エ出したかわかってんのか？ この船のモンは全部、懸賞金3600万ベリー、この『大カブトのミカヅキ』様のだ。ガキの遊びじゃねえんだぞ」

一際大きな兜の男がそう告げる。

身の丈ほどの大きな刀を持つこの男が船長だ。

「どうせ人から奪ったモンだろ。それに、たかが3千万ぽっちの小物の癖に偉つそうに」

さつき倒した船員の1人から奪った拳銃を隠し持ちながら、少年が吐き捨てる。

「口の利き方がなってねエクソガキが……親の顔が見てエゼ」

少年の親は死んだ。両親も妹も友達も、皆みんな殺された。1年前に住んでいた島に来た海賊の手によって。

かつては造船技術で栄えた島も、生き残ったのは少年を含めて100人足らず。金も資源も奪われ尽くし、かつての繁栄は戻らない。少年の故郷は滅んだ。

生き残った僅かな人達は縁者を頼り、他の島々へと渡って行ったが、自分には頼れる者なんてもう誰も残ってはいない。たった1日ですべてを奪われ1人になった。

だから少年は、自分の仇と同じ海賊を狩りながら腕を磨き、復讐する道を選んだ。

倒した賞金首を連れて海軍基地に行った時、仇の情報を集めるため

に話をした海兵には止められた。『命を粗末にするものじゃない。別の生き方がある』と。

自分のしようとしていることが愚かだということはわかっている。

仇を討ったところで死んだ人間は生き返らない。褒めてなんかくれない。復讐は何も生まないなんてよく聞く話。自分だって家族と友達を殺されるまではそう思っていた。

だが、復讐以外に今の自分に生きていく意味なんてない。必ず自分の手でケリをつける。

「てめエがおれに何か言える立場か？ 親に顔向け出来ねエこととしてる自覚を持ってよ、海賊」

今までで一番高い額、初めて見つけた1000万越えの賞金首。

だがあの時の海賊に、自分の仇に遥かに劣るこいつを倒せないようでは話にならない。

頭に血が上った奴が近付いて来た時、拳銃で脳天をブチ抜く。使ったことがなくても、殺したことがなくても、ゼロ距離なら外すことはない。子供の非力さも関係なく絶命させられる。

そう少年が自分に言い聞かせるように算段を立てていると、

ズドンッ!!

突然何かが少年と海賊の間に降ってきた。

「よつと。あゝ少年。突然で申し訳ないが、こいつらオレに倒させてくれないか？ なに、懸賞金も積荷もキミが持つて行つていい。どこか行きたい場所があるならオレの船に乗せて連れて行つてもいい。どうだ？」

「……（なんだ、こいつ？）」

降ってきたのは人だったらしい。

ゴーグルと口元を覆う赤いスカーフで素顔はわからないが、スカーフのせいで聞き取り辛い声と背丈から無理矢理判断するに、少年の少し年上くらいで、まだ若そうだ。

翼のような不思議な髪型で、ギリギリ地面に着かない丈の紺色のコートに、黒いズボンと茶色い革靴を履いている。

「心配するな、怪しい者ではない」

少年の沈黙をどう受け取ったのか、くぐもった声でそう言ってくる謎の男。

「いや、どっからどう見ても、まごうことなき不審者だろ……」

思わずツツコむ少年。

「何……だと……?」

表情は見えないが、ショックを受けたような反応の不審者。

何故そこまで顔を隠して怪しく見えないと思うのか?

少年には全く見当がつかないが、これはこの不審者が『戦闘中怖い』と妹に言われたから、試しにゴーグルに加えスカーフで口元を隠し、『今までより素顔がわからなくなれば、怖さがなくなるのでは?』と余計なことを考えてしまった結果である。

「違うぞ。不審者ではなくオレは」

「何だテメエ!? いきなり来て好き勝手言ってるじゃねエぞ!」

不審者が何か言おうとするのを遮り、少年に挑発され、突然の乱入者にも景品のような扱いをされ、我慢の限界が来た『大カブトのミカツキ』が不審者に切りかかる。

少年が告げる間もなく、刀が不審者に当たり、

ガキンツ!!

音を立てて真つ二つになった。

……不審者に触れた刀の方が。

「……は?」

切りかかったミカツキが、男を切り倒すはずが逆に折られた自分の刀に戸惑う。

「はあ……まだオレが喋っている途中だろうが。ふっ、たかが3千万ぼっちの小物の癖に偉そうに、親の顔が見てエゼ」

だがそんなミカツキを気にも留めず、先程の少年とミカツキの会話

を踏まえた言葉を発しながら、ゴーグルの男が海賊の方に振り向く。明らかに今までと纏う雰囲気が変わっている。

その男のコートの背中は、不思議なことに一部だけが黒く変色し蠢うごめいていたが、すぐに元の紺色に戻った。

「通りすがりの賞金稼ぎだ。貴様ら海賊全員ブタ箱にブチ込みに来た。異論があるならかかってこい。速やかに殲滅してやる」

ただの決定事項を告げるような、一方的な宣言を受けて、刀、槍、斧、拳銃……各々の武器を持った海賊達が、中でも刀を持った者達が声を上げながら、最前列で不審者に、賞金稼ぎバウンティハンターに切りかかる。

「茨の鞭」

バチインツ!!

賞金稼ぎバウンティハンターが左手に持った鞭を横に振るう……正確には振るったよ
うだ。

少年には見切れなかったが、黒い鞭を持った左腕を斜め下に下ろしており、最前列の海賊達が、一纏めに船の壁に叩きつけられている。

少し怯んだ様子の海賊達だが、今度は拳銃を持った狙撃手達が発砲する。

その音が聞こえると同時に、賞金稼ぎバウンティハンターの左腕が増えた……ように見える。

「ブラック・ローズ・ガイル」

ズババババン!!

ヒュンヒュンという風切り音と共に、斬撃音が鳴り響く。

海賊達の武器や兜が勝手に壊れ、血飛沫が舞う。明らかに鞭の射程範囲外の者まで。

それどころか真つ二つになった銃弾まで地面に転がり、少年が持っていた拳銃も、気付けば真つ二つになっていた。

鞭以外にも何か刃物の武器を使っているのか？ それとも自分の憎き仇と同じ悪魔の实の能力者？

少年の疑問を置き去りに、次第に苦痛の絶叫を伴い、バタバタと倒れていく海賊達。ミカツキもいつの間にか倒れている。

そして大した時間もかけず、すべての海賊が倒れた……ついぞ少年の目の前の賞金稼バウンティハンターぎは一步も動くこともなく。

圧倒的……勝負事に絶対はないが、今の自分がこの男に勝つことは不可能だと言いつ切る。格が違う。

この男なら、自分の復讐相手にも……どうすれば、自分もそこまで強くなれるのか？

「ふん、安物の脆い装備だ」

「て、てめえ……なんの恨みがあつておれ達を……」

少年が自問していると、船長の「大カブトのミカツキ」が、仰向けに倒れながら苦しげに呟く。

すでにトレードマークの兜は壊されているが。

「鞭の一太刀とはいえ、復活が早いな……腐っても船長か」

意外そうに呟く男だが、驚いたのは少年の方だ。

よく倒れた海賊達を見ると、兜に武器に体、すべての傷跡が一筆書きのように繋がっている。

この男は、鞭で切るだけでなく、全員を倒しわざわざ武器まで破壊するのを、すべて一撃でこなす曲芸わこなを行っていた。

おそらく二撃目の攻撃を加えぬよう、一度攻撃した前列の者達の間を縫って、後列の者達を切ったのだ。ご丁寧に最初の一撃で叩きつけられた者達も、兜と武器だけを切る念の入れようで、すべてが壊されている。

それを裏付けるように、男の鞭が、元の黒と滴る返り血の赤が混ざり、黒みがかつた濃い赤色……見る者に畏怖の念を抱かせつつも、どこか美しい黒薔薇のようになっていた。

『『なんの恨みがあつて』だったか？ 貴様ら海賊が気に食わない。これで満足か？ なんの恨みがあつて……今まで貴様らに襲われた人

達も、同じようなことを思い、理不尽な暴力を嘆き、散っていった。貴様らは暴力で好き勝手やっていたところを、より強い力に打倒された……ということだろうか？ 自業自得だ。さて、現れる……」

不愉快そうに、まるで実際に見てきたようにそう吐き捨てたところで、賞金稼ぎの周りが動き、ハヤブサ型の機械が何機も現れ始める。少年と男の間にも、紫色の機体が、まるで最初から存在していたかのように姿を見せた。

悪魔の実の能力者……だが、これはつまり、今まで能力を使わずに敵を圧倒していたということだと、ミカツキと少年が戦慄する。

「R R……さあ、まだ続けるか？ たかが体が袈裟切りになっただけだし、まだ両手も両足も繋がっているからな。続けるならば立ち上がれ。完膚なきまでに叩き潰してやる」

機械のハヤブサ達が金属音のような鳴き声をあげ、主の敵を威圧するように睨めつける。

無慈悲に宣告し、機械を従える男の姿は、暴君か、霸王か、皇帝か……いずれにしても、敵から逆らう気力を根こそぎ奪っていく。心の弱い者は立つことすら出来ない謎の迫力を放っている。

「ゴーグルに、機械……き、機甲のロゼッ！？」

少年の目にも、ミカツキの心が完全に折れたのがわかる。

「なんだ、オレを知っていたのか。特にうれしくもないが」

少年もその名は聞いたことがあった……良い噂とは言い難い、悪名として。

曰く、生まれついでナチュラル・ボーン・ハンターの狩人。海賊の生き血と悲鳴が好物の賞金稼ぎバウンティハンター。

曰く、シャボンディ諸島最凶最悪の化物。海賊団を1人残らず食らい吸収、成長する怪物。

曰く、海軍が生み出した生物兵器。一度命令を出せば標的を殲滅するまで止まらない、陸・海・空、すべてを網羅する大量殺戮兵器。

本当に存在するのもか疑わしい、眉唾物の類たくいと思っていたが……

「人間だった、のか……」

「どういう意味だ」

少年が抱いたのと同じ感想を呟き、ミカツキは意識を失った。

☆☆☆☆☆

移動中、少年が完全に殺る気だったので、急いで海賊との間に飛び込んだ。

一度殺しの動作が行われてから海賊を守ってしまえば、オレは海賊アレルギーで吐血してしまうが、準備段階ならば問題ない。アウトとセーフの境界線を探るため、今まで何度血を吐いたことか……。

少年には人を殺す覚悟をする前に、泥に塗れようが生きる覚悟をしてもらいたいものだ。どこか自棄になっている雰囲気があるな。よく見れば目の下にフツクみたいな刺青まで入っていた。

まあ、子供が一人で海賊船に乗り込んでいる時点で……ああ、これはオレも同じだな。人のことを言えん。

とにかく、訳有りなのは見聞色を使うまでもなく状況からわかる。放っておくのは少々不安。野垂れ死にそうだ。

とりあえず不審者という謂われなき疑いを向けられながらも少年と会話を試みてみると、後ろから切りかかってきた海賊がいたので【逆鱗】で刀を壊した。

そんなに急いでやられに来ずともすぐ倒すというのに……オレが考えなしに敵に背を向けるバカだと思われているのだろうか？

適当に全員鞭でシバいた。どの道やることは変わらない。順番が変わるだけだ。

ついでに武器も少年が使わないようにすべて壊した。子供にはまだ早い。身のこなしは中々良かったが、拳銃に関しては完全に素人の扱いをしていた。それだと暴発するぞ。

「で、だ。周りも片付いたことだし、話の続きをしようか。さっき言った通り、懸賞金その他はキミのだ。元々後から来たのはオレだからな。行きたいところがあるなら、送ろうか？ 一人じゃ船を動かせな

いだろ」

少年に振り返りながら、【R R】で海賊達を拘束する。

何故かこの少年呆けているな。

原始人が言語的な会話をしている光景を目撃したかのような、何か意外なものを見たって感じた。

「……取って食う気じゃねエだろうな？」

「何故初対面でそこまで言われるのか」

誠に遺憾である。

そんなに今の姿は怪しいのか？

自分の姿を立体幻像で目の前に映し出すと……

「なんだこの不審者はッ!？」

「いや遅エよ。最初から気付け……」

そこにはまごうことなき圧倒的不審者がいた。というかオレだ。

なるほど、これは信用されない。通報不可避。『奴を決闘で拘束し

る!』と海兵に追いかけて回される。是非もなし。

今度から口元を隠すのは止めよう。ゴークルだけでいい。

「(やっばおれと大して歳変わんねエ……)」

「ふう……で、だ。行きたいところがあるなら送ろうか？」

スカーフを口からずらし、ゴークルも外して首にかけてやり直す。

「……送るって、あれでか？」

少年が【R R】を指差して問うてくる。

「いや、あっちの船でだ」

「あれ船だったのか……島かと」

親指で指差すと、そう返される。

まあ、木とか植えているし、遠目にはそうも見えるか。

「じゃあ、頼みがある」

「何だ？ 言ってみろ」

「オレを鍛えてくれ! 殺したい奴がいるんだ!」

地面に座り、土下座をしながら弟子入りを志願された。

ふむ。『倒して欲しい奴』でも『殺して欲しい奴』でもなく『殺したい奴』か……まあ、初めてのことはない。シャボンデイのスラムの

子供にも、頼まれて鍛えたことはある。

「復讐か。相手は？」

「ガスパーデ海賊団。特にガスパーデとニードルス」

「『將軍』……9500万ベリーの賞金首。『海軍最大の汚点』とも呼ばれる、元海軍本部長。体を水飴状に変化させたり、硬化させることも出来る、アメアメの実の能力者か」

グランドライン
偉大なる航路第8支部、通称ナバロンの所属だったが故に、オレは会ったことがないが、アメアメの実を手に入れた瞬間、自分の軍艦で海賊の旗揚げをした男。

最初から力を手に入れるためだけに海軍に入隊したのだろう。だから汚点。だが元中將の実力は折り紙つき。能力者の覇気使い。生半可の実力で倒せる相手ではない。

オレに鍛えてもらうというのは良い判断だ。なんせこいつは知らないとはいえ、オレは覇気を目覚めさせる霸王色持ち。加えてキャロルの能力に手伝ってもらえば、精神的な休息は必要だが、1日24時間ほぼすべてを鍛錬のために使える。

「良いだろう。だから土下座をやめろ。ただし条件が2つある」

「……なんだ？」

恐る恐るといった感じで聞いてくる。

何故か苦渋の選択を強いられているかのような表情だ。まるで今から悲願のため、悪魔に魂でも売り渡そうとしている人間のような……

「オレの船に乗れ。お前の標的は強い。たまに会った時に鍛えるだけでは、到底追いつけん」

「それは、おれとしても願ったり叶ったりだが……もう1つは？」

「オレに教えを請う以上、ある程度オレの思想に従ってもらう。『人を殺すな』、これは守ってもらう。破れば破門だ」

重々しい顔をしていたが、拍子抜けしたように、ポカンとした顔になる。

「……それだけか？ たとえガスパーデ達を殺したとしても、破門になるだけなのか？」

「ふははっ、破る気満々だな。まあ想定内だ。お前の言う通り、破門になるだけ。禁を破ったから死んでもらう、なんてことはない。自分の目的のために誰かを巻き込むとか、破門になった後で手配されるようなことをするとか、そういうことがあればオレがブン殴りに行くが、そんな感じだ」

別に復讐するのは構わない。

そういう理由で海軍に入った人だっているし、仇敵を捕らえて復讐を終え退役し、今は自分と同じく海賊によつて家族を失った人々を元気づけるために、島々を巡る劇団をやっている人もいる。

問題は過程と、復讐以外に何も無いって風の、こいつの雰囲気だ。復讐を終えた後、こいつはどうするつもりなんだろうな。

「わかった、それでいい。これからよろしく頼む、師匠。おれはシュライヤ。シュライヤ・バスクードだ」

「そうか。以後よろしくなシュライヤ。先程図らずも異名で呼ばれたが、改めて名乗らせてもらう。オレの名はシルバース・ロゼだ。お前をガスパーデを倒せる実力までランクアップさせてやる。それがお前の望みなら、自分の因縁にケリをつける」

後から明かしても拗れそうだし、打ち明けておく。

差し出された手も、手袋を外して握手に応じる。

少々驚かれた。

ダデイの時もこんな感じだったな。いや、あの時の方が驚かれたか。『海賊嫌いは偽装だったのか!』と聞かれた。素だと答え、父さんとの仲も良好だと伝えると、『何でだよ!』と理不尽に怒られた。どうしろと……。

シュライヤには、『元々人外の化物に弟子入りする覚悟だったし、海賊の子でも人の子ならむしろ安心した』と言われた。

なあ、さっきの海賊もそうだったが、どういう意味だ。

確かにオレは化物かもしれんが、何故生物学上の分類が人間である

ことさえ疑われているのか。自然発生したとでも？ それとも
マッドサイエンティスト
狂気の科学者の発明品？ 正真正銘母さんの腹から生まれたヒュー
マンだ。

何にせよ、こいつにとつて、オレ達との旅が楽しいものであれば良
いが。人生楽しんでるもの勝ちだ。

まあ、何かりフレツシユする趣味とかを見つけなければ、オレのシ
ゴキに耐えられず精神的に潰れるかもしれないので、今は何もないのか
もしれんが、これから頑張れ。オレに弟子入りして人を殺した奴は今
の所いない。

シュライヤを弟子に取ることになり、海賊船レイド・ラフターズごとR R 号に帰還
した。

海賊は専用につった独房に入れる。海軍基地に寄つて引き渡そう。
グランドライン
偉大なる航路支部の永久指針エターナルポースは本部で貰った。

皆に紹介する前に、かなり汚れていたので大浴場に放り込み、服を
洗濯、乾燥させる。ウォーターセブンでこいつの服を調達しないと
な。ついでに鞭の返り血を洗い流して消毒しておこう。

予備の子電伝虫をシュライヤに渡した後皆に紹介し、少々似た境遇
の母娘等何人かが号泣したが、それ以外は特に問題なく受け入れられ
た。

というか、『またお前拾ってきたのか……』みたいな空気。トリスタ
ンは自分から来たし、大体は世話をするより、望む場所に送る手段を
用意する方針だぞ、オレは？ 今までだつてそうしてきたし、スカー
レットとレベツカ、シュライヤみたいな行くあてがないのが例外だ。
紹介した後、リクエストされてオレが作ったチャーハンを、腹が
減っていたのか勢いよく食べ終えて、シュライヤの、鍛錬の鍛錬によ
る鍛錬のための生活が開始し、朝昼晩、おはようからおやすみどころ
か寝た後の夢の中まで鍛錬漬けの生活の、夜の部が終わった。

そうして夜が明けた次の日、シルバー電伝虫が鳴った……受話器に
『赤』と書かれた奴が。

とりあえず食事を取りながら、積荷を降ろして空からになった大カブト海賊団の船で作った「レイド・ラフターズR R」を飛ばしたが、あんたって人は……目標が海賊でなかったら、民間人避難させた後、あんたの家に爆撃するからな。アカマツ（※盆栽）達を吹き飛ばすぞ。

☆☆☆☆

グランドライン偉大なる航路前半のとある島。

その島で、ある2人の男が向かい合っていた。

1人は、改造した海軍将校のコートを着た、鍛え上げた肉体の巨漢の男。コートの背には海軍のマークの上から×印が書かれている。

1年前にシユライヤの故郷を滅ぼした海賊。

元海軍本部中將にしてガスパーデ海賊団船長、 “將軍” ガスパーデ。

そしてもう1人は、モノクル片眼鏡に全身白い服装、片手に大きな書物を持った男。

海賊団の船長でもあるが、海賊としてはまだ無名。

体を紙に変える力を持ち、 “神懸かりのサイモン” と呼ばれる男である。

「おれに同盟を持ちかけろなんざ、酔狂な男だ。それとも単なるバカか……おれが誰だかちゃんと知ってんのか？」

「元海兵のキミだから声をかけた。海軍の巡回ルートを知り尽くし、新世界のレベルを知るからこそ前半に留まる慎重さ。海軍も、自分達の失態をあまり知られたくないようで、額を億未満に調整しているが、前半では最高峰の相手だろう（王下七武海……政府の狗を除いて）」

ガスパーデを持ち上げつつ話を続けるサイモン。それだけ重要なことなのだろう。

「何より、能力者だ……私の故郷に、古代文明の遺跡がある」

「おいおい……宝探しなんて下らねエ話なら、他当たれ」

まったく興味がなさそうなガスパーデ。

この男の信条は、力こそすべて。権力を手っ取り早く手に入れるために海賊になった。

海賊でありながら、海や、夢見る海賊を激しく嫌悪しており、暇つぶしに海賊を騙し潰すことを、ちよつとした楽しいゲームのようなものと捉えている。

だがその信条故に実力は本物で、強い者を好む。

サイモンが気に入らない弱者であれば、すぐにでもここで彼のゲームが開始されただろう。

「宝？ もつと良いものだ。かつて私の故郷の島を引き裂いた、古代兵器！」

「……歴史の本文か？」

オハラの際はガスパーデも当然知っている。

世界政府が復活を恐れる、世界を滅ぼしかねない、神の名を持つ最悪の兵器。

その武力を想像し、ガスパーデは再び話を聞く気になった。

「いや、それとは別だ。その名も、〃大いなる力〃 シュシバルバ……古代文明が生み出した、悪魔の実の能力者を食らい、島1つ滅ぼすまでに成長する最悪のバケモノだ！ 遺跡には能力者でなければ入れぬ場所がある。それを確認すれば信じる気になるだろう。こいつを利用し、私が、私達がマリージョアに上がる！」

「ははははははッ！ 悪魔の実の能力者を食って育ったバケモノで、^神天竜人の支配を終わらせるか……だが、ひとつな^ッぎの大秘宝^スだの何だのと夢ばかり語る癖に、口程にもねエクス共より余程良い。必要なのは力だ。覇気も使えるようだし、組む価値はあるみたいだな」

ガスパーデとサイモンが握手を交わし、世界政府転覆を企む海賊同盟が結成した。

お互い心の底から信用している訳ではない。

海賊は基本的に、自分の欲望を最優先に行動する生き物。

隙あらば相手を蹴落とし、最終的には自分だけが頂点に立つ。共通の目的のためだけに手を組み、それが終われば殺し合う。危険な役回り押し付けたりと、裏切りが常なのが海賊同士の同盟である。

「だったら良い狩場がある。能力者の囚人共がいる海底監獄インペルダウンだ。特に政府に存在をもみ消された奴らが入るLEVEL6なら、さぞバケモノの養分にはちようどいいだろうよ。どの道何もない牢獄で、血統因子の研究だかに使われ一生を終える、惨めなモルモット共だ」

「……奴隷同然のまま終わるくらいなら、政府を貫く槍となった方がまだマシか」

2人がサイモンの故郷……ナナツ島の支配や、古文書を解読しバケモノを手に入れるまで邪魔が入らないよう海上封鎖等、今後の行動を決めるために話し合う。

「ホホホ、これは面白そうな話を聞きましたね……彼にも伝えますか」

気配を消し、2人の会話を隠れて聞いていたシルクハットの人物が、笑みを浮かべながらその場を去る。

後に、ガスパーデへの復讐を果たそうとするシュライヤの因縁、そしてもう1つの因縁により訪れることになる機甲旅団、権力を求めるガスパーデ海賊団と世界の統率者にならんとするサイモン海賊団の同盟勢力、さらにそれぞれの思惑により介入する第三勢力が、ナナツ島にて激突することになる。

“水の都”

航海中、シユライヤを鍛える日々。

まあ元々シユライヤ以外にも鍛えていたが、鍛える時間の割合が一番多い。次点でレベツカ。

他はたまに組手やアドライブをして、各々が自由に鍛えている。

キャロルなんて肺活量を鍛えるための趣味レベルだ。あいつは能力者だから、「月歩」^{ゲツポウ}を使えるならそれに越したことはないが……まあクウイゴスの木片を浮き輪代わりに持てばいいし、いざとなれば護身用としてレイジュにレイドスーツを作ってもらおう。

マントが【鉄塊】^{テツカイ}、踵の加速装置が【刺】^{ソル}、足の裏の浮遊装置が【月歩】^{ゲツポウ}の代わりになる。あれはあれで使いこなすのに練習が必要だが。

ステューシーが教えてくれた “天夜叉” の話を聞いて、すでにスカーレットとレベツカの分は頼んである。レイドスーツ込みなら、動体視力さえ備われればすぐにでも【剃刀】^{カミソリ}と同等の動きが出来るだろう。

「夢の中の世界なんて……悪魔の実つてのアー一体どうなってんだ？」

シユライヤが目の前の現実、いや夢を信じられないといった感じで呟く。

鏡の中や本の中の世界もあるというし、悪魔の実の能力はファンタジーでメルヘンだ。

「ふっふっふ、これが私のネムネムの実の能力。笛で奏でる旋律が睡眠を誘発し、眠っている人間を問答無用で私のテリトリー、この【幻夢境】^{ドリームランド}に呼び出す最強の能力！ ……そう思っていた時期が、私にもあったんだけどなあ……」

「いや、実際凄いでこれ」

ここはキャロルの能力が作り出した空間。精神の世界。

まあ現実の船と変わらない間取りだが。

オレ達は今、修行スペースにいる。鍛錬に精を出していたり、キャロルが自分で作った紅茶やお茶菓子で優雅に休んだりしている。夢

の産物なので現実の腹は膨れないが、味はちやんとする。

オレには霸王色があるので眠らせる方は興味がないが、夢の中の世界というのが素晴らしい。体を休ませながら、24時間フルに使える。

肉体鍛錬は出来ないが、覇気の鍛錬は出来るし、疑似的な戦闘訓練も出来る。殺してしまう心配がないオマケ付き。

他にも悪夢を見せたり、都合の良い夢を見せることで疑似的に眠った対象の記憶を書き換えることも出来る。ちよつとしたきつかけで思い出してしまうかもしれない、弱い記憶改竄だが。

忍者風に言うとは幻術タイプだな。まあ、笛を吹くから口と手は塞がるし、眠らせる条件がハンコックのメロメロの能力に近く笛の腕前が必要。さらには耳を塞ぐという明確かつ単純な防ぎ方が存在する、少々人を選ぶが初見殺しかつピーキーな能力だ。能力のことは隠した方が良いな。

「速攻打ち破ったあなたに言われても……なんで寝たまま動けるの？

この非常識の塊いっ！ 色んな電波受信し過ぎ〜！」

「能力者は大体非常識だし、電波ではなく見聞色だぞ？ それに、元はと言えばオレが手に入れてお前に譲った実。自分の能力は可能な限り鍛え上げ手札を増やし、相手の能力を破る方法を考えるのが決闘者^{デューエリスト}だ」

昔を思い出しか、不満を訴えてくるキャロルに返す。

この子は一度調子に乗って、通り魔のごとく通りすがりの人を眠らせるという悪戯をしたことがあった。

止めるために近付いている途中演奏で眠らされたが、眠ったまま体を動かして、現実のキャロルを攻撃することで解決。

キャロルの身体能力はただの子供とさして変わらない。ちよつと強めのデコピンで充分。耳栓でも防げたが、生憎常備などしていなかった。というか「R R」^{レイド・ラプターズ}の遠隔操作でもいけたな。

「さて、シユライヤ。お前の標的は元中將。悪魔の實の能力の他に、先程お前も目覚めさせた覇氣は習得しているし、超人的武術である六式ロクシキもいくつか扱えるかもしれない。簡単に説明するぞ」

ブラックボードにペンで書きながら話す。

簡単にしか説明しないのは、覇氣も六式ロクシキも完成されて進化の余地がない戦闘技術というわけではないので、素人の自由な発想が何か今までになかった技を生み出すかもしれないからだ。

「覇氣は全部で3種類で武装色と見聞色、そして霸王色。一般にはあまり知られていないが、誰にでも眠っている秘められた力。億を超えような賞金首は、無自覚に使っていたりした。新世界で名を上げているような連中は、大体覇氣をちゃんと使っているぞうだ」

ちゃんと使いこなせている海賊と、シャボンディで賞金稼ぎバウンティハンターとして戦ったことはないが、まあ四皇は全員霸王色持ちと聞くからな。覇氣使用が多いのは当然であり必然だろう。

「1つ目の武装色、対『將軍』戦ではこれが特に重要だ。これを鍛えないと、奴のアメの体にダメージを与えるのは面倒だろう。鎧でも何でもいいから、最初は出来るだけ固いものを纏うイメージをするように。身を守る盾であり、意志を通す剣だ」

「最初はってことは、続きがあるのか？」

「ああ。不必要な部位の覇氣を一部に流すことで、武器に纏ったり攻撃力を上げるって技術だが、まずは動かすより固いものをイメージしなければ、オレみたいに中々武装色が強くないかもしれないので、今は忘れておけ。固いものをイメージしながら、それを一点に移動し集中させる……2つの違うことを同時に行うおこなのは難しい。それはすでに1つの技だ」

まあ、オレは元々見聞色寄りだったから関係ないかもしれないが一応。

父さんがやっていたのを真似してこそ練したから、そっちは割と早い段階で出来た。

自分より武装色が強い相手に勝つために、防御を薄くして攻撃に回すものとオレは捉えている。相手の攻撃は受けずに見聞色で先読み

して躲せばいいので、オレとの相性は良い。

「2つ目は見聞色。殺気とか気配とか、そういつたものを強く感じ取る力。見る聞くと書くが、実際は目を閉じて耳を塞いでも感じる。言わば第六感だ。視界に入っていない敵の動きを把握したり、攻撃を先読みしたり……オレの得意な方だな」

「さっきあいつらを倒した時も使ってたのか？」

「ああ。背中から攻撃してきた時も使っていたし、全員の動きを先読みして攻撃を当てたのも、鞭で鉄や銃弾を切ったのもこれだ。まあ、最初に刀を折ったのと、鞭を切りやすい形状に変えたのは武装色だが」

言いながら、鞭を【魚鱗^{ぎょりん}】で纏った武装色を刃物上に変え硬化し、シュライヤに見せてみる。

「……武装色の方が戦闘に便利じゃねエか？」

「どちらもちゃんと鍛えればすごく強いんだが……まあ気に入ったならそれでいい。お前は武装色寄りだ。基本的に、生まれつきどちらかに得手不得手が別れる。まあ鍛錬次第だから、不得手な方も伸ばせる。主に成長スピードの話だ」

「そうか……霸王色は？」

ブラックボードの、横に並んだ武装色と見聞色、その上に書いた霸王色を指差しながら聞いてくる。

「そいつは覇気の中でもさらに特殊なレアもの。100%生まれつき。一度に覚悟の弱い奴を複数人気絶させたり、さっきお前にやったみたいに覇気を目覚めさせたり出来る。まあ、たとえお前が覚醒したとしても、それで『將軍』サマを気絶させられるかと問われれば微妙だろうし、気にするな」

霸王色の上から×をつける。

オレ自身制御と加減しか教わっていないので、これ以上言えることも特にない。

「基本的に覇気の鍛錬はこの空間でやる。毎日空になるまで使い回復させる……これを繰り返し返せば覇気の総量が少しずつ上がる。オレもそうして増えた。次は六式^{ロクシキ}」

改めてブラックボードに、2組ずつ書きその上に走、攻、守と書く。そして、キャロルにマネキン人形を作ってもらったのを、礼を言いながら受け取り、脇に立たせておく。

「走攻守の3つに分類出来る。走、高速移動技の【ソル刺】と、空中移動技の【ゲッポウ月歩】」

【ソル刺】でバックステップし、その後【ゲッポウ月歩】で上に飛び、空中を蹴りながら戻ってきて、マネキンの前に立つ。

「攻、指先に力を集中させピンポイントに敵の急所を貫く人体破壊技の【シガン指銃】と、鋭い蹴りで鎌風を巻き起こす斬撃技の【ランキヤク嵐脚】」

目の前のマネキンに【ゴシガン五指銃】で心臓の位置を突き刺し握り潰し、二本指の【ニシガン二指銃】で両目を抉り、【シガン指銃】で喉に風穴を開け、少し離れて【ランキヤク嵐脚】の鎌風で腹を切り飛ばす。

「守、全身に力を入れ硬化する防御技の【テツカイ鉄塊】と、逆に脱力して相手の攻撃の風圧で避ける回避技の【カミエ紙絵】」

地面から【ライズ・ファルコンライズ・ファルコン】を呼び出し、オレに向かって【ブレイブクロー・レボリューションブレイブクロー・レボリューション】を放たせ、【テツカイ鉄塊】で受けたり、【カミエ紙絵】で躲す。

「基本はこの6つだ。応用技や複合技は基本が出来るようになったら教える……なんだその顔は？」

胡散臭いものでも見たような反応。

「殺すなって言ってた割に、手馴れ過ぎてねエか師匠？」

指差しながら言うてくる。

その先には両目と心臓、さらに喉を抉られ、上半身と下半身が別れたマネキンが転がっていた。あの状態で生きている人間はそういない。

「殺す攻撃を知ること、殺さないように相手を制したり、殺しに来ている相手から自分の身を守るために覚えた。護身は戦闘の最優先事項だ。誰かのために犠牲になる……美談だが、勝って守って自分も生き残ってこそその活人だし、そのために鍛えているんだ。目標は高く持て。簡単に死ぬなよ？」

「まあ、理屈はわかった」

理屈はか……やっぱ道連れ覚悟の捨て身だなこいつ。だが、だったら死なないように死ぬ気で修行についてきてもらおうか。

「そうか。まあここまで説明しておいてなんだが、お前の戦闘スタイルによつては、別に六式ロクシキのすべてを習得する必要はない。お前が使う武器によるつてことだ」

六式ロクシキは自分の体を武器のように鍛え上げているようなもの。

つまり、ほとんどは武器で代用出来る。3つはレイドスーツ、シガン【指銃】は拳銃、ランキヤク【嵐脚】は剣、代わりがないのは回避技の【紙絵カミエ】くらいだが、これも見聞色で回避すれば結果は同じ。

「武器……やっぱ必要か？」

「素手で攻撃するのはマズイ状況がある。『將軍』で言うなら体を水飴状にしてお前の殴った腕なんかを絡め取つてサンドバッグや顔を覆つて窒息死……みたいな戦法が予想出来る。オレは体術以外に鞭と能力で作つた機械。他の皆は周りで行っている通りだ」

辺りを見渡し様子を見る。

紅茶飲んでるキャロルは攻撃用の笛で、能力の催眠と吹き矢を同時にこなす。

ウチのメンツで完全な武器無しはレスラーのパンダマンだけだ。いざとなれば、昔のオレみたいに岩でも投げて戦うだろう。

そのパンダマンと組手をしているウイリーも、魚人空手に魚人柔術も使えるが金棒を使う。

鉄扇を持つスカーレットと竹刀のレベツカが攻撃側と防御側を交互に行い、軽くジャレている。攻撃側は寸止めの激甘稽古だ。

レベツカの剣筋をスカーレットが舞い踊るように紙一重で躲し、たまに鉄扇でも捌く。あの相手の攻撃を受け流す動き、レベツカも竹刀で出来るようになってもらおうか。

レイジュとメイプルは、レイピアとサーベルで剣術修行中。2人も毒なしだ。

レイジュはジェルマでジャッジに仕込まれたとはいえ、レイドスーツ込みでも八刀流の相手はきつそうだ。本命は毒による攻撃で、あく

まで普段は使わない奥の手の1つなわけだし。

遠距離攻撃のダディとトリスタンは、余興で射的勝負をしているな。拳銃と弓で。

ダディは30丁の拳銃をホルスターに入れて体に巻きつけ、両手で2丁撃ちながら動き回るから身体能力も意外と高い。あれは全部で50キロくらいある。娘のキャロルの倍くらい重い。

トリスタンは通常時には「エレキテル」を弓で飛ばすが、「月の獅子」化すれば自分で動いた方が速くなるので格闘戦を行う、特殊な弓兵だ。

「今は素手の戦闘技術を磨きながら、手に馴染む武器を探せばいい。武器庫に色々あるから」

剣に槍、銃のようなオーソドックスな物から、トンファーにヌンチャク、チャクラム等のあまり見ない物もある。

「現実の修行では、まず最初に走と守を優先して教える。武装色もそうだが、【ソル刺】の勢いのまま殴ったり、【テツカイ鉄塊】の固さで蹴ったりと攻撃に転用出来る。加えて六式ロクシキの半分は足技であることからわかるように、戦闘において足腰は非常に重要だ。キャロル、あいつら呼び出してくれ」

「はいはい。これからあなたに捕まった奴らは、毎夜悪夢を見ることになるわね。私の【ナイトメア・パラダイス夢幻地獄】とどっちがマシかしら？」

「あれをパラダイスと言い張るか」

その技は対象に中々えげつない悪夢を見せる精神攻撃技じゃないか。

オレは海軍の仲の良い人達に「冥王」の子とバレて、暴言を吐かれながら石をぶつけられるとかいう悪質なのを見せられたぞ。だが不思議とサカズキさんには和んだ。石と暴言で済ませてくれるんだ……と。あれがなければ危ない所だった。あれで、ああ夢だな……とはつきり認識出来た。

さて、戦いたがっていたレベッカも手招きしておいでおいでと誘う。

そして、この【ドリームランド幻境】に大カブト海賊団の迷える子羊共が出現する。

「こ、こは一体……？」

「はい整列！」

バチン！

現実では独房にいたはずなのに、見知らぬ場所にいる状況に戸惑う海賊達に、鞭で地面を叩いて命ずる。

すぐに横一列に並んだ。結構なことだ。

遅ければ首を落として放置していた。夢なので死ぬことはないが、痛覚はキャロルが遮断しない限りあるので痛い。運が良ければ目が覚め現実に戻る。

「(あの一瞬で調教されてやがる……)」

そして、シユライヤとレベッカの2人VS大カブト海賊団の戦闘を始めさせる。オレが作った飯の代金とも思っておけ。

子供相手に憂さ晴らしが出来る、意外と乗り気な奴らに、

「よろしくお願いしますー！」

と礼儀正しく頭を下げてから竹刀を構えるレベッカ。

シユライヤは当然何も言わない。正直こっちが普通の対応。あんな下卑た笑みを浮かべる相手に一礼するレベッカが天使である。

「ロゼ、離しなさい！ あなたもあの子に兄と呼ばれているのなら、私と一緒にあつちをですね……！」

「押さえて押さえて。これも通過儀礼みたいなものだ。人間生きていれば海賊団の1つや2つや数千数万と戦うだろう。そうやって大人になる」

「そんな通過儀礼があつてたまりますか！」

スカーレットが海賊にキレて蹴り倒そうとするのを羽交い絞めにして宥めるのが大変だ。どうせすぐ終わるから。

「くっ、耳元で、囁かないでッ！ ひやうくッ!? この卑怯者お……」

あとスカーレットは耳が弱いというどうでもいい情報が手に入った。

そしてしばらく後、

「覇気これズリイ……あるとないで大違いじゃねエか」

「ありがとうございます！ ねえ見てた!? 私初めて勝てた!」

予想通り、相手にならなかつたか。そこには倒れた海賊達と、自分の手を閉じたり開いたりして見ているシユライヤ、こっちに向かってピースしているレベツカがいた。

まあ、シユライヤは覇気これの力がわかつたみたいだし、レベツカも目的のためにちゃんと進めているのがわかつただろう。

「やったな」

ピースを返す。

その後レベツカが地面にへたり込んでいるスカーレットに近寄る。

「ち、畜生……せめてそっちのガキだけでもッ」

拳銃を持った1人がキャロルに照準を合わせた……バカなことを。

ここは今銃口が向けられているキャロル・マスターソンが作り出した自在空間。

この中でキャロルを倒すことなど不可能だ。そもそも夢の体を撃つたところでキャロルにはノーダメージ。その拳銃すらあいつが再現した夢ゆめまぼろしにすぎない。

悪魔の実の能力もキャロルの許可なくこの世界に持ち込めないどころか、この中では動くことさえキャロルが禁じてしまえばままたらない。ここにいる時点で捕まっているようなもの。戦う場所フィールドが違う。現実で叩くに限る。

「はあ? そんなものを私に向けないでくれる?」

キャロルの苛立った声の後、海賊の拳銃が消え、代わりにキャロルとその海賊の間に出現したのは……2つの翼を持ち、両手には長い爪、腹部にあるタコのように丸い口からは鋭い牙が粘着質な唾液と共に

に見え隠れする、グロテスクな容貌の生物。

そして何よりも特徴的なのは目、目、目……翼に腕に、体中に無数の目を持つ、この世のものとは思えぬ姿。

ぐじゅぐじゅと生理的嫌悪を催す音を立て、翼を羽ばたかせながら、その異形の存在が海賊に近寄る。

そのすべての邪眼が目の前を生贄を睨めつけ、手のひらの中でもがく小動物のように哀れな海賊を金縛りにし……大きく広げた口で飲み込んだ。

断末魔の悲鳴を上げながら、海賊の意識は闇に沈み、現実に戻ったことだろう。

「うふふふふ……あはははははー！」

「おい、あいつやべエぞ」

高笑いするキャロルにシュライヤがドン引きしている。

レベツカはスカーレットに抱きついて、2人揃って震えている。先程の光景は刺激が強かったようだ。

何故あんな気色悪いものを作っておいて、キャロルはゾンビが怖いのか。わけがわからん。

「シュライヤも覇気を使えるようになったからって、調子に乗るなよ？ 相手の武装色を上回らないとダメージは与えられないし、見聞色を上回らないと読み合いにも勝てないから」

「ああ、わかった」

「ちよつと！ 私を反面教師みたいにするのやめてくれる？」

「たとえば世界中が非難しても、パパだけはキャロルの味方だ！」

「パパ大好き！」

的を撃ちながら言ったダデイに、キャロルが膨れていた顔を笑顔に変えて返す。

親子仲が良くて何より。

その後はシュライヤと、たまにレベツカも入れてオレとの組手を

行った。^{おこな}

少しずつ速く動き、どのくらいの動きについてこられるか試しながら戦う。ついでに速い動きに目を慣らさせながら、要所で霸王色を使った威嚇を行い、2人の戦闘に関する恐怖心を克服させようと試みる。

こんなことをやっているから、レベツカに怖いと言われるのかもな……。

まあ今は覇気を消費させると、戦いながらも冷静さを失わず見聞色を発動させる練習をするのが主だな。見聞色は心が乱れれば途切れる。

精神力と度胸を鍛えることで、傷や命の危険を伴う戦闘中に、あえて脱力して相手の攻撃を躲す【紙絵^{カミエ}】の修行にもなるだろう。

脱力……つまり力を抜くといっても、それを戦闘中にするのは案外難しいものだ。慣れるしかない。オレもついカウンターを入れようと反射的に体が動いてしまっていた。

もうしばらくしたら、2人で戦わせてみたりするか。今一番実力が近いのがこの2人だ。

身体的に一番ひ弱なのはキャロルだが、あいつは特殊だからな……そもそも戦う気がないので戦闘の訓練は、ランニングとダディに教わって吹き矢的当てをするくらい。

起きている間は、重りを付けてのランニング。これは他にもやる人がある。レベツカは毎回参加。反応を見て日に日に重くしている。

オレと一緒に武装色は使わず……というか、最初の内は夜中に消費した覇気が回復しないだろうが、とにかく素手での畑作業。これも重り付き。

後はオレの能力と両手を海楼石の手錠で封じ、その状態で組手を行い、ボコボコにしたり等だ。これは重りなし。

最後のはレベツカには出来ない訓練だ。オレもあまりやりたくないし、スカーレットに説教食らう。本人がやる気にならないことを祈っておく。やる気になれば、説教食らいながらやるだろう。

シユライヤには良いのかつてなるが、男と女は考え方が違う……オレなら、それで強くなれるならとやる。というかやった。やってもらった。

体に攻撃を叩き込む……手っ取り早い【鉄塊】^{テツカイ}の修行方法だ。オレもガープさんやゼファーさんにこれでもかとブン殴られた。力を入れて気合で耐えろと。

それにシユライヤはまだ12歳、今からでも【生命帰還】^{せいめいきかん}を習得出来る……かもしれない。

シユライヤに聞いたところ、この1年あまり良い生活はしていなかったようだし。

手に入れた賞金は、ほとんど食費と負わされた傷の治療費に回していたそうだ。あいつよく食うからな……これからは食事も治療も心配ない。

オレも海楼石を付けている時間以外は能力を使いつ放しだから、結構食う方だ。

途中海軍基地に海賊を引き渡す時、あの海賊達に『地獄に堕ちろ……!』と言ってきたので、『ああ、そうだな。地獄でまた会おう』と返したところ、『嫌だ、嫌だアアアツ!』と悲鳴を上げて気絶した。あいつはもうダメみたいだな。

☆☆☆☆

そんなこともありながら、ようやくウォーターセブンに到着。

まあ、回り道も旅の醍醐味だろう。別にタイムを競っているわけでもない。

「なあ、なんだこの靴？　すげエ重いんだけど」

シユライヤがさつき渡した靴を履き、足を上げて下ろして重さを主張。

街中で派手な修行なんてやっていたら迷惑になるので代わりだ。

「重くしているから当たり前だ。靴底にオスミウムという、金よりも

比重の大きい金属を仕込んでいる。レアメタルだから、いざという時は売ってお金にでもすればいい」

覚醒した能力で一度機械に変えてまた戻すことで加工し、酸化しないようにした。

「私とお母様のも同じだよ？ 私達のはお店で買った靴を改造して作ってもらったんだ！」

「お前、重り背負った上にその靴で走ってたのかよ……」

「シユライヤもやりたかったらやっていいぞ？ まだ早いと思ってやらなかったが」

「5つも年下の女がやってるのに早いわけあるかッ。おれもやってやらアッ！」

「（まだ作ってなかっただけでしょように……本人に選ばせたわね）」

うんうん、それでこそ男だ。やはり競争相手がいた方がやる気が出るな。

正面には海列車の線路もあるし、人通りの多い場所は避け、壁に5と書かれた船の廃材が流れ着いている辺りに^{レイド・ラプターズ}R R号を泊める。

すべての帆を畳みデカ過ぎる^{いかり}錨を下ろした後、何十体かの「エトランゼ・ファルコン」を透明化させ島に放つ。残りの「^{レイド・ラプターズ}R R」は船番として残り、全員で上陸する。

ウォーターセブンは島の中央に巨大な噴水がそびえ立ち、島の周囲から汲み上げた水が島中に巡る水路を流れ、再び島外の海へと戻っている。おそらく海水を濾過して生活用水として利用しているのだろう。街中の屋根にまで水路があり、造船で有名な島は伊達ではない建築技術で、島を丸ごと使った1つの作品のようである。

歩道よりも水路の方が多くくらいで、水上に顔を出し泳ぐ魚に、船を取り付けブルと呼ばれる乗り物として、住民の移動手段に普及しているそうだ。

水門を閉じ水を貯め水位を上げることで上の階層に行ける、水門エレベーターというのがあり、7つある造船会社及び中心街にはそう

やって行くのが早いらしい。

貸しブル屋で店の人と話しながら、せつかくなので全員が乗れる中型の大きさであるラブカブルを1匹レンタルする。

ヤガラブルがボートなら、ラブカブルはちよつとした船くらいの大
きさ。

小柄なヤガラはウマみたいな顔で愛嬌があるが、ラブカは比較的強面で、大きな口から何本もの牙が見えているな。まあ魚人島の周りで見慣れた。深海魚の方が見た目は奇怪だ。

レンタルだけあつて人には慣れていくらしく、周りのブルを避けながら泳いでくれる。

大海賊時代以降は廃れていたって聞いたが、結構活気がある。海列車で他の島々との交易が進んだおかげなのだろう。

途中、水水肉というこの島で有名な食べ物の屋台を見かけたので、ブルから降りて全員分を購入。

ヤガラの好物でもあるらしいが、魚肉なのだろうか？ 魚肉なら全員食べられるはず。オレは肉を食べると過去に見たグロテスクな光景がフラッシュバックし、少々食欲が失せてしまいが味は好きだ。

縛った紐を持つと、肉がプルプルとプリンみたいに震え、とても柔らかそうだ。

「お前も食うか？」

「おれ様、水水肉、丸齧り♪」

「そうか、じゃあお姉さん。こいつの分も」

「あいよ、お兄ちゃん。毎度あり」

追加で購入し、サービスして大きいのをくれた水水肉から紐を外し、ラブカの開いた口に軽く放り込むと、うれしそうに咀嚼している。「えっ、合ってるでゲソ。ついに魚の言葉がわかるようになった？」

「いや、丸い目を輝かせていたし……」

「ホントにイ？ あつ、ホントだ（意外とかわいい……）」

「今後ともよろしく♪」

こいつの背中からは見えなかったようだ。キャロルが降りて見て驚いている。

メイプルは半人魚なので、魚の言葉はわかる。ラブカに行先をナビゲートしているのは彼女だ。特にイカとはペラペラ話せるという。サメとか海獣とかになると個体によってはよくわからないらしいが。

「デザインが統一されてきれいな街並みね……水も底が見えるくらい澄んでるし」

「海軍の軍艦も、たまにここへ依頼してるって本部で聞いたな」

「ええとこやな。魚人島にちよつと似てて過ごしやすそうやわ」

「あー確かに。トムさんがここに住んでたのもそれが理由かな」

「ゾウもこんなかんじで、象主の噴火雨が水路に流れてましたね」

再びラブカブルに乗って、時に水の流れに乗り、時に逆らい移動中。

ちやぶちやぶと噛む度に音が鳴る水水肉を食べながら、話をする。

こんな柔らかい肉があつたんだな。シンプルな味付けしかしていないようだが、それでもとても美味しい。

シャボンディでは人攫いに毒や睡眠薬等を入れられるのを警戒して家の食卓で食べていたので、日が昇り周囲に人がいる中で買い食いするのが新鮮なのもあるかもしれない。

海軍本部の食堂だったり、魚人島のマーメイドカフェ等ではよく皆と食べていた。

「つつても、毎年のアクア・ラグナの水害に地盤沈下で、毎度市長は頭を抱えているらしいけどな」

「なんだ、シユライヤ。お前詳しいな。ここ初めてなんだろう？」

一瞬で水水肉を平らげたシユライヤが言う。

この島と海列車で交流があるエニエス・ロビー以外の島々は、世界的にも珍しく住民の選挙により市長……島1つの指導者が決められている。世界政府加盟国は大体、世襲の王に権力が集中した絶対王政

だ。

まるで緑が見えないのは、アクア・ラグナの水害でダメになってしまふからか。船を作るにしてもこの島だけでは材料が揃わず、他の島との交易が不可欠な場所というわけだ。海が荒れ狂う偉大なる航路グランドラインに加えて大海賊時代にこれはきつい。海列車は希望の光だったのだろう。

一応話を聞いてみるが、ここにはオレの欲しいものはないかもしれない。

「オレの故郷があつた頃は、造船繫がりで交流があつたらしいからな。親が船大工だった」

「そういうことか……もしかしてお前、船大工とか出来たりしないか？」

「師匠は海賊の子だからって海賊になんのかよ」「ならんな。そりゃそうか」

11や12歳で出来る奴なんてそういないよな。オレだって能力ありきでデンさんの手伝いをしていたわけだし。

「そういえば、人探しがあつたんじやないのササ？」

「アイスバーグさんとココロさんだったかしら？」

後は生きているかはわからない海パンフランキーさんだな。

パンダマンとレイジュが聞いてくる。

レイジュはじゃんけんによる争奪戦の勝者となり、オレの隣の席をすべて使い、目を閉じて膝に頭を乗せ、顔を前ではなくオレの方へと向けている。こつちに色々見えている……というより見せているな。

少しどころではなく見る人に誤解を招きかねない、公序良俗的にマズイ絵面だ。いや、本当に誤解なのだろうか？ 弁明の余地が果たしてあるのか？ まあ最初よりはマシだが。

最初は年少2人が親の膝に座っているように、いやもつとイチヤツいた感じでオレの膝に座る……というか抱き合うように上乗りになっていた。たまにすれ違う人々から殺気の混じった視線と舌打ち

をもらいながら。

だが蠱惑的な香りを漂わせ、女性特有の柔らかい感触を伴い完全にこちらに身を委ね、たまに甘えた声を出しながら頬ずりまでしてくるレイジュに、常識と理性を捨て衝動的に公衆の面前での自重をやめたくなるので膝枕になった。

人前であろうが抱きついてペロペロと首筋を舐めてくるトリスタンのミンク族の感覚が移ったか？ とにかくレイジュ、太股ふとももを丁寧に撫で回すのはやめてくれ。生殺しだから。

「ああ。だから【エトランゼ・ファルコン】で探している」

シユライヤから話を聞いた限り、オレの話は酷い伝わり方をしているみたいなので、姿を消して。いくつかオレも聞いたことがある別の人間の話と混ざっていたな……それに、トムさん絡みで目立ち、噂になっても迷惑がかかる。

全員トムさんの過去を一部覗かせてもらい、顔は把握していることだし、こつそり調べよう。得意分野だ。伊達にまだ捕まっていない。

「1人で人海戦術やつとるな……」

「お兄様、もうちよつと休んだ方がいいんじゃない？」

「言って休むなら苦労しないわ」

「オレは充分リフレッシュさせてもらっている」

いや本当に。

ただ、休みながら能力を使っているだけで。エネルギーは消費するが肉体的疲労はないのが良い所。

「タラ師匠シシヤウが船長だつてのが信じられねエ。おれが今まで見てきた船長は、もつと偉そうにふんぞり返ってたぞ。まあ口調や態度は偉そうだけど、やっつてることが雑用じゃねエか」

「タラ師匠シシヤウ?! なんだその呼び方は!?!」

「そういうところもあるササ」

「まあせやな」

「ははっ、どっちも言ってるぜ。だがこいつがほとんどやってるおかげで、おれはキャロルとの時間が増える」

「私は気楽でいいわ。傍から見ると分には愉快」

「レベツカはまだ聞いちゃいけません」

「？」

「この数日でもうそこに気付いてしまったでゲソか……」

「お父様なら怒るわね。『上に立つ者のやることではない』って……タラシの方はどうだろ？」

「ロゼの心のメイドたる私の、ご奉仕することが二重に減って、とおくっても困ってます」

「元々1人でも旅に出るつもりだったからな。まあウチはウチで、オレはオレだ。そんなことより、今はこの島を楽しもう」

タラ師匠シシヤウは華麗にスルーすることにした。

商店街の方へ移動し、ラブカから降りて歩く。

11人で、通りすがりの貴族がうるさいシャボンディではないので8本の腕を隠していないメイプルに、魚人族のウィリーやミンク族のトリスタンもいるので、少し周りの視線を集めながら店を見て回る。

今度は水水饅頭というのを買って食べながら、本屋や薬局に武器屋で本や薬、弾薬や拳銃のチェック、そして服屋に入っていく。

服屋では女性陣が賑やかになり、あれこれ自分の服を選んだり、自分の服を用意しろと言っておいたシユライヤは着せ替え人形状態だ。

こちらに助けを求めるような視線を送ってきているが、いつまでもあの一張羅か、一番近いと言ってもサイズの合わないオレの服を着続けるわけにもいかなないので耐える。オレも主に母さんと姉さんで通った道だ。それにレベツカとキャロルもお前と同じ立場、お揃いな。

最終的にシユライヤは、動きやすそうなラフな服を何着かと黒い帽子を買っていた。

そうこう観光をして日も落ちた夜、ようやく探し人を「エトランゼ・ファルコン」で捕捉した。今まで仕事だったのだろう。

アイスバーグさんは頭にバンダナを巻いて作業服の、ガテン系あ

ちやんといった姿でうろついているところを見つけ、ココロさんは……車掌か駅長のような格好で、道端に空の酒瓶を散乱させ、飲んだくれていた。

今は遠い昔の若き頃は、魚人島でも指折りの美人として知られていたと、トムさんとデンさんから聞いていたし実際に見せてもらったが、時は流れて幾星霜……今では恰幅が良く、見事なビール腹である。トムさんの知る1年前の姿とも違っており、おかげで探し辛かった。これでは人魚ではなくジユゴ……いや、口を慎めシルバース・ロゼ。絶対に本人に言っではいけない。見えた地雷を踏むな。

それにしてもせめて酒場で……治安が良いわけでもないのに、女性やさあ……ああッ！ 酔い潰れていびきをかいて路上で眠ってしまった。父さんかヒョウゾウで完全に見慣れた光景だ。

とりあえずココロさんの方は「エトランゼ・ファルコン」で保護。アイスバーグさんには、トムさんの弟……つまりデンさんの友人で伝言を預かっていると言い、トムズワーカーズがあったという橋の下倉庫へ向かい、途中でラブカを貸しブル屋に返す。

そして元トムズワーカーズに到着。室内の窓からちようどウチの船が見える。

「シマー！ あのバカデカイ船はお前らのか（『機甲』って海軍の新兵器じゃなかったのか……まさかプルトンを作っちゃったのかと、おれアヒヤヒヤしてたモンだ）」

「んががが！ 列車の客がありや何らいつて騒いでたよ」

「あんた達の社長の弟さんが作った船だ。スゴイだろ？」

「そうなのかい？ そういやそんな手紙も来てたような……飲んで記憶飛んじまつら上、酒エ零しちまって読めなかったけろ。んがががッ！」

「おいおい……」

それじゃあトムさんのこと何も知らないんじゃないか？ ダメだこの酔っ払い……まあ元々読んだら処分してとか書いてただろうけど。

とりあえず自己紹介してから、トムさんのメッセージを立体幻像で映し出す。

『たっはっはっ!! ドンと生きてた!!』

そんな豪快な笑い声の生存報告から始まり、ノックス探検隊の船に乗ることになったことと、そして後は任せたという簡素な、だが力強い言葉で締めくくられていた。

「ンマー、俄かには信じられないが、本当か……」

「ああ。そのトリスタンが傷を完治させたし、新聞でも捕まったなんて聞かないな」

あれから何度か七武海のドンキホーテ海賊団とノックス探検隊がぶつかったとは聞いているが。

それでも捕まっていないおかげで、船長の「木の上のペドロ」に、「白兵のゼポ」と「鉄砲玉のペコムズ」は今や億越えだ。

ノックス探検隊が狙われる理由はドレスローザの件もあるが……トムさんが手配されていないという「天夜叉」にとつて不審な点もあるし、古代兵器の設計図のことがバレているんじゃないかという不安は残る。まあトムさんはもう持っていないんだが。

実際にスカーレット達絡みでC Pを動かせる以上、「天夜叉」に情報を知る伝手はあるわけだし。

今設計図はなくとも、長年持っていたならばある程度古代兵器の構造とかを覚えているだろう。そして、黙秘する人間から情報を聞き出す手段などこの世にはいくらでもある。

だからこそトムさんは去年意識を取り戻してすぐに自害しようとしたわけだが、例えばキャロルの能力なら自害を防いで尋問出来る。他に似たような能力がないとは言い切れん。

もし彼らが「天夜叉」に捕まると身の危険は勿論、「天夜叉」経由で四皇「百獣のカイドウ」にまで古代兵器が伝わってしまえば……ふははっ、頭と腹が痛い。これがオハラのバスターコールの時にセンゴクさんが抱えただろう痛みか……。

「そうか……！ 良かった！ なあ、ココロさん！ ……つてンマー。飲み過ぎじゃねエか？」

「んがががががが!! これが飲まずにいられるかい! こんなうれしい酒は久しぶりさね!! パツフィング・トム完成以来ら!!」

「……くくつ違いねエや! おれにも入れてくれ!」

「ウイッ、ああ飲みな! ヨコヅナにも教えてやらんらきやねエ。あいつあの日から傷だらけなりながら、パツフィング・トムに何度も突進して……これでフランキーの奴が生きてりや言うことないんらける」

どこに持っていたのか、酒瓶をラツパ飲みするココロさんに触発され、アイスバーグさんも飲む気満々だな。

「これは酒が足りないな……船からも持って来よう。母さんに教わった特別製だ。あつ、オレも含めて未成年はジュースとかにしとけよ?」

「は〜い」

「おれ炭酸」

今は細かいことを忘れて楽しもう。どうしようもない。感涙しながら良い気分で酒飲んでいるところに水を差すのもなんだ。

船から色々持ってきて、宴会が始まった。

オレ達未成年組はおかしにジュース。

ウチの大人組はココロさんと一緒につまみを食べて酒を飲んで騒がしくなる中、ついでにほろ酔い状態のアイスバーグさんに、この島で栽培している美味しいものはないかと聞いてみる。ココロさんは呂律が回らなくなつて話にならない。

「ここは水に囲まれて多湿な環境だからな。美味しいキノコが採れる。なんなら知り合いの栽培士に話をつけておこうか?」

「本当か! ではよろしく頼む。対価は船を見せることで良いのか?」

「ンマー……バレてたか?」

頭を掻きながら少し照れ臭そうなアイスバーグさん。

「ふはは、船の方を見ながらソワソワしていたから。解体バラさなければ問題ない。丁度良いか。船を置いて海列車で島を巡ることにするから、その間は好きにしてくれて構わない。何なら船の図面もコピーするが」

「ありがてエ。ちよつとこの島のことと考えてることがあつてな。ンマー、今はまだ夢物語だが」

「そうか。この人はトムさんに代わり、この島を変えようとしているんだな。」

少し一緒に行かないか仲間に誘おうかとも思っていたが、そういうことならオレ達とは来ないだろうな。

「まあ、なんか手伝えることがあつたら言ってくれ。出来ることならやってみるから」

「そうか？　ンマー、じゃあ造船会社作りたいから投資してくんない？」

「いいぞ。いくらだ？　100億ベリーくらい？」

「個人がポンと出す額じゃねエツ!？」

「多いか？　じゃあ10億?」

「じゃあつてなんだ!?!　充分多いわ!　こんなモン酒の席の冗談に決まつてるだろ!　びっくりして酔いが覚めちまつたわ!!」

何故頼まれ事を受け入れただけで怒鳴られているのだろうか？

「いやだって、今のオレの所持金は、換金していないのも合わせておおよそで計算すると……」

あまり大声で言うことでもないので、アイスバーグさんにこつそり教える。

「えっ、マジで言ってるの？　あんなデカイ船作って旅するくらいだから、金持ってるだろうなアとは思ったけど……いいの?」

「ああ」

「あぎーツすー！　よろしくお願ひしますすー!」

アルコールが入っているからか、少しノリが軽いな。そしてテンション高い。

こうして、アイスバーグさんが設立しようとしている造船会社への投資が決定した。

「この人子供の頃から賞金稼バウンテイハンターぎやっていましたから、手に入れた懸賞金に換金した海賊船の代金や面倒臭がって未換金の宝の数々……大金持ち過ぎて金銭感覚が狂ってるんですよ。別にしようもないもの買って無駄遣いするってわけじゃないんですけど、必要だと思ったらバーンと使っちゃうんですよね」

「マーメイドカフェ設立の時もそうだったでゲソなく。そしてその一方で、お金を払って奴隷にされかけてる人を買って助けることも出来たけど、『人間屋ヒューマンショップに払う金はびた一文ない』って襲撃からの殲滅」
「お金は大事って普段から言ってるけど、お金がこの世で一番大事なものとは思ってないのよね……行動が。私だってジェルマから出るのは初めてで金銭感覚は人のこと言えないし、お金のプロでも探してみる?」

3人娘に言われる。メイプルは飲める歳だけど、まだジュースの方が好きだそう。

それにしても、少しオレのプロファイリングみたいだな。だが面倒だからってだけで換金していかないわけではなく、そのままの方が場所を取らないからだ。現状、充分現金は足りているので、換金の必要性を感じない。

お金のプロか……海軍で言う主計長だな。お金のやりくりとか金銭交渉をする人。まあお金を増やせば何の問題もないわけだし、居ればでいいか。

「まあそうだな。この世に大事なものはいっぱいある。命とか、愛とか」

「うわ。師匠が似合わねエこと言ってる……こわ」

「うるさい。自覚はある。愛はすごいぞ。罪人を改心させたり、天竜人を変えてしまったたり」

「あの方は特別じゃないか?」

まあな。オトヒメ様が特別なのはオレもそう思う。

あんなに国民との距離が近くて、国民を愛し、国民に愛された人は

初めて見たって、スカーレットも言っていた。

あの人ならいずれ天竜人も全員変えてしまうのではないかと夢を見てしまう。すべては無理かな……でも何人かは……オレは微妙に現実主義者だな。

こうして夜も更け、そのまま泊まることにした。

明日はどの島に行くか……ココロさんにいつにどこ行きの便があるか聞いて決めるか。

“海列車特急↓春の女王の町”

大人組が酒盛りし、子供組がお菓子パーティー。そしていつものように【ドリームランド幻夢境】で修行をした翌日。

飲み過ぎて頭を押さえている彼ら彼女らに水をあげたり、トリスタンが二日酔いに効くというツボを押して軽く呻き声が聞こえてくる。

ココロさんに海列車の運行情報を聞き、まずは“春の女王の町”セント・ポプラから行くことに決定。

アイスバーグさんに他の人間を船の見学に呼んでもいいかと聞かれ、特に断る理由もないので了承。

プライバシーの問題があるので、一応ウチの仲間達が寝泊まりしている居住区は立ち入り禁止とは伝えておく。特にインテリコンビの怪しげな薬や、ジェルマ経由で政府の許可があるとはいえ血統因子関連の研究資料、あとはオレのDr. ベガパンクから預かっている設計図あたりが見られるとヤバイ。主にオレ達ではなく見てしまった人達が。

そしてR レイド・ラフターズ R 号の設計図も過去に見たものをコピーして渡す。

畑の管理は能力で作ったお世話ロボット達に任せるとして、行き先の島々で目当ての物を手に入れた時は【R レイド・ラフターズ R】で空輸しようか。

それから出勤に行くココロさんと一緒にウオーターセブン正面のブルーステーション駅に向かい、発車前の海列車パツフィング・トムに許可を取って触れさせてもらう。海パンさんについての情報収集に過去を調べるためだ。

早速触って過去を遡り、目当ての情報をサーチ。1年前の光景を見る。

これは……轢かれたというか、真正面から海列車を行かせまいとぶつかっているな。

傍らの角界ガエルが止めるように鳴く中バズーカを撃ち、最後にはその身一つで。根性ある。だが叶わず吹き飛ばされ、鼻が砕けて歯も

折れて……骨も何本かイッているな。血塗れだ。

海列車はすぐに通り過ぎてこれ以上はわからなかったの、次は「ライズ・ファルコン」で空を飛び、人身事故現場の線路の方に触れる……なんて強運だ。着水して浮かんでいる所に、ボロボロの廃船が流れてきて乗り込んでいる。傷は深い、生きている可能性が0ではない。

この辺りの海流からウィリーに大まかにでも予測を立ててもらって、後は人海戦術で虱潰しに調べよう。アクア・ラグナがあるとはいえ、島の周辺なら気候も落ち着いている。離れ過ぎて不安定な海域まで行ってしまえば、船が沈んだり海王類に食われたとかが困るが……。

一応わかったことをココロさんに伝えておく。

依然変わらず消息不明なので微妙な反応だ。まあ仕方がない。無事ならウォーターセブンに帰って来ていてもおかしくないからな。

とりあえず調べ事を終え、始発の海列車に乗車する。

「んががが!! じゃあ出発だよ!!」

ポッポーツ!!

ココロさんの号令の後、海列車が汽笛を鳴らし煙を吐きながら、ゆるらと海を漂う線路をパドルが掴み、海を渡る。

予想していたほど揺れはなく、風で進む帆船とは桁違いの速度で進んでいく。ココロさんによると昼にはセント・ポプラに着くそう。

皆で固まって座席に座り、窓から景色を見ながら過ごしていると、過去視で見た大きなカエル……ヨコヅナがクロールで泳いで海列車に突進してきた。そういえば昨日酔っぱらったココロさんが言っていたな。体の所々傷がある。

窓を開けて両手を分離、飛ばしてヨコヅナの体をキャッチ。

その後車掌室の屋根に乗せ、ココロさんがトムさんの話を伝える。

汽笛の音とヨコヅナの声で、他の客に内容は聞こえないだろう。車掌室の手前、今オレ達がいる車両には誰も乗っていないし。

ゲロゲロと泣き声をあげ喜ぶヨコヅナだが、海列車への突撃はやめるつもりがないようだ。

メイプルに翻訳してもらおうと、もう二度と大好きな人が自分の前からいなくならない様に、大好きな人を守る様に強くなるために、海列車に日々戦いを挑んでいるのだとか。

その心意気や良しということ、オレが覇気を目覚めさせる。ウォーターセブンに戻ればしばらく一緒に船に乗り鍛える代わり、海列車への突進はやめてもらった。強くなるためにトムさん達が長い年月をかけて作ったものを壊されては困るし、それはヨコヅナも本意ではないだろう。

「強くなる理由か……なあレベッカ。お前はなんで師匠に修行つけてもらってんだ？」

ヨコヅナの話から、シユライヤがレベッカに聞いた。

シユライヤが初めてオレ以外の仲間に分かち話しかけた……！昨日のショッピングやバカ騒ぎで少しは打ち解けたのか？ 良いことだ。暖かく見守ろう。

「え〜とね。兵隊さんとトンタツタの皆を助けるの！」

レベッカが真剣な、とても凛々しい表情で答えた。

すかさず脳内保存。後でカラープリントし、スカーレットに渡してレベッカアルバムに保管しよう。

それにしても他に誰もいないからいいが……まあ、これからドレスローザの関係者と判別するのは不可能だろう。トンタツタはそのまま有名ではない。ドレスローザでも妖精さんの呼称で通っているそう。

レベッカ達がいたドレスローザは現在、ドフラミンゴ政権の支配下にある。

国民達は、おおよそ新しい王を受け入れていると聞く。

先王……スカーレットの父で、レベッカの祖父であるリク王の名は、惨劇を引き起こした首謀者として死後（※実際は生きている）も

国民達からは恨まれているようだ。

だがその一方、リク王の無実を信じる者もいるようで、それこそがレベルカ達をノックス探検隊やパンダマンと協力し逃がした、片足おもちやの兵隊さんとトンタツタ族らしい。

おもちやの兵隊……オレと似たような超人パラミシアの能力者か？

レベルカはその彼らを「天夜叉」から助けたくて、オレの教えを受けている。

「誰かを助けるため……か」

何か物憂げに呟くシユライヤ。

「もしもお前が復讐のために強くなろうとすることに、動機が不純とかで負い目のようなものを感じているのなら、強くなるためにそういったものは一切関係ないと言っておく。大事なのは上に昇ろうとする意志の強さだ。第一、誰かに勝ちたいと思うこと自体は、少なからず誰でも持っている感情だ」

「当たり前だよ畜生……なんだその生暖かい目はッ！　ツたく、あんたはおれに復讐して欲しいのか欲しくないのか、一体どっちなんだよ？」

「復讐はすれればいいが殺して欲しくはない。どの道『將軍』は誰かが捕らえねばならん。お前がやらないならオレがやる。だがオレの望みを更に言えば、最終的にお前が笑っているなら何でもいい」

シユライヤが『人を殺せば破門』という言葉をどこまでと捉えているかは知らんが、師弟関係の解消という意味でオレは言った。別に殺して復讐しても、船に乗っていたければ構わない。

そもそもハンコック達とも、天竜人を殺したと知ってから変わらず接している。未だに直接教えられていないが。

何か言われるかと思っているんだろうな……オレが助けたお前達が殺したということは、それはオレが殺したも同然なのだから、どうこう言う資格がない。

「……ああそうかよ。というか、師匠がその兵隊さんとかを代わりに助けられねエのかよ?」

ふむ。照れ隠しのように言われるが、当然と言えば当然の疑問だ。「オレは国民すべてが人質にされた状態で『天夜叉』に勝てる程強くない。人質なしで勝てるかどうかもやってみるまではわからんが」

4年程前に海軍に保護されたドレークに聞いたことがある。

彼はシナンことロシナンテさんが『天夜叉』に撃たれたミニオン島にいたそうだ。

元少将の海賊にして彼の父、デイエス X・バレルズが海兵時代のコネでも使ったのか、政府とオペオペの実を50億ベリーで売り渡す取引を行うはずだった。

そのバレルズ海賊団のアジトに『天夜叉』が現れ、いなくなったあとにはバレルズの死体が残っていたらしい。オペオペの実はどこかに消えたそうだ。

かつては尊敬していた父だが、海賊となってからは息子である自分に理不尽な暴力を振るうようになっていたので、別にそのことで恨んではないそうだ。

しかし、その時『天夜叉』がイトイトの能力で出したのであろう島一つ覆う巨大な、壊れず触れる者を切り裂く糸の檻。そしてその中でバレルズ海賊団が体が勝手に動くとき泣き叫びながら殺し合いを行う様子は、さながら地獄のようだったと、ドレークがトラウマを語るように吐き出していた。

島から出さない頑丈で大質量の檻と海賊団全員を操る数の糸……たまたまりク王の豹変に出くわしたと考えるより、人を操る糸でリク王軍に国民を襲わせ、救世主を装った自作自演と考えた方が自然。

だがそんな筋書シナリオを暴いたところで、『天夜叉』を捕らえられなければ何の意味もない。

大規模な悪魔の実の能力に加えて霸王色の覇気使い。

七武海は程度の差こそあれ、全員が覇気使いとジンベエからは聞いている。

ハンコックは会合に出たことがないので知らないそうさ。おそらく同じ七武海の顔も、面識があるジンベエ以外は覚えてしまい。そういう世情はニヨン婆とかソニア辺りの方が詳しいだろう。

とにかくそんなことが出来る。『天夜叉』相手に、オレが国民を1人も殺させず、覇氣使いかつ能力者が数多くいるドンキホーテ海賊団を1人残らず倒せる確率はどれくらいのものだろうか？

それにしても拳銃か……殺したいなら能力の糸で首を刎ねれば確実なのに、わざわざ拳銃を使ったのは、肉親を殺した感触を糸伝いに味わいたくなかったのか？ それが理由ならそもそも殺さなければいいとは思うが、他に理由は思いつかない。

「その上それで終わりではなく、四皇の百獣海賊団と連戦だ。バツクについているらしい。現海軍本部元帥に聞いたことがある。オレが『百獣』に勝てるか、と。今のオレでは方に一つも勝ち目はないと言われたよ」

「ウソだろ……能力者の癖に、海楼石の手錠で両手と能力を封じて力が抜けた状態で、オレを覇気でボコる師匠が？」

「その『百獣のカイドウ』って奴な。昔海軍に捕まったことがあるが、能力者の癖に海楼石を付けたまま、中將も大將も元帥も、海軍の誰も殺せなかった真正銘の怪物らしいぜ？」

そう元海兵のダデイが言ってくる。

この人も四皇の強さをごく僅かではあるが味わっているからな。父親が世界一の狙撃手と信じるキャロルには秘密だが、海軍を辞めた理由だ。

赤髪海賊団の幹部、『追跡者』チェイスヤソップと拳銃一発勝負の決闘をしたらしい。

少佐が1人で四皇幹部に挑むか普通？ 他の幹部達どころか『赤髪』もいて、黙って決闘を認めたそうさ。

結果は敗北。だが、利き腕を撃ち抜いたという。充分健闘している。

決闘当時の話だが、射撃の腕は少し負けるが勝負になるレベルのところか。あとは覇気だな。

そして決闘に負けた自分を殺して止めを刺せと告げるダデイに、「追跡者」^{チエイサー}はダデイの首にかけた、キャロルの写真が入ったロケットを見て、自分にも息子がいると言ったそうだ。赤ん坊の頃に海に出てそれっきりだが……と。

息子を愛してないのかと尋ねるダデイに「追跡者」^{チエイサー}は、そういうわけではないが、海賊旗が自分を呼んでいたからだと答えた。

これだけならただの育児放棄野郎だが、その後

『おれは息子に何もしてやることが出来ねエ。そんなダメな親はおれ1人でたくさんだ。いつも娘の側についてやるがいい。1人ぼっちになんてしちやいけねエ。まっ、おれが言えた義理じゃねエけどな!』と告げて、止めも刺さず笑って去って行ったとか。

こうしてダデイは海軍を辞め、娘の側にいることにしたというわけだ。

育児放棄には変わりないが、会ったこともないキャロルへの思いやりはある男のようだ。あいつが能力で悪戯したのも、親に会えず寂しかったからってのがあるだろうし。

「赤髪」も海賊として変わり者だったが、そういう船長だとそういう仲間が集まるのかね？

「いやそこは死んどけよ……なんでそれで死なねエんだ」

「あまり死んどけとか言うものではない。フィジカルがずば抜けているか、武装色が桁外れか……そんな感じだろう」

「百獣」の頑強さに驚くシュライヤに返す。

「白ひげ」が世界最強の男と呼ばれているのに対して、「百獣」は陸海空、生きとし生けるもの全てのもの達の中で最強の生物と呼ばれる海賊だ。どうも人間とは思えぬ強さらしい。

「あつ。海賊に手錠をかける時は、ちゃんと後ろ手にかけるよ？ でないと両腕を切り落として逃げられるかもしれない」

ついでに賞金稼ぎらしいことも教えておいた。

「そこまでしねエだろ」

「腕じゃないが、両足を切り落としてインペルダウンを脱獄した奴なら実際にいるな」

「マジかよ……そういや、あんた元海兵なのに、師匠の親父ほつといて良いのか?」

「元だから良いんだよ。おれもこいつの親父も。それに、こいつの親だぞ?」

「ああ……」

このニュアンス……オレの親だから慈悲を持つて見逃してやろうって感じじゃないな。どちらかと言うと相手してられるかって雰囲気だ。

「こいつについても、もしおれらに被害が及ぶなら、大人しく捕まって取引するなり実験動物になるなりして出てくるって言うてるしな……まあ、今までの付き合いから信用出来る(女関係は信用出来んが。こいつもこいつの親父も)」

「処刑されずにハヤブサ及び疾風の如き速度で舞い戻つて来てやるよ」

「はあ……はあ……きゅ、きゅるくん……♡」

膝の上で快感に体を震わせ、声を抑えながら息も絶え絶えに喘ぐトリスタンの下半身へと手を伸ばし、丁寧にゆっくりと繊細な力加減で、そして極めて健全に尻尾のブラッシングをしながら雑談をして過ごし、海列車は目的地セント・ポプラに到着した。

オレ達のような観光で来たのだろう普段着の人や、仕事で来たのだろうビジネススーツの他の客達と海列車から下車し、ココロさんと海列車の屋根に乗ったヨコヅナに見送られながら、島を歩く。

“春の女王の町”と呼ばれるように気候は1年中暖かい。また街中にも木々が立ち並び、自然と人工物たる建物との調和を図った景観をしている。

林業が盛んで、ウオーターセブンへと運ばれ造船にも使われる材木の卸売市場がある島だ。

聞くアテがあつたウォーターセブンと違い、この島に知り合いはいないはずなので、まずはカフェに入つて注文し、店の人に話を聞く。こういう観光客には慣れているのか、すらすらと尋ねたことに返答してくれた。

会計時にチップを渡して店を出て、目的地に向け移動中……

「まさかこんなに早く会えるとは思わなかったよ…… // 機甲のロゼくん」

少し聞き覚えがある声で名を呼ばれる。

噂からはゴードル以外のオレの容姿はわからない。戦闘を行つた海賊はシャバにいないはず……となると候補は、人攫いか人間屋閨連、そして少々お節介を焼いた一般人多数か。

振り返ると……すらりとした長い脚に、上流階級のようなフリルのついた服装。

茶髪のショートヘアで、端的に言つて美形。オレより少し背が高い。

男版ハンコックのような存在が、中性的な美貌とはあまり似つかわしくない、大きく重量感のある、光り輝く黄金の斧槍ハルバードを軽々と片手で持ち上げている。その柄にはリユウが巻きついた装飾がされている。これも黄金製だ。

ハルバード……簡単に言えば、先端に斧がついた重い槍。切る、突く、叩く……色々な使い方が出来るが扱い辛い、上級者向けの武器だな。

「イケメンね。ロゼ程じゃないけど」

「いや、筋肉が全然足りないしタイプは違うけど、あっちの方が顔はロゼより上よっ」

「スカーレットは筋肉フェチやったんか……」

「なら何故私との仲を疑われた時即否定したササ」

「確かにきれいに割れた良い腹筋ですが……異性として見られませんか。それじゃあゴリラでもいいじゃないですか」

「あらら……振られちゃったゲソ。でも、パンダウーマン美がいるか

ら元気出してパンダマン！」

「たしかあの人は……」

惚気るレイジュに性癖を暴露したスカーレット。

驚くウイリーに、唐突に振られたパンダマンと慰めるメイプル。

そしてトリスタンもガルドアを覚えていようだ。

「おれは華麗なる賞金稼ぎ……ガルドア。キミに決闘を申し込む！」

パウンティハンター

周りに構わず真っ直ぐオレを見て、ガントレット籠手を付けた手に持った手袋をこちらに投げてきた。

「ガルドア様の決闘よ♡」

「相変わらずお美しい……♡」

周りの女性達が何やら騒ぎながら近づいてきている。多分あいつのファンだな。

「オイオイオイ、死ぬわあいつ……いや、殺さねエのか」

「お兄様は機甲旅団にて最強！　　どうか全員束になっても勝てない……」

「1対多数の方がむしろ得意で、それに適した能力だものね」

「それお前もじゃね？　無差別催眠厨」

「私の能力はオンオフ出来るから。もしも一緒に戦う時があれば耳栓して。私は基本距離とって逃げるけど」

子供達がそれぞれオレの勝ちを疑っていないな。

うれしいが、今のオレ程度を世界の頂点みたいと思うのはちよつと問題か……是非積極的に師匠越えを狙って欲しい。

「ほう……わざわざお上品な奴だな。知り合いか？　（こいつのうれしそうで好戦的な笑み……敵じゃねエようだな。海賊と戦う時はいつも不満そうなツラした奴だ）」

「ああ。ちよつとな」

拳銃での決闘経験のあるダデイの言う通り、正々堂々名乗りを上げて、その上で手袋を投げ決闘だと言ってくる奴はオレも初めて見た。大体攻撃が挨拶代わりだ。

オレの手前の地面に落ちた手袋を拾う。これで受諾したことになる。

「合意と見てよろしいですね？ お名前は？」

「ん？ ロゼだ」

いきなり近付いて来た女性に、よく通る声で名前を聞かれる。

頭の上に大きなリボン。緑髪をツインテールにし、両サイドの髪がふわふわしている。童顔にそばかすが似合う、オレと同年代くらいの、人懐っこい笑顔を浮かべた美少女。緑を基調としたへそだしルックで目立つ格好だ。

手にはスタンドマイクが握られているな。

『さあ始まりました決闘時間のお時間です！ 片や皆さんご存じ！』

数年前突如としてこのセント・ポプラに現れた華麗なる賞金稼ぎ！

美の探究者、美の探究者”を自称し、今まで倒してきた賞金首の

懸賞金で作った黄金のハルバードを操る槍兵……ガルドアッツツ!!』

ガルドアがパフォーマンスのようにハルバードを片手で振り回すと、周囲から黄色い歓声上がる。人気だな。

あのポップなそばかすちゃんのマイクが町のスピーカーに繋がっているようで、大音量が響く。

内容から、今までのガルドアの戦いも実況していたことが窺える。

それにしても、美の探究者”？ 美と芸術家の合体か？

『そしてそのガルドアの対戦者は、鋭い視線に大胆不敵な笑みを浮かべた謎の男！ あなたは一体誰なの!! ガルドアに決闘を申し込まれた正体不明の風来坊ツ……ロゼッツツ!!』

「あっちが槍兵ならこっちは狂戦士よ！ やっちやえ狂戦士！」

キヤロルの奴め。大声でなんてことを。

誰が狂戦士だ……ヤバい。自分の過去を振り返るに否定出来ん。

『実況はいつも通り、ここセント・ポプラや海列車で繋がる島々でアイドル活動中の、アンでお送りします。観客の女性陣が盛り上がる中、この勝負を制するのは果たしてどちらか!? それでは……決闘開始イイ!!』

「決闘!!」

ハイテンションな実況の下、ゴングが鳴らされる。

アイドルだったのか。ハンコック達以外で初めて見た。

色気は断然ハンコック達だが、親しみやすい性格だな。最近は何人とは親しくなったみたいだが、ファンからは基本崇め奉られている。

宣戦布告された時よりあいつとの間に距離がある。50メートル程だな。

「麗槍 春の獵犬」！」

ドスン！

ガルドアが虚空にハルバードを突き出し、「飛ぶ指銃」のように刺突が飛んでくる。威力はこつちのほうが上だろう。

ついでに黄金が太陽を反射し眩き光を放っている。ゴーグルがなければ目に毒だ。

それを首を横に傾げることで躲し、歩いて近づいていく。

「まっ、キミなら避けるよね。だけど、これで終わりじゃないよ！

【春の獵犬共】ー！」

ドガガガガツ！

乱れ突きが飛んでくる。先程よりも輝きを増して。

黄金のオーラを纏って見えるガルドアに、周囲の乙女達が刺激が強かったのかバタバタと倒れていく。霸王色いららないな。

それにしても普通より更に重いだろう黄金製の武器を息も乱さず連続で……見た目の派手さだけでなくパワフルな攻撃だな。

だが構わず歩いて進んでいく。

『な、何イツ!? ガルドアの得意技ッ、幾度となく相手を魅了し倒してきた華麗なる飛ぶ刺突の連続攻撃が、無人の野を進むが如く、余裕の笑みを浮かべながら紙一重で躲されていく!? まるで攻撃の方が口ゼを恐れて避けているようだ! ていうか私が怖い!』

「紙絵機身」……知つての通りオレは機械人間。見聞色の先読みと、能力で自分の体を改造し、必要最低限の回避を能力による精密動作に任せ、自動操縦で躲している」

見聞色と能力、そして反復練習を繰り返して体で覚えた【紙絵】、その3つの複合技だ。

さらに進み、もうすぐ飛ぶ攻撃の関係ない、槍が直接当たる間合い

まで来た。

槍を避けながら一步踏み出し、射程内に入る。

「これ以上近寄せない！」「麗槍^{れいそう} 黄金時代^{ゴールドエンエイジ}」！」

ズバンツ！

武装色を纏ったハルバードをオレの体に目掛け刃筋を立て、黄金の残像と共に横薙ぎにスイングした。

煌びやかなその太刀筋に心奪われた者は、気付けば切られ、倒されているというわけか……当たればだが。

『な、なんとオ！ 躲すどころかガルドアが薙ぎ払ったハルバードの先にサーフィンのごとく乗った!?』

「え〜ツ!？」

「このくらいで叫ぶな」

柄を靴で滑り降りて、驚いた顔のガルドアの懐に潜り込み、着地と同時にしやがむ。

「スクラップ・フィスト」ツ！」

武装硬化した機械の拳を、立ち上がった勢いをそのままに、顎に下から殴りつけようとした所で、

「ギャ〜ツ！ ガルドア様のお美しいご尊顔がツ！」

「(こここまでかツ!)」

^{ギャラリ}観客が騒ぐ中、ガルドアが目を閉じた。

能力を解き手を開き、オレの手のひらが顎に触れる。

『お〜つと、これはどうしたことだアツ!? ロゼが攻撃を中止したアア!!』

「えっ?」

手を離し跳びあがって、改めて握り拳を作り、【月歩^{ゲツポウ}】で宙を蹴った反動のまま、全体重を乗せ上から頭に拳骨を落とした。

ゴツンツ!

「痛いツ!？」

「目を閉じるな！ 戦場で相手への警戒を怠らないツ！」

『まさかの拳骨ウツ!? そして突然のお説教だアア!!』

ガルドアが悲鳴を上げて尻餅をつく。

「うわ、あれ痛エんだよな……」

「私も最初同じことされたあ……DV……」

「(レベッカ相手には大分威力を落とさせているけど)」

「それで、まだ続けるか？」

「いや、やめとくよ。勝っておれの部下にしたかったんだけどなあ」

『決着ッ！ 見事勝負を制したのは、謎の狂戦士ロゼ！』バーサーカー

バーサーカー 狂戦士で定着してしまった……周りから残念そうな声が聞こえるが、ガルドアに大した傷がないのでまあいいかという感じ。

とりあえず地面に座ったガルドアに手を差し伸べ起こす。

「ありがと、ロゼ」

「刺突を飛ばすとは、上達したな」

『あのく、お二人はどういった関係なんですか？ お知り合いみたいですが……』

「ああ。昔ガルドアと家族が揃って戦争から船に乗って避難したけど、オレがいたシャボンデイに漂着。そこを拾って、海軍に頼んで希望する場所に軍艦で送ってもらった」

「(ああ……私やレベッカと似た感じなのね)」

マイクを持って近付いて聞いて来たアンに答える。

他にも気になっていた人はいたようで、代表して聞いたという感じだ。

セント・ポプラに行っていたんだな。

「それだけじゃないよ？ ロゼはオレに戦いの手解きをしてくれた、いわば師匠だね。そして……あの“機甲”なんだ！」

『えっ?!』

アンが大声をあげて後ずさりした。周りもざわついている。

これから毎回こうなるのか。カタギの人間を脅かすのは本意ではないんだが……。

「はははッ！ そうなるよね。おれもこの島で彼の噂聞いて驚いて、その後家族と腹抱えて笑っちゃったよ。話が大きくなり過ぎてもうおかしくってさ〜！」

「こっちは笑えん。オレはしがない賞金稼ぎだ」バウンティハンター

「いやそれはない」

笑いながら大きく手を振ってないないと主張してくる。
失礼な。お前には父さん達のことを教えていないぞ。

「そういうえば、『勝っておれの部下に』って、何の部下だ?」

「ん、興味ある? おれもたまに服作ってる、両親のブティック」

「(ファッションデザイナーとして)お前が欲しい。オレと一緒に来てくれ」

すかさずガルドアを勧誘した。

「「キヤ〜ツ♡」」

なんだ? 周りが騒がしい。

見ると、何人か幸せそうな顔で卒倒している……春だからな。昨日も似て非なるものを見た。

「ちよつと誰か、今の録音してない!? 毎日寝る前に聞きたい!」

「ロゼならともかく、してるわけないやろ」

「本人に直接言ってもらいなさい(私も意識を持っていかれそうになつたわ……絵になるわね)」

「ふふん。私は『毎日お前のお菓子が食べたい』って言われたことがあるでゲソ」

「羨ましい!」

周りだけでなく、オレの身内も騒いでいた。

「安心なさい、王女様。私が録っておいたわ」

「ありがとうステューシーさん!」

「いや誰だよアンタ!」

「この前会った、お兄様の友達……でいいんだよね?」

「ふふふ、もつと……ふ か い な か ♡」

居たのかステューシー。オレすら気付かなかったぞ。

レイジュとがしつと力強く握手を交わしているが、もう片方の手には……録音ではなく録画していたようだ。

「うん。そういう意味で言ったんじゃないんだろうけど、キミって結構迂闊だね」

「そんなことないだろ。隠し事は得意だ」

「胸張って言うことじゃないよ……」

『あの！ ちよつとお二人の写真を撮らせてもらっていいですか？』
「ん？ ああ良いぞ。でも新聞社とかに晒すのは勘弁。話題を集めて名を上げたい……みたいなのが寄ってきたら迷惑」

オレ達の許可を取ってから、ポラノイドカメラを構えるアン。

目当てはガルドアだろう。超イケメンだし。

ポーズとかの注文を付けられながら、フラッシュと共に撮影。

「やっぱり迂闊じゃないか」

「何が？」

ガルドアが何か言ってくるのと同時にカメラから写真が出てくる。

『ビジョビジョ♪ ビジョン♪』

アンが写真に触れ、指先を空へと向ける。

すると、空間が揺らぎ……軽く微笑んでいるオレと、カメラ慣れしていきそうな笑顔のガルドアが、肩を組んでいる姿が浮かび上がった。

大喝采が聞こえる……少し怖い。

「立体幻像？」
ソリッドビジョン

「彼女……アンはキミと同じ悪魔の実の能力者。ビジョビジョの実のビジョン人間さ。触れた絵や写真がビジョンとして現れる。効果時間こそ短いけど、悪魔の実の能力や本人しか知らない情報まで備えてね。アンがロゼの隠し事を暴くつもりだったら、ヤバかったかもね？」

ガルドアがドツキリ成功といった笑顔でウインクしながら種明かしする……これは迂闊と言われても仕方ないな。

悪意がまったく感じられなかったので、警戒していなかった。

「くっ！ 色仕掛けに惑わされたか……！」

『ちよつ！ 言いがかりはやめて下さいよ！ 皆さんの私に抱いているイメージが！ な、なんか睨んできてる人いるし！』

「(ビジョビジョの実……聞いてはいたけど要注意ね。ロゼについて余計な詮索をしない様釘を刺しつつ写真も回収して、彼女を宣伝する代わりにたまにお仕事手伝ってもらおうかしら？ この辺りの人脈と影響力がありそう。C Pサイファーボールに關係ない協力者は、いくらでも欲し

いのよね)」

ステューシーが真面目な眼だな。

まあ任せて大丈夫だろ。

「アンは美人で人気だからね。まあ……どっちもおれ程じゃないけど」

『あっはい』

ポーズを取って張り合うガルドア。

周りがガルドアに黄色い声を上げている……何故か寒気がするが。

『というわけで、思ったよりも天然臭がする。機甲さんでした！』

「これで少しはキミのイメージも変わったかな？」

「敵からは嫌われた方が潰しやす……そのために決闘を？」

「いや？ 目立ちたかったから。負けちゃったけど、皆楽しんでたみたいだし、結果オーライかな？」

オレがさつき迷惑だと言ったことをすでにやっていた……まあ知らない仲ではないからいいか。

ステューシーが『ちよつとお話があるんだけど……いいかしら？』と話しかけ、へびに睨まれたカエルのようなアンだったが、まあ平穩無事に済んだ後、ガルドアの両親がやっているという店に向かう。

「黄金の武器って強いのか？」

「柔らかくて加工はしやすいが、だからこそ武器としての耐久力も低くあまり向いてない。ただ武装色を鍛えればそこはカバー出来るし、重いのはちゃんと扱えるなら利点か。腐食し辛いのも良い所かもな」
黄金のハルバードに興味を示したシユライヤに答える。

光を反射するのか、はたまた腐食に強く輝き続ける神秘性を強化したのか、ゴルゴルの実の能力者は鍛錬次第でレーザーが撃てるのか。
「へえ……ガルドアはそこまで考えて」

「いや、単に派手だからだよ？ これ、純金なんだ！ きれいだろ？」
「あっそう」

一番柔らかくて高い奴だな。手入れが面倒そうだ。

「そっういや師匠って、男も助けるんだな」

「お前の中のおれのイメージがヒドイ」

確かに女も手を貸すけど。とある姉妹とか、「疫病神」と呼ばれた奴とか。

「ロゼは男女関係なく助けるけど、男女関係なく戦うゲソ。加減は一応してる」

「そうだな」

「それでステューシーさんは何故ここにいるの？」

「いえ、そういえば結局あなたに教えてなかったから改めて実演して伝授しようかと……私の店もある場所だし」

「恋愛先生！」

オレの今夜の予定が埋まった。

「そういえば、ガルドアは男のオレから見ても美形だけど、キヤーカー言わないな？」

「ふむ。それを子供は当然として、あの3人やC P Oに聞かず私に聞くあたり自覚がありますね」

「それは残酷だろ」

「よろしい。では『教えてお母さん』と言えば答えてあげましょう」

「普通に教えてくれ」

「私が母だから」という普通でつまらない答えで満足出来ないなら、『教えてお母さん』。Repeat after me」

「……教えてお母さん」

スカーレットの要求に、たかが呼び方と自分に言い聞かせ屈した。「ふふっ、いいでしょう。遠くから眺める分にはとても眼福なのです

が、自分より肌がきれいな男の子というのは……少々腹が立ちます。やはり男は筋肉です。その点あなたは素晴らしい肉体ですよ？」

すごい本音が返ってきた。

だがなるほど。ウチは美形が揃っているし、ある程度プライド高いんだな。

「納得したようですが、あなたも相当きれいな肌してますからね？ ベジタリアンだからかしら？（お花やフルーツみたいな体臭してるし……）」

「ガルドアはともかく、オレに嫉妬しないで。自分に自信を持ってく

れ」

「なので、あなた達2人が並んでいるところを見るのは非常にグッド。シユライヤも見込みありそうなので、男避けは充分と行ったところですね。それにイケメンを囲うのは良い気分です」

「生々しい。ぶつちやけ過ぎだ。だがありがとうお母さん」

冗談めかしてそう締め括るスカーレット。

そして店に着き、ガルドアの両親とも再会。

話し合いの結果店の宣伝も兼ねてガルドアの乗船が決定した。

「へえ、シルバース・ロゼって名前だったのか……きれいな名前だね？」

「そ、そうか？」

「二(照れてる……)二」

「おれ程じゃないけど」

「そうか」

あとは夜までにルビノクヨの木を含めた目当ての物を取引して船に送り、全員が泊まる宿を決めるくらいか。

それにしてもガルドア……オレが教えたことなんて僅かだが、教えてもないハルバードを使いこなし、武装色を纏えるようになっていた。

優秀だからナルシストなのか、ナルシストだから自分磨きに余念がなく優秀になるのか……どっちだ？

ハンコツクは才能がある努力家だな。

☆☆☆☆☆

カームベルト
風の海、アマゾン・リリー

「はっ！ 今ロゼがわらわのことを想っていた気がする！」

クツヤ
九蛇城にて湯浴みあがりのバスローブ姿のハンコツクがいきなり叫んだ。

「いきなりね……びつくりしたわ」

「あと、わらわとアイドルとナルシストが被っている者共と遭遇した

ような……」

「多少似てたとしても、姉様あねの前では薄れてオーディエンスかバックコーラスに回るわよ」

「ふむ。それもそうじゃな」

姉と同じくバスローブ姿のサンダーソニアとマリーゴールド。

最初の頃は姉妹交代で見張りに立って湯浴みの時間を島に告知、背中に見たものを石と変えるゴルゴンの眼があるからと、入浴時に自分達から遠ざけていた3人。

だが天竜人が女ヶ島にようがしまに来た日、島民に元奴隷と悪魔の実の能力のことを明かしたハンコック達。島民達は排斥するどころか、何としても守らねばという使命感を胸に、新たに結束を固めたのだった。

すでに知っているロゼ達はともかく、余所者には決して秘密を明かさぬ鋼鉄の誓いの下、今までよりも親密になり、たまに姉妹以外にも一緒に大浴場に入るように……鼻血を出して倒れる者がいるのが玉に傷だが。

最初は不安もあつたこの島での生活だが、今では3人にとって大切な場所となっていた。

グランドライン
偉大なる航路、ブルジョア王国

「ムスッ！ ぼくより目立とうとしている奴がいる気がする……！」

王城のバルコニーからバラを啜えて、自分の姿を見るために集まる女性達に、輝く笑顔で手を振っていた王子……キャベンディッシュユが、突然顔を歪めた。

「「キャ〜ッ♡ 怒った顔もカッコいい♡」」

「フフ……そうかい？」

ファン達の歓声に気を良くし、すぐにいつも通りの柔和な表情に戻り、ムシヤムシヤとバラを食べ始めるキャベンディッシュユ。

ここブルジョア王国では、世にも美しき美貌を持つ王子に魅了され、連日城に国中の女性達が殺到し、年頃の娘が誰一人結婚しない異常事態が発生していた。感極まって気絶している者までいる。

絶世の美女と名高き七武海……かの「海賊女帝」ボア・ハンコックが普通の国に生まれていたら、同じような事態が発生していたかもしれない。

「ああキャベンディッシュ様!? そのバラは観賞用で食用ではありませんー!」

「美しいぼくが美しいバラを食べれば……フツ、最強だろ?」

「理解不能説明不要の美しさ! 眩しくて直視出来ません!」

観賞用のバラを咀嚼する王子に、衛兵が注意するが満面の笑みで撃退される。

「バラがないならばくを見ればいいじゃない」

「……おれ、王子なら抱ける。抱かれない」

「はあッ……おいまただ! 1人檻に追加しとけ!」

「やめろオーッ! おれは悪くねエッ!」

剣術の天才でもあるキャベンディッシュの人気は同性にまで及び、王子の純潔を守るために、日々投獄される衛兵も後を絶たない。

今日も1人、道を踏み外し未知なる世界へ突入せんとしていた者が、両脇を抱えられ連れて行かれた。

「キャベンディッシュ様♡ 結婚して♡」

「ごめんね。スターは誰のものでもないんだ」

この騒ぎは、8年間ブルジョア王国の出生数0という驚愕の事実を重く見た現国王が、このままでは国が減ぶと苦渋の決断を下した結果、愛する息子を『人気ありすぎの罪』でわずか74人の各分野に秀でた部下とたった5億ベリを渡し国外追放するまで続いたという。

そしてそれは同時に、美し過ぎる王子が一国という狭い檻から、広き世に放たれてしまったことを意味するのだった。

“海列車特急↓カーニバルの町”

一夜明けて次の日。

ステューシーは満足して帰った。

「あん？　なんか今日は師匠達機嫌が良いな」

「おいバカやめろ。触れるな。スルースキルを身に付けろ」

「はあ？」

「昨夜はお楽しみだったわ……♡」

宿屋のロビーでの会話。

朝からピヨピヨ！（※自主規制）の話をするのもあれなので、とり

あえず昨日ガルドアに頼んだものを確かめる。

もう終わったようだ。

それをスカーレットに渡す。

「これは……修道服ですか？」

「そうだ。変装用。ガルドアにやってもらった」

「いつの間にサイズを……」

「オレが目測で」

早速着られるか試してもらおう。

数分後、シスター姿のスカーレットが出てきた。

「ピッタリです……父子揃って高いセクハラ技能を……」

「相手の背丈やリーチを正確に把握するのは戦闘において大事なスキルだ。出来て当然」

「本当は？」

「女体の神秘への探究心」

足を踏まれた。今のは『何かボケろ』というフリではなかったのか……。

だが……うん。裾が大きい頭巾で、レベツカ同様特徴的なきれいな髪も隠れているから、パツと見ではわからないだろう。

修道服を着ているので独身と勘違いされれば、なおバレにくくて良し。

「信じる者は、救われます……あなた達に筋肉の加護のあらんことを」

「神ではなく筋肉の加護……筋肉教か？」

「腹筋、大胸筋、上腕二頭筋。すべて平等に価値のあるものです。この世に意味のない筋肉などありません」

「これは多神教になるのかしら？」

「なんやこの色物シスター……」

「シスターではありません。マザーです。異教徒は導かねば」

「邪教の狂信者じゃねエか」

割とノリが良いスカーレットに各々反応を返す。サイズは問題ないようだな。

レベツカは意味がわからずポカンとしている。そのままのキミでいてくれ。

「これ、1日で作ったんですか？」

「いや、流石にそれは無理だよ。ロゼが持ってきたのをサイズだけ合わせた」

「……あなたは何故こんなものを？」

「昨日ステューシーの店で貰った。昼間は敬虔な修道女が夜はあの恰好で踊っていると思うと、背徳的で興奮す」

「神罰代行！」

「ぐふッ!？」

唐突にもらった平手打ち。予想通りの肘。

流れるような自然な動作で飛んできた、身に覚えはある制裁を受ける。る。

「まったく……悪いと思ってわざと制裁を受けるなら、何故最初から口に気を付けないのですか」

「「今のはロゼが悪い」」

陪審員により有罪判決が下された。

約数名に足をゲシゲシと踏まれる。

いかん。昨日の今日だからいつもより思考がピンク寄りに……ネジが緩んでいたか。締め直さなければ。

宿を出て海列車に乗り、サン・ファルドに到着。

鉄鋼業が盛んらしく、島の奥に鉱山であろう山々がそのまま残っており、見た限り海と山に挟まれる形で人里の繁華街が存在しているらしい。

カーニバルの町と呼ばれるように、陽気な雰囲気で賑わっている。どうも活火山もあるようでセント・ポプラより暑く、男も女も比較的薄着だ。たまに水着で歩いている人もいて、海パンさんが混ざっていても違和感がない。

「バトル・フェスティバル?」

街中を歩いていると、そう書かれたチラシが配られていた様で、レベッカが声に出す。

上から内容を覗いてみる。

「ふむ。トーナメント戦で優勝者には賞金か……興味があるなら出てみるか?」

「えっ、良いの?」

「ダメです!」

「は……い……」

速攻母親に却下されてしまった。

「おいおい……」

「なにか?」

「少しくらい良くないか? 仮面でもつけければ……」

「夢で海賊と戦うのが、私の中で最大限の譲歩のつもりです!」

まあスカレット程ではないにしても、レベッカも目立たない方が良いか……今はガルドアに周りの視線が集まって助かっている。

「スカレットも出ないとして、他に出たい人いるか? 殺しは失格だけど、人種を問わず悪魔の実の能力も武器もあり。相手を気絶か降参させれば勝ちのトーナメント戦だそうだ」

あと、この島の住人は出場出来ない様だ。小さく書いている。変わった参加資格だな。

「特に興味はないですね……誰かが怪我をした時に備えておきます」

「レイドスーツってアリなのかしら? でも祭^{フェスティバル}りで毒を使うのもなんだし、遠慮しとくわ」

「アンがゲストで呼ばれたことがあるよ？ おれは去年、決勝で負けちゃったんだよね。その主催者がウチに衣装制作を頼んで、その縁で参加したんだ。ここの黄金でこいつを作った帰りに」

「何？ こいつってガルドアより強い奴がいんのか？」

ガルドアがハルバードを掲げながら言い、シユライヤが興味を持つ。

「この島の人間じゃないけどね。ウォーターセブン近海、氷街道ひょうかいどうのラブリーランドを本拠地にしてるドン・アッチーノだよ」

氷街道ひょうかいどう……その名の通り氷山が浮かぶ海域。氷が浮かんでいるだけなので、記録ロクはない。オレ達が通ってきた航路とは魔の三角地帯フロリアン・トライアングルを挟んで反対側だな。ここからも近い。

ドン・アッチーノという名は聞いたことがないから、たぶん海賊ではないんだろう。

「そいつは聞いたことがあるな。賞金稼バウンティハンターぎ一家、アッチーノファミリーのボスだ。確か能力者だったか。子供も妙な力を持つってるって。無茶苦茶でよくわからん噂の師匠より有名なんじゃねエか？」

「おれも海軍で聞いたな。何度か億越えの賞金首を沈めているらしい。最大100000℃の高温を体から発するアツアツの实の高温人間……なるほど。黄金を溶かされたくなくてリタイアしたな？」

「ははっ、アタリ。今日も来てるって、さつき耳に挟んだよ」

ガルドアがお手上げのポーズを取る。

今年は出る気がないみたいだな。

まだそこまで武装色で防げないか。100000℃では黄金に限らず余裕で溶けてしまう……いや、見たことないから何とも言えんが、溶けるどころか蒸発するんじゃないか？

「ロゼ以外で億越えを倒してる賞金稼バウンティハンターぎって初めて聞いたかもしれない」

「そりやそうだ。海軍に入れば味方の援護に治療や情報の支援を受けられるが、それに比べりゃあ賞金稼バウンティハンターぎは当然規模が小さくなるし、ロゼがやってたみてエに1人の奴もいる。賞金首だって海賊団に入ったりしていつも1人でいるとは限らん。実力がねエと誰にも知られ

ず返り討ちで死んで終わりだ」

「賞金首みたいに手配書で顔写真が公開されるわけでもねエし、たまに新聞に名前が載ったり、口コミの噂で広まるからな。だから師匠が愉快なことになってるわけだし」

「特に愉快ではない」

同じ賞金稼ぎで能力者……オマケに億越えを倒す実力か。興味あるな。

これからは賞金稼ぎバウンティハンターのことも情報を集めるようにしてもいいかもしれん。母さんやステューシーに世間話で聞いてみたり、海軍基地とかでついでに聞けるか。

「道理やな……ってこの舞台、火山の近くにあるんやて。暑いんはなあ」

「焼きイカは嫌……」

「私は眠らせれば勝てそうだけど、観客にブーイング食らいそうだから……」

現在勝ち目がありそうな、たとえば10000℃であつても直接触れずに有効打を与えられそうな奴は不参加か。

ドン・アッチーノが覇気使いかどうかはともかく、覇気使いにとつても最高温度10000℃は充分以上に脅威となる。気を抜けば死ぬ。そして他の能力者にとつても厄介な能力だろう。

殺しは失格のルールがあるのでそこまで温度を上げるかはわからないが。

「今の私の武装色では、10000℃もの高温には耐えられそうにないササ」

パンダマンの場合は武装色云々の前に、攻撃をまったく躲さないからだ。見聞色で先読みしても回避はしない。

レスラーは戦いにおいて相手の攻撃を体で受けるものだ。受けの美学だな。それを捨てない限り、今勝つのは難しい。戦闘を放棄して逃げるくらいはするが。

「気にすんな、耐えられねエ奴がほとんどだろうよ。おれもやめとくか……銃弾が溶かされちゃどうしようもねエヤ」

「師匠が前に素手だとマズイ状況があるって言うってたけど、武器あっても結局マズイじゃねエか」

「何？ はあ……仕方ない。オレが出て勝てると証明してやろう」

こうしてオレが出場することにした。

「ちなみに、誰が優勝するかの賭けもやってるよ？ 締め切りは決勝戦開始前まで」

「師匠にミカヅキの懸賞金残り全部賭けよう」

「私もおこづかい全部賭けるわ。倍プッシュよ」

「危険な遊びを覚えて……」

「証明してくれるんだろ？」

「ギャンブルの沼に溺れるなよ？ 底がない。まあ今回は特別だ。しかとその目に焼き付けておけ」

会場に行き、受付で選手登録を済ませる。

えー何々……『「免責同意書」私は今大会の規則を理解及び遵守し、試合又は賭博若しくは規則違反の罰則において、損害、拘束、傷害、最悪死亡に至る危険がある事を承知の上で参加します……ルールをちゃんと守って大会に参加して、ギャンブルで損したり、ルール違反のペナルティーで捕まったり、試合で重傷を負ったり死んでも文句を言わないと誓えてことだな。はいはい。

本名でなくてもいいみたいだし……適当にZゼEROロでいいか。

性別、男。年齢、15歳。職業、賞金稼バウンテイハンターぎに丸。海賊つて職業だったのか……何故選択肢にある？ 懸賞金の額を書く欄まで……今までこういう大会に出たことはないが、これが普通なのか？

そして大会が開始されたのだが……

「これトーナメントの意味あんのか？ すでに二強じゃねーか。師匠大穴だな」

シユライヤが言っているように、あまり意味はなかった。

中央の舞台を囲み、見下ろす場所にある観客席から見ているが、ドン・アッチーノの方は高温の熱気の球を投げ飛ばし攻撃する技で、相

手を焼いて一撃K.O。

反対ブロックのオレはオレで、能力を使うまでもなくワンパンで終わり。

そこそこ強い双子もいたが、ドン・アッチーノの息子らしく、片割れ……ブリンドの方は父親と当たると即棄権。

戦い自体よりも待ち時間に寄った周りの出店とかのお祭り騒ぎの方が楽しい。

オープニング・セレモニーでのライブパフォーマンスとか。あれがあっただけでも来た甲斐があつた。というか周りの反応を見るに最初からそれが目当ての客もいるらしい。

だがわかつたこともある。ドン・アッチーノは何か頭に來ることがあれば温度を上げるようだ。そして温度は上昇への一方通行で下げることが出来ん。能力を解除して氷で冷やしたり、気絶でもしない限り。

「去年もおれと彼でこうなつたね。あの双子はいなかつたけど。少しはドン・アッチーノと戦つたんだけど、対戦内容聞くんかい？」

「いや、いい。実際に戦つて確かめる」

「あの動き……一見ただの肥満ですが、内側に鍛えた筋肉が眠つていと見ました。タフですよ。あの双子も、特にロゼと当たる兄のカンパチーノの方はパワフルですね。あなたの相手ではありませんが」

「流石筋肉教シスター」

「マザーです。心を澄まして筋肉に耳を傾けるのです。さすれば聞こえるでしょう……『もつと自分を使え』『自分はもつと輝ける』という彼らの声が」

「ないです」

そしてその後、準決勝でカンパチーノをK.O。

試合開始すぐに筋肉が増大したくらいで、特に妙な力なんてなかったな……【生命帰還^{せいめいきかん}】か。オレのスピードに目がついてきていなかったので問題なくワンパン。

決勝でドン・アッチーノと戦うことになった。最後の舞台上がる

か。

直前の試合でドン・アッチーノがアツアツの能力を使いリングと観客席の間を溶かした結果、溶岩が生み出された。普通の人間なら場外は死を意味する。

「ほ、本当にこのまま舞台整備なしの試合でいいんですね？」

「ああ。フィールドを自分の有利な状態に変え、盤面を整えるのは当然の戦術だ。してはいけないというルールもない。戻るまで待つ方が不公平。第一、試合中にまた変えるだろうから待つだけ時間の無駄」

大量に汗をかいている審判員レフェリーに尋ねられ、そう答える。

可哀想に。マグマのせいでリングから出られないようだ。試合後に飛ばして送ろう。オレも観客席から飛び降りてここに来た。

主催者にも確認を入れ、問題ないと受理されたようだ。

「ははっ、若エわげのに言うじゃねエか小僧」

そう言ったのは、サングラスをかけ黒いひげを生やした上半身裸で肥満の男。

能力で体温を上昇させているからか、体が赤く変色し、口には葉巻を咥えている。

対戦相手のドン・アッチーノだ。

「それはどうも。さつきあんたの息子を倒してしまっただがいいのか？」

「あんな優しく気絶させられちゃあ文句なんて言えねエよ。能力者の私に全く怯まねエとはむしろ気に入ったぜ」

「オレも能力者、機械人間だ」

「ほう……それが本当なら、何故教える？　今まで使った様子はなかったが？」

「オレはあんたの能力を知っている。後からそんなこと聞いていないと文句を言われたくはない。今まで使わなかったのは……アリの踏み潰すのに、わざわざ重装備を揃えるバカはいない。あんたはアリか？　それともゾウか？」

「はははっ、この私の息子をアリ扱い……一丁前に挑発か！　ブリン

ドがよく使う手だ。それにあんなものアツアツの能力のほんの一端、後悔するなよ小僧？ 熱量アップ！ 5500℃！」

プシュー!!

体温を上昇させたようで、鼻と耳から白い蒸気が噴出する。

5500℃……MAXの半分程度。まだ全力を出す気はないか。

温度だけに限ればサカズキさんのマグマグの能力以上。現段階でも通常のマグマの約5倍の熱さ。【ブレード・バーナー・ファルコン】が使うような炎系の攻撃には耐性があると見て間違いない。

そんな相手、全力を出す前に倒すのがセオリーだが、これは試合……是非最高温度を引き出したいな。

「あ、あのバカッ！ 喜々としてパーパを怒らせてやがる。誰にも止められなくなるぞー！」

「構わない。続けさせよう。彼もまた腕に覚えがある人間…… 機甲のロゼ」だ」

「あいつがか……？ ゼロなんてふざけた偽名を」

「大海賊時代開幕以降の『機甲』と、ロジャー時代の新世界を知る『灼熱』と呼ばれた男……今までの最高の試合が見れそうだろうか？ 何より、おれは彼のファンなんだ」

「性格悪いわよ、主催者様？」

「そう言うな、市長様。ちよつとしたサプライズさ」『審判員、試合開始の合図を』

「そ、それでは決勝戦！ ドン・アッチーノVSゼロ、試合開始イッ！」

主催者が放送で急かし、ようやく始まった。

【熱焼き豪球】！」

ポン！

手のひらから高温のボール状の熱気を生み出し、こちらに投げつけてくる。今までの試合を決めていた技だ。

それを紙一重でなく距離を取って躲しながら腰の鞭を取り出し、武装色の【魚鱗】で鞭を鋭利にコーティング。

躲した熱球が地面に当たり、溶かしている。今までの試合とは威力が桁違いだな。

「ブラック・ローズ・ガイル」

ズババババン！

相手目掛けて鎌風を曲線の軌道を描きながら巻き起こす。

まずは小手調べ。

「なるほど。斬撃を飛ばして……結局武器無し【嵐脚】でもいいじゃねエか」

「いや、どちらも良くないよ。あれはおれも去年やった」

「【熱化粧】！」

ドン・アッチーノの周りに、突如突風が吹き、オレの攻撃が上に逸れる。当然彼にはノーダメージ。

限定的に風を操ることが出来るのか。

熱を操り空気を急激に温めることで上昇気流を生み出し、風の障壁を作り出しているようだ。

相手の攻撃の風圧を利用して躲す【紙絵】やスモーカーさんの【ホワイト・フロー】とは、ある意味で逆の防御法だな。

あれでは鞭による直接攻撃も、風で上昇し本人には当たらないだろう。鞭では軽過ぎる。

「鞭でやるこんな軌道のは流石に初めて見たが、飛ぶ斬撃など見飽きた！ 【熱上気】」

両手で小さな台風を作りオレの方に投げってくる。

風に巻き込まれ体が浮き上がった……この風では【R R】達も影響を受けるな。呼び出すタイミングには気を付けるか。

【剃刀】

宙を蹴り上に跳び、気流から力技で抜け出す。

間接的な風の操作だからか、竜巻が追ってきたりはしないようだ。

「もう脱出したのか。早エな……六式か。【熱焼き豪球】ッ！」

ポン！ ポン！ ポン！

またあの熱球を、今度は連続で投げてきた。

風で身動きを封じてこれで決めるつもりだったか。

それにしても狙いが正確。オレの動きに目がついてきている。

このままドンを攻撃しても、また上昇気流で吹き飛ばされるだろう。

ならばと、奴の攻撃を避けながら空中を【剃刀】カミソリで加速し、地面に向かう。

そして着地の直前に宙返り。【鉄塊片鱗】テツカイヘンリン 〃黒足〃くろあし……足のみに

【鉄塊】テツカイと武装硬化を重ね掛けして、

【地砕き】じくくだ

ズドオンツ!!

そのまま足を踵落としのように振り下ろし、ステージを蹴り碎いた。

どうせ周囲はボコボコと音を立てているマグマ……改修せざるをえないから遠慮なく破壊させてもらう。

なんなら船大工を紹介しようか。腕は海列車製作の手伝いで実証済み。ここまでその日の内に来れるぞ。

ヒビが入り地面が隆起して、コンクリートの塊があちこちに出る。

【メテオ・ストライク】!」

ドヒュン!!

その塊にマリソフォードでドミノ達とサッカーをやった時とは違い全力でキックを入れ、蹴り碎かない様に触れた瞬間武装色を纏い硬化。そのままドンへと蹴り飛ばす。

この勢いと重量なら、風の障壁込みでも頭に当たるはず。

【あの黒色……覇気か!】ネツタイヤ【火車輪】!」

体をタイヤのように高速で前転させるドン。

ドゴン!

そしてそのまま岩を壊すのではなく回転で弾かれる。

飛ぶ斬撃は風の障壁で上に流し、重い攻撃は回転で逸らす……戦い

慣れているな。覇気使いとの戦闘経験もあるようだ。

オレがステージを壊したことで、グツグツと煮え滾ったマグマが侵入してくる。

ここから先、地面に足をつく時は常に【黒足^{くろあし}】が必須。素で突っ込めば使い物にならなくなり、代わりを作って戦わねばならん。

ドヒュン!! ドヒュン!! ヒュン!

オレの攻撃を対処した勢いそのままこちらに転がってくるドンに、続けて3つのマグマに浸かったコンクリ片を蹴り飛ばす。最後のだけは硬化させずゆっくり蹴り上げる。

三大将と戦う時は、オレに攻撃してきたサカズキさんのマグマを利用し、クザンさんの作った氷にぶつけることで大量の水蒸気を発生。ボルサリーのさんの光を多少弱めると共に目晦まし、気配を消して闇討ちしたものだが、アツアツの能力者にマグマの岩をぶつけた所で熱は効かないだろう。

「無駄だ!」

ドゴン! ドゴン!

その言葉通り、2つの攻撃が突破される。

「(……? 確か3つあったはず)」

だがあの回転では視界が塞がれ、耳も転がる音で大まかにしか聞き取れない。オレの行動の詳細までは把握出来ん。

ドスツ!

先程蹴り上げた岩に、【魚鱗^{ぎょりん}】で尖らせ硬化した【黒鞭^{こくべん}】を突き刺し、そのまま岩も硬化。

反応しないということは隠しているわけではなく、見聞色の覇気が使えないようだ。

ギョルルルツ!!

更にオレの体を改造……海軍本部将校、シャリシャリの実の能力者のシャリングルさんのように、鞭を持った手を手首で高速回転させる。

「オマケだ。受け取れ、ドン・アッチーノ！」
【ウインチダント巻力断頭】ツ！」

ドガンツ!!

そのまま勢いをつけスイング。回転する鞭の先端の岩を、転がってくるドンに横から叩きつけた。

「ぬおっ!？」

ドンの体が吹っ飛びマグマの中に沈むが、どうせ5500℃の体に熱のダメージはないだろう……そういえば、マグマは能力者にとって海の判定になるのだろうか？ もしなるならこれで終わってしまうが。

「微妙に違うとはいえヨンジの技を……義兄弟の絆ね！」

「ロゼは強くなることに貪欲で器用だから、真似出来る技を取り込みます……まあ大抵下位互換になってしまっているので、能力を上乗せしたりしますね。ロゼと組手すると、何人か知らない人間の影がチラつくんです」

「あの父子はただのスケベではありません。特に父の方は『隙アリ』とよく尻を触ってきて本当に困った人です……無駄にこちらの動きを読んで」

「シャッキーの前で豪胆過ぎないカ？」

「あの家は皆仲良し！」

「……その環境でレベッカのこの性格は、奇跡なんじゃないの？」

「なるほど。ああやって戦うんだね……真似出来ないけど」

「海軍本部の階級で言うと、あのドン・アッチーノはどれくらいササ？」

「ん？ 強けりやすく昇進出来るってわけじゃねエが、中将以上は覇気が使えねエとなれない……大佐クラスはあるんじゃねエか？

ぶつちやけ将官以上の強さについてはロゼの方が詳しい。伊達に実際戦って認めさせてねエよ」

「あれでガスパーデより下か……」

「そうは言うても、ガスパーデの覇気がどれほどのモンかによるやろ。アメと高温の能力の相性は、ドン・アッチーノに分がありそうやし」

しばらく音沙汰なかったが、無事浮上してくるドン。

マグマは海ではないようだ。まあ、それだと砂漠に埋まっても能力が使えなくなるか。生き埋めになって窒息死することはあるだろうが。

「ふう……温ぬりイマグマだ。だが相手の攻撃なんざ、もう10年以上まともに食らってなかったか。それも、まだ能力を使ってねエときた。中々やるじゃねエか。効いたぜ」

「そちらも最高温度を使っていないだろう？ 見たいなら使わせてみる」

マグマに入ったまま言って来たのを返す。

やはり熱によるダメージはないようだ。温いで済みますか。

体内に入ったマグマを口や鼻から出している。

「威勢がいいな。相当腕に自信ありか。覇ロクシキ気に六式に悪魔の実の能力。噂になっててもおかしくねエが、ゼロなんて名前聞いたことねエ。オメエ一体なんだ？」

「あんたと同じ、賞バウンテイハンター金稼ぎだ」

「同業者だったか！ 私は海賊旗を集めるのが趣味でな。良かったら譲ってくんない？」

試合中にそういうこと言うか？

賄賂みたいで嫌だな……どうせ持っていないが。

「いや、全部船と一緒に売っているから譲れない」

「売った……だと……？ なんツてもつたいねエことしやがるこの小僧がアーツ！ お前はこの手で溶かし尽くす！ アツアツの能力全開ツ!! 最大熱量、10000℃オツ!!」

プシューツ!!!

……？ なんかよくわからんが本気になったようだ。

再び蒸気を吹き出し、今まで以上に体が赤くなる。

そしてあの風の障壁が渦巻いている。まるで摩天楼のように天井知らずの高さ。

ようやく準備運動が終わったか。

「くつくつく……ハハハハ！ 見たか、今の“機甲”の顔!? 一瞬ポカンとした後の、待っていたと言わんばかりの獯猛な笑顔！ あの男、ドンの最高温度を前に同じくらい燃えている！ 観客も目の前の光景を恐れながらも目が離せないようだ！ これぞ白熱した試合ツ!!」

「笑いごとじゃあないぜ。この会場の耐久度にも限界があるだろ」

「ああなったら、もうおれ達でもパーパを止められねエよ」

「止める必要などない！ 互いに負けを認めていないからな。当然続行だ！ それに何よりおれが見たい！」

「……審判員レフェリーどうする気なの？」

「あつ……ごめん……」

「骨も残らず溶けるオ！ 【アツアツの熱湯乗り】!!」

ドバアアアツ!!

リングの周りのマグマが燃え滾り、津波のように前後左右から押し寄せてくる。

そしてその上にドンがサーファアーのように立つ。

上以外に逃げ道はないな。

熱と風に加えてマグマまで操るか。攻撃手段が豊富だな高温人間。機械程ではないが。

「完全にやる気だな。望む所だ。【アームズ・エイド】」

ガシャン！

地面を作り変え大きな拳を作り出し、左腕に装着する。

ドンを殴るためのものだ。もう片方は鞭を持ったまま。

さてと、あの風の影響を受けないのは……威力が高過ぎる【サテライト・キャノン・ファルコン】は会場も島も、そしてそこにいる人々も攻撃範囲だから論外として……あれでいくか。

「群れ成して現れる。【Rレイド・ラプターズ Rレイド・ラプターズーワイズ・ストリクス】！」

更にフクロウ型の【Rレイド・ラプターズ Rレイド・ラプターズ】を10体程呼び出す。

人より少し大きいくらい的小型だが、こいつらに大きさは必要な

い。むしろもつと小型化したいくらいだ。

何より今は、1体で1人運ぶくらいは余裕な所が重要。

「悪いな、巻き込んで。こいつに掴まってくれ。安全な場所……観客席まで飛ばす」

「あ、ありがとうございます！」

この世の終わりのような顔をした審判員レフェリーに呼び掛ける。災難だったな。

掴まる審判員レフェリーの腕を、「ワイズ・ストリクス」の方でも落とさない様に足でしっかりと掴ませる。

「飛翔しろ」

全機体を飛ばし、マグマの津波を越え観客席に飛ばす。

「ようやく能力を使ったか！　だが他人の心配するなんぞ、覇気使いだからって余裕かまし過ぎじゃねエか？　おれは覇気こそ使えねエが、新世界で覇気使いを仕留めたことなら何度もある。お前のようななア！　【スチームアイロン 10000℃プレス】ッ!!」

灼熱の津波で周囲を囲み、上からドンがダイブしてくる。

マグマで焼け死ぬか、10000℃のドンに肉体を蒸発させられ死ぬか……どちらでも好きな死に方を選べ、といったところか。

だがそれで良いのか？

「ブラック・ローズ・ガイル！」

ズバババンツ!!

腕を振り上げ、再び鞭による斬撃をドンに飛ばす。

「なんであの技なんだ？　さつき効かなかったじゃねエか」

「いえ、あれはおそらく能力で急激に周りの空気の温度を上げること、上昇気流を生み出し攻撃を上逸らす防御技。アツアツの能力では冷やして下降気流を生み出すことは出来ない。ドン・アッチーノが上から降って来ているこの状況なら、今まで程風の妨害はないはずよ」

「またそれか、猪口才な！」

【鼻息噴射ハナジエット】！

ブオオオオツ!!

は、鼻から海列車の様に蒸気を吐き出し、ジェット噴射して避けた……だと? マヌケな絵面だが速い。方向転換はやり辛そうだが、オレの「レイド・ラプターズR R」の飛行速度と大して変わらないだろう。物凄い鼻息だ。

先に迫って来ているマグマをどうにかするか。

武装色を纏っていないなら、そこまで脅威ではない。見慣れている。今のドンの10分の1位の温度だ。

「メタルフオーゼ機械変化」

ドンの姿を視界の端に入れながら、片足の膝から下をチェーンソーに変化させる。

そして足の関節を作り変え、可動域を広げる。

「ちよつかくひちちよう直角飛鳥 オオドリボーン大鳥」!

ビュオオオツ!!

元王国騎士にして「船斬り」の異名を持つTボーンさんの得意技、直角切り。

その真つ直ぐな太刀筋の斬撃を足で直角に折り曲げながら螺旋に飛ばし、マグマを四角く切り抜き道を開く。

足を元に戻して風穴を開けた場所に突っ込み、押し寄せるマグマの津波から逃れる。

「上から丸見えだ!」 「アツアツ怒髪天」オ!」

鼻息で飛んだ勢いのままこちらに頭から突っ込んでくるドン。

「こちらから来るなら好都合!」 「スクラップ・フィスト」オ!」

ドゴオンツ!!

上に放った「アームズ・エイド」を装備したオレの拳と、鼻息で加速しながら落ちてくるドンの100000℃の頭がぶつかり合う。

「ぐおツ!?(リングを蹴り碎いたことといい、見かけによらずなんて力だ!)」

そして力尽くで殴り飛ばした。

殴って近付いたのが一瞬でも熱い。マグマで溶けない様に足の硬化に武装色を回しているからか、はたまたいつもの武装色のパワー不

足か、少し【アームズ・エイド】が溶けているな……素手だと拳がなくなっていたか。

再びドンの体がマグマに墜落する。

だがまだ気絶していない。見かけ通りのタフさだな。

「ぶはあッ！ 一度ならず二度までも……この強さだといくつもの海賊団を潰し、海賊旗がもう手に入らなくなってるな。クソツタレ！ あのバケモノ共をろくに知らずに、やれ海賊王になるだの、新世界に行くだのほざく奴らの海賊旗を奪うのが楽しみだつてのに」

「さつきも言っていたが、新世界に行ったことがあるのか？」

腹を立てているドンに尋ねる。

初対面でいきなり海賊旗コレクションの邪魔したから死ねと言われても知らん。

「ああ……若エ頃にな。前半より荒れ狂う海も脅威だが、そんなもの赤子に思えてくる程のバケモノ共。空飛ぶ海賊艦隊にアクア・ラグナ以上の大津波を起こす怪物。喋る太陽や雷雲を従える女傑に巨大なリュウ。それらを出し抜いて偉大なる航路を制覇したロジャー海賊団や、そいつらを追う能力者でもねエのに山を砕く“海軍の英雄”に巨大な仏。あの海は魑魅魍魎が跋扈する魔窟だ」

戦ったことはないが、目にしたことはあるって感じだな。

「大海賊時代以降、成り上がったルーキーは“赤髪”ただ一人だけ。他はあのバケモノ達に潰されるか傘下に入るかだ……四皇に比べりや有象無象のアリニコに過ぎねエおれに手も足も出せねエ癖に、新世界に行くと思巻いてあんな布切れのために命を懸けるバカ共を叩きのめすだけで大金が手に入る。まったく、賞金稼ぎこそ最高のビジネスだぜ。オメエもそう思うだろ？」

結構強いのに覇気が使えないのは、新世界で異次元の強さを目撃してしまったことが関係しているのか。マグマでサーフィンするあんたも大概なんだが。

「そうか。ならば精々今の内に取れるだけ取っておくことだ」

「あん？ どういう意味だ？」

「オレの目的の障害となる、大海賊時代を終わらせるという意味だ」

「……笑えねエ冗談だ。四皇全員あいつらブツ倒すだけでも？ 身の程知らずのバカが。海賊王になるつてバカと、大して変わらねエ」

「だったらよく見ておけ。今からバカが増えるぞ。叩きのめして笑え……出来るものならな。【R・R・R】」

観客席の下に飛行させ配置し終えた【ワイズ・ストリクス】の瞳から、立体幻像ソリッドビジョンでオレを10人投影する。

「なんだこれは……分身？」

「立体幻像……この辺りだとビジョビジョの能力と同じようなものと言った方が早いかな」

アインの分身を見て思い付いた技だ。

やっっていることはかなり違うが……というかあんなの再現出来ん。実体がないからすり抜ける。ただの目晦ましでしかない。このままなら。

「要は幻か……分身にしても、腕のアームズ・エイドそを映し忘れてるぞ、マヌケ。これじゃどれが本物か丸わかりだ！ 【熱焼き豪球アツヤタマゴ】！」

ポン！

何度目かの熱球を放り投げてくるドン。

「意味がないことをするはずない。【二千枚瓦正拳レブリカ・R】」

ドン！

本体のオレが回避すると同時に、オレの分身がドンの体を殴った。

「(なっ、どういうことだ!? 分身じゃ……)」

立体幻像ソリッドビジョンに【ワイズ・ストリクス】を通して攻撃の瞬間だけ武装色を纏わせ、物理攻撃を可能にする……重さがないのでオリジナルより威力は大幅に落ちるが、これなら風の障壁で攻撃を逸らされずに、熱も気にせず思い切り殴れる。

「だったら……全部撃ち落とす！ 【アツアツの銃乱打ガトリンゲ】！」

ポン！ ポン！ ポン！

ドンが拳をラッシュしながらこちらに近付き、手を使わずに、だからか遅い速度で【ワイズ・ストリクス】へ熱球を飛ばしている。

手数に対抗するため、分身を別の物に映し変える。

【拳ゲン・骨コツ・流星群りゅうせいぐん・R】！」

ドドドドドン！

武装色を纏った立体幻像ソリッドビジョンの鉄拳で熱球をすべてマグマに跳ね返し、そのままレプリカでドンに攻撃し、

「これで終わりだ！」「スクラップ・フィスト」オッ!!」

ドゴオンツ!!

こちらに向かつて来るドンの顔面を殴り、地面に叩きつけた。

……ようやく気絶。覇気なしでここまで耐えられるとは。非覇気使い相手なら一撃で終わることがほとんどの威力の技ばかりだ。

それにしても、「アームズ・エイド」がもうドロドロで使い物にならないな。

とりあえず外して………熱いとは思っていたが………後で左手をトリスタンに診てもらおうか。戦闘の熱が冷めると痛み出してきた。

『ブラボー！』 “灼熱のドン” と呼ばれた、賞金稼ぎ一家のボス……

ドン・アッチーノを、終わってみれば無傷で倒したのは、 “機甲の口ゼ”!!』

正確には無傷じゃないが……この分だと死亡や四肢欠損もあり得た。

そしてさらっと偽名がバレている。観客は湧いているので主催としては大満足だろうが、オレの個人情報は保護されないのか………とりあえず、戦後処理としてマグマをどうにかするか。

「現れる。」レイド・ラブターズ 「R Rーレヴオリュション・ファルコン」

装着していた「アームズ・エイド」と10体の「ワイズ・ストリクス」を再構成、合体させる。

「レヴオリュショナル・エアレイド」

ヒュー……ボン！ ボン！ ボン！

氷結弾を空から連続投下し、マグマに降り注ぐ。

数分後、冷えたマグマの上から氷のステージが出来上がった。これで涼しくなったな。

戦闘中では風の妨害も受けやすい上、冷やしたところで能力を使い溶かされてしまう。

「くそっ、負けちまいやがって！ 賞金稼ぎ風情がッ！ おかげで大

損だ！」

ステージの入り口から毒づきながらゾロゾロとガラの悪いのが入ってくる。

出場者でもあるな。オレがワンパンで倒したり、他の理由で負けたりで印象に残っていないが。

口ぶりから、負けた後にドンに賭けてたみたいだな。ウチの者にはこうはなあって欲しくない。

「その風情に倒されたのはどこの誰だ？ それにギャンブルはそういうものだ。損して文句を言うなら最初から賭けるな」

ドンと乱入者の間に立つ。

「黙れッ！ 1人は倒れ、1人は戦闘後。もうルールなんて知るか！

テメエら殺してこの祭りを血祭りに変えてやる！」

よく見れば賞金首も交じっている。

全試合終わったし、まとめて氷漬けにして頭を冷やしてやるか。

「レヴオ」

『わたしの主催する大会で暴れるつもりか……ならば、それ相応の措置を取らせてもらう』

放送で声が聞こえた後、ステージの入り口から入ってきたのは……オールバックの髪にシルクハット、所々に星のマークが入った煌びやかな白と金のステージ衣装を着て、片手にマイクとスタンドを持った男。

ここサン・ファルドの人気歌手シンガーにしてこの大会の主催者……ギルド・テゾーロ氏だ。オープニングで歌った時と違い、両手に黄金の籠ガントレット手を装着している。

そういえば免責同意書に罰則とか書いていたな。

「まさかパーパを倒すとはな……おれを倒しただけのことはある」

「カンパチーノ兄さん、おれ達兄弟の真の力をあいつに見せつけてやろうぜ」

「そうだなブリンドよ。おあつらえ向きにステージは氷……おれ達のテリトリー、ラブリーランドと同じだ」

脇にはドンの双子の息子、カンパチーノとブリンドの姿も。

父親を倒したオレへのお礼参りというわけではなさそうだ……やる気みたいだし、空気を読んで手を出さないでおくか。全員攻撃の射程範囲内だ。何かあれば動けるようにだけしておこう。

それにしても、マッチョ体型でノースリーブ姿の男が2人、ピツタリくつついて腕でハートのポーズを作っている……暑苦しい。

「ゴオン・ボンバ黄金爆」！」

ゴオンツ！！

黄金のガントレットに武装色を纏いルール違反者を殴りつけたり、マイクスタンドを振り回したり、ワノ国、Sヤクザキックを入れるヤンキー主催者。

ファンキーなマイクパフォーマンス（物理）だな。マイクの電源は切ったようだ。

ガントレットは体に纏えば上から一緒に武装色を纏えるので、扱いやすい武器だろう。本来は防具だが。

それにしてもガルドアといい、この辺りでは黄金の武器が流行っているのか？ 鉱山で採れるからかもしれない。そして前半の海では珍しい覇気使い……結構鍛えている。

「もっはっはっは！ 見よ！ これが我ら兄弟のコンビネーションプレイ！」

「デメエら能力者か!？」

こっちはこっちで……なんだこれ？

双子が赤と青の光を発し、互いに引き寄せ合ったり反発したり、その力を利用して薙ぎ倒していく。

「能力者？ 我らは悪魔の実など食べてはいない」

「おれ達兄弟が磁力の様に引き合うのは兄弟愛の力……つまりそう！」

「双子だからだ!!」

「二ツなわけあるかアーツ!!」

一対一ではなくバトルロイヤルで当たっていれば、もう少し戦えていたかもな。

「話に聞くジェルマみたいな能力ですね、レイジュ……レイジュ？」
「天然の血統因子の異常かしら？ イチジ達は胎児の頃に纏めて血統因子の操作が行われて特殊な力が備わった。父親のドン・アッチーノが悪魔の実の能力者であることが胎児の血統因子に影響を？ それともお母様が毒薬を飲んだことでサンジの異常が備わらなかった様に、外的要因によって……」
「思考の海に沈んでるでゲソ」

数の優位こそ奴らにあったが、大番狂わせは起きず鎮圧された。
まあ海賊か否かに関わらず、自分の主催した祭りを血祭りにするとか、子供の前で親を殺すとか言って怒りを買わないわけがないので、残念でもなく当然。

『では諸君、ハプニングも終わったことだし、閉幕式フィナーレといこうか！』
双子がドンと乱入者を連れて行き、場の空気を変えるためか、予定にはなかったアンコールライブが行われた……オレの「レヴオリューション・ファルコン」に乗って飛行しながら。中々肝が据わっている。
ライブ後サン・ファルドの市長、ギルド・ステラ氏に賞金を貰って大会は終わった。テゾーロ氏とは夫婦だそうで、有名なおしどり夫婦らしい。

そしてそのバカップルに呼ばれた。
トリスタンに左手を診てもらい、しばらく物を殴るなど言われた後、何の用かと思いつながらもVIPルームへ行く。新しい手袋が必要だ。替えを船から持って来よう。

何故かアッチーノファミリーの3人もいる。
「おれとステラはシャボンディで天竜人の奴隷にされかけたことがあってね。まあそれは偶然居合わせたサングラスのナイスミドルが不思議な術で天竜人や店の人間を気絶させ、首輪を外して助けてくれたんだが、あの島でのキミの人攫いや人間ヒューマンシンヨップ屋との大立ち回りの日々は痛快だったよ！」

それで「機甲」がバレたのか。オレの子供の頃の写真まで持っているようだ。

オレが手配まがいのことをされた黒歴史の写真を……そしてサングラスのナイスミドルで思い出した。この2人、テゾーロさんの方はゴージャスな服装に気を取られ気付かなかったが、昔父さんに礼を言っていたのを見たことがある。人間屋ヒューマンショップを爆破して帰ってきた時のか。

成程、テゾーロさんが覇気を使える理由がわかった。父さんの覇王者色が原因だな。

そのことを2人に告げる。

「あの時のステラを口説いたロックな御仁はキミのお父上だったのか！ 奇妙な縁だ」

「親のギャンブルで苦勞した私達が、ギャンブルで身売りされたあなたのお父さんに助けられるなんて、不思議な話ね……」

「まったく。ギャンブルは人生だけで充分だ。お前達も、今回のことで味を占めて溺れるなよ？」

皆に言う。

ウチの連中、全員オレに結構な額を賭けていた。どうせ勝つからと。レベツカまで……何故止めないスカーレット。

「ハハハハ！ ギャンブルは胴元に限る。絶対儲かる様にルールを決められる上、人々にエンターテインメントを提供出来るからな」

だよな……商売なんだから、最終的に主催が儲かる様に出来ているよな。手数料もあるし。ここの控除率がどれくらいかは知らんが。

まあスリルをお金で買っている面があるから人気なんだろう。父さんが昔そんなことを言っていた。

突っ走るテゾーロさんをステラさんがサポートする感じかと思っ
ていたら、そこまで大人しい人でもなかったらしい。

この大会、賞金をエサに海賊を集めて、この島で暴れる前に試合でガス抜きと不穏分子の把握をする目的もあるそうだ。鉱山の資源目当てで来る者の対策にステラさんの発案で。

そして実際に何か騒ぎを起こせば、テゾーロさんが出向いたり、下

手に抵抗せずアッチーノファミリーに連絡して捕らえてもらい回収する手筈だと。

この島の住人が参加出来ないのはそういうことか。出店とかの主催側か、観戦で楽しむのが主。

実際にドン達が大会に出場するのはたまにらしいが、つまり最初からグル。互いに利がある提案で、アッチーノファミリーは快く受け入れたそうだと。

苦労したからか見かけより強したたかだな。

“海列車特急↓美食の町”

テゾーロさん達との話が終わり、昨日は2人の屋敷に泊めてもらった。

シャボンデイでのことを結構聞かれた。

こういうファンは珍しいな……人身売買的な意味や性的な意味でオレの体が目当てだったり、鞭で叩いてくわわって言われたり、あとはロボ目当ての男の子達とかもいたが、基本的に一定の距離を保たれていたから。

オレに何かされるとはもう思っていないが、あまり近付き過ぎても巻き込まれて危険とちゃんと理解している。あの島にはトラブルの種がそこらに転がっているので、強さか危機管理能力がないと命取りだ。

『はっはっはー！ 大口叩くだけのことはあるじゃねエか！』

『そちらこそ、熱の能力を鍛え続ければあそこまで出来るようになるんだな。勉強になった』

あの後、ドン・アッチーノとは和解。戦って怒りの炎は燃え尽きたそう。

カンパチーノとブリンドのほっとした顔が印象的だった。

試合中は怒っていたが、普段は穏やかな性格らしい。頭に血が上りやすい傾向はあるが。

ドンが『私の娘を嫁にどうだ？』と言った時は、明らかに冗談だったにも拘らず、殺気が渦巻いて周りの空気が凍った。こんな形で空気の温度を下げるのかアツアツの実の能力者……オレはやんわり断る以外何も言っていない。末娘の方はまだ子供だと言うし、この話はやめよう。

レイジュにその末娘が悪魔の実の能力者でもないのに持っているという、魚や植物を操る不思議な力のことだけ教えてあげてくれ。研究者の眼をしている。大丈夫、解剖したりしないから。

原因はおそらく血統因子絡み。水に囲まれた環境とドンのアツアツの能力による高温が妙な化学反応でも起こしたのだろう。

そして現在朝食中。

「お兄様は手を使っちゃダメ！ お医者さんの言うことはちゃんと聞くの！ じつとしてなさい！」

「あのな、レベツカ。オレは右手でも食べられるから。能力で手を作ればいいだけだし」

口を開けると箸を片手に迫るマイシスターに言う。

昨日はメイプルだったか。まああいつは手が6つ空いているからそのまま食べさせてもらったが、妹にあーんされるのは……逆なら喜んでするが。

「諦めなさい。私達は自分から休もうとしないあなたを、それぞれ適宜甘やかしたり甘えたりすること無理矢理休ませると決めていきます。同じ船に乗ると決めた時から。そんな手でどうする気ですか」

笑顔を浮かべるスカーレットの言葉に、トリスタン、メイプル、レイジュ、レベツカが頷く。

そんな密約が交わされていたのか。レイジュはまだしも、大体はウソ下手なのに。

トリスタンに処置はしてもらったし、もう溶けた肉と骨は治っているんだが……【生命帰還^{せいめいきかん}】体得者の常人離れした回復力をナメてもらっては困る。

たまにセクハラして印象を下げているにも拘わらず、なんだかんだ甘いな。

「異議ありだ筋肉マザー。オレはちゃんと休んでいる」

「現在能力は使っていますか？」

「もちろん使っているが」

探索は基本。人探しもあるし、船の管理はオレが機械でやっている。ヨコヅナの修行もつけていたし。

昨日の夜は「R R」を飛ばして、予備の手袋を船に取りに行ってもらった。今左手の包帯の上からつけているものを。

船ではアイスバーグさんが呼んだ船大工達が盛り上がり話をしていったな。

「それは休んでいると言いません。去年の扱いに戻しますよ？ まったく、嫌がるなんて失礼な……」

ばつさり……スカーレットは妹がギロギロの実の千里眼人間で、人の裏を見抜いてしまうことを気遣い、出来るだけ裏表なくはつきり物を言うようにしていたようで、思ったことをそのまま言う傾向が強い。オトヒメ様とも気が合うようだ。

オレの見聞色についてもすんなり受け入れてくれたのはありがたいが、去年初めて魚人島に一緒に行った時、タイヨウの海賊団に興味を持っていたので、タイガーさん絡みに関わったことを打ち明けたのは迂闊だった。

トンタツタから話を聞いていた様で、そのことも合わさりしばらくはネコっ可愛がりされる日々が……オレを甘やかさないでくれ。

くっ、どうせならレベツカがオレではなく誰かにお姉さんぶって世話を焼く所が見たかった。

オレに赤ちやんプレイの適正はないようだ。

鉄のおしやぶりも、鋼のバブみも感じられずオギャれない……何の問題もないな。

甘やかされるよりも甘えられたい……出来れば年上に甘えられたい。

普段凜としたこちらをリードしようとするしっかり者が、仕事や役目をこなして疲れた時に、こちらの方が年下であることを気にして恥らいながらも甘えてくるのが好きだ。

仕方なく抵抗をやめ口を開け、レベツカが満足そうに箸を運ぶ。

「ありがとう」

「良い子良い子〜♪」

背伸びして、その無垢な手で頭を撫でられた。

「やめてくれ」

「あ、あれ？ 私、上手く出来てなかった？」

「そうじゃないんだ……よし！ この状況を甘んじて受け入れる代わり、オレがレベツカを甘やかす！」

「え〜!? 大人しく面倒見られてよ〜!」

何かやってしまったのかと戸惑うレベツカに違うと否定して、膝に乗せる。

甘やかされるのはちゃんとした良い子であるべきだ。膨れるレベツカが可愛い。

再び口を開け咀嚼。うん、美味しい。

「そこらの兄妹より仲良いな……血の繋がりなんてねエのに」

「仲良きことは美しきかな」

「今のマジなトーンやったな。修行中でもないのにレベツカ相手に出す声ちゃう」

「海賊助けりや吐血する奴だ。なんか抱え込んでるんだろうが、すぐ回復するからわかり辛エ上、平気だと流すから自覚もねエ。だけどやっぱ、フィツシャー・タイガーの件が原因かねエ。はあ……どうしたもんか」

「彼女達は長期戦のつもりササ。まあしかし、見た目は不器用な兄妹ってかんじでまだいいササ。今はそれよりも……」

「二あっちのバカツプルか……」

「ふつつ仲の良い兄妹ね。はいあくくん♡」

「あくくん♡ そうだな。おれ達の子供も、仲良く育て貰いたいな」

「も、もう……一人目だつてまだなのに、気が早いわよ」

「生活も落ち着いて来たし、そろそろ……」

夫婦仲は良好のようだ。まるで新婚。平和な風景だ。世界中がこうであつたなら、戦争は起きないかもしれない。愛は世界を救う。

膝には可愛い妹もいるし、癒される。

「コーヒーをブラックでくれ。これは甘い」

「それがブラックやで」

「さつきから2人の空間が出来上がっているササ」

何人かが砂糖を吐きそうな顔をしたりしながら朝食時間が終了。

そして彼らと別れて海列車でプツチへ。

ここは「美食の町」と呼ばれる島。海列車で繋がる島々で最も才

レ好みの島と言える。三大欲求は大事。食べるなら美味しいものが食べたい。

偉大なる航路グランドラインや外の4つの海の色んな料理を楽しめる。まあ全部の島があるわけではないそうだが。何か他の島の美味しい作物の情報も聞けないかと期待している。

「なあ。おれ、ウォーターセブンに着いてから、寝ている時くらいしか修行してねエンだけど……」

「靴に重り付けて歩いてるだろ」

「まあそうだけど」

「島巡り楽しくなかったか？」

「いや、楽しかったけどさ……」

「心配せずとも、海に出ればまた鍛えてやる」

「二(何故弟子は休ませるのに自分は休まない……)」
「ん〜?」

海列車を降りて海沿いに歩いていると、ダディが唸り出した。

「パパ、どうかしたの?」

「いやな可愛いキャロルよ。パパの見間違いかもしれないが、あそこの小瓶に人が入っているように見えるんだ」

そう言つて海を指差す。

あれか……瓶は見つけた。

この距離ではオレには中まで視認出来ないが、確かに人の気配がある。

小人族か? 瓶詰めにして島流しとは、ヒドイことをする。

「どれ〜? わかんない」

「面倒だ。オレが拾う」

右拳を分離し飛ばして小瓶を掴む。

「うわあつ! なんだつぺ〜!?!」

いきなり持ち上げられ驚いているようだが、とりあえずこちらまで連れてくる。

そして瓶の蓋を開けた。

「いやあ、助かったつぺ。寝て起きたら瓶の中で、その上海に流されち

まったくみてエで、ほとほと参ってたぺよ！」

瓶から飛び出し、右手の上で喋る小人の女。

首に兜をかけて、小さな体には大きいフォークを持っている。

「小人族なの？ トンタツタの皆とは少し違うけど……尻尾ないし」

「いんや。おら元々は巨人族なんだけつども、ミニミニの実さ食っちまっつて、体を自由に小さく出来るだよ。最小で5ミリだ」

「ミニミニの実……力はそのままに体のサイズと体重を小さくする能力だったか。巨人族には最適な能力だな」

「なんだんだ！ おかげで腹いっぱい食えるべさ！ よつと！」

リリーがオレの手から飛び降り、服やフォーク、身に着けたものと一緒に大きくなり、普通の人間サイズに。

耳にはメダルのようなピアス。

緑色の癪つ毛を横結びにして肩にかけている。

「おらはリリー・エンストマック。人呼んで『悪食リリー』。よく食う女だっぺ！」

「ロゼだ。よろしく」

エンストマック？ どこかで聞いたことが……。

全員一通り挨拶してから、

「で、なんであんなことになったか……わかるか？」

話を聞いた。

能力者が……いや、能力者でなくてもあの状態はかなり危険だ。放っておけば干乾びて死ぬか飢えて死ぬか。

「え？ そりやおめエ……あー！ おら、こんなことしてる場合じゃねエんだつたつぺ！ 父っちゃんを探さなきゃならねエだよ！」

「父親？ とうか顔の大きさのバランスがおかしくなっているぞ」
体はそのまま顔だけが大きくなっている。

これは体の部分的な変化も出来るということなのか……？ 焦つて能力が制御出来ないとも取れるが。

慌てるリリーから更に事情を聞くと、元々父親と2人で船に乗っていたが、嵐でミニサイズのリリーが飛ばされて逸れてそれっきり。

運良く別の海賊船の甲板に着地出来たが、船の食料を食べて満腹で

眠っている間に瓶に詰められ海に流されていたと。

「海賊に同情はしないが、海上の船で食料を勝手に食べるのは重罪だ。死に直結する」

「おら、そこにあつたもんをちよっくら食っただけだっぺ」

「民間船相手であれば拳骨を落としていた。海列車が出来たからこの辺では少ないだろうが。食い逃げするなよ？ あれは、『お前の料理は食材を無駄にしただけのマイナスの味だから、お金を払う価値はない』という、コックへの侮辱だ」

「ああ。だからマーメイドカフェで私やシャーリーがいらないうて言つてたのに、毎回お代払つてたんでゲソな」

それが当たり前のことなんだよ。

食うに困つての犯行ならまだしも、オレは困っていない。

「お前のお菓子は最高に美味しい。無料なんてとんでもない。いつもありがとう」

「……どういたしましてー」

後ろから抱きつかれる。

昔の様にぎりぎり締め付けるようなことはせず、昔よりも背中に当たる感触が幸福。

「なるほど。こんな感じでオトしたんだな……あのCP-0の女王様も」

「ステューシーは元々オレのストーカーだ。前に話しただろ？」

ダディはあいつを信用してないみたいだ。結構経緯を聞かれた。

まあ海軍でCP-0は評判良くなかったからな。3日前話題になったトムさんの件に出てきたCP-5のようなこともある。

だが見聞色で確認はしたし、敵だったらそこでオレの人生終了している。おそらく今頃ステューシーの傍らで首輪をつけられ、CP-0の任務の補佐兼エロ奴隷にされていることだろう。だからこそ信用しているという謎の関係だ……人によってはその状況はご褒美か？

あの時の下ネタ会話はゴメン。子供キヤロルの前では気を付ける。

「聞いたからこそ信用出来ねえんだよ……弱み握って脅迫してきた奴を信じるお前がどうかしてる。ヒナのこともそうだが、ホントお前の

女性関係はシャレにならん。それに関してだけは、たまに本気でしよつぴいた方が世のためなんじゃねエかと思う。頼むから自重してくれ。戦争になるぞ」

「失礼な」

元海^{おまわりさん} 兵から苦言を頂戴する。

脅迫云々はまあ、客観的に見て否定し辛いところだが、戦争など起こらない。起こったとしても、オレという共通の敵を前に団結するはず。

「それにしても、父^とちやのビブルカードはあるんだども、船がないっぺ……どうしたらいいだ……」

「ついでで良ければ、オレ達の船に乗っていくか?」

途方に暮れたリリーに言う。

「ホントに!?! 良いんだか!?!」

「旅は道連れだ。父親の名前は?」

「新世界一の海賊料理人、パンズフライ・エンストマックだっぺ! 父^とちやの天国料理は最高だっぺよ〜」

「パンズフライ……ああ、思い出した。元巨兵海賊団コック、〃大盤振る舞いのパンズフライ〃」

「……誰?」

「知ってるだか?」

今から90年程、新世界ウオーランドに住むエルバフの戦士達で結成され、世界に恐れられた巨兵海賊団。

突然2人の巨人船長、〃赤鬼のブロギー〃と〃青鬼のドリー〃が姿を消し伝説となった。

大海賊時代どころかロジャー時代の更に昔、まだ今ほど懸賞金のインフレが加速していなかった当時に、それぞれの首に1億ベリーという破格な額がかけられた大海賊。

重要なのはその後起こった歴史的な大事件。

トップを失い油断した巨兵海賊団残党数名。海軍が捕縛し公開処刑という所で、『お待ちなさい! 天が和解を求めています!』と、啞

えタバコの美しいシスターが乱入したという……名をカルメル。

巨兵海賊団が今まで世界に与えてきた恐怖は計り知れない。罪は裁かねばならない。

そう処刑を執行しようとする海軍に、『その者達を殺せば、エルバフの戦士達は再び軍隊を成し、人間達に復讐を誓うでしょう！』と毅然とした態度で言い放った。

その時、暗雲が空を覆い、稲光が走る。その光はこの者の言葉を聞き届けよという神の宣告のようにカルメルを照らす。『罪を許しなさい！ 私が導きます！ この世のあらゆる種族が手を取り、笑い合える世界へ!!』……この言葉にその場すべての人間が圧倒され、敬意を込めて聖母と呼ばれるようになった。

エルバフに略奪ではなく交易を勧め、巨人族と人間の懸け橋となった偉人である。

そして、その時処刑寸前であった1人がパンズフライ・エンストマツクだ。

巨大なフライパンを武器に政府や海軍、海賊の船から食料を奪い、腹を空かせた貧しい人に料理を振る舞った海賊。どうしてお前は海賊の道を選んだのかと非常に疑問な男。

普通にレストランでもやって貴族あたりからぼったくって、貧しい人にはその利益でタダで振る舞えば誰も損しないのでは……貴族は安いものより高いものを喜んで買うから。

エルバフの戦士だからか？ エルバフが原因で巨人族全体が野蛮と思われるからと、あまりよく思っていない巨人もいるらしい。

略奪で成り立つ国が他国から煙たがれるのは、自国を脅かす可能性を考慮しなければならぬので仕方なし。当然の警戒。

少し前のアマゾン・リリーやジェルマもそうだ。昔の人が今の2国を見れば何があったのかと腰を抜かすだろう。今でも何を企んでいるんだと訝しんでいる者もいるはずだ。

とりあえず処刑取り消し時の様子と巨兵海賊団、パンズフライのことを皆に話した。

「お、おお。よく知ってるっぺな。父とっちゃんに聞いた内容とほとんど変わらないっぺ。んだから、正確には元だっぺ。巨兵海賊団は、解散しちまっただからな。カルメルさは、おらも50年以上前に見たことあるっぺ」

「そんなことがあったのね……」

スカレットやレイジュも知らない様だ。

加盟国の教科書には載っていないのか？ まあオレも本で知ったわけではないが。

「アッチーノファミリーの話は知らなかったのに、なんで生まれる前の90年も昔のことは知ってたんだよ……」

「海軍初の巨人海兵、現中将ジョン・ジャイアントさんに直接聞いた。本人も人に聞いたと言っていたが」

彼は海軍の中でも典型的な軍人氣質。

ゼファーさん達より早く入隊し、オレの知る限り現役の中では最古参の海兵。

あの人^あがたまに海軍本部で飛ばしていた檄はオレも好きだ。士気向上のため節目などに定期的に、そして大きな戦いの前にも聞こえてくる。巨人族の巨体から発せられる大声は、本部にいれば大抵の場所^こで聞こえるだろう。

『逃げたい奴は今すぐ逃げ出せ!! ここは一切の弱み許さぬ海賊時代の平和の砦っ!! 民衆がか弱いことは罪ではない!! 正義はここにある!! 強靱な悪が海にあるならば、我々海軍がそれを全力で駆逐せねばならんだ!!! “絶対的正義”の名のもとに!!!』

海軍所属でないオレでも戦意が高揚し力が漲る^{みなぎ}。

戦士の村エルバフの出身だけあって、戦う者のやる気を出させるのが上手い。

マザー・カルメルが居なければ自分が海軍に入ることも、現在の巨人部隊の結成もなかっただろうと語っていた。

その後カルメルは身分種族を問わず、行くあてを失った子供達を受け入れる羊の家という施設を開設。

暴動の末国を追われた王子、貧しさゆえに奴隷にされかけた子供、親の手にも負えなくなつた問題児達……いかなる子供も聖母マザーの奇跡の力で更生し、良き里親にめぐり会うと評判の。

当時巨人族から最も慕われた人間であり、だからこそ、現在の四皇“ビッグ・ママ”シャーロット・リンリンの名が巨人族から嫌悪される存在となつたそうだ。

リリーの前では極力名前を出さない方がいいかもしれない。巨人族にとつては口にするのもはばかられる存在らしい。ましてやカルメルに父を救われている。

カルメルと会つたことがあるなら、当時5歳の“ビッグ・ママ”が起こしたという、羊の家がエルバフから移転するきつかけとなつた事件を目にした可能性も……ん？

「ね、ねえリリー？ 50年以上前に見たって……あなた今いくつ？」
レイジュが恐る恐る聞いた。

オレも同じところに引つ掛かつていたところだ。

「ん？ 今年で66歳だっぺ」

「「ウソ!」」

父さんやガープさんの3つ下、ゼファーさんの1つ上だな。

「だが巨人族は人間の3倍生きるし、換算すると22歳くらいか」
見た目もそのくらいだ。

「んだなく。まだまだ若輩だっぺ」

「お、おれ達の団長は順応が早いね……」

「ま、まあ？ 元々ロゼって人種は気にしない人でしたね。人種は……年上好きですし」

「海賊嫌いの賞金稼バウンティハンターぎ的に大丈夫？ 血反吐吐ちへどかないか？」

ミンク族と、オレの肩に顎を乗せている半人魚が言う。

「えっ」

「元だから海賊そっちも問題ない。オレの両親も元海賊だ。敬愛する父母に誓つて、引退済みには手を出さない」

「まあ政府が処刑を取り消してるんだし、問題ねえんじやねえか？」

巨人族の戦士に安心するよう言う。

元海兵もこのことで海軍に追われることはない判断したようだ。「そ、そうだか？ そんなら改めてよろしくだっぺ！ おらは医者だ。傷ば負つたら言つてけろ。ちぎれた腕ば縫い合わせたり、直接体内に入つて手術もお手の物。更には傷ば負わせた相手さブツ飛ばして、根本的な治療を施すエルバフ流医術を嗜んでるっぺ」

手に持った大きなフォークを突き刺す動作をする。

ネプチューン王のトライデント三叉槍と同じ様に使えるだろう。ガルドアとランサー槍兵同士気が合うかもな。

それにしても、戦闘民族エルバフの医術も武術を兼ねていたか。

「アフターケアも万全な医者だな。腕切り落とした時はよろしく頼む」

「んだんだ！ 切り落とす前と同じかそれ以上にしてやるっぺ」

リリーと握手を交わす。

オレも上手くやっていけそうだな。

段々バラエティ豊かなメンツになつてきた……元からか？

「あつ、ヤバいわ。微妙に2人の狂戦士バーサーカー・ソウルの魂が共鳴してる」

「アラディンさんは違いましたが、女ヶ島にようがしまのベラドンナさんも、『医者
が死んだら仲間を治療出来ない。だから武術を学び、あなた自身も強
くなりなさい。そして……九蛇クジヤの医術を学びたいなら、この私を倒し
ていけエエツ！』つて戦闘になりました。鍛えてて良かったです」

「Oh……BANZOKU……」

「九蛇はその『Power is beautiful』な思想からと
りあえず戦闘ありきなだけで、世界政府加盟国と比しても、文化水準
は高いから」

オレもルスカイナには上陸したが女ヶ島にようがしまに行ったことはないので、
遠巻きに見ただけだが。

話を終えてリリーを加えて町を回って食べ歩く。

リリーはよく食べると自分で言うだけあってすごい食べっぷり
だった。

アラバスタ料理のコナーファとか美味しかった。永久指針エターナルポースはある

し、いずれ行くか。現国王は国民から慕われる名君と聞く。

行く先々で世界のグルメ情報を聞きながら移動していて気付いたが、ガルドアが目立つのを差し引いても、この島では魚人やミンク族に対して特別視線を向けている様子がない。どころかかなりフレンドリーに話しかけられている。

気になって聞いてみた所、元々世界の美食を集めた島であるので、他の島と積極的に交流を持ちたい折、渡りに船の海列車。他の島から観光客が来て大層島の経済が潤ったそう。

それを作り出した魚人のトムさんには直接何かすることはもはや叶わないが、感謝を込めて魚人、ひいては他人種も歓迎することを現市長ビミネ氏が推奨しているのだとか。

オレが思っていた程、世界は厳しくないようだ。

「そういえば、何故リリース達は新世界からこの前半の海に来たんだ？

というかよく考えればどうやって……」

シャボンデイでも見ていないし、魚人島には頻繁に足を運んでいたが、巨人の情報なんて聞いていない。

「おらが父^とつちやを掴んで、一緒に小さくなってマリージョアを抜けたっぺ」

「なるほど……待て。では今の父親のサイズは？」

「普通の人間サイズだと思うだ。おらが掴んで一緒に大きくならねえと、元の大きさ戻んねエだ」

それでは目撃情報は期待出来ないな……マリージョアでも5ミリの大きさの人間、それも騒ぎを起こしていないならバレずとも無理はないか。

それにしても、パンダマンにタイガーさん、そしてオレ……聖地なのに結構侵入されているな。もしかしてあの場所の警備ガバガバなのでは？ 6年前に爆破しまくったのに用心なことだ。

オレが言える立場ではまったくくないが、その内また襲撃事件でも起きるのでは……？

今の天竜人を守る盾、CP―0長官はたしか Spanien……Spanking? いや違う、Span Dain だったか。

オハラの中の CP―9 長官で、ここ 2、3 年で CP―0 の長官になった。出世に繋がらない仕事には興味がない出世欲の塊とはステューシーの談。

スカーレットとレベッカの暗殺を引き受けた奴だとも、一昨日 2 人きりの時にステューシーから聞いた。

こちらから何かすれば、却って 2 人のことがバレたりと藪蛇になるかもしれないが、何の罪もない 2 人に追っ手を差し向けた時は、向こうにも事情があったとしても、オレの敵として対処する。

「こつちには 2 人のお頭達の決闘がどうなったかの確認と、父^とちやんと一緒に一度捕まった人さ探しに来ただよ」

「決闘?」

エルバフには掟があり、意見が食い違い互いに引けない場合決闘を行い、正しい者がエルバフの神の加護を受けて生き残るとされているそうだ。

そして船長 2 人は決闘を行うために姿を消したと。

「90 年も前から巨人が……リトルガーデンかもな」

「リトルガーデン?」

一般的に信じられていないような話ばかりをまとめた『ブラッグメン』の話の 1 つ、昔の探検家ルイ・アーノートの航海日誌の内容。

『あの住人達にとって……まるでこの島は“小さな庭”の様だ。巨人島“リトルガーデン”——この土地をそう呼ぶことにしよう』

たしかこんな文章だった。

出版業界からは『探検家が巨人島ウオーランドをご存知ない?』『巨人達にとって狭い島なら、何故そこに留まり続けるのか?』『ホラ吹きの妄想日誌なのでは?』などの辛辣なツッコミも多いそうで、だからこそブラッグメン達のタイトルだ。

妄想だと思えば民衆への晒し行為はやめてあげてくれ。何故本

に……売れるからだろうな。

偉大なる航路の島々は、その海の気候ゆえに他の島との交流も困難で独自の文明を築き上げる。

Dr. ベガパンクの故郷バルジモアが科学の発達した未来国であるのとは逆に、ルイ・アーノートによるとリトルガーデンは巨人が住み今なお恐竜が生きているという太古の島だそうだ。

ウソかホントかは行けばわかる。恐竜の島なら他に人もいないだろうし、決闘の邪魔も入らない。

どこにあるかはわからないし、加盟国ではなく、シャボンディの近くではないようなので永久指針エターナルポースは持っていないが、まあなんとかなるだろ。現在では滅んでしまった果物とかもあるかもしれん。本当に恐竜が居たなら記録してドレークに見せようか。

そうして島を回っていると日も暮れてきたので宿を取る。

正直あと1週間くらいいても良い気がするが、そろそろシユライヤが焦れてきているのでここまでにするか。また来ればいい。

自室で寝る準備をしているとトリスタンが来た。

「どうかしたか?」

「その……私って、これからも船に乗っていていいのでしょうか?」

真剣な様子でそう聞かれた。

ホームシックか?

「もちろんいい。どうした? 故郷に帰りたくなった?」

「いえ、そうじゃないんです! ただ……ロゼって昨日の傷もそうですがすぐ治りますし、今日は私以外の医者まで同行することになって……私がいる意味ってあるのかなって」

オレの回復力の高さのせいで自信がなくなってしまったようだ。

「リリーがこれからも一緒に行動するかはあいつ次第だが、医者が1人だとお前が倒れた時誰が治療する? オレやレイジユも多少は心得があるが限界はある。それにお前が嫌なら止めないが、オレはトリスタンがいた方が楽しい」

「……良かったです! ガルチューー! ロゼペろペろ♪」

がっしり抱きつかれ顔を舐められる。

「すつかり外の世界の文化に染まってしまつて……」

「私が染まったのは外の世界ではなくロゼにです。クンカクンカ♪

スーハー・スーハー♡」

それだとオレが『誰々ペロペロクンカクンカスーハー・スーハー』つてよく言っているみたいじゃないか。

さてと……こういう時、紳士であればトリスタンを励まし、暖かいココアでも入れて一緒に飲んだ後、そろそろ自室に戻るよう促すだろう。

だがオレは紳士ではなくただのスケベなエロい人だ。

「オレも可愛いリスちゃんをモフモフ愛でて楽しむか」

「きゃー！ ケダモノ♡」

尻尾を愉快に振つて、結構ノリノリだった。

☆☆☆☆

一夜明けて3日ぶりにウオーターセブンに到着。

「ンマー。数日で2人増えてるな。ヨコヅナも一緒に行くんだって？」

「成り行きで。ヨコヅナ、後で機械でなくオレと戦ってみようか」

「押忍！^{ゲロ}」

アイスバーグさんやヨコヅナと再会。

オレは機械と情報のやり取りをしていたので知っていたが、船には結構な数の人がいる。

アイスバーグさんは自分が船大工として巨大船、

レイド・ラフターズ

R R 号が気

になったのに目をつけ、7つある造船会社の船大工達に声をかけて、人脈作りの場としたのだ。

「この船、大きさもそうだが、材木の一つ一つが尋常でなくデカイ。一体どんな力の人間が造つたんだ……」

「機関部なんてメインは理解することすら出来ない……あんなものがこの世に存在するのか。そして船が進むと水力発電をすると同時に、

海水を汲み上げ浄水している。お得だな」

デンさんやDr. ベガパンク、そしてR レイド・ラフターズ R 号が褒められて大変気分が良い。

そして誰も入らないでくれと言った場所には入っていないようだ……というか『そんなことより船を見ようぜ』という空気。

職人達の輪の中に入って行って、聞かれたので作った人達を教える。

すると、デンさんとトムさんの兄弟関係を知っていた人がいたようだ。

これはマズイことをしたかと思ったが、意外にもトムさんへの船大工達への印象は悪くなかったようだ。

自分達が不可能だと思った海列車を完成させた船大工としての腕は見事なものだと。

大海賊時代の開幕で自分達の生活が苦しくなったことで余裕がなくなり、更に「海賊王」の死後関係者が次々と処刑されたことで、関われれば自分達にも罪が及ぶのではという恐怖から突き放した。

実際、「海賊王」関連の判例は、少しでも「海賊王」の海賊行為に肩入れした者は危険人物として死罪という過剰な特例。

こういう後から『今までの法と変わった。だから昔これに違反することをしたお前は罪人だから裁く』ということをされては、売った後にその者が罪を犯して暴れた場合、仲介人を使って犯罪者と知らずに売ってしまった場合……考え出したらキリがない。そこまで気にしているのは物を売れなくなる。

オレが素性を隠すのも「海賊王」関連の苛烈さが理由の1つだし、仲睦まじいオレの両親の子供がオレだけなのは、おそらく政府の反応を気にしてのこと。オレは処刑前に生まれたからな。

更に1年前の司法戦襲撃事件当時はC サイファーボール Pを殴ったこともありトムさんを疑ったが、その時に使われた10隻以上はある船団……後から思い返せば3人で動かせる数ではなかったと。

だが今更そんなことを言ってももう遅い。政府が決めたことである以上、何を言っても……口を閉ざすしかない。

これにはアイスバーグさんも少し驚いている。

一方オレは……その会ったこともないCサイファーボール Pにまた腹が立つてきた。

たしかスパンダムだったか？ 余計なことを。

最後に質問に答えながら、出航準備を始める。

そして、アイスバーグさんにも改めて教えておくか。

「フランキーか……生きているに越したこたアねエが、正直どんな顔して会えばいいかわからねエ。トムさんが生きていても、あいつの造った戦艦がトムさんを傷つけ追い込んだことに変わりはないだろ」「だったら直接そう言ってやればいい。仲の良い相手にも気に入らないところの1つくらいあるものだ。元々顔を突き合わせればケンカする仲だったと聞いた。今まで通りじゃないか」

「えっ。わ、私のこともロゼは気に入らないところある？」

会話がレイジユに飛び火した。

「そうやってオレの顔色を窺うところは気に入らない。だがそれ以上に好きなどころもたくさんある。今のお前の笑顔は昔よりきれいだ」「ドキッ♡」

口で言った……お気に召したようだ。

人前でなければ……抱きしめるくらいなら許されるはず。

「ンマー……おれもお前が女侍らしてるところムカつく」

「ふははっ、そりやそうだ。そこを気に入られても困る。オレも兄弟弟子のことでドンと胸を張ってないアンタを見るとムカつく」

卑怯だがトムさんの言葉を引用させてもらおう。

「『男ならドンと胸を張れ』か……わかった、次会う時には直しとくよ」「悪いがオレの方は次会う時も今のままで」

腕の中にレイジユの温もりを感じながら告げる。

「私もこれがいい……♡」

「右目、見てもいい?」

今の状態も好きだがたまに見たくなる。

目を隠している前髪を上げようと手を伸ばす。

「ダメ。あなた以外に見られたくない♡」

顔をオレの胸板にうずめてしまった。

「残念」

シャーリーもガードが堅いんだよな。たまにしか見せてくれない。

「いいなあ……」

「二わかる」

「やっぱムカつくわ」

「二わかる」

レベッカの眩きにはスカレット、トリスタン、メイプルが。

アイスバーグさんの言葉にはウイリー、ダデイ、パンダマンがそれぞれ理解を示した。

だがレベッカと他3人では意味合いが違う……そしてオレの大胸筋だけが目当てなオンリーワンがいるな。

言葉を交わしている内に準備が整った。

アイスバーグさんや海列車に乗っているココロさんに別れを告げながら、ウオーターセブンを出航。

「なあ。次に行く島って決まってるのか?」

「候補はいくつかあるが……どこか行きたいところでも?」

「おれの故郷。^{エターナルポース}永久指針はある。墓参りみたいなものだ」

こいつにとって約1年ぶりの故郷か……^{エターナルポース}永久指針の指す方向を見て、ウイリーに預けた他の物と見比べる。

「よし。区切りのいいところまで人探しをして、見つからなかったら、シュライヤの故郷を目指して出発。その次の目的地も決まった」

^{エターナルポース}永久指針をウイリーに渡す。

「どこにするんや?」

「フルルシャウト島だ」

ジンベエに貰った^{エターナルポース}永久指針を見せて言う。

3年前タイガーさんがコアアを送り届けるために使ったものだ。

「……大丈夫か？」

「そちらこそ。過ぎた時間は、この中ではお前がぶつちぎりだろ？」
「時間は、な（生きてるかもしれない言うても、人から聞いただけのワイより、実際に目の前で助けられなかったお前とでは絶望が違うやろ……）」

フルルシャウト島のもウイリーに渡す。

「悪いリリー。時折ビブルカードの動く方向をウイリーに教えてくれ。おおよその予測を立てるから。この船にいる間は体のサイズを好きに変えてもらって構わない。元々巨人でも乗れるように作ってもらった」

「ありがてエだよ。まっ、1日も1年も10年も大して変わんねエし構わねエだ」

それは大分違うと思うが……寿命が長い分、時間感覚が豪快だな。

“改造人間と人造悪魔の実”

自分や弟子達の修行を行いながら、ワイリーの海流からの予測と反響定位、メイプルの魚への聞き込み、そしてオレの【R R】によるカティ・フラム氏の捜索を続ける。

時に船の反応だと近付いてみると……そこにはドクロを掲げた船が。

「な、なんだあの鉄の怪鳥は!?!」

「また海賊旗か……紛らわしいわ! 行けッ、【R R】——ライズ・

ファルコン! すべての敵を、切り裂け! 【ブレイブクローレボ

リューション】ッ!」

「キーンッ!」

ズバン! ズバン!

この海賊船の多さにはオレの【ライズ・ファルコン】も爪を尖らせ大変ご立腹である。

あくびが出るぜと言わんばかりの早さで余裕を持って殲滅し、オレの側に戻って頭を垂れてくるので、首のあたりを撫でてみる。硬い。

「キーン」

うれしそうだ……年々本当に生きているみたいなの仕草をするようになってきた。

今の姿は爪が血で染まり、機体に返り血を浴びているので少々猟奇的だが。

これでは【ゴッドバードアタック】で気軽に爆発させられない。【レヴオリューション・ファルコン】のミサイル砲撃も、【拳・骨・超新星】の爆撃もあるし、最終手段として【ゴッドバードアタック】の使用は控えるか。

「いんや〜おったまげただ。夢の世界にもビツクリだども、ロゼ強エだな。そんな戦い方さする戦士は初めて見ただよ」

「その内ありふれた戦場風景になるかもしれんぞ?」

海賊船を操縦し連行してきた海賊達を見て、そう呟くエルバフの女

巨人戦士リリー。今は人間サイズで奴らの治療中。

初見では恐れるか引くかが一般人の反応なんだが、流石にそこは新世界ウオーランドがエルバフ出身。戦場には慣れているか。

九蛇クジヤと気が合いそうだな。名前もアマゾン・リリーと同じで縁を感じる。

九蛇クジヤと言えば一つスモーカーさんから知らせがあった。

姉さん達黒艦部隊とハンコック達九蛇海賊団クジヤが度々戦闘を行っているようだ。政府の許可を取って演習を。

『お前が原因だろ。なんとかしろ』

そう言われたのだ。

仲良くケンカしろと伝えてくれと返せば切られてしまった……その内収まるとオレは見ている。

九蛇クジヤと仲良くなるには力を見せるのが手っ取り早い。オレの時も拳を交えた。

まあハンコックが勝つだろうが、あいつ皇帝になってから同年代かつ同性の友達が出来たことないし、きつかけさえあれば仲良くなれるはず。対等ではなく上下関係ならたくさんいるが。

そして姉さんも同性の実力者は認めざるを得ないだろう。

アインがどう転ぶかが読めないな。そこまで拳で語るって性格をしていない。インテリだ。姉さんも教養人だが、海軍に入って結構経つから染まってきた。

殺しはNGとだけオレがそれぞれに電伝虫で伝えておくか。

リリーも医者だからインテリのはずだが、彼女にその言葉は似合わない。トリスタンやレイジュと知識や意見の交換はしているが。

ガルドアとはよく槍を交えている。巨人サイズではなく人間サイズで。

一対一サシならサイズを合わせる——ミニミニの能力を持つ、戦士としての誇りが理由だそう。サイズを揃えた方が槍術を競いやすいか。巨人のパワーはそのままだから、まともにやり合うとキツイぞ。

「海賊嫌いは充分に伝わったけども、敵にも飯はやるんだな……」

「作らなければ死ぬじゃないか」

ハズレばかり引きそろそろ独房が一杯になってきた頃、ようやく過去視で見た廃船を発見。

搜索対象かどうかは不明だが、人の気配を一つ捕捉。これで捜査に決着がつく。

そろそろ料理を作るのが大変になってきたところだ。リリーに全員小さくしてもらおうかと思ったが、逃げられやすくなるのでやめた。

オレと、唯一の知り合いであるヨコヅナで船に乗り込む……見聞色で見た時は気付かなかったが、この船は結構発達した技術で作られている。だが動力が壊れているな。帆も破れているし、これでは波に任せる以外ない。

周りを見ながら船内へと足を進めると……バケツに入れた水で服を洗う、シャツを着た——否、シャツしか身に着けていない人間がいた。

「んく着の身着の儘ア波に揺られ……アウツ！ 辿り着くのアいずこへか……そんな難航、歌います。『裸一貫漂流記』」

「歌う前に下を穿け」

尻丸出しで何を言っている。

女ならともかく、男の尻など見たくない。

「あん？ 下を穿けたア？ オイオイ……バカなことを言っちゃあいけねエ……そんなもん穿いちやあ変態の名折れ。男フランキー、どんな姿であれ心は錦。これはおれの自由の象徴！ 誰にも恥じることアない！ んくく！ スーパー!!」

バア～ン☆

こちらを振り向き、大きな両腕を頭上に掲げポーズを取る。

アロハシャツは前が全開で、その股間にはブラブラとその男の象徴がペンデュラムし、惜しげもなく圧倒的存在感を放ち、媚びず、退かず、自重せず、ドンと胸を張っている。

トムさんが言った『男ならドンと胸を張れ』は、『胸を張ってドンと男性器を見せつけろ』ということではないと思うが……こんなにうれ

しくない裸シャツ姿は初めて見た。

恥部を露出させて自由とか言われても……お前は一体どんな境地に至ったのだ？

シャーリーの姿を思い出し中和しよう。

人魚だからとはいえ、あれはもはや裸パーカー。誰もが震える魅惑の響き——しかもヘソ出しルック、芸術的ですからある。上品なシャーリーが色っぽい着こなしをしているというギャップが素晴らしい。本人に言うとはつぺた引つ張られたが。

魚人島は大勢のマーメイドが裸シャツの恰好をしている夢の楽園である。あの場所を荒らそうという輩は頭がおかしいという評価を下さざるを得ない。

海賊でも「白ひげ」はちゃんと価値がわかっているというのに(※「白ひげ」が魚人島を縄張りにしたのはそんな理由ではない)……よし、見たくもないものを見せられたショックから回復してきた。

「ド変態じゃないか」

レベツカやキャロルの子供達や、ウチの女性陣を連れて来なくて良かった……彼女達にあんなものを見せびらかさうものなら矯正、いや去勢手術が執刀されかねん。

体の至る所が、おそらくは傷を治すためにもうすでに改造手術済みのようだ——流石に男として大事な場所は未改造だが。

鼻は鉄で顎は3つに分かれている。更には腕がデカイ。髪型もリーゼント。

フランキーと名乗ってこそいたが、本当にカティ・フラム氏か自信がない。というか何とか人違いってことにならないか？

今まで頑張って探していたのが変態？ 目の下のまつ毛が辛うじて面影と言えるが……チエンジしたい。

ワンピースが「海賊王」のお宝写真集みたいなクツソ下らないものだったら、海賊達の心を折れるかもしれん。

「オイオイそんな褒めるなよ♡ ——って誰だおめエ!? それに

……ヨコヅナ!？」

「今気付いたのか。決して褒めてはいない」

ウオーターセブンで『変態』は褒め言葉だった……？ そんなはずがない。

「生きとつたんかワレエツ!!」

ヨコヅナが飛びつく。どうやら本人で間違いないようだ。

本来であれば生死不明の人間との感動の再会なのだろうが、下半身丸出しのせいで締まらない。これではオレは泣くに泣けん。

ああそうか……海列車に轢かれて頭を……更にはトムさんを連れて行かれたショックと1年の孤独生活で、精神がやられて露出の解放感に目覚めてしまったのか……別の意味で涙が出る。

「なんでおめエがここに……オイお兄ちゃん、なんだその憐みの眼は？」

「いや、何でもない。お前はもう、1人じゃない。今ならまだ引き返せる」

「ん、何故かスーパームカつくぜ……」

その後、アイスバーグさん達に見せたのと同じ立体幻像ソリッドビジョンを見せる。

「ぎゃあうやうやうう!! アウアウアウ!! ドム、ざくん!!」

すると、こちらに背を向け大声で泣き出した。

「涙など誰だつて流す。泣くことを恥ずかしがるなら、ノーパンを恥じろ。まずはパンツを穿け。話はそれからだ。人間社会に戻れなくなるぞ」

「バカ!! 泣いてねエよバカ!! これアただの汗だ!! そのペド口って奴らの義侠心に、おれが心を打たれたのは確かだが!! うお おおくん、トムさんの造った船を認めてくれる奴がまだいて良かったア!!」

ああ……それもあるのか。自分の育て親のトムさんが、船大工の子供とも言える船を造ったことそのものを罪とされたことにも不満があつたと。思う存分泣かせておくか。

これはアイスバーグさん達と話をするのはまだ無理そうだ。

とりあえずアイスバーグさんに連絡だけ入れて、泣き声を聞かせ。また後で彼の心の準備が出来たら連絡させるからそつちも準備を済ませておいてくれと。

ココロさんにはヨコヅナがかけた。何て言ってるかはわからんが、ココロさんが喜んでるのはわかった。

「つゝわけでこれから大変、いやさ変態世話ンなる。フランキーだ。スーパ―よろしく頼む」

「「濃いのが来たなあ……」」

レイド・ラフターズ

R R 号に帰還し、挨拶するカティ・フラム改めフランキー。自己紹介からトばしているな。

当然海パンは穿かせている。ガタガタぬかして拒否するならばち○こをもぐと脅した。落ちていた鉄パイプをぐしやりと握り潰しながら。すると渋々人前に出られる恰好になった。

「お前は変態ではなくヘタレだ」

この男、ヨコヅナが心配だからと理由を作り、ウォーターセブンに帰るのを拒んだ。アイスバーグさん達に自分で連絡もまだしていない。

まあ人相が変わり死んだと思われているとはいえあれからまだ1年、犯罪歴がついてしまったようだし、せつかくだから時間を置くのはそんなに悪くないか。会えるようになるまでいればいいだろう。その間にこいつが社会復帰出来るよう努めるのがオレの役目。

当然乗り続けても問題ないが、彼らと必ず顔は合わせてもらうぞ。

「何イッ!? 誰が変態じゃねエだア!? てめエ、それはおれが一番言われたくないことだってわかって言ってるのかあん!」

「そつちかよ……こいつホントに船大工なのか? おれの親と同じ……」

シユライヤが落ち込んでいる。

「変態と船大工の腕は何の関係もないぞ」

「わかればいいんだ」

フランキーが満足そうだが、今の言葉はお前が変態だと認めただけではない……変態を認めるって、なんだ？

「おめエ……中々やるじゃねエか！」

「ちよつと待つササ。私は一体何を褒められたのササ？」

「照れるな照れるな！」

なんかパンダマンがフランキーに同類へんたいと認識されたらしい。

「ういゃパンダマンも充分おかしな恰好じゃないか！ 感覚がマヒしていた……」

「政府関係者相手に暴力沙汰……だが事情を考えれば……つーかサイファーボール

C Pの手口が汚過ぎて手を貸したくねエ。管轄違いとはいえ同じ政府の下部組織で、おれのしたことって、正義って、なんだ……？」

「ダデイが自分の正義と折り合いを付けようとしている。」

海軍だろうが政府だろうが、真面目にやっている人がいれば、その陰で不正やら汚職やらに手を出す奴もいるわけで。あの魚人島にも闇はあった。

「そういう時に割を食うのが真面目な人間になるのは納得いかないな。」

「なんや自分のやってきたことに自信なくしとるなア……元気出しイヤ」

「正義……自分を誇れるよう華麗に生きることじゃないかな？」

「言うなれば「華麗なる正義」か。九蛇クジヤに通ずるものがあるな。」

「パパは私の誇りだから、自信持つて！」

「キャロル……お前がおれの正義だ！」

「キャロルが正義——すなわち子供、子供とは次の世代。「未来ある正義」といったところか。良いと思う。子供達の未来のために頑張ろう、世界中のお父さん。その背を見て子供は育つ。」

「うくんその腕……筋肉というより鉄筋ですね」

「おう、骨がバキバキに折れちまって使い物にならなくなったんで、鉄クズで補強した。おれア改造人間サイボーグなのよ。自分でやったから背中はそのまんまだが」

「そう言つてフランキーが腕を外すと中から鎖が見える。」

他にも体に鋼鉄や自作した兵器を仕込んでいるそうで、それで海獣とかを倒して焼いて食べることで生き延びていたらしい。遅しいな。

「おおくすごい。お兄様みたい」

「ヨンジみたい……ねえ、背中も改造し改造人間として完全体になる気……ない？」

「あん……完全変態？　オイオイ褒め殺しかよ♡　お姉ちゃんは医者かなんかか？」

「いいえ、完全体よ……そして私は科学者。それも、世界トップクラスの科学力を持つ国の」

「ほほう……改造手術。興味があるっぺよ」

「クローン技術による治療法もレイジユと研究ですが、機械による医療にも興味がありますね……」

「大丈夫大丈夫。科学戦闘技術においてジェルマに匹敵する技術を有する者など、ほんの数人しかいないから……安心して？　科学の発展に犠牲はつきものとか、科学は戦争で進歩するとか、そういう思想は3年前に我が国から消えたから。私のダーリンによって♡」

ウチの医療班が患者をふっふっふ……と迫力のある笑顔で囲んでいく。

惚気た時だけレイジユの顔が緩んでいた。オレは壊しただけで頑張ったのはお前達だぞ。

「ア〜ウ、3年前ってつい最近じゃねエか。何だこの怖いお姉ちゃん達は……？　美人に囲まれてんのに全然うれしくねエ」

「ただ研究熱心なだけだ克蘭ケ……間違えた。フランキー」
「おうコラ、おめエ今なんツったよ」

ふむ、偽名を使うのは悪くない考え。

スカーレットとレベツカも、不特定多数の人間がいる時は本名ではなくニツクネームのようなもので呼ぶか。

ということ、人前ではスカーレットのことはレティ、レベツカのことにはベツキーと呼ぶことになった。

☆☆☆☆

少々変態が不安だったが、無事皆に迎え入れられたフランキーを乗せ、シユライヤの故郷へ針路をとる。

途中で海軍基地によって独房を空にしてから。夢の中で叩きのめされたからか非常に従順だった。

今はプールで息抜き兼修行中。水中もしくは水上での戦いをして、水着で泳いだり。

ガルドアは日焼けで自分の肌が焼けるのが嫌だからと来ていない。

乙女かつ！ オレなんてドン・アッチーノに焼かれるどころか溶かされたわ！ もう完治したが。

今はレベツカとスカーレットの希望を元に、レイドスーツのデザインをしてもらっている。

鉄並みの強度の外骨格を備えたレイジュと違い体が丈夫でないので、露出は控えめ。

ポイズンピンクのレイドスーツは防御面を無視し過ぎだ。イチジ達のは完全防備だったのに。聞けば、あれでオレを悩殺してこいよという意図があつてのものらしいので、思いやりと言えなくもなく怒るに怒れん。

オレは能力者なので泳ぎこそしないが、前にスカーレットやレベツカと水着を買いに行った時に、スカーレットが選んでくれたのを着用し、上からコートを着ている。

「おう、ナイス変態！」

アロハビキニにサングラスをかけたフランキーから、全然うれしくない褒め方をされる。

こいつはよくプールにいる。海パンが合法だから——などという理由ではない。

そもそもこの男、どこだろうが海パンだ。単にヨコヅナに会いに来ているだけ。それ以外は、回収したこいつが乗っていた廃船を材料

に、機械いじりをよくしている。

船の上では海パンで問題ないが、島に上陸する時はズボンを穿かせねば……毎回脅すのは面倒だ。

今までになかった機会なので、オレの能力で機械を埋め込んだフラインキーを操ったり、体内の機械を操作出来ないかと許可を取って試した結果、不可能だった。まあ予想の範囲内。自分以外の人間を機械に変えることは出来ないし、そうじゃないかと思っていた。

能力でズボンを穿かせるのは無理か……だがオレに秘策あり。

「普通のビキニタイプだ。お前のも同じだろう」

「まあそうだが……コートと組み合わせることでいかがわしさが際立つ（ヒナならこの写真、いくら出すだろう？）」

ダデイにそう言われた。

他の男性陣は特に変哲のないトランクスみたいなもの。

「いや、流石のオレもあの視線の中でこの狭い布地だけでは不安だぞ」
そうして女性陣の方を見る。

キャロルと我が妹レベツカは子供用のワンピースタイプ。胸の所に白いゼツケンが貼られ、『きやろる』『れべつか』と平仮名で書かれている。

これが世界政府加盟国の学校の決まりらしい。先生に名前がわかるようにだとか。

この2人は子供らしく子供用プールで——キャロルは能力者なので浮き輪を腰につけ——きやつきやきやつきやと遊んでいる。平和の象徴。

問題は他の5人だ。

「鍛え抜かれた肉体——わ、ワイルドだっぺ。スカーレットグツジヨブ！」

「普段ロゼは肌の露出が顔だけ、手や鎖骨すら見せないガードの硬さ。唯一見える顔もゴーグルで隠されてしまいますが、あそこまで人前で晒すのは初めて見ましたね。スカーレットグツジヨブ！」

「水着姿なんて、母親のシャツキーすら見たことないんじゃないイカ？」

「スカーレットグッジョブ！」

「ふふふ、私が選びました。ああ♡ 普段治療中くらいしか見られない部位が露わに——私グッジョブ！」

「口から欲望が漏れてるわよ？ スカーレットグッジョブ！」

「これは信仰心の発露です！」

あなたの筋肉への信仰心はよだねなんですか？ スカーレットが周りから称賛されている。

あの3人はともかく、他にも周りに……まだ15歳のオレ以外だと、冗談で済まなくなるといっつか、本気っぽい生々しきが出るか。ダイとか子持ちだから気まずくなるし、シユライヤはシヨタ……あれ？ 15のオレも結構アウト寄りなんじゃ……。

こちらも見ることでお互い様としよう。

メイプルはいつでも泳げるような水着のような格好だし、リリーは能力者なので着替えてさえないが。

スカーレットはオレンジのビキニ。その上からホットパンツを穿いている。経産婦とは思えないスタイル。踊り子の恰好よりも露出が高くオレにとってはレア。

レベツカが選んだあの紐みたいなのは着ないのかと聞くと、『あんな恰好で人前に出られるわけありませんッ！』と怒られた。じゃあ何故買った……オレの水着は選んだくせに。

トリスタンは青いビキニでフリルの付いたスカートのようなものを穿いている。捲りたい。というかすでに後ろが尻尾で捲れている。是非後ろから眺めたい。

そしてレイジュが……あれは何と言うんだ？ 一言で言えば黒くて危ない水着。布を背中に回して胸元にあるリングに結び付けることで固定、少しずれば脱げる。完全に泳ぐための機能を捨てて見せるためのだけの物。あれにエロさで対抗するには、それこそ紐くらいしかないんじゃないか？ 挟まれたい。

「あのお母ちゃん——命狙われ国も追われて、潜伏中には見えねエほ

ど活き活きしてるなあ」

フランキーは相当涙脆いようで、誰かの話を聞く度に泣いていた。他人のために涙を流せる奴は良い奴だろう。

「母の笑顔が陰れば子にも伝染する。子を守る母は最強だ」

「その言葉、スカーレットがよだれ垂らしてさえなければカッコいいやけどな」

絶望に打ちひしがれて下を向いて生きるより余程良い。

その後、近寄ってきたレイジュに腕に抱きつかれ、その未だ成長中の胸でサンドされた。

今までの人生でこれほどまでにコートが邪魔だと思ったことはない。脱ぎ去りたい……はっ、それが狙いか。

「手強い……反応してないわ」

「どこを見て言っているどこを」

「そ、そんな……恥ずかしくて言えない……ぼっ♡」

そこを恥ずかしがる奴は、そもそもこんな行動を取らないんだが。目線を上げる。どこに話しかけている。

今ここで秘めたる姿を解き放とうものなら、オレは自分もう一人のオレの分身を切り落とさなければならなくなってしまふ。子供もいるんだぞ。見せられるか。鉄の理性と、鋼の自制心で耐えている。

これはおそらくステューシーの影響……自分のためにエロくなる美女って、端的に言って最高だな。

「師匠ーッ！ 確かにおれは思ったより修行がヌルいと思ってたが、いきなりこれはなくねエか!？」

「お体に触シャーッりますよー！」

泳いでいるシュライヤが元気な声を上げている——プールでサメに襲われながら。

メイプルに魚からの情報収集ついでに食料を渡す代わりに連れて来てもらい、オレがサメの覇気を目覚めさせた。

当然食料とはシュライヤのことではない。ただメイプルはサメと

完全な意思疎通が出来るわけではないので、勘違いされている可能性はある。危なくなったら助けるから。

目覚めたばかりで、覇気使い未満のお粗末な覇気とはいえサメはサメ。水中での戦闘もいいハンデとなるだろう。ある程度危機感があつた方が伸びる。

本来はヨコヅナの水中戦用の対戦相手だが、シユライヤにも経験させることにした。人以外の動物との戦闘も大事。

レベツカはスカーレットの許可が下りなかった。ルスカイナの動物に比べれば赤子同然なのだが……このサメは人を丸呑みに出来る程度のサイズでしかない。というかこの船で一番の危険生物はオレだ。

最終的には覇気を目覚めさせた海王類と戦闘予定だから、少しずつ慣れていけ。

「さつきオレも戦って見せただろう？ 自分を信じろ」

「そう簡単に水面なんて走れるかアー！」

「シユライヤ……海軍本部中將はサメどころか海王類を一匹くらいなら普通に倒す実力だ。つまり当然元中將の『將軍』も」

「ああ!? あの野郎が出来ておれに出来ねエわけあるかアツ!!」

うんうん。その調子だ我が弟子よ。

無傷とまではいかなかったが、見事シユライヤはサメに打ち勝った。オレの弟子は全員やれば出来る良い子達だ。

☆☆☆☆

汗を流しながら航海を続け、目的のシユライヤの故郷に到着したのだが……

「何あれ？ 怖い……」

レベツカがスカーレットの手を握る。

「雷雲やな……お前の故郷特有の気候か？」

新世界にある魚人島の次の島候補には、雷が降り注ぐライジン島と

というのがあらしいが、その一種か？

「違う……あんなもん見たことねエ。それに、おれが島を出た時より明らかに荒らされてる……！ 一体どこの誰がッ！」

怒っているな……それも当然か。

かつては人が住む造船で賑わった島が、今は完全に瓦礫の山だ。

ガスパーデ海賊団がやったわけではないなら、後から来た誰か。もしも島に住民が残っていたら、死人が出ていたかもしれない。

気配を探ると……1人の気配がする。だが……心の底から嘆いている。

シユライヤと同じこの生き残りか？ 心の声を聞いても、思考がぐちゃぐちゃとしていてわからない。

そのことを話し、まだあの雷雲が何なのかもわからないこの状況。オレに気配を悟らせない程の手練れが気配を消し潜伏中等、危険がないとも言えない。

上陸するのは戦闘担当のオレと、一番何が起きたか知りたいであろうシユライヤ。「エレクトロ」を使うが故に、ある程度電気に耐性があるミンク族で医者の特リスタン。そしてもう一人の医者であるリリーと科学者のレイジユ。最後にルックスが良くて今島にいる人の警戒を解けそうなガルドアの6人で様子を見に行き、他は船番ということになった。

見聞色に引つかからないくらい弱った、意識不明の重体があった時のために、医療関係揃い踏み。船の方で何かあれば、残した機械でオレがわかる。

壊された家の残骸を進み、気配がする中央付近に歩いていく。

すると、

「うっ、うう……！」

小さな体には大きい布きれを纏った、まだ幼いであろう子供が声を押し殺すように嗚咽を漏らしていた。声から男の子だと思われる。

実は雷雲を従えるという四皇、^ズビッグ・ママ^ムではないかと僅かながらに思っていたが、流石に赤^{レッド}土^{ドライン}の大陸を越えて来ていればもつ

と騒ぎになってしかるべきか。

「ねえキミ、何があつたんだい？　大丈夫？」

ガルドアが近付きその場にしゃがみ、明るい声で話しかける。

オレは周囲を警戒しておくか。まだ雷雲は残っている。

「アアアアアアアアアアアアツツ!!」

少年の絶叫が耳を打つ。

「……ワくオ、毛深いね」

あいつ、目の前の光景に頭がついていけないな。

「全員下がれ!!」

フリーズ中のガルドアの体を掴んで後ろに跳び、起き上がらせる。

ドゴオン!!

さつきまでガルドアがいた場所に少年の腕が振り下ろされ、建物の残骸が割れる。

だがそれはただの腕ではない……赤い毛に覆われた、巨人族程ではなくとも人間の子供の小さな体には不釣り合いな巨大なサイズ。

あれは……サルの手か？　恐らく動物系ソオン。まだ大きくなっている。それも……

「うわアアア！　止まれツ、止まってくれよ！　嫌だ、こんな腕もう嫌だツ!!」

本人の意志に関係なく暴れ回っているようだ。

ここを壊したのはあの能力……暴走しているのか。

「なんだ……これ？」

「本来のおらほどじゃねエけど、でけエ腕だつぺ……」

「こ、これって……噂に聞く悪魔の實の暴走？」

シユライヤとリリーが驚き、レイジュがオレと同じ発想に至る。

「スーロン月の獅子」の暴走と同じようなものでしょうか……だとすれば、放っておけば命に係わりませぬ」

そう言つてトリスタンがポケットから丸薬を取り出す。

あれは「インスタント・スーロン三日月の獅子」——魚人島で貰った国宝を分析しトリスタ

ンが生み出した、3分間だけ強制的に「スーロン月の獅子」へと変貌する秘薬。本来は満月を見ることでのみ発現する、ミンク族共通の奥の手。体

毛が白く長く変貌し、戦闘力が大幅に向上する。

「オレが止める。それは最終手段だ。オレが失敗した時に取っておけ。リリーもいるとはいえ、医者が真っ先に倒れてどうする」

3分という時間制限があり、1日1つという用量さえ守れば体にはないそうだが、元々【月の獅子^{スーロン}】は体への負担が大きい。変身するとしばらく動けなくなる。

「……はい、その通りでした」

助けたいという気持ちは立派だが、トリスタンを抑え前が出る。

「来ないでくれエエ!! 止まらないんだツ!!」

そう言いながら、巨大な拳がオレに迫ってきた。

ズドオン!!

上から来るそれを両腕で受け止める。

デカいのは腕先だけとはいえ、見た目通り重いな……。

「ふははっ、安心しろ。オレが今止めるから」

それを隠して笑い飛ばしながら、巨腕を地面に逸らしすぐ側に行く。

そして、ポケットから海楼石の手錠を取り出し、目を見開いている少年の体に押し当てた。

「これで体から力が抜けるはずだ。ほら、ゆっくり息を吸って、深呼吸」

同じく能力者であるオレ自身も力が抜けるが、構わずそのまま背中をさする。

縫り付いて来た、黒い髪に中央が赤色のモヒカン頭の少年が落ち着くまで待ち、話を聞く。落ち着くと腕が小さくなった。この腕、こいつの感情に反応している？

この少年の名前はオールハント・グラント。レベツカ達の1つ上で8歳。

ある日変わった果実を食べてから、左腕があのように巨大化するようになり、勝手に暴れるようになったという。

そして数日前、起きた時に周りを見渡せば、誰もいないこの見知ら

ぬ島だったと……自分が両親の手に余り、捨てられたのだと悟ったそうだ。おそらく睡眠薬か何かに眠らされて。

国の判断という可能性もあるが、寝ている間に売られたり殺されなかったのが最後の良心か……。

「なあ、あんた。おれの腕を切り落としてくれ！　もう嫌だ、こんな腕！」

「——残念ながら、左腕を切り落としても、それで終わるとは限らない。今度は右腕が巨大化するかもしれない」

涙ながらに懇願されるが、それでは何の解決にもならないかもしれないことを告げる。

「グラント、オレ達と来ないか？　お前がその腕を制御出来るよう協力する」

代わりに提案をした。

「で、でも……おれの腕はこんな化物だし、それに……」

言葉を濁すが、オレについてきてまた手に余ると捨てられることを恐れているようだ。

「ふははっ、それがどうした。オレはお前以上の化物だ。犯した罪は数知れず、死後地獄行き決定の爆弾魔。故郷では周りの大人が近付いてはいけないと子供に教えていた超危険人物だ」

言いながら腕をドリルに変化させ、レイド・ラフターズ「R R」を10体呼び出す。

「お前の暴走くらいなんてことはない。オレが受け止めてやる」

「……私は元悪の軍隊の親玉であるお父様に改造された毒女なの。ヨロイオコゼの毒とロゼが大好物♡ビシクホーネット【桃色毒矢】」

「おらはこう見えて巨人族の戦士だっぺ。おめエよりよっぽどでけエ女だよ……よっど。【フルリバウンド】」

オレの言葉に乗ってきたレイジュが口から毒を吹き出し、リリーが離れた場所で元の巨人の大きさに戻る。

「ふっつ、美しきことが罪だとすれば、おれは華麗なる罪深き化物だね」

「私は人間嫌いで有名なミンク族です！　食べちゃいますよ、が、が

おーっ！」

前髪をかきあげるガルドアと両手を上げるトリスタンも、かなり無理があるが人外アピール。

ガルドアのはただのナルシストだし、トリスタンの方は全然怖くないどころか、小動物が目一杯強がつて威嚇してるみたいでむしろかわいい。

「シユライヤもいい？ 故郷壊されて怒ってたけど」

「いいよ……こいつ何も悪くねエじゃねエか。化物は師匠で見慣れる」

「そういうことだ。まあ、化物であるオレのことが怖いようなら、マリソフオードの孤児院にでも送ろうか？ オレの友人もそこ出身のが何人かいるし、すぐ近くに強い人達がいっぱいいるから誰かを傷付けることもない」

その後、泣きながらオレにしがみついて来たグラントを宥め、泣き止むのを待ち、レイド・ラプターズ R R 号の皆にも一緒に船に乗って旅することになったと紹介。

いつの間にか島を覆う雷雲は消えていた。ただの自然発生か？

「ウオオオ……おめエも親に捨てられたのか！ おれも、十何年前に手に負えねエって捨てられてなア……」

もうフランキーの涙を見るのは何度目だろう？

「ガルドア、セント・ポプラで手に入れたルビノクヨで服を作ってたてくれ」

「そうだね。レイドスーツの方はデザインだけ……というかあんなの作り方わかんないし。すぐ取り掛かるよ」

今の服の袖も巨大化する際破けたようだ。

「動物系の暴走か……ドレークに何か聞けねエかな？」

「ダディの知り合いでは、リュウリュウの実の能力者であるあいつが唯一動物か。後輩に当たる。」

モデル「アロサウルス」は古代種だけど、こいつのは何だろ？ 肉

食獣のは草食獣より凶暴性が増すらしいから、そっちなのか？

じゃあオレは幻獣種のセンゴクさんにも……暴走する大仏つてやだなア。それはもう悪魔だ。いや元々悪魔の実なんだが。

あの人の能力、人で大仏で悪魔つてどういうことだ？ トツピング全部乗せ？

「悪魔の実、すつごく不味かったでしょ？ 私も食べたけどあれはもう嫌」

「そんなに言うほどか……？ あの丸い模様の実」

「ん？ 渦巻きじゃないのササ？ 私が見たことがある悪魔の実っぽいのは渦模様だったササ」

「いや、丸だったけど……」

何？ ……Dr. ベガパンクに話が出来た。丸模様の悪魔の実など、あの人が造ったやつしか見たことがない。

皆に断りを入れ、電伝虫をかける。

『プルルルル……プルルルル……ガチャ。もしもしロゼかい？ ひよつとして、設計図に問題あった？』

「いや違う。確認したいことがある」

出てきたDr. ベガパンクにグラントの悪魔の実のことを話す。

現在海軍科学班が進める悪魔の実の研究の1つ。

オレが昔、機械にモサモサの実を食べさせて操ることで、間接的に他の悪魔の実の能力を使えないかと考えていたのを話したことから始まった計画。

機械に動物系^{ソオン}人造悪魔の実を食べさせることで、自分で考えて行動する自律機能、動物系^{ソオン}の強みであるパワーとタフネスを利用し自己修復機能を与え、エネルギーを普通の食料を食べさせることで補おうとする試み。

その名も「鋼鉄^{ヘビメタル・レイダース}の襲撃者」。オレが名付けた。海軍つばくない、悪の軍隊つばいと言われたが、実際元悪魔の軍隊たるジェルマも協力しているし、文句があるなら自分で付けてくれ。

最終的には悪魔の実の弱点である海を克服した……言うなれば、す

べてのデメリットがない「神の実」とか「天使の実」とでも呼べるものを人工的に作り出すことを目的としている。

グラントには海棲石が有効だったのでまだ実現は遠そうだが、ある意味レイジュ達はそれに近いか。あいつらは血統因子の操作により悪魔の実の超人パラミシアに近い異能を有しているが、泳げる。

そして前に海軍本部で見た人造悪魔の実丸模様だった。

『それは……シーザーにダメにされた研究所に置いていたやつのだね』

「――シーザー・クラウンか。たしかアンタの部下で、危険思想が原因で科学班から追放した時、事故を起こしたっていう」

現在3億ベリーの懸賞金が懸けられた賞金首。希少種自然ロギアのガスガスの実の能力者だったか。

新世界のどこかにあるという、今はパンクハザードと呼ばれる島。そこが政府に立ち入り禁止に指定され、致死性の毒ガスが蔓延する危険地帯と化した元凶。その時に持って行ったのだろう。

「なんでそいつが奪っていった人造悪魔の実がグラントの所に？」

『奴が前半にいるのか……？ 手放した理由は金欲しさだろうね』

「お、お金？ もっとこう……自分を追い出した復讐の計画の一環とかではないのか？」

政府に追われるようなことをした奴が、お金のために研究成果を売ったのか？

『あいつは俗なところがあるから、売って遊ぶ金に換えたんだろう。どんな能力だった？』

「左腕が巨大化した。サルみたいだったな」

『合成品の方が……それも全身ではなく左腕だけ。失敗したのか、ただ制御出来ていないのか……』

「制御なら出来ていない。暴走して親に捨てられた」

『……なんと……』

オレの一言が原因で始まったこの研究、つまりグラントが捨てられたのは間接的にオレのせいか……。

「切り落とされるべきはオレの左腕、それを以てグラントへの償いとするか……」

『待ってくれ！ 早まるんじゃない！ ちよつと何か言っただけのキミがそこまでするなら、実際に造った私は一体何をすればいい!? 第一キミの一言がなければ、もつと非人道的な研究が行われていたかもしれないんだ！（強靱な肉体を持つインペルダウンの囚人達を使った、命令に忠実な改造人間化とか、ジェルマに対抗して巨人族のクローン兵大量製造とか……流石に言えないが）』

「ええ……海軍そんな黒いことしようとしたのか……?」

何があつたか知らんが、この人が慌てるって相当だぞ。

オレにはこつちから『何か良い兵器ないか?』と聞かなければ教えてくれない。どうも兵器関係はオレが自発的に協力するなら良い、みたいな線引きをしているようだ。

向こうから送ってくるのは、家庭で簡単なおいしいパンが作れてしまふパン屋の敵であるホームベーカリーとか、日々の疲れを取る代わりに安らぎという名目で人々から自由な時間を奪い去るマツサージチェアとか、あろうことか移動しながらでもイヤホンで音楽を聞けるがこの大海賊時代に聴覚を封じ周囲への警戒が疎かになつてしまふ携帯音楽プレーヤーとか、そういった発明の設計図ばかりだ。

後になって政府が加盟国に販売している物も多い。だから船にある設計図を人に見せれば、そこから技術漏洩するかもしれないわけだ……。

加盟国民にお手頃で便利な商品を供給し、それぞれの家計を圧迫することで、さぞや儲けたんだろうな、世界政府——ツ！ なんて酷いことをツ……全然酷くないな。

オレが知る最近のあんたらの良いニュースが、大体Dr.ベガパンクの発明なのが唯一の問題。

他には大昔にやった言語の統一とか？ だがそれは歴史の本文を解読出来る者をなくすためのような気が……それでも色んな国で同じ言語が使われているのは便利か。

「他ならぬシーザーの暴走もあってブレーキがかかったけどね。どちらかと言うと政府の意向かな（死者の蘇生とか不老不死の研究とかは特に天竜人達の要求だ。あの天才外科医ドクトル・ホグバツクも参加していると聞いたが——モリアの能力で、ある大海賊の影を入れて動かしているゾンビに、悪魔の実を食べさせた——異常アブノーマルゾンビだったか？ その製造に成功したと）」

「それで、結局どんな能力なんだ？ 合成品とはどういう意味だ？」
「ああ……成功しているのかはわからないが、色んな能力を組み合わせて斉天大聖を再現しようとしたんだよ」

聞いたところ、Dr. ベガパンクが造って事件で紛失した実は2つ。

1つは現四皇「百獣のカイドウ」を昔捕らえた時に摂取して、保存しておいた血液を解析して生み出した人工生物ドラゴン——今はパンクハザードの実験事故で消息不明だそうだが、天竜人も気に入っていたらしい。それを発展させて人造悪魔の実としたもの。

そしてもう1つのグラントが食べた方が、リュウに変身し雲を掴んで空を飛行すると言う「百獣」の能力やモアモアの実の巨大化能力、イヌイヌの実モデル「九尾の狐」の化ける能力などを組み合わせ、お伽噺の斉天大聖孫悟空の力を再現しようとしたもの。

それだけ色んなものを詰め込めれば暴走もしよう。人の手に余る。島上空にあつた雷雲もグラントが呼んだ可能性があるのか。

『腕が巨大化して暴れ回るなら、私が拘束具でも……』

「あいつ本人の考えを優先するが、そんなものを付ければ悪魔が余計に反発するんじゃないか？」

『……キミは面白いことを言うね』

オレの超パラミシア人のメカメカの能力ですら、年々「Rレイド・ラフターズ」が生き物染みて来ているし、動物ゾンなら余計にその傾向があると思う。

グラント次第だが、どの道オレが側にいる間はどうかしてみせ

る。それと合わせて、切り落とすのは止められたので、両腕を
レイド・ラフターズ
【R R】に押し折ってもらうことで、Dr. ベガパンクの分も詫び
をいれておいた。

「ぼくか！ お兄様のぼくか！ せつかくお手々治ったのに——この
どえむうっ!!」

両腕を折ったことでめっちゃ怒られたが。主にレベツカに。妹か
らの忠言が、オレにとつて一番堪えるという判断だろう。

「だがなレベツカよ。海賊は落とし前をつけるために、本来は手足を
切り落とすものなんだぞ?」

「お兄様は海賊じゃないでしょ!!」

「海賊に出来てオレに出来んことなどない!! 腕なんてまた作れる。

それ、高い高い」

能力で作った【拳・骨・衛星】^{ゲン コツ サテライト}の拳を2つ飛ばし、レベツカを掴み
空中浮遊。

「わ〜い♪ ……はっ！ このすげこましいっ!!」

DMだのスケコマシだのという言葉、どこで覚えてしまった……な
に、痛いだけだ。その内骨もくつつく。

とりあえず原因となったシーザー・クラウンは見つけたら思い切り
ブン殴る。会ったこともないが、あの野郎絶対に許さない。

加えてDr. ベガパンクの懸念として、科学班に出入りしていた元
王下七武海、擬身^{ぎしん}のカメレオーネにシーザーと、あとボルサリー
ノさんの姿と能力がコピーされている可能性があるそうだ。

コピーの実の能力は、記憶や覇気まではコピー出来ない——少な
くとも数年前の時点では出来なかったようだが、もし2つの自然^{ロギア}の能
力と現大将の姿がコピーされているなら、それだけでも充分脅威か。

だがそれ以前にあの男は確か……懸賞金低くないか？

「お兄様が傷付くの……私嫌だなあ」

「済まなかったレベツカ！ でもこれからも怪我はすると思う！ す
ぐ治すから、許してマイシスター！」

「このまぎごん、ふあぎごん、しすごんやろー!!」

現在肩車中の妹様に頭をポカポカ叩かれる。

それは別に罵倒ではないただの事実だな。

とにかく、問題なくグラントは受け入れられたみたいだし、これからまた賑やかにやっつていこうか。

腕のこともすぐには無理でも、上手くやっつていければいいが……そのためにも、オレがもつと化物らしいところを見せて——そんなオレでも仲間と楽しく過ごしているところを見せて、腕くらいなんてことはないとあいつが思えるようにするか。

☆☆☆☆☆

新世界。パンクハザード

かつてDr. ベガパンクの研究施設があった、新世界用の3つの指針がある記録指針ログポースがどれも反応しない特殊な島。

兵器の暴発により、有毒物質が蔓延する死の島と化し、現在は政府によつて完全に封鎖されている。

稀に流れ着いた者がいても、その島の様子が外に伝わることはない。

『出して、出してくれエ……！　なんだこのガスは……苦しいッ！
出せエッ！』

迷い人が入れられた密室にガスが充満する。

「るっせエなア……楽になりたいきや聞いたことに答える。気分はどうだ？」

電伝虫で捕虜の様子を聞きながら、外から指示を出す男。

『オ……エ！　ゲホゲホッ』

「吐き気に咳か……いいぞ！　頭は痛むか!?!」

『い……い……痛だ！』

「よし！　目はどうだ、幻覚は見えねエか!?!」

『部屋に……大蛇が!』

「シュロロ……いねエよ。もういい、楽になれ」

頭から2本の角が生えた、両側にGASと書かれたローブ状の白衣の男が、電伝虫を手放しスイッチを押す。

ボオン!!

すると室内から爆音が鳴り響き、中から声が聞こえてくることはなくなつた。

「イマイチ……」

「——また失敗作？」

瓶底眼鏡の女——シーザーの秘書であり、シーザーの護衛と監視の任務を行っている、ドンキホーテファミリー幹部モネ——が、ペンを走らせながら、完全に室内への興味が失せた男の方を、振り向きもせずには聞く。

「失敗だ?!? 言葉に気を付けろ。おれの実験に失敗はねエ! この島の現状もそうさ。どいつもこいつもバカなこと言いやがって!! 島1つ殺して見せたおれの兵器の……どこが失敗だ、世界政府!! おれは誰より敵を殺せる!! 何もかも全部吹き飛ばしちまえば世界は平和だよ!!」

世界中のすべてを殺せば世界は平和——自分の研究成果をどれだけ殺せたかで評価する、危険思想の持ち主のこの男が、元海軍科学班所属、シーザー・クラウン。

かつてこの島で起こった兵器暴発事故の元凶で、その一年後に自分のガスガスの能力で毒ガスを消し去つた男。その後、ガスの被害にあつた元囚人達の前では心優しく慈悲深い、世界平和を目指す科学者を演じ、ベガパンクを悪魔に仕立て上げ、部下となつた元囚人達から救いの神^{マスター}“M”として崇められ、この島に君臨している。

「シュロロロ……その点ジョーカーはいい! 許されねエ実験も、必要な実験体の調達も好き放題——すべて闇の中に揉み消される!! 見てろ……この天才を恐れ嫉妬した口うるせエベガパンクに、^{ノーストル}北の海を追放された負け犬の血筋のくせに高飛車なジャツジ! おれに対抗して馴れ合いやがって! 一体誰が世界一の科学者か、今に思い知らせてやる!!」

ジョーカー——ジェルマが戦争屋を廃業したことで、現在裏社会で

勢力を次々と拡大している、戦争を行う国に武器を供給する闇の仲買人。^{フローカー}

その正体は王下七武海にして現ドレスローザ国王、ドンキホーテ・ドフラミンゴ。

幹部を増やし、今なお成長中であるドンキホーテファミリーの船長。

この島に迷い込んだ者をシーザーがモルモットにしても、ドンキホーテファミリー最高幹部——最寄りの海軍基地G-5にスパイとして潜り込んでいるヴェルゴによって、海難事故として処理される。

定期的に島の様子を観察し、上に報告するのもヴェルゴ。時間をかけて真面目な海兵として周囲の信頼を得てきた彼の報告、政府側の人間は虚偽に気付けない。

最高幹部と幹部をつける程、シーザーがこれから研究で生み出すであろうものは、ドフラミンゴにとって重要だった。

「(あなただって科学班を追放されたでしょう。若様……私、こんな奴の護衛をしないといけないのですか……? でも、シーザーはヴェルゴと同様、若様の計画の要……ヴィオラ——いえ、ヴァイオレットが教えてくれた。若様は一体どこまで先を……)」

モネは元ドレスローザ王女にして現ドンキホーテファミリー幹部、ヴァイオレットから、ドフラミンゴの計画の、現在のたまかな内容を聞いている。

すべてを知った上で、自分の家族にドンキホーテファミリーが手を出さないことを条件に、自分と父、姉と姪、そしてドレスローザを取り戻すため、ヴァイオレットはドフラミンゴに協力することにした——世界政府を切り捨てて。

元天竜人であるドフラミンゴにとってドレスローザはただの仮宿。妥協で下界の王ごときの身に甘んじているに過ぎない。

本来の目的は、自分のマリージョア帰還を拒絶した天竜人と世界への復讐。そしてマリージョアへファミリー達と共に登り、神の座に返り咲くこと。そのためのヴェルゴとシーザー。それが成れば代用品^{ドレスローザ}

など必要ない。

ギロギロの實の千里眼人間であるヴァイオレットが——世界政府と天竜人達が保身のために七武海に選任したドフラミンゴに家族と国を奪われたヴァイオレットが、ドフラミンゴの心を読み、自分に怒りと恐怖を覚えながらも共に世界を壊し、新時代を築く同志となることまで読んだ上でのこれまでの行動。

どこまでも先を見透かしたドフラミンゴが恐ろしく、だが自分とシユガーを苦しめた世界政府が完全に崩壊・破滅する様が見たくもあり——そのためには目の前の、過去の自分と似たような境遇の人間への非道な実験を行っているシーザーを守らねばならない。

人は自分に来ることしか出来ない。飛びたいと願っても飛べはしないし、助けを求めてもこない。そんな中で、助けられた自分達は幸運……ならばいっそ、何も考えず機械のように、言われるがまま任務をこなすのが一番楽なのは……モネの苦悩は続く。

「フルシヤウト」

予定外のこともあったものの、シユライヤは墓参りを終え、エターナルボース永久指針を頼りにオレ達はフルシヤウト島へと向かう。

「なア——ロゼ。おめエちよつと自罰的過ぎやしねエか？ 腕を切り落とすだの骨を折るだの、そんなことしたってグラントのことは元にあ戻らねエ。それよりもあいつがここで安心して過ごせるようにするのが、おめエの船長としての役割ってモンじゃあねエか？」

航海途中、珍しく真面目な表情のフランキーが問うてきた。

普段はとぼけた態度を取っているが、やれば出来るじゃないか。

「一理ある。グラントのことはそのつもりだし、オレのやったことはただの自己満足だ。つまりオレが納得することに意味がある。だがそれにしても、お前に言われるとは思わなかったな」

「あん？ どういう意味だ？」

「今までこのR R号を見て興味があんな素振りを見せても、レイド・ラフターズ船について聞いては来ずに、ひたすら機械いじりに没頭……フランキー。お前、船を造る気ないだろ」

オレはこいつの様子を、社会復帰させるために結構見ている。だから気付いた。

おそらくアイスバーグさんがオレに言っていたように、こいつはトムさんに傷を負わせ、連れて行かれた原因となった自分自身を責めている。

「それは——」

「勘違いするなよ？ 別に造りたくないなら造る必要なんてない。それでお前が納得するなら」

「そうか……おめエも、フィツシャー・タイガーを助けられなかった自分を、許しちやいねエンだな……」

フランキーはオレの様子に、自分の影を見つけたようだ。

「確かにオレは肝心な時に何も出来なかった弱い自分が大嫌いだ。だがそれはともかく、いつかお前が自分を許せるようになればいいと思っているよ」

「——おめエもな」

そんな会話をした一週間後、目的地フルシャウト島に着いた。巨大なサボテンがいくつも並び立った荒野に山。中央付近に人の気配がし、村がある——3年前に見聞色で見た時と変わらず、存在している。

ウォーターセブンと周囲の島々より発展が遅れた、世界政府非加盟——国未満の集落。軍隊などあるようには見えない。あっても精々自警団。だからこそコアアラが奴隷となつたのだろう。

「おれの故郷と似た感じだな」

「確かに服装が島の雰囲気にあっているね」

帽子にマントという、ウエストブル西の海の保安官とかカウボーイみたいな服装だ。

「のどかなええ島だなア……畑がぎよーさん作れそうだぎやー」

「フランキー……あなた一体どうしたんですか?」

様子が違うフランキーにスカーレットが尋ねる。

それもそのはず。口調はのんびりとした訛りの混じつたものに。髪型もいつもと違い温泉マークの様に逆立ち、長ズボンに長靴と鍬を装備した農夫スタイル。まるでいつも畑を耕しているみたいだ。

ヨコヅナも『なんだこれは……』みたいな表情でフランキーの髪に触れている。

「フランキーは腹の冷蔵庫にコーラを3本入れて、それを燃料にすることで体内の兵器を動かしている。だが別の物を入れると性格が変わるようだ。今は緑茶を入れている」

ウォーターセブンで手に入れたキノコプリンを食べながら言う。傘の部分がココアの味で、茎の部分はプリンの味がする変わったキノコだ。

サイズによって甘さが変わり、たまにココア以外にもイチゴ味なんかが発生するらしい。

「いやそれどんなシステムよ……感情とリンクしてるの?」

「テアニンのリラックス効果じゃないか?」

「暗示やプラシーボ効果みたいなものでしょうか?」

「単にノリが良過ぎて乗せられやすいだけちゃう?」

何が理由でも良いが、いつものキンキンに冷えたコーラだと炭酸のようにハジケた性格となるようだ。

これもまたフランキーの一面——だが緑茶では力が出ないらしい。コーラでなければダメだと。

一見ギャグみたいだが、コーラ3本であそこまで兵器を動かせるのは、非常にコストパフォーマンスが良く画期的なエンジンシステムなのでは……?」

パンダマンには『戦う前に脱いだらカッコよくない?』と言って、レスラーのマントを着て前を留めてもらっている。

「そっちも様子がおかしいけども、ありやあなんだツペ?」

リリーが気にする方を見てみると——

「あれは……人によっては効果的な精神攻撃になるんだよ」

「うっ静まれ、おれの左腕!」

グラントが包帯を巻いた左腕を掴んで苦しみ出す。

たぶんオレ達以外の人間がいる島に着いたことで緊張した結果だろう。

その様子を見て、自分の胸を押さえたり、微妙そうな顔をする者がちらほら。

まったく……だらしない。そんなもの気にして能力者がやってられるか!

悪魔の實の知識を教え、目の前で戦闘するところを見せたり、オレが知る能力者の戦闘を立体幻像ソリッドビジョンで見せると、とりあえずは安定した。これは操れるものだ。

今まで何度かちよつとしたきっかけで巨大化するところを見た結果、感情が不安定になると暴走しやすいようだが、この様子なら日常生活はすぐに出来るようになるだろう。完全な制御はまだただが。

リリーはあれになったことがなく、知りもしないようだ。小さくなる能力では調子に乗り辛いのか。

巨人のパワーを備えたまま人間サイズの身軽さからくるスピード

は、目立たないが地味に強力。実は小さくなりサイズを合わせて戦うことが、あまりハンデになつていないことに気付いていないのは、巨人族のデカイ方が強いという認識からくるものだろうか？

実際に超重量の巨大な一撃は強力だが……ピンチになつてからの巨大化は、物語では大抵負けるジンクスがある。デカイ的にもなるので、あまりオススメはしないな。

だが切り札を先に使うのも、それはそれで危ないので判断が難しい所。

「大丈夫？ お医者さん呼ぶ？」

「そんな気はないんですけど、違う意味に聞こえるわ……」

純粹に心配するレベツカと、深読みするキャロル。

安心しろ。オレにも『頭大丈夫？ 頭のお医者さん呼ぶ？』と聞こえてしまった。

本人にとつては冗談ではなく死活問題だ。

「ああ、大丈夫だ……」

「こつちは大丈夫じゃねえんだよな……ただの事実でもむず痒い」

「私はもうあの頃とは違うササ……」

「早く制御出来るようになるといいわね……いやホントマジで」

さて、船を泊めて上陸する。

シャボンデイのヤルクマン・マングローブのように、建物のように大きなサボテンの間を通つて村に向かう。

そして歩くこと数分で到着。

あまり多くない人々に注目される。服装はおかしくないはずだが、余所者が珍しいのか……と思つていれば、ウイリーに謝り出した。

「な、なんや？」

ウイリーが戸惑いながらも話を聞くと、3年前のタイガーさんのことらしい。

とある村人を送り届けてくれた恩人への騙し討ちを黙認したこと
の謝罪だそうだ。

別にウイリーがタイガーさんと知り合いだとわかつて頭を下げて

いるわけではなく、ここへ訪れた魚人すべてにそうしているそう。
タイガーさんの最期を知ったその人物から、涙交じりにタイヨウの
海賊団との日々を聞いて、良心の呵責に耐えられなかったらしい。

メイプルはパツと見では手が8本あるだけで、魚人なのかはわからない——まあ半人魚だ。

「あ、アールロンがここに来た……？ あんたら何もされてへんか!？」

ジンベエからはタイガーさんを捜しに行ったと聞いていたアール
ンも、この島にあの人がいないか再び訪れていたようだ。

ウイリーにとって今日会った見知らぬ人間より、旧知のアールロ
ンの方が信用が低いらしい。

いや、長い付き合いでアールロンの人間嫌いを知っているからこそ
か。

魚人にとっては人間への思想が過激なだけで、基本無害。人間に友
好的な魚人にうるさくなる程度だったらしい。

だがそんなアールロンが、怒りの声こそ上げたものの何もしていない
——どころかある村人とは話をして、最後には不器用ながらも笑い
合って、何事もなく、また島を去っていったそう。アールロンだけ
なく一味全員。

良いことのはずだが、ウイリーは気持ち悪がっている。

暖かく迎え入れられ、皆が村人達と騒いでいる中、その輪からこっ
そり抜け出す。

丁度いいから1人で済ませよう。

村から離れた場所——タイガーさんの襲撃地点に辿り着く。

かすかに戦いの跡が残っている。銃痕やうつすらとした血痕、穴が
空いた地面に触れる……聞こえる銃声、肉が抉れ飛び散る鮮血。

乱戦の末、最後には……

「あの——何をしてるんですか？（この人が……）」

過去を振り返りながら地面にしゃがんでいると、背から声をかけら
れる。

完全に無警戒だった。いくら何でも気を抜き過ぎだ。

「ああ。少し自分が死なせた友人について考えていた」

振り向きながら確認すると……オレンジのショートヘアの少女の少女。

少し面影がある。たぶんコアラだ。何故かそわそわしている。

「——そちらの隠れている人も、何かオレに用かな？　話し合いか、戦争。どちらをお望みだろうか？」

気を引き締めて周囲の気配を探った結果、サボテンの影にもう一人いることに気付いた。

「えっ、いや違——あつ……ごめんハック！」

「いや、これは仕方ないコアラ。どうもキミの感覚を甘く見過ぎていたようだ」

ハックと呼ばれた魚人の大男が出てきて2人に名乗られる。

どうやらコアラがオレと会話して、ハックが様子見をするつもりだったようだ。

「タイガーさんを死なせたオレへの報復でないなら何だろう？　あの人のエピソードなら、村にいるウィリーやメイプルの方が知っているぞ？」

「あの……あなたは輸血をしたけど間に合わなかったただけだって、アーロンさんからは聞いたんですけど、違うんですか？　本当にあなたがタイガーさんへの輸血を拒んだなら、庇うようなことを言うとは思えないんですけど……あの、私以外の村の人には怒ってましたし」

アーロンが話していたか。正直そこまで打ち明けているとは思わなかった。新聞記事の否定まで。

コアラの言うように、人間である以上に思うところがあるはずのオレに対して、フォローのようなことを。

「死なせたことには変わりない」

「……もし私がタイガーさんの死の状況を知らなかったら、どうするつもりだったんですか？」

「オレは基本、人の秘密は喋らない。敵みたくない例外を除いて。だか

ら自分があの場にいたこと以外何も告げず、キミの気が済むまで殴られるつもりだった。他の人達は責めないでくれ。他に選択肢はなかった」

海軍も、クザンさんが担当していなかった以上、タイガーさんを七武海にしたかったのは本心だと思う。

ただ討伐するのなら、ヒエヒエの実の能力で魚人達のフィールドである海をまるごと凍らせ、海戦と水中戦、逃走を封殺出来るあの人以上のタイヨウの海賊団メタはいないだろう……あの人が拒否って担当がたらい回しになっただけの可能性もあるが。

ガープさんなら拒否る。あの人は天竜人嫌いだから。隠す気もないらしい。

「敵に苛烈な性格とは聞いていたが、自分もその対象とは思わなんだ……」

2人との話を続けた結果、ハックが革命軍で、コアラがその仲間候補ということがわかった。本人は入隊寄りのようだが、まだ正式に革命軍というわけではない。

「キミがオトヒメ王妃の暗殺を防いでくれたと聞いた。まずはそのことに礼を言う。ありがとう」

「友達を助けただけ。礼はもう嫌になるほど言われて、お礼の品を受け取ったことでチャラにして終わった。彼は元気か？」

「ああ。流石に今まで通りとはいかなかったが、命に別状もなく元気になってる（何度か魚人島には訪れたが、タイガーさんの今の姿は口止めされているからな……まあ無理もないか）」

「？ 誰か知り合いがいるんですか？」

「ん？ 少し前にな」

どうやらコアラにはタイガーさんのことを告げずに勧誘しているようだ。

関心があるであろうあの人の情報をチラつかせて、入れば教えると脅迫まがいのことも出来るだろうが、本人の意志に任せていると。オレのハックへの印象が上がる。

「あなたは今の世界をどう思いますか？」

改めて、少々怪しい宗教勧誘のようなことを聞かれるが、実際オレは革命軍についてそんなに詳しく知っているわけではないので怪しい集団か。

わかっていることは団体名と反政府組織であること、タイガーさんがいることと、見た目からしてアナキーな人物が何人かいることくらいだ。

「まあ問題だらけだな。紛争とか戦争とか海賊の被害の記事ばかり見ている」

世界会議^{レヴェリー}については、いくつもの国々が集まって話し合うこと自体は戦争を回避する手段として良いことだと思う。

だが、マリージョア襲撃のあるなしに関係なく、リュウグウ王国の加盟から200年。未だに魚人島の立場が良くなっていないことから、加盟国の王族の過半数に差別が残っていることは想像に難くない。たとえそこまでではなかったとしても、他国のことに構う程の関心と余裕はないのだろう。

リュウグウ王国が世界会議^{レヴェリー}に参加したのは、加盟した時のたった1度だけということからも、会議の内容は当時の王族の期待には沿わなかったようだ。

「今までは海軍と近過ぎたため接触出来なかったが、我々のリーダーの話では、キミはあの戦争屋ジェルマを変えた原因と聞いた」

「いや、変わったのは本人達の行動の結果で、オレは王様に歯向かった逆賊だ。国の在り方を変えたのは本人達」

実際ジェルマを変えるためにそうしたわけでもない。そこはレイジュに任せていたし、血統因子関連はDr.ベガパンクに頼った。

ただ親なのにな……そう。レイジュの笑顔に、ジェルマに行く少し前にタイガーさんの過去で見た、天竜人の奴隷だったコアラの笑顔を思い出し、そうさせていることが不愉快だったただけだ。

「そのリーダーの情報源が気になるところだが」

「私も存じてはいない」

そのことは反政府組織に知ることが出来る情報なのか？ 科学班のDr. ベガパンクに声をかけたから、知っているのは海軍や政府関係者の一部と、あとは本人達が言わない限り広まらない。

あまり広めたい類の話ではないと思うが……政府や海軍にスパイでも潜り込ませているのかね？ ある意味オレもそうだ。

「キミの思想は我々に通ずるものがある。力で国を倒し権力の座に座るのではただの侵略者。我々が目指すのは、民衆が自らの意志で圧政を打ち破り、自由を勝ち取る革命の手助けだ」

自分達が王になりたいわけではなく、あくまで民衆の自由のため。で、革命が成功すれば世界政府に除名されるだろうから、革命軍の同志が増えると。

タイヨウのマークに解放と自由を掲げたタイガーさんとも気が合いそうだな。方針が大分似ている。

そういうことならジェルマを変えるのは革命軍には困難だったわけだ。

移動する海遊国家で場所を捕捉するのが難しいことを抜いても、あの国の国民は王族にそこまでの不満はなかった。戦争屋稼業で国民自体は潤っていたから民衆による革命は難しい上、王族自体の戦闘力が強い。そして王族に絶対服従のクローン兵。

だが戦争屋という立場で加盟国に雇われる可能性があるので、革命軍の邪魔だったと。

今までになかった団体——いや、もしかすると歴史上はあったが、その都度消されてきたのかもしれない。そういう事件を書物に残せば、また政府の敵が現れかねないから。

今のままでも横暴な支配を行う天竜人や加盟国による被害はある。法的な手順に則った改革は、成るのに時間がかかるだろう。世界会議^{レザエリー}の決議で天竜人の特権を取り去るのは不可能に近い。

力で世界政府や天竜人を打倒しても関係ない人の血は流れる。

仮に天竜人を倒すことに成功しても、「海賊王」死後の大海賊時代開幕のように、次の天竜人になろうとする王とそれを止めようとする

者の間で、加盟国の軍隊による戦争が起こらないとも限らない。天竜人以外にも、シャボンディに奴隷を買いに来ていた人間なんて、天竜人の数十倍はいたからな。上がいなくなつたなら後釜を狙う奴もいるだろう。

そういう変えたことで発生しうる被害を抑えるために、革命軍は仲間を集め規模を増やそうとしているのだろう。

どちらが良いか、オレには答えを見つけれない。

天竜人や圧政を行う国以外に被害が出ない方法もあるにはあるが、今は不可能。

「我々の同志として、行動を共にしないか？」

「あんたの言う革命軍の思想は理解したし、共感するところは確かにある。だが断る」

世界政府に立ち向かう革命軍では、王族の圧政を終わらせることは出来ても、加盟国の手助けは難しい。反政府組織の仲間になったり同盟を組む等の証拠があれば、加盟国の王族だろうが罪人として逮捕したり、加盟国から除名する権限が世界政府にはある。

海賊の縄張りでありながら加盟国として存続しているリュウグウ王国は、“白ひげ”の名の大きさや七武海のジンベエのこともありかなり特殊。

その道を選べば、今オレが考えていることは出来ない。オトヒメ様達やレイジュを通じてジャッジと話したことも、ジンベエやハンコックに持ちかけた提案も、短いながらも今までの旅で会った人に声をかけたことも、すべてが水泡に帰す。

オレの目指す革命は、革命軍では実現不可能だ。

海軍と敵対する気はないし、立場上話してもいないが、終わつてしまえばあの人達も仕事もやりやすくなる。

「理由を聞いてもいいかね？」

「いくつかあるが、オレが2人の魚人島の革命家と友人だからだ」

タイガーさんとオトヒメ様。

2人が出来ないこと、更に加えて七武海のジンベエにも難しいことをやるには、これから旅を続けるしかない。実現出来るかはわからないが、諦めるのはやってからでいい。

第一皆がついて来てくれてるのは賞金稼バウンティハンターぎのオレだ。革命軍のオレではなく。鞍替えする気はない。

「……どういふこと？」

「2人のどちらかに聞けばわかるかもな。オレはまだ世間知らずの子供だ。今は世界を回り知ることが優先。その過程で人と人の橋渡しを出来ればいいと思っている。何より、オレは世界中の美味しいものを集めたいから」

「——自分の道楽が、今の世の中を変えることよりも大事だつて言うんですか？ 誰かの血や涙が流れていても。変えられるかもしれない力が、あなたにはあるのに！」

「ああ。オレは悪い奴だから」

「即答か。これは本当に無理そうだ」

「……良心に訴える作戦、失敗」

そう言つて片目を閉じてチョロツと舌を出すコアラ。

本当に作戦だったのかね——本心からの言葉に見えたが。

「そうそう。海軍と戦つてるところに出くわしたら、オレはあんた達をブツ飛ばすから」

「た、助けてくれたりは？」

「ふははっ、今の世の中を変えるんだらう？ 甘つたれるな。まだ子供なのに革命軍に入ろうつて奴が、覚悟が足りないんじゃないか？ オレだつて世界の構成員の1人だ。敵として現れたなら、気にせず踏み潰していけ」

ゴーグルとスカーフを外して手に持ち、自分のネクタイに触れながら、ハックに視線を送る。

「(む？ ……ああ、そういうことか)」

すると、サムズアップが返された。

無理なら後で直接頼もうかと思つたが、伝わつたようだ。これで例

えコアラが入隊しなくても伝言してくれるだろう。

世界を変えるまで止まるつもりがないなら、捕まえて免罪はまず無理。というか釈放されてもまた手配される行動を起こすから無駄。

海軍をなくすのはありえない。これ幸いと海賊が暴れ回って治安が悪化するだけ。市民の被害が増える。世界政府直属の海軍に抑えられないのに、急造の革命軍だけで出来るはずなし。

だが革命軍の活動自体は——せっかく革命しても除名されてしまおうが——オレにとつても好都合。ならば海軍に助太刀して、別の島まで思い切りブツ飛ばして逃がすくらいしかない。痛いだろうが、世界を敵に回すなら知り合いと敵対する覚悟くらいはしてもらわないと困る。

嫌なら戦わずここで母親と暮らしていた方がいい。というかタイガーさんはそちらを望むだろう。

世の問題が多くてメンドクサイな……だが放っておくことも出来ない。今の時代が大ッ嫌いだから。早く準備を終えスツパリ時代にトドメを刺して、美味しいものを食べながら、皆と平和に暮らしたい。

「私、実はアーロンさんより前——タイヨウの海賊団の船に乗っている時に、タイガーさん達からあなたのことを聞いてました。それであなただけのことを知った気になってた……あなたは普通に嫌な人です！（私以外に魚人と仲良くなった人間がいるって、会うの楽しみにしてたのに！）」

「早めに気付けて良かったな。あの船の何人かは友達だから、オレのことでも鼻真目で見てる。タイガーさん達も噂と違うだろ？ 実際にあいつらと会ってみるまでわからないものだ。まあ悪い噂が流れる奴は、大抵実際に悪いことが多い。オレみたいに。誰も彼もがあの人みたいに実は良い奴——なんてことはない。勉強になったな」

言いながら膨れたコアラの頭に手を置く。

昔よりは背も伸びたけど、まだ小さいなあ。服装も整って、母親に可愛がられているんだろう。

「気安く触らないで下さいよー」

「?」じゃあ手を払うなり、一步下がればいいと思う」

言葉に反して顔は笑っている……ツンデレ?

「あ、あれ? そういえば……なんで? (払う気になれない……なんか懐かしいというか……安心する?)」

「いや、オレが知らないけど」

もしかしてマリージョアのことに勘付いているのか? 姿を消して声も変えていたのに、本能的な部分が。

この子は笑顔を作ることと天竜人の下で生き残った、聡い子供だったようだからな。

教えるつもりはないので、さっさと手をどけることにした。

「むう……」

……その名残惜しそうな顔、やめてくれない? もつと撫でて欲しいみたいなの。

異性としては年上好きだけど、シスコンだから年下も甘えさせたい病気に罹ってるんだよ、オレは。それでいて一番頼りたいのは父さんと母さんからっていう、ファザコンでマザコン。我ながらヒドいな。

「そういえばハック。あんたがここにいたのは偶然か?」

「私は魚人島生まれ、我が友ジンベエから聞いた。ここエターナルポースの永久指針を渡し、出発したと」

待ち構えられている所に、ホイホイ来たってわけか。

「そうなのか。彼のことは?」

「伝えている。キミには直接伝えると言って、動向を聞いていた」

七武海と革命軍の繋がりが——タイガーさんが旗揚げしたから海賊になったあいつが、その恩人を無碍に扱わないのはらしい行動だが、四皇の「白ひげ」とも関わりがあるみたいだし、地味に綱渡りしているな。大丈夫か? バレるなよ。

「アーロン一味には?」

「ジンベエが電伝虫で伝えたと言っていた (インペルダウンでは接触出来なかったようだ)」

「そ、そうだ！　あなたはタイガーさんと一緒にマリージョアに乗り込んだ女の人のこと、知りませんか？」

コアラが余計なことを思い出して聞いてきた。

「名前は？」

「わかりません。姿は見えない人でした」

「会ったことないな」

人は自分には会えないものである。

鏡を見ることはあっても、それを会ったとは言わない。

「革命軍もそんな人物は関知していない」

タイガーさんは革命軍にも黙っててくれているようだ。

「そっか……シャイな人なのかな？」

「ただの姑息な卑怯者じゃないか？　そんな顔も名前も見せない奴は放っておいて、タイガーさん達タイヨウの海賊団に恩を感じていればいいと思うが」

「タイガーさん達には当然感謝してます！　でもあの人のこと知らないくせに、好き勝手言わないで下さい！　あなたの方がよっぽど姑息な卑怯者じゃないですか！」

じゃあ合ってるな。

オレ以上に秘密だらけのオレのことを知っている人間なんているんだらうか？

犯罪者が知らない人間に何を言われようが仕方ないと思うがね。法を守っている人間に法を破っている人間が良く思われようなんて馬鹿げている。タイガーさんですら悪く書かれるのにオレだぞ。実際シユライヤに聞く限り、色々バレてないのにボロクソだったようだ。

「あまり人の恩人を悪し様に言うのはどうかと思うぞ」

「ああ、そうだな。悪かった」

自分のことだから遠慮せず言ってしまったか。

「もう知りません！　いっつだー！」

その後、プンスカ怒ったコアラに、お詫びとして何か悩みがあったら相談に乗ると言って、電伝虫の番号を紙に書いて渡したが、目の前

でビリビリに破かれてしまった……まあいいか。

これでオレとそのシャイな人の同一性は消えただろう。及第点。怒らせた埋め合わせは何か別のことですればいいか。

オレへのコアラの態度を見て、その母親に白い目で見られたが些末事。

問題は外に声が聞こえない船内の密室で、ウチの女性陣に囲まれ、目隠しと海楼石の手錠で拘束された上、椅子に縛り付けられていることだ。

コアラを口説いたのかと聞かれた。違うと答えると、では何があったのかと返され、黙秘権を行使したところこうなった。

天竜人の奴隷だった人間がタイヨウの海賊団によってフルシャウトに送り届けられたことまでは全員知っていても、それがコアラだとは知らない。村の人も教えていないこと。

オレにその秘密も革命軍に入ろうとしていることもバラす気はない——かと言ってこのまま黙ってはいずれ皆冷静さを取り戻し、『オレは人の秘密を話したがらない↓この島には元天竜人の奴隷がいる↓コアラ⇨元奴隷?』という思考の流れで前者には辿り着かれる……詰んだのでは？

いやいや。このくらいのこととは今までもあった。思考速度を上げ、姑息で卑怯でもいいから、コアラの秘密を墓まで持って行けオレ。

☆☆☆☆

団長のシルバース・ロゼには冷たく接していたが、他の団員や特に女性陣とは仲良くなったコアラ。

機甲旅団がフルシャウト島を去ってから、コアラはハックに連れられ、革命軍本拠地——バルティゴに到着した。

「それでハック。結局あの人が言ってた彼って誰のこと？」

「ああ……いずれ会わせるつもりだった。まあ驚くだろうが」

「あれは……おうふ」

2人が歩いて行く先には、奇抜な恰好をした人が集まっていた。

天竜人の奴隷時代を笑顔で乗り切ってきたコアラも、流石にこれには面食らう。

「ティガのアニキ！」

「ティガのアネキ！」

「二「ティガのニキネキ新人類!!」三」
ニユーカマー

「うるせエぞおめエら！　今はこんな姿だが、ニユーカマー新人類になった覚えはねエよ！　イワンコフの奴、あれからすぐ捕まって……どうすりやいいんだよ。この姿で再会は嫌だ……」

そこにはイワンコフが残っていた、網タイツ着用のキャンディー達に囲まれている、大柄な女性——タイのアニキ改めティガのアネキがいた。一応慕われている。

背中に革命軍のリユウのようなマークが入った大きなコートを着て、前は全開で胸の谷間のあたりにタイヨウのマークが。ジーンズを穿いているあたり、意地でも女の服装を着る気はないようだ。

「そのマーク……それに女の人！　もしかして、あなたがマリージョアでタイガーさんといった人ですか!?　あの時はありがとうございませ！」

「おめエは——コアラか！　なんでここに!?!」

「コアラ……この人がタイガーさんだ」

「へっ?」

勘違いするコアラに、ハックが正体をバラす。

コアラが驚きの余り大声を上げ、生きていたことに喜びの涙を流し、しばらくして落ち着いた後、3年振りの長い会話を開始。

気を遣ったのか、空気を読んだのか、ハックやキャンディー達は別の場所に行き2人にする。

「そうか、来ちゃったか……せつかく故郷に戻れたのに。おれ達が怖かったのに勇気出してまで、お母ちゃんに会いたかったんだろ?」

「会おうと思ったらまた会えるよ。あつ！　じゃああの人、タイガーさんがいること知った上で断って、私にも黙ってたんだ……意地悪！」

「あの人?」

その話し合いの中で、ロゼと会った時のことにも触れた。

「ふふっ、なるほど。おれも頑張らねエとな」

「え？ な、なんで？ 何が？」

「つまりあいつは、おれがタイヨウの海賊団を作る前に冒険家としてやっていて、オトヒメ王妃の夢の実現の手助けを、自分の意志で自分の夢と一緒に、魚人島の人間の友人として手伝おうとしてるってことだ」

「あの時あの人が言ってたことと全然印象が違う……何もかも自分のためって感じだったのに……」

コアラの受けた印象は間違っていない。

ロゼの行動はそのすべてが自分のための自己満足。やりたいことしかやっていない。それがたまたま人のためにもなっていることがあるに過ぎず、本人はそう認識している。

この考えはフィツシャー・タイガーを死なせ、彼を助けたかったのに助けられなかったのは自分のせいだと結論付けてから、より強くなった。

「あいつは法律は守らなきゃいけねエものだという極々当たり前の価値感を持つてる。だから破った時は隠す。おれが聞いた限りあいつがそういうの破る時って、大抵目の前でルールじや助けられねエ奴がいた時だが……あいつに助けられたと知らぬままに助かった奴はたくさんいると思うぜ？ 忍者かよって思うくらい、ステルス隠密性能がズバ抜けた奴だから」

実際タイガーの言う通り、助けられたと知らない人間は大勢いる。

姿を消し声を変えているので、コアラのように性別自体すら誤認していたり、霸王色による気絶で完全に目撃者をなくし、気付いた時には助かっている……なんてケースもあるので、ロゼの周り以外で犯行を知る人間は皆無である。

「たとえば誰かのためであっても、規則を破ってるのを良い様に見せたくねエのさ。『オレは悪いことしてる悪人だから皆真似すんなよ』『もっと他にいい方法はあつたはず』ってな感じで。おれだってあいつの一面を初めて聞いたのは、マリージョアに乗り込む直前だ（指名

手配されているとは聞いてたが、まさか爆破までしてたとは……」

自分の手段が褒められたことではないと自覚しているから、行動を褒められるのは好きではない。特に法を破った行為で認められては法を守っている人間が損。ルールを守って行動している人間——魚人島の地上移住の署名を募ったオトヒメのような人物こそ称賛されるべきだと考えている。

もつとも、単に捕まりたくないという思いも普通にあるので、法を破るたびに罪悪感だけが募る。

「あいつを見てそういう考え方もあるって知ってるから、お前の村の連中のことも恨んじやいねエよ。海賊なんてやってりやあ疑われるし手も貸し辛エ。法を破ってんだから、てめエの身はてめエで守んねエとな」

法を破ったものが法の保護を受けられるはずなし。

ロゼあたりは、そもそも人身売買禁止の法を反故にし、タイガーを保護しなかったのは天竜人の方だから気にするなと言うだろうが。

「おれにはもう出来ねエルールに則った改革は王妃達がやってあいつが手伝ってくれる。おれはあいつらが出来ねエことをやる」

「で、でも！ 海軍と戦っている時に会ったらブツ飛ばすって……」

「捕まえるとは言ってないだろ？ しかも騙し討ちせず、わざわざ事前に告げる。『敵対したら遠慮せず踏み潰せ』ってさ……たぶんこれハックを通してオレにも言ってるな」

「何それ!? あっ、でも確かに私よりあの人に詳しいハックも、何も言ってなかった。気付いてたの？ あの人回りくどくてメンドクサイ……!」

コアラが空いた口が塞がらないというように、あんぐり口を開けてから叫ぶ。

「まあ、おれ達がただの民間人だったら、あいつも普通に助けるんだろうけどな。実際オトヒメ王妃のことも堂々と助けたみてエだし。状況があいつの行動をメンドクサクしてるっつうか……」

もしも今が大海賊時代でなければ、ロゼは唯一の人間としてタイヨ

ウの海賊団に入ったり、革命軍に入隊でもしていたかもしれないが、赤子の時に聞いた心の声からくる海賊への反感からルールを破ることへの抵抗が生まれ、その可能性は潰れた。

もしも天竜人の横暴がなければ、ロゼは海軍に入り、正義を背負って海に蔓延る海賊達と戦っていたかもしれないが、この可能性も、たとえ元海賊の両親のことがなかったとしても、今のルールではどうしようもない天竜人という存在を知り僅かになり、タイガーの死の十字架を背負ったことで消滅。

ロゼの人格、性格のほとんどは、今の時代への不満から出来上がった。

オトヒメ王妃の夢の実現の手伝い——タイガーの考えるロゼの行動は正しい。だが足りない。彼はそれだけで満足する気はサラサラなかった。

彼の嫌いな時代は大海賊時代と天竜人の支配の2つが主な構成要素。海賊も天竜人も嫌い。

世界政府が終わらせようとしているのは大海賊時代。革命軍が終わらせようとしているのは天竜人の支配。彼はどちらも終わらせる気。

「そうだ！ 旅の途中は教えてくれなかったけど、結局あの時の女人は誰なの？ タイガーさんの奥さん？」

「全然違う！ なんだ、聞いてないのか……まあそういう奴か」

「つまり、私の知ってる人？」

ピシャーシー！

コアラに電流走る。

「……………つい最近私が出会った人に、ルールを破った時に隠す、ステルス隠密性能がズバ抜けた、マリージョアに乗り込む直前にタイガーさんと話して、タイガーさんに輸血した、タイガーさんの奥さんじゃない人が1人だけいるんだけど？」

海軍にも、革命軍にも告げなかったロゼの秘密を、コアラとの再会の懐かしさに、共通の友人——コアラにとってはその知人——の話

題に、気が緩んでしまったのだろうか？

タイヨウの海賊団初代船長「奴隸解放の英雄」フィツシャー・タイガーと、革命軍幹部ティガのニキネキ新人類、ニューカマーどうして口の堅さに差がついたのか……慢心、環境の違い。

「……そいつは男だろうか？」

迂闊の極み。無駄な抵抗。苦し紛れの異議アリ。

だがもう時すでに遅し。

マリージョアですつと天竜人の顔色を窺って生き延びたコアラは欺けない。

「ダウト！ タイガーさんだって今女の人でしょ！ えっ、あの人がそうなの!? あの人の性別もあやふやなの!」

「……いや、あいつは姿消して声を変えてただけだ」

無所属で立場があやふやなシルバース・ロゼニューカマー新人類説をやるわり否定する、性別があやふやなタイガー。

観念して吐露するその様は、そじょう俎上の鯛を彷彿とさせた。

煮るなり焼くなり捌くなり好きにしろ。

「機甲忍者サン!? 姑息で卑怯者つて……そういえば会ったことな
いとは言つてたけど、知らないとは一言も……何あの詐欺師!? うわ
うわ、どうしよ——とりあえず連絡を……ああつ！ 連絡先の紙、私
が目の前で破いちちゃったんだつた！ 助けてもらつつといて相談にも
乗るつて言われてこれはない……絶対嫌われた……」

「いや——あいつはむしろ、思い通りに事が運んだつて満足してたと
思うぜ？ まあベストは、このことを明かさず、お前が革命軍に入ら
ず、更に自分に恩を感じないつてところだつたと思うが……」

「全部外れてる……いや、最後のだけはなんで言つてくれないのつて、
ちよつと腹立つてるけど。夢が壊れた……」

「またも『機甲忍者ロゼ』の卑劣なステルス隠密の被害者が……人間トラップ隠され
れば暴きたくなるもの。本人にその気はなくとも天然の罠と化して
いる。今後も、忘れた頃に不発弾が爆発するだろう。」

「夢が壊れたつて……お前もしかしてそういう」

「優しいお母さんみたいな人つて思つてたのに！」

「ああうん、なるほど」

3年間性別という固定概念に囚とらわれぬ連中に囲まれたことで、タイガーの脳裏に辺り一面のオカマ畑に咲くユリとバラが見えたが、すぐに違ふとわかり胸を撫で下ろす。

女ばかりの島で育ち、初めて見る男に恐怖して、そこから助けられた姿も見えない女性に幻想を抱き、ものの1日で打ち砕かれたハンコックは特殊な例。その後紆余曲折を経て彼女が、『奥ゆかしい女性だと思つたら男の子だった——じゃあ大人になったら問題ないんじゃない?』の発想に至つたのも、例外中の例外の事例と言える。

「二応これ革命軍の連中にも言つてないから、秘密にしてくれねエか?」

「タイガーさんが言うなら……ねえ。あの人が絶対他にも秘密があると思うんだけど、知ってる?」

重要な情報源から弱みを聞き出し、ロゼへの精神的下剋上を画策するコアラ。

未来の革命軍幹部の鑑。ちゃっかりしている。

「……変わつてないなら、あいつの電伝虫の番号知ってるから、それで勘弁してくれ。かける時はこの白電伝虫を接続して使えよ」

自分ではボロが出ると悟り、暗に秘密はあるが本人に聞けと言いなから、白電伝虫を渡し番号を教えるタイガー。

「……私、あの人が秘密を聞き出せる気がしない。苦手」

少しトラウマになりかけているコアラだが、これから先にチームを組むことになる、自由奔放で無茶をするサボに振り回されたことや、直近では革命軍の濃い人達へのツツコミを、革命軍ではないロゼにその都度愚痴としてぶちまけることで発散することになる。

そしてコアラがロゼに最初に連絡を入れた時、何故機甲旅団の女性陣が自分に優しく接していたのかを知ることになるのだった。

“太陽と月”

レイド・ラフターズ

R R 号で航海途中、コアラと電伝虫での通話。

『それで聞いてくださいよ。私達の服装、どっちの方がオシャレだと思う?』って反応に困ることをラクダさん(※ベロ・ベティのこと)に聞かれたんですけど、私は一体なんて答えるのが正解だったんでしょう?』

ある日 “素肌ジャケット前全開”のラクダさんの痴女な恰好を、革命軍本部ならどこにでもいるらしい “下半身ハイレグ網タイツ”の男——そんな恰好の奴がありふれているという事実がクレイジーだ——が『はしたない』と注意。それにラクダさんが『お前に言われたくはない』と返したところ、ハイレグが『革命軍の品位が疑われる』と言ったことから戦争勃発。

今時の若者である新入りコアラにファツションチェックを頼んだらしい。どちらの服装も見えた覚えがある。

「なんてどうでもいい質問をされているんだ……大量のハイレグが集団で並んで歩いていたらそれだけでバスターコール事案。そっちは大変そうだな。オレは『だったらまず服を着て出直してこい』と言いたい。お前は何と答えたんだ?」

『どっちも隣に立って欲しくくないです』って言いました」

結構ズバツと言うな、この新入り。

オレの言ったこととどっちもどっちだが。

「世の中には答えが出ない選択肢もあるんじゃないか? どちらか1つを選べば『じゃあ一緒に着ようか』ってセクハラかつパワハラのカウンター罠^{トラップ}が発動されるかもしれない。自分の着たい服を着るのが一番とか、自分の好みを話すとかで流すのはどうだろう? 一緒に服を買いに行こうと誘って親睦を深めるのは、そのメンツでは不安だな。もしかすれば与えられた、決められた選択肢を選ばず、自分の答えを提示するという新入りへの試験だったのかもしれないが……」

絶対違うけど。どうせ本人達の趣味、ただの雑談だ。

——どうしてオレはコアラとこんな会話をしているんだろう？

フルルシャウト島を出発してから数日後、電伝虫に連絡が入った。出てみるとコアラだったのだが、中々話を切り出さない。

破り捨てた番号にわざわざかけて、白電伝虫で盗聴妨害までしているらしいのにこれはおかしい——マリージョアでのことをタイガーさん経由で知り気ままずくなっていると判断したオレは、こちらから先にあることを暴露することで有耶無耶にすることにした。

ウチの人間にコアラと何を話したかを聞かれたので、『一緒にこの島を出て（革命軍で）過ごしてくれと誘われたのを断った』と言ったことを伝えたところ、いつの間にか『初対面の相手に告白して振られた女子』扱いだったと知り、電伝虫ではなく目の前で見たいくらいに慌てていた。

それにしても、オレが勘違いすることを望んで言ったとはいえ、目隠しをされていたので顔は見えなかったが、全員得心が行ったような反応をしていた。あいつらはオレへの評価が高過ぎる。もう少し下げてください。

あれ以降コアラと仲良くなっていたが、あれは慰めなのか勝者の余裕なのかどちらだろう？

その後の通話で、コアラに怒られて無事有耶無耶に出来たが、こやつマリージョアでのことを知らないふりをして、『ああ、あの人は今頃どこで何をしているんだろう？』等のように、オレにチマチマと精神攻撃してくるようになった。電伝虫のニマニマと笑う顔が腹立つ。本人とチェンジ。それならかわいく見える。

今回のように、リユウさん（※モンキー・D・ドラゴンのこと）がフラツといなくなつてたまに騒ぎになるとか、1つ下のサボテンくん（※サボのこと）が無鉄砲だとか、革命軍での愚痴も零される。

一度出てきたティガさんは確実にタイガーさんのことだな。ナマズさん（※イナズマのこと）とかクマノミさん（※バーソロミュー・くまのこと）とか、動物が多い。たぶんコアラが考えたあだ名みたいなものだろう。

コアラは会ったことがない、わんこさん（※エンポリオ・イワンコ

フのこと」という人物からの情報がたまに入って、オレが今まで倒してきた海賊が革命軍に完全に把握されている。ほとんどがブタ箱で模範囚として従順に過ごし、中にはインペルダウンの獄卒やエニエス・ロビーの陪審員として働いている者もいるとか。

オレも知らないことを……そのわんこさんが革命軍のスパイで、政府に潜入しているのか？

今までの会話からどうやらコアラは、革命軍では常識人ポジションに収まってしまったようだ。その立ち位置は振り回されて苦労するぞ。常にツツコミに回るのではなく、たまにボケた方が楽になる。

『なるほどなるほど。あんなきれいな人達を囲っている人は、玉虫色な解答がスラスラ出てきますね。流石は私を振った人』

「根に持つてるよこのお年頃の乙女——ごめん。考え方を変えてみよう。オレがハーレムを作っているのではなく、オレがあいつらの共通の愛人だと考えれば、イメージが良くなる可能性が」

『ないです』

「やっぱり？」

今回の件で、オレには誰かに告白されたら報告の義務が出来た。

そしてあいつらに言うと言絡網で他にも伝わる、シルバース・ロゼ包囲網のようなものが出来ているらしい。

『優柔不断は印象悪いですよ。誰か一人を選べないんですか？ 今のままだとただの最低のクズですよ？』

「選んでいないわけではなく、全員を選んだんだ」

人間関係の現状について悩んでいた時期がオレにもなかったわけではないが、父さんの言葉がオレの価値感を完膚無きまでに破壊してくれた。

『複数人から好意を寄せられ誰か一人を選ぶ。なるほど、確かに誠実だ。だが選ばれなかった者はどうなる？ どうせ選ぶなら、二股男やハーレム野郎の汚名を被るといふ選択肢も……あるのだぞ？』

天啓だった。

全員を選ぶ。幸せにしてみせる。受け入れられなければボコボコにされよう。

父さんのほつぺたの両側を引つ張っていた母さんからの、『刺されかねないからやめときなさい。マザコンだからって言いなさい』という、つまり全員から嫌われる案にも聞くべきところはあつたが、これがオレの選択だ。

たとえ刺されたとしても、それは完全無欠にオレが悪いので致し方なし。そのまま許されるか死ぬまで刺されよう。命で受ける。

どちらもオレにはなかつた着眼点……流石オレの両親。やはり格が違った。

『あつはつは〜——全世界の女性に代わつてはつ倒しますよ?』

オレの屁理屈のような返答に、コアラは世界の半分を味方にした。

「あいつらが笑っているなら、オレはクズでいい。それに今更遅いんじゃないか? 誰かを自分と同じくらい愛するのは許容するけど、1人勝ち絶対許さないそうだ」

『ワー。ロゼンサン、アイサレテルナー(怖い……冗談として聞き流せない……)』

「本当にな。幸せ者だよ」

『(この人意外と余裕あるなあ……)そういうえばレティさんが言ってきましたよ? 「あの子は中々デレてくれない」って。お母さんへの愛情が足りないんじゃないですか?』

コアラの中ではスカーレットがオレの母親なのか。

スカーレットの素性を隠すためには、このまま誤解させておくのもいいかもしれない。

だがそれだと、もしオレの父親のことがバレた時、スカーレットは“冥王”の女扱いされてしまうのがな……しかも11歳でオレを生んだことに。父さんが冤罪でロリコンになってしまう。

「マザー・レティはオレの母ではない」

『えっ? でもベツキーちゃんのお母さんでロゼさんとあの子は兄妹で……なんか、すみません』

「いやそんな家庭の事情とかではなく、あの人の自称——非公認の母だから。そしてベツキーは公認のオレの妹だ。血の繋がりがなくとも」

『じゃあもうレティさんも母親でいいんじゃないですか？ 公認母で』

シリアスかと思いきやどうでもいい理由だったらしく、対応が適当になるコアラ。

まさかあの2人が加盟国の王族とは夢にも思うまい。

こういう気楽な距離感は結構好きだ。敬語が抜ければなお良しだが、それは拒否られた。

「あの人とオレはそこまで歳違わないぞ。精々姉くらいにしか思えん。そしてあんな美人が風呂に誘ってくるという異常」

たまにレベツカも連れて、『ロゼも私達と一緒に風呂入ろ〜』とか言って、肩にあげさせて背中から抱きつきながら言うてる。オレがよく膝に乗ってきたレイジュ達にやってと言われるやつ。

自分の子供扱いされている。あの人お姫様時代は侍女に洗ってもらっていた可能性アリだな。

もつとコアラみたいなのにオレを疑って欲しい。オレすら自分のことを信用してないのに。一緒に風呂なんて入ったら我慢しない自信ならあるが。

あの人結構ちよろい。パンダマンがダンディな普通の人間だったら助けられた時に惚れてそうというか、父さんが本気で口説いてもオチそう。

レイジュにも会ったその日に告白されたし、お姫様は誰かに助けられるシチュエーションに弱いのかも知れない。女子は皆お姫様だから気を付けないと——だがそれが理由で助けないって、ただの自意識過剰なアホだよな……。

『あー……それは勘弁してもらいたいですね。実のお父さんでも無理です。いきなり自称父が言うてきたら蹴り飛ばします』

「そうだろうな」

ハック達から魚人空手とかを習っているらしいが、少し好戦的になってないか？

『あつ、もう時間です。今日もありがとうございます』

「構わない。辛くなったらいつでも辞めていいぞ。1人で出来ることに限りはあるが、組織に属さなくても出来ることはある。なんなら誤解を解いてこっちで受け入れるし」

『に、逃げ道作って優しくしないで下さいよ……あとその誤解を故意に招いたのはあなたです』

ガチャ……通話が切れた。

こんな頻繁に愚痴を零されると心配にもなる。

それにしても白電伝虫はウチにも欲しいが、あれはレアだからな。

☆☆☆☆

エターナルポース
永久指針に従い船は進み、次の島が見えてきた。

アイランド
サンデイ島——今まで訪れた島で最も広大な面積を誇るが、その大半を砂漠が占めている。

そして旅立ち後初めてとなる、世界政府加盟国であるアラバスタ王国がある場所。人口は1000万人に至る、グランドライン偉大なる航路有数の文明大国。建国以来数千年の歴史を持ち、この国を統治するネフェルタリ王朝は、空白の1000年以前より存在する。

船を近付け、港町に船を泊め上陸する。

ナノハナという名前らしい。たしか香水で有名な所だな。ハンコック達に頼まれていたから買って帰るとして、今は情報収集。

町を観光しながらこの国の特産物と、あとこの国のことを尋ねて回る。

それとリリーの父、パンズフライのことも。ビブルカードを見るに、向こうも動いているので探し辛い。

「アラバスタ——来るのは初めてですね」

「もしかして、レヴェリー世界会議でネフェルタリ家の方と顔を合わせたことが

あるの？ 私はないけど」

レベツカと手を繋いだスカレットが、レイジュと話している。「ええ。会議でいつも白熱した議論を交わしていると父からも聞いていたわ。ロゼはコブラ王と接触するつもりなのよね？」

「ああ。こちらから行っても門前払いだろうから、まずは国民に認められて、あちらから呼ばれるくらいになるつもりだ」

国民からの陳述なら、国王自ら聞き入れることがあるらしいが、余所者かつどこぞの馬の骨であるオレが尋ねたところで通してもらえないとは思えない。

だから興味を持つよう仕向けるため、何かトラブルはないかと聞いている。

ジェルマやリュウグウ王国の名前を出せば話くらい聞いてもらえるかもしれないが、もしもの時のためにやめておく。

表向きの魚人島関連だけなら何の問題もないんだが、オレ個人の目的の方がグレーだからな。人によっては真つ黒と判断するか、相手にされない。

「もしかしたら顔を覚えられているかも……これはロゼの母親と名乗って、10歳ほどサバを読んで誤魔化すしかありませんね！」

うれしそうに実年齢より上に見られようとする女子は初めて見た。子供ならともかく。

コアラにも言つてたらしいし……少しデレるか。

「血の繋がりは否定して、家族だと思っている——ということなら構わない。年齢を偽ることが出来るなら、これでいいだろ？ 可能な限り本当のことを言つて、相手の勘違いを誘うのがポイント。勝手に深読みしてもらおう」

「アウ……タチ悪いな」

「まあ実際あれだけ長い間いた海軍でも、お前が海賊の子なんて疑つてる奴はいねエだろうよ」

「そりゃあ、『海賊になったら親の教育を疑われる』とか言う奴が、海

賊の子なんて思わんわなア」

まごうことなきオレの本心である。まともな家庭で親の愛情を受けて育った子供が海賊になるのは、かなり特殊な例だと思う。その家庭が何かに壊されたとか。

海賊だったことを責められるのは、まあ仕方がない部分があるが、親として不適格の烙印まで押されるのは我慢ならない。

ん？ 何故かスカーレットが俯いて震えている。

「どうかしたのか？」

「ろ、ロゼがついにデレたー！」

ダメ元で言っていたのか？

スカーレットに抱きつかれる——あなたはオレより背が高いから、正面からだどちようど顔が胸にダイブする形になってるんだけど。

「ギョ〜！」

レベッカも真似して足に抱きついてくる。天使かな？

「もう、ロゼはツンツンさんなんですから。王族と会うならダンスくらい踊れるようにならないと恥をかきますよ。心配いりません。私が教えます！ 私をシャツキーさんだと思っていいいんですよ！」

……ふう、落ち着けオレ。キレるな。悪気はない。

オレの母は母さんだけだが、家族のように思っていると云ったのは自分自身でそれは本心。

この人は息子に憧れているだけ。シユライヤには『はあ？』と怒り交じりに返され、グラントには抱きついた瞬間左腕が暴走して、半泣きになっていたから飢えている。グラントも男の子だからなあ……仕方がない。

「ダンスは苦手だな……よろしく、お母さん」

「任せなさい！」

自分を抑えながら離れて頼んだ。

「あつ耐えたね」

「マザコンの地雷を踏まれてわかりやすく顔を引きつらせてましたが、我慢しましたね」

「アニキってそんなにマザコンなのか？」

「正直そうは見えねエ。師匠が誰かに弱みを見せる姿が想像つかない」

オレをアニキと呼ぶようになったグラントが聞いていた。

弟分が出来たのは初めてか。シュライヤは弟子だし。

「マザコンでファザコン、そしてよく作る機械はファルコンです。あの2人はあの2人で、本人いない時ロゼの話ばかり」

「レイさんとは友達みたいに仲が良くて、シャツキーとはたまにカッブルみたいに仲が良いでゲソ」

「特にシャツキーには溺愛されとるなア。父親は娘を、母親は息子を可愛がる傾向があるみたいとはいえ……あれ見てレティも羨ましがってるんやろな」

「私、お義母様にロゼのアルバム何冊も見せてもらったわ。『初めて息子が作ってくれた料理』とか、色々撮ってたわね」

親は大抵、子供を無条件で可愛がってくれる存在だからな。そうでない家庭もあるだろうが。

オレは海賊嫌いを公言して隠す気がない。それによるメリットもあるようだ。

だからせめて元海賊の両親に、オレがそんなことは関係なくちゃんと慕っていることも隠さず告げなければ誤解を招く。オレがファザコンでもマザコンでもないというあらぬ誤解を。

「子供が親を好きなのは当たり前のこと。なんら恥じることはないわ！」

「そうだなファザコン」

「まあ実際、殺し合うよりは仲が良い方がいいだよ」

「極端だね……」

エルバフではたとえ親子でも、互いに引けなかったら決闘で決めるのが日常茶飯事なのだろうか？

ダンスを覚えたら皆と一緒に踊ることが決定し、聞き込みを再開する。

すると、砂漠化が進み干ばつによる水不足に悩まされていることが分かった。

船に乗っていた時も見えていた大きな河——サンドラ河の勢いが衰えて海水が河の下流に浸食。以降水が不足している。海獣なんかも出るようになってしまった。

ここナノハナは、オアシスから発展したカトレアという隣町から水を供給しているが、河を挟んだ向こう側——『緑の町』とも言われていたエルマルは、稀に降る雨水を確保することで何とか保っているらしい。

「ここでも水害——いや塩害か？ ウォーターセブンでも毎年アクア・ラグナが来るから、まともに農耕なんて出来やしねエ」

「なんで出来ないの？ 海水は？」

「海水は飲めないし、作物に塩がつくと水分が蒸発して枯れてしまうササ」

レベツカの疑問にパンダマンが答える。

ウチの船では海水を汲み上げる過したものを、オレと一緒に花や作物に水をやっていたから、使えるものと思っていたようだ。危ないな。

航海中に高波が来た時なんかは、オレが「サテライト・キャノン・ファルコン」を呼び出し、蒸発させて作物にかからないよう死ぬ気で守ったりしている。

海水も上手く使えば美味しい作物を作るのに利用出来るらしいが、少し間違えば塩害で枯れてしまうのでオレはやっていない。

国王も水不足に対して何もしていないわけではなく、無人のオアシスだが旅人や商人の行き交う交差点であるユバに、4年前から開拓団によって町が築かれ、現在発展中。

「よし。エルマルの方が深刻そうなので、まずはそちらから——ろ過装置を作って配るか。無償だと怪しまれるから、国王に売り込みがし

たいとか言えば話が伝わりやすくてなおさら好都合か。実際裏はある。王宮から釣り出してやろう。ふふふつ、ははははははっ!!」

干ばつの被害は1か所だけではないようだが、対処法が思い付いたこの辺りからやっつていこう。

他は——ドリルで水源を見つける穴掘りの手伝いくらいなら出来るか？ オレの能力は戦闘一辺倒ではない。

賞金首の懸賞金は加盟国の天上金から出ているから、前金を貰っているとさえなくもないか。

こういう時の材料のために、リリーにフランキー捜索時に拿捕した海賊船を小さくしてもらっていた。それでも足りなければこの国で調達するかサン・ファルドまで行って買い、また戻ってくればよし。

「やろうとしていることは善行のはずなのに、どうしてロゼは悪そうな高笑いをしているんだろうね?」

「自分のことを悪く言わないと気が済まない畑の農民だもの」

「いやあ」

スカレットに言われて照れる。

「うれしいんだ……農民って呼ばれるのが良いのかしら?」

「装置はこのおれにスーパー任せとけ」

「大丈夫なのか?」

「おれア世界一の船大工の弟子だぜ?」

そういうことではなく——船を造るわけではないし、本人が問題ないと言っているなら平気か。

その後、船に戻りエルマルへ向かう。

わざわざ船を使うまでもない短い距離だが、ナノハナにずっと置いておくと邪魔になりそうだ。

エルマルから少し離れた沿岸に船を泊め再び上陸。

「そういえば海獣が出るんだったか? ついでだ。修行を兼ねて倒していこう」

サンドラ河から生き物の気配を感じ、提案する。

なに、駆逐するのではなく、拳で語ってこの周辺のアラバスタ水軍にでもなつてもらおう。

「ねえお兄様。あれ使っていい?」

「いいぞ」

ついに2人のレイドスーツが完成した。

スカーレットの方は赤いフラメンコ衣装。お気に召したようで、今までの露出高いのではもう踊らないそうだ。残念。

レベツカが——一言で言えば魔法少女? マジカルでプリティなフリフリのワンピース。大人になってから黒歴史にならないことを祈る。かわいいから大丈夫だ。

竹刀と似合わないの、奥の手兼予備として魔法の杖代わりに伸縮型スタンロッドを製作中。ジャツジの槍みたいな放電武器。

「アニキ。おれも戦っていいか?」

「いいぞ。暴走すれば止めるから好きに行動していい。あつ、シユライヤは強制参加な」

「最初からそのつもりだ」

日常生活ならともかく、今のグラントが戦闘をすれば、まず間違はなく暴走するだろうな。

「なあロゼ——本当にズボンは穿かなきゃダメか?」

「ダメに決まっているだろうがフランキー」

何を便乗しようとしているこの男。

「この流れならいけると思ったんだけどなア……」

「百歩譲って町ではいい。暑い国だからそこまで騒がれんだろう。だが砂漠では絶対に穿け。もちろんローブと靴も」

日中は暑さで肌を火傷するし、夜は氷点下まで冷えるそうだ。

話しながら歩いて生き物の気配のするサンドラ河下流へ向かい――

「さて、ここにオレが弟子にして覇気を目覚めさせたクンフージュゴ

ンがいる」
「「よろしくっス!!」」

100匹くらいいたクンフージュゴンを倒した。

クンフージュゴン——アラバスタ近海に生息する、上半身がカメのような甲羅に覆われたジュゴン。通行人に戦いを挑み、負けると弟子入りしてついていく習性を持つ武闘派。つぶらな瞳の水棲生物だが陸でも結構戦え、その習性ゆえ町の人は難儀していたようだ。

まとめて弟子にし、ヨコヅナがジュゴン達と話し、メイプルがヨコヅナの言葉をオレ達に翻訳するという少々面倒な手順を経て会話を
行う。

この国にいる間鍛える代わりに、戦いを挑む相手を限定させることにした。

地面にアラバスタの国旗の太陽のようなマークと、カモメにドクロを描く。

アラバスタの——陸にいる人とカモメのマークの海軍は襲ってはダメ、ドクロのマークの海賊は倒してよしと教え、この国の人と共存させようという腹積もりだ。弟子が増え修行相手も増える。

「では、戦おうか」

ズラリと並んだクンフージュゴンの前に、シユライヤ、グラント、ヨコヅナが出る。

「か、かわいい……やっぱり私はパスでいい?」

「構わん。だが戦う覚悟を決めた戦士に対して、かわいいから、女だから、子供だから——そういう理由で戦わないことは、侮辱にあたり傷付けることもある、ということとは知っておきなさい」

戦いを拒否られて、地面に手をつき泣いているクンフージュゴンを指しながらレベツカに言った。

「ああっ! ごめんね!」

「そうだっぺなー。エルバフだとブチギレ案件で絶対エ逃がさず地の果てまで追うだよ」

「ごわっ」

「逆にそう言った特徴を逆手にとつて隙を突こうとする者もいる。かくいうオレも子供であるからとナメてきた相手を何回も倒してきた」後はハニートラップとか。レベツカには早い。

「うう……どうすればいいの?」

泣いているクンフージュゴンに駆け寄り、頭を撫でながら聞いてくるレベツカ。

「それを決めるのは自分自身だ。今回みたいなケースだと謝って仲直りも出来るだろう。だが、もし事情がある人間が敵として現れたなら、とりあえず倒してから、問題は後で考えろ。戦闘中に迷うな」

そして戦闘開始。

シユライヤは危なげなく戦えているな。あれだけ毎日蹴り飛ばしたり一番スパルタにしているのだから、そうでなくては困るが。

ヨコヅナも陸上では分があるようだ。クンフージュゴンは人魚同様足ではなくヒレ。水中だとどうだろうな。

グラントは——やっぱり暴走したか。まあ戦闘中と日常生活では全然違うから仕方ない。止めに入る。焦らず気長にやっていこう。

この国には今までに比べ長い間いることになりそうだ。

☆☆☆☆

東の海、シモツキ村

幾多の人々が海へと旅立つ時代、今日も1人の若者が大志を抱き船出の日を迎えた。

世界最強の剣士を目指すくないな。先日誕生日を迎えた14歳。

好きなものは牛乳と卵焼き、嫌いなものは階段。

最近本格的に膨らんできた胸がコンプレックスで、女扱いされ対戦相手に手加減されるのを嫌い、シャツとズボンを着用。スカートよりも袴派。

剣の道に生きるのもいいが、娘を女らしく育てたいコウシロウの策

略により、願掛けのために伸ばした髪は父と同じように後ろでひとまとめに。

一心道場の師範代として認められた時、師範にして父のコウシロウから正式に受け継いだ『和道一文字』を腰に差している。

「済まないね——その左腕。治すアテがあつただけで、まさかあの人が捕まるとは……」

コウシロウが薄く目を開け見つめる視線の先——階段から落ちた事故で負傷したくないな左腕は、今なお不随。

娘の片腕が動かなくなってもコウシロウが動じていなかったのは、3年前にシモツキ村に訪れた、数々の人や国を救い『奇跡の人』と謳われたエンポリオ・イワンコフを頼ろうとしていたからである。

だがその矢先に、その人物がインペルダウン投獄——朝食時に新聞を見た時の、いつも穏やかで冷静沈着なコウシロウの、メガネが割れるほどの大声を出し目を剥いて驚く様子は、娘の記憶に深く刻まれてしまった。

「構いません。階段を信じた私のミス——あれはこの世で最も不要な物です」

「それはどうなんだ……?」

事故以降、すっかり階段嫌いになり階段を使わなくなったライバルを、奇異の目で見るゾロ。

くいなとゾロの戦績は、何度かゾロが勝ったこともあるが、くいなが勝ち越し。片腕で師範代となったのは、父親の最良ではなく、くいなの実力である。

「おいゾロ。くいなに告白しなくていいのか?」

「そんなんじゃないやねエツつってんだろ?」

からかうように、小声でゾロの耳元で囁いたのは、同じ道場の門下生のサガ。

正義の剣を極めることを目的としており、ゾロ達と剣の腕を磨いている。

他にも道場の皆が見送りに来ている。

「何が違うの?」

聞きながらゾロのすぐ隣——吐息が顔にかかる距離まで近寄るくいな。

「お前には関係ねエ！ てか顔が近エよ！」

「はあ……いつも女だからって仲間外れにして……」

離れながら顔を赤くして叫ぶゾロに、くいなは不満気に呟く。

彼女は今まで剣の道一筋で、女友達は少なく——非常に鈍感だった。実は娘のスカート姿が見てみたいコウシロウの、悩みの種の一つである。

「くいな、これを持って行きなさい」

そう言つて、懐から巻物と3本の指針が付いた記録指針を取り出した。

「これは？」

「私も父より『和道一文字』と一緒に受け継いだものです。1つは偉大なる航路に行くなら必要になるでしょう。あの海では珍しくありませんが、東の海では手に入り辛い。もう1つは自身の目で確かめなさい。あの海に行くなら、しばらくは帰って来られない——私は覚えてしまったので、あなたがこれから持つていなさい」

「お祖父様の……」

記録指針をくいなの右手首に付けて、巻物を渡すコウシロウ。

「それでは行つて参ります、お父様！」

荷物入れを乗せた小船に乗るくいな。

「元気でな、師範代」

「すぐ追いついてやるから、頑張れよ」

「うん！ でも……ゾロ方向音痴なのに、大丈夫なの？」

「行く場所わかってんだから迷うわけエだろ！」

だがしかし、くいなの懸念通り、ゾロは海に出てから案の定迷子になることになる。

父や道場の皆に見送られて、くいなを乗せた船は出航。

「名前を上げるには——やっぱ強い人と戦うのが一番かな？」

その後、東の海に賞金首を倒して回る片腕の女剣士の名前が広まり——1年後、偉大なる航路に入った。

アラバスタ王国

アラバスタ王国に到着してから数か月が経過した。

その間にフランキーがようやくアイスバーグさん達に電伝虫で連絡し、

『ンマー、このバカンキー！　　ただけ待たせるつもりだ！　　いくらなんでも半年はねエだろ！』

「う、うるせエ！　こつちも色々忙しかつたんだよ、バカバーグ！　無事口喧嘩。実際フランキーは頑張ってくれた。

ココロさんによると前からこうだったらしいので、放っておけばいいだろう。

他にあつたことといえば、

「ハンコックに勝った？　マジで？」

『大マジよ。ヒナ勝利』

まあわざわざ自慢してきたのだからそうなんだろう。任務の合間に戦っていたと聞いていたが初勝利。

ハンコックが勝っていた間はいつが教えてきていたが、最近は話題に触れないし拗ねていた。怪しんでいたところだ。

「よく勝てたな。同性の方がまだマシだろうが、あいつの場合は誤差レベルなんだが」

あいつの美貌は老若男女を問わず通用する。電伝虫にも効くぐらいだ。

この世どころか歴史上で最もメロメロの実を使いこなせる人間の1人だろう。

『ふふつ、あなたの姉は常に前進するのよ。それに……ハンコックは思ったより初心うぶだったわ♡』

「待とうか。一体何の勝負をしたんだ？」

お姉さま的なそういうアレなことで競ったのかと錯乱したが、ある写真を囿ロックに使い、【禁縛ロック】したらしい。

なんとしようもない……だが勝ちも勝ち。戦闘中は油断大敵。その一瞬が命取り。

そしてちよつと2人の絡みが見たかった。いつの間にか名前呼びになつてゐるし。

「勝つのはまだ無理だと思つていたがやるな。」

一対一サッに拘らず、アインとタッグでならゴルゴン三姉妹相手にも通用しうる、えげつなさこの上ない戦いになるだろうが。

アインとビンズのタッグをよく相手にしていたからわかるが、相手を拘束するタイプと組んだアインは、卑怯汚いは負け犬の遠吠えだと思つているオレでも相手が可哀想になる。

訓練で組手相手がいなくなつたレベル。アイン達にハメ殺しにされた被害者多数。

もう一回姉さんが一対一サッでハンコックとやつたらたぶん負けるだろうが、技も増やして実際に強くなつてゐるようだ。

ハンコックから再戦を申し込まれてゐるが、このまま勝ち逃げする気らしい。やられたら一番悔しいやつだ。

『これで負かされるたびに、あのちよつと面白いポーズでドヤ顔される日々は終わりよ。ヒナ満足』

見下し過ぎて見上げているポーズか。

それが嫌で飛ぶようになるのは予想外だ。

『これで心残りもなくなつたので、今度会つた時にお話があります』

「今ではなく?」

『ええ。直接会わないと上手いこと躲されてしまうもの』
不穩。

心当たりが多くてどれのことだかさっぱりわからん。

さて、アラバスタ滞在中のオレ達がやったことは、まずは予定通り海水のろ過装置を造つて配る。

その間、何度か海賊船がこの国に来たが、とても都合の良いことにオレの船を襲つてくる。町に被害が出ない上、クンフージュゴン達の

評判を上げる要因になってくれたので、カモ以外の何物でもなかった。

海岸沿いのエルマルとナノハナでの用は終わったので、まずはサンドラ河沿いに砂漠を進み、他の町へと向かう。

カエルのヨコヅナの砂漠越えは流石にしんどいだらうから、ジユゴン達やオレの機械と修行しながら船番することになった。

「ん〜！ か、甘露……♡」

途中で見つけた砂漠のイチゴをレイジュが気に入っていた。

「それえ……猛毒ですよ……？ ああ、冷たい♡ もっとお〜」

トリスタンが頬ずりしてきた。

暑さで元気がないので、オレが体を冷やして抱えて歩いている。

「まあ、レイジュは私のおかしもポイズントッピングで注文するし？ 毒への味覚が特殊なんじゃないか？」

メイプルやウイリーは河を泳いでいる。

砂漠のイチゴ——アラバスタの砂漠に生息する、イチゴに似ているが猛毒を持つクモ。

誤って食べれば中毒死し、食べた者の死体に触れても毒が伝染する——はずで、本来なら食べ物ではないのだが、そこは普段から体内に毒を取り込んでいるポイズンピンク。

致命的な毒はむしろレイジュの好物。死体に残り周りに感染するほどの持続性だからか、長く楽しめる味らしい。イチゴでないのを残念がっていた。

「わ、私もちよつとだけ……」

「レベツカ、絶対に食べちゃいけませんよ？ あの子は特別です」

「これは流石にオレも同感。確かに見た目は美味しそうだが、やめておけ」

レイジュがあまりにも美味しそうにしているので、食べたがっているレベツカに釘を刺す。

「本当に美味しいのに……誰か私に共感してくれる人はいないのかしら？」

チラツチラとオレを見ながら言ってくるレイジユ。

……そういうことね。

トリスタンを一端下ろす。

「レベツカ——絶対に真似するなよオツ！」

真っ赤なイチゴみたいなきモの死体を1つを掴む。

「あゝっ、お兄様ずるい！」

「ちよっ!? あなたはアホの子ですか!？」

「父さんも母さんもアホではない！」

「あなたはアホです！」

断言された。

砂漠のイチゴを口に入れる——あつ、本当に甘い。

「アウ、体張ってんなア！」

「お、男だっぺ！」

「いやあ、流石にこれはバカじゃないかな？」

「そこまでせんでも……」

フランキーとリリーは好意的だが、スカーレットとガルドアにウイリー、オレもアホでバカだと思う。そう思いながらもやるあたりが余計に救いようがない。

「もう、だから好き！ いただきます♡」

ちゅうーっ！

この毒に即効性はなく、食べた数日後突然死亡する。

なのですぐ死ぬことはないが、レイジユに口から吸い出される。

レベツカとキャロルの目をそれぞれスカーレットとダデイが閉ざす。

「……きゅぽ♡ はあ……ごち♡」

口内で絡ませていた舌を引っ込め、自分の唇をペロリと舐めながら満足げなレイジユ。

要するにこれがやりたかったようだ。医療行為だから人前でもセーフ。

——オレ、いつか戦闘と関係ないところで死にそうだな。

「っーん」

オレだけ抜け駆けする形で食べたことで、妹様が膨れてそっぽを向き、ご機嫌斜めになってしまわれた。お許し下さい。

スカーレットから毒とわかつているものを食べるなど、その通り過ぎるお小言をレイジユと一緒にもらった後、ユバ等のオアシスに出来た町に訪れ、過去視の見聞色も使って水源を搜索。

ドリルで掘り当てたのを偶然を装って町の人に教えたりしていると、アラバスタ国王軍が接触してきた。エルマルとナノハナのこととで王宮に招きたいと。

もう少し国を回っていたかったが、思っていたより伝わるのが早かったな。

町の人達に聞いていたところでは、黒髪のおかっぱ頭の方がイヌイヌの実モデル「ジャツカル」、アイメイクを施している方がトリトリの実モデル「隼」——どちらも動物系能力者。

護衛隊副官「ジャツカルのチャカ」と「ハヤブサのペル」——アラバスタ最強の戦士やアラバスタの守護神と謳われる、国王軍の2枚看板。

「突然物々しい人数で訪れて済まない。国王様より客人として招くよう命じられている故、本来であればここまでの大所帯でお迎えに上がることではないのだが……」

確かに、何故1万人近くも来ているのだろうとは思っていた。

聖獣として崇められている海ネコには手を出してはいけないはずだが、何かこの国の法でも破ってしまったのかと。物凄く警戒されている。「情報を集め確認すると、港に現れた海賊を圧倒するクンフージュゴンの群れを従えたり、サンドラ大トカゲを一睨みで気絶させたりしている方がいると伺いましたので、その……もしものことを考えますと……」

サンドラ大トカゲ——その名の通り砂漠に生息する巨大なトカゲ。

砂漠を移動中2匹が行商人を追いかけていたので、霸王色で眠ってもらった。

「構わない。こちらこそお騒がせしてしまい申し訳ない」

「(ああ……彼がそうなのか……)」

軽く頭を下げる。

「意図してねエところで注目を集める奴だな(小細工する必要なかったんじゃない?)」

「これで本人は目立つ気がないのだから、いつそ滑稽だわ」

「本気で逃げ隠れすれば、それはそれで右に出る者がいないのササ」

聞こえているぞマスターソン親子。

「さて、サンドラ河を越えて遙々アルバーナよりお疲れだろう。せつかくなので空路にて送っていこう」

言いながら「ライズ・ファルコン」を砂から生み出していく。

そして国王軍がざわつく中、全員分を用意完了した。

「おいペル。もし敵対した場合、これを止められると思うか?」

「チャカ、無茶を言わないで下さい。文字通り一騎当千の超人、その

上武装した飛行能力の厄介さはあなたもご存じでしょう。そうならないようにするのが最善——ですが、そうなった時は刺し違えてでも……」

「ああ。死んでも止めるぞ」

不穏なことを言っている2人。

どうやら威嚇になってしまったようだ。

「むう……お兄様は何もしてないのに……」

不満そうなレベツカの頭を撫でる。

「なあ師匠。これ、逆効果じゃねエか?」

「物量はわかりやすく脅威だからね」

「解せん……かわいいのに」

「そこかよー」

オレの「ライズ・ファルコン」達が心の中で泣いている……かもしれない。

「アニキの【R R】かっけエツ！」

レイド・ラプターズ

「グラント——お前はいい子だなア！」

わかっているじゃないか！

この機械兵器でありながら、ハヤブサをモチーフにした生命エネルギーを感じさせる生物的なフォルムが——

「人のことをちよろいって言いますけど、ロゼも大概ちよろいですね」「いやア、実際こいつらよく出来てるぜ？」

フランキーが良いこと言った。

「「ふーん」」

だが女性陣は興味なさ気……悲しいなあ。

空を飛行し河を越え、アラバスタ王国の首都アルバーナのある東へ向かう。

大きな円状の高い台地の上に建設された都市で、町に入るための門が西・西南・南・東南・東の5つあり、着陸し西門から入る。

中央を通って左に曲がり、北ブロックの奥の周りを見渡せる位置に城壁に囲まれた宮殿が見えてきた。

4000年の歴史を持つ宮殿などの説明をされながら、王族や国王軍の関係者が住むアルバーナ宮殿に入り、王の間へと案内されると——

「兵1万を向かわせたア!? アホカッ！ 戦争でもするわけではあるまいし、何故そんな大事になる！」

「しかしですねエ！ 政府にも問い合わせ調べてみれば、1人であるジェルマを壊滅させた人物と言いますし、キナ臭い噂も絶えない。それに反して海軍での評判が信じられない程高く、あの大将「赤犬」までも一目置く実力とか。落差が激し過ぎて招いたことで何が起るか予測出来ません！ 護衛隊長としてはもしものことを考えれば——」

何やら揉めていた。

ジェルマを壊滅——まあ、ワンマン経営の国王を無力化して、一瞬とはいえ無政府状態にしたようなものだから、あながち間違ってもいないか？

それに加えて、なんかサカズキさんに一目置かれているのが過激派、みたいな認識になっているな。実際相手によつてはその通りだ。すぐに接触してきたと思つたが、そこまで調べていたか。

「実際に会つてもいない内から判断する奴があるか！ 私は客として招くと言つたはずだ！」

「ですが戦争屋がわずかな時間でゲーム屋に早変わりですよ！？ 絶対おかしいでしょう！ なんか企んでますって！」

否定出来ん。そう言われるとすごく怪しい。

実際に悪巧みはしているし、オレもなんでジェルマがゲーム屋になつたかわからん。

「あの……国王様、イガラムさん。お客人をお連れしました」

ペルさんが2人に近付き声をかける。

黒髪の長髪で長い顎髭が特徴的な人物がこの国の国王ネフェルタリ・コブラ。

ちくわのような長い巻き髪が特徴的な人物が護衛隊長のイガラム。

「なんと、もうか!? ——いくらなんでも早過ぎないか?」

「ほらアツ！ もうおかしい！ まだ片道分くらいの時間しか経つてませんよ!? 私の目の黒い内は——」

その後もイガラムさんの進言は続く。

うーむ……自分の信用のなさをナメていたな。前科者である自覚が足りなかった。

加盟国に歯向かつたのは事実なので、他の加盟国関係者からの印象も悪くなるのは自然な流れ。

「なんかゴメンな、ウィリー? 最初なのに、オレの存在が相当お荷物になつている」

魚人島の地上移住関連の話は、ウィリーからすることになつている。

人間から話すのと魚人族が直接話すのでは印象が違う。オレがするのはその協力。

「気にすんなや団長。誰がなんて言おうが、お前がしてくれたことは

変わらんわ」

「もう！　なんでお兄様が謝るの!?　何もしてないのに！　この国の人達あんなに喜んでたのに！　勝手に色々言われるのが当然みたいな顔して！　シャボンディでも魚人島でも皆に慕われて本当にすごいんだよ！」

何もしてないってことはない。オレのこれまでの人生は血塗れだ。だがレベツカはその慕われる前を知らないからなあ。

「ありがとう。でもこの警戒は皆が国王を、この国を大事に思っている証拠だ。良い国じゃないか。オレはお前達が慕ってくれるなら、それが何よりうれしいよ」

「……だっ！」

「はいはい、お嬢様」

オレを喜ばせるため甘えてくるレベツカを抱きかかえる。

「今日は一緒に寝たい。ごはんも作って」

「ブラコンだと思われるぞ？」

「いいもーん」

オレの料理なんて大して美味しくないだろうに。

「(あつ、マズイ。これ違った)」

「(先程まで怒っていた幼子が、もうこちらを意にも介さず——これは彼への信頼の現れ)……済ま」

「数々の非礼、申し訳ありませんでしたアーツ！」

ズザーツ！

何か言いかけたコブラ王を遮り、イガラムさんのスライディング土下座が滑ってきた。

汗がダラダラと流れ床に落ちている。

土下座——遙か古来、空白の100年以前より継承されてきた礼式で、今では最上限の謝罪の形として使用され、大抵のことは土下座をすれば許される。

しかもスライディング——芸術点が高い。

他にもジャンピング土下座などがあり、オプションで靴舐めが付く

こともある。

「いえ、頭を上げて下さい。自分は住所不定無職の道楽者故、あれで普通でしょう」

「さず、ゴホッ！ マ〜マ〜マ〜♪ ……流石に卑下し過ぎではないかね？」

主君が頭を下げようとする気配を察知し、自分から先に動いたのか。それとも――

「ロゼが気にしなくてもこっちは不愉快。ロゼだって私達が罵倒されれば怒るんだから、逆なら私達が怒ってもいいじゃないカ」

「私達にとっては暗い夜を照らすお月様。ロゼは自分がいなくても大丈夫なように導く節がありますが、もうなくてはならない存在です」
「手段がどうあれ、誰が何を言おうと、ロゼ自身が何を言おうと、私を閉じ込めていたカゴを壊してくれたのは紛れもない事実よ」

「欠陥も問題もある子ですが、それでも私達が笑っているのは、ロゼの気配りのおかげなんですよ……」

オレの後ろで殺気立っている人達に気圧されたのか。

「うおアアアアアアッ………！」

グラントが震えながら左腕を抑えている。ウチの味方まで怖がらせるのはやめてやれ。

「決めたわ。今年の世界会議^{レヴェリー}、ロゼも連れて行くから」

「え？」

ドキッ！ 王族だらけの伏魔殿^{デーモンパレス}——になんて行きたくないんだけど。せめて一国ずつでないと身が持たない。顔が引きつりそう。お腹いっぱい。思考停止で殴って解決出来るそこらの海賊とはわけが違ふ。

顔合わせとしては都合が良いだろうが、あの場所でオレの話は流石に無理。性急に事を進めても、オレが捕まるだけ。

「自分でなんとかするぞ？」

「これって半分くらい私が原因じゃない。私がなんとかしたいの」「そうか……それは仕方ないな」

世界会議^{レヴェリ}の前後に、アマゾン・リリーに顔を出すか。後にした方がゆつくり出来るかな？

「ふふっ、こうしていると私達夫婦と子供みたい」

「親子じゃないもん、兄妹だもん。それにお母様がいい」

「来ましたよー！」

なんともうれしそうにスカーレットが腕の中のレベツカを撫でて
いる。

「……いいなあ」

それを見て羨ましがるレイジュ。

お前は母親をなくしているからな……。

「ねえ、子供を産むのは早い方がいいと思わない？」

「危ないから旅の目的を終えてからな。それに子育てが始まると2人の時間が減るぞ」

「うふふっ、たくさん欲しいなあ……国が作れるくらい。が、頑張ろ♡」

緩い表情で頬を突きながら言ってくる。

そつちかい。そして多過ぎ。

「世界会議^{レヴェリ}に参加？ 一体何を……」

「挨拶が遅れました。初めまして、ネフェルタリ・コブラ様。ジェルマ王国国王、ヴィンスモーク・ジャッジが長女、ヴィンスモーク・レイジュと申します。以後お見知りおきを」

洗練された動作で挨拶をする第一王女。

こういうのを見ると、生まれながらのお姫様だなと思う。

そしてアラバスタの面々は口をパクパクとして顔面蒼白である。

わかりやすく言うと、『やっべエ、やっちまった……』という顔だ。

素直に会いに来た方が良かったか？ だが権力や武力をチラつかせて話を進めたところで何の意味もない。それでは今の世界政府の在り方と変わらない。難しいな。

「1人だけずるいです！」

「お姫様だからって」

「ふふっ、その分面倒事も多いし色んな国から恨みも買っているから、このくらいの役得がないと。お父様なんて常に仮面を被っているし」
よし、こっちの険悪な雰囲気の流れた。

このまま有耶無耶にしてしまえ。

無事ことなきを得た後、レベツカと同じくらいの年頃で、水色の髪をポニーテールにしている王女——ネフェルタリ・ビビを紹介された。

「……ところでそちらの修道女の方、どこかで見かけたことが……？」
「お、おほほっ！ わたくしめはこの国に来たのは初めての、ただのしがないマザーでございますのことよ!？」

ウソ下手アツ！

テンパリ過ぎ。

「うーん……まあ、マザー・レティは美人ですからね。王妃様を亡くされ数年、寂しい心中はお察し致しますが、幼いベツキーの母、自分にとっても母のような人ですので……」

タチの悪いナンパから庇うように、スカーレットの肩に手を置き屈ませ、前に立ち顔を隠す。

「(演技が迫真で手馴れ過ぎて引く……)」

「はっ！ そ、その……お気持ちはうれしいのですが、私にはこの子達がいいますので……」

恥らって見えるように俯きながら乗ってきた。

落ち着けば大丈夫なんだな。

「……お父様?」

「いやいやいや!? 違うぞビビちゃん！ 私はティティ一筋だ!」

娘の疑惑の目がコブラ王を襲う。

ブンブン手を振り慌てて否定している。効果は抜群だ。

「国王様アーツ！ 私が言うのもなんですが、これ以上争いの種を撒かないで下さい！ それも亡き王妃様絡みで!」

「違うと言っておろうが！ キングチョーップ!」

ズビシッ!

国王と護衛隊長が取っ組み合いを始めた。

「いつもこんな感じですか?」

「いや、たまにだ」

周りをイエスマンで囲む権力者の多い中、ただの仕事上の機械的な主従関係を越えた信頼を築いている証だろう。結構フランクな王様だな。

これでこちらから明かさぬ限り、ツツコまれることはあるまい。スマンな。

落ち着いた後、娘に他の島のことを教えて欲しいと言われたのだが、

「どんな島に住んでいたんですか?」

そう聞かれた。

どんな島——?」

毎日聞こえてくる悲しみ、苦しみ、痛みの悲鳴。

愛するものを横暴な権力者に奪われ、海賊の理不尽な暴力に死に、人としての尊厳を失くし、殴られ切られ撃たれ乱暴され——ダレカタスケテ。

無力な過去の自分を振り返るな。何も変わらん。

体を作り変え感覚を一時強制シャットダウン。フラツシユバツクを強引に断ち切る。

本当に便利だこの能力。

「——たくさんのシャボン玉が舞って、遊園地があるところだ」

あんな現実の子供に見せたくない。

他の島を知れば知るほど、あの島がおかしかったということがわかる。

「私の体より大きなシャボン玉がいっぱいね——」
レベッカが、心の底から楽しそうに話す。

この子は優しい子、そしてウソが下手。

だからこれは本心からの言葉。

「ロゼ殿、いかがされました？」

「ど、どうしたの、お兄様？ どこか痛いのか？」

護衛のペルさんとレベツカに尋ねられる。

「いや、うれしかっただけだ」

良かった……レベツカにとって、あの場所での生活が楽しいもので。オレの生まれた時より、少しでもマシになっていて。

「なあシユライヤ、なんでアニキ泣いてんだ？」

「おれが知るか。お前と少ししか師匠と一緒にいた時間は違わねえよ」

「まあでも、悲しそうではないだよ」

「こういう時ア、見なかったことにするモンだ」

「彼はそういうの気にしないよ？」

「あの人、シャボンディは両親や私達との思い出の場所ではあっても、誇りになって思ってますから。私を故郷に帰した方が幸せと思ってますし」

「あいつは今出来ることは片っ端からやる。オトヒメ様が言う一部の人間の所業、それを見たくもないから率先して関わってきた」

「やりたいようにやって自分の中で完結してるから、知らない人間からの名声も悪名も、メリットデメリットが絡まないとどうでもよくなってるでゲソ」

「でも誰にも認められなくていいなんて、そんなの寂しいわ。だから私は褒めてあげたいんですけど、それも嫌がるんですよね……」

「海軍に入り浸っていたのは、罰されたい気持ちがあったからなのか……？」

「いや絶対楽しんでたわよパパ。よく笑ってるじゃない。ロゼは自分がリラックスする術をよく知っていて、かなりタフよ？ 毎日夢で精神を掌握している私が保証するわ」

「ええ……たまにすごく激しいもの♡」

「すーぐピンクになるササ」

——だが所詮、オレがやったことは対処療法に過ぎん。

根本から変えなければ、安心して魚人島の皆を地上に案内出来ん。

「ど、どうしたの、カルー？ 突然走り出したと思ったら、そんなに震えて……まさか首を絞められ——」

人に乗せられる大きさの、超カルガモのカルーが、オレを見ると一目散に逃げ出したので捕まえた。

鋭い生き物はオレを本能的に恐れるものがたまにいる。

「ふははっ、そうかそうか。ここが弱いのか」

「そこ^{クエ}お……」

だから触れ合いでコミュニケーションを取った。
喉を撫でている。

「喜んでるだけかいっ！」

この子はツツコミ気質だな。コブラ王もそっち寄り——血筋か。

ここは王宮内の庭。

王女とレベツカ達との話の流れで、少し稽古をつけることに。

ユバでの話を聞かれ、ビビの昔の砂砂団との話になり何故かこうなった。アクタイプだな。

意外なのは許可が下りたこと。おそらくオレの戦力偵察。

怪我させない程度に軽くでいいか。

「ふむ、糸の先に刃物を付けた暗器か。それならパーティーなんかにも楽に持ち込める。考えたな」

「ビビちゃんすーいー！」

「えっ……そ、それほどでも？」

「(ビビ様……)」

「(絶対そこまで考えてませんでしたね)」

どうやらオレの深読みだったようだが、自分に合った武器を見つけられるなら偶然でも何でもいい。

「こうやって指にリングを付けて回転させ」

ギョルルと音を立てながら小指で回す。

「遠心力を利用し斬撃を飛ばす」

ズバン!

その辺にあつた岩を両断した。

使い慣れていない分、鞭より威力がイマイチ。

「なっ? 簡単だろう?」

「無理です!」

ブンブン首を振っている。カルーまで。

「常識とツツコミは部屋に置いてごようか。出来ると思えばカルガモも空を飛ぶ。オレは飛ぶし」

「ええッ!」

最初からこれをやれと言っているわけではなく、こういうことも出来るということを知ってもらいたかったのだ。

「(まともかと思いきや、無茶苦茶でもあるな……)」

「ところでコブラ王、何故隠れておられる? 見学なら立つか座つてご自由に」

穴が空いた逆さの段ボール箱を持ち上げると――

「ギクギクウツ!」

「ぎっくり腰ですか?」

そこには頭に風呂敷を被つて地に伏せている、プロトタイプのコソ泥みたいなネフェルタリ家第12代国王様の姿があつた。

「国王様!」

「我々が見ていると……といふかなんて恰好を……」

「だ、だつて、ビビちゃん心配じゃないか」

両手の人差し指をツンツン合わせながら言う。

「怪我させたら自分が切腹しますから」

「そこまでせんでよいわッ! 怪我くらいで命を散らすな!」

「死ぬ気はありませんよ。鍛えています。プロですから」

「切腹のか!」

「この人よくツツコむなあ……ニヨン婆みたい。」

とりあえず六式ロッキンキやら何やらを見せビビ王女の常識を粉砕してから、王宮内の個室でコブラ王と話す機会があった。内容はエルマルやナノハナでのこと。当然護衛付きで。
ちようどいい。

「バカな！ そんなことが出来るはずがない！」

「やはり政府に連絡した方が」

コブラ王とイガラム護衛隊長に話し終えた。

この反応は予想の範囲内。

「連絡？ 何をですか？ オレはまだ何もしていません。今は。そして終わってしまえばオレを捕らえる意味もない。通報するなら露見してから元凶として突き出せばいいのでは？」

「しかしC P — Oにでも嗅ぎ付けられればこの国は」

「あら……呼ばれたかしら？」

そう言つて窓から入つて窓枠に腰掛けたステューシー。

面識はあるようで、彼らの空気が凍る。

「ふーん……このくらい、まだ私が何か行動を起こす程ではない——ただ彼を捕縛すれば終わるはずなのだけど、随分動揺しているのですね？ この国には何か政府への隠し事があつたりします？ 彼の提案に乗ることで、それが露見することをこそ恐れているのでは？」 800年前にマリージョア移住を拒んだ、ネフェルタリ家の国王様？」
ステューシーは微笑を浮かべているが、あれは逃げ道を塞いで獲物をじわじわと追い詰めるハンターの目。

いきなり王宮内に侵入者が入ってくれば動揺くらいして当然だろうが、カマをかけているな。

コブラ王の反応を見る限り、あながち的外れでもなさそうだが。さうらつと重要なことを言われた気がする。

「あまり標的以外を脅すなよ」

「ごめんなさいね？ つい癖で（あなたにも内緒にしていたんだけど、まったく驚かないのね。反応見たかったのに……残念）」

言いながらこちらに歩いて来て——流れる動作でオレの膝に横向きに座つた。

「はい標的捕捉」

「久しぶり。元気？ 来ていたんだな」

「今元気になったわ。アラバスタ王国で動いていると聞いて、息抜きに飛んできました」

首の後ろに手を回されながら、会話をする。

「……は？」

パニックになる余裕すらなく、完全にフリーズする2人。

理解の及ばない光景を目にしたらしい。

意図したことではないが、オレにとってステューシーが来たのはプラス。可哀想になってきた。

「あら？ どうかなきいました？」

「いや、お知り合いなのですか？ ——まさか親子」

「あアン？」

綺麗な顔に青筋が立つ。

「何でもありません！ すんませんツしたア！」

勢いよく頭を下げる。

今のはイガラムさんが悪い。

まあオレも相手が敵なら、言われたくないことをあえて指摘して心を抉るくらいするが。

「こない女を捕まえてそれはないだろう。姉弟ならともかく」

「本当、失礼しちゃうわ」

「（いや、その女はウン十年前からマリージョアで見かけていたんだが……）」

ステューシーが不満そうに頬を膨らませながら寄り掛かってきて、オレの顔に当たる。

「私は在野の個人として規格外の戦力とコネクションを保有するこの男の監視の任を担っています。色狂いの若造を誑かすくらい朝飯前、会えば猿のように腰を振ってくる……という設定で上に報告していますが、実際はこの方の部下です」

「元々海軍でもオレの手の早さは話題に上がっている。疑う者はいないだろうよ」

何より、ハニートラップを仕掛けているだけと言ってしまえば、それを否定する手段は——なくもないが、こいつ相手には難しい。

「その男の目的を知りながら協力している？ CP—Oが？」

「ええ。これは裏切りでしょうが、私は現在の情勢で今まで通りの世界政府であり続けても、全員纏めて緩やかに衰退するだけと判断しました。改革が必要です」

「現在話題に上がり始めている革命軍。彼らが動いているのも理由がある。政府が変わらない限り、革命軍がなくなったとしてもまた反政府組織は現れ、同じことの繰り返しでしょう。そして、1人で世界を変えるなど不可能」

「……それで、お前に一体何のメリットがある？」

やはりそこが気になるのか。

見聞色の話もしておいた方が理解されやすいだろうが——この点魚人島はオトヒメ様がいたので話が早かった。

まあネプチューン様は賛成でも、オトヒメ様はまず対話を試みてからというスタンスだが。オレは不可能だと思うが、あの人はそれでいい。

「オレの旅の目的は話しましたね？」

「作物の収集か。それが何の関係がある？」

「ただ集めるだけではなく、当然食べるのが目的。食事を楽しむには、気がかりや不安がないのが好ましい——要するに、今の世界では心の底から美味しい飯を味わえず、目障りだから変えたいんだ」

どんな美味しい料理を食べても、今この瞬間餓死している人間がいる、虐げられる人がいる——そういうことがふとした瞬間頭をよぎると飯が不味くなる。

いやウチの人間が作ってくれる料理やおかしは非常に美味しいが。問題はオレの主観の方にあるだけで。

「そ、それだけなのか？」

「あなたなら理解してくれると思ったが……『国とは人』——あなたの思想だと聞いた。では国が集まった世界政府は？ 人ではないのか？」

「何故今日会ったばかりでこの話を持ちかけた。まずは私を知ってからの方が」

「あなたは良い人だから」

段々とこちらの話に耳を傾け始めている。

だと思つた。出来るはずがないと言つていたが、可能性を否定しただけで、改革自体を否定しなかった。

天上金が原因で飢餓により滅んだ国の例もある。

この人が今の世界政府の在り方になんら疑問を持っていないとは思えない。

「……何？」

「あなたのことは会う前から国民達から聞いていた。そして実際に会つてみてその通りだと判断した」

最初からこれが目的だったので、準備自体はしてきている。

例えばユバで聞いた。

枯れた村の住人を一時ここアルバーナで受け入れていたらしい。自分達の生活費を削つて。

そこまでの王族はそういないはずだ。そんな国ばかりなら革命軍は出来ていない。

「時間は有限、オレは自分が生きている間に世界を変えるつもりだ。さつき話したことは一番まともな方法だが準備には時間がかかる。あなたの賛同が得られないなら、他の人間にも受け入れられないだろう。だったら時間の無駄だ。別の、少し強硬な方法に変更する」

「——すぐに決められることではない」

ここまで来ればオチたも同然。

提案に乗る方に傾いている。

「別に今すぐ実行して欲しいわけじゃない。こちらの準備が終われば乗ってくれるならそれでいい。4年後かもしれないし、8年後かもしれない。実行前に発覚すれば迷わずオレを突き出して欲しい。こつちでなんとかするから」

まるで譲歩しているようだが、言葉通り最初からこれが目的。というか今すぐなんて不可能だ。

「ああそうだ。港町でのこと——あれはこの話をあなたとするための行動なので、気にする必要なし。もう目的は達成した」

言葉にウソはないが、我ながら胡散臭い。

オレが向こうの立場なら、それだけのはずがないと間違いなく疑う。どんな裏があるのか考える。相手によつては読心の見聞色も使う。

「いや、そういうわけには」

……やっぱ良い人だな。

「気が済まないなら他の奴に何か聞いて下さい——ところでどうしたんだ？」

オレの話が纏まり、ウイリーの話を通りやすくなるようお膳立ても済ませ、視線を下げる。

ステューシーが途中から喋らず、オレの体に耳を当てて目を閉じていた。

なのでオレの緊張をほぐすため、ずっと抱きしめていた。抱き枕状態。

「(今気付いたがすごいイチャついてる……)」

「いえ、正直あなたを損得并勘定の値引き交渉ド下手人間と見縊みくびっていたわ」

「オレの中では損得の釣り合いは取れている」

値引き交渉は……する必要を感じない。

「そのようね。途中から2人も私なんて眼中になかったわよ？ 最初はあれほど警戒していたのに。やることないからずっとあなたの心音を聞いてたわ。ふふつ、本当に年上に甘えられるのが好きね(心音はウソをつかない。ナメてたわね。この人は普段やらないだけで交渉出来るわ)」

なるほど。オレをアメ役に、自分はムチ役をやって、要求を通しやすくしようとしていたわけだ。

「お前が来てくれたことは無意味ではないだろう。少なくともオレは、おかげでリラックス出来た」

「……私は最初、あなたを自分好みに育てて困うつもりだったのだけ

ど」

「?!」

「ああ、知ってる」

「?!」

見聞色で知った時は普通にドン引きだった。

「部下になった後も主導権は握るつもりだったのに、問題ばかり引き寄せるあなたに振り回されるのも、それはそれで快感になってしまったじゃない。どうしてくれるの?」

「オレは別に困らない」

「私が情報を止めないと、あなたは今頃政府の抹殺対象よ?」

「自分の命を懸けていない奴に、他人の命を預かる資格はない。もつともオレはしぶといので、簡単に死ぬ気はないが」

「へ、変態だアーツ!」

主従揃ってステューシーを指差して絶叫した。

「いや違うのよ? この人が私の想像を超えてくるのが悪いのよ。5年前につまみ食いした時は予想だにできなかったわ」

「変態の上塗り! ショタコンではないか!」

「何が違うのかまったくわからない! 5年前って完全に犯罪!」

「いやほら私CPOだし。それに彼は非加盟国民だから、NOT犯罪。YES合法ショタ」

「なおタチ悪いわ! どちらか言うと脱法ショタだわ!」

オレが法ストレスの行動してるみたいだな。

もうショタではないし、証拠がないだけでアウトなことはしているが。元違法ショタ。

「ステューシーは擬態出来る変態だから問題ない。やる時はやるし、周りには無害。オレは受け入れているし、男女が揃うと誰だって変態になるさ」

「人類総変態理論!」

この国はツツコミ過多だな。

うーん……これが原因でこの国出禁になったりしないよな?

“リトルガーデン”

アラバスタの探索や会談等のオレ達の用も終わり、リリーが持つ父親のビブルカードの示す方角が安定してきたので、捜索に行くことになった。

「私以外に空中戦が出来る方と手合わせが出来るのは新鮮でした」

「それはオレも同じだ。【月歩】^{ゲッポウ}より、というかオレと同等のスピードで自在に飛行出来る相手と戦えるのは貴重だった」

ボルサリーノさんはオレより速いけど、MAXスピードの動きが自在とはいかず、直線だからなあ。

それを補うため【八咫鏡】^{やたのかがみ}を出して自身を反射させる。そこら中に複数展開して乱反射させて来ることも。

ペルさんのトリトリの実モデル “隼”^{ファルコン} ——ファルコンの名を冠する能力だけあって凄まじい飛翔速度。素でマツハを越えたスピードで飛べる。

オレは武装色を使用しなければ音速越えは体に負担がかかるが、そこは丈夫な動物系^{ソオン}。なんともないようだ。

更に特筆すべきはその人獣型。

トリトリの能力であれば腕が翼になるのが普通らしいのだが、腕をハヤブサの足のように変化させ翼も生やす変身も可能なようだ。変身能力を使いこなしている証拠だろう。これにより飛行しながら剣を振るうことも可能。

「その腕前で剣士でないと言うのは何かの冗談ではないか？」

チャカさんのイヌイヌの実モデル “ジャツカル” のジャンプ力は、王宮の最上階まで一息に跳べる程。

その脚力による突進で、すれ違いざまに自慢の剣術で何度も切り裂くことを得意としている。少し教えれば【月歩】^{ゲッポウ}も出来るようになった。

六式と動物は相性が良いな。この辺りが動物系が迫撃において最強の種と言われる所以。広範囲な破壊力には欠けることが多いが、実によつては人並み外れて巨大化出来るものもある。

「鞭の方が得意だ。それに剣も持たずに剣士とは言えんだろう。オレは海兵ではないが、海軍に出入りして剣術や砲術等の戦闘技術は習っている。他にも人の技を真似たりオレに合うようアレンジしただけだ」

剣術は鞭や足等で、それ以外は【R R】の操作等で活かしている。「彼のあれは謙遜ですか？」

「いやア、あいつは今程度の実力を自分の上限としてねエだけだな。まだまだ強くなるって自信の現れで、むしろ謙遜とはかけ離れてる」
「あと、弟子ら自身に自分の限界を勝手に作らず、望むがままにどこまでも強くなって欲しいからやな」

イガラムさんとダディやウィリーが話している。

「……なんで仲良くなつてんだ？」

「彼らは体育会系だからね——拳で語り合つたんじゃない？」

「おれはあの2人に変身のこと少し教えてもらった」

「良かったね」

レベッカ達もビビと仲良くなつてたし、時間があれば仲良くもなるだろう。

港外れに泊めたR R号に戻り、ヨコヅナ達と合流。

クンフージュゴン達は毎度アラバスタ滞在中は修行をつける約束。町の人とは話を付けている。

別れを告げてリリーの持つビブルカードに従い出航した。

そして数日後、ジャングルのような島に着いた。

いくつか火山もあり、バカみたいにデカイ生き物の骨がまるごと残っている。巨人族より大きい。

「強いとかではなく——いや強いのもあるが、サイズがデカイ気配が

いくつもあるな……海中にまで。パンズフライは現在人間サイズなのだったか？」

「そのはずだつぺよ」

「とりあえず上陸を——何か降ってきた」

これは……人。数は100以上。

ノックアップストリーム
突き上げる海流にでも飛ばされたか？

「リリー。ミニミニの能力を今すぐ解除したい。気絶させてもいいか？」

「んく……まつ、父^とつちゃんがいるならそれですぐわかるだな。いっぺよ」

「ありがとう」

ギンツ!!!

全力の覇王色をリリーに放つ。

本人に抗う気がないので、一瞬で意識を刈り取った。

前のめりに倒れる体を受け止める。

「むにやむにや……まだ食べ足りねエつぺよ。おかわりい……」

「なんて早い寝言ササ……」

何故睡眠では能力が解除されず、気絶では解除出来るのか？

スモーカーさんの煙しかり、姉さんのオートロックしかり、能力者の意志に関わらず、能力が発動するケースがある。これは暴走とはまた違う。

そのことから、悪魔の実際の意志がそうしているという仮説を組み立て、更に宿主の気絶によって悪魔の実際の悪魔もまた意識を失い、それにより解除されるのでは——？

と、オレは勝手に考えているが、何にせよ、これでミニミニの能力がすべて一気に解ける。それさえ分かれば理屈は何でもいい。

今まで回収してきた海賊船が元のサイズに戻るので、それを原料とする。

リリーの体も直に元に戻るので地面に。

「キャロル、リリーを起こしてくれ」

「はいは〜い」

適当に返事をしたキャロルが夢の中のリリーを起こす。

ネムネムの能力で眠らせているわけではなくとも出来ること。

「さて——現れる。」レイド・ラフターズ【R R —アーセナル・ファルコン】

船数隻分を使用し、巨大なハヤブサを作り出す。

その背を展開し、胴体部分の格納庫に収容されたレイド・ラフターズ【R R】達を繰

り出し、「アーセナル・ファルコン」自身も飛翔させる。

「大将『赤犬』に呼ばれた時に飛ばしているやつか」

「スーパーなデカさ……ドンドン一度に能力で変化させる範囲が広がってるなア」

これで落ちてくる人達を——

ドオオ……ン!!!

中央の火山が噴火したようだ。

周囲にマグマが流れている。

タイミングが悪い。サカズキさんが話題に出たからか？

「ぬあア!!!」

「せりやあ!!!」

ガキイン!!!

大音量と金属音が響く。

今度はなんだ？ 見ると、巨人族が2人戦っている。

それぞれ左手に盾を、右手に剣と斧を持ち、幾度も激突。

ああ——ここがリトルガーデンか。いたよ、巨人。じゃあ残りのデカイ気配は全部恐竜か。

1人は丸い体で口の周りに髭を生やし、鬼のような角の付いた兜。もう1人は細身で、腰まで届く長い髭を生やしている。

髭が伸び歳を重ねたことが窺えるが、顔を手配書で見た。巨兵海賊団の2人のお頭、『赤鬼のブロギー』と『青鬼のドリー』。今なおエルバフの巨人族にとって伝説的存在らしい。

だが今はそれよりも優先事項。

落下中の人々を空中でキャッチ。

火山周辺に着地してはダメ。あの2人の決闘の周囲に下りてもアウト。この島の至る所にいる恐竜達に食われてもデッド。

複数の条件が付いてしまった。

「忙しくなるな。可及的速やかに人命救助だ。誰一人として死なせんぞ」

「なくんでその言葉で悪そうな顔なのよ。まったくこの子は……」

スカーレットに顔を両側から手で挟まれ弄られる。

「へふにはおおふつへいふほりははい別に顔を作っているつもりはない」

他の皆にも手伝ってもらおうとして、問題は巨人2人の決闘。

今まで90年以上やり合っているだろうに、ちよつとタンマは聞かんだらう。何事もなければいいが……。

☆☆☆☆☆

オレと【レイド・ラブターズR R】。

それにレイドスーツで飛行したレイジユとスカーレットにレベルカ。

更に巨人の姿に戻ったりリリーに、この島にて見つかったパンズフライにも手伝ってもらい、それぞれ出来ることをやって、地上の恐竜達や飛行するプテラノドンを牽制しながら、空から降ってきた人達は死なせることなく救助。

貝殻やら何やら、物もたくさん降ってきていた。

怪我を負っていたので、現在はウチの人間が診ている。戦闘で出来たと思われる傷があり、雷にでも打たれたように感電していた。

そして――

「ガババババ!! 何やらちよこちよここといと思ったら、珍しいものを見た!」

「ゲギヤギヤギヤギヤ!! あの島食いを撃退するとは、チビ人間なの
にやるじゃねエか!」

オレ達を握り潰せる大ききだった巨人が2人、リリーの能力で縮み、目の前で船から持ってきた酒を飲みながら笑っている。

島に留まらず、海に落ちそうになった人もいたのだが、その時海より浮上してきたのが島食い。島を食べるほどの巨大金魚。そのフン

もまた巨大で、記録が存在するものもあるとか。

おやつタイムだと言わんばかりに喜んで大口を開けていたので、覇王色にて威嚇しただけだ。撃退も何も無い。

島食いの存在とこの島の環境、記録が貯まるのが1年かかることを合わせ、リトルガーデンのことが外部に伝わり辛い理由だろう。

記録指針が指すこの航路2つ目の島だそうだが、ここを通ることになった人間の運は最悪だったという評価を下さざるを得ない。人骨が転がっている。

まあ危険がない航路などないだろうが。

ルイ・アーノートはどうしたんだろうな？ そのことは書かれていなかったが。

当時はいなかったのか。知っていればあんなインパクトのあるものを書かない理由はないだろう。

「ただデカいだけの金魚1匹、わざわざ戦うまでもない。そちらこそ大した集中力だ。そしてなんと苛烈な力と力のぶつかり合い。流石はエルバフの戦士。小さいことは気にせず、器が大きいな」

巨人族2人に返す。

何事もない、ということにはなかった。

この2人、決闘に入ってきた邪魔者を排除する——どころではない。両者共に目の前の相手以外眼中になかった。

人が戦っている間に蚊の存在を気にも留めはしないように、空を飛行するオレ達も、瓦礫と共に降ってくる人達にも、決闘中は無反応。

あんな攻撃を食らえば武装色でガードしようが、勢いで海に落ちるか地面にめり込む。躲すしかない。攻撃の余波が飛んできたりするのをこちらで回避して難を逃れた。人のいない島で戦ってくれていて本当に助かる。一般人には天災だ。

しばらく打ち合い、どちらも倒れ引き分けに終わった後でようやく周囲の存在に気付く。被害が出なくて良かった。

「久しぶりに良い酒が飲めた！」

「友の娘も無事見つかったし、今日は良き日だ！」

「リリーが世話になっただよ！ こいつは宝石の肉のステーキだ。皆

で食ってくれ！」

緑の髪に同色の立派な顎髭、リリーと同じメダルのようなピアスをした巨人族。

デカイフライパンを使い、火山の噴火口で肉を焼いていたパンズフライが戻ってきた。

「久しぶりの父とつちちゃんの天国料理だっぺ！」

リリーが涎を垂らしている。

無理もない。香ばしい匂いと肉汁が眩い輝きを放っており、普段肉を食わんオレでも腹が鳴る。

宝石ジュエルミートの肉とは、古代の食宝と呼ばれるすべての部位の味を兼ね備えた肉。

ヒレ肉のしつとりとした柔らかさ。

サーロインのきめ細かい霜降りと上品な脂の甘味。

時折顔を出す肩肉に近い赤身のしつとりした歯ぐたえと口いっばいに広がる旨味エキス。

食べる内にやめられなくなるレバーやハツの独特の癖など、全身の身の旨味を全て兼ね備えた最高の肉——らしい。

オレは肉をほとんど食わないので、どんな味かさっぱり想像がつかん。

2本の長い鼻と牙を持つ羽の生えた巨大マンモス——リーガルマンモスの体内のどこかに存在するそうだ。

人間サイズの彼女がリトルガーデンに生息していたリーガルマンモスの体内に入り、宝石ジュエルミートの肉のみを外科手術で取り出してきた。マンモスクンは今も元気に闊歩している。

こうすることで、時間ジュエルミートが経ち宝石の肉が体内に生成されれば、また食べられるのだそうだ。

「ではいただきます」

あまりにも美味しそうだったので、今年初めて肉を食べることになり——

「……はっ!? ハッはどっだっ?」

気付けば雲で囲まれた見知らぬ場所にいた。

「何故だ？ 新手の能力者の攻撃でも食らったか？」

「幻覚？ 空間転移？ それともキャロルの【幻夢境】ドリームランドのような、能力で出来た世界か？」

「何これ。噛む度に味が変わって美味しい……はっ!？」

背後からの声に振り返るとレイジュがいた。

「確かに美味しかった。肉を食べたのに、グロ映像のフラッシュユバツクがなかった。これは異常だ」

おかげで心の底から味だけを楽しめた。

食宝と呼ばれるだけのことはある。

声を出したことでレイジュもこちらに気付く。

何故かこちらを見る視線が少し鋭い。

「……肉を食べる度にそんなものを見ていたの？ 絶対そっちの方が異常よ。トリスタンには言った？」

「いや、こんなこと言うまでもなくないか？ 肉を食べなければいいだけだ」

「確かに秘密は作らないけど、これだもの……常識があるようでない。医者のトリスタンの苦勞を察するわ」

「わかった。後でトリスタンにも言っておく。心配かけた」

言いながら抱きしめる。

すっぽり腕の中に入りいい抱き心地。

「ぐ、ぐへへ〜♡」

お姫様が、というか女子が出しちやいけない声が出てるぞ。別にいいけど。

それにしても、結局ここはどこだろう？

「……レイジュ？」

また新たな声が聞こえる。

そちらを見ると、いるはずのない人がいた。

「……おいレイジュ。あの人を見てくれ」

トリップ気味で胸に顔を擦り付けているレイジュの肩を軽く叩く。

「私がいるのに他の女が気になるの……？」

「いや、そういうことではなく——見た方が早い」

膨れるレイジュの顔をオレの体ごと方向転換。

「今の私はあなた以外に興味が……おか、おかか、お母様!？」

レイジュの顔が急速に赤く染まる。それでも離れない。いつもなら畳みかけるところだが、

「ウチの娘が知らない人とめつちやイチャついてる……何これ……」

オレ達の視線の先には、写真で見たヴィンスモーク・ソラ——レイジュ達の母親がいた。

レイジュとよく似た金髪の女性で、眉毛がグルグルしていない。

そして、その頭上には天使のような輪っかが。

ああそうか……あまりの美味さに昇天してしまったか。

恐るべきはパンズフライ。新世界一の海賊料理人の名は伊達では

——む？ 頭上の輪っか？

「ロゼ、私と一緒に閻魔を倒しに行きましょう。物申すわ。サンジあの子を見つけていないのに、死ねない。子供だってまだなのに」

途中までは同じ考えに至ったようだが、テンパっていた分思考が乱れているな。

「それには同感だ。オレもまだ死ぬ気はない。だが落ち着け。まずはオレの方を見てくれ」

「？ 今日カッコいいわよ？」

「お前もいつもきれいだ。だがそうじゃない。頭上だ」

自分の頭上を指差す。

「いつも通りスゴイ髪型——ああ、そういうこと。輪っかがないわ」
話が早くて助かる。

「お前の頭にもない。つまりこれが天国料理たる所以だろう。リリーは何度も食べているし、おそらく一時的なものだ」

「あの人スゴイ料理人ね……」
まったくだ。

走馬灯——は少し違うか。臨死体験みたいなものだろう。

天国料理という名前から、もっと早く気付いてもよかった。オレが地獄に行かないはずがない。

「惚気は終わった？ 置いてけぼりにして、悲しいわ。昔は私にベツ

タリだったのに……」

ソラさんが不貞腐れていた。

レイジュと2人で宥めながら、ここに来た経緯を話し、ジェルマのことも伝える。

「そう……あの子達に感情が。ありがとう、ロゼくん。あの人のことも含めて」

「遅くなり——あなたの生前に間に合わず、申し訳ありません」

「ふふつ、まだ若いのに1人で何でもかんでもは出来ないわよ。未練はない——と言えばウソになるわね。サンジのことを聞けば余計に。でも私が出来なかったことを、あなたはやってくれたわ」

「いつかここにサンジを連れて来るわ。イチジ達も」

「会いたいなあ……あつ。でもジャッジあの人はサンジが許すまでは、絶ッ対に連れて来ないでね？」

「う、うん」

顔は笑っているが目が笑っていない……相当頭に来ているようだ。

レイジュがその笑顔の凄味に押されている。

「それよりも……こっちの彼の話を聞かせてよ！ さつき顔を褒めてたけど、もしかして、レイジュって面食い？」

「ち、違うわよ！ 確かに顔も好きだけど……」

ソラさんが意気揚々とガールズトークをレイジュとしようとしている。

その話題はオレが気マズイヤつ。

「どちらかというとおレの方が面食い。娘のかわいい話、興味ないですか、お義母さん？」

「聞かせてー！」

「ちよっ!？」

なので、早々に話題を変えさせてもらった。

そういう話は親子水入らず、オレがいない時にやってくれ。

「その時……レイジュが……本当に……」

「あらあら……この子は……ということがあつて……」

その後、ソラさんとレイジュについて語り合った。

母親の子供を自慢したがる習性は把握済みである。

「もう、やめて……うれ死ぬ……」

レイジュが出来上がった頃、オレ達の体が透け始めた。

「あら、時間切れかしら？　また来てね、レイジュ。ロゼくんも」

「うん……」

「オレは次は辞退するので次の次くらいに。さようなら」

そうして、意識が途絶えた。

「あつ、起きました？」

目を開けると、トリスタンに膝枕されていた。

いい御身分だな、オレ。

何やら虫がいたので霸王色で一網打尽にしながら身を起こす。

フラツシユバックのことを伝え、キャロルにもネムネムの能力で協力してもらい治療することになった後、話を聞くと、何人かが食べてしばらくすると倒れたらしい。傍から見ると食中毒だな。

トリスタンは毛の生えた動物の肉は食べないミンク族なのでジュエルミート宝石の肉は食べなかったが、野菜は食べたはずだが……。

他にウチの者で食べたのに起きたままだったのは、ガルドア、グラント、フランキー、ヨコヅナ。

パンツフライに直接尋ねると、あの世に会いたい人間がいる者だけ意識が途絶えるのだそうだ。

「お母様……！　ドレスローザが……！」

「おばあちゃん……」

「ああルイス……」

「ママ……」

「母さん、ゴメン……アデルを、守れな……」

「お父さん……？」

天国組は故人と会っているようで、寝言を呟いている。

フランキーは巨人族2人と意気投合して酒盛り中。お前は巨人族と気が合うと思っていたよ。

しばらくするとウチの人間が戻ってきた。

メイブルの様子が少々おかしいが、何かあったのだろうか。言いたくなったら言うだろう。

落ちてきた何人かも目を覚ましたので聞いてみると、空島の住人だったらしい。

まだ恐怖が残っている。空島から長時間落下すれば無理もないか。

「空島の人は羽が生えていたんだな。まあミルクティーでも飲んで、落ち着いたら詳しい話を聞かせてくれ」

「もうちよつと驚けよ。羽だぞ羽」

「ついこの前アラバスタで見ただろ。それにリーガルマンモスにも生えている」

リーガルマンモスも空から来た可能性があるか？

「能力者に野生動物じゃないですか」

シユライヤはともかく、リスのミンク族のトリスタンが羽くらい気にするなよ。

「まあ、一応驚いたぞ？ 天使かと思った」

「あら？ もしかして私達の前で別の女を口説いてる？」

「よく見ろ。男だ」

クモダスさんというらしい。

「男もいけるでゲソ？」

「無理です。マジで無理です」

レイジュとメイブルに返す。

空から羽の生えた人が落ちてきたら天使を連想するだろう。

続けて話を聞くと、神を名乗るエネルギーという男をリーダーとした武装宗教集団が、トリでもないのに人が空に住むのはおかしいからと、大量の雷を落とし空島を消滅させたいらしい。武力で貝ダイアルという特殊な効果を持つ貝殻を、その中でも特に貴重な物を回収した後で。月に行くのが目的だそうだ。ちなみにそいつら自身も同じ空島で育った。

うーんサイコ集団。おかしいのはお前らの頭だ。神を自称する連中はどいつもこいつも……。

戦えない者は船で別の空島へと逃げたが、最後まで戦っていた者が

落ちてきた。

僧正と呼ばれる空の戦士が特に奮戦していたそうだが、落ちてきた中にはいない。『捕まったか殺されたか、雲流しにされたか……』と、彼らは予想し嘆いている。

見た所彼らも見聞色は使えるようだし、そのエネルギーのレベルも前半の海ではかなり高いことが窺えるな。

上空に「レイド・ラフターズR R」を飛ばしてみたが、あつたという空島は影も形もなく、誰もいなかった。これでは過去視で探りようもない。

「……正直、目を覚ました時は捕らえられたと思いました。あなたの強い気配がエネルギーを連想して……」

「オレかよ」

ヒモなしバンジーをしたからではなかったか。

「行く所がないならウチの船に乗るか？ 元々場所的な余裕はあるし、どこか永住したい場所が出来たなら好きに降りていい」

「恩に着ます」

こうしてまた船員が増えた。一気に100名ほど。

人以外の落ちてきた回収物を持ち主が誰か特定していると、妙な物が目に入った。

「何だこれ？」

手に取りながら聞く。

刀の鏢と柄しかなく、頭の部分に丸いものが付いている。

「それは鉄雲を蓄えた刀。扱うのが難しい玄人好みの武器ですが、刀身がある時は鞭、ある時は盾と、状況に応じて自由に変えられるのが特徴です。空島の環境でなければ雲が消えてしまうようですが……」

「へえ……この地上では使えるように出来ないのか？」

正直欲しい。

鞭を扱うオレにこの上なく合っている気がする。

「要は地上の環境に適応した加工雲を用意出来ればいいので、材料があれば一時的な物なら……元々人の手で作ったものですから。我々の住んでいたビルカでは、ミルキータイアル雲 貝に加工雲を蓄え利用する戦闘技術が確立していました。強い戦士は大抵天候科学や自分の扱う加工雲

に精通しています」
期待しておこう。

他にも玉の形にして中に色々なトラップ等を仕込んだびっくり雲。細く丈夫な性質の紐雲。沼のように抜け出せなくなる沼雲等があるらしい。

それ以外には戦闘用の物は少ないものの、生活で利用されていた貝ダイアルがあつた。

驚きなのはその収納容量。明らかに貝殻の体積を越えている。

手で持てるサイズの水ウォーターダイアル。貝から30分間水が出続けた。それも軽い。どう考えてもおかしい。

だけどこれは便利だ。水の持ち運びが楽になるので、飲み水はもちろん魚人柔術用に大量の水を携帯出来る。

「ふふっ。ダイアル 貝の実物を見たのは初めてだけど、その原理は我々ジェルマが数百年前にすでに解明しているわ。何を隠そう、ダイアル 貝の原理を科学に昇華し、加速装置や浮遊装置など、レイドスーツにも取り込まれているのだから」

なんでも貝殻に入る時に分子レベルで分解し、出す時に再構築しているのだそうだ。この貝すごいな。

レイジュが得意気に解説してくれた。

「この衝撃インパクトダイアル 貝のシステムを解明して、防具としてレイドスーツに取り込めないか？」

「そういうやりたいことを実現するために科学はあるのよ」

母親に会ったからか絶好調だな。

衝撃インパクトダイアル 貝は衝撃を蓄える性質を持つ。防具にいい。

放出すると反動があるようだが、元々普通に殴った方が早い。試したがそつちの方が威力があつた。

絶滅種の排除リジエクトダイアル 貝はその10倍の威力だそうだが、反動で死にかねないらしい。

スモーカーさんみたいな自然ロギアの能力者なら、反動関係なく連発出来そうだな。

音トーンダイアル 貝なんて、キャロルの演奏を吸い込んでネムネムの能力を無力

化出来ることがわかった。

風 貝は酸素ボンベ代わりに使えそうだし、戦闘用の貝ダイアルでなくとも使い方次第で化けそうだな。

☆☆☆☆☆

グランドライン
偉大なる航路ジャヤ周辺より上空1万メートル。

積せきていうん帝雲——空高く積み上げられた雲——の表面にある空島、スカイピア。

代々“神”と呼ばれる首長を据え、遙か昔より青海せいかい——空島における1万メートル下の通常の海の呼称——の一部の人間にのみ知られ存在していた。

約400年前、突如として雲の海、白々海はくはくかいに現れた、本来空島に存在しない、島ほど巨大な土——大地ヴァース。

当時の“神”率いる神隊はこれを武力で制圧し、元々大地ヴァースに住んでいた先住民であるシャンディアを追い出し、神の島アツバーヤードと名付け“神”の居住地とした。

それ以来、スカイピアは大地ヴァースの恩恵を確保するため、シャンディアは祖先の故郷を奪還するため、今なお続く戦いを繰り返してきた。

その“神”が住まう神の島アツバーヤードに迫り来る50名以上の集団。
つい先日、遙か南東の空島、ビル力を滅ぼした勢力である。

「ヤハハハ！ あれが私が還るべき限りない大地への足掛かり！ 何とも荘厳ではないか——一時とはいえ私が住むにふさわしい！」
高笑いしながらそう言うのは、“神ゴッド・エネルギー”。

パンチパーマの頭に布製キャップをかぶり、太い眉毛と長い福耳。背には雷神のような太鼓が付いており、空島では珍しい電気伝導率の高い黄金製の棍棒、“のの様棒”を持つ。

この軍団の長で、首長としての“神”ではなく、そのままの意味で神を自称している。

数ある悪魔の実の中でも無敵と謳われる能力の1つ、自然系ゴロゴ

口の実の雷人間。

「ほっほほう♪ 所々で戦闘の気配がするなー」

玉のような丸っこい体格で、笑いながら奇妙な踊りを踊る長髪のサトリ。

「欲するがままに振る舞うから争いが生まれ、何も得ぬまま儂き命を散らせる……哀しいなア——最初からみんな死ねばいい」

嘆きながら物騒なことを呟くのは、タンクトップを着用し、鋭い突起のあるサングラスをかけている、坊主頭のオーム。

傍らには二足歩行が可能なよう躡けられた、オームの巨大な愛犬ホーリー。

「下らん。『神・エネルギー』の前では……すべて無力だ！」

「おい、下唇を噛んだままだ。貴様いい加減その癖を直せ、うつとおしい」

ゴーグル付きのパイロットキャップをかぶる、尖った髭のシユラが注意する。

口内に炎を蓄える炎 貝を含んだ三丈鳥——愛鳥フザの巨大な背に乗っている。

「はっ、うっかりー！」

蜘蛛の足のような髪形をしている、下唇を噛んだまま話す等うっかり屋のゲダツ。

いずれも曲者揃いの四神官がエネルギーの後を続き、その後ろに神兵長のヤマと、サトリの三つ子の兄弟で副神兵長のホトリとコトリ。

ビル力で回収したスカイピアには存在しない貴重種——斬撃を蓄え放出する斬撃 貝で武装した神兵達が続く。

エネルギー以外は皆、その背から羽が生えている。

これもまたビル力で回収した200個を超える絶滅種噴風 貝——気体を蓄えて風として噴出する風 貝の数倍の放出力を持つそれを利用して、遠くここまで飛行してきた。

今は徒歩である。

「ふむ。どうやら私の地で暴れている不屈き者がいるようだな」

自分も侵略者でありながらこの言葉。

すでに我が物顔で所有権を主張する神理論を展開している。

「——残念だけどオ、今アここから先は通行止めだよオ。そういう命令でねエ。なアくんでわっしがこんなことオ……だからア、観光なら他所でやってねエ？」

そう言つて立ち塞がるのは、間延びした口調の男。

ストライプ柄のグレースーツを着用し、テンガロンハットを被りタバコを吸っている。

空島では知る者はいないが、青海では海賊達から恐れられる海軍本部最高戦力。

大将「黄猿」、ボルサリーノの姿があった。

その周りには、何名かの神隊の兵——神兵と、シャンディアの人間が倒れている。

「なんだこいつ——青海人？ いつからいた？」

疑問に思いながら、神が出るまでもないと、神官達が我先にと応戦しようとする。

「〔天岩戸〕オ」

引き返す気配がなく、前に出てきた四神官の内1人に、ボルサリーノが狙いを定める。

「右足上段の蹴」

ドゴオン!!

言い切る前に顔面に蹴りが入り、そのままレーザーを放射。

周囲に爆発が引き起こる。

「はい、アタリだよオ。関係なかったみたいだし、正解のご褒美もないけどオ……今のわっしは覇気が使えないからア、この空島じゃあ攻撃が読まれ放題で困るねエ」

サトリは四神官の中でも、特に心網——相手の動き等を読む、青海では見聞色の覇気と呼ばれる力——を多用する戦法の実力者だが、文字通り光の速さで一蹴された。

如何に相手の動きを先読み出来ようが、その手袋に衝撃を蓄える

インパクトダイアル
衝撃 貝を仕込んでいようが、光速で動くピカピカの実の能力のスピードに対応する動きが出来なければ無意味。

「(こいつは強い!!)」

それを見て、三神官の評価が一致。

「まくた全員倒すパターンかい……」

面倒そうに呟く男に、残りの神官達が一齐に襲い掛かる。

アイゼンウィツプ
「鉄の鞭」!

オームの柄頭が大きな球状をした刀。

重量は雲で硬度は鉄の鉄雲をチャージした雲 貝を仕込んでおり、そこから鉄雲の刀身を鞭のように伸ばし、ボルサリーノの両足を切断。

ヒートジャベリン
「熱の槍」!

シユラの持つ刃先に熱を蓄える熱 貝を仕込んだ槍の一撃。

高熱を発しながら頭部を横から貫通。

「ジェットパンチ」!

肘に仕込んだ噴風貝の推進力を利用し、ゲダツが高速で腹を殴打。

噴風貝の反動で、ゲダツ自身の服の肘部分が破ける。

3人の神官の攻撃がほぼ同時に炸裂。

それぞれの動きを心網で把握した上での連携攻撃。

互いに自分こそが「神・エネルギー」に次ぐ実力と自負して日々競い

合い、特に仲が良いわけではない神官達も、サトリを瞬殺したこの強敵の前に珍しく協力。

これは「神・エネルギー」との親善——否、神前試合の時以外ありえぬ

ことである。

「ん……効くねエ」

だが、その言葉とは裏腹に、平然とボルサリーノが直立している。

3つの攻撃はすべて体を素通りし、完全にノーダメージ。

「八尺瓊勾玉」ア

ピュピュン!!!

空中に移動し、両手の指で作った円から無数の光の弾丸を、雨のように「神・エネルギー」の軍団へと発射するボルサリーノ。

「1億V放電」！^{ヴァーリー}

バリバリバリツ!!!

エネルギーの手から高電圧の電撃が放たれ、レーザー群へと向かうが、相殺しきれなかった攻撃が神官達の体を貫き、自身もまた身を振り、紙一重で自分の体を掠める。

「自然か……私以外では初めて見るな。お前達は下がり神官達を起こし、あの地を攻める準備をしておけ」

エネルギーが狼狽える神兵達に命じ、倒れた四神官を連れて行かせる。

ゴロゴロの実を食べてから傷を負ったことのないその腕に、一筋の傷跡が初めて出来、血が滲む。

「ご名答オ、おめエも自然かア。^{ロギア}よく躲したねエ。だけどオ……通さねエツツツでンでしょうが。光の速さで蹴られたことはあるかい？」

サトリを一撃で戦闘不能にした、レーザーを伴う光速の蹴りがエネルギーに迫る。

「不届き。我は神なり」

傲岸不遜という概念が人の形をして歩いているのがこの男。

だがその口から出た尊大な言葉とは逆に、自分に傷を付けた事実から、類稀なる心網^{マントラ}と雷の能力を備えたことで驕りやすいエネルギーから油断が消失。

ドゴオン!!

エネルギーが生まれて初めて他人を警戒し、両者共に光と雷に姿を変えた足がぶつかる。

「神の裁き」！^{エル・トール}

ズゴオン!!!

エネルギーの腕が大きな雷へと変化し、ボルサリーノの上半身を横薙ぎに吹き飛ばし、雷鳴が轟く。

相手の恐怖心を煽り楽しむ嗜虐心を持つこの男が、遊び心一切なし。一撃目から全力の攻撃。

半身を失った体が地に倒れる。

ピカピカゴロゴロ
光と雷

光熱という重複する部分があるその2つの悪魔の実の能力は、実体のない自然の体^{ロギア}であっても、互いに干渉出来るようだ。

「今度は本当に効いたみたいだねエ〜。こいつア雷イ……ゴロゴロの実の能力者かなア〜？」

だが、消滅したボルサリーノの体が自然回復し、再び立ち上がる。

「(再生は自然の能力^{ロギア}で避けていたならばそれで説明がつくが、この男……おれでも思考が読めん) 貴様、本当に人間か？」

「鋭いねエ〜。お察しの通りイ、わっしはただの人形オ。疲労は感じずウ、たとえばえ全身が消滅しようがア、本体が勝手に治しちゃうよオ〜」
「——フザケた能力だ」

エネルギーの額に汗が伝う。

攻撃の先読みが出来ても心を読めないのは、そもそも心など持たぬ、コピーの能力で生み出された人形だから。

にも拘らず意志があるような言動をし、先読みは出来るのは、悪魔の実による異常の成せる業か。それとも悪魔の実に意志が存在する裏付けか。

「だからア、今の内に帰ってくれない？」

人形はコピーした人物の性格を反映し、周りに倒れている人間達も、殺せとは言われていないため全員息がある。これでも手加減しているようだ。今も遭遇時も、暗に逃げろと言っている。

だが命令には逆らえず、能力者に服従する。

『「黄猿」、その雷サマを逃がすな。目当ての物共を頂き次第、ついでにそいつもコピーしていく』

「……あく、もうダメみたいだねエ」

そしてたつた今、追加指令を本体のカメレオーネから受けた。

覚醒した能力で作りに出した人形が得た情報は、離れた場所にあるシャンディアが住む雲隠れの村を襲撃し、ドフラミンゴのイトイトの能力——【寄生系^{パラサイト}】を使用し、身体^{ダイアル}の自由を奪うことで情報収集と具の強奪中の本体にも伝わっている。

「はあ……互いに互いの攻撃は通用してもオ、おめエは見聞色で避けてエ、わっしは疲労がなく食事も不要で死なねエ体ア——不本意だけ

どオ、こつちの用が済むまでエ、何日だろうが付き合ってもらおうよオ
〜」

ボルサリーノが攻撃を食らったのはわざと。

心網マントラは心を乱すと使えない。なのであえて攻撃を受け、非現実的な再生を見せつけることで、相手にどう足掻こうが勝てないという絶望、無力感を与え、心を折ろうとしていた。

自然ロギアの能力者の常套手段——奇しくもエネルギー自身も好む手段を、そっくりそのまま返された形になる。

「(見聞色……？ 心網マントラのことか) 凶に乗るな。貴様の本体を探し当てればいいだけのこと」

だがそこは能力だけでなく心網マントラに絶対の自信を持つ // 神ゴッド・エネルギー。

自分が好むが故に相手の狙いを看破。

精神的動揺から刹那で立ち直り、打開策を見出す。

「出来るかなア〜？ それをわつしと戦いながらア。おめエは雷だろ
うがわつしは光イ……今まで自分より速い者と戦ったことがあるか
い？ 絶対ぜってエ逃がさないよオ〜」

この人形の役割は目的達成までの邪魔者の排除と足止め。

エネルギーは心網マントラに加えて雷の体で電波を読み取ることで会話を聞き、
神アッパイヤードの地を含むスカイピア全域、そこにいるすべての人間を網羅する
ことが出来る。

目の前の人形の本体を見つけ出し、雲を媒介に上から雷を落とす。

故郷のビルカのように足場ごと消滅させ、運良く生き残っても青海せいかい
——能力者の弱点に突き落とすことも可能。

「笑止——それが出来るから神なのだ。恐れを知らぬ人形とはいえ、
不敬が過ぎるぞ」

雲に溢れ無尽蔵に雷を放てるこの空島という領域テリトリで、自分に敵う
者などいない。

天より不可避の雷撃を落とし、生かすも殺すも自分次第。更にその
射程は姿を拝むことすら敵わない広範囲に及ぶ。

無敵の雷の能力とそれを使いこなすビルカの天候科学、更に島一つ

分を軽く覆う心網マントラを合わせ、神にふさわしい全知全能たりうる力。
「貴様の本体の誤算は神を相手にしているということ。私を青海人せいがいの
尺度で推し量れると思うな。逃がさんのは私の方だ！」

圧倒的な力の差に覚える絶望。すべての希望が絶たれる事は死と
同じ。死は生きとし生けるものすべてに平等に訪れる最大の恐怖。

人は恐怖の前に体が竦み、地にひれ伏し、本能的に天の神へと慈悲
を乞う。

故に、人に恐怖を与える自分こそが神なのだ。

だから神たる自分の在るべき場所、限りない大地フェアリーヴアース——天にて下界を
見下ろし、光り輝く月へと還る。

「随分と思いが上がった自信家だねエウ。じゃあ……ここらで挫折を
知ってもらおうかア。【天叢雲剣あまのむらぐも】オ」

ボルサリーノが作り出した光の剣をその手に持ち、エネルギーに切りか
かる。

相手がわざわざ作った武器。雷の体であっても無傷で済まないの
は、これまでのやり取りで把握済み。直接接触するのは危険と判断。

【雷治金ダロームパドリング】

バリバリ!!

心網マントラで攻撃を読み躲しながら、エネルギーもまた“のの様棒”に電熱を
流し込み、熔解させて三叉槍へと変形。

帯電させ高電熱スピアと化した“のの様棒”を振るい、ボルサリー
ノの光剣とぶつかる。

ドン!!

光速と雷速。悪魔の実の中でも最速候補の2つの激突。

人知を超えた天変地異を引き起こす、神々の如き戦いが始まった。

“ウイスキーピーク”

リトルガーデンでリリーを父、パンズフライと再会させ、親子共々これからもウチの船に乗ることになった。

飢えた人に料理を振る舞いたいならオレが食材と費用を出す。代わりに政府や海軍からは略奪せず、料理人なら料理の腕でぼったくつてやれと。天竜人からも。

「貝に興味があるか？」

フランキーとレイジユがクモダスから話を聞きながら、ダイアル貝を弄つて遊んでいる。

「まあ、実物を見るのは初めてだし」

「珍しい貝があるモンだ」

「たまに来る方からも、せいかい青海には生息していないと聞きましたね」

「形を変えたくなくなったら言ってくれ。能力で変形後戻す」

「あなたが一番メチャクチャです」

「人生はそういう驚きが続く。旅は自分の常識を壊す儀式のようなものだ」

「その内慣れるぜエ？」

ビルカという今はなき空島から降ってきた人達を含めて、今までより大所帯になった機甲旅団で出航準備を整える。

流石にそんな数の個室は用意していなかったが土地はあるので、フランキーが家屋を増設してくれることになった。今はオレが能力で仮宿を作っている。

「そうだ。これは決闘の予約だ」

言ってから、電伝虫と番号をドリーとプロギーに渡す。

「決闘の予約う？」

「ああ。あんた達はエルバフへのエターナルポース永久指針を賭けて、どちらかが死ぬまで決闘をしているわけだ。それについてはエルバフの掟なので口出ししない。決着ケリがついたなら連絡をくれ。死んだ方を蘇生させる」

間に合うかは……いや、間に合わせる。

「何イ？ おれ達アてめエらより寿命が長エ分、名誉ある死を望む」

「それがおれ達の誇りを汚すことだと、理解して言っているのか？」
2人の巨人にギロリと睨まれ殺気をぶつけられる。

海賊の殺気などもう浴び飽きた。

「承知の上で言っている。だから予約だ。連絡しないことは、臆病風に吹かれてオレの挑戦からエルバフに逃げたとみなす。文句があるなら2人がかりでかかってこい。そちらに誇りがある様に、こちらにも戦う理由がある。意見が分かれて互いに引けぬなら、決闘で決めるんだろう？」

郷に入れば郷に従え。

エルバフの掟に従った宣戦だ。

「そりゃあお前」

「今ここで始めてもいいってことだよなア？」

「そう言った」

しばし睨み合い、

「ガババババ!! 良いだろう! ロゼと言ったな、その挑戦受けてやる!」

「ゲギャギャギャ!! ブロギーを倒した後の楽しみが増えた!」

そう2人が笑った。

何がおかしいのやら……オレは今からでいいんだが。順番は守るが。

「何イ? 勝つのはおれだ!」

「ああん? やるのか貴様っ!!」

「オオ2戦目といくか? 叩き潰してやらア!!」

今度はまた2人でケンカし出した。

仲良いな。殺し合いなんてやめればいいのに。

「お頭2人によくあんな口聞けるだなあ」

「海賊に敬語は使わないようにしている」

「そういうこっちゃねエっぺよ……」

「それより幼馴染2人が殺し合いをしていると、苦勞するな」

「そういう村の掟だからな。仕方ねエだよ」

パンスフライがそう返してくる。

ウソつきめ。

「あつちが争うのかよ」

「なんの得もないことに命を懸けて首を突っ込んで……」

「ロゼは自分の思想で不殺を貫いているから、こういう衝突も起こりうるでゲソ」

「死にたくて自殺しようとしている人でも、『知るか』って殴って止めるタイプですよね」

出航準備を終え、このリトルガーデンの磁気を記録し、島を出発。
アラバスタで買った永久指針エターナルポースで偉大なる航路グランドラインを逆走。記録指針ログポースはまだ使ったことがないな。

そして見えてきた次の島。

デカイサボテンもどきが見える。

「大きいサボテン……またフルシャウトに来ちゃった？」

「いや……あれア全部墓標だな」

レベツカの疑問にダデイが答える。

「ようわかったなア」

オレもそこまではわからなかった。

植物の気配ではないことはわかったが。あれは岩だ。

「海賊だア、海賊が来たぞ!!」

「ようこそ歓迎の町、ウイスキーピークへ!!」

「海の勇者達に万歳!!」

近付くと島から歓声上がる。

海賊扱いされ、あろうことかそれを称たたえられた。

「コホッ……! 仏でもキレル暴言。不愉快極まる。バスターコールの許可を要請。すべて壊す」

「ストップストップ! 落ち着いてロゼ! あれは民間人だよ。たぶん」

「ていうか血を吐いてるササ……」

シルバー電伝虫を取りに行こうとしてガルドアに止められる。

見聞色を乱したか……ハンカチで口元を拭く。

それにしても、オレに対してなんと的確な罵詈雑言を浴びせてくれやがるんだこの島は。効果靨面だよ。

だが心を落ち着け探ると納得した。仲良くやれそうだ。

島にR R 号を泊めると、人に囲まれる。

「オホホホホ！ この巨大船——さぞや名のある海賊のスポンとお見受けします」

「ゲーロゲロゲロゲロ！ 是非お名前を」

代表格らしい2人、体中に7があしらわれた変わった服装の男と、カエルみたいな衣装の女が近付いてくる。

手に銃を持って。隠せよ。素直か。

というかもしかして、パンダマンやフランキーの恰好って普通？

「船長のロゼだ。だがオレ達は海賊ではない。賞金稼ぎだ」

バウンティハンター

そう告げると歓迎ムードは一変。

「おい、こいつら1人も知らねエ顔だぞ。そんな名前の賞金首聞いたことねエ。こんなデカイ船なのに」

「海賊旗を隠してるわけじゃねエようだな。じゃあいいや。はい解散」

「なんだア、また海賊じゃねエのか……デカイ船だと思って期待したのになア。つまんね」

「あんまりこの島に長居してくれるなよ。ペツ、シケてやがる……」

そう言っって手を叩き、捨て台詞と共に唾を吐き捨てながら、島民達は白けて去って行った。

「ふう、誤解が解けて良かった……！」

ほっと胸を撫で下ろす。

「すツげエ爽やかな笑顔で喜んでるだ……リアクションがおかしいだよ。あれっ？ もしかしておらがおかしいだか？」

「父とちゃんは何んもおかしくねエと思うっぺ」

「なあアニキ。これ怒る所だと思うんだけど、違うのか……？」

「落ち着け、こんなことで心を乱すな」

ピクピク腕を押さえ震えているグラントを宥める。

「さつき吐血したロゼが言えることではないわ。ブーメラン背中に
ブツ刺さってるわよ?」

「どうやらこの島はまるごと賞金稼バウンティハンターぎの町のようなのだ。要するに、意気揚々と偉大なる航路グランドラインに入ってきたカモを歓迎し油断させ騙し、海軍に突き出して稼ごうと思つたら、同業者でガツカリしたわけだ。だから賞金首が来ても島の人に譲るように」

この島の人達は大海賊時代に負けず、逞しく生きていくようだが、
だがこんなのに引つかかる危機管理能力のない海賊がいるのか?

「「ああ……なるほど」」

全員納得したようだ。

ああいう露骨なタイプは金銭で簡単に話が通るので都合がいい。

あちらの要望通り、この島での用はすぐに済みそうだ。

ここがウイスキーピーク。

道理で永久指針エターナルポースが安かつたわけだ。

「おれはちよつとあいつらと射撃勝負してくるわ」

「じゃあ私も」

「程々にな」

マスターソン親子が先程の2人の方に近付いて行く。

住民に話を聞きながら町を歩いていると、オレ達の他にも余所者が訪れているようで、腕試しにそこら中で決闘を行っているようだ。

せっかく人が集まっているのでそちらに向かう。

野次馬が集まる中、何人かが倒れている。

「グツナイベイビー……」

両手に金属バットを持ち王冠かぶった男とか。そこはヘルメットでは?

「カ・イ・リ・キ メリケン」ッ!」

ドゴオン!

筋肉質なシスターが、メリケンサックを装着した拳で地面にヒビを入れる。

どうやら躲されたようだ。

「アウ、パワフルじゃねエか!」

「女性でありながら大した怪力、本物の筋肉シスターがいるササ」

「九蛇クジヤではあれくらいで一般人」

「そんな逸般人より、本物のとはどういう意味ですか」

「あなたが似非筋肉シスターだからじゃない？」

「マザーです」

そこは譲らないのか。

「それにしても速いな。避けながら切った。峰打ちだが」

ジーパンポニテの彼女が鞘に刀を納めると、真・筋肉シスターが倒れた。

勝負ありだな。

「あの刀は『和道わどういちもんじ一文字』——あいつが東イーストブルーの海の『閃刀姫せんとうぎ』か」

スピードタイプの剣士とか。

あの刀は大業物21工の1本。刀工霜月コウ三郎が打った名刀の1つ。

「戦闘機？」

「ロボなのか？」

「字が違う」

片腕が不随らしい。

両腕であればどれほどの強さなのかと、海軍内で話題になっているという賞金稼ぎバウンティハンター。

他には東イーストブルーの海出身の、一度見たら忘れられないらしい大才カマ、
「荒野のベンサム」。

南サウスブルーの海出身の姑息さと卑劣さで有名な『闇金ギャルディーノ』。

西ウエストブルーの海出身の『殺し屋』の異名で恐れられるダズ・ボーンズ。カタギの人間の纏う雰囲気ではない所がオレに似ていると言われた。

解せん。

偉大なる航路グランドラインではクモを連想するクールビューティ『毒グモのザラ』が有名な賞金稼ぎバウンティハンターだそうだ。

観戦していると、侍ガールに目を付けられた。

誰が一番強いのか聞かれ、黙ってオレを指差す愉快的仲間達。射撃

勝負に勝って帰ってきたマスターソン親子を含めて。

まあ挑まれた決闘からは逃れられない。当然受ける。

「一心道場師範代、霜月くいな。参ります！」

こいつも霜月か。姓は初めて聞いた。

ワノ国が黄金の国と呼ばれていた頃、生涯無敗の“伝説の侍”霜月リユーマと同じだな。

「無流派、ただの賞金稼ぎ口ゼだ。よろしく」

「飛燕！」

刹那、くいなの方が動く。

上からの奇襲か。

宙を蹴り勢いをつけて切っ先が落ちてくる。

「珍しいな。【紙絵】」

肩があつた位置を刀が通過する。

優しい攻撃だ。脳天じゃないのか。

「東の海にいた人間が【月歩】を使うか……」

「場所が何か関係あるの？」

「新世界や風の帯を挟んだ北の海や西の海は、たまに四皇と海軍の小競り合いが起こるから、ああいう戦闘技術が一般に漏れることがあるのよ。それでも稀だけど」

そういうこと。

風も波もなく海王類の巣である風の帯だが、四皇や強い勢力を築く海賊にとっては障害にならない。新世界側の方が治安が悪い原因の一つ。

東の海と南の海では赤い土の大陸を挟んでいるから、そうそう見るものじゃない。

「人が空を飛んじやいけないかな？」

ズバンツ!!

着地し地を蹴りながら切りかかってくる。

うれしいねエ。峰打ちをする気はなくなったようだ。

「いや、構わん。オレも飛ぶから」

言いながら【カミソリ剃刀】で攻撃を避けて一気に空へと距離を取る。

「私以外に空を……」

【しかくひちよう死角飛鳥 マワシボーン舞鷲】！」

ビュオツ!!

足を改造しチェーンソーに変え、地上のくいなへと斬撃を放つ。

「能力者……え？（右からの攻撃？ どういうこと？）」

その攻撃が途中で三度カクンと折れ曲がり、左——くいなから見ても右横から迫って行く。

「性格悪ッ!?!」

ガキーン!!

言いながらくいなが攻撃を切り伏せる。

本来こんな技はない。

スマン、Tボーンさん。これが性格の曲がったオレのやり方だ。

しばらく、性格の悪いオレの攻撃が、真っ直ぐそうな性格のくいなを襲う。

「ふふふ、はははははははっ!! 避ける避けるオツ! いつまで持つかなア!?! 降参するなら今の内だぞオ!」

「こ、このオツ……!!」

高笑いを上げながら、ノリノリで慢心ムーブをするオレ。

苦渋の表情の美少女を喜々として攻める様は、完全に小悪党である。次の瞬間負けそう。

「ねえ、あれって……」

「ああ、わざとやな」

「あの人は、見聞色に関してはずでに怪物ですから。未来を読むレイさんの攻撃を、読心やただの先読みで対応するくらいには」

「これだけやられれば流石に慣れた! 貫った!」

オレの捻くれた攻撃網を掻い潜り、いざ邪知暴虐なる霸王口ゼを切

り伏せ、闇よ消え失せろと迫る白刃。

「果たしてそうかな？ 【五指銃^{ゴシガン} // 鷲掴み^{ニシヅメ}】」

ガキン!!

「(完全に見切られたツ!?)」

武装色を纏い硬化させた片手で真剣白刃取り。

そのまま刀にオレの覇気を流し、刃を丸く覆い硬化することで切れ味をなくした。今の状態では頑丈な棒だ。

本来は体を貫き心臓を握り潰す殺し技だが、武装色の覇気を刀身に纏っているとはいえ、^{わどういちもんじ}「和道一文字」には傷一つ付けられなかった。そこらの刀なら砕くんだが、流石は大業物。

「黒く変色する流桜^{りゅうおう}（お父様と同じ。私の流桜^{りゅうおう}が破られた……ツ）」
ワノ国での武装色の呼び方。やはり血縁か。

「珍しい呼称を知っているな？ だがまだ終わっていない」
ヒュンヒュン!

もう片方の手で鞭を出し、刀を持った腕ごとくいなな体を縛り上げる。

「これで捕まえた。【禁縛^{ロック}】」

鞭を能力で金属に変え、固定する。

これでもう刀は振れない。

「また知らない技を」

「ありやあヒナの技だ。ホント器用な奴だな」

「素直な良い太刀筋だ。だけどオレみたいな性格の曲がった奴と戦う時のため、搦め手との戦い方も学ぼうか。今までわざとオレの攻撃を読ませていた。慣れたんじゃない。慣らされたんだ」

見聞色を使ったフェイント。

わざと攻撃を読ませて、読ませない本命の攻撃で拘束。

今まで手の平で踊らされていた事実は、否応なく精神を揺さぶる。

「(最初から力押しで来られたら、私には何も出来なかったのに、それを言うために) ……完敗、だね」

「降参するか？ まだ戦うなら切り刻むが」
サレンダー

「私、負けず嫌いなんだ」

戦意は折れずか。

戦える間は戦うなこれは。

「負けてなお戦いたいならまた挑んで来い。いつでも何度でも受けて立つ」

「本当に挑むよ？ 私が勝つまで」

「構わん。【電撃】」
エレクトロ

バリバリツ!!

鞭に電撃を流し、気絶させた。

「切り刻みはしないけど、トドメは刺すのね……」

「キツチリ負けるまで止まらないよ、こいつは」

「戦士の目をしてたつぺよ」

「どちらかというどと武士かな？ トリスタン、左腕を診てやってくれ。

不随だそうだ」

「それ先に言ってくれませんか!?!」

プンプン怒りながらくいなを診断し始めるトリスタン。

言う前に勝負を申し込まれたんだから仕方あるまい。

そんなこと本人はわかって挑んできたんだから。

次は両腕でやろうか。

☆☆☆☆

空島スカイピアの神の島。
アップバーヤード

辺り一帯の上空を夥しい数の黒き雷雲に覆われたその地にて、三日三晩を越えた激闘が今なお繰り広げられていた。

そんな雷鳴轟く雲のすぐ下の島雲の上で、佇む者達がいた。

「ギジギジギジ！ ついに見つけたぞ——歴史の本文！」
ポーンネグリフ

仮面にコートにブーツ、そして長く伸びた舌がカメレオンを連想する姿の人物。

現在ボルサリーノのコピーをエネルギーと戦わせているカメレオーネ

が、目当ての歴史の本文を見つげ出した。

巨大な黄金の鐘とそれを収める古代文字が刻まれた大鐘楼。

約400年前、ジャヤの半分を上空の空島へと吹き飛ばした
ノックアップストリウム
突き上げる海流が発生。

島の歌声と呼ばれる国中に響く大きな鐘の音と共にやって来た島
ジャイアントジャック
が、巨大豆蔓に突き刺さり、それまでシャンディアが侵入者から守
り続けていた大鐘楼が、スカイピア上空の島雲に放り出されていた。
「帰って学者共に読ませるか。今度こそ古代兵器ならいいんだがなア
……」

慣れた手つきで大きな紙に文字を写す。

「フツフツフ、ようやく失せ物探しは終わりか」

そう笑いながら零すのは、短い金髪を逆立たせた頭に、特徴的なサ
ングラス。スーツの上からフラミンゴを彷彿とさせるピンク色の羽
毛コートを羽織った男。

「こんな所に歴史の本文が……海軍はこれを知っているのか？」

驚きの声を上げるのは、顔には道化師のようなメイクをし、啞えタ
バコ。至る所にハートをあしらったシャツと赤いフード帽子に黒い
羽毛のコートを着用した男性。

少し昔の姿だが、ドンキホーテ・ドフラミンゴとその弟ロシナンテ。
どちらも能力で作ったコピー人形。特にロシナンテがこんな派手
な格好をしていた時期は短く、非常にレアな姿。

「よせよせ、おれ達はコピー。本物みたいなことを言うな。下らねエ
ことは忘れて、仲良くしようぜエ……コラソン？」

「……正直おれも、なんでドフィを裏切って海軍に入ったか、まったく
わからん……あ痛ツ!」

何もない所で転ぶロシナンテ。

コピーであってもオリジナルのドジ属性まで再現してしまうのが
恐ろしい。

雲で転んでも痛くない——そもそも痛みを感じない体なのだが、そ
れはご愛嬌。

「フツフツフ、しょうがねエ奴だな……」

「す、すまねエ」

首を傾げながらドフラミンゴの手を握るロシナンテ。
仲が険悪でないドンキホーテ兄弟。

コラさん——海兵としてドフラミンゴを止めるため、ドンキホーテ
ファミリーに潜入中だったロシナンテにより救われた少年、トラファ
ルガー・ロー。

もしもドフラミンゴがコラさんを撃つ瞬間を目撃し死んだと思っ
ている彼が知れば、大いに混乱し我が目を疑うだろう光景が繰り広げ
られていた。

『俺様が知らねエからな。コピーにわかるわけねエよ』

『たとえおれがオリジナルでなくとも、てめエは気に入らねエ』

『ローにオペオペの実を食わせたことがあの日の最大の功績なら、お
前にコピーされたことが最悪の失態だ』

『ギジギジギジ！ 口しか歯向かえねエ存在するのは滑稽だなア—
—ッ!? ウソだろ、この距離で!? あの雷サマどんな見聞色の広さだ
……そもそも【サイレント】……が……』

広範囲の心網マントラと雷の体で電波を読み取り会話を聞くエネルギーから、何
故カメレオーネが捕捉されずに済んでいたのか。その理由がロシナ
ンテの能力。

彼はナギナギの実の無音人間。

その能力により、ドーム状の透明な防音壁——【サイレント】を自
分の周囲に展開することで、このドーム内に居る者は外側の音声が一
切聞こえなくなる。逆に、ドームの内側から発生した音声は外側には
一切聞こえない。エネルギーの心網マントラすら掻い潜る。

今まで【サイレント】の内側に潜み、コピコピの能力で生み出した
人形から一方的に情報を得ることで、エネルギーを避けながら歴史ポルネッリフの本文
の搜索をしていたのだが、

『コ、コラソン……てめエがズツコケたせいで、俺様が【サイレント】
から出ちゃってるじゃねエか!』

カメレオーネがロシナンテの方を向くと、目の前に防音壁があっ
た。

『あ』

先程ロシナンテがコケたことで、カメレオーネが範囲外に。能力者を中心に、「サイレント」は展開されるもの。

音を遮断するドームの内外であるにも拘らず、今まで会話が成立していたのは、コピコピの能力の本体と人形間の念話によって。ナギナギの能力がコピーであるが故に、「サイレント」の遮断より、それを生み出したコピコピの能力による念話が優先される。

オリジナルのドジっぷりを考慮すると、よく今までこうならなかったものだ。3日間、時間を稼げた方だろう。

『フッフッフッフッフ!! いいぞ、コラソン！ お前のドジが役に立った！』

『笑いごとじゃねえよ！』

心がない人形でありながら心の底から笑うドフラミンゴとは対照的に、不機嫌になるカメレオーネ。

そして――

ゴロゴロゴロツ!!

頭上の黒き雷雲より、雷鳴と共に神々しく光り輝く巨大な雷のリュウが顔を出す。

当然エネルギーの攻撃。

「(マズイ、【仮面舞踏会】^{マスカレイド}でビスタの人形を……ダメだ、覇気はコピれねえ！ 覇気なしじゃいくらあいつでも雷は切れん！ 避ける？

否、近い上デカ過ぎる！ 間に合わん！ 【仮面装着】^{カメンライド}でマルコかクロコダイヤルにでも――これも無理、武装色を纏ってやがる！ このエネルギーは防ぎ切れねえ！ 死)」

バリバリバリイツ!!

カメレオーネが思考する間に、神の怒りの鉄槌が、無慈悲に辺りを光で包み込む――

時は少し遡る。

エネルギーVSボルサリーノ。2人の自然対決。^{ロギア}

その戦いの場は、ボルサリーノが押される形で神の島へと移行し^{アップバーヤード}

ていた。

コピーとはいえボルサリーノに対してエネルギーが優位に立ったことには理由がある。

「侵入者が！」

「貴様もあの仮面の男の仲間か!?!」

2人の戦いに割って入ろうとする者達。

アップバーヤード

神の島を侵入者やシャンディアから守護する神兵達と、カメレ

ダイアル ポーネグリフ

オーネに女子供を盾に取られ、貝と歴史の本文の情報を奪われた

シャンディアの戦士達。

「消えろ、虫けら共! 誰の許可を得て我が前に立つ!」

ドン!!

大気が震え、新兵とシャンディアが意識を絶ち、力なく倒れる。

数百万人に1人しか身に付けられない、人の上に立つ王の資質とも言われる覇気。

霸王色の覇気——エネルギーはその覚醒者となった。

「怖いねエ。霸王色に武装色、戦いの最中に目覚めるとは……ゴロゴロの能力と合わせてこの危険度オ。懸賞金にするとオ、初頭手配でも5億ベリーはいくねエ……」

ボルサリーノがコピーの人形ではなく本物の人間であれば、冷や汗を流していたことだろう。

今までエネルギーは、苦戦という苦戦を経験したことがない。そんなことがありうると、考えたことすらなかった。ただ一方的に攻撃するだけ。

だが、それを以て彼を井の中の蛙と断ずることは出来ない。

この男は自分と同等の存在を知らぬリユウ。

そして、初めて自分を脅かす相手との戦いを経験することで、その潜在能力を急速に開花させていた。

マントラ

すでに身に着けていた卓越した心網——見聞色の覇気以外の、2つの覇気を目覚めさせるほどに。まだ粗削りではあるが、充分な脅威。

「ベリー? せいかい 青海の通貨か。その10倍でも足りぬ! 神を数字に換

インフィニティー

算など出来ん。∞ 以外ありえんわ!」

不眠不休の戦闘4日目に突入し、テンションが常以上にハイなエネルギー。

雷の体故に肉体的な疲労はないが、それでも何故この男が飲まず食わずで戦い続けられ、あまつさえ一枚上手をいくのか——その答えの1つが、霸王色の覚醒にある。

「2億V “雷神”^{アマール}」……自然の雷を取り込みエネルギー変換する私に、消耗戦はもはや意味をなさん」

全身から取り込んだ雷を放出し、巨大な雷神のような姿となったエネルギー。

触れるだけで焼け焦げる。扱えるエネルギーが桁外れ。歩く天災。

霸王色を使えるようになったエネルギーだが、人形であるボルサリーノには効かず、周りの生物や戦いに割って入ってくる人間にしか効果はなかった。

だが、試しに霸王色にゴロゴロの能力の雷を乗せてみた結果、戦いながら雲に干渉することに成功。

現在、スカイピア全土を覆う雷雲は、すべてエネルギーの能力制御下。自然の雷を生み出し取り込む——これにより、半永久機関の人間発電所と化している。

このことは3つの意味を持つ。

1つ、雷雲の発生と自然の雷を取り込みことによる自身の補給。

2つ、カメレオーネ本体を見つけ次第雷撃するための準備。

そして3つ、太陽と月の光を雲で遮り、ボルサリーノが利用出来なくする妨害。

実際、大将“黄猿”には自然の光を扱うことは可能。だがボルサリーノの人形にはそれが出来ない。

何故なら本体のカメレオーネがそのことを知らないから。本体の知識を越える行動を人形は取ることが出来ない。知らない技を使用不可能。

だからカメレオーネはすぐにエネルギーを倒そうとせず、人形に相手を作らせて戦力の情報収集を先にしようとしていた。

これはコピコピの能力の弱点の1つ。覇気をコピー出来ないこと

も含め、どうしても劣化コピーとなる。

【八咫鏡やたのかがみ】「イ」

ピカ——…ツ!!

初日に戦っていた場所と違い、神アツバイヤードの島は木々が生い茂り、ボルサリーノにとつては直進出来ない地。

なので、合わせた掌から発光する光の鏡——【八咫鏡やたのかがみ】を複数作り出し、そこから放たれる光を次々と反射させながら移動地点まで照射、その光の道を辿るように光速移動を行おうとするが、

「させん！ 【雷神アマル・界雷かいらい】!!」

バリバリバリ……!!

エネルギーの持つ「のの様棒」より伸びる雷。

それに武装色の覇気を纏い雷の刀身を振り回し、木ごと光の道を焼き払うことで阻まれる。

たとえ光の速さで移動しようとしても、エネルギーはそれを心網マントラで読み、移動先の鏡から潰す。

光に速度で劣つたとしても、雷の速さのエネルギーには造作もない。

「人は古来より、理解出来ぬ恐怖をすべて「神」と置き換え、怖さから逃げてきた……だが、私からは逃げられない」

木という遮蔽物を利用するため、エネルギーは戦場をこの地に移動。

エネルギー自身も影響は受けるが、これで速度の不利は消える。

ボルサリーノも当然阻止しようとしたが、殺せばカメレオーネがコピー出来ない。

命令に縛られた人形ゆえ、エネルギーの狙いを防げなかった。

だがこれはエネルギーがボルサリーノを最大限警戒しているということ。

自身に傷を付け得る光速の相手。目を離せば危険。

絶対に自分の目の届く所に留まらせ、本体を討つ。

「ヤハハッ！ ようやく化けの皮が剥がれたか！ この時を待ちわびていたぞ！」

そしてこの時、ロシナンテのドジにより、カメレオーネが【サイレント】の効果範囲から外れた。

「人の身で私を見下ろすとは頭が高いわ！　ここは空、神の領域だ！
あるべき場所に、青海の土に還るがいい青海人！　神の怒りを知
れエー！　【神の怒り】　ツ！！」

バリバリバリツ！！

霸王色と共に雷を雲に伝えるエネルギー。

こうして、巨大な雷龍がカメレオーネのいる雲に落ちた。

そして現在。

黄金の鐘と大鐘楼、ついでにカメレオーネも乗せていた雲は、影も
形もなく消滅——せず。依然存在。

「——【大なる業】」

大量の黄金が宙を舞い、防御壁となっていた。

「ちっ、しぶとい奴だ……」

本体の無事が気に入らないドフラミンゴ。

「悪魔の実の能力は無敵じゃねエ。俺様のコピコピを含めてな。こう
いう時のためにコピって能力を増やしてんだよ」

ふてぶてしく立つカメレオーネは当然無傷。

「なんと不愉快な能力だ。死後も私を縛り利用するか……それも、あ
いつの配下がッ」

先程までは居なかった、金の瞳と、同じく金の長髪をオールバック
にした大柄の男——新たに作られたコピー人形が呟く。

「海賊のくせに弱エてめエが悪い。洗脳の能力でも手に入れりやあま
だまだ利用出来そうなドファイ達と違って、殺す意味はあっても生かす
価値を感じなかった」

「最ッ低の理由で生かされたな、おれのオリジナル……」

ナギナギの能力を覚醒させドフラミンゴの発砲する銃弾から生き
延びたものの、殺そうと思えば簡単に殺せる満身創痕の状態だった自
分のオリジナルを憐れむロシナンテ。

そんな状態だったからこそ、簡単にコピー条件を満たされてしまっ
たが。

「ギジギジギジ！　てめエも昔は強かったのかもしれねエが、見る影

もねエ老いぼれの体なら能力をコピーした人形で充分だ。前時代の遺物はいらねエ」

「くたばれゲス野郎……！」

そう呪詛を振りまくのは、かつて「錬金術師」と呼ばれた元王下七武海、ウロボロス。

オリジナルはカメレオーネの手で、悪魔の实の伝達条件の実験程度の意味で殺害されており、能力で作られた存在故にオリジナルは知らなかったその事実を知る。

恨み骨髄の相手であろうと手にかけれないのが、作られた存在である人形の身の悲哀。

もつともこの男のオリジナルもまた世を騒がせた、俗に言う口ジャ―世代の悪党であったが。

そのゴルゴルの実の能力で生み出した雷を伝導する黄金を上を浮遊させ、エネルギーの雷龍——【神の怒り】エル・クラテイアを、電熱で溶けようが液体のまま操り、放電しきることによって消滅させた。

「あの雷サマも生かす価値ありだな。充分技は見たし、リジエクトダイアル排除 貝他ダイアル 貝も歴史の本文も頂いた。そろそろ詰めるか……【マスカレイド仮面舞踏会】
そう言いながら、また新たに3体の人形を生み出す。

「てめエ……このおれの人造悪魔の实を勝手に持って行きやがってエ！」

「造ったのはベガパンクだし、海賊に奪うなっつって聞くわけねエだろバカヒツジ。1つありゃあ劣化ベガパンクのためエでもなんか造れんだろ。ウチの科学者はもう造ってるぞ」

「何イッ!？」

ガスを纏い毒を吐く白衣の男、シーザー・クラウン。

ガスガスの実の能力は、覇気の有無に関わらず脅威な戦力となるだろう。

「かわいくねエヒツジだな……うるっせエから黙ってる！ 【ネガティブゴースト】！」

「ウオッ!？」

少々口の悪い10代前半の少女が、手から出した自分の分身——落

書きのような幽霊がシーザーの体を貫く。

「おれを、燃料にしてくれエ……」

シーザーが意気消沈し、両手と膝を雲につく。

ピンク色の髪をツインテールの縦ロールにした少女——ペローナのゴーストは、一時的に心が極端にネガティブになる状態異常を引き起こし、戦意を喪失させる効果を持つ。

どんな強き者であろうと、否、自信に溢れ精神力の強い者であればあるほど、このザマである。

「ホロホロホロ！ ガスはよく燃えそうだア……♪」

誰の影響を受けたのか、和ロリ——和装をアレンジしたロリータファッションに、王冠をかぶり唐傘オバケのような傘を持つこの少女は、ホロホロの実を食べた霊体人間のペローナ。

特に因縁はないため本体のカメレオーネには興味なし。

「カメレオーネ——魚人島の国宝を盗み、〃白ひげ〃のオヤジさんを裏切ったクズが……」

更にネプチューン軍の服装をした大きな魚人が現れる。

現王下七武海、2代目タイヨウの海賊団船長ジンベエの若き頃の姿。

「俺様は元々奪うために白ひげ海賊団に潜入してたんだよ。第一海賊の世界で裏切りや強盗なんて、やられる奴がマヌケなだけだ」

「大して変わらん、ゴミが」

「くっだらねエこと言っつてねエで持っつけ」

人形に何を言われようがどこ吹く風。

むしろ口先でしか反抗出来ない下僕の様子を愉しみ悦に入るカメレオーネ。嘲笑うために暴言を許していた。

悪趣味な男がジンベエに白々海の水を貯めた水 貝を投げる。

これでジンベエは、水のない場所でも魚人柔術により水を使えるように。

シーザーとペローナ、2人の強者殺しの能力者に、雷と相性の良い黄金を操るウロボロス。そして能力者の天敵である水を操るジンベエ。

この4人を新たにエネルギーとボルサリーノの戦場に向かわせた。

「ドファイ、【鳥カゴ】だ」

「ありやあ避雷針じゃねエぞ……」

ドフラミンゴが雲を糸に変え、硬く刃物のように切れる無数の糸で神の島全土を覆う監獄を作り出す。ゆっくり縮めることも出来るが、今はそうしない。

このカゴはドフラミンゴ、またはカメレオーネを倒すまで消えることはない。

そしてどちらもカゴの外にいる。

「準備は整った——【仮面装着】」

カメレオーネが自分の顔の前に手をかざす。

次の瞬間、魔女のような長い鼻に爪、何より顔全体を斜めに走る大きな傷跡が特徴な、大鎌を持った長身の女性の姿になる。

四皇、ビッグ・ママ海賊団のシャーロット家8女のブリュレ。

「ウィツウィツウィ……【鏡世界】——」

ブリュレはミラミラの実の鏡人間。

その能力で人間を越えるサイズの鏡を作り出し、ドンキホーテ兄弟と共に鏡の中の異世界へと入り、鏡を消す。

これでもう、エネルギーはカメレオーネを倒すことも、コピー人形を消すことも、【鳥カゴ】を解除することも出来なくなった。

ミラミラの能力の技に、【反射】という手で作った鏡で相手の攻撃を反射するものがあるが、先程それを使わなかったのは、エネルギーの広過ぎる攻撃範囲と、反射しようがまた追尾して攻撃されると判断してのこと。

「俺様のコピー条件は、あのオカマネ野郎と違って少々面倒だからなア。ここからは鏡の中で高みの見物をしながら、人形や【鳥カゴ】に覇気を流す……せいぜい足掻けよ？ 俺様の手の平で」

元の姿に戻ったカメレオーネ。
コピコピの能力はくしゃみで解除される。それはコピー人形も同様。
だからこそ本体は戦いに出ない。直々に戦うのは、格下とナメた相

手が追い込まれた時だけ。

カメレオーネが人形との念話で一方的にエネルギーの情報を集めながら、空島での戦いは最終楽章^{フィナーレ}へと移る。

“擬身VS神”

レイド・ラフターズ

R R 号の船内の医務室でくいなを起こし、トリスタンがレントゲンを撮ったり診療する。

結果、脊髄損傷による不随だそうだ。

「血統因子の技術で細胞のクローンを培養して移植をすれば……」

「治せるか？」

「一応これ禁止されている技術だけど」

「構わん。バレたらオレが責任取る。人を治療して捕まるならそれはそれだ」

ジェルマや海軍は研究しているのだし、どの道オレには生まれた時から追われる理由がある。大して変わらん。

レイジュの忠告のような言葉にGOサインを出し、トリスタンとリリー、レイジュがくいなに説明しながらどうするか聞いている。

「そんな殊勝なことを言うなら、そもそも女の子と決闘なんて」

「覚悟を決めて向かってきたなら、老若男女種族を問わず皆戦士だ。そういう区別は戦場から離れた日常でする」

スカーレットの苦言にいつも通りの答えを返す。

「え？ あいつ女だったのか？」

「お前……見たらわかるだろう」

「ガルドアを見て同じこと言えんの？」

シユライヤに言われてガルドアを見る。

きれいな肌、さらさらの髪、そして見るものを魅了する童顔。

その華奢な体のどこにハルバードを振り回す力があるのか甚だ疑問であるが、間違いなく男だとわかる。難易度はくいなより遥かに高いが。

「こいつは男とか女とか、そういうのを越えた美しさだから」

「え、いや、そんな不意打ちで褒めないでよ……当然だけど」

「それに“戦闘機”って」

グラントお……お前もか。

「だから読みが違う。閃く刀の姫で“閃刀姫”だ」

「そんな読み方聞いてわかるわけねエよ……」

まあそれは確かにそうなんだが。

「しかし性別くらい普通わかるだろう。常識的に考えて。男とか、雄として節穴か」

「そうですね。匂いでわかります」

「常人離れた嗅覚がなくとも、喉仏の有無に、骨格や筋肉の付き方を見ればわかる」

「なんだ。良い体してるっぺよ」

「いや骨格つて……筋肉はわかったけど」

「筋肉はわかっちゃうんだ……声が女の人よ」

「そもそも彼女の服のボタンの付き方はレディースだよ」

色々意見があるが纏めると、気付くポイントはいくらでもあったということだ。

「この空間の常識の概念がおかしいササ。ロゼのは雄じゃなくて、武人か医者の観点だし」

「いやいや、雄で合っている。サラシを巻いていた。結構デカイ」

おそらくは片腕でも着やすいように、前をボタンで留める大きめのサイズの服だったが、オレの目は節穴ではない。

「ハイレベルの変態技能やめエヤ」

「アウ、呼んだか？」

「呼んでねエしそんな呼び方はしない」

こうして、霜月くいなの腕の治療とリハビリのため、そしてオレを倒しリベンジするという目的のために、レイド・ラプターズ R R 号に乗船することになった。

「ああ……お風呂がある……！ やったあー！」

なんか別の付加価値にも目を奪われているが。

ウイスキーピークを出て航海中。いつものように自分と仲間の修行をする。

キャロルの【ドリームランド幻夢境】でのこと。

「私と戦った時、手を抜いてた？」

戦闘で「R R」を見せたことでかけられた疑い。

「そんなことはない。それは、「R R」がオレより強いという前提から来る疑問だ」

こいつらはオレの体力で動くから、量産してオレと戦うと最後には体力切れで自滅してしまうため、簡単にどちらが強いと言い切ることには出来んが。

「誰でもそう思いますよ」

「もしそうなら、「R R」がやられれば、オレに勝ち目はないな。確かに強力だが、手段の1つ。結局扱う己自身が強くならなければ、使いこなせない」

安全圏からの物量による合理的なゴリ押しに科学の汎用性、そしてオレ自身の戦闘力。

正攻法と奇襲、搦め手の類は、両方出来て初めて真価を發揮する。それでもまだ、海賊の時代を終わらせるには不足。

「そっか……ごめん。自分は片腕使えない状態で挑んだのに、いちやもんつけて」

「『飛燕』と言ったか？ あれは片腕のパワー不足を補うため、全体重をかけるための攻撃だろう。そりゃあ両腕使えた方が強いだろうが、手を抜いていたわけでも、今までの努力が無駄になっただけでもないはずだ」

「そうだね……流桜——覇気だっけ？ それも使えるようになったし、空も走れるようになったし」

「待て。覇気はともかく、空は何の関係がある？」

身体的なハンデ——例えば盲目で見聞色が発達した、みたいな話は聞いたことがあるが。

聞いた話では覇気の取得が師範代の条件の1つだったそうだ。

一心道場の師範代は海軍本部中将か何かか？

「私さ、階段が嫌いなんだ。落ちて片腕が動かなくなったから」

「まあ嫌いにもなるだろうな」

「それで跳び上がって窓から入ったり、手すりとか壁とか走って2階に上がるようにしていたら、いつの間にか空を走れるようになったん

だ」

「なるほど」

オレは納得した。

「いや、あの、その理屈はおかしい。そっちの方が危険だよね？」

「危険とかそういう問題ではないのだ、レベツカよ。誰に迷惑がかかるわけでもないことで、何故必要のない我慢をして嫌いなことをしなければならんだ。壁走りや水面走りはオレも修行でさせているだろう？ 壁立ちや壁歩き、天井立ちに天井歩きも出来るようになるな」

足の指の力で壁や天井を掴み移動する技術。訓練すれば誰でも可能。ビンズも出来る。

宙を蹴り移動する【月歩】^{ゲツポウ}の方が余程難しい。

「そうだ、お兄様は重力に反逆するレジスタンスだった……」

「おめエさん、忍者みてエな奴だな……」

随分大げさな物言いだな。

「偉大なる航路で団長はどのくらい強いのか？」^{グランドライン}

「オレより強い人間なんてたくさんいる」

くいなの質問に答える。

団長という呼ばれ方になった。ロゼでいいのに。

そしてオレの脳裏に浮かぶ、修行の日々の中でもよくあった光景。

『ぶわっはっは！ そおくれッ！』

『【ライズ・ファルコオン】!?!』

ある時はガープさんに地面に叩きつけられ大破。

『火力がいまいち、ヌルイッ！ やり直しだアッ!!』

『【ブレード・バーナー・ファルコオオン】!!?!』

またある時はゼファーさんにより爆発四散。

『わっはっはっ、息子とオモチャ遊びか。穏やかな日々もよいものだ』

『【レヴオリューション・ファルコオオオン】!?!?!』

そして父さんに無力化されてきた。

「それは燃えるね……!」

「燃えるのか……?」

「この闘志は大事だぞ? それに、強い奴が必ずしも勝つわけでもない。十中八九負ける相手でも、勝機の1度が最初に来て致命傷を与えられることもある。条件次第で傾く」

あの3人にも狡く勝つことは出来るだろうが、オレ自身が強くならなければ、あの領域にはいけない。

三大将相手にも、バトルロイヤルで他の攻撃を利用することで、勝つこともあった。

強くなっているのは確実だが、壁のようなものを感じる。自分の殻を破るキツカケがない。

こう、腕が切り飛ばされ足が吹き飛び死にかけるような死闘が、ギリギリの実戦が足りないのか? 訓練以外で苦戦したことほとんどないし。

「と言っても、勝ち続けるのは困難。途中で倒れたら目的を達成できないからな。もしオレが一番強いなら、とつくに新世界で四皇と戦い始めている」

特に百獣海賊団とビッグ・マム海賊団。

単純に今のオレではR レイド・ラフターズ R号を飛ばせないという問題もあるが。

一般的なマリージョアを通る大陸ルート。通行許可を取ることがあっても、船を乗り換える気はない。

魚人島経由の海底ルートでも、まだ行く気がなかったので試さなかったが、サイズの問題で通れるのか……?

まだ先の話だが、行くなら第三の選択肢。通行許可を取った上で、赤い土レッドラインの大陸を飛び越え上空ルートか。

「そうだ、わかりやすいのがある」

数字を見て伝わるインパクトもあると思うので、3億以上の高額の手配書——すでに死亡していたり投獄済みのも含めた紙束を夢の中の書庫から持ってきて、適当ににくいなに見せる。

「何この手配書の額……4億——いや、49億5440万!? け、桁がおかしくない? 東イーストブルーの海じゃ1000万あったら大海賊だよ?」

「それで合っている。偉大なる航路グランドラインでは何百万、何千万の違いは誤差だ。特にルーキーの間は。低い奴も、力を隠して上手いこと海軍や政府の目を掻い潜っている可能性もある。だが額が高い奴は、報道される事件を起こしながら海軍に捕まっていないということなので、基本的に強い」

政府は海賊に偉大なる航路グランドライン、特に新世界へ向かいラフテルまたはワンプースを見つけられたくないんだろうな。

他にも随分高額の手配書ばかりだ。

もう死人だが海賊史上トップの額は「海賊王」ゴールド・ロジャー。

父さんがルーキー時代からの顔写真と金額違いの手配書を何種類も持っている。こういうのは発行されなくなるから割と貴重品。海賊マニアが喜びそう。

そして現在生存中の海賊の船長では5本の指に入る懸賞金。

「白ひげ」エドワード・ニューゲートに、先程くいなが見た現在消息は不明の「金獅子のシキ」。

「百獣のカイドウ」、ビッグ・ママ「シャーロット・リンリン」、赤髪のシャンクス」。

現四皇や幹部連中は、「白ひげ」以外まだたまに額が上昇している。

懸賞金の高さが政府にとっての危険度の度合い。そのままイコール強さではないが、「赤髪」と会ったかんじ、確実に今のオレより強い顔ぶれだな。

敵対すればそれに加えて、幹部や戦闘員、傘下の海賊団も敵になる。「この人とか強そう」

「そいつはもう捕まっているぞ」

「鬼の跡目」ダグラス・バレットの手配書を見ながら言う。

元ロジャー海賊団で、船を下りた後1人で暴れ回り、懸賞金9億8010万ベリー。

「そうなの？」

くいなが呟き紙をめくる。

どれもこれも端数が半端だ。何をしたらこんな額が懸けられるのか……昔ロジャー海賊団や白ひげ海賊団と、これもまた1人で渡り合っていたという『赤の伯爵』、『孤高のレッド』は5億5000万ベリーとキリがいい。こちらもすでに捕まっているが。

懸賞金は3億を超えると簡単には上がらない。

だが、仲間が事件を起こすとその所属する海賊団の他の船員がついでに懸賞金上がることがあるので、四皇みたいに傘下が多く、海賊団の規模が大きい方が高くなる傾向だ。

そして特に船長は、人望や統率力といった要素も懸賞金上昇の一因になる。

「東の海に強い賞金稼ぎはいたか？」
イーストブルー バウンティハンター

偉大なる航路に伝わっているのはそんなにいないが。
グランドライン

「印象に残っているのは、通称小物狙いの2人組とか」

「通称が弱そう」

「あとは、たまたま海で遭遇した2人姉妹？」

「へえ、女2人旅なんて珍しいな」

1人ほどではないだろうが。ワケ有りかね？

東の海に行く時は、イーストブルー 風の帯を通らないとな。大型海王類の群れは
カムベルト デカイ金魚より強い。

☆☆☆☆

空島スカイピア

カメレオーネが鏡の中に入って3日——依然戦闘続行中。

ドフラミンゴが神の島に張り巡らせた【鳥カゴ】。
アップルヤード

『のの様棒』の刃先で切ろうと試みても切れないそれが邪魔で、上空の雷を取り込みエネルギー変換出来なくなったエネルギー。だが今まで充電した分は残っていた。

今のエネルギーのゴロゴロの能力を全開にした姿、【2億V 雷神】アマールを解除し、節電しながら戦い続けている。

戦場は次第に中心、所々に建物の残骸が埋まっている島雲から

巨大豆蔓ジャイアントジャックが伸びており、その根元の周辺へ移動。

川の水を魚人柔術で一本背負いして投げってくるジンベエを、エネルギーが鬱陶しがったためである。

雷速で軽々と避けられるスピードだが、敵はジンベエだけではない。

「いい加減にして欲しいねエ〜。【八尺瓊勾玉やさかにのまがたま】ア」

ピュピュン!!!

ボルサリーノが宙より光の弾丸の雨を降らせる。

それを放電により相殺し浪費する気はないエネルギー。

「私の圧倒的な力の所以は、ゴロゴロの能力だけではない」

マントラ心網で先読みし躲すことに対応。

避けるだけなら、雷速と心網マントラを備えたエネルギーに分がある。問題はやはりエネルギー補給を絶たれたこと。

一対五、敵は全員人形故1人に捕まれば諸共攻撃され、加えて時折カメレオーネが人形の攻撃に武装色を流すので気は抜けず、流石のエネルギーも栄養を摂る暇はない。飲まず食わず不眠不休。

「大いなる」

ウロボロスが生み出した黄金でエネルギーを捕らえようとし、

「ネガティブ」

ペロリーナがゴーストを放とうとする。

「超人パラミンアがア……そのような低級能力、神の前では無力だと何故わからん！ 【雷冶金グロームバドリング】」

エネルギーがウロボロスの黄金に電熱を流して溶かし、神のしもべとして相応しき、雷を纏い眩き光と共に存在感を放つ不死鳥の姿へと造形。

「行けエ 【不死鳥ゴッドフェニックス】ッー」

一度は雲から発生させた雷であったが故に、放電、消滅させられたが今は神の御前。

直接送り込むゴロゴロのエネルギーに物を言わせて、制御を乗っ取り黄金を強制徴収し、今までゴルゴルの能力と戦ってきたこと得上がった精密な黄金の操作で、まるで命を吹き込んだように生き生きと

飛翔させる。

スライア・モード
「球体形」

不死鳥はペローナの体を飲み込み球体へと姿を変え、内側に封印。彼女は能力こそ強力だが、身体能力はずば抜けているわけではない少女。

エネルギーにとって捕らえることは容易い。

「食した実が超人であった己が不幸を恨め。最強種自然こそ至高だ！」

殊更に超人を見下すエネルギー。

人間であればこれで電熱で焼け死ぬか窒息死するが、相手は人形。それでも再生する人形には閉じ込め封印するのは有効な手段だが、放っておけばウロボロスが能力でまた開放する。今までにもあったやり取り。

人形達にとって一見無意味な行動だが、残量電気を使わせることが出来、エネルギーがペローナにやったように黄金で体全体を包み込めば、金の像に変えられる。本職の黄金の能力者であるが故に、黄金の永遠の輝きに由来する神秘性により、仮死状態での生け捕りに済ませることが可能。メロメロの石化能力のように。

そこまでいかずとも一部でも絡め捕れば、そのままカメレオーネが武装色を流し足止め。「ネガティブホロウ」を食らわせ捕獲完了。

「槍波」！

ザバツ！

ペローナの拘束を解かせる時間を作るため、手に持った水ウォーターダイヤル 貝から水を槍状に発射するジンベエ。

これも、これまでの戦闘ですでに残量水は少ない。

魚人空手の真髄は周囲一帯の水の制圧。体内の水にも干渉し衝撃を伝える。

悪魔の実の能力者にも有効となりうる技術なのだが、エネルギーは自身を体内の水ごと雷へと変化する。

そのため水に浸からせるか、電撃を水で受け流すといった戦法が主になる。

「遅い！ 【放電】！」

バリバリ!!

川をまるごと魚人柔術で投げられるならともかく、この程度の水量であれば相殺するエネルギー。

貯水量を消費させるため。放っておけば回収される。

「シュロロロロ！ 燃えろオ！ 【ガスタネット】！」

ドオン!!

水は電気分解すると酸素と水素に分かれる。

ものが燃焼するには酸素が必要で、水素は燃えやすい気体。ガスガスの能力は気体の操作も範疇。

シーザーが能力で爆発性のガスと一緒に操り、手に持ったカスタネットでエネルギーの周囲を引火、爆発させた。

「無駄ア！ 【電光】 ツ！」

ピシャアツ!!

そのガス爆発を、全身から電熱を発しかき消す。

「貴様らが操るエネルギーなど、私には無に等しい！ まだまだやれそうだな」

「先がないのはわかっているはずだよオ？ 何故まだ戦う？」

ボルサリーノが尋ねる。

エネルギーの自信に翳りはないが、疲労の色は顔に見える。

自慢のエネルギーも雷雲より補給は出来ず、スピードで超えられているピカピカの能力が敵。

何故挫折しないのか？

「ヤハハッ！ 神の心など誰にも推し量れまい」

「ケッ！ なんて自信過剰な勘違い野郎だ！」

【放電】

ズドン!!

「シュゴオ!?!」

神の怒りに触れた不屈き者への制裁は、節電より上位の最重要事項。

シーザーの頭を吹き飛ばした直後、

『【死人に口なし】』

「グフツ!! (何事だツ!?)」

血を吐き転がるエネルギーの体。

『ガルルルル……まさかあれから3日も足掻くとはな。大した奴だよ』

スケスケの実際の透明人間——アブサロムの姿をしたカメレオーネが、【透明化】により全身を視認出来なくし、更にロシナンテの対象の行動から音が発生しなくなる【風】を重ね掛け。

腕に仕込んだバズーカ砲の弾に武装色を纏い、未知無音不可視の砲撃がエネルギーの心網を掻い潜り、襲ったのだ。

この状態でも、ギロギロの能力を持つヴァイオレットには見抜かれてしまうが。その理由が能力の相性か、能力者の練度の差か、それともコピーだからかは定かではない。

すでに合計1週間。あまり時間をかけ過ぎると、ふとした拍子にくしやみをして、能力が解除されるかもしれない。人形はまた作ればいいが、エネルギーは雷。逃げられれば見つけるのは困難。

痺れを切らしてエネルギーをコピーすることを兼ねて本人が来た。

糸で出来た【鳥カゴ】内には、「道化のバギー」に化け、バラバラの能力を使って侵入。

カメレオーネが白ひげ海賊団所属時に、ロジャー海賊団との交戦中盾として利用している間に人知れずコピーした。

「ホロホロホロホロ! 今まで散々虚仮にしてくれやがって! 終わりだ、耳たぶツ! 【ネガティブホロウ】!」

予め念話で命じられ、黄金の拘束から外れたペローナが手からゴーストを放ち——

「虫けらと戯れて暮らしたい……」

突然の攻撃から立ち上がったエネルギーが、ネガティブ(?)な言葉を口にしながら再び地に両手と膝をつき、「その様棒」が傍らに転がる。

『やったか。ようやく終わりだな……じゃあデザートを頂くとする

か』

アブサロムへの変身を解き、カメレオーネがエネルギーに近づく。どんなに自信を持った者でも、「ネガティブホロウ」を食らえば折れる。

目の前の自称神のように。

コピコピの能力で姿と能力をコピーするには、自身と対象の一定時間の身体接触が必要。

この条件は白ひげ海賊団を裏切った際に露見し、くしやみで解除されることと合わせ、新世界で情報拡散されている。新世界で活動していなくとも、ある程度情報網のある勢力は知っていること。

そしてコピーするまでにかかる具体的な時間を知る者はほとんどいない。

3分間という、戦闘中に満たすには難しい時間が必要。強い相手であればなおさら困難。

眠っている間や、今のような状況でコピーするのがベスト。

クロコダイルは「白ひげ」に挑んだ後、モリアはカイドウとの抗争後、それぞれ敗れて負傷している時に火事場泥棒のようにコピー済み。

自業自得で握手を拒否される運命を背負った人間である。友好への道は遠い。

『てめエの人形も使い潰してやる。劣化するのが玉に傷だが、壊れようがまた生み出せるところが最高にクレイジーだ。世間知らずなお空の大将には、少々チートだったか?』

カメレオーネが膝をつくエネルギーに手を伸ばし、その背に触れ――

「捕まえたぞオ……虫けらアツ！」
【稲妻】サンゴ「オ！」

バリバリツ!!

その瞬間、体を雷へと変えたエネルギーの手が、カメレオーネの腕を掴む。

決して逃がさないように。

『うああ!?!』

突然の攻撃に、武装色など纏っていないカメレオーネは、高電圧の直撃を食らい意識を失う。

更に、そのことで周囲の人形も、音を消す【カーム風】も、神の島を覆うアップバード避雷針の役目を果たしていた監獄も消える。

「へそー…ふう……これでうじゃうじゃ群がる人形共と、邪魔な【鳥カゴ】とやらが消えたな」

スカイピアでの挨拶を口にしながら立ち上がり、姿を見せたカメレオーネの体を捨てる。

周りを見渡し上を見上げ、指で口元の血を拭うエネルギー。

「ようやくエネルギーを補給出来る——【コンセント・マラガン千客万雷】!!」
ピシャアツ!!!

上空に溢れる雷雲より無数の雷がエネルギーに押し寄せる。

「ヤハッ！ ヤハハッ!! ヤハハハハッ!!!」

そのエネルギーをすべて充電、吸収。

極限状態の戦闘を経てアドレナリンが分泌し、大きな笑い声と共に、エネルギーの力が漲る。

神は健在なり。〃ゴツゴ神・エネルギー〃、完全復活。

「神は滅びぬ、何度でも蘇る——ほら目覚めろ。おれは1週間不眠だ。こんなものでは済まさんぞ……!」

バリッ!

「ぐー!」

エネルギーがカメレオーネの体に電撃を浴びせ、無理矢理起床させる。

そして——

ボキッ!!

「がア!!」

エネルギーがカメレオーネの両手首を持ち、両上腕に足を乗せ、肘から逆方向にへし折った。

まるで子供がアリヤバッタの手足を戯れに引きちぎるように。

そしてカメレオーネを島雲の上に蹴り出し、地面に転がっていた〃
のの様棒〃を手に持つ。

「ヤハハッ、変身するには一度顔に手をかざさねばならぬのだろうか?

これでもう出来ないなア。人形を呼び出すのも無駄だ。そうしようとした瞬間、私が先に攻撃する。撃つまでの溜めがあったあの時と違い、この距離なら私の方が速い。試してみるか？」

痛みに耐え、逆方向に折れたままの肘をつき、立ち上がるカメレオーネ。

「——ッ、【仮面^{マスク}】」

だが数手先、エネルギーが「のの様棒」の刃物に変えた方とは逆の先端で、背の4つの太鼓の内、右の太鼓をドドンと叩く。

【雷鳥^{ヒノ}】！」

バリバリッ!!

すると太鼓が3000万Vもの電圧の雷鳥へと姿を変え、カメレオーネへと飛翔し、その身を焦がす。

「ウウああ!!」

エネルギーの宣言通り、【仮面舞踏会^{マスクレイド}】発動失敗。

「あのピカピカの男ではあるまいし、雷より速く動けるとでも？　それから、【雷獣^{キテン}】——」

バリバリ……!!

今度は左の太鼓を叩き、その音と共に先程と同じ電圧の雷狼が宙を駆け、カメレオーネに食らいつく。

「グアアアアア!!」

コピコピの能力を発動させるどころではない衝撃が、カメレオーネの体を走る。

「ヤハハッ！　踊り狂え仮面道化ッ、その舞を神に捧げよッ！

【雷龍^{ジャムラウル}】　ッ!!」

バリリッ!!!

上2つの太鼓を素早く連続で打ち鳴らし、雷鳴と共に2つが合流し6000万Vの雷龍がカメレオーネを飲み込む。

今までの鬱憤を晴らすような一方的な蹂躪。

愉快そうにエネルギーが奏でる太鼓と雷鳴の旋律を伴い、動物を模した雷が宙を舞い、カメレオーネが悲鳴を上げ苦痛にもがく——それは1週間に渡った天変地異が、間もなく終わることを告げる最終楽章^{フィナーレ}。

「カ、ハア……」

満身創痍で仰向けに倒れる体。仮面がずれ、少し素顔が見える。

カメレオーネは見聞色寄り。

コピコピの能力の変身に加え、気配を本人に偽装することを得意としている。

だがその見聞色でエネルギーに遙か上をいかれて、そもそも激痛で発動出来ないのが現状。

武装色も使えるが、自然ロギアの雷と化した体を実体として捉えることは出来ても、能力で生み出した高エネルギーの雷撃を防げるレベルには至っていない。だからこそ3日前に一度は死を覚悟した。

そして武装色があるからこそ、生き永らえる代わりに苦しみが続く。

「ヤハハハハッ！ もうやめてしまうのか？ まだまだ踊っても構わないのだぞ？ 何の土産もなしに神の御前に参上した罰だ——いや、黄金の鐘を見つけたのだったか？ わざわざ私のために大義である！ その献上品を鑑みれば、青海人せいかい相手に少々弱い者イジメが過ぎてしまったかな？」

微塵も思っていない反省を口にするエネルギー。

まるで【カーム風】中のカメレオーネの独り言への意趣返しのようなだが、ただのたまたま。少々性格に似た部分があっただけ。

普段であれば近寄り顔を踏みつけるところだが、そうはしない。

エネルギーはカメレオーネのコピー条件を知っている。

「なぜ、動けル……？」

いきなり雷撃を食らった衝撃でトんだカメレオーネの思考だが、遅ればせながら疑問が浮かぶ。

ペローナのゴーストにより、戦える心理状態ではないはず。

「我は雷。パラミシア超人のあのようなノロい攻撃、たとえ心網マントラを使わずとも当たるものか。ただのフリ。余興として人形遊びに興じながら、貴様との化かし合いに乗ってやったまで」

息も絶え絶えなカメレオーネの疑問にエネルギーが神託を与える。

「な、なんてためエガツ、【ネガティブホロウ】ノ効果ヲ、知ツテやが

ル!？」

エネルは今まで一度もゴーストを食らわなかった。

なのに初めて当たった攻撃の効果を事前に知り、当たったフリが何故出来る？

「教えてくれたではないか。3日前、ゴーストの小娘がガスの男に使って。黄金で我が攻撃を防ぎ、勝ったと驕ったな？ 人の身の分際で烏漣おこがましいぞ。あれ以降、鏡に消えるまでの貴様のやり取りは私に筒抜けだ」

カメレオーネは知らぬことだが、エネルは心網マントラと雷の体でスカイピア全土の会話を網羅出来る。上手く隠れていたが、神の心網マントラの手の平の上。

あの時のカメレオーネの発言はすべて、居場所がバレてしまったとは意味がないと、「サイレント」に入らずのこと。エネルの規格外さを過小評価した。把握されたのは気配だけではない。

勝ったと思えば、誰でも油断が生じるもの。

自分の現在地が知られ、しかし起死回生の攻撃を防ぎ、勝利を確信してしまった。それが足元からいとも容易く墜落する空中楼阁とも知らずに。

「人形越しに言ったはずだぞ。神の怒りを知れど。神の宣告は絶対！ たとえ仮面で覆い隠そうと、神はすべてを見通す。聞かれているとも知らずにペラペラとうるさい男だ。浅はかなり。ヤハツ、おかげで待ちわびていた愚かな虫けらと戯れられた」

勝ったと思わせて逆転——奇しくも、数日前に青海せいかいでシルバース・ロゼが霜月くいなと戦った時と共通する。

見聞色に秀でた者は、ある程度戦法が似るのだろうか？

くいなは強くなることに真面目で素直な性格。ロゼは搦め手も使うが正面からの激突も好み、あの2人は仲良く切り合う仲ジャレに収まった。

だが神は道化エネル カメレオーネとそんな決着など望んではない。

「(手の平で踊らされていたのは、俺様の方……だとツ!?)」

エネルは聞こえた言葉の『コピー』と『齒向かえない存在』から、人

形の本体と断定。

攻撃しながら会話を聞き、「サイレント」という音が聞こえなくなる技の存在を把握。更にカメレオーネの心を読み、コピコピの能力の概要と弱点、そして愚かにも自分の姿と能力を模倣し、化けようとしていることを知る。実行する前から作戦がバレていた。

ボルサリーノの攻撃を先読みし躲す戦闘を行いながらの、3つを同時に聞き分けるエネルギーの心網^{マントラ}あつてこそその神業。

「どれだけ能力者の人形を召喚しようが、貴様一人を倒せばそれで事足りる。まあ同じ能力は複数使えず、一度に出現させていられる数にも上限があるようだが？ 確かにコピコピの能力は無敵などではなかったな。くしゃみで解けることもそうだが、それより何より……人形をひけらかしいい気になって、修行不足で情けない姿を晒している貴様自身が一番の弱点だ。マヌケ」

カメレオーネを見下し勝ち誇るエネルギー。

コピーした悪魔の実の能力の発動にカメレオーネの体力を消費せず、眠っている間も活動する人形。一見無限に思える活動時間。

だが、くしゃみという明確な弱点、解除方法がある以上、いつまでももたない。

対して自分のゴロゴロの能力は無限に等しいエネルギーを誇る。持久戦で有利なのはこちら。

侵入不能の鏡の中の世界。

たとえそこに潜もうが、この強欲なる盗人は神をコピーするため、最後には必ず自分の前に現れる。ならばそこで制裁を加える。わざわざ出向いてやる必要なし。

お誂え向きに戦意を喪失させる能力者を送ろうとしていた。これを利用しない手はない。

何もかも自分の思い通りに進んでいると錯覚している道化は、神を無力化したと思えば、無防備にその姿を現すだろう。

そして原因不明の攻撃を食らい、自分に触れる者が。

このタイミングで接触してくるのは本体。

予見的中。神に敗北はない。

「(また、負けたのか……？ 俺様が)」

カメレオーネの脳裏に今までの敗北が浮かぶ。

自分の船長に命じられ、能力を隠し白ひげ海賊団の船員として潜入中。

20年前のロジャー海賊団との交戦時、同い年の「鬼の跡目」ダグラス・バレットに、互いに能力こそ使っていないが、その強力な武装色の覇気に叩き潰されたこと。

そしてその後コピコピの能力が覚醒。

14年前「白ひげ」エドワード・ニューゲートの首を取ろうと、生み出した人形と共に正面から変身して騙し討ちするも、息子を殺されたことで怒り狂う「白ひげ」から逃げ出したこと。

2つが想起される。

その敗北を受けて、更に「仮面舞踏会」の存在もあり、今の戦闘スタイルに。自分自身での戦いから離れた。

「ほう、貴様にとって3度目の敗北か。負けから学ぶものは多いと聞くぞ？ おかげであの手段の数には存外手こずらせられた。もつとも才？ 私は生まれながらの強者故負けたことなどなく、戦いの中で成長し、これからも勝ち続ける。未来永劫な……」

エネルギーが敗者の心を読み、のたまう。

今までのカメレオーネの敗北は正面から戦い、圧倒的な力で捻じ伏せられてのもの。

だが今回は人形を操り自分は安全圏で黒幕を気取って、エネルギーの力を測り損ね、拳句まんまと出し抜かれた。本来の目的から外れた能力のコピーに執着し、欲をかいいて墓穴を掘った。

海賊の世界ではやられる方がマヌケ。

そのことがカメレオーネの自尊心を傷付け、エネルギーがその仮面の下の表情を見て満足そうに笑う。

「そう落ち込むな、むしろ喜べ。貴様はこの私から1週間もかくれんぼを続け、あまつさえ損傷を与え、初めて膝をつかせた男だ。色んな能力と戦えたし、心網以外の武装色に霸王色の覇気とやらも知り、良い鍛錬になった——ヤハハッ！ 遙々青海より空まで来て踏み台ご

苦勞……だが、もう用済みだ。さらば還れ」

喜色満面から一転、エネルギーが冷酷に宣告する。

今までの戦闘は、彼にとってカメレオーネをおびき出すまでの余興。

おおよそ神の思い描いた通りに進行した戯曲。

初めて現れた自分を脅かす存在を利用した、自身の力の確認。

すべては神として君臨するため自分の力をより盤石にするための儀式。

そして、神に歯向かった愚かな生贄の末路など決まっている。

「さあ、神判の時だ！ 生かす価値ありだと？ 生命の生き死にを決めるのは神だ！ 私気取りか、この身の程知らずがッ！ 天地開闢より終焉に至るまで、ゴロゴロの能力を十全以上に使いこなせるのは、天上天下に私だけ。どれほど神を仰ぎ見ようが、貴様には扱いきれんッ！ 私がゴロゴロのエネルギーを使うから無敵なのだ……自明の理を解さぬ痴れ者め」

ゴロゴロゴロ!!!

エネルギーがカメレオーネを指差しながら3日前の罪状を吐き捨て、上空の雷雲が蠢き集まり始める。

一度大量の雷を吐き出した雲が、再びエネルギーを充填完了。

「(コピコピの能力は、俺様でなくてもチート……その差か)」

「そこは島雲で覆われた空洞、底がないようだ……貴様、突如足場を失う人間がどんな気分か知っているか？ 今際の際に味わえ——それが、神のコピーを作ろうとした貴様へ下す、私の判決である！

【神の怒り】ッ!!」

バリバリバリッ!!!

3日ぶり、怒りのボルテージがMAXに達した巨大な雷神龍が、再び天空の雲よりその神々しき姿を現し、武装色を纏ったカメレオーネの体を包み込む。

下の雲々をビルカのように消し去りながら突き抜け、青海へと墜落。

巨大大豆蔓の根元に、巨大な穴が空き、神の島が音を立てて揺れ、し

ばらく後に収まった。

そしてその穴から黄金都市シヤンドラが輝きと共に姿を見せる。

「むっ？・下に都市、それも黄金……ヤハハツ！ 置き土産を残して行きおった！ 絶景かな！ それにしても、あの黒い変色が硬化というやつか？ 見た目通りカメレオンの類か。少々弾かれておった。奥の手などなかったはずだが、悪運が強ければ生き残るかもな——すでに虫の息、焼け石に水だが。素直におれの怒りを受け入れ、楽に逝けばいいものを……」

雷神龍の直撃寸前、カメレオーネは身を守るため、土壇場でまだ弱いながらも武装色の全身硬化を会得した。

今回、エネルギーが勝利を掴んだが、今まで戦ってきた敵は、潜ってきた修羅場はカメレオーネの方が上。

自分以上の強敵との敗北はすでに経験している。敗北からの立ち直りも早い。そのことがわずかに生存の芽を残してしまった。

「海の支配者——カイゾクだったか？ 下界でどれだけ恐れられようが、もう神に挑むだけの気概はあるまい。神の名を持つ古代兵器とやらも、神そのものには不要。おれがいれば事足りる。前座は終わりだ。我がいと高き天空を統^すべる唯一神なり！ ヤハハハハツ!!」

神は気まぐれ。もはや下に落ちたカメレオーネに興味をなくし、高笑い。

こうして、死者こそいないが故に、ここら一带すべての住民の記憶に残る天変地異の悪夢の一週間が終わりを告げた。

勝者となった〃神・エネルギーゴッドが神官達より更なる信仰を集め、彼が率いる神の軍団によりスカイピアは陥落。アップバーヤード神の島生誕以来2度目の外敵の神による侵略戦争は、1日とかからず終結。

シヤンディアもカメレオーネにより少なくとも被害を受けたことと、あんな異常を引き起こすゴロゴロの能力を警戒し、今すぐには敵わぬと雌伏。

表面上は争いのない、絶対の力を持つエネルギーの恐怖で支配するディストピアが開始。

シャンディアが求める黄金の鐘とそれを収める大鐘楼は、エネルギーの手中に入った。

鐘は限りない大地へと持つて行き、空島を消し去った後に鳴らしてやるため。

歴史の本文が刻まれた鐘楼は、古代兵器などいらぬが、人の身には過ぎたるもの。求める者が現れば、その愚かしさを思い知らせるため。

どちらも保有。

後のことは神官達に任せ、エネルギーは神の社にて至福の爆睡。

400年前に鳴り響き、再び鳴る時に戦いの終焉を知らせると言う言い伝えの鐘の音。

シャンディアが先祖より受け継いできた黄金の鐘、シャンドラの灯。その鐘の本来の意味は、『おれ達はここにいる』。

未だシャンドラの灯をともす者は現れず――。

“黒檻部隊”

【デコレ・アハト・サブレ
「武裝飾八海洋剣」！】

【かぐめいきゆうこう
「鶴鳴九臯」！】

キンキイン!!

剣戟の音が響く。

同じ船に乗ることになつたくないな。

オレと切り合つたり、レベツカに剣道を教えてもらつたり。

「力も手数も私が上。だがしかし、まさか1本で全部捌き切られるとは……速い」

「あんな重量の剣を振り回しといて何を……まともに受けられないから逸らすしかないよ。その力が羨ましい」

そして今メイプルとも剣を競い、八刀流パワー剣士のメイプルと、一刀流スピード剣士のくいなの手合わせが終わつた。

メイプルの八方向から迫る剣をくいながすべて受け流し、逆に9回目の攻撃で喉元に刺突を寸止めして決着。

「今まで片腕不随だつた人間が、まだリハビリ中なのにすごい速さね……あの正確な剣速にはついていけないわ」

「お前は別に剣が専門なわけじゃないからな。それに、片腕だろうが両腕だろうが、どちらにせよくいなの腕力ではメイプルに敵わないから、大して変わらないとも言える」

戦っている2人から離れた所で席につき、一緒にティータイム中のレイジュに言う。

レイジュには毒とレイドスーツもある。

「どうかレイジュは科学者で、メイプルはパティシエ。どちらも非戦闘員だ……それにしても強いものの、本職相手に純粋な剣術で勝ち目は無い。」

「お兄様あの人に勝つたの……？ 危なげなくあつさり勝つてたけど」

「あれより更に速い人達と戦っていたからな……オレの戦い方は癖があるから、レベツカが真似するならあつちの方がためになる」

首を上向けて聞いてきたレベツカに答える。

今日はオレの膝に座りたい気分だそうだ。

驚いているが、くいなの剣速を目で追えているだけ大したものだろう。

「あとオレの方が年上だから、総合力で先をいくのは当たり前。むしろくいなが片腕であれば大したものだ。加えてオレは能力者。メカメカの能力は燃費が悪いから体力作りにいい。海楼石という負担をつけたまま肉体鍛錬をすることも可能。それを長年続けてきた。オレの力の秘訣の1つだ」

「年上って1つだけじゃん……悪魔の実際の能力の使い方が絶対おかしいし」

オレの戦闘スタイルは、剣を含めた戦闘技術の基礎は父さんや海軍、鞭捌きは母さんから習ったとはいえ、他の人の技を真似たりオレ好みに改造して取り込み、メカメカの能力や六式ロクシキに覇気を纏めてグツグツ煮詰めた闇鍋だ。

レベツカを鍛えて剣の基礎訓練はしているものの、オレの斬撃をこの子に覚えさせるのはあまり適さないというか……能力前提技や足技に鞭技と、かなり基本から道を踏み外している。

結局のところ、自分の戦闘スタイルなんて自分で見つけるしかない。

「でも私、お兄様の技出来るようになりたい！ 綺麗だから」

「そんなに綺麗か？ 海賊を八つ裂きにして鞭が血で染まるのは、よく怖がられていたものだが」

「え？ いや、最近お兄様が鞭を振るうと、後ろで薔薇っぽい花びらが舞ってるよ……」

「ドレスローザのお花畑を思い出すわ」

「メカシルバーが嫌なら、ローズシルバーでも良いわよ……」

「それほぼ本名じゃない？ でも、あれは華麗だね。おれの船長なんだから、そのくらいはやってもらわないと」

レベツカの言葉に、スカーレットとレイジユ、ガルドアが続く。

どうやら、全員の共通認識だったようだ。

「マジで？ そんなもの知らん。何それ、怖……」

「『無意識でやったの!』」

逆に驚かれてしまったようだが、最初に薔薇を出した時に驚いて欲しかった。

つまりこいつらにとって、オレは突然薔薇の花びらを出してもおかしくないおかしな存在らしい。包容力のある仲間達だな……。

いや、ハンコックとかがやるなら似合うが……当たり前のように後ろに花を召喚して様になりそうだけど、オレえ……？

そんなのが舞っていたのか……いや、多分鞭を振るう度に付着した血が飛び散り、それが花びらのように見えているだけだろう。

そう思い鞭を振るった時の直近の過去を見てみると、本当に薔薇の花びらがオレの後ろにヒラヒラと舞っていた。

なあにこれえ……意味不明の超常現象。悪魔の実の方がまだわかる。自分のことなのに何故花びらが出るのかわからないのが気持ち悪い。

「サーベルかあ……刀やカトラスと同じくらいよく見かける刀剣だね。8本全部サーベルだけど、何かこだわりでもあるの?」

「サーベルは場所によってはサブレッって呼ばれてるらしいから。美味しそうじゃなイカ?」

少々ショックを受けていると、戦闘を終え話しながらこちらに歩いてくる2人。

美味しいのはお菓子の サブレッ *sable* だな。ビスケットみたいなやつ。

刀剣の方、 サーベル *saber* の サブレッ *sabre* とはスペルが違うが。

「そんな理由ツ!」

くいななのツツコミ。

その疑問はオレも通った道だ。

「ま、まあいいや。サーベルから水が出るなんて、どうなってるの?」

「柄の部分に水 ウォーター *water* 具を仕込んでもらって……」

貯水した海水を刃のごとく鋭利に飛ばすメイプルの人魚剣術——

【水切り海洋剣】。

今までは海中や水面でしか行えなかったが、あの雲ミルキーダイアル 貝を内蔵した
剣のように、水 貝を組み込むことで地上でも使用可能に。

貯水上限はあるが、8つもあれば充分だろう。

戦闘用の貝は神軍団に持って行かれたらしく、ウチのビルカ組が
戦っていた時の物はそのまま使ってもらい、落ちてきた一般住居に
あったものの残骸、余りを使用させてもらった。

返そうにも持ち主達が今どこにいるのか手がかりがない。島が跡
形もなく消え去ったから。見つけた時に返すかお金を払おう。

クモダス達は普段天候科学の研究をしたり、空島には珍しい大地ヴァース―
―土で、たまにオレと一緒に農業生活。結構仲良くやっている。

「……私も刀、自分で作ってみようかな？」

席に座りながら呟いた。

「作れるのか？ 材料なら用意するが」

「別に出来るってわけじゃないんだけど……読んでたら興味が出ただ
けで」

父から授かった巻物に、剣術や刀鍛冶の心得のようなものが書いて
いたそうだ。

幼馴染で、くいなど同じく世界最強の剣士を目指す三刀流の剣士に
作ろうと考えているらしい。

三刀流ということは、腕が3本あるのか？ 多肢症か、珍しいな。

「でも意外ね。くいなはロゼのこういうところに突っかかると思った
けど……真面目そうだし」

スカーレットの言うこういうところとは、女を侍らせている所だろ
うか？

それとも、毎日おやつティータイムと食後のデザートを欠かさな
いところだろうか？

今日のおやつは、木の幹の皮がペリペリと剥げてポテトチップスの
ように食べられるチップスツリー。

ウイスキーピークで酒のつまみとして栽培されていたのを手に入
れた。味は塩、コンソメ、チーズと様々。

「確かにこの光景だけなら、『いい御身分だね』と嫌味の一つも言いたくなるけど、団長はこういう時間以外、私と切り合ったり船の操作や畑作業、自分と皆の修行もしてるから……むしろあれだけ活動して、よくそんな精神的余裕があるな」と

「操船も耕作も修行も、オレだけでやっているわけじゃないからな」
器を2つ、2人に手渡す。

「ありがと……あつ、美味しい」

「メイプルのほどじゃないがな」

「ふふつ、晩ごはんのデザートも頑張るから！」

くいなとメイプルが席につき、チップスをつまみながら同じ方向を見る。

その先には組手を行うシュライヤとグラント。そして――

「ツヴァイ・フアイエル双銃砲火」

ドドン!!

「痛エツ!?!」

その2人に、オモチャの拳銃でスーパーボールを撃ち、ヘッドショットをかますダデイがいた。

あいつらにギリギリ感知出来るか出来ないかくらいの戦意で。

オレもガープさんとの修行中に実弾でやったやつだ。

威力を下げる代わりに難易度を上げている。

「ちゃんと防ぐか躲さないと、危ないじゃないか」

「無茶言うなッ!」

「目の前の相手で精一杯だって!」

不満を口にする2人。

腕の良い伏兵にヘッドショットされたらどうする。

普段はオレがカバーするが、戦闘中くらい自分で出来なければ、一人前とは言えないな。

「決闘中は手を出さない——なんて、敵が気を利かせてくれるとでも? 意図しない流れ弾や下手な狙撃ならともかく、ダデイの腕でフェイントもしていないのなら、見聞色を張り巡らせ、ちゃんと周りにも注意を」

クロイツ・ファイエル
【十字砲火】

ドドン!!

途中でダデイがオレに2発、額と心臓に発砲してくる。
紅茶を飲みながら、取り出した鞭の一振りで叩き落とし、地面に埋める。

「――払っていけば、こんな風に突然の謎の攻撃にも対応出来る」

「(やっぱり花が舞ってる)」

「出来るかアツ！」

ツツコミの息ばかり合って……2人共武装色寄りだから難しいよ
うだ。

最悪常に武装色でガードすればいいが、どうせ常時使うなら見聞色
の方が適している。躲せ躲せ。

オレが見聞色寄りかつ長年一人で戦っていたからそういう思考に
なるだけかもしれないが、武装色は攻撃の時だけに全力をぶつけられ
ない。それでも突破出来ないような強力な武装色の使い手が敵なら、基
本的に他の技術で戦う。

オレもまだ未熟だ。師匠達のようにはいかない。

「ティーカップ片手にあっさり防いでくれちゃってまア……」

オモチャだからな。

スーパーボール避けはあの2人よりレベツカの方が上手だ。

シャボンデイにいた頃から、部屋で壁や天井に跳ねさせて遊びとし
てやっていた。

あの親子はオレと同様見聞色寄り。

「レベツカも、よく平然としているね？」

「ここで怪我したら、安全な場所なんてこの世にはないから」

動じずおやつをポリポリ食べているレベツカが、ガルドアに返す。

クモダス達に聞いた所、空島はここ青海せいかいより空気が薄いらしい。

そしてあいつらは全員心網マントラ——見聞色の覇氣が使える。空島の環
境は見聞色を鍛えるのに効率がいいのかもしれない。

とりあえずは密室で風プレスタイアル 貝を使い、空気を吸い込むことで再現して
みるか。他にも思いつく度にトレーニングルームを増設する。

ミニミニの能力で重さをそのままに大きさだけ小さく出来たならもつと重りを……そういうことが出来るようにならないか、リリーに試してもらおう。

☆☆☆☆

道中バンズフライが人々に料理を振る舞いながら航海をしていると、レヴェリ世界会議の時期が近付いて来た。

ネフェルタリ家の人達と一緒に行くことにしていたので、早めにアラバスタへ向かい、ネフェルタリ家護送の軍艦が来るまで、しばらく砂の王国で過ごす。

ビルカで天候の研究をしていたというし、この国で雨雲を作って降らせたり出来ないものか……。

「なんだこのスーパーにハジケるコーラは!? おれのリーゼントがピンビンじゃあねエか!」

フランキーの言葉通り、リーゼントが逆立ってなんかパチパチしている。静電気か?

「炭酸が強いから、エネルギー過多なのかもな」
「これがメロウコーラだよ」

世界一美味と言われるコーラの話をバンズフライから聞き、オレとフランキーとパンズフライの3人がかりで調達してきた。

「調理方法が中々アレだったが、気持ち良さそうに涙を流していたな」
「あのサラマンダースフィinksと戦ってきたのですか……」

イガラムさんが声を漏らす。
アラバスタの砂漠に沈んだピラミッドの奥深くに生息していた、砂

漠の生態系の頂点——それがサラマンダースフィinks。
体長数十メートル。オレンジのたてがみを持つライオンのような

全身が緑色の頑丈な鱗で覆われ、尻尾はヘビ、背中には白い翼が生えていた。伝説上の生き物であるキメラかヌエのような姿。

舌は【指銃】のように岩を貫き、前足の爪の一振りには【嵐脚】ランキヤクのように飛ぶ斬撃を巻き起こす。

その体に長年蓄積した涙がメロウコーラだ。

背の両翼の羽を1枚ずつ引き抜いたり、体に刺激を与えたりとアレな手順があったが、最初にメロウコーラを飲んだ人間はどういう経緯で手に入れたのか。

「あいつも体に溜まったモンを出してすつきりしただよ」

あいつにとつてはただのマッサージか。

ついでに覇気を目覚めさせたし、次に挑む時があれば、今回のようにはいけないな。

目から滝のように大量に吹き出したメロウコーラを、ウォーターダイアル水 貝で保管し王宮まで持ってきて、一度冷やして皆で飲んでいいる。

後で船のヨコヅナやクンフージュゴン達にも持って行こう。

「オウムが言ってたナナツ島の財宝は良いのか？」

「財宝……ですか？」

フランキーの言葉に、ビビが尋ねる。

少し前にオウムが、『ザイホウデッス！ ナナツジマノザイホウデッス！ アンナイスルデッス！』と喋りながら飛んできた。そのことだろう。

「オウムが喋るといふことは、その言葉は誰かに覚えさせられた可能性大。財宝があるなら、何故わざわざ広める？ トラップ罠 臭い」

「なるほど……確かに」

「第一本当にあったとしても、それは島の人の物だろ」

「そりゃあそうか」

ビビとフランキーが納得する。

バウンテイハンター海軍や同業者、大穴で海賊の撒き餌といったところか。

作物絡みで島には興味あるが、今は世界会議優先。レヴェリー

切ったニンジンと水だけあげて、行かないことを伝えると、オウムは再び飛んで行った。

ナナツ島の永久指針エターナルポースは持っていないが、縁があれば辿り着けるだろう。

あのオウム、よく訓練されていた。

ブリーダー畜産家、飼育員の仲間というのも悪くないかもしれない。

「ナナツ島……確かドラムとの間の東にある、非加盟の島だな。北西のロングリングランドのような環状に点在する島で、6つしかないのに何故か名前はナナツ島。ロートル山賊団の故郷だと聞く。財宝があるなんて話は初めて聞いたが」

コブラ王はナナツ島を知っていたようだ。

「ロートル山賊団——山がないシャボンディ育ちのオレには本来管轄外だが、その連中は知っている。山賊とは名乗っているが、船でグランドライン偉大なる航路を航海して、海賊と大差ない活動範囲だったからな。噂が本当なら、ただの賊狩りの冒険家。チョイ悪オヤジ集団だな」
「数年前から話を聞かないが、アラバスタでも今のクロコダイルより人気だった」

七武海もそうだが、自分達を襲わず、暴れている賊を倒してくれる存在は、民衆にとってはありがたいものだろう。

魚人島における “白ひげ” のようなもの。

「財宝はともかく、リトルガーデンの虹の実が残念でならない。流石に絶滅した果物の育て方なんて知らん」

「下手に持ってきて、枯らして本当に絶滅させちまったら元も子もねエからなア」

「私もそういうのはちよつと専門外だわ」

オレの言葉に。パンズフライとレイジユが答える。

リトルガーデンの磁気は記録して永久指針エターナルポースを作っている。あの2人のこともあるし、また行くことになるだろう。

フルルシャウトの永久指針エターナルポースも、ジンベエに返さないとな。

それにしても、植物学者が欲しい……。

「お父様〜ッ！」

「パ、パパ……！」

メロウコーラを飲みながら話していると、5歳前後の子供がトテトテ走ってきた。

「見たことのない子達ですが、護衛隊の者の家族でしょうか……？」

「聞けばわかるか……お父さんを探しているのか？」

首を捻っているペルさんの疑問に、オレが近付いてしゃがんで聞く。

ピンクの髪と青い髪の2人だ……どこかで見たことがあるな。どちらも利発そうだ。

「あつ、お父様だ！」

そう言つて、ピンクの子がオレに抱きついてきた。続けて青い子もおずおずとそれに続く。

……後ろの空気が凍っているのを背中で感じる。

「私とはまだなのに、なんて羨ま——けしからないわ！」

「非常に残念なことに、ロゼならすでに子持ちでも、違和感が、ない……！」

「問題は誰との子か、それが問題じゃないか？」

あの3人娘に大して疑われずさらつと受け入れられてしまったのは、オレの日頃の行いのせいだろう。

どうもトリスタンの違和感が職務怠慢気味のようなので、もつと仕事をしてもらいたい。

「あの見た目……ヤつちまつてたか。ぷぷつ、いつの子だ？」

「こらダディ、そこまでわかつているならわざとだな？」

声が少し笑っているぞ。

「ロゼには後でお話がありますが、生まれた命に罪はありません——こんなに早く孫が出来るとは……」

「あれれ、おかしいぞ？ お兄様はお兄様なのに、お父様でパパ？」

「ベツキーが壊れてしまったわ……」

スカーレットに折檻予告をされ、レベツカが混乱状態。

妹は任せたキャロル。

「普通の子供の気配じゃないササ」

「覇気使いやな」

「しかも、力を隠しているね」

「強いだな」

「ただ者じゃねエっペよ」

「ああ……だが問題は——」

「二「ロゼの子供なら、あり得る……!」二」

パンドマン、ウイリー、ガルドア、パンズフライ、リリー、フランキーから、妙な信頼のされ方をされてしまっている。確かにオレは子供の頃から覇気を使っていたが、レアっただけでまったくいいわけではないんだぞ？

そういえば、オレは昔海軍の誰かの隠し子だとか言われていたな。これも因果応報か……あの時も、オレは何もしていないのだが。

「せ、先生のお子さんですか?」

ビビが完全に引いている。

あれは……育児放棄して海に出たロクデナシを見るような目だ。

「先生……?」

他の島のことを教えたり、ちよつとした戦闘訓練を行ったので、ビビからはそう呼ばれている。

それをちよつと羨ましそうにしている青い子。

お前、先生って呼ばれたのか……ゼファーさんがそう呼ばれているからだな。

なんか変な噂になったり、オレの評判が上がったり下がったりするのは、まあ正直今更で慣れたものだが、そろそろ誤解を解くか。

「違う、2人ともオレより年上だ。なあ『時の魔術師』ちゃん。お前の『タイム・マジック』は、確か自分の時間は戻せなかったはずだよな? どうやったんだ?」

見た目幼女2人の頭を撫でながら尋ねる。

アインについた異名が『時の魔術師』だ。たしか現在曹長。

ピンズは『木ノ葉』。どちらも能力そのまんまでわかりやすい。オレの『機甲』と同じだな。

この2人、単に姉さんとアインがモドモドの能力で若返っただけである。

だからオレは我が子として認知しない。どうしてもオレの子供として人生をやり直したいと言うのなら、別に構わんが……。

「あら、もうバレてしまったの？ 残念……でも、あまり火遊びしてたら、いずれこんなことにもなるわよ？ ヒナ苦言」

ロリ姉さんが特に悪びれもせず言う。

バレないようにするためか、相前から気配を小さくしていたようだ。少なくともオレの見聞色の範囲内である、サンディ島への上陸前から。イタズラのためにそこまでするか。

つまり、黒檻部隊が世界会議^{レヴェリ}への護衛に選ばれたのだろう。

「ええ、確かにわたしの『タイム・マジック』は自分に効果がないわ。だから分身の出した光で戻ったのよ」

ロリアインから、先程の質問への回答が返ってきた。

胸を張りどこか誇らしげである。

褒められたいのか？

「バグじゃないか……だがすごいな。分身に同じことをすればどうなるんだ？」

「消えるだけよ。フィードバックでわたしが消滅することもないわ」

よく試す気になったな。違ったら消えているじゃないか。

「お兄様……私、もういらぬ子？」

「そんなわけあるかアッ！」

バレてもくつついていた2人をやんわり下ろす。

新しく弟か妹が出来て親がそっちに構ってばかりで拗ねている子供のような雰囲気醸し出している、レベッカの方に飛んで行って、ウザいくらいに構う。

「えへへ〜♪」

「あの子、ちよつと狡くなったわね……」

「兄が兄ですから」

「おい母親、あんたもちよつとウツってンぞ」

人のことを病原菌みたいに言わないでくれ。

オレがシュライヤの修行をつけたり、グラントの世話を焼くようになったので、少々レベッカが甘え上手になっただけのこと。

「黒檻部隊隊長ヒナ。只今より、ネフェルタリ家の方をマリージョア

へ護送します」

髪をストレートロングにし、赤紫のスーツに着替え、上から正義のコートを羽織り、ビシツと決めた姉さん。

アインはいつも通りの肩より少し伸びたセミロングのウェーブがかった髪型。

上は白の袖なしブラウスに青いリボン、下は超ショートパンツという夏用女海兵の軍服。

「2人共、やっぱりこっちの方がいいな。久しぶり」

子供の姿も新鮮だが、いつもの凛々しく美しい姿を見たいと言って、ようやく戻ってくれた。

「あ、あなたが海軍本部大佐、『黒檻のヒナ』さんですか……」

「さつきはオレにブラックジョークをかましてくれたが、心配せずとも実力は折り紙つきだぞ。チャカさん」

「いや、別に疑っているわけでは——」

手を振り否定しているが、初対面があれではしょうがないって。

「な、なんだ……能力で若返ってたの？ 良かった……結構この船気に入ってたのに、心を鬼にして鬼に堕ちようとする団長を切つて止めなきゃいけないところだった。たとえば、刺し違えてでも……」

「わかったなら腰の刀からその手を放してくれ。そんな決死の覚悟など決めなくていい」

くいながフリーズから立ち直ったと思ったら、一番危ない行動を取ろうとしていた。

王都アルバーナよりネフェルタリ家と護衛隊、姉さん達と共に港へ。

ジュゴン達にメロウコーラを渡し別れを告げ、レイド・ラフターズ R R 号と2隻の船がアラバスタを出航。

港には大勢の国民が歓声を上げながら見送りに来ていた。

「すごい人気だな、流石コブラ王」

ヨコヅナにもメロウコーラを入れながら話す。

「いや、おめエ達も『また来てくれ』って言われてたみてエだったぞ？」

「そうか……それは困る。今後何かこの国のためになることを思い付いた時は、コブラ王に進言してみよう」

色々やった時にいなかった。パンズフライに返す。

護衛隊の一部が留守の間、残った護衛隊や港のジユゴン達の他に、コブラ王に信頼されている人間が1人。

レインベースにカジノを持つ、王下七武海のサー・クロコダイルだ。以前のアラバスタ訪問で聞いた話を考えれば、砂漠というあの男のフィールドで勝てる海賊はそういないだろう。前半の海ならなおさら。少し気を抜けば死に直結する、非常に殺傷力の高いレベルに能力を鍛えているようだ。

常にアラバスタにいるわけではなく、活動拠点の1つとしてよくいるそうで、ネフェルタリ家留守の間も滞在している。ギャンプルは好きではないので行ったことも、会ったこともないが。

コブラ王とのパイプは繋いだので、もうオレ達の方の評判は上がりなくていい。オレの好みを除いても、余所者が評判を集めるのは無用な争いを招く。

放っておけば収まるだろう。オレの噂は悪くなることに定評がある。

「ロゼは魚人島でもちやほやされるの、うれしくなさそうでしたね？」
ホーデイ・ジョーンズの一件以降のあれか……オトヒメ様を死なせずにすんだことは、オレの人生で数少ない心から胸を張れる行動だ。オレは清廉潔白とはとても言えないからな。

「まだお母さんはいなかったから知らないだろうが、あれでマシになっただ。友人だと思っていたのにあの扱いは……はつきり言うて煩わしい。戻って良かった」

「何の話かわからないけど、謙遜とか照れ隠しじゃなくて、本気で嫌そうだね……」

な。 くいなどは会話の時間より、切り合っている時間の方が長いからな。

「カフェで会ったら談笑しながら一緒に飲んで、また今度と別れるくらいが理想だ」

「しよ、庶民的……」

「この人海賊も嫌いですが、権力を盾に横暴な貴族とかも嫌いですがね。そういう扱いをされると、体が拒絶反応を示すようです。感謝されているのはわかってるから血こそ吐きませんでした、今にも吐きそうな顔をしていました」

病弱な人みたいだな。

肉体は至って健康なのだが。

「食料集める旅さしてるのに、おらの料理に好きに使って、飢えた奴らに食わせてやってもいいって言って、これまでも使わせてもらったが、おめエ自身は一体エ何がしてエだか？」

「圧政と乱世の時代の終焉。どちらもオレの旅の邪魔だ。心の底から美味しい飯が食べられる太平の世を切り拓く。お前の飢えた人に食わせてやりたいという気持ちは、オレの目的に反しない」

「ふふっ……そうだなア。飢えはダメだア、人を悪魔みてエにしちまうだ。腹一杯エ食えるのが一番だよ」

納得してもらえたようだ。

夜も更け今日の航行はここまでとし船を止めると、軍艦から姉さん達が来て、勝負を申し込まれた。

オレではなく、機甲旅団に。マリージョアまでのオレの所属を賭けて。

「ふふ……それは、『戦争を始めましょう』ということよね……？ 加盟国の王族だからって、気にしなくていいから。ジェルマの科学戦闘力は世界一よ」

ああ、レイジュが科学の暗黒面ダークサイドに……。

「ミンク族は生まれついでとの戦闘種族なのです」

お前は医者だがな。

「何故私が8本腕に生まれたか……それは、今この時のためだったのかも知れない」

お菓子を作るためでいいんじゃないか？

「アニキは渡さねエ！」

頑張れ、グラント。お前は自分の中の人造悪魔の実との戦いだ。ちやんと能力を操れるようになれば、技のアイデアもいくつか出してやれるんだが……。

「お兄様はシスコンだから、私が一緒にいないと発狂しちゃう。だからダメ！」

レベッカよ、兄はそこまでではないはずだ……などと、健康体のくせにたまに吐血するオレが言っても説得力がないか。

「姉だか何だか知りませんが、母から子を取り上げるのが海軍の仕事なの……？　そうですかそうですか……」

何気にスカーレットが一番怖い。

このお母さん、〃天夜叉〃の七武海入りからドレスローザ乗っ取りの一連の事件、更にはCP9に狙われているかもしれないので、政府関係への印象大分下がったみたいだな……そうもなるだろうが。

「そういうア海賊の間にやあ、デービーバックファイトと呼ばれる、えげつねエゲームがあつてなア」

一方、海軍に対して思ったより冷静なフランキー。

それは正直助かるが、初対面が子供だったからというのが理由なら、少々複雑な気分だ。

「何それ？」

フランキーの言葉に、キャロルが尋ねた。

「たしか、負ければ仲間を失うんだそうだ。あと、海賊旗の印シンボルもだったか？」

「ああ。賭けの対象は仲間と誇りのアンティルール。新世界のどこかにあるという海賊の楽園、海賊島ハチノス。そこで生まれた、より優れた船員を手に入れるための、海賊達の人取り合戦だ」

その疑問にダディが答え、オレが捕捉する。

「ふーん、お金とかは賭けないの？」

「？　そんなのわざわざゲームなんて回りくどいことをせずとも、戦鬪で敵を殲滅してまるごと頂けばいい。『身ぐるみ全部置いてけ』って」

プレイヤーは両者共に海賊なのだから、その方が手っ取り早い。

力では従えられないような奴を仲間にするためのゲームだ。
まあ欲しいならそれでもいいんだろう。それで済むなら安い。

「それは強い人だけが言えることじゃ……そういうえば、デービーって人の名前よね？ 誰？」

「悪魔に呪われて海底に今も生きているといふ伝説の海賊、デービー・ジョーンズ。海に沈んだものはすべて甲板長だったデービーのものになるといふ言い伝えから、敵から欲しいものを奪うことを、海賊はデービーバックと呼ぶササ」

意外と博識だな、パンダマン。泳いで島を巡っていただけのことはある。

「ホーデイと名前同じじゃないか？ 親戚？」

「あいつも魚人街の出身やから、血縁関係はようわからんなア……」

魚人街出身2人の会話。

ホーデイか……あいつもそろそろオトヒメ様に陥落したかな？

他の奴らは人間への感情こそ変わらないものの、すでに落ちている。流石にそこはまだ時間が必要だ。

「これさ、たとえ負けてもロゼは困らないよね？」

「そうだな。ちよつとしたお泊り会みたいなものだ」

「じゃあおれはパスかな」

ガルドア、華麗に不参戦。

「おれはどうするか……」

「お前を弟子にして1年が過ぎた。一度戦ってもらっておけ、シユライヤ。オレ以外の能力者との戦闘機会は貴重だ。何より、『將軍』は姉さんと同じようなことが出来るかもしれん」

旅の途中、海軍G-8支部に捕縛した海賊の引き渡しに寄ったことがある。

同僚だったという海兵に聞いた所、『將軍』ガスパーデの基本スタイルは、六式ロクシキを織り交ぜた徒手空拳。

アメアメの実を手に入れてすぐに海賊として旗揚げしたため、能力を駆使した戦闘方法は未知数だが、ある程度の予測は出来る。

それにこの2人は、身体能力や覇気で上をいく相手をも、戦法次第

で打倒し得る能力だ。

オレへの勝利確率は、ウチの連中より上だろう。

「ブツ飛ばす……！」

その意気だ。

「明日の飯の仕込みさしてるから、思う存分戦うだよ」

「おらは……もう人数は充分だし、やめとくつぺ」

現在人並みのサイズの巨人親子も静観。

「別にもっと人数を増やしてもいいのよ？」 「ヘイスト・スペル」

アインの放つ光で出来た影より、1年前の姿で12人の過去の分身が現れる。

「見ての通り、わたしは13人いるから……わたしはモドモドの実を食べた、モドモド人間。わたしが出す光には、タキオン粒子と名付けられた過去へと向かう粒子が含まれている」

言いながら、アインの手から紫の光が出る。

「タキオン——確か、数年前にDr. ベガパンクが命名したものね」

「その通りよ、ジェルマのお姫様。この光に触れ、誕生する前まで時間を戻され持ち時間がなくなると、タイム・オーバー・デス T O D ——この世から消滅するわ……あなたの持つ名刀 わどういちもんじ “和道一文字” でもね。 せんとうき “閃刀姫” さん」
くいなの方を見ながら言う。

始まる前からプレッシャーをかけているな。

あの凄んでいる奴が、さつきオレに『パ、パパー……！』って抱きついて来た少女と同一人物だということを思うと、笑いそうになるから困る。

「上等！」

こうして、機甲旅団のくいな、グラント、シユライヤ、トリスタン、ベツキー（偽名）、メイプル、レティ（偽名）の7人と、黒檻部隊の姉さん、アインの二人一組ツーマンセル詐欺による模擬戦をすることになった。

場所はR R号。レイド・ラフターズ ついでにアラバスタの面々も呼んで一緒に観戦することに。

「ところでこの戦い、勝っても私達にメリットがないのだけど……勝てばウチのロゼをあなたの能力で子供にするというのはどうでしょ

う？ 写真だけでなく幼い頃のロゼが見たいし愛でたいです」

「オイ……」

「あら、それには及ばないわ……今から子供にしましょうそうしましよう。ヒナ歓迎」

「オイ」

「【タイム・マジック】」

アインがオレの顔に触れる。

「オイッ！」

オレの体が光に包まれ、目を開けると……体が縮んでしまっていた。

「私……あなた達のことを誤解していたわ」

スカーレットがアイン、姉さんと握手を交わす。

「このような姿だが、護衛には大して支障はないので安心してくれ。オレはこれより年少の頃から賞金稼ぎバウンティハンターをしていたし、能力は問題なく発動可能だ。海賊も海獣も海王類も、捕縛するか撃退する」

ダボダボの服のまま、ネフェルタリ親子に断りを入れておく。

姉さんやアイン以外の黒檻部隊のあの人達だけで充分だが、念のため。

たまにレイド・ラブターズR 号を島だと勘違いして近付いてくる船もあるからな。

「もう少し慌てましょうよ……受け入れるのが早過ぎです、先生」

「よく考えたら、少し前まではこんなの日常茶飯事だった。着せ替え人形になっっていない分、状況はいい」

そのせいかな、どうも攻撃として認識出来なかったらしい。

戦っている時とかなら普通に避けるんだが。

「なるほど……感覚が麻痺してしまっているから、微妙に常識がないのか」

「かもしれない。ところでビビ。もう遅い時間だが、眠くはないか？」

ウチの子達はまだ就寝時間ではないが、一般的にはもう子供は寝る時間だ。

「アラバスタを出るのは初めてで、目が覚めちゃって……」
「恥ずかしそうに言う。」

「そういえばこの子、結構アクティブだったな。王女なのに訓練頼んでくる位に。」

「こうして、オレは4歳くらいの姿にされ、この状態で観戦することになってしまった。」

「試したいことがあるし、今の内に具ダイアルを持ってくるか。」

「オレ用の子供服は何故か用意して来ていた。あの2人、最初からこのつもりで……。」

☆☆☆☆☆

戦闘開始からしばらく。

「エグトワール! サブレ水切り海洋剣!」

ザパン!!

メイプルが飛ばす大きな海水の斬撃が、1年前のアイン達を襲う。

「サッ一対一の剣術勝負でこそくいなに負けたメイプルだが、多数相手では怪力と手数で活躍しているな。」

「1年前の強さとはいえ、分身を1人で10体相手にしている。」

「対モドモドの能力の相性も良い。」

「アインが分身と共に「タイム・マジック」を行う集中砲火——「タイム・タイラント」。」

「あれは一度に最大で12年×13人で156年まで攻撃対象の時間を戻す。ウチの最年長——パンダマンは年齢不明だが——である、巨人族のパンズフライでも152歳。食らえば消滅する。」

「だがその遙か昔、この星の誕生にまで遡るであろう太古より存在しているのが海。到底消し切れない。」

「わかってはいるからか、アインも無駄撃ちしていない。」

「いや、先程の自分を戻した話を考慮すれば、能力で時間を戻せばどうなるか、事前にわかるようになったのかもしれない。オレが見聞色で過去を見るように、能力で部分的に知れるようになったか。」

まあそもそも、メイプル1人に全員でかかる余裕などアインにはないが。

「8本腕で切れ味のある海水なんて飛ばされては堪らないわね……」

「他を気にするなんて、余裕ね……！」

キンキイン!!

くいなの攻撃を、逆手に持った2本のコンバットナイフで逸らしていくアインの本体。

「あなたの相手はわたしでも、わたしの相手はあなただけじゃないのよ（目の前のこの子に集中し過ぎたら、分身がやられるツ……）」

軽く微笑みクールに返すが、アインもきつそうだな。

あいつはメイプルよりはパワーが下だが、それでも剣、槍、拳銃などをナイフで碎く武器破壊技——【ゼロ・リバーズ】を得意としている。

くいなよりもパワーは上。軽いナイフの二刀流だから、周りに注意を向けながらも今のくいなの剣速についていけている。

それでも、大業物の位階に属する名刀は、たとえ覇気を伴う攻撃であってもそう容易く壊せるものではない。オレもこの前試したが不可能だった。

刀工が心血を注いで打ち鍛え、剣士が武装色を纏い幾多の戦場を乗り越えることで、刀はより強靱な物へと進化する。

中には優れた名刀ではあるものの、剣士の覇気を勝手に放出する刀や、持ち主を呪う妖刀の類もある。

手にした者が非業の死を遂げてきたと有名な「鬼徹」一派や、詳細は不明だが偉大なる航路のどこかに封印されているという伝説がある「七星剣」等だ。

くいなが刀を作るつもりなら、切れ味や強さだけを追求した刀は出来ればやめて欲しい。

【「背水の剣舞」!】

レベルツカが、分身アインの攻撃を【紙絵】で躲しながら竹刀で反撃流石に攻撃を当てられはしないようだが、上出来だな。

【紙絵舞闘】

こちらでも、分身アインの攻撃と共にくる【タイム・マジック】を、【紙絵】で舞うように躲して反撃するスカーレット。

【趾銃】！

スカーレットが足の爪先で【指銃】を放つ。

手の指では出来ないようだが、足を重点的に鍛えているので、爪先では出来るようになった。

それにしても模擬戦とはいえ、珍しく相手に風穴を開ける殺傷力の高い技を……ああ、分身のダメージが本体であるアインにフィードバックすることを知らないからか。オレの覚醒した能力で作った機械と同じように考えているのだろう。

だがそのくらいでちょうどいい。どの道危なくなったらオレが止める。

2人ともレイドスーツ込みとはいえ、ちゃんと戦いになっているな。

攻撃が当たる直前、分身アインの姿が消え、空振りに終わる。

【ヘイスト・スペル】ッ

そして再び、少々焦っている様子のアインの影から後ろに出現。

スカーレットとレベツカに攻撃する。

一度消したことで分身が動いた分のフィードバックはあるものの、重い一撃を食らうよりはマシという判断。

あれは目の前の敵と戦いながらも、全体の戦況を把握していないと出来ない。指揮官としての技能を磨いた結果か。

分身の使い方が上手くなっているな。

【立て矢・鉄錠】

ドドドドドドッ!!

少し離れて、姉さんと戦っているグラントとシユライヤ。

姉さんの両腕から伸びた【拾羽檻】より、矢の形をしたオリが連続で射出される。

ハンコックと戦っている間に身に着けた新技の1つらしい。

下手に防ぐと、体や武器に巻きつき重りの枷と化す。対処が難しい技だな。

何となく想像がつく。ハンコックの射たものを石化させるハートの矢——【スレイファロー虜の矢】を見て考えた技だろう。

あちらでアイン達と戦っている、くいなの「和道一文字」やメイプルのサーベルにも掛けられている。

どちらも最初の流れ矢を防いだ時に付けられた。不用意に触るとあなる。初見では防ぎ辛い拘束だ。

メイプルはまだマシだが、くいなの自慢の剣速を落とされたのは痛い。

スカーレットとレベツカは、防御や回避ばかり仕込んできたから全弾避けた。よしよし。

【ギターエレキ弓弦】！
バチバチツツ！！

誰かに当たる前に、アーチャー弓兵のトリスタンが弓で電撃を射出し右側の弾幕を、

【ピンクホーネット桃色毒矢】！
ドドドツツ！！

ピンクのレイドスーツを着たレイジュが、毒の矢で左側を撃ち落とす。

あの2人はアイン with 12人の分身と姉さんの中間の位置で、どちらにも攻撃出来るよう動いている。

上手く防いでいるが、防御と援護ばかりに回っている、というより回されているのは勿体ないな。

アインやその分身に当たっても、あちらは姉さんが開錠するなり、アインが分身を消したり【タイム・マジック】で解除出来るが、こちらはそのもいかない。

【ドロップアウト】オツ！

矢の雨の上に避けたシユライヤが、上空から【ゲッポウ月歩】を利用して勢いをつけ、回転しながらの踵落とし。

寸前で【テックアイ鉄塊】をかけ武装色を纏った足が姉さんの頭上に当たり――

カシャン！

錠を掛けながら体を素通りする。

「何ッ!?」

武装色による攻撃が透かされたことに驚くシュライヤだが、こつちが驚く。

六式ロクシキを使えるようになるのが早いな。オレは10年程かかった。大した奴だ。

習得した年齢は同じくらいと納得しておこう。

「わたくしの体を通り過ぎる、すべてのものは【禁縛ロック】される……（本人の才能と努力もあったんでしようけど、10歳少しの子を1年で六式ロクシキ使いに……わたくしの【月歩ゲツポウ】もあの子に習ったし、ゼファー先生が新兵の訓練に部外者を混ぜるわけね。ヒナ納得）」

あれが姉さんの十八番——【自錠禁縛オートロック】。

海軍本部大佐「黒檻のヒナ」のオリオリの能力による鉄壁ガード。たとえ武装色を纏おうとも、彼女の武装色を破るに至らない、又は見聞色で見切られている体を通り抜ける攻撃は、すべて自動的にすり抜けるか、攻撃に合わせて自分から体を変化させ、【紙絵カミエ】のように受け流される。

それも、単純な重りの枷と見聞色と併せ発信機の役割を兼ねた拘束バインド、【禁縛ロック】のオマケ付きで。あれでもう外さない限り、姿や気配を消そうが居場所は把握される。

斬撃、銃撃、打撃を問わない、自然ロギアにも似た物理攻撃回避方法。オレのメカメカの能力では、あそこまでの回避は出来ない。せいぜい首や手足を分離パーッして躲すくらい。

細部は異なるが、アメアメの能力でもあれと似たようなことが出来るだろう。

更に体を金属の檻に変化させ、あえて通行許可を出さず【鉄塊テツカイ】のように防御したり、その状態で殴ることも可能な攻防一体な能力。だが当然突破法もある。

【猿手甲エテコウ】ッ！

グラントが腕を巨大化させ振り下ろす。

今回は成功したか。暴走しない確率が上がってきたな。

グラントの攻撃は最善ではないが及第点。

要は狭い攻撃範囲や一方の攻撃だから通り抜けてしまう。

広範囲に体を覆う攻撃ならば避けられずに済む。

オレであれば巨大な機械の鉄拳を上から落とす【拳・骨・彗星】な

どが有効。鞭を巻きつけて逆に縛ってしまうのもアリ。

そもそもオレは見聞色は言うまでもなく、スタートが早かったので

武装色も姉さんに勝っているが。

【蝙蝠羽檻】

ドゴオン!!!

グラントの攻撃を、黒いオリで出来た翼を羽ばたかせ、飛翔し躲す姉さん。

あれが電伝虫での会話で前に聞いた新しい飛行手段か。

能力で作った物体は、ある程度浮かせられる。スピードは……まあ

そこそこだが。急な移動は【月歩】で補うようだ。

上を取れるというのほそれだけでアドバンテージ。遠距離攻撃の

手段があるならなおのこと。

【タイム・マジック】

ピュン!

紫色の光線が、グラントの巨大な手に当たる。

「しまっ!?!」

光に包まれた体が見る見るうちに縮み、ベビーになってしまった。

先程のグラントの攻撃が最善でない理由。

それは、相手が1人ではないこと。そしてグラントはソニアとマ

リーの【蛇化身】のように、素早く体を小さくして躲すということが

まだ出来ない。

巨大化した腕はアインの良い的だ。あんな風に致命的なカウン

ターをもらう。

だから日々の修行やドン・アッチーノ戦でオレが見せた【メテオ・ストライク】のように、巨大な岩をぶつけるくらいで良かった。

「(よく今まで粘ってくれたわ、アイン。これで終わらせましょう)
【陣羽檻・鉄錠網】
じんばおり てつじょうもう

ガシヤアantz!!!

あつ、エグイ。

上空から全員を覆い尽くす監獄を作り、接地面を槍状にして地面に突き刺す。

アインとその分身ごと閉じ込められてしまった。

「ほぼ片腕で重り付きなのに、鋭い太刀筋ね……あなたに剣術で勝つのは無理みたい。【デジャヴー】」

くいなど戦っていたアイン本体が光に包まれ、姿が消える。

知らない技だ。

そして数秒前の彼女がいた位置に瞬間移動し、姉さんのオリの外に現れた。

「じゃあね〜」

アインがコンバットナイフを持った手を振りながら、距離を取る。

「なっ!?!」

強い同性との戦いをちよつと楽しそうにしていたくないなが、置いてけぼりを食らった。

あの新技、厄介だな。

他の技の制約から察するに、戻せるのは最大12秒前。その時いた位置に転移する。連続使用は出来ず、一度使えばインターバルも必要——といったところだろうが、戦闘中の数秒はかなりデカイ。

これを織り込み済みで張った鉄網だろう。

何度も戦っているオレだからどういうカラクリの技か大体の予想が付くが、初めて戦うあいつらには好きに瞬間移動しているように見えるだろう。

分身を消したり出現させたりして攻撃を躲しているから余計に。

何より、一年後には分身もあれをやってくるようになると思うと、非常に脅威。

能力は使い手次第。あいつ自身がモドモドの能力をあそこまで研ぎ澄ませた。

それにしても、剣術で勝てないと言いながら、悔しがりもせずあつさり引く。

余裕がある態度はフリで、かなりギリギリだったようだが。

アインは双剣双銃の珍しい戦闘スタイルだから、接近戦で敵わないなら遠距離で、どっちもいける。

「ヘイスト・スペル」

アインが分身を一度消して、オリの外にまた出現させた。

「窮屈羽檻」

少しずつ監獄が地面に沈んでいく。

あの一夜錠——もとい一夜城、中々ヒドイ布陣だ。

隙間から来るだろうアインの「タイム・マジック」と姉さんの「立て矢・鉄錠」を躲しながら、なんとかしなければならぬ。包囲網の外
の敵を相手に。地上封鎖されたのは全員近接武器。

しかも時間経過で沈んでいくので、いずれはオリに押し潰される。くいな達も切ろうとしたり持ち上げようとしていたり試みているが、攻撃に応じて姉さんがそのまま防いだり枷を付けて通過させたり、突破が難しそうだ。

こうなると頼みの綱は——

「電撃ドロップヒール」！

「きゃっつ！」

ブルーのレイドスーツを装着したレイジュが、アインの頭上に電撃を纏った踵落としを浴びせる。

あれはデンゲキ・ブルー、ニジの技だな。

あいつはレイドスーツの力に加えて血統因子の操作により素で放電出来るが、レイジュは違う。

その分威力と速さが落ちて、気絶させるには至らないか。

普段の毒の異能のサポートを行うピンクから、ニジのレイドスーツの複製品にチェンジし、風景に溶け込む「ステルス」で姿を透明化、姉さんの「鉄錠網」完成前に逃れていた。

「エレ脚・ルナ」！

「おっと。ミンク族のその姿と戦うのは初めてね。でもそれ、長くは

もたないんでしよう？」

そして【月の獅子^{スーロン}】の姿のトリスタンが、弓を背に戻し【月歩^{ゲッポウ}】で空中の姉さんに攻撃。

躲かれてしまったが。

封鎖される前に、【三日月の獅子^{インスタント・スーロン}】で白く伸びた体毛、何より大きく力強い姿に変身し、レイジュ同様素早くオリから逃れたトリスタン。防御に回っていたが故に逃れる余裕があった、あの遠近両方いける2人が鍵か。

トリスタンの【月の獅子^{スーロン}】も3分の時間制限があるが、レイジュの他の兄弟のレイドスーツも、彼女に合っていないが故に負担は大きいし、あれは試作品のはず。どちらも長くはもつまい。

タイムアップまでに決められるかどうかが肝。

……そして試合終了。

オレも含めて周りが子供だらけ。

機甲旅団が機甲幼稚園になってしまった。

服は黒檻部隊の船に常備しているという子供服を借りている。

海軍に部隊は数あれど、捕まえた海賊に囚人服ではなく子供服を着せる部隊はこの黒檻部隊だけだろう。

「ごめんね……いー お母さん、負けちゃった……」

オレの膝に顔を埋めて泣いている、れていちゃん（偽名）3歳。今の姿のオレより下。

幼女が自分のことをお母さんとか言っても違和感しか覚ええない。

「死んだわけでもあるまいし、そんなに悲壮感を漂わせなくてもいいだろう。鍛え始めて2年でよく戦った。ほら、顔を上げて」

「でもあなた、取られるのが自分じゃなくて仲間、そして戦うのが自分だったら死ぬ気で勝つでしょ……？」

「……」

潤んだ目でこちらを見つめながら聞いてくるれていちゃんに対し、無言でハンカチを使い顔の涙と鼻を拭く。

「ほらあ〜」

体に引つ張られて精神まで幼くなつてないか？

「よし、きれいになった。職業軍人相手に大分健闘していたのは本当だ。悔しいなら次は勝とう。それにたとえ弱いままでも、オレが誰も死なせないよ」

「うう……ちよつとうれしいのが悔しい……」

「お母様とお兄様が私より幼く……」

レベツカがスカーレットの背を撫でて宥めている。その年齢はいつも通り。

姉さんに【禁縛】^{ロック}で雁字搦めにされたが、「タイム・マジック」は全部避けていた。最初から子供だからアインの中で優先度が低かったのもある。

スカーレットがロリ化して、2人は姉妹みたいにそっくりだ。本来親子だし、小さい方が親だが。

「レベツカも、あいつ強いのに頑張ったな」

「そ、そう？」

「ああ。あいつはオレに勝ったことがあるくらい強い」

「ウソ!？」

オレが負けたのは1年以上前で、レベツカが戦ったのは去年のアイソ。

これは昔のオレと良い勝負が出来たと言つても過言ではないのでは？

「うう……ロゼが寝取られる……!」

「春画本みたいに！ 官能小説みたいに……!」

「ロゼが昔シャツキーさんに焼かれた本みたいに……!」

れいじゅちゃん（4歳）、めいぷるちゃん（9歳）、とりすたんちゃん（5歳）が続けて世迷言を吐く。

「子供の姿でなんてことを口走るか……留守を頼んだ」

全員オレの両脇や背中からしがみ付いてきている。

あげないとも言うように。

能力の覚醒から4年。

オレはメカメカの能力で機械をアンテナに見聞色の範囲を拡大、感

覚共有も出来るので、その場にいるのと大差ない。なので離れて過ごすという感覚がないから、テンションの差が大きいな。

「戦闘を楽しみ過ぎた……不覚っ！」

「まだまだガスパーデの奴を倒すには足りないか……」

「もう赤ちゃんは嫌だ……！」

「くいなちゃん（3歳）とシユライヤ、元に戻してもらったグラントが悔しがっている。」

「強い奴はいっぱいいるだろ？ ああいうユニークな戦法の人間もいる。あの2人も、手札を全部晒したわけではない。民間人相手だから無力化で済ませていたようだが、もつと殺傷力のある技も——リベンジがしたいなら、マリージョアに着くまでにまた挑んでみるといい」

勝敗に影響はないが、姉さんは「具足羽檻ぐそくぼおり」、アインは「タキオン・スパイラル」を使わなかった。

他にもオレが知らない技が増えているかもしれない。

「手加減されてたってこと？」

ちよつと不満気なくいな。

相手の全力を出し切れなかったのが悔しいって感じか。一戦で技を全部使うのもそれはそれで難しいと思うが。

それにしてもそうだろうとは思っていたが、こいつ戦闘狂の素質ありだな。

「一概にそうとは言えん。殺す気でやった方が強い人間もいれば、相手を殺さないよう戦った方が強い奴もいる。ベツキーがいい例だ。この子は刃が付いた剣ではなく、竹刀だから全力で戦えた。覇気は精神の力。お前くらい剣術の腕があるならともかく、相手を殺すかもしれないという雑念は、この子の覇気を鈍らせる」

人それぞれに合うスタイルがあるだけの話。

最後はトリスタンとレイジュの限界まで粘られてしまったな。

姉さんにはオリの体に「指銃シガン 経穴マルマン」は効き目が薄いだろうし、電撃は生み出したオリの壁に阻まれた。

そして分身を含め13人のアイン相手に、レイジュ1人では流石に

キツイ。

2人がやられた後は、オリの外からの攻撃でワンサイドゲーム。

最初は敵戦力の把握に努めて、隙あらば「タイム・マジック」と【禁縛】^{ロック}でこちらの弱体化、片腕を巨大化するグラントを無力化し【鉄錠網】^{てつじょうもう}を突破出来る者が他にいないと踏んで、決めにきた感じだった。

ああいう初見殺しが悪魔の实の能力者の怖い所。たとえ相手が格上でも倒し得る。

キャロルならフルートの演奏で眠らせようとするだろうが、向こうから挑んできたのだから、耳栓くらい用意しているはず。2人共キャロルがネムネムの能力者だと知っている。能力なしなら、あいつはウチで最弱だ。

リリーならミニミニの能力で小さくなり逃れられる。

オレなら監獄は放置してドリルで地面に潜るか、外に【R R】^{レイド・ラプターズ}を召喚するか、その両方だな。他の連中ならどうするか。

その場合は、あの2人も違う戦術を使っていただろう。

そして2人の実力も高いが、連携でも負けたか。

今後、オレと【R R】^{レイド・ラプターズ}V S他全員の戦闘訓練を増やしてみよう。というか、万遍なく覇気のレベルが高い上に厄介なメロメロの能力を使う、あのハンコックを倒しただけあるな。何度【R R】^{レイド・ラプターズ}を石化されたことか。

あいつは見聞色以外の覇気がオレより上だ。オレにも霸王色を使った技はあるが、人に直接作用する類のものではない。

更に、ハンコックに限らずソニアとマリーもだが、六式^{ロクシキ}をいくつか使えるようになってる。

オレもいくつかあいつらの技が使えるようになった。鞭でやるか体でやるかのような違いはあるが。

互いに教え合ったわけではない。戦っている内に吸収した。

「あれで大佐と曹長ですか……ロゼくんは大将の方とお知り合いなの

でしたよね？ 一体どのくらいの強さなのですか？」

「神話や伝説の英傑をイメージしてくれ。掛け値なしにそのくらいのことが出る。それも、正義のコートに袖を通さず肩に羽織ったまま」

「(コートの下りは必要なのでしょうか……？ 確かにあの方も羽織ったまま戦っていました)」

「オレを比較対象にして言うと、他の要因があるならともかく、邪魔の入らない一対一^{サッ}でやるなら、距離を取り長期戦に持ち込んでようやくオレの勝ち目が微かに見えるくらい。それが現在3人いる、海軍本部の最高戦力だ」

指を3つ立てながら、ペルさんの疑問に答える。

3人共攻撃力の桁が違う。

それに加えて武装色のパワーでも負けている。

オレが張り合えるのは体力と、能力で大量生産した「R^{レイド・ラフターズ} R」の数と見聞色とを併せた、一方的な殲滅力。サカズキさんが目を付けているのもそれ。

オレ本体がその場にいらない方が勝算があるという屈辱的な力の差だ。

「それではマリージョアに着くまで、この子はわたくしの船で面倒を見ます」

現在オレは子供の姿で姉さんに抱っこされている。

なんか懐かしいな。

オレ以外は全員元の姿に戻っている。オレは戻してもらえなかった。

「ウチの船長兼操船の要が持って行かれたか」

「それは能力の鍛錬も兼ねているから、引き続きオレが——いや、いい機会だ。機械経由で教えるから、オレ不在でも動かせるように練習しようか」

いつかオレの船から巣立つ時が来るかもしれん。

「それ、私も知りたいです！」

「ビビ様、そういうことは我々が……」

「では明日から——心配せずとも危ない目になど遇わせないよ、イガラムさん。こういう本人が関心を持った事柄は、通常より飲み込みが早い。せつかくの学びの機会だ。マリージョアに着くまで、可能な限り教えよう」

王女に必要な知識かと問われれば別にそんなことはないが、無駄な知識でもないはずだ。

危険な偉大なる航路グランドラインで王族直々に船旅をすることなど、世界会議レヴェリー以外ではそうないだろうが、まったくないわけではないからな……ウチの船にもお姫様はいる。

「うう……私の癒しが……」

絶賛シスター服で項垂れ中の我らがお母さんとか。

「夢でまた会おう。オレの居ぬ間に命の洗濯をしておくといい」

「小鬼ちゃんが行っちゃう……」

オレがシヨタ化したからか、スカーレットが最も別れを惜しんでいる。

「自己鍛錬マニアで基本動きっぱなしであろうロゼに、休暇を作りたかったのだけど、この様子を見ると少し罪悪感が……ヒナ困惑（全然戦いに向いてなさそうなのにこの子が側に置くことは、訳アリなのかしら？ ……年上の美人だからって言われても納得してしまうから、判断に困るわね）」

「時間は有限。生きている間は常に前に進む。止まる時は死ぬ時。日々精進あるのみだ、姉さん」

「やっぱりそんな生活なのね……」

「親子といっても、たしかロゼと会ってまだ2年よね？ 流石に子離れ出来なさ過ぎでしょ。どれだけ落ち込んでるのよ……護衛や航海の邪魔なんてしないだろうし、別に遊びに来ていいのよ？」

ゼファーさんに1年目からべったりだった子が、露骨なツンデレの気配を漂わせながら提案する。

「……敗者に情けは無用!!」

それに負けた奴らがハモった。

遊びには行かないだろうが、リベンジには行きそうだ。

2戦目以降なら大分勝率が上がるだろうな。

「なんでそこは潔いのだよ!? めんどくさいわッ」

ツンデレサービスを拒否られたアインのツツコミを聞きながら、世話になることになった姉さん達の軍艦に飛んで行った。